テイルズオブエクシリア～転生者はイレギュラー～

レイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブエクシリア～転生者はイレギュラー～

【Ｎコード】
Ｎ６５５２Ｗ

【作者名】
レイフォン

【あらすじ】
大学に通う2年生…叢雲　効。買い物の帰りに子供が車に轢かれそうなのを助けて逆に死んでしまった。
そして、目を覚ますと神と名乗るものが効を異世界転生させるという。
その世界が……何と、テイルズオブエクシリアの世界。
主人公である効は原作の１０年前に転生することになったのであった。

プロローグ　始まり（前書き）

エクシリアのクリアに喜んでしまい、つい書いてしまいました。

プロローグ　始まり

目覚めてみるとそこは見覚えのない空間だった。

「白い空間…何もないこの空間に俺はただ一人だけが漂っている。俺以外には誰もいない……ここは一体どこなんだ？」

ここで俺のことについて整理しよう。

俺の名前は叢雲　劾。ゲーム好きの二十歳の大学生さ。

特技は生まれ持った瞬間記憶能力と人間離れした身体能力。

……そもそも何で俺はここにいるんだ？確か、大学の帰りにマンガと参考書、雑誌を買って、家に帰ってエクシリアの２周目をやる予定で走って帰っていたよな？……そうだ、そのあと、車に轢かれそうになっている子供を助けようとして、助けたのはいいが、俺が逆に死んでしまったのか。

ハハ、短い人生だったな。俺の人生は経った２０年か。ま、いいか。趣味であるゲームもエクシリアもクリアできたし、思い残すことはない。

「お、起きたのかの？」

「！？」

俺は突如、後ろから聞こえてきた声に反応し、後ろを振り向く。

そこには、

「フォフォフォ。驚いたかの」

なんとも長い髭を生やして、デッカイ椅子に座っている爺さんが居た。

「爺さん、何者だ?ただの爺さんじゃないよな?」

俺はこの爺さんから感じる人とはかけ離れるほどの力を感じた。それは…

「神にも等しいほどの力……かの?」

「!?(この爺さん、俺の心を!?)」

「そう、読んだのじゃよ」

「(またか!?)」

爺さんが読心術みたいなものを使って俺の心を呼んできたのには驚いた俺だが少しして落ち着きを取り戻した。が、さすがに冷静ではいられない。

「爺さん、ここはどこだ?」

「ここは死と生の境界線。お主は本来死ぬはずであった子供をお主は助けて代わりにお主は死んでしまったのだ。ゆえに、お主はここにいるということだ」

……だから、俺は天国にも地獄にもいけないってことか。

「事情は分かった。だが、俺はどうすればいい？天国にも地獄にもいけないんだぞ？」

「そう。そのことでお主を読んだ。どうじゃ、効よ。お主、……転生して異世界に行きたくないか？」

転生に……異世界だと。

「そうだ。お主はもう自身の世界には生き返れない。だから、異世界にしか転生できない」

「異世界といってもどこにだよ」

俺の知らない世界じゃ俺……生きていけないぜ。

「安心するがよい。お主が最近クリアしたゲームの世界じゃ」

「最近……エクシリアか！」

「そうじゃ。無論、転生するからには特典を付ける」

……何か、よく二次小説にあるような感じだな。

「儂がお主につけられる特典はテイルズシリーズの技と魔術のみじゃ」

……いや、シリーズの技と魔術って、明らかにチートだろ。

「そうかの？お主の頑張り次第では転生後、自動的に別の能力が授与される」

「わかったけど、俺はどうすればいいんだ？転生って、原作前？」

「そうだ。お主が転生するのは原作１０年前。転生するのはW主人公の一人であるミラの住む村の近くでお主はその村に人に助けられた…という設定じゃ」

……それってつまり

「俺にミラと会って、原作をブレイクしろと？」

「フォフォフォ。その通りじゃ。所詮はゲームの世界……でもお主というイレギュラーが居る世界。世界の進み方が変わっても問題なかろう」

「わかった。なら……頼む」

「了解じゃ。……はぁ！」

その瞬間、俺の体が光りだす。

「うわぁっ！！」

「頑張るのじゃぞ～」

俺の体は光の粒子になり、崩れるように消えていく。

「じゃあな、爺さん！」

そういい、俺は爺さんの前から消えた。

効が消えた後。

「ミラを……頼んだぞ。効」

爺さんは静かに消えながらそう、呟いた。

プロローグ　始まり（後書き）

次回は設定です。

主人公設定

転生前

名前：叢雲　劾

年齢：２０歳

身長：１７７ｃｍ

体重：６２ｋｇ

性格：人を引き付けるほど、仁徳があり、中高ではクラス委員長・文化祭実行委員など、行事においては皆を指揮していた。男女ともに人気が高く、物静かな性格。
だが、時に人を簡単に傷つけるようなものを見た時、普段とは違った表情を見せることも。
簡単にいえば……キレると怖い。

趣味：マンガ・小説・雑誌を読むこと。身体を動かすこと。

嫌いなこと：人を簡単に傷つける外道。

容姿：黒髪でショートヘア。癖毛が2本経っており、触角みたいになっている。

参考：転生する前は大学二年生。高校時代に最優秀成績を残していたため、高校と大学側から推薦で東大へ。
その後、子供を助けて自分が死に、神と名乗る者にテイルズオブエ

クシリアの世界に転生することに。

転生後（原作１０年前）

名前：レオン・ストライフ

年齢：１０歳

身長：１５０ｃｍ

体重：３５ｋｇ

性格：特に変化なし

趣味：身体と精神を鍛えること

嫌いなこと：変化なし

容姿：黒髪から赤髪へと変化。瞳の色が青に。髪型はそのまま。

参考：変化なし

初期ステータス

レベル５
武器：ロングソード（レオンは全武器を使うことが可能）
防具：なし
装飾品：なし

初期術技
・蒼破刃・魔神剣・魔神拳・三散華・双牙掌・幻狼斬・爆炎剣・虎牙破斬・爪竜連牙斬
・幻竜拳・輪舞旋風・連牙弾・飛燕連脚・爆竜拳・獅子戦吼・爆牙弾・鳳凰天駆

精霊術
・ファイヤーボール・ウィンドカッター・スプラッシュ・ロックブレイク
・ファーストエイド・リカバー・

オリジナルスキル
・ウェポンマスター１
剣と拳系の武器を仕えるようになる
・スペルキャンセレーション１
初級精霊術を詠唱なしで発動できる

主人公設定（後書き）

次回から原作１０年前のストーリーです。

第1話　初戦闘と出会い（前書き）

1話ですが、10年前の話はこれだけにしようと思います。
何故かって言われると……原作を書きたいからです。

第1話　初戦闘と出会い

～効改めまして、レオン～

俺は神と名乗る爺さんにリーゼ・マクシアというテイルズシリーズの1つ、テイルズオブエクシリアの世界に転生させられ、その世界を目指している。そして、光が差し込み、出た先が…

シュボン！

「空中ってどういうことだああ！！！」

俺が出た先は何とよくある転生話でのお約束の空中からの現れ方であった。

「オーマイガー！！」

シュドーーーーーン！

俺はそのまま地面に激突して気を失った。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者～

「あれ？子供が倒れている！？しかも、怪我をしているじゃないか！」

レオンが倒れているところに１人の男が通りかかった。その男は荷物を降ろし、レオンに近づく。

「た、大変だ！歳はミラ様と同じぐらいだ。これは急いで傷を…！」

男がレオンに手を伸ばした。が、

バサッ！

「ハァ！いってぇ～あの野郎！今度会ったらぶっ飛ばす！」

そういい、レオンが怒りの表情と共に目を覚ました。

それを見ていた男は思った。

「（痛いだけじゃすまなそうな怪我を……何でこんなに元気なんだ？この男の子は）」

と、思っていたのであった。

～第三者　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

俺が目を覚ますと目の前には男性がいた。

「ん？あんたは？」

俺は男性に誰かと聞いてみることにした。

「あ、ああ……私はこの近くにある村…ニ・アケリアのものだ。ニ・アケリアに帰る途中に君を発見したんだ。怪我は大丈夫かい？」

「怪我？（本当だ。血が出ているな。だったら……）ご心配なく。ファーストエイド」

俺はテイルズシリーズでお世話になった治癒術であるファーストエイドを発動させ、傷を治した。

「おお、治癒術が使えたのかい？なら、安心だね」

よっこらしょっと、と言って男性は大きな荷物を背負った。

「じゃあ、君も一緒にニ・アケリアに……ん？この音は何だい？」

「この音は……地響き？」

俺と男性は音のする方向を見てみた。すると……

『ギャオォォォォォ！！』

『シャシャシャ！！』

『ウッキィ！！』

多種類のモンスターがこちらに向かって来ていた。

「う、うわあああ！！！モンスターの群れだぁ！？に、逃げないと！！君も来るんだ！！」

男性は俺の手を掴むが、俺はそれを自分から離した。

「な、何のつもりだい！？」

「あんたは先に逃げて、村の人達に伝えてくれ。俺が時間を稼ぐから戦える人を呼んでくれ」

俺がそういうと男性はいう。

「む、無理だ！！私のいる村には戦える人は……戦えるお方はお一人しかいない！！」

「だったら、その戦える人を呼んで来い！死にたいのか！！」

「ヒ、ヒイィィィィ！！」

男性は悲鳴を上げながら走り去っていった。

さてっと……

俺は腰にしまってあった剣を構える。

「さぁって、この世界に来て、初の戦闘だな。今俺が使える技は分かっているし……時間を稼ぎますか！！」

そういい、俺はモンスターの群れへと走っていく。

「いくぞオラァ！！蒼破刃！」

バシュン！

剣からエネルギーの塊をモンスターの群れに目掛けてはなった。

蒼破刃は敵を貫通する技であるため、先頭にいた者の後ろにいたモンスターは消え去った。

「閃いたぜ！蒼破追蓮！」

バシュンバシュン！

俺は頭に浮かんだ技を使ってみると、連続で蒼破刃を放った。

『ギャオオオオオ！？』

『シャシャシャ！？』

『ウッキィ！？』

一気に仲間をやられて驚くモンスター達を背に俺は、

「続けて喰らえ！スプラッシュ！ファイアーボール！」

空中からの水圧、飛んでくる火の玉などがモンスター達を飲み込んでいく。

「おお、しっかり使えるな！にしても、このオリジナル的なスキルは何だ！？」

俺は頭に浮かびあがるスキル名に驚くが、問題ないかと納得して戦う。

「さあ、戦いは始まったばかりだぜ！俺を満足させろよ！！」

俺は剣を強く握りしめ、

「ウオォォォォォ！！！！」

モンスターの群れへ走り出した。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～？ＳＩＤＥ～

ふぅ、今日も無事に破壊できて良かった。

私の名はミラ。ミラ・マクスウェル。私はいつものように精霊を殺して使う奴ら『アルクノア』が黒匣（ジン）を使い、私を殺そうとしていたが、私は逆に返り討ちにしてやった。そのまま、私はニ・アケリアに戻ってきたが、何やら騒がしいな。何か、あったのだろうか？

「あ、ミ、ミラ様！」

「どうかしたのか」

私に近づく男。その男は何やらソワソワしているが、どうしたのだろうか。

「じ、実は、ニ・アケリア参道にモンスターの多種類の群れが来ていまして、そこで偶然倒れていた子が私を逃がすためにモンスター達と戦っているのです。どうか、ミラ様のお力でそのものをお助けください！」

「ふむ…」

それは困るな。私は別にシルフの力で飛んで社に戻ればいいが、この村の者たちにはそれができない。しかも、私を祀って拝めてる者達が迷惑しているみたいだしな……この村は私にとっても落ち着くところだ。なら、

「分かった。私がモンスター達を倒そう」

「あ、ありがとうございます！」

男が私に拝める姿勢を取ると、他の者たちもそうした。ふむ、いい加減、このようなことはしなくてもいいのだがな。

「では……いこう。シルフ」

【わかったよ】

シルフが返事をし、私は風に包まれ、空を飛んだ。

そのまま、ニ・アケリア参道へ向かった。

空から参道を見下ろしてみると私と同じぐらいの子供が戦っていたが……これはすごいな。地面が裂けているし、何よりもモンスター達が彼を恐れているのか？だが、タダの子供にモンスターが臆することはないだろう。

【うわー凄いでしよあの子。初級だけど精霊術を詠唱しないで使っているよでし】

【あの年であそこまでできるとは……大した奴だな】

【まあ、確かに凄いけどね】

【称賛に値しますね。彼にとってニ・アケリアは関係なにのですし、ほっておくのが普通ですが】

四大達も不思議がっているようだな。

「シルフ。彼が何かを言っているみたいなのだ。声を拾ってくれ」

【わかったよ！はぁ！】

シルフに頼み、彼が何を言っているのかを聞きとってみる。すると、

「ハァハァハァ。しんどくなってきたな。途中まで数えたが、すでに５００以上は斬ったり吹き飛ばしているんだが……けど、逃げられないよな！この先には戦う力のない人達がいるって聞いたし、今の俺にはそんな人たちを守る『義務と責任』がある！ウオォォォォ！！！！」

そのまま、彼はモンスター達の群れへ向かった。

そこからは火・水・風・地などの精霊を多く感じた。

「……」

【ミラ、どうするのですか？彼を助けるのでしょ？】

【人間にしては珍しいものだな】

ウンディーネとイフリートがそういう。確かに人間があんなことを言うとは……気にいった。

「いくぞ、お前達」

『【了解！／承知！】』

私はそのまま、地上に向かって降りていった。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「ハァハァ……戦える人ってまだかよ。（といっても、戦える人ってどう考えええてもミラだよな）」

今思えばそうだった。ミラしか戦えないだろうし、巫女の……誰だっけ？ま、いいか。

「ハァハァ……仕方ない！倒しまくっていいたらレベルが上がった気がするし……いくぜぇ！！」

俺がいざ、再び突撃しようとしたら、

シュドン！バシャ！ザシュシュ！ズドォン！

「何だ！？」

いきなり、上空から火・水・風・地属性の精霊術がおちてきた。

そして、瞬く間にモンスター達を全滅させた。

「ハェ～（唖然）」

俺は唖然としていたが、上を見ると……そこには、

「大丈夫か？」

１０年前の姿でも、その瞳の強い眼差しと人とは違った力があふれ出している少女……ミラ・マクスウェルが存在した。

「あ、ああ。助かったよ。えっと……」

「ああ、名前か？私はミラだ。ミラ・マクスウェル。よろしく」

「俺はレオン。レオン・ストライフだ。よろしくな、ミラ」

俺は手で握手をしようと前に出す。

「……ん？」

ミラは不思議がって俺の手を見る。

「？……ああ、これは手を手を握って握手をするんだよ。よろしくって意味だ」

「ああ、なるほど、そういうことか。こちらもよろしく。そして、ありがとう。村の者たちを守ってくれて」

ミラも握手をしてきた。おお、何やら柔らかい感触。

「そうだ。俺、住む場所がないんだが……どうすればいい？」

「何だって？それは大変だな。村の者たちに聞いてみよう」

「ありがとう」

俺は剣を仕舞い、

「では、村に行こうか」

「ああ」

ミラについていって、ニ・アケリアへと向かうのであった。

そう、このミラとの出会いがすでにこの世界の進み方を変えているのだと俺は感じた。

そして、

～１０年後　第三者～

ニ・アケリアにある社に一組の男女がいた。１人は頭に緑色のアンテナのような髪があり、長い金髪に少しメッシュが入っている美女とそのすぐ横にはショートカットの赤髪と腰に剣を持つ男。

そう、１０年後のミラとレオンだ。

１０年前、レオンはあの後、ニ・アケリアに住むことになり、そこを拠点に世界を回り、力をつけてここに戻ってきた。途中、ミラとも会い、一緒に戦うなどして過ごした。

そして、そのかいがあったせいか、レオンはミラを守る盾であり、矛になった。村の村長に頼まれたのだ。

『ミラ様の力になってくれ』と。

そのまま、レオンは毎日ミラの社に訪れ、暇そうな彼女の外の世界の話を聞かせていた。

そして、そんな日が続いた今日、遂に話が動いたのだ。

「……」

ミラが突然、顔を上げ、重い表情をした。

「精霊が……死んだ」

そういいながらミラは立ち上がり、彼女の後ろにいた蛇は彼女に噛みつこうとしたが、青い炎に包まれ消えた。

その後ろには火の大精霊……イフリートの姿があった。

「またか？」

「ああ。やはり、黒匣（ジン）の力かもしれない。確かめる必要があるな」

ミラは自分の座っていたところから降りて、扉に向かう。

「しっかし、黒匣（ジン）か。６年ぶりじゃないか？」

「ああ、そうだ。６年ぶりだな……久しぶりだな」

「全くだな。ここ６年間は静かだったのは案外、嵐の前触れかもしれないぜ？」

「まさにその通りだな」

ミラとレオンの２人は扉の前に立つ。

そして、お互いに顔を見あい、いった。

「「行こう。イル・ファンへ」」

扉を開け、光が差し込み、２人は社を出ていった。その後ろには四大精霊が見守っていた。

人は願いを胸に抱き、叶えばと空を見上げる

精霊と人が暮らすこのリーゼ・マクシアでは、みながそうして暮らす

人の願いは精霊によって、現実のものとなり、精霊の命は人の願いによって守られる

故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守るものとなりえる

世に、それを脅かす開くなど存在しない。
あるとすれば・・・・・それは人の心か

第1話　初戦闘と出会い（後書き）

はい、１０年間のことは番外編でかくことになるかもしれません。
作者の都合上、原作に入らせてもらいました。
次回もこんなのであると思いが、どうか読んでくださいね。
次回はジュードが登場します。

主人公設定2（前書き）

原作前にレオンの設定です。

主人公設定2

名前：レオン・ストライフ

年齢：２０歳

身長：１７７ｃｍ

体重：６３ｋｇ

性格：特に変化なし

趣味：身体と精神を鍛えること

好きなこと：ミラとの会話。四大達との会話。

好きな人：ミラ

嫌いなこと：ミラを傷つけることもの

容姿：身長も伸びて、大人になったせいか男の色気がにじみ出ている。（そのせいで、偶にミラに怒られる）

参考：数年間に武者修行をしたため、各街や村に知り合いができている。ミラの騎士的存在。女性に弱い。そのため、偶に女性にデレっとしているとミラに怒られる。（なお、ミラは何で怒っているのかが分からない）

現在のステータス
レベル？
武器：戦闘時に色々変えるため、決まっていないが基本マテリアルブレード

術技及び精霊術
・テイルズシリーズに出てくる武器技は全てマスターしている
・テイルズシリーズに出てくる魔術系・治癒術系・補助系・精霊術は全てマスターしている

オリジナルスキル
・ウェポンマスター５
全ての武器を使用できる
・スペルキャンセレーション３
全ての精霊術を詠唱なしで発動できる
・ミラが好き
ミラと共に戦っている時、ステータスが２倍になる（何このチートw）
・四大使役
ミラと共に一緒にいたため、四大を使役できるようになった
・オーバーリミッツ
リンクをしなくてもオーバーリミッツを１人で発動できる
・リミッター５
オーバーリミッツ状態が通常の２倍になる代わりに戦闘中に体力と魔力を激しく消費する
・リバース
例え、瀕死になろうともミラが戦っている時、執念によって自動復活する

称号

・ミラが好き
　ミラが好きになった男へ送られる称号
・ミラの騎士
　ミラを守ると決めた者へ送られる称号
・ウェポンマスター
　数々の武器を使いこなした者に送られる称号
・スペルマスター
　数々の魔術を使いこなした者に送られる称号
・有名人
　各地で色々と名が広まっている人に贈られる称号
・女性キラー
　その無自覚な男の色気で女を惑わした男へ送られる称号

第2話　研究所

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラはイル・ファン上空に到着するとミラが手を上げるとともにイル・ファンの街灯が消えた。

それを確認したら俺とミラはイル・ファンの水面に降り立った。

シュタ！

水面にはウンディーネの力で水面に立てるようにした。

「感知したのは、この先？」

「ああ。ミラ、気をつけろよ。黒匣（ジン）があるからな。今までとは比べ物にならないくらい強力なものかもしれない。警戒を怠るなよ」

俺がそういうとミラはほほ笑んだ。

「私を誰だと思っている？精霊の主『マクスウェル』だぞ？」

「ならいいがな」

そういい、俺とミラは水面を歩き始めた。

少し進み、鉄棒が道をふさいでいるところを発見した。

ミラは手を上げて、火の精霊術で壊そうとするが、

「待った。ここで精霊術を使ったら街の人間に気づかれるぞ?俺がやる」

俺はミラの前に立ち、剣を構え、そして…

「斬!」

シャキンシャキン!

剣を振うと共に斬撃を鉄棒に向かって放った。放たれた斬撃は鉄棒の全てを斬り裂いた。

それを見ていると、

「うわっと！」

後ろから声が聞こえ、振り向いてみるとそこには……主人公の１人であるジュード・マティスが水面に立っていた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ジュードＳＩＤＥ～

僕はハウス教授を迎えに来たけど、研究所にはもういないと言われ

たけど……何か不に落ちない点があって考えているといきなり、街の街灯が消えたけど、すぐに明かりがついた。

どうしたんだろう?って思っていたら水面を歩く一組の男女がいた。僕はその2人が気になってあるいていくのを見ていると、強風が吹いて、ハウス教授に書いてもらった単位表が飛ばされてしまった。

その単位表が水面に落ちた。

水に濡れず、水面に浮かんでいるのを僕は取り、2人のことが気になってその後を追っていった。

そしたら、後ろから道がなくなっていた。

「うわっと!」

僕は思わず声を上げてしまい、その声に2人は気づき、僕を見た。

「あ、あの…」

僕は何か話さなくちゃと思い、声を掛けると、

女性は指を唇にあてていう。

「危害は加えない。静かにしていれば、な」

そういい、男の人と歩き始めた彼女に思わず言った。

「その先は研究所だよね……？君達は一体……？」

僕がそういっていると、彼女は手を上げると、僕の横に水の大精霊……ウンディーネが現れた。

「えっ！？」

水の大精霊であるウンディーネは僕の周りに水の膜を作り、僕は呼吸できなくなった。

く、苦しい！

～ジュードＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

ジュードもアホだな。黙っていればよかったのに

「ぐっ？　ごほ！」

息ができずに苦しんでいるな。

「静かにしてほしいと頼んだつもりだっだのだけど……」

「ミラ、彼が何か言っているぞ」

「？」

ミラは俺の言葉を聞き、ジュードを見る。

「ん？　静かにするか？」

ジュードは首を振り、わかったっと言っている。

ミラは水の膜を解除させると、ジュードは解放された。が、

「ゴホ！　ゴホ！」

水の中で息ができなかったので咳き込んでいた。

「咳は……ま、大目にみよう。君は、そこで何をしていた？」

「君、正直に話した方がいいぞ？この人、変な返答したら大変な目に遭うぜ」

俺がそういうと、ジュードは怯えたが、言った。

「……しゃべっても？」

そういうとミラは小さく頷いた。

「僕は、その、ただ落し物を拾おうとして……」

そういいながら、単位表を出して見せようとするジュードを無視し、俺とミラは歩き始めた。

「何するつもり？すぐに警備員が来るよ」

ミラはそんなことを聞きながらもいう。

「なので急いでいる。君は早く帰るといい」

「そうそう。こんなところにいるのを見つかったら不審者として間違えられるよ？」

そういい、俺とミラは研究所の排水路の中へ。

中にはいった俺達は歩きながら話している。

「ああ、周辺の微精霊たちも気配がばったりだ」

「そうだな。しかも、それと同時に感じた異常な力が精霊達を吸収しているであろう源がここにあるんだろうな」

「何故人は世界を破滅に向かわせるような力を求めるのか。黒匣（ジン）が無くとも生きていけるというのに……」

ミラがそういうが、

「力があるものはより力を求める。弱きものも同じだ。力を求め、自身を強者にしたいんだろう。一回その力に魅入られればその力を手放すことができなくなる。人間と言うのはそういうものだ」

と俺が言う。

「しかし、レオン。お前は違うだろ？お前の力は数年間の旅で鍛え上げたものだ。人間であるのに四大と戦って勝つなど……お前ぐらいなものだろうな」

「だろうな。……さて、こんなことをする奴らはやはり…」

ミラが頷く。

「ああ、やつらの仕業だな」

ミラは四大達と話しながら言う。

「私の勘だ。十分だろう?誰でもない、マクスウェルの勘だ」

ミラ、お前の勘は凄すぎる気がするけどな。

「さて、ミラ。四大達よ。おしゃべりはここまでだ。さっさと行こう」

「そうだな。黒匣(ジン)を探すぞ」

俺とミラは歩き始めた。

奥に進んでいくと兵士に出会った。

「貴様ら、何をしている？」

「何故ここにいるんだ！」

2人の兵士は武器を構える。

「大声を出すな。騒ぐなら容赦しない」

「そうそう。騒いだら首と胴体が別れるぜ？」

「不審者どもめ！拘束する！！」

「拘束させてもらうぞ！」

兵士2人はそういいながら、俺とミラに突っ込んでくる。が、

「寝ていろ」

「そんな攻撃が効くか」

俺の斬撃、ミラのイフリートが兵士達を吹き飛ばし、気絶させた。

「静かにしていれば危害を加えなかったのだがな」

「挑んでくるなら仕方ねえよな」

そういい、俺とミラはその場を後にして、奥へ進んでいった。

そして、奥に進んでいくと梯子を見つけ、ミラは先に登ろうとするが、

「チョイ待ち」

「何だ？」

「俺が先に上る」

「何故だ」

「お前……自分が今、人間の姿でしかも、女性の姿をしているんだ。それに、スカートなんだから少しは気にしろよ」

「？？？」

ミラは俺が何を言っているのかが分かっていないが、仕方ないか。ミラには女性らしさというのがないからな。

「じゃあ、お先に」

そういい、俺は先に梯子を登って行った。

梯子の先には研究所が広がっていた。

ミラも上ってきて言う。

「随分と、大がかりな施設だが、一部屋ずつ探せば必ず見つかる」

「ああ、慎重に且急速に探そう」

一部屋ずつ確認することに。

一部屋ずつ探していき、ロックされている以外の部屋は上の部屋が最後だった。

「ここだな」

「ああ」

部屋の前に立つと、部屋の中から大きな物音がした。

俺とミラは顔を見あい、部屋の中に入っていった。

部屋に入ると座り込んでいるジュードと赤い服の子……アグリアがいた。

「な～に……落ち着いてんだよ！」

アグリアはそういいながら、入口にいる俺たちに気づき、ジュードも気づいた。

「あの男女（ひとたち）……」

「アハ～。そっか、侵入者ってあんたたちの方か」

アグリアは剣と杖が合体した武器を構えながら言う。

「つまんないんだ、この子。だから、あんた達から殺したげる」

アグリアは精霊術を唱え始めた。

「逃げて！」

ジュードはそう、俺たちに言うが、

シュドォン！

アグリアよりも遥かに早く精霊術をミラが使い、精霊術はアグリアの顔に直撃し、吹き飛ばす。

俺とミラはガラスケースの中に入っている人を見る。

「その顔、ぐちゃぐちゃにしてやる！」

「それは困る」

ミラは剣を抜く。

「（レオンが綺麗だなと言ってくれたのだ。何故か判らないが嬉しかったのでな。だからかわからないが、顔に傷をつけたくない）」

俺も剣を抜く。

ジュードもそれを見て、拳を構える。

しかし、戦闘はすぐに終わることになった。

ミラはウンディーネを召喚し、大量の水をアグリアに飛ばし、その合間に俺が剣でアグリアの武器を吹き飛ばし、防ぐ手立てがなくなったアグリアは水をモロに喰らった。

【ウオォォォォ！！！】

「こ、これってイフリート？」

「そう、火を司る大精霊だ」

「よ、四大精霊を召喚するなって」

ドシュン！

攻撃を喰らい、アグリアは気絶した。

「す、すごい……」

ジュードはミラと俺を見る。俺達は剣を鞘に納める。

「帰れといったろう。まさか、ここが君の家というわけか？」

ミラは研究室を見ながら言う。

「ううん。違う……。……ごめんなさい」

ジュードが謝る中、ミラは歩き出す。

「あ、あの……」

「これが黒匣（ジン）の影響……？」

ガラスケースの中の人達を見てそう、呟くミラ。

「おそらくな」

俺もケースに近づき、そういう。

「黒匣（ジン）……？」

ジュードは聞こえた言葉を不思議に思いながら繰り返す。

「微精霊たちが消えたのと関係している？」

そう、四大と話すミラの言葉をてっきり自分に聞いているものだと思ったジュードが言う。

「え、わからない……精霊が消えて……？」

それを見いたミラが後ろを振り向き、言う。

「君は早く去るといい。次は助かるという保証はないのだから」

ミラがおういうと、ジュードは空になっているケースに中を見る。

それをよそにミラはアグリアの近くに落ちていたキーを手に取る。

「黒匣（ジン）は……どこか別の場所か」

「ああ、おそらくそのカードキーはさっきの入れなかった場所で使えるだろうな。おそらくそこだな」

俺は先ほどの開かなかった部屋のことをいうと、ミラはカードキーを仕舞った。

そして、その部屋に向かうためにドアへ向かって歩くと、

「ね、ねえ、待って」

ジュードが俺達を呼びとめた。

「……あてがないんだ。教授が一緒なら、ここから出られたかもしれないけど。僕も行っていい？」

そう、ジュードが言うのを聞いて俺とミラはお互いに顔を見あう。

「ふふっ、なるほど、確かに。それなら次も助かるだろう。君は面白いな」

「ああ、ってか。そういう時はもっとはっきりいいなよ」

それを聞いて、ジュードは俺達に手をさしのばした。

「ジュード・マティス。それが僕の名前。君達は？」

「私はミラ。ミラ・マクスウェルだ」

「んで、俺はレオン・ストライフ」

俺達は交互に握手をした。

第2話　研究所（後書き）

次回、ミラが力を失います。

第3話　クルスニクの槍と失われし力（前書き）

今回からチャットでの会話があります。そこにレオンを入れての会話となっています。

第3話　クルスニクの槍と失われし力

～レオンＳＩＤＥ～

「あ、あれ……今になって震えが……」

ジュードを見ると体が震えている。

「無理もない。殺されるところだったのだからな」

「まあ、そうだろうな。普通に生きていた人間がいきなり殺す殺されるの世界に足を踏み入れたんだ。仕方ないさ」

「あの子、なんで……？僕、一般人なのに」

そりゃあ、ここにいたら関係者とかと思うだろ。普通なら。

「あの女、ラ・シュガルの正規兵とは思えなかったがな」

……言えないよな。あのアグリアは実はア・ジュールの四象刃（フォーヴ）の１人だって…

「どうして兵士じゃない人が、軍の施設に？」

「さあな。だが、君も私もレオンも人のことは言えまい？」

「それはそうだけど。……殺しちゃったの？」

「いや、殺してはいない。ただ単に気絶しているだけ」

「ああ、手加減はしたが、人間は脆い。四大にはやり過ぎるなと言っているのだが」

「いや、ミラよ。そういうんだったら俺の言うとおりに剣の使い方をしっかりと学べよ」

「まあ、機会があればな」

「しだい……？」

「ジュード、用事はすんだのか？」

突然、ミラはジュードにそれを聞いた。

「え？」

「こんな所にいたのには何かワケがあったのだろう？」

「……帰りの遅かったハウス教授が心配で……。でも、その教授ももう……」

「さっきの装置で亡くなってしまったのか……」

「うん……教授、オルダ宮直々の以来だって張り切ってたのに……」

「……そうか……ん？　うむ。そうだな」

「残念だったな……ん？わかった」

俺とミラは四大達の会話を聞き、早歩きした。

ダッダッダッダ

「？　あ、待って」

研究室を出るとミラとジュードが持っていたリリアルオーブが光を発していた。

「む、この光は……？」

「リリアルオーブが光ってる」

2人はリリアルオーブを仕舞うと、ミラはジュードに聞いた。

「リリアルオーブ……旅立つ時、レオンに無理矢理もたされたが、なんなのだ？」

「おい、そのことはちゃんと説明しただろうが」

ミラは考える……。

「そうだったか？」

「……もういいよ。ジュード、説明よろしく」

「え、あ、うん。えっと、魔物とかと戦えるようになるアイテムだよ。僕も故郷から出る時、念のためにってもらったんだ」

～ただ今、チュートリアル中～

～終了～

「……と言うわけ。僕も成長させたのは初めてだけど」

ジュードの説明を聞き、納得するミラ。

「なるほど、潜在能力を覚醒させる道具か。非力な人間には必要不可欠な品だな」

「本当に人間じゃないみたいな言い方……」

「（実際に人間とは違うからね）」

俺達は歩き出した。

「ミラ・マクスウェル……精霊の主と同じ名前なんて変わっている

ね」

「同じも何も、本人だからな」

「そう、その本人何だよ」

「え？」

「精霊の主、マクスウェルとは私のことだ」

「ええっ！？けど、どう見ても人間……」

ミラに顔を近づけるジュードは途中で顔を赤くした。

「……の、女の人にしか見えないよ」

「当然だ。そのように体をつくったのだから」

まあ、そんなことを言うと初対面の人間は大抵…

「体を……つくった！？」

って言うよな。俺も（知ってたけど）実際に聞くと驚いたもん。

「マクスウェルって、元素を支配する、精霊の主だよね……」

「信じられないか？」

「いきなり精霊だって名乗られても、さすがにね」

そう言うジュードの後に俺はミラに小声で言う。

「（それにミラは人間の女性に例えるならかなりの美人なんだぜ？精霊だって言われても普通なら信じないぜ）」

「（そ、そうか／／／／／／少し、照れるな）ん。では君たち人は、自分の存在の証明をどのようにしている？」

ジュードはそんなミラの質問に答える。

「えっと……例えば身分証とか。僕も医学校の学生証持ってるし」

「ふむ。あいにくだが、私の場合、その方法では証明できそうにないな」

そもそも、精霊に身分証何てないだろ。

「精霊の身分証を発行するものに心当たりがない。レオン、知っているか？」

「精霊の主であるミラが知らないものを俺が知っているはずがないだろ」

「だな」

俺とミラを見ながらジュードは呟いた。

「僕……ついていって大丈夫かな……」

そのまま、俺達はカードキーが必要な部屋の中に入っていった。そこで、

「ハウス教授……期待してるって言ってくれたのに……あんなことになるなんて……」

落ち込むジュードにミラが、

「……」

近づき、手を頭に乗せようとした。

「な、なに？」

それに気づいたジュードは後ろに下がった。

「撫でてやろう。ジュード」

「は？」

まあ、いきなり撫でてやろうなんて言われたら不思議に思うだろうな。

「人は元気がない時に撫でられると喜ぶことがあると本で読んだんだ」

「……なんて本？」

嫌な予感がしたのか、汗をかきながら聞くジュード。

「『魔法の手、瞳の鏡』」

ガクッと頭が下を向き、ジュードはミラにいった。

「……それ、育児本じゃないか。僕は赤ちゃんじゃないよ」

「む。君には適さない方法だったか？昔、レオンにしたら喜んだが」

ブッ！？

「ミラ。それは１０年前のあの時のことだろ！！何でそれを今言うんだ！？」

「何でって……うむ。難しいな」

「ったくよ～勘弁してくれ」

俺は少し、悲しい気持ちになった。

「あはは、少し気が楽になった気がするよ。ありがとう、ミラ。それにレオン」

「ふむ？どうやら元気が出たようだな」

「俺は逆に落ち込んだよ」

俺達はどんどん、施設の奥に向かっていると、

「ねえ、ミラ、レオン。これって奥を目指してる？出口に行かないの？」

出口に行かず、奥に向かう俺たちを不思議に思ったのかそういってきた。

「ああ」

「そうだ」

「逃げないと危ないんじゃない？ここ普通じゃないし……」

「危険は承知しているが探さねばならない物があるのでな。君には悪いがつきあってもらう」

「悪く思うなよジュード」

「うん。一緒に行くって言ったのは僕だしね」

そういうジュードに俺とミラは思わず、

「ふふ」

「クク…」

笑ってしまった。

「？　何？」

「いや……。用を済ませば、必ず君を外まで送り届ける。安心するといい」

「俺達がしっかり送ってやるよ」

そう、俺達が言うと、少し笑顔でジュードは

「ありがとう」

お礼を言ってみた。

部屋を調べていき、ついに俺とミラの目的のものを発見した。

そこには……巨大な兵器と思えるほどの兵器が置かれていた。

「何これ……」

「やはりか……黒匣（ジン）の兵器だ」

「ああ、こいつが異常な力の発信源だったのか」

俺とミラは兵器を睨み、ジュードはコントロールパネルを操作していっている。

「クルスニクの槍……？創世記の賢者の名前だね」

ジュードが名前を言うと、ミラは四大召喚陣を展開し始める。

「ちょ、どうしたの！」

それに気づいたジュードは声を上げた。

「ふん。クルスニクを冠するとは。これが人の皮肉というものか」

そして、ミラは声を上げた。

「やるぞ。人と精霊に害為すこれを破壊する！」

そういうと、ミラと俺の周りに四大が現れる。

それを見たジュードは声を上げて驚く。

「彼らが四大精霊……。ミラは本当に精霊マクスウェル……！？」

驚くジュードを置いといて、ミラは魔術陣に両手を構える。

「はあああっ！」

ミラの声を共に四大は四方でクルスニクの槍を囲んだ。

だが、

ガシッ！

「君はさっきの！？」

ジュードは声を上げた。俺とミラはその方向を見ると先ほどまでジュードがいたコントロールパネルとは別の……クルスニクの槍の近くにあるパネルの所にアグリアが立っていた。

「許さない……！うっざいんだよ……！」

そういいながら、パネルを操作し始めた。

そして、四大の術と同じようにクルスニクの槍が発動し、術のために溜まっていたマナを吸い込み始めた。……そう、俺達のも。

「うっく……！マナが……抜け、る……」

「バカもの！正気か？お前も、ただではすまないぞ！」

「今すぐ、クルスニクの槍を止めろ！」

俺とミラがそういうも……

「アハ、アハハハ！苦しめ……し、死んじゃえー！！」

そういいながら倒れるアグリア。

「霊力（ゲート）野に直接作用してるんだ……」

ジュードが今の状況を説明する。

「すこし、予定と、変わったが……いささかも問題は……ない！」

「ああ、あの、鍵のようなものを取れば、問題は……ないな！」

俺とミラは少しずつ、前に進み始める。

「止める気……？どうしてそこまでして……」

疑問に思う、ジュード。だが、今は構っている暇はない。

「あれだな！レオン！」

「ああ！あれだ！」

もう少しのところで、

「ミラ、レオン、下！」

俺とミラは足元を見ると魔術陣が展開された。

それと共に、クルスニクの槍のマナの吸収力が上がった。

「お前たち、引きずりこまれるぞ！」

ミラは前に進み、クルスニクの槍の起動するための鍵を取った。

しかし、クルスニクの槍は止まらない。

そして、

ビシッ！

【レオン、ミラを頼みました】

【僕達が捕えられている間……ミラを頼んだでしょ】

【今はお前が一番、頼りになる】

【頑張ってくれよな】

「（ああ、任せてくれ）」

四大は俺にそういった。

それと同時に、四大達は最後の力を振り絞って力を解放した。

それによって発生した風にジュードは飛ばされた。

「う、うわぁー！」

俺とミラは何とか踏ん張っている。

俺は鍵を掴んでいるミラの上から手をかぶせ、一緒に鍵を引っ張った。

「うわ！」

「どわ！」

鍵を取ったその衝撃かわからないが、光を発した。

それに吹き飛ばされ、俺とミラは壊れかけている通路に寄りかかる。

ミラは鍵をディスク状にし、懐にしまった。

落ちそうなので、シルフの力を使おうとするも…

「……！」

術は不発に終わり、ミラは落ちていった。

「くっそ！ミラ！」

俺はそのまま、手から力を抜き、ミラを追いかける。

ダキッ！

落ちていくミラを空中で抱きしめる。

「レオン！？」

「黙っていろ！舌を噛むぞ！」

俺はミラを衝撃から守るために強く抱きしめる。

その時、俺は見えなかった。

俺の胸元で抱きしめられたミラが顔を赤くしているのに。

そのことにミラ本人も気づいていなかったことに。

そして、これから始まるであろう長い旅と激しい戦いに……

第3話　クルスニクの槍と失われし力（後書き）

はい。第3話でした。今回からストーリーでもあった、チャットを入れてみました。
これからもちょくちょく、書いていきます。

そして、この話の最後の方のミラ！自分が何で顔を赤くしているのかが分からないのであった。
これもきっと、ジュードの幼馴染や凄い魔術使いが出てくるまで分からないでしょう～

では、次回もお楽しみに！

第４話　脱出と新たな出会い

～レオンＳＩＤＥ～

バシャン！

「はぁ、はぁ」

「ぜぇ、ぜぇ」

俺は落ちて行ったミラを抱きしめ、そのまま、ジュードと一緒は水に流され、イル・ファンの研究所の外へ出た。

「ミラ、泳げないんだね。大丈夫？」

「ミラは普段、ウンディーネの力で水面を歩いていたからな。泳ぐということをしたことがないんだよ」

俺はミラを支える。

「ごほっ。ウンディーネのようにはいかないものだな」

「ウンディーネと比較するなよ。あいつは水の大精霊だぜ？」

「そうだったな」

そう、言っている俺とミラを余所に、

「やっぱり、四大精霊の力がなくなったんだ……」

ミラが力を失っていることを確信しているジュードがそういった。

「ねえ、これからどうするつもり？」

考えていたジュードが俺とミラに向けて言う。

「精霊の力がないとあの装置はきっと壊せないよ」

そう、ジュードがいうとミラは少し考えながら言う。

「あいつらの力、か……」

「ミラ、ここは一旦ニ・アケリアに戻るのはどうだ」

俺がそう、ミラに提案を言うと、ミラは考え込む。

「確かに……ニ・アケリアに戻ればあるいは……」

ミラは考えが纏まったのかジュードを見る。

「世話をかけたな、ジュード。ありがとう。君は家に帰るといい」

「俺達はもう行くよ。じゃあな」

「あ……」

何かを言いかけたジュードを背に俺とミラは歩き始めた。

しかし、歩いてすぐ、兵士に見つかった。

「貴様ら、侵入者だな！」

俺とミラは剣を構える。

「違う、と言ったら通りてもらえるだろうか？」

「そんなこと、あるわけないだろ」

相変わらず、そういうことには知識も常識もないな、ミラは。

戦闘が始まろうとした時、

「ミラ！レオン！」

俺達が心配になったのか、ジュードが出てきた。

「不用意だな。ジュード、無関係を装えばよいものを」

「それに、お前はこの街の人間だろ？ここに問題を起こすのはいけないんじゃないか？」

兵士から目を話さないでジュードにいう、俺とミラ。

「貴様も仲間か！」

案の定、ジュードが俺達の仲間だと認識してしまったな。

そういう兵士に向かって、ミラは剣を振うが…

スカッ！

「？」

兵士には当たらなかった。

「はぁ、だから訓練ぐらいしろって言ったのに……」

俺のその言葉とミラの剣の振り方を見たジュードが驚き、声を上げた。

「ちょ！訓練をって……ミラ、剣使ったことないの！？」

「うむ。今までは四大の力に頼って振っていたからな。あいつらの力がないとこうも違うとは……」

そうしている間に兵士が増えてきた。

「援護に来たぞ！」

「助かる！」

「さあ、覚悟しろ！」

前後に兵士が数十。ちっ！仕方ないな！

「もう！」

ミラと対峙している兵士に拳を構えるジュード。

「ジュード！そっちはミラと一緒に戦ってくれ！俺はこっちをすぐに倒す」

「わ、わかった！」

そういい、俺は数十の兵士達を相手にすることに。

「相手は1人だ！さっさと倒して、他の2人も拘束するぞ！」

『おお！』

と、なんか意気込んでいるところ悪いが……

「てめえら程度が俺を拘束できるはずないだろ！」

シュン！

その言葉と共に俺は兵士たちの目の前から消えた。

「何！？」

「消えただとぉ！」

「ど、どこへ？！」

慌てる兵士たちの背後から、

「背後から失礼」

ザシュ！

「ぐはっ！」

バタン！

「おい！どうし……」

ザシュ！ザシュシュシュ！

倒れた1人の兵士に他の兵士たちの視線が向いている間に他の兵士達を後ろから斬り裂いた。

ドタッ！

俺の方の兵士を片付け、ジュード達の方を見るとジュードが息を荒くしていた。

「はぁ、はぁ、何やってるんだろう。僕は……」

「重ね重ねすまない。ジュード、助かった」

「俺からも礼を言う。ありがとう」

俺とミラが礼を言うと、ジュードは言う。

「とにかく、急いでイル・ファンを離れた方がいいと思うよ」

「そうしよう。ではな」

「またな」

そういい、歩き出す俺たちにジュードは言った。

「街の入り口は、警備員がチェックしていることが多いんだ。海停の方が安全だと思うよ」

「む。そうか」

そういう、ミラであったが、道が分からず困っている。

「レオン。海停はどっちだ」

「すまん。俺、イル・ファンだけは来たことないんだ」

……ゲームでは知っているが、そうしないとジュードが仲間になんないからな。嘘を言う俺。……少し、心が痛いがな。

そんな俺達を見ながら、ため息をつくジュード。

「……海停、知らないんだね」

そういい、海停の方を向いた。

「こっち」

そういい、歩き出すジュードの後を俺とミラは追った。

「すまない、世話になる」

「恩にきるぜ。ジュード」

「ううん、助けてもらったお礼。海停まで送るよ」

……そう言うジュードだが、その選択がこれからの激しい旅の始まりだってことになるとは思ってないよな……

「ジュード。海停はどっちだ？」

「海停はここから街のちょうど反対側なんだ。まずは中央広場に向かおうよ」

「うむ。では、行こう」

まずは広場を目指すことに。

広場を目指していると…

「くしゅん！」

ミラがくしゃみをした。

「うぅ、イフリートがいれば、この程度すぐ乾くのだが……」

「大丈夫か？ハァ！」

風邪をひきそうなミラを見て、手に軽く火の精霊を集め、ミラの服を乾かした。

「おお、すまない、レオン」

「気にすんなって」

ミラの服を乾かして、そのまま広場へ。

中央広場に出てすぐ右の道を通って海停に来た俺達。

だが、

「そこの三人、待て！」

バタバタ！バタバタ！

「え……何！？」

兵士達が俺達の周りに近寄ってきた。

その中に、ジュードの知り合いもいたみたいだ。

「先生？　タリム医院のジュード先生？」

「あなた……エデさん？」

兵士の中で唯一、ヘルメットを被っていない兵士……エデだった。

「何がどうなっているんですか？」

ジュードはエデに聞く。

そして、エデは

「先生が要逮捕者だなんて……」

エデは少し、悲しそうな表情をして言う。

「……ジュード・マティス。逮捕状が出ている。そっちの男と女もだ。軍特法により応戦許可も出ている。抵抗しないで欲しい」

「待ってください！」

エデの言うことに驚き、声を上げてジュードはエデに言う。

「た、確かに、迷惑掛けるようなことはしたけど、それだけで重罪だなんて……！」

そう、ジュードが言うとエデや兵士達は武器を構える。

「問答無用ということのようだな」

「まあ、そうだろうな。あの様子じゃ」

「エデさんっ！」

特に驚かない俺とミラ、驚き声を上げるジュードはエデの名を呼んだ。

「悪いが。それが俺の仕事だ」

エデの言葉を聞いて、ショックを受けるジュード。

「ジュード。私達は捕まるわけにはいかない」

「すまないけど……抵抗させてもらうぜ」

俺とミラは剣を鞘から抜いて構える。

「……抵抗意志を確認。応戦しろ！」

エデの命に兵士の2人が火の魔術を放った。一発は避けるが、二発目がミラを襲った。

だが、

ザシュ！

俺がその火の精霊術……ファイアーボールを剣で切り裂いた。

「何！？」

「剣で……魔術を切り裂いただと！？」

エデや周りの兵士は驚いている中、周りにいる一般人は逃げ始めた。

そんな中、

ブゥーン……ブゥーン

船が出る合図の音が聞こえ、ミラはその方向を見る。

「さらばだ。ジュード。本当に迷惑をかけた」

走ろうとするミラはジュードの横を走ろうとするが、

ガシッ！

「ん？レオン、どうした？」

「俺が抱えて走った方が早いぜ。じゃあな、ジュード！」

ダッダッダッダ！

俺はミラを脇に抱えて、船に飛び乗った。

シュタ！

「到着」

「す、すまない。レオン。助かった。だ、だから、離してくれないか／／／」

「ん？悪い。今離すわ」

顔を赤くするミラを離して、ジュードのいる方を見ると……

「うわあああーーーーーー！」

ドンガシャン！！

見知らぬ男がジュードを脇に抱えて、船に飛び乗ってきた。しかも、着地地点が空の箱の上。

それに巻き込まれ、近くにいた船員達もぶつかる。

「いってぇ！」

男は頭を押さえている。

「ちょっと、あんたたち！？」

船員の１人がジュードと男……アルヴィンが船員を見ながら言う。

「まったく参ったよ。なんか重罪人を軍が追っているようでさ」

そういいながらアルヴィンは立ち上がる。

「おいおい。こんなイイ男と女、かっこいい男、こどもが重罪人に見える？」

そういいながら俺とミラを見ながらウィンクした。

それを不思議がってみるミラ。

「あの……」

「アルヴィンだ」

「え？」

「名前だよ。君はジュードっつったかな？」

アルヴィンは自分の自己紹介とジュードの名前を言う。

「う、うん。こっちはミラとレオン」

俺とミラはジュードとアルヴィンに近づく。

アルヴィンは落ち込んでいるジュードの肩に手を置いた。

「がんばったな」

そう、アルヴィンがジュードに言うが、ジュードは無反応のまま、ずっと落ち込んでいた。

……さてさて、これからが大変になるね。まあ、ミラは俺が守って見せるがな。

これから始まる戦いに向けて、そう意気込む俺であった。

第４話　脱出と新たな出会い（後書き）

今回、ある意味でエクシリアで印象が多く、色々としてくれるアルヴィンが登場。
ある意味で役に立ち、ある意味で役に立たず、ある意味で頼りになる男が登場しました。
これからの物語でどんなことを見せてくれるのかが見ものです。
次回もお楽しみに！

第5話　交渉（前書き）

一日、三連続投稿です。ふぅ、疲れた。

第5話　交渉

～レオンＳＩＤＥ～

あれから船は進み、その間に俺・ミラ・アルヴィンの3人は船長に尋問され続け、ようやく解放された。

「船長のやつ、勘弁しろよな。いつまで尋問するつもりだったんだよ」

「アルヴィン、それは仕方ないじゃないか。ジュードはタリム医学院の学生証で身分が分かるけど、俺達は身分証を持っていないんだぜ？自分たちに何かあると嫌だから、俺達が自分たちに害を為すか為さないかを判断したかったんだと思うぜ？」

「俺達って……おたくらが…だろ？」

アルヴィンは呆れるように言う。まあ、確かに精霊の主であるミラとこの世界の人間ではない俺には身分証はないからな。

俺達は離しながらジュードの待つ甲板まで戻ってくると……

「……」

海を見ながら沈んでいるジュードを発見した。あれはかなりまいっているな。

そんなジュードにアルヴィンが近づく。

「ア・ジュール行きだなんて……外国だよ……」

アルヴィンはジュードの横に立ち、言った。

「見ろよ。イル・ファンの霊勢が終わるぞ」

そう、アルヴィンが言うと共に空の景色や周りの暗い景色が、明るい空や海が見えるようになった。

「にしても、医学生だったとはね。ちょっよ驚いたよ」

ジュードがまさか、医学生とは思っていなかったアルヴィンは準巣に驚いていた。

すると、ジュードがアルヴィンに聞いてきた。

「ねえ、聞いていい？」

「いいぜ。何でも聞きな」

アルヴィンがいいというのでジュードは聞いた。

「どうして助けてくれたの？あの状況じゃ、普通助けないよ」

自分を助けてくれたアルヴィンが何で助けたのかが疑問になっていたジュードはそう聞いた。

「金になるから」

そう、アルヴィンが言うとミラは腕を組み、言った。

「私たちを助けることが、なぜそうなるのだ？」

そう、ミラがいい、アルヴィンが何かを言いかけるが、俺が言った。

「俺達が軍に追われていたってことは相当やばい境遇だと思うだろうな。そんな俺達を助けることで金をせびれるってことだろ。そうだろ、アルヴィン？」

俺がアルヴィンに向けて言うと、アルヴィンは小さく拍手をした。

「大正解。満点だぜ」

そんな俺の説明を聞いた、ジュードはアルヴィンに向かって言う。

「でも、僕、お金ほとんどもってないよ」

「生憎、私もだ」

「俺は後払いでいいなら俺が払おうぜ？今は持ってないが、俺の住んでいるところに行けば、そこまでの料金＋延長料金＋危険手当とかを加算して、渡せるが」

俺がそういうと、ミラは意外な表情をしていた。

「意外だな。レオン。お前はてっきりお金を持っていないものかと」

「おいおい。俺は数年前、旅に出ていたのは知っているだろ？その時に傭兵みたいなことをして金を稼いで……そうだ！アルヴィン。いいことを思いついたぜ」

俺は名案が浮かび、それを早速アルヴィンに話す。

「俺達の目的地までの間に寄るだろう村とかで依頼を受けて、その成功報酬をお前にやる。だから、俺と一緒にミラに剣の使い方を教えてやってくれないか？報酬は弾むぜ？」

俺の提案にアルヴィンはいい表情をする。

「その名案、乗った！確かに、依頼で魔物退治とかがあれば嬢ちゃんの剣の使い方も覚えられて、実践を行えるな……一石二鳥って奴だな。それでいいぜ」

「交渉成立だな」

俺は手を出し、握手を求める。

アルヴィンもそれに応え、手を握る。

その際に、

「（ただ、もしミラに手を出したら……地獄の果てまで追い続けるがな）」

アルヴィンに聞こえるほどの小声で言った。すると、顔から汗を出すアルヴィン。

「（わ、わかった）」

アルヴィンがそういうのを聞いた俺は手を離した。

握手を終えるとジュードがアルヴィンに聞いた。

「ねえ、アルヴィンって何してる人？軍人みたいだけど……ちょっと違う感じだしさ」

「あれぇ～？さっきのやり取りでわかなかったのか？俺は傭兵だぜ？」

「金は頂くが、人助けをするすばらしい仕事」

「なるほど、だからレオンはあんな案を出していたのか。納得したぞ」

俺が言ったことがようやくわかったミラは納得したようだ。

そして、そのまま話は終わり、船がア・ジュールのイラート海停に着くのを待つのであった。

それから時間が立ち、ようやくイラート海停に船が到着し、船から降りる俺達。

ジュードとアルヴィンは何かを話していたが、ジュードが走って地図のある場所まで向かって言った。

そんなジュードを見ていた俺とミラ。そこへアルヴィンが話しかけてきた。

「空元気、かねぇ」

「気持ちを切り替えたのか。見た目ほど幼くないのだな」

「それか、心配させたくなくて無理をしているのか、だな」

俺とミラがそういうとアルヴィンは呆れたように腕を組みながら言った。

「おたくらが巻き込んだんだろ？随分と他人事だな」

アルヴィンが言うことは正しいのだが……正しくもないんだよな。

「確かに俺達は世話になったりはした……が、あれは本人の意志でこんなことになっているんだぞ？なあ、ミラ」

「ああ、私は再三帰れと言ったのに」

それを聞き、何かに気づいたアルヴィンが俺とミラを見ながら言ってきた。

「は～ん、それでおたくらに当たるわけにもいかないから、あの空元気ってか」

それを聞きながら、ミラはジュードのいる地図の所に向かう。

「どっちにしてもオトナなこと」

「そうか？俺には無理して大人になろうとしている子供に見えるがな」

「それもそうか……」

俺とアルヴィンは一緒に並んでミラ達の所に行く。

「んで？すぐに発つのか？それとも依頼である剣の使い方を教えながら依頼を受けて報酬を稼ぐか？」

アルヴィンはそう、ミラに聞いてみると、

「ああ、このままでは私のやるべき使命を行うことができない。だから、先に剣の使い方を教えてくれ」

俺とアルヴィンはお互いに顔を見あい、頷いた。

「わかった。なら、海停に依頼があるだろからまずは依頼を探すぞ」

そういい、アルヴィンのいく方へついて行くことになったのであった。

少しして、依頼がありそうな女性を発見した。女性に話しかけるアルヴィンは依頼の内容を聞いた。

その内容はイラート間道・西方の南西にいる魔物退治だった。それを受けたアルヴィンと俺達。

その女性は俺を見ると、近づいてきて手を握ってきた。

「気をつけてね！」

顔を赤くする女性に戸惑いながら俺は言う。

「あ、ああ。大丈夫ですよ。心配しないで待っていてください」

そう、俺が言うと突然、肩を掴まれた。

後ろを見るとミラが怒りの表情で肩を掴んでいた。

「安心しろ。私たちがその魔物を退治してやる。待っているがいい」

そういい、俺の肩を掴みながら間道への入り口へ歩くミラ。そんなミラに引っ張られる俺。

そんな俺達をアルヴィンが呼びとめ、ミラに簡単ではあるが、剣の使い方を教えた。

そして、ジュードにこれからどうするのかとミラは聞いたが、ミラが出発までに決めるからとジュードがいい、依頼をしに、海停を出る俺達であった。

～チャット～

「全く、レオンめ。デレデレするとは…まったく！」

先ほどのレオンに怒るミラ。そこに、

「おいおい、そんなの血相を変えて怒ると美人が台無しだぞ？」

「アルヴィン、煩いぞ？剣の錆びにされたいか？」

アルヴィンに向かって剣を抜こうとするミラ。

慌ててミラから離れるアルヴィン。

「まったく、この気持ちは何なんだ！」

そんな状態のミラを見てアルヴィンは思った。

「（自分が何で怒っているのかがわかんないのか？どう見ても嫉妬だろ。レオンが他の女に手を握られたことへの……。レオン、お前、大変な目に遭うな……これから）」

アルヴィンはその時、心からレオンのことを祈った。

「何なんだ本当に、この胸が苦しくなるのは……」

ミラがこの気持ちの意味を知るのはいつになるのであろうか……それはミラ自身にも分からないことである。

第5話　交渉（後書き）

次回、レオンたちの初依頼。そして、共鳴（リンク）戦闘も出てきます。
レオンとミラの息の合った戦い方を……書けるかな～～

第6話　共鳴戦闘と共鳴アーツ（前書き）

後書きを変更しました。

第6話　共鳴戦闘と共鳴アーツ

～レオンＳＩＤＥ～

依頼にある魔物退治する魔物達のいるであろう場所へ向かっている途中、ミラは懐からクルスニクの槍の鍵を取り出して言った。

「クルスニクの槍とやらが発動した時、膨大なマナが、これに集中していた」

「ああ。その『カギ』があの兵器を稼働させるためのものだろうな」

俺とミラがクルスニクの槍のことを話していると、アルヴィンが近づいてきた。

「何か用があるのか、アルヴィン」

「おおっと。何構えてんだ？怖い顔してさ。用事がないと話しかけちゃダメなの？」

アルヴィンがそういうと、ミラは拳を引っ込めた。

「いや……だが、背後から息を潜めて近づくのは感心しない」

「ああ。後ろから息を潜めて近づくと警戒するのは普通だぜ？」

「何だよ。まるで俺がヤバイ男みたいに。あのジュードってヤツにもそうやって難癖つけてるワケ？」

アルヴィンがジュードのこともと言うと、ミラは困った表情でいう。

「ふむ。難癖のつもりはないが……そう取られているかもしれんな」

ミラが言うと、アルヴィンは笑いながら言った。

「少年ってのは傷つきやすいんだ。気ぃつけてやれよな」

アルヴィンがジュードに気を使っているのを聞いて、ミラは少し驚いて言う。

「ほう、意外に優しいのだな」

「ああ、物凄く意外だな」

俺とミラがそういうと、少し傷ついた感じであるが、笑いながらいう。

「おいおい……そりゃ、俺のキャッチフレーズは、『こころ優しき傭兵』だから」

「ふむ。いいキャッチフレーズだが、あまり長生きできそうにないな」

「そもそも、自分から『こころ優しき傭兵』なんていう奴がいるとは……俺はこっちに驚きだよ」

「はは。言ってくれるねぇ、この2人は」

そんな話をしながら俺達は歩いて行った。

イラート海停から少し歩くと数体の魔物達がいた。

いざ、戦闘をしようとすると…

「む、リリアルオーブが光った？」

ミラに続いて俺、ジュード、アルヴィンのリリアルオーブが光りだした。

「三人ともリリアルオーブをもってたのか？んじゃ、共鳴（リンク）戦闘、いってみるか！」

「お、それはいいな！今まで使う機会がなかったからな！やろうぜ！」

俺とアルヴィンの話を聞いたジュードが呟いた。

「共鳴（リンク）……？」

「リリアルオーブには、仲間の意識を感知する力がある」

「これを利用することによって、意識を共有できるし、連携攻撃…
…共鳴（リンク）アーツを発動することができるんだよ」

俺とアルヴィンの説明にミラはどうすれば？と聞いてきた。

「やってみりゃあわかるよ。リリアルオーブに意識を集中しろ！」

「説明よりも体で感じた方がいいぜ！」

４人はリリアルオーブに意識を集中すると再び、リリアルオーブが光り始めた。

そして、戦闘が始まった。

少しして、アルヴィンが言った。

「そろそろ、共鳴（リンク）アーツいけるんじゃね？」

「ああ、ミラ！やるぞ！」

「ああ！行くぞ、レオン！」

俺がアイスニードルの精霊術を発動させると共鳴（リンク）アーツが発動した。

「「降り注げ、無数の氷の刃！アイシクルレイン！」」

上空から氷の雨がモンスター達に降り注がれる。

『ギャオォォォォン！』

その共鳴（リンク）アーツによって、残っていた魔物達を殲滅した。

「友情・協力・勝利！人間らしい戦法だろ？」

「うむ、気にいった」

「ああ、初めて使ったが、いいものだな」

「うん、1人じゃないって嬉しいね」

「ああ、いいこと言うねジュード君」

そういいながら、ジュードの肩に腕を回すアルヴィン。

ジュードは嬉しそうな表情をした。

そのまま、俺達は奥に進んでいった。

奥に進んでいくと突然、アルヴィンが何かを思い出したのか、話を始めた。

「そーいや、この辺りになんとかいう村があったな。行ってみる？」

「けど、頼まれた仕事がまだ終わってないよ」

「優等生～。そんなんじゃ肩こるだろ～」

「そうだな。それにああいう依頼ってのは自分に合ったペースでこなしていけばいいんだぜジュード」

アルヴィンに続いて、ジュードに言う俺達を見てミラはいった。

「そういうものか？」

「「そういうものだよ」」

「そもそも、依頼を受けたのは、俺に払う報酬と嬢ちゃんの剣の指導が目的だろ？寄り道して実践を行うもよし、他の依頼を受けるのもよし、だ」

「ああ。報酬に関してはニ・アケニアまで行けば俺が払うしな」

「そうか。雇い主はそっちだ。行くも戻るも好きにするといいさ」

そういい、そのまま奥へ……

イラート海停からイラート間道・西方の南西の奥まで来ると、この辺りにはいないはずの魔物達がいた。

「見て！きっとあいつが依頼にされた魔物だよ」

「確かに、この辺りに出没する魔物ではないようだ」

「よし、さくっとやっちまおう！」

「だな。退治したら海停で飯でも食べようぜ！」

そういい、戦闘が始まった。

戦闘が始まると俺とミラは共鳴（リンク）アーツを駆使していた。

「ウィンドカッター！」

ミラが風の精霊術を発動させると、同時にアーツを発動させた。

「行くぞミラ！」

「ああ、準備はできている！」

「「貫け！空破絶風撃！！」」

風属性を纏った俺の剣が魔物たちを貫いて倒した。

そして、続けて

「「叩きつぶす！地に飲まれろ！烈震天衝！」」

ミラの地属性と俺の穿衝破の連携技によって残っていた魔物たちを殲滅した。

そして、勝利の掛け声。

「俺とミラの絆に勝るものはない！」

「レオン、お前とならどこまでも高みを目指せそうだ！」

剣と剣を合わせて、そういった俺とミラであった。

その俺達を見て、

「……」

寂しそうにするジュードにアルヴィンが言う。

「ま、頑張れ」

肩に手を置いて言うのであった。

「んで、大丈夫かミラ？」

「ああ。やはり実践が一番の訓練だな」

「んじゃ、イラート海停にもどって報告しようぜ」

「うん。早く魔物を退治したことを教えないとね」

そういい俺達は、イラート海停に戻っていったのであった。

イラート海停に戻ってきた俺達は早速、依頼達成のことを依頼主に報告すると、

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

と、お礼を言われ、報酬をもらってこの依頼は終了したのであった。

第6話　共鳴戦闘と共鳴アーツ（後書き）

次回、初めての空腹。そして、レオンの戦い？

～今回登場したレオンとミラの共鳴（リンク）アーツ、紹介コーナー～

・アイシクルレイン
レオンのアイスニードル＋ミラのスプラッシュ
上空より氷の刃を出現させて、敵を貫くぞ。

・空破絶風撃
レオンの瞬迅剣＋ミラのウィンドカッター
風を纏った強い突きを二回連続で敵を貫き、方向転換も可能。

・烈震天衝
レオンの穿衝破＋ミラのロックトライ
レオンが穿衝破と共にミラのロックトライの力を拳に纏い、敵を撃ちあげる

とまあ、こんな感じになったけど……これでいいのだろうか？と疑問ですね。

第7話　初めての空腹と理性との戦い？そして、これから…

～レオンＳＩＤＥ～

依頼を終えた俺達は一旦、休むためにイラート海停の宿屋に向かうことにしたのだが、その途中に

クラッ

ガシッ

ミラの体が倒れそうになるのを俺は受けとめた。

「ちょ、ミラ、どうしたの！？」

ジュードは倒れそうになったミラの様子を見る。

「熱はない……どんな感じ？」

ジュードが今の状態をミラに聞くと…

「……力がはいらない」

そんな時だ。

グウゥぅう――――

ミラのお腹の虫が鳴ったのは。

それを聞いたジュードはじぃっとミラを見る。

「ねえ……ちゃんとご飯食べてる？」

飯を食べているかを聞くジュードにミラは答える。

「……食べたことはない」

その返答に驚き、声を上げるジュード。

「……一度も？」

「シルフの力で大気の生命子を……ウンディーネの力で水の生命子を……」

「何、言ってんの？」

ミラの言うことの意味が分からないアルヴィンがジュードに聞いた。

「栄養を精霊の力で得ていたってこと。これからは、ちゃんとご飯食べなきゃね」

ジュードはミラにそういうと、ミラは顔を上げていった。

「そうか……これが空腹というものか」

「まあ、力を失った代わりに覚えられたな」

「うむ。しかし、力がはいらない……」

動けなくて困っているミラを俺は、

「動くなよ。……よっこらせっと」

おんぶした。

「なっ！？」

「ほぉ？」

ジュードは俺がミラにおんぶしていることに驚き、アルヴィンは俺を見ながら驚く。

「これで楽だろ？宿屋まで背負ってやるよ」

「うむ。では、レオンの言葉に甘えさせてもらおう」

と、いいながら俺の首に腕をまわして、抱きつくミラ。

「／／／（む、胸が／／／ミラのってやっぱり、大きいな／／／）」

俺は背中から来る柔らかい感触に若干、焦っていた。それに気づいたアルヴィンがミラに言った。

「（ニヤリ）ミラ、それじゃあ、落ちるかもしれないぜ？もっと強く抱きしめてみろよ」

「（？）こう／／／／／／か？」

ミラも少し、顔を赤くし、俺に抱きつく力が強くなる。

「（ア、アルヴィィィィィン！！／／／／）」

「（報酬のサービスさ♪）」

ニヤリと俺を見ながら笑い、ウィンクするアルヴィン。

俺は理性と戦いながらミラを背負って宿屋へ。

「いらっしゃい」

宿屋に付くと、アルヴィンが俺の代わりに飯のことを話しているのだが、

「すまないね。料理人がまだ来てないんだよ」

その言葉を聞いたミラはがっくりと来て、腕から力が抜けた。

「おいおい」

宿の人はミラの状態を見て、驚いている。

仕方ないか。

「すいません。厨房貸してくれませんか？彼女がこんな感じ何で早く、食事をさせたいんですが」

「ああ、構わないよ。その子がそんな状態じゃねえ。厨房は好きに使っていいよ」

「ありがとうございます。ジュード、料理できるか？出来るなら手

伝ってくれ」

俺はジュードに手伝いを頼んだ。

「あ、うん。わかったよ」

それはミラを近くにあった椅子に座らせ、ジュードと一緒に厨房へ。

～数分後～

料理ができた俺とジュードはミラとアルヴィンのいるテーブルまで料理を運んで、食べ始めた。

ミラとアルヴィンは俺達が作った料理を口に運ぶ。

「お、美味い」

「それだ！」

ガツガツ食べていたミラはアルヴィンの「美味い」の言葉に反応し、自分が思っていたことがそれだと言った。

「食事というのは、なかなか楽しい。人は、もっとこういうものを大切にすればよいのだ」

嬉しそうに話をするミラ。そんなミラを見て、何かを考えるジュード。

食べ終わるとミラはテーブルで寝てしまった。そんなミラを見て、俺はアルヴィンに言った。

「アルヴィン。俺は寝てしまったミラを部屋に連れて行ってくる。

勝手に休んでいてくれ」

「あいよ」

そういいながら、俺は再びミラを背負おう。

背負った俺はミラの部屋に連れてきた。部屋に連れてきた俺はミラを降ろそうとするが……

ギュゥ

「？ミラ？」

ミラが俺の袖を掴んだまま、寝てしまっていた。このままじゃ、俺……部屋に帰れない。

かといって、このまま俺が立ったままではミラも寝心地が悪いだろうし……困ったな。

俺が考えていると、

「う……うぅ～ん」

ミラの体が傾き、その力に俺も体が傾き、ベットに寝転がってしまった。

しかも、

「ミ、ミラ！？／／／」

俺を腰から前に手を回し、足が絡み合って俺は動けない状態になってしまった。しかも、抱きついているのでミラの胸が俺の背中に／／／

「ど、どうすれば／／／さすがに、これはまずいぞ／／／」

さすがに、まずい状態に俺は焦ってしまう。

かといって、この状態で寝れるはずもなく……

朝が来てしまった。

朝になるとミラは目を覚ました。

「う、うぅ～ん……ん？レ、レオン？何故私の部屋に？」

「……何でって、食事の後に寝てしまったミラを部屋に運んだのはいいが、俺の服の袖をミラが掴んでいたから、自分の部屋に戻ることができず、さらに寝ていたミラの体が傾いて俺をベットに引きずりこんだ？んだよ」

「……！？……／／／そ、そうか…迷惑をかけたな」

「いや、別にいいよ（ある意味、得したしな／／／）」

ミラが目を覚ましたので俺とミラは1階に行くことに。

1階に行くと、すでにアルヴィンは起きていた。

「おはよう。アルヴィン」

「おはようさん」

「おう、おはよう。レオン？昨日はどうした」

「き、気にしないでくれ…」

俺はアルヴィンから視線を外す。

「ふ～ん？ま、いいか。それよりこれからどうする？」

アルヴィンはミラを見ながら聞いた。

「そうだな……」

ミラが考えていると、

「おはよう。3人とも」

ジュードが起きてきた。

「おはよう。早速だがジュード、これからのことで話がある」

「うん……」

「私とレオンはニ・アケリアに帰ろうと思っている」

ミラが言うと、ジュードは顔を上げた。

「ニ・アケリア？ミラとレオンの住んでいるところ？」

「いや、俺は住んではいるが……ミラの場合は」

「私は祀られている」

えっ？って表情をするジュード。

「そこに帰れば、四大を再召喚できるかもしれん」

「マジでマクスウェルなのか……」

ミラの言葉に、小さく呟くアルヴィン。

「そこでだ、ジュード。私とレオンと一緒にニ・アケリアに行かないか？」

「え？」

「今の君の状況は見から出た錆というものだが、私たちの責任でもあるのも、また事実。ニ・アケリアの者たちに私が口添えをしよう。きっと君の面倒をみてくれるはずだ」

ミラがジュードのことを考えて話をしていると、

「へぇ。意外と考えてやってるのな」

アルヴィンは意外なものを見るようにミラを見る。

アルヴィンに言われてアルヴィンを見ながらミラが話す。

「うむ。お前に、まるで他人事だと言われて、少し反省してみた」

「それにニ・アケリアだったらミラのこともあるし、きっとジュードのこともよくしてくれるだろうな」

俺とミラが言うと、ジュードがミラに聞いてきた。

「ミラ、剣の練習はもういいの？」

「うむ。安心しろ」

「一応、振り回すぐらいはできるようになってるな」

ジュードは少し、考えると言った。

「僕、一緒に行くよ」

「わかった。安心するといい」

「もうちょっと剣の練習してもいいと思うぜ？レオンだけでもいいかと思うが、２人に教えてもらった方がいいぜ？」

「確かにな。俺だけでも教えられるけど、まだまだ、剣の使い方は荒いからな。それに、ニ・アケリアにアルヴィンが来ないと報酬を払えないしな」

「そうだろうな」

話はまとまり、準備ができたら入り口にいるアルヴィンに話しかけて、海停を出ることになった。

準備が終わり、入り口にいたアルヴィンに話しかけた。

「んじゃ、行くとしますか」

「ミラ、確かここから北って言ってたよね？」

「どれくらいかかるんだ？」

「シルフの力で飛んだのなら半日もかからない距離だろう」

……ミラ、普通の人は風の大精霊の力を使わないぞ。

「ハァ。ミラ、そんな言い方じゃ、わかんないぞ？そうだな。ここから近くにあるハ・ミルの村を通って、ガリー間道を抜けた先にあるキジル海瀑ってところを通ればニ・アケリアだ。大体……2日～3日かな？まずは、ハ・ミルに向かおう」

「ああ」

「うん」

「おう」

まずは、ハ・ミルに向かうことになったのであった。

第7話　初めての空腹と理性との戦い？そして、これから…（後書き）

はい、今回は初めての食事と疲れで寝てしまったミラを部屋に連れて行ったが、そのまま一緒の部屋で一夜を過ごしたレオンでした。

次回、ハ・ミルでの出会い

第8話　ハ・ミルでの出会い

～レオンＳＩＤＥ～

あれから俺達は現れる魔物達を退治しながら、ハ・ミルに進んで行っている。

先行して歩く俺とミラの後ろではジュードとアルヴィンが話をしていた。

「ミラがマクスウェルってマジなのか？確かにちょっと変わってるけど、普通の女にしか見えないぜ」

「本当……だと思う。初めて会った時、ミラは四大精霊を従えてたんだ」

「なっ、四大元素を操る最強の精霊たちを！？」

ジュードの四大精霊と言うのに、驚くアルヴィン。

「うん。火のイフリート、水のウンディーネ、風のシルフ、地のノーム……僕もあの時初めて見たけど、あれは四大精霊に間違いない

よ」

「それが事実ならただの女にできることじゃないなぁ」

「うん」

俺はそれを聞かなかったことにして、ミラの横を歩きながら進んでいった。

また少し、進んでいくと動きを止めるミラ。

「ふぅ……歩くというのは、なかなか大変だな。足が太くなってしまいそうだよ」

足の膝に手を置き、言うミラ。

「ミラって、案外お嬢様なんだ」

「お嬢様などではないが、ずっとシルフの力で空を飛んでいたのでな」

「ああ、ミラはいつも歩かないよな。歩くと言ったらウンディーネと俺、ミラの3人で水上を歩く時ぐらいか？」

「ああ、レオンの言ったように私は歩くときは3人での散歩の時だけだ」

さも、普通に言う俺達にジュードとアルヴィンは苦笑いしていた。

「……それは、お嬢様には無理だね」

「四大精霊をコキ使って、バチ当たっても知らねーぞ」

からかうように言うアルヴィンにミラは少し不満そうな表情をして言う。

「なに、少々力はあるが、口うるさい小姑のような奴らだよ。時に私を子ども扱いしたりする。まったく困ったものだよ」

そんなミラの言うことに固まり、唖然とする2人、

「四大精霊を……」

「小姑呼ばわりかよ」

唖然とし、そして、呆れる2人に俺は言う。

「2人とも……慣れろ。これがミラなんだ」

俺がわかりやすく言うと2人は納得という風に笑う。

「何を言うレオン。お前とてよくイフリートと喧嘩をしていたではないか」

ピキッ

ミラの一言がジュードとアルヴィンの動きを止めた。

「火の大精霊のイフリートと……」

「喧嘩だと…？」

2人は信じられない物を見る風に俺を見る。

俺は思わずその視線から目を逸らす。

「お前がイフリートと喧嘩をした矢先にそのあたりの岩場が荒野になりかけたこともあっただろう」

「いや、あれはイフリートと喧嘩していると……つい、テンションが上がって喧嘩がエスカレートしてってな……」

「しかも、その後には2人そろってウンディーネに頭を冷やされたのには笑えたな」

「あ！！！何も聞こえない！！この話は終わりだ！さっさと、ハ・ミルに行くぞ！！」

俺はそのまま、早歩きで歩き始めたのであった。

そして、数時間後、俺達はハ・ミルに到着した。

「果物がいっぱいだ。甘い匂いがするね」

「酒の匂いもな。果樹園でもやってるんじゃないか」

そう、ジュードとアルヴィンがハ・ミルに来た感想を言っていると、

「おやまぁ。こんな村にお客さんとは珍しい」

1人の老婆が近づいてきた。

「おばあさん、村の人？」

「村長をやっとります」

すると、村長は俺を見て驚いた。

「おやまぁ。レオンさんじゃないですか」

「お久しぶりです。村長さん」

ジュードとアルヴィンは俺を見た。

「知り合いだったの？」

「ああ、数年間旅している時、ニ・アケリアに戻る時にここを通ったんだよ」

「ああ、だから、ニ・アケリアまでの道に詳しかったのか」

2人は何で俺は杏奈にも詳しかったのかようやく納得したみたいだ。

「レオンが知っているが、ニ・アケリアへ行く道はこっちであっているか？」

「ええ、合っていますよ。数年前でしょうか。そちらにいるレオンさんが村の近くに群れを作っていた魔物達を退治してくれた時に、ニ・アケリアに戻るためにここに寄ったと言っておりましたから。それにしても、ニ・アケリア……ですかぁ、随分と懐かしい名です」

懐かしがる村長にアルヴィンは聞いた。

「どういう意味だ？」

「忘れられた村の名じゃ。今では数年前にレオンさんから聞くまで、忘れておりました。私も昔……子どもの頃にキジル海瀑の先にあると聞いていましたし……」

懐かしむ村長に俺は聞いた。

「村長さん。昔みたいに村長さんの家で休ませてもらってもかまわないか？」

「おお、ええとも。この村には宿がありませんからの。私の家に空き部屋があるので、使ってくださって構いませんぞ」

「おばあさん。ありがとうございます」

ジュードがお礼を言った。

村の中を見ているとナップルのなった木があった。

「いい匂いの正体はナップルの実だ。甘酸っぱくて美味しいんだよね」

「ああ、それわかる。俺も数年前に村長の家で休ませてもらった時に、ナップルで焼いたパイとかフルーツたっぷりのフルーツポンチをいただいたけど……あれは美味かったよ」

「じゅる……そうなのか」

「ああ、ちょうど食べ頃だな」

「じゅるる……興味深いな」

俺達と説明とナップルを見ながらヨダレを出すミラに俺とジュードは言った。

「おいミラ、ヨダレが凄いことになっているぞ！」

「ミラ、ヨダレがすごいよ！？」

「じゅるる……なぜか……じゅるる……とまらないのだ」

そんなミラを見て、笑い声を抑えるアルヴィン。

「……食事に目覚めちゃったんだね」

「……ああ、これはいいことではあるが……なんていうか……うん、何でもない」

「盗み食いすんなよ。追われる理由が増えちまうからな」

その後、俺達は村長の家で休みんだのであった。

次の日。起きて、部屋から出ると同じように起きてきたミラとあった。

「おはようミラ」

「おはようレオン」

俺達は何も言わず外に出て、村の人達を見る。

そこへ、

「おはよう。何してるの」

ジュードが起きて来て、俺達が何をしていたのかを聞いてきた。

「人を見ていた」

「同じく」

そんな俺たちにジュードは、ふ～んといい、俺達と一緒に村の人達を見る。

「ねぇ、ミラ、レオン、聞いてもいい？」

「ん？」

「何だ？」

俺達はジュードを見る。

「黒匣（ジン）って何？どうしてイル・ファンにあった装置を壊そうとする

の？」

少し、考えてミラは言った。

「あれは人が手にしてはいけないもの。だから、人の手から離さねばならない」

「どうして？」

疑問に思ったジュードが聞いてくる。

「ジュード。このことはお前が聞くことじゃないはずだ。その必要を感じないんだが？」

俺がジュードに言った。

驚く、ジュードだが少し寂しそうな表情をする。

「……信用されてないんだね」

そういう、ジュードにミラがそのことを否定した。

「そうではない。君たち人は赤子が刃物を手に遊んでいたらどうする？」

「え、取り上げるんじゃないかな」

「何でだ？」

今度は俺が聞く。

「それはほら、危ないから。正しい使い方も知らないだろうし、ケガだってするかもしれない……」

「そういうことだ」

ジュードの言うことにミラがそうだというと、少し怒ったようにジュードが言った。

「僕たちは赤子じゃないよ！どういうものかわかったら、ちゃんと自分で考えて間違わないように……」

確かにジュードの言っていることは正論ではある。しかし、俺やミラにとっては

「私たちにとっては同じなのだ」

「だけど、レオンだって人だよ？」

「私とレオンは長い付き合いだ。それにレオンは……」

ミラが何かを言いかけるが、俺を見て、口を閉じた。

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

「……」

黙るジュードはミラの後ろ姿を見ている。

「世界を守るのだ。だからこそ、必ずクルスニクの槍は破壊する。それが私の使命だ」

「そして、俺の使命はミラを守ること。言ってみれば騎士のような

ものかね？」

「ああ、だが、私はレオンのことを最高の相棒だと…思っているよ／／／」

自分でも恥ずかしいことを言っていると思っているミラは顔を少しだけ赤くした。それに釣られて俺も赤くする。

「使命……」

「安心しろ、ジュード。ニ・アケリアに着けば、君には無縁の話だ」

「そうだな。ジュード。お前はこれからの自分のことを考えているんだ」

話をしていると村の入り口が騒がしくなってきた。

「何だ？」

見てみるとラ・シュガルの兵士がいた。

そこへ、1人の大男が……。

「（ジャオか。相変わらず、でかい図体しているな）」

実は俺、少しジャオとは面識があったりもする。

そこへアルヴィンが合流してきた。

「どうやら、これ以上のんびりしているわけにはいかなそうだ」

「やっぱり僕たちを追ってきたんだよね……」

「さてな。国外捜査には早すぎる気もするけど」

「さすがに尋ねられる状況じゃないしな。見つかる前にさっさとこの村を出よう」

俺の言うことに3人は頷き、アルヴィンがあることを聞いてくる。

「ああ、村の西に出口があったが、レオン、そこがキジル海瀑はその出口を使えばいいんだろ?」

「そうだ。その近くに小さな小屋があっただろ?その左にあるのが出口だよ」

そのまま、俺達は走って西側の方へと向かった。

西側の出口のすぐ近くに実を隠す俺達。隠れる理由は出口にラ・シュガルの兵士がいるからだ。

「もう兵士がいる」

「どうすっよ」

アルヴィンが俺とミラを見る。

そこで俺は剣を抜いた。

「2人程度なら俺がすぐに片付けられる。俺が行こう」

「……なんともまあ、短い作戦会議だこと」

いざ、俺が兵士たちの所へ行こうとすると、ジュードは自分の後ろに気配を感じて振り向いてみると……そこにはぬいぐるみを持った少女が立っていた。

そう、エリーゼとティポだ。

「あ、あの……」

「女の子？」

「え、えと……なにしてる……んですか？」

視線を逸らしながら俺たちに聞いてくるエリーゼ。

「うむ。邪魔な兵士をどうするか考えて、レオンが気絶させることにしたのだが……」

何も隠さず話すミラにジュードが言った。

「……直球だね」

「それがミラですから」

と、俺が返す。

エリーゼは兵士の方を見て言う。

「あの人達、邪魔……なんですね」

エリーゼは寝ている？ティポに視線を送ると…

ボヨォォ～ン

目を開けて動いたティポ……ぬいぐるみに驚く俺達。俺も実物を目の前で見たのが初めてだからびっくりした。

そのままティポは兵士たちのところまで飛んでいき、兵士たちを怖

がらせる。

「うわ！なんだこれ！ひぃ！」

「これは……」

「どうなっているの？ぬいぐるみが？？」

エリーゼを見ながら驚くジュード

そこへ、

「ここで何をしておる」

ジャオが来た。

「こら、娘っ子。小屋を出てはならんというに」

ジャオの言葉を聞いて、寂しそうにするエリーゼ。

「ラ・シュガルもんめ。勝手な真似を」

ジャオはラ・シュガルの兵士たちのところへ向かった。

その隙にエリーゼは広場の方へ走って行った。

そして、兵士たちを倒したジャオは俺達の所へ戻ってきた。

「ん？よく見たら……レオンではないか。久しいな」

ようやく俺に気づいたのかジャオが話しかけてきた。

「おう、久しぶりだなジャオ」

「ああ、お主も元気で何よりだ。おっと、こんなところで挨拶をしている暇ではなかったな。レオン、娘っ子はどこへいった？」

聞かれた俺は指をさして言う。

「広場のほうへ走っていったぞ？」

俺の言葉を聞いたジャオは焦り始めた。

「なに？い、いかん！」

「お前たち、よそ者だな。なら、とっとと行ってしまえ。レオン、今度時間ができたら一緒に酒を飲もうではないか」

「ああ、そうさせてもらうさ」

「ではな」

そういい、ジャオは走って広場の方へ向かった。

「よくわかんないけど、手間省けたみたいだな」

「なら、早く出よう」

そのまま、俺達は村を出て、キジル海瀑へ向かうことに。

第8話　ハ・ミルでの出会い（後書き）

エリーゼとティポ登場！が、仲間にはならず。鳴るのはもう少し先になりそうです。
ゲームの方ではエリーゼには助けられましたよ本当に……。
悲しい過去を持ったエリーゼに作者は泣きそうになったよ。
早くエリーゼを仲間にしたいな♪

次回、色気ムンムンなお姉様がご登場。そして、戦闘もあるよん。

第9話　ミラの嫉妬（前書き）

前回の後書きに書いた通り、色気ムンムンなお姉様が登場します。

第9話　ミラの嫉妬

～レオンＳＩＤＥ～

あの後、すぐのハ・ミルを離れた俺達は寄り道をせず、キジル海瀑へ来ていた。

キジル海瀑に入ると、綺麗な海辺を思い出させるほど綺麗な小さな湖がある。

「このキジル海瀑を超えれば精霊の里、ニ・アケリアか。連中も追ってきてないな」

追手が来ないことに安心するアルヴィン。しかし、そんな中ジュードは浮かない表情をしている。

「村の人たちに悪いことしちゃったね……。よくしてくれたのに」

人の心配が多いジュードにアルヴィンが言う。

「ラ・シュガル兵が来てるんだ。逃げるが勝ちってな」

「そうだな。それに、どうするかを決めたのは村長たちだ」

そんな冷たい風に言う俺やアルヴィンに少し怒った表情をしてジュードは俺たちに言う。

「僕らを守ってくれたのかもしれないんだし、そんな言い方しなくても……」

ハ・ミルの住民達を心配するジュードにミラが言う。

「気になるのか。ならジュード、君は戻るといい」

そういい、歩き出すミラ。俺もそれに続いて歩き出す。

「短いつきあいだったが、色々と感謝している」

「元気でな」

そう、簡単に別れを告げる俺たちの態度にジュードは怒った。

「どうしてそうなの？」

歩くのをやめてジュードを見てミラは言う。

「……もっと感傷的になって欲しいのか？それは難しいな。君たち人もよく言うだろう？感傷に浸ってる暇はない、とな」

「……使命があるから？」

「そうだな」

「やるべきことのためには感傷的になっちゃいけないの？」

「人は感傷的になってもなすべきことをなせるものなのか？」

ミラの問いに首を振るジュード。

「わからないよ。そんなの……。やってみないと……」

ジュードの返答に俺が答える。

「だったら、やってみればいいじゃねえか」

「え？」

「そうだな。やってみればいい。そうすれば、君のなすべきことを、そのままの君で……それで答えが出るかもしれない」

俺に続いてミラがジュードに言うとジュードは少し考えるように言った。

「僕のなすべきこと……」

俺とミラは2人から少し離れ、ジュードの心の整理を待った。少しして、ジュードの考えがまとまったのかは分からないが、アルヴィンと一緒に近づいてきたのを確認して俺達はキジル海瀑の奥を目指す。

奥まで進む途中、大きな滝のある場所まで来ていた。

「もうすぐニ・アケリアか～。どんなところなんだろう。いいところなの？」

「うむ。私は気に入っている。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。落ち着けるところだ」

「ああ、それに空気が美味しいし、争いがない村でもあるな。俺もそこに住んでから村の住民の人達には世話になったしな」

俺とミラはニ・アケリアのいいところをジュードにいう。

「へぇー」

笑顔のジュード。ニ・アケリアを楽しみにしているみたいだ。

そんな俺達を見ながらアルヴィンが言う。

「ちょっと休憩。岩場歩きで、足痛ぇ」

「到着してから休めばいいだろう？」

「そう言うなって。ニ・アケリアは逃げやしないさ」

そういいながらジュードの肩に手を置き、腕を回すアルヴィン。

「な？休もうぜ？」

そう言われてジュードは、

「え、うん。じゃあ、そうしようか」

休むと言って休むことになった。

俺とミラは少し2人から少し離れた場所から2人を見る。

「ふ。アルヴィめ。要らぬ気を回すヤツだ」

そういい、滝を近くで見ようとするミラが俺から離れ、少し目から逸らすと、

「なっ！？」

「ミラ！」

何かリリなのに出てくるバインドのようなものに拘束されたミラ。
それを助けようとしてそれに飛びつこうとした俺だったが……肝心なことを忘れていた。

バシャ！

俺の目の前に凝縮された水が俺を吹き飛ばした。

「ドワ！？」

バシャァァン！

そのまま吹き飛ばされた俺は滝の水でできた川に落ちた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

くっ！油断した！まさか、私が精霊術で拘束されるとは！しかも、私を助けようとしたレオンが吹き飛ばされるとは……レオン、無事でいてくれ！

「お疲れかしら？油断し・す・ぎ」

私は目の前に私を精霊術で運ばせた女に問いかけた。

「何者だ」

「うふっ。教えてあげない。けど、私が吹き飛ばした彼だったら知っているかもね」

何？レオンがこの女と知り合いだと？むぅ……何か胸の中でざわつくな。イライラする。

すると、女がいきなり私の体を触り始めた。

「なんのつもりだ」

私は少し、気色悪く感じたが、女は私の言葉を無視して、体を触る。

「どこかしらね？あなたの大事なものは」

女は私が持っていた剣と『クルスニクの槍』の『カギ』を投げ捨てた。おそらくこいつの言っている私の大事なものとは…『カギ』のことだろうな。

ん？ちょっと待て！それはレオンから貰った！大事なペンダント！

「これは……ふふ、彼からのプレゼントかしら？羨ましいわね……」

女はそれも投げ捨てた。私の大事なものを……よくも！

「渡してもらうわよ」

女は本を私に突き付け、言ってくる。

「断る」

私は即座に却下した。

女は私の言葉を聞くと、本を開き、その本は輝き始めた。

「う」

すると、私を拘束していたものが強く絞めつけ始めた。

「もう果てそう?」

「言っておくが……まだ私の手の内にあるとは限らないぞ」

「そう、そういう態度なのね?」

そう、女がいい、再び本が輝き、絞めつける力が強くなる。

「ぐあ！」

「どう？痛いでしょ？素直にありかを言った方がいいわよ？」

私に『カギ』のありかを聞いてくるが……私は絶対に言わない！

「無駄だ。私にとって痛みは恐怖にならん」

「なら、一緒に来てもらうわ」

女がそう言っていると、私の状態に気付いたジュードとアルヴィンがこちらに来た。

「誰？」

ジュードが聞くと、女はジュード達を……いや、視線はアルヴィンを見ているな。

「今は、この娘にご執心なのかしら？」

「放してくれよ。どんな用かは知らないが、彼女、俺の大事な雇い主の１人なんだ」

「近づかないで、どうなるか、わからないわよ」

アルヴィンを見ながら本を構える女。私はこの女が誰の差し金か気になり、聞いてみた。

「誰の差し金だ？それと、お前の名も聞かせてもらおうか」

「女に名前を教えるなんてつまんない。教えるなら彼の方がいいわね。それより、あなたをイジメる方が楽しそう」

女は私を見ながら言う。

「後でもっと遊んであげるから楽しみにしてなさいね」

そう、女が言った時だ。

――――――――――誰が誰で遊んで楽しむ……だって？――――――――

どこからか声が聞こえてきた。この声は……

「誰？姿を見せなさい！」

女は周囲を警戒し始めた。ジュード達もそれ聞いて、周りを見る。

すると、ジュードが何かに気づいたのか私に聞いてきた。

「ミラ！レオンはどうしたの！！」

「レオンは私を助けようとしてこの女の精霊術で吹き飛ばされた」

「何だって？！」

驚くジュード。アルヴィンまでも驚いている。

――――――――――ミラ、そこを動くなよ……でないと

女の後ろに人影が。

「はっ！殺気！……なっ！？」

女は自分の後ろから殺気を感じて振りかえるとそこには……

「お前を吹き飛ばすかもしれないからな」

水に濡れているが、体からバチバチと音を鳴らしている。これは……雷か？

「ふん！」

レオンは腕を振りかざすと女を吹き飛ばした。

「きゃあああああああ！！」

吹き飛ばされた女は悲鳴を上げたながら水面に落ちて行った。

レオンは術が解けて落ちそうになる私を腕の中で支えた。

「無事か？」

「レオンこそ、大丈夫なのか？」

私はレオンの身体を見るが、見たところ外傷はないな。よかった。

「ミラ！レオン！無事？」

レオンは私を抱えたまま、下に降りると私たちを心配していたジュードとアルヴィンが近づいてきた。

「大丈夫？」

「ああ、レオンが助けてくれたおかげでな……それよりも…」

私は剣を構える。ジュード達も武器を構える。

その先にはさきほどのやり取りで寝ていた魔物を起こしてしまった

のか、少し興奮している魔物は私たちを威嚇する。

戦闘が開始しそうになると、レオンが私たちの前に立つ。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

女……プレザの水の精霊術で吹き飛ばされた俺は雷化をして水の中から脱出し、プレザの後ろを取るとプレザを吹き飛ばした。

プレザが吹き飛ばされて拘束が外れたミラをお姫様抱っこをして下に降りた。

しかし、俺達のせいで寝ていた魔物を目覚めさせてしまい、機嫌が悪そうだ。

そこで、俺はミラ達の前に立つ。

「レオン？」

「こいつは俺にやらせてくれ。少し、イライラしててこのイライラを収めたいんだ」

ミラは俺を見ながら、考えている。そして、

「わかった。が、後であの女のことを聞かせてもらうぞ」

「（汗）わかった」

凄い剣幕で言ってくるミラに恐れながら、俺は魔物……グレーターデモッシュと対峙することに。

なったのだが、

先ほど、述べたが今の俺は雷化の状態だ。簡単に言えばＮＡＲＵＴＯの雷影とネギま！のネギの雷化を足した感じだ。

パワーは雷影の雷化＋スピードはネギま！のネギの雷化の状態であるので、はっきり言うが……グレーターデモッシュなんて敵じゃな

い。

てな、わけで

「消えろ」

シュン！

ドス！バキ！グチャ！ドシュ！バキン！ドカァァン！

殴る・砕く・踏みつぶす・切り裂く・吹き飛ばす・爆発する……雷化状態でこれをしたらグレーターデモッシュの姿はあとかたもなく消え去っていた。

『……』

その光景を見ていたジュードとアルヴィンは驚いて声も出なかった。

ミラは俺のこの状態を前に見たことがあるので驚いてはいない。

そして、戦闘が終わった後、ジュードとアルヴィンは先に行くといい俺をおいてけぼりに、俺はミラに話をしていた。

「さて、レオン。先ほどの女とはどういった関係だ？」

「いや、彼女とは昔、旅をしていた時にあったんだ。その時は敵と間違われて彼女の上司とその仲間と戦うことになって……それだけだよ」

俺は汗をかきながらもミラに説明する。

「ほぉ？その割にはあの女はお前のことを詳しく知っていそうだったが？」

「あ、いや……それは～」

視線が泳ぐ俺の首をミラが掴んだ。

「言え」

顔を近づけるミラ。

「う、うぅ……／／／」

ミラの顔が至近距離なので、ミラの唇と俺の唇が近づいている。

「ほ、本当だって！……ただ、彼女は昔、ある男に酷い裏切りを受けて仲間達が死んでしまったとかいっていたんだ。少し、相談に乗っただけだよ」

「本当だな？」

「本当だよ」

俺がそう言うとミラは手を話した。心なしか、少しミラの顔を紅い。

「で、では行こう。ジュードとアルヴィンも待っている」

ミラは早足で、2人のもとへ向かった。

俺もそんなミラの後を追っていった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

レオンにあの女とどういった関係かと聞いた時、やはり、胸が苦しくなった。これは一体何なんだ？

私が聞くとレオンは話してくれた。しかし、まだ何かを隠している気がして顔を手で掴んで、顔を近づけて聞いてみた。

すると、あの女には前に遭った時に、相談をされたという。嘘か本当かと言えば本当だろうな。レオンの目を見ればわかる。

顔を離し、顔を掴んだ手をどけて……少し私は恥ずかしい…のか？顔が紅くなるのを感じた。

そして、私は気づいた。……そうか、このような気持ちが嫉妬というものなのだな。本で読んだことがある。

人とは自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと……これとは少し違う気もするが、私は１０年前からの付き合いのあるレオンが他の女と仲良く話したり、レオンのことを知っている女がムカついているのは……こういうことか。

つまり、私は……他の女にレオンが取られたくないから嫉妬している……ということなのか？よくわからないな。

きっと、旅をすれば知る機会があるだろうな。うん。きっとそうだ。そうに違いない。

私は１人で納得していると、レオンがいつの間にか私を追い越していた。

「お～いミラ。大丈夫か～？」

レオンが私を心配して、声を掛けてきた。

「ああ、大丈夫だ。すぐに行く」

私は考えを忘れさせて、レオンの元へ走って行った。

第9話　ミラの嫉妬（後書き）

うーむ。プレザの登場でした。そして、そんなプレザがレオンの事を知っていることに嫉妬？しているミラ。ようやく自分のこの胸に来る苦しさがわかったようです。

自分がレオンのことが好きと言うのには気づいていない模様。嫉妬の意味を知っていても自分がレオンのことを好きとは思えないとは……これはこの後に仲間になるジュード君の幼馴染に期待しよう。

きっと、そういうことは幼馴染がしっているはずだ。それまで頑張れミラ。

第１０話　ニ・アケリア……そして、ミラの社（前書き）

今回はバカ巫女が出てきますｗ
ＯＰにも出ていないある意味可哀想なキャラですよねｗ
ガイアス達は全員ＯＰに出てきたのに、何故か出ないイバル

第１０話　ニ・アケリア……そして、ミラの社

～レオンＳＩＤＥ～

あの後、ジュードとアルヴィンと合流し、ジュードはアルヴィンがプレザと知り合いなのか聞いたり、色々と話しながら目的地であるニ・アケリアに到着した。

ニ・アケリアはいつもと同じように穏やかである。

「ここが……」

「へえ、意外と普通の村だな」

アルヴィンはニ・アケリアの村を見て、感想を口にいった。

「お前、もしかしてミラや俺がいるところだからって凄いのを想像してたろ？」

「まあ、普通だったらそう思うのが普通でしょ？おたくらが住んでいる村だからもっとおかしな所かと思ってたぜ」

アルヴィン……それはひどい言い方だな。まあ、アルヴィンの言っていることは正論であるから反論できないな。

俺がアルヴィンが話をしているとミラが村商人に近づく。

「すまない。イバルはどこにいる？」

村商人に聞くと、

「ん？イバルならマクスウェル様を追って……」

村商人は立ち上がりながら自分に尋ねてきたミラを見て驚く。

「マ、マクスウェル様？！」

村商人はミラを見ると片足を地面につけ、拝むような姿勢になる。

「うむ。今戻った」

すると、村の人達はミラの姿を見ると近づいてきた。

「あ、わわ、私なんかにお声をかけてくださるなんて」

村商人はミラに声をかけられて感動？しているのかそれとも驚きすぎているのかわからないが、体が震えている。

「やっぱ、本物なんだよな」

村の住民の様子を見て、改めてミラがマクスウェルだと再確認するアルヴィン。

そして、近づいてきた村の住民達は村商人と同じように拝める姿勢になる。

「ミラ、すごいんだね」

その光景を見て、ジュードは言った。

「ちょっと疑ってたんだがな」

アルヴィンもいう。

「緊張するな。普段のとおりにしていればいい」

ミラは村を見て言う。

「イバルは、今いないと言ったか？」

「は、はい！いつもより戻りが遅いと心配して……。私たちはレオンがいれば問題ないだろうと言ったら、余計に心配だ！と言って…マクスウェル様をお探しに行きました」

村商人がそう言うと俺とミラは呆れたように言う。

「そうか。相変わらず短気だな。手を止めさせてすまなかった」

「ったく。イバルの奴、ミラから村のことを頼むって言われているのに何、使命を投げだしてミラを探しに行くんだか……その間に村が襲われたらどうするんだよ」

「そういうな。イバルは私を心配したのだ」

俺は、それもそうかっといい、ミラと共に歩き出す。それに続いてジュードとアルヴィンモ歩き出す。

歩き始めるとミラの姿を見るたびに村の住民が拝める姿勢を取る。

「私は、これからすぐに社で再召喚の儀式を行う。レオン、わかっているな？」

「ああ、世精石を集めればいいんだろ？」

「そうだ。頼む」

俺はミラに頼まれたことをすることになるのだが、アルヴィンが言ってきた。

「それなら、村の人に頼んでもいいんじゃないの？」

「さっきのを見たろう？巫女やレオン以外は日頃、私とあまり接してないからな。あれでは全く話にならない」

「というわけだ。俺は行くぜ」

俺はミラ達の前から消える。

～1分後～

シュタ！

「集めてきたぞ」

『はや！？』

俺は世精石を４つ集めるとすぐにニ・アケリア参道の入り口で待っていたミラ達の前に現れるとジュードとアルヴィンがツッコムを入れてきた。

「うむ。さすがレオン。では、行こう」

「そうだな」

俺とミラは歩き始めるが、

「……なあ、ジュード。俺達の反応は普通だよな？」

「……うん。僕たちの反応が普通だと思う。けど、ミラとレオンだし」

「……なんか、説得力のある言葉だな」

2人はそんな会話を終えると、俺とミラの後を追って走ってきた。

ニ・アケリアから参道を魔物を倒しながら進んでいき、ようやくミラの社に到着した。

「この奥だ」

「ミラは、ここに住んでいるの？」

ジュードは社を見て、ミラに聞く。

「住んでいる、か。そう考えたことはないがそういうことになるか」

「何もないところだなぁ。退屈じゃなかったのか？」

「私の使命においては、なんの問題ない」

「と、いいながら隅に俺の家に来ては本を読んだり、少し遊んだりしたよな」

俺がそういうとミラは少し顔を紅くして言う。

「あ、あれは珍しい書物がレオンの家に有ったりしたからだ」

「……遊んでいる時、楽しそうにしててよく言うな（ボソ）」

ミラに聞こえないように呟いた。

「さ、さあ、儀式をすませよう」

ミラは社の中に入り、その後俺達も入っていく。

中に入った俺は、集めた世精石を決まったところに設置した。

「ミラ、準備できたぜ」

「うむ。すまないな」

そういうと、ミラは四大精霊を召喚するための召喚陣を描き、発動させるが、

バチィン！

「くぅ！」

体が傾くミラを即座に支える俺。

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

悔しそうなミラ。俺は少し心が痛みを発した。四大がクルスニクの槍に捕らわれるのは知っていた。が、それを助けると物語に大きな、問題を残してしまうので、仕方なく見逃した。

だが、それがミラを傷付けていると思うと心が痛い。

そんなときであった。

「ミラ様！」

ジュードとアルヴィンの間を通り、膝をつき、ミラにいう……イバ

ル。

「イバルか」

「ミラ様。心配いたしました」

イバルは社の中に粉々になっている世精石を見て言う。

「これは四元精来還の儀？何故今このような儀式を。しかし、これは……イフリート様！ウンディーネ様！」

社の中で四大達の名前を呼ぶが一向に現れないのに疑問を持ったイバルはミラに聞く。

「ミラ様。一体何が……」

そして、全てを話した。

「そんなことが……」

話しを聞いて驚くイバル。

「んで、精霊が召喚できないのってそいつらが死んだってこと？」

アルヴィンが俺たちに聞く。

「バカが。大精霊が死ぬものか」

「バカはお前だイバル。俺やミラ、お前は知っていて当たり前だが、ジュードやアルヴィンがそんなことを知っているはずがないだろ。少しは考えて物事を言え」

俺がそういうとイバルは怒り始め。

「うるさい！」

その後、イバルが大精霊たちの事を話した。

イバルの話を聞いたジュードは考え始め、話した。

「だったら四大精霊は、あの装置に捕まったのかも」

「バカが！人間が四大様を捕えられるはずがない！」

……イバルの奴はいつも、できないだの、何だのいうな……ウザいな。

「けど、その四大精霊が主の召喚に応じないんでしょ？ありえないことでも、他の可能性がないなら、真実になり得るんだよ」

「何もない空間で、卵がひとりでにつぶれた場合、その原因は卵の中にある……『ハオの卵理論』ってやつだな。さっすが優等生」

「それに、この世にはこういう言葉もある。『ありえないなんてことはありえない』だ。イバル、お前は何でもかんでもありえないだの、不可能だとか多すぎるんだよ。頭が固い証拠だぞ」

俺とジュードのいうことを聞いたイバルは、

「ぐぬぬぬぬ！！！！」

拳を力いっぱい握っていた。

「四大を捕えるほどの黒匣（ジン）だったというのか。あの時、私はマクスウェルとしての力を失ったんだな」

ミラはイル・ファンの研究所での事を思い出している。

俺は心配になり、ミラの肩を揺する。

「ミラ……」

「！　あ、ああ」

俺に呼ばれて、大丈夫だという風に俺を見る。

そして、ミラは立ち上がる。俺も立ち上がってミラの横に立つ。

最後には、

「さぁ！貴様たちは去れ！ここは神聖な場所だぞ！ミラ様のお世話をするのは、巫女である俺だ！レオンではない！」

ミラの横にいる俺にいっているような気がするが、無視するか。

そんな自分が特別だと言うイバルのうるさいにミラがイバルに向かって言う。

「イバル、お前もだ。もう帰るがいい。私はレオンと話がある」

「は？」

不思議そうに声を上げるイバルはミラを見る。

「そうだな、有り体に言うぞ。うるさい」

「な……」

ガガーン！

ショックを受けるイバルは、涙を浮かべながら力が無いみたいに歩き始めて、ジュード達と一緒に出て行った。

3人が出て行くのを確認したミラは胸元からクルスニクの槍のカギを取りだした。

「四大を救い出すのにも、これがなければならない、か。キジル海瀑の女や……ハ・ミルのラ・シュガル兵。私を追う理由はやはりこれだろうな」

「ああ。ただ、奴らはそのカギがどういった形状をしているのかがわからないからな。キジル海瀑での彼女がそうだろ？俺は見ていなかったが、それを投げ捨ててたんだろ？」

「うむ。あれはある意味で助かったと思っている。もし、あの女がこれがカギだと知っていれば今頃は私の手元になかっただろう」

ミラは再び、胸元にカギを仕舞うと剣を抜いた。

「このままでやるしかないな」

「無論、俺も手伝うさ。だけど、クルスニクの槍の堅さは見た時にわかったが、俺の最大精霊術でも、剣術でも壊せないほど頑丈に見えたぜ」

そう、初めてクルスニクの槍を見た時、目でしか見てないが物質がかなりの堅さを誇るものだとはすぐにわかった。例え、インディグネイションを放っても壊すことができるかできないかといったら五分五分だと思った。

「とにかく、今のままでやるよりかはまだ、四大を解放して破壊するのが一番の安全策だと思うが…」

「ああ、どの道、またイル・ファンに向かうしかないな」

「とにかく、外に出るか。俺はまず、家に帰ってアルヴィンに報酬を渡さないとな」

「うむ。そうしよう」

そういい、俺とミラは社を出ることにした。

「あ、ミラ、レオン。どうしたの?休んで話をしてるんじゃないの?」

外に出ると、ジュードがいた。

「こっちの台詞だ、ジュード。まだ村に戻ってなかったのか」

「そうだぞ?村で休んでいればよかったのに」

俺とミラは社の外で待っていたジュードを不思議に思い、そういった。

「ふむ。では、これから村の者に君のことを頼みに行くとしよう」

そういうと、ジュードは何か元気がない表情をする。

「どうした？村になじめるか心配なのか？」

「ううん。そうじゃなくて。　ミラとレオンは……これからどうするの？　クルスニクの槍を壊しに、イル・ファンに戻るの？」

「ああ」

「そうだな」

「四大のことと、あの場にいたマナを吸い出された人間達を考えると……クルスニクの槍とは、マナを集めて使用される兵器なのだろう。あれが今すぐに使われることはないだろうが、やつらのマナ確保は続くと考えているからな」

「それを止めるためにも四大を解放するにも結局はもう一度、イル・ファンに戻る必要性があるってことだよ」

俺とミラの説明とこれからのことを聞いたジュードは俺たちに聞いてきた。

「でね……それ、ふたりだけであるの？」

「回りくどいぞ。ジュード。何が言いたい？」

「言いたいことは、はっきりいいな」

「……ミラって、どうしてそんなに強いのかなって」

「君は、私に興味があるんだな」

ピクッ

俺はミラの言葉に反応した。ふ、ふふふ……。

「！」

顔を紅くするジュード。

「強い、か。考えたこともないな。私にはなすべきことがある。私

は、それを完遂するために行動しているだけなのだから」

ミラが言うと、ジュードは語る。

「で、でも今の力で……レオンと2人でじゃ無理なんじゃない？死んじゃうかもしれない」

ジュードの言っていることは正しい。だが、そんなことを言われて止まるミラではない。

「だが、やらねばなるまい。もう決めたことだ」

「……やっぱり強いよ。ミラは……」

「ふむ。納得したのか？では村に……」

ミラは村に行こうとするがジュードがミラの名前を呼んだ。

「ミラ！」

「ん？」

それに立ち止まるミラ。

「僕も行っていいかな。一緒に」

予想外なことにミラは少し、考え、ジュードにいう。

「君は、私たちに関わって普通の生活を失っただろう?後悔していたのではないのか?」

「うん……。ホント言うと少し。でも、いくら後悔したって戻れないものは戻れない。だから、今の僕の力でもできること……ミラの手伝いをしようかなって」

ジュード……お前、その言い方だと……いや、気づいてないからいいか。

「君は本当にお節介だな」

「そ、そうかな」

「ミラはな？お前を巻き込まないように気を遣って後から社を出たんだぞ？」

俺がジュードにいうと、ジュードは驚いていた。

「そうだったの？」

ジュードはミラを見る」

「うむ。君たちとの短い旅路で学んだ気を遣う、というヤツだ。なかなか難しいな」

腕を組みながら言うミラ。

「とにかく村に行こう。君に見つかってしまった以上、急いで発つ意味も弱くなってしまったしな」

「うん」

そういい、先を歩くミラ。

ジュードも歩き始めようとするが、

ガシッ！

「え？」

ジュードは自分の肩を掴む俺を見る。

「ジュードくぅぅん？一緒に来るのはいいけど……ミラに手を出したら……俺の剣の錆にするからね？」

「う、うん。わかった……（汗）」

「ならいい」

俺はそういい、ミラの後を追う。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ジュードＳＩＤＥ～

レオンってやっぱり……ミラのことが好きなの……かな？

ミラもレオンのことは信頼しているみたいだし……ハァ～

僕はため息をつきながらも２人を後を追った。

第１０話　ニ・アケリア……そして、ミラの社（後書き）

次回は……あの娘っ子を連れていきますよ！
ああ、早く仲間にいれたいな～

第１１話　エリーゼとティポ、再登場！

～レオンＳＩＤＥ～

ミラの社から出た俺達はそのまま、ニ・アケリアに来ていた。

入り口にはアルヴィンが座って待っていた。

「よう。遅かったな。ミラとレオンも一緒か」

アルヴィンは立ち上がり、ジュードを見ながら言う。

「身の振り方、決まったんだな」

ジュードはアルヴィンの方を向いて答えた。

「うん。ミラとレオンと一緒に行くことにしたよ」

ジュードの返答が予想外だったのかアルヴィンは驚いた表情をするもすぐに元の表情に戻った。

「どういう心境の変化だよ……後悔するんじゃないのか？」

「うーん……でも、もう決めたんだ。ミラとレオンの手伝いをするって」

「あっそ」

ジュードの言うことに素っ気なく言うアルヴィン。そんなアルヴィンに俺は近づく。

「アルヴィン。報酬を払いたい。俺の家まで来てくれ。俺の家はすぐそこだ」

俺が指差すところには普通の家よりも大幅に大きい家が立っていた。

「それがさ、村のじいさんに払うって言われたんだけど？」

「何だって？」

「村の人が？」

「ああ。マクスウェル様を守ってくれてありがと～ってな」

俺とミラにはそういうことを言う人に心当たりがいた。

「ミラ、そのじいさんって……」

「ああ、十中八九長老だろうな。いらぬことを」

俺とミラはため息つき、俺はアルヴィンに言った。

「アルヴィン、その謝礼は俺のじゃねえ。元々、俺が払うって依頼だったのに長老に出してもらっても意味ないぜ」

「いや、それだったらミラから、あのじいさんにサンキュって言えば、それでいいだろ。じいさんもじいさんなりの誇りがあんだよ。断るのも失礼ってもんだ」

ま、まあ、確かにそうだけどさ……けど、なぁ……。

「……そういうものか？」

「そういうもんさ」

そういうアルヴィンであったが、俺たちにこう言ってきた。

「さてと、じいさんに待てと言われて待ってはいるものの、一向に来なくてな」

「村にいるんだよね？」

「だったら、おそらく集会所だろ。そこへ行ってみよう」

４人で集会所へ行くのであった。

長老は案の定集会場にいた。

「マ、マクスウェル様！レオン！それにお二人も。お待たせして申し訳ありませんっ！」

「構わぬ。それよりアルヴィンへの謝礼を用意していると聞いたぞ」

ミラの質問に長老は答える。

「はい。私たち、戦うことは無理でもマクスウェル様のお力になれるようにと……以前、村のみなで出し合ったお金がありましてな」

「チョイ待ち。俺、そんなことしてないけど？」

そう、俺はそんなことを言われたことがない。お金を出し合うことさえ。

「レオン。お主はこの村に住み始めてから巫女でもないのにマクスウェル様の世話やこの村に近づく魔物を退治してくれていた。村のみなでレオンからはお金を出してもらうことはやめておったのだ」

「なるほどな……そういうことか」

納得したが、俺は言うことがあった。

「しかし、元々アルヴィンの謝礼……報酬は俺が払う事になってたんだが……」

「それも同じだ。お主にはそういったことでは苦労を掛けさせぬようにとも村のみなで決めた。まあ、イバルはお主の事を嫌って、出させればいいとか言っておったがな」

……イバル。お前、杏奈性格の癖にやることが小さいんだな。

「……そうか」

ミラも長老の話を聞いて、納得したようだった。

「言ったろ」

そんなミラにアルヴィンが本当だったろ?という風に言う。

「お前たちの誇り、ありがたく受け取るとしよう」

そして、長老は謝礼金をアルヴィンに渡すのであった。

「ではな。アルヴィン。色々世話になった」

「うん。ありがとう」

「また、縁があったら会おうぜ」

「ああ。それじゃあな」

俺達のお礼を言われたアルヴィンはそのまま、集会所を出て言った。

「……なんだかあっけないね」

「傭兵というものはああいうものなのかもしれんな」

「まあ、稀に依頼の雇い主を気にいってその人にほかに仕事がないか？とかいうのもいるけどな」

「そうなのかもね」

俺達が話をしていると…

ガシャ

集会場のドアが開き、イバルが入ってきた。

「ミラ様！」

ミラを拝み、ミラに聞いた。

「またいずこかへ赴かれるのですか？」

「ああ。留守を頼む」

「自分も、ご一緒いたします！　こんなどこの誰ともわからんヤツとレオンにミラ様のお世話を任せられません！」

ミラは俺の名前を聞いた辺りで表情を変えた。……何でだろうか？

「イバル！お前の使命を言ってみろ」

少し怒った表情をするミラにイバルはうろたえる。

「え、あ、自分の使命はミラ様のお世話をすること、です」

「それだけか？」

俯きながらイバルは答えた。

「……戦えないニ・アケリアの者を守ることです……」

「理解したか？私の旅の供はレオンとジュードが果たしてくれる。
それに私の世話はレオンでもできる」

俺の名をミラが言うとイバルが俺を睨む。

「お前は、もうひとつの使命を果たすんだ」

「しかし、こいつとレオンのせいでミラ様は精霊たちを！」

「おい。いい加減にしろ。何で俺が四大達を危険にさらす事をしな

いといけない。ジュードだって元々は俺達のすることに巻き込まれた一般人だぞ?自分の意見が通らないからってジュードや俺に当たるな。ガキかてめえは」

俺はイバルの態度に限界がきたのか、本人の前で言う。

「それに仮にお前がミラの供をしても落ち着きのないお前がいると余計にミラのすることの邪魔になる。敵に見つかって捕まり、人質にされるのが落ちだ」

「何だと!?お前、調子に乗るなよ!俺はミラ様の巫女だ!」

「巫女巫女巫女ってお前は自分が特別だと思っているのか?ミラに頼まれていた使命を投げだして、いくら帰りが遅いからってニ・アケリアの人達を守る使命をしないで、何勝手なこと言ってんの?ふざけるなよ?それに、俺がミラの供になっているのは、ミラ本人に前に頼まれたからだ。お前に何かを言われる筋合いはない」

俺が言いきるとイバルは顔を真っ赤にして武器を構える。

「貴様!俺を侮辱するのか?!」

「そうやってすぐにキレる……短気でうるさいからミラにうるさい

とか言われるんだよ」

ピキッ

俺の一言にイバルが固まる。

「ミラ、そろそろ行こう。海停が封鎖されてしまうかもしれない」

「そうだな。では、出発しよう」

「……い、いいのかな」

3人で集会場を出ていく。固まったイバルを残して。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

レオン・ミラ・ジュードの3人がニ・アケリアの入り口を通りかかっている時、3人を見る人物達がいた。

「あの女がマクスウェルか。プレザ。確かに力を失っていたのだな？」

男はキジル海瀑でミラを襲った女性……プレザに確認した。

「はい」

プレザは間違いないという風に答える。

「既に『カギ』もどこかに隠された可能性があるとなると、少し面倒だな」

黒装束の服の男がそう言う。

「ごめんなさい。侮ったわ、まさかレオンがいるとは思わなかったし……」

プレザは黒装束の男に謝る。

「あの娘がマクスウェルと知っておれば、ワシも『カギ』のありかを吐かせたのじゃがのう」

ハ・ミルで出てきたレオンの知り合い……ジャオが言う。

「まぁいい。今となっては泳がせた方が都合がよかろう」

「ええ。ラ・シュガルの目は奴らに向けさせ、我らは静かにことを進めるのが得策かと」

「アグリアから何か連絡は？」

「失われた『カギ』を新たに作成するという動きがあるとか」

「……捨て置けんな」

男は黒装束の男に目配りをする。

黒装束の男は男の真意を察し、ジャオに指示する。

「ジャオ、例の娘の管理はもういい。お前は『カギ』の件を探れ」

黒装束の男の指示に困惑するジャオ。

「いや、しかし……」

「ラ・シュガル兵どもが去ったというのなら、もうお前が直々につく必要はない」

「データが無事なんだから、優先事項が変化するのは当然ね」

「う、うむ……」

黒装束の男とプレザに言われて困るジャオ。

「プレザ、アグリアと連携をとってイル・ファンに潜れ」

黒装束の男の指示に少し驚くプレザ。

「あら、マクスウェルはいいのかしら？」

「ああ。まだ駒はある。『カギ』のありかも探らせる。それにレオンの奴がいる時点で、こちらも慎重に行動せねばなるまい」

黒装束の男がレオンの名を出すと、男は少し反応した。

「レオン……お前との再戦……楽しみにしているぞ。撤収する」

『はっ！』

男は3人を従えて、ニ・アケリアを離れた。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

さて、俺達はニ・アケリアを出て今はキジル海瀑に来ていた。

「……ふむ」

「どうしたの、ミラ？」

うねりを上げるミラを不思議そうに見るジュードは聞いた。

「イル・ファンへ船で行けぬ場合はどうするか考えていたんだ。レオン、何か知っているか？」

ミラは俺が旅をしていたので、俺が詳しいかと思い、俺に聞いてきた。

「うーむ。そうだな。山脈超えは難しいから、ア・ジュールからの陸路は除外。となると……」

俺が言おうとすると、

「サマンガン海停からカラハ・シャール方面になるんじゃないか？」

どこからか聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その声のする方を見ると、

「「アルヴィン！」」

ミラとジュードが声を上げてアルヴィンの名を言った。

アルヴィンは手をシュっと手を上げる。

「アルヴィン、俺のセリフを取らないでくれよ」

「いや、すまん。出てくるタイミングがな」

俺とアルヴィンは笑いながら言う。

「どうしたの？一体」

「あのイバルとかいう巫女殿に頼まれてね。三人じゃ心配なんだと。でも、レオン、お前巫女殿に何言ったの？すっごく泣いてたよ？」

どうやら俺達が出て行ったあと、泣いてたんだな……哀れなり。

「あいつに現実を教えてやったらそうなった」

「あまり苛めるなよ？」

「あいつが絡んでこなければ、な」

アハハ！と笑う俺とアルヴィンである。

すると、アルヴィンは懐から謝礼金の入った袋を出す。

「しかも仕事に見合った以上の報酬をもらっちまうのは矜持に反するしな」

な？と言う風に俺達を見るアルヴィンにミラが笑いながら言った。

「ふふ、そうか。心強いよ。アルヴィン」

「うん、ありがとう」

「またよろしくな」

「礼なら巫女殿と村のみんなに。んで？どんなご予定で？」

アルヴィンは今後の予定をミラに聞いた。

「まずハ・ミルに向かいラ・シュガル軍の動向を探ってみる」

「まだいたらだけどね」

「おそらくいないと思うけどな」

「いなければ万々歳だな。んじゃ、行きますか」

そして、俺達は再び４人でハ・ミルへ行くのであった。

そして、来た道なのであまり苦労せず、数時間でハ・ミルに到着した。

到着するとアルヴィンがこんなことを聞いてきた。

「しかし、一体どうやりゃ四大精霊を捕まえられるんだ？」

「四大の本体はマナの塊だ。クルスニクの槍はマナを吸収し、貯蔵する機能をもっているのだろう」

マナの貯蔵と聞いたジュードは驚き声を上げる。

「マナの貯蔵!?そんなことが……」

「可能なんだそうな。でないと、今現在、四大達が捕まってしまっていることに説明がつかない」

「四大精霊を助けなきゃね」

「気合い入れるのはいいけど、張り切り過ぎると死ぬぞ。なんたって敵は、四大精霊を封じる未知の力をもってるんだからな」

「……」

意気込んでいたジュードが一気に静かになった。

広場に向かうと村の住民がエリーゼに石とかを投げていた。

「きゃっ……。やっ……」

「やめて、ヒドイことしないで。お願いだよー！」

ティポがエリーゼの代わりに言う。

それを見ていた俺はジュードよりも早く動いた。

「（レオン？）」

そんな俺を見ていたミラが不思議がっていた。

ガシッ！

俺に続いてジュードも動き、住民の1人の手を抑える。

俺はその間にエリーゼの元へ。

「大丈夫か？ケガしてないか？」

俺はエリーゼに手を差し伸べる。

「お前達のせいでこっちは散々な目じゃ！」

どうやらラ・シュガル軍にやられたみたいだな。

「だからといって子供に八つ当たりは大人のすることじゃないな」

「ああ、全くだ」

俺とアルヴィンがいうと、黙る村長。

そして、俺たちに出て行けと言った。

俺達はすぐに出ていくことにしたが、俺は村長に言った。

「あんたら、自分たちに被害がなければいいという考えはやめた方がいいぜ？ま、おそらくこの村にはいつか罰が当たると思うがな」

そういい、俺は村の入り口で皆を待つことにした。はっきり行って不愉快だからだ。

少しして、ミラとアルヴィンが村長の家から出てきた。その少しし

て、ジュードがエリーゼを連れてきた。

そして、ミラはジュードに色々と言っている。

ミラはジュード達から離れ、俺のところにきた。

「あの子も一緒に行くことになったろ？」

「何故わかる？」

「ジュードのお節介な性格を思えばわかることだ。それにいざとなったら俺の知り合いに預ける」

「……そうか」

アルヴィンとジュード、エリーゼが来るのを確認し、俺達はハ・ミルを出た。

～オマケ編～

一応ジュード以外がエリーゼのことを知らないので自己紹介をした。

その時だ。エリーゼのある一言にミラが表情を変えたのが。

「俺はレオン・ストライフだ。よろしくなエリーゼ」

「よろしく……です。レオン『お兄ちゃん』……あ……／／／」

『お兄ちゃん!?』

俺を含む全員が驚き、声を上げた。

さすがのおれもいきなりの不意打ちに驚いているが、エリーゼに聞いてみた。

「エリーゼ。何で俺は『お兄ちゃん』何だ？」

「え、えっと……ハ・ミルで助けてくれた時に手を差し伸べてくれた……時に、何か温かかったから……です。そしたら、つい『お兄ちゃん』って」

俺は初めて『お兄ちゃん』なんて言われて照れていた。

「そうか……『お兄ちゃん』か。じゃあ、俺のことはレオン『お兄……』

ガシッ！

ミ、ミラ？どうした？」

俺は血相を変えたミラに肩を掴まれた。

そして、

「レオン。少し来い」

ズル…ズル…ズル…

俺はミラに肩を掴まれたまま、茂みに連れて行かれた。

そして……

『ギャアアアアアアアアアア！』

俺の悲鳴が当たりに響き渡った。

その後、少しして俺はミラに頭を掴まれたまま茂みから出てきた。

そして、ミラはエリーゼにいった。

「いいか？レオンのことは普通にレオンと言うんだぞ？」

口元は笑っているが目が笑っていないミラに怖さを覚えたエリーゼは頷いた。

「なら、よし」

そういい。再び俺を掴んだまま、歩き始めるミラであった。

尚、この時にミラの心情。

「何故エリーゼにお兄ちゃんと言われて喜んでいたのだレオンは！全く、わけがわからん！これも嫉妬と言うものなのか！？人間は難しいな……このイライラは魔物達で晴らさせてもらう」

その後、イラート海停までの間に出くわした魔物達はミラ1人で倒してしまった。

ミラのあまりの黒いオーラにジュード達と俺は話しかけることができなかった。

第11話　エリーゼとティポ、再登場！（後書き）

エリーゼ再登場キターーーーーーーーー！
癒し系回復係兼強力な闇属性精霊術の使い手のエリーゼ、早く仲間に！！
ゲームの時の感動をもう一度！

次回、樹海でジャオと戦います！！

第１２話　ＶＳジャオ（前書き）

この小説を見ている皆さんに、考えてほしいことがあります。
それは共鳴（リンク）アーツのことです。皆さんもご存知であるかと思いますが、前にレオンとミラのアーツを書きましたよね？
そこで、みなさんには他のキャラたちやミラとのアーツを考えてもらいたいのです。
シリーズで出てきた技でもかまいません。実際に作者もシリーズに出て来ていたアイシクルレインとかを出していましたから。
術技は何でも結構です。
感想に書くときは

・誰の技＋誰の技＝アーツ名
　その下にアーツ時のセリフ。

と言う風にお願いします。

では、続きから書いていきます。本編へどうぞ！

第１２話　ＶＳジャオ

～レオンＳＩＤＥ～

ハ・ミルを出てエリーゼを旅の非戦闘員として連れて行くことになった俺達はイラート海停へ来ていた。

イラート海停の船の受け付けに今の船はどこ行きかを聞いてみろと、

「すみません。首都圏全域に封鎖令が出たおかげで全便欠航なんです」

「他の便は？」

ミラが他に乗れる便があるかを聞いてみると、

「しばらくはサマンガン海停行きしか出ませんね。サマンガン海停行きの船に乗りますか？」

「ああ、乗るぜ」

「乗船してお待ちください」

俺達は船に乗って出発を待つことに。

少しして、船は出発した。

船が出発して広い海が見え始めると、エリーゼは目を輝かせていた。

「わぁ……！」

はしゃぐエリーゼに近づくジュードに気づいたエリーゼは恥ずかしそうに言う。

「海……初めてなの……」

「うん」

そして、再び海を見るエリーゼ。そんなエリーゼから離れ、ジュードは俺達のところに来る。

「あの子、あの村で何してたんだ」

「俺が前に訪れた時にはエリーゼはいなかったが…」

「監禁されていたのだろう？」

「逆かも。匿われてたって可能性もあるんじゃないかな」

ジュードが監禁以外の可能性を話していると、

「きゃ――――！」

いきなり悲鳴を上げるエリーゼに驚き、ジュードはエリーゼを見た。

「エリーゼ！」

だが、想像していたことと違ったみたいだ。エリーゼはティポと話をしていた。

「あははは。ティポ見て」

「海すごーい。落ちたら死んじゃうとこだったよー」

ハ・ミルにいた時よりも元気なエリーゼを見て、俺は安心していた。

そんなエリーゼを見て、ジュードはミラとアルヴィンに向かって言う。

「悪い子じゃないよ」

「そうみたいだな」

アルヴィンも今のエリーゼの姿を見て、そう確信した。

「引き取ってくれるいい人が見つかるかな?」

「それは君が探すしかない。それが責任というものだろう?」

そういい、俺達から離れるミラ。

ポン

俺はジュードの肩に手を置く。

「ま、見つからなかったら……俺にいいな。俺も昔旅をしてたから知り合いの家に預けることもできるからな。それまではお前が自身の責任でエリーゼを引き取る人を探すんだ」

「う、うん」

俺はジュードにいうとミラのところへ向かう。

ミラと一緒に海を眺めていると、

「何か見えるのー？」

ティポがミラに聞いた。

「いや、少し考えごとをしていただけだ。エリーゼ。これからどうするつもりなんだ？」

エリーゼは突然、これからのことを聞いてくるミラに驚きながらも答える。

「え……私……わかりません」

「ふむ……わかることはないのか？」

「ジュード君やミラ君、レオン君、アルヴィン君は、友達……！」

「そう言うことを言っているのではない。そもそも、このティポはなんだ？」

ティポの言うことに即座に反応し、否定する。

「何故ぬいぐるみがしゃべっている？」

ミラは普通の人でも思うことを聞く。

「ティポはティポだよ。そんでエリーの友達ー！」

ミラは自分が聞いていることへのちゃんとした答えが出てこないことに呆れていた。

「お前と話すのはなかなか難しいな。何故か論点がずれる」

「まあ、見ているこっちは面白いからいいけどな！」

俺は俺で面白いし。そういうと、ミラがじっと俺を見る。

「レオン、お前までそう言うのか？」

「だって、おもしろいもん」

ガックシと体から力を抜くミラであった。

そして、船はサマンガン海停もうすぐ到着する。

「エリーゼ、ミラ、レオン」

「ああ。そろそろ到着のようだ」

「さて、ラ・シュガルの警戒がどれほどのものか、な」

何かあったのかジュードとアルヴィンが顔を見あう。それを不思議そうに見る俺とミラ。

「ミラ君は友達、友達ーっ♪レオン君はもっと友達ーっ♪」

ティポは嬉しそうに宙に浮いてグルグル回る。

「……」

黙るミラ。

「ははは……仲……よくなったみたいだね」

俺達の様子を見て苦笑するジュードはエリーゼに近づいていった。

「大丈夫。何も心配いらないよ」

ジュードがそういうと俯くエリーゼ。

そして、船はサマンガン海停に到着した。

サマンガン海停に到着して俺達が最初にしたことはラ・シュガルの兵士がいるかいないか、だ。

「思ったほど厳重じゃないが……」

そう、思っていたほど厳重ではないが何人かの兵士は配備されていた。

「兵士は配備されてるね。注意しないと」

兵士の数を確認したミラがあることを口にする。

「妙だな……。一時はア・ジュールにまで兵を出していたというのに」

「君らを追うよりも重要なことできたか、な」

「好都合だ。気付かれぬうちにイル・ファンへ向かおう」

「そうだな。気付かれてイル・ファンにいけなくなっても困るしな」

俺とミラ、アルヴィンは先に歩いていき、ジュードはエリーゼと何かを話している。

内容はエリーゼのことを引き取ってくれる人のことだ。

「いきなり引き取ってくれる人がどうとかお嬢ちゃんに言ってもね。聞かされていない本人は、そりゃ、驚くよな」

「気遣い、が足りないな。ふふ」

気遣いの足りないジュードを見て笑うミラ。

「ミラ。そういうお前だって少し前まではその少しの気遣いがなかっただろうが」

「むう。それを言わないでくれ／／／」

少し前の自分のことを思い出し、恥ずかしがっているミラ。普段とは違ったギャップが可愛いもんだな。

「それにジュードは俺達と違ってまだ１５歳の子どもだ。そこまで気を遣うことができないんだよ」

「まあ、多少大人びているところがあるが、確かにまだ子どもだな」

俺の言うことに頷くアルヴィン。

そして、俺達は海停を出ようとしたのだが、ミラが突然、エリーゼに言った。

「気をつけろ、エリーゼ。海停に、お前を不自然な視線を送る船員がいるぞ」

「そうなんですか？気付きませんでした」

「ただのロリコンかもしれないが、念のため話しかけてみるか」

その後、海停の中を歩き回り、その船員を発見した。

その船員はエリーゼを見ている。

それに気づいた俺やアルヴィンはエリーゼの前に立つ。

「おたく、うちのお姫様が可愛いからって、ジロジロ見ないでくれる？」

「そうそう、もし手を出したらあの世に行くぞ？」

俺とアルヴィンの言ったことに慌てる船員。

「いや、すまない。その子が持っているぬいぐるみが気になって…」

アルヴィンは船員の前からどいて、ティポが見えるようにした。

「ぼくに用なのー？」

「おお！やっぱりこいつもしゃべるのか！」

船員はティポがしゃべるのを聞いて驚きながらそう言った。

「前にも、しゃべるぬいぐるみを見たことあるんですか！？」

「ああ、そいつにそっくりなのをね」

「その子、ティポの家族かもしれません」

「どこで見たのだ？」

船員はミラに聞かれて思い出す。

「ちょっと前に来た行商人が売ってたんだ。ここの海停から西の街に向かったよ」

「エリーゼ、ティポ。よかったな。ここから西の街はこれから向かうカラハ・シャールだ」

「はい！」

「ぼくの家族に会えるかもー♪」

エリーゼとティポは嬉しそうにしている。うんうん、子どもはやっぱり元気と笑顔が一番だな。

「じゃあ、行くか」

俺達は入り口へ向かい、サマンガン海停を出た。

サマンガン海停を出て、アルヴィンがある話をし始めた。

「海停に、手配書が出回ってたな」

「うむ。しかしこんなもので手配書が機能するのか？」

ミラは海停に貼ってあった手配書を見せる。そこには俺達とは似ていない似顔絵が書いてあった。……これ書いた人、絵の才能ないだろ。

「ミラ、手配書はがしちゃったの？」

「ああ。これで私たちが捕まるとは思えないが……人間の絵画感覚は私やレオンとは違うのか？うーむ……」

「とにかくミラがはがしたから、この海停ではもう捕まる心配ないかもね」

「無駄無駄。いくらはがしたところですぐに新しいのを貼られるだけ」

アルヴィンが言い終えると、いきなりミラの体がピクンとなった。

「どうしたミラ」

「いや……こんな似てない手配書でも油断はできん。早くここを去るとしよう」

「うん」

ジュードが頷き、歩く3人。俺はミラの横で歩く。

「……そうだ。あの『カギ』とて時間をかければ新たに生み出されるかもしれない……先を急がねば……」

「ああ。これ以上、あれを使わせるわけにはいかないしな」

俺とミラは互いの顔を見あい、頷く。

そして、前を歩く3人に追い付くために早足で歩く。

少し進むと別れ道があったが、本来カラハ・シャールへ行くための道を軍が検問をしていた。

「ま、当然だな。そんなにうまい話はないって」

「どうしよう……」

「あっちには何があるのー？」

ティポがいう方向を俺達は見る。

「あっちにあるのは樹界……サマンガン樹界という樹界さ」

「うまく抜けるとカラハ・シャールの街に出られるが……」

「迷う必要はないな」

ミラは本当に迷わず、樹界の方へ歩き始めた。そんなミラにジュードが言った。

「滅多に人が立ち入らないんだよ？エリーゼには……」

ジュードはエリーゼのことを言うが、ミラは立ち止まって言う。

「こうなることは予期できたろう」

その言葉にジュードは黙り込む。

「……」

「……わたし……あのだいじょうぶ……です。だから……」

「ケンカしないでー。友達でしょー」

陣は大丈夫だというエリーゼ。ティポは喧嘩しないでくれと言う。

「エリーゼ」

「エリーゼも了解した。これで文句はあるまい」

冷たい言い方をするミラに不満を持つジュード。

「……」

俺はこの2人のやり取りを見てため息をつきたくなった。

樹界に入ると魔物が俺達を見ると……いや、魔物はエリーゼを見ると去っていった。

「何だ？ありゃ……」

「警告かな……これ以上立ち入るなって」

「その警告はミラには効果がないみたいだな」

ジュードはアルヴィンに言われてミラを見ると、ミラは木と木の根っこが重なり合って道になっているのを見ていた。

「ここからいけるみたいー！二人とも早くー」

「臆病なのはレオンを抜いた男性陣だけのようで」

「……うん」

樹界を少し進むと、背後から魔物が俺達を襲ってきた。

「うっ！」

その魔物は長い腕の枝を使って広範囲で攻撃を繰り出してくる。

「こいつ、攻撃範囲が広い……全員がダメージを食らっちまうぞ」

「やっかいだな」

すると、下がっていたエリーゼが俺達の後ろに出てきた。

「エリーゼ、来ちゃダメだ！」

「お前を庇いながらでは戦えない、邪魔だ！」

「ジュード！」

エリーゼのことを気にしているジュードは敵から目を離してしまい、魔物の一撃を食らってしまった。

ドス！

バタン！

「う……」

「言わんことではない！」

ミラがジュードに向かって言う中、エリーゼがジュードに近づき、

「……うっう……」

泣きながら回復術を使い、４人一遍に回復させた。

「これは、みんな一斉に回復を……！？」

「元気出して！ぼくたちがいるよー！」

全員が回復すると再び、戦闘を始める。

「行くぜミラ！」

「ああ！いこうレオン！」

「「これで吹き飛んで燃え散れ！獅吼爆炎陣！！」」

炎を纏った獅子が魔物を吹きとばし、魔物を消滅させた。

戦闘が終わると俺達はエリーゼに感謝していた。

「まさかこの歳で、こんな術が使えるとはね」

「エリーゼに救われたな」

その話しの話題になっているエリーゼは泣いていた。

「うっう……」

そんなエリーゼに近づくジュード。

「エリーゼ。もう恐くないよ」

だが、エリーゼが泣いていたのは戦闘をしたことではなかった。

「ちがうの……」

「仲よくしてよー。友達は仲よくがいいんだよー！」

そう、ティポが言うようにミラとジュードが自分のことで仲よくしていないとエリーゼは感じていた。

「わたし……邪魔にならないようにするから……だから……」

エリーゼは真剣な眼差しでミラを見る。

「……だってさ。エリーゼに免じて許してやれば？」

「免じるも何も別に私は怒ってなどいないが……」

「ウソーん。ミラ君とジュード君、もっと仲良しだったもんねー！」

「わたし……がんばるから……！」

俺以外がミラを見る。

そんな中俺は言う。

「クックック。ミラ、お前の負けだぜ？俺から見たら何かミラが悪者だぞ？」

「うむ。いつの間にか私が悪者か……ふふ、わかったよ」

ミラがそういうとアルヴィンはミラとジュードの肩に腕をまわして、エリーゼに何か言うことがあるだろう？と言う。

「心配かけちゃってたんだね。エリーゼ、ありがとう」

「やっぱり友達はニコニコ楽しくだねー！」

「ミラもエリーゼの術があれば頼もしいでしょ」

ミラはジュードの言葉を聞き、エリーゼを見る。

「ありがとうエリーゼ。これからはアテにするぞ」

ミラに言われると、エリーゼは頬を赤く染めた。

「それじゃ、レッツゴー！」

そして、俺達は再び、カラハ・シャールへめざした。

そのまま、俺達は出口付近に来ていた。まあ、途中、ケムリダケの

被害を受けたがさして問題はなかった。

しかし、その付近に入り口で見た魔物が俺達を囲んでいる。

そして、その後には……ジャオが出てきた。

「あんたは……」

「おっきいおじさん……！」

エリーゼはジャオを見て驚く。

「おうおう。よう知らせてくれたわ」

ジャオは魔物達に礼を言った。

「レオンやイバルの他に、魔物と対話できるものがいるとはな」

「あなたは、ジャオさんですよね」

ジュードがジャオの名前を言う。

「ん？お前たちには名乗っておらんはずだがのう。レオンが教えたのか？」

「いや、教えた記憶はないが……ハテ？」

俺も言ったような言わなかったようなと記憶が曖昧だ。

すると、アルヴィンが答えてくれた。

「ハ・ミルの人たちにな。んで？どんなご用で？」

アルヴィンが聞くとジャオは近づいて手をさす出す。

「知れたこと。さあ、娘っ子。村に戻ろう。少し目を離しているあいだにまさか村を出ておるとはのう。心配したぞ」

エリーゼはジャオを見ながら俺の後ろに隠れた。何で俺？お兄ちゃんキャラだからか？

「ぬう……」

ジャオもエリーゼが俺の後ろに隠れたのを見てうねりを上げる。

「ジャオ。お前はエリーゼを放ってどこに言っていたか知らないが、その間にエリーゼはハ・ミルの住民に暴力をされかけていたぞ？そこへ俺達が来て、エリーゼを引き取ったんだよ」

「何と？！そんなことが……」

ショックを受けるジャオにミラが聞いた。

「お前は、エリーゼとどういう関係なんだ？」

「その子が以前いた場所を知っておる。彼女が育った場所だ」

ジャオの言葉を聞いたジュードがジャオに聞く。

「なら、彼女を故郷に連れて行ってくれるんですか？」

ジュードの問いに答えないジャオ。

「……また……ハ・ミルに閉じ込めるつもり？」

「お前たちには関係ないわい！さぁ、レオン！その子を渡してもらおう！」

「断る」

俺がそういうと、ジャオは鎚を出した。

「……仕方あるまい！」

俺はすぐに皆に指示を出す。

「全員！俺とジャオの戦いに近づくなよ！巻き込まれる！４人は周りにいる魔物達を頼む！」

そういい、俺はジャオに剣を抜いて突っ込む。

ガキィィン！

「行くぜ！ジャオ！」

「こい！」

そして、俺とジャオの戦闘が始まった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

レオンはジャオと言う男と武器を交えながらこの場から少し離れて行った。私たちはレオンの指示に従い、魔物達を倒していく。

その倒している時に聞こえてくる爆音と木々が倒れる音。それを聞いて私はレオンのことを気に始めた。

レオンは無事なのか……大きなけがをしていないか……やられていないか……と。

私は魔物を倒すスピードを上げ、魔物達を斬り倒していく。

そして、

「これが……最後だ！」

私の声と共に最後の魔物を斬り倒し終わった。

「みな、レオンのところに向かうぞ！」

私が言うと、３人は私の後についてきた。

そして、レオンとジャオが戦っている場所に到着すると……そこは、

「なっ！？」

「なんだよ……これは……！」

「どうすれば……こんな状態に！？」

「す……すごいです！」

「うわー木々が倒れまくってるー！地面が抉れてるー！」

私たちが駆け付けると……木々が倒れ、地面が抉れ、氷の刃が刺さり、岩がむき出しになっていた。

そして、その原因を作った2人は……

「「ハァハァ……ハァハァ……」」

肩で息をしている。かなり激しい戦いだったのだろう。

「はぁはぁ……むう？魔物達はやられてしまったか」

ジャオは鎚をひっこめた。

それを見たレオンも剣を鞘に納める。

そして、ジャオはエリーゼを見ながら言う。

「……何故だ、娘っ子。その者たちといても、安息はないぞ？」

確かにそうだろうな。今の私たちは指名手配されている。休む暇はない。だが、

「……ともだちって言ってくれたもん！」

「もう寂しいのはイヤだよ！」

エリーゼとティポも寂しいのだろうな。だから、戦いに参加して私達についてこようとするのだろう。

「……エリーゼ」

ジャオはエリーゼを見る。

「ミラ、レオン、アルヴィン……」

すると、ジュードが私たちを呼ぶ。

「わしも、連れていくのは本意ではない。……許してくれ」

手を差し伸べるジャオ。そして、銃を構えるアルヴィン。

「わしはこれ以上戦いたくなどない。レオンはともかく、消耗したお前たちがわしに勝てるはずがないのう」

そういうジャオであるが、アルヴィンは銃で次々と木を撃つ抜いていき、そして、

「なんだと……！」

木はレオンとジャオの戦いで脆くなっていたのか、倒れ始め、ケムリダケに木が落ちる。

すると、どうだ。私たちに被害があったようにケムリダケから催眠性の胞子が出てきた。

「口を押さえて！」

私たちはジュードの指示に従い、口を押さえ、樹界の出口へ走って行った。

～オマケ～

木と木の間を移動しようとしているレオン達。そんなときであった。

「ミラ、進むのはいいけど、お前は最後な」

「？何故だ」

ミラはレオンに何で自分が最後に行かないといけないんだ？と聞いてみると、

「それは／／／お前、自分の格好を見てみろよ」

レオンに言われて自分の格好を見るミラ。

「特に変わったところはないが？」

そういうミラに困るレオン。そこへ、

グッグ

ミラの袖を引っ張るエリーゼ。

「ミラ……耳を……貸してください……です」

「ん？」

ミラはエリーゼに言われて耳をエリーゼの口元へ近づける。

そして、

「……／／／？！」

ミラはバっと自身のスカートを抑えてレオンを見た。

「レ、レオンはこのことを言いたかったのか！？」

レオンは恥ずかしそうに言う。

「あ、ああ／／／」

「す、すまない／／／こういうことには無頓着なのだ」

お互いに顔を紅くする2人を見てエリーゼが呟いた。

「2人は……とっても、仲がいいですね、ティポ」

「2人はラブラブ～」

ティポの言葉を聞いてレオンとミラは顔を余計に紅くした。

～終わり～

第12話　VSジャオ（後書き）

ふぅ、17日中に更新する予定が思わず、18日になってしまったよ。まあ、いいか！

今回、ついにエリーゼがパーティーに！長かった！本当に！そして、ようやくカルハ・シャールだよ！ここである人たちとレオンは知り合いなのですよ。その人物も次回で分かるよ！そして、この街で原作の1つをブレイクする予定です。すぐにではないけどね。

次回もお楽しみに！

そして、今日の共鳴（リンク）アーツ

・獅吼爆炎陣
　レオンの獅子戦吼＋ミラのファイアーボール
　普通の獅子戦吼がミラの火の精霊術を纏った炎の一撃と共に敵を薙ぎ払うぞ！

第１３話　知人との再会（前書き）

募集はいつまでも受け付けています。結構な数の募集が溜まったら、募集されたアーツ集を一回、投稿させてもらいます。

第１３話　知人との再会

～レオンＳＩＤＥ～

あの後、俺達は急いで樹界から離れ、カラハ・シャールの近くまで来ていた。全員が落ち着きを取り戻した時、ミラが俺に聞いてきた。

「それにしてもレオン。あの惨状はなんだ？どうすればあそこまで森を破壊できる？」

あーそのことか……。

「簡単さ。ジャオの戦闘スタイルとはその外見にと同じように鎚を使った強力な力技を繰り出す。俺がそれを避け続けたら地面が抉れ、俺の放った斬撃をジャオが鎚で吹き飛ばすか避けるかをしたら木々が切り倒される……これをミラ達が来るまで永遠と続けていたんだよ。まあ、俺は隅に精霊術を使っていたがな」

「なるほどな。だが、これから１人で戦おうとしないでくれ。心配してしまったではないか」

少し、悲しそうな表情をするミラを見て俺は焦った。

「わ、わかった！わかったから悲しい表情をしないでくれ」

「……わかった。……私はレオンが心配なんだ（ボソ）」

ミラが最後のあたりに何かを言った気がしたが聞き取れなかった。

「とにかく行こう。カラハ・シャールはもうすぐだ」

「ああ、行こう」

俺とミラは一緒に並んで歩いて行く。

その後ろでは、

「ねえーねえーアルヴィン君」

「なんだ？」

ティポがアルヴィンにあることを聞いた。

「レオン君とミラ君って付き合っているのー？」

「いや、付き合ってはいなさそうだが……お互いに気があるのは確かだな」

「え……でも、傍から見たら……恋人同士に……見える……ですよ？」

「ん～俺から見たらレオンはミラが好きだが、告っていないふうに見えるし、ミラはレオンのことが好きってことがわかっていないないな。でも、ミラの奴は嫉妬はしているみたいだぜ？お嬢ちゃんがレオンの事を『お兄ちゃん』って言った時に、レオンの奴が嬉しそうにしてたろ？」

アルヴィンに言われてエリーゼはその時のことを思い出す。

「はい、確かに喜んでいました……です」

「んで、その嬉しそうな表情をしたレオンを見て、ミラはエリーゼの言った言葉がレオンを嬉しそうにさせたことが気に食わなかったんだろうな？それか、自分以外がレオンのことを嬉しい表情にしたことへの嫉妬だったのか……さすがにわかんないけどな」

「そう……なんですか……私は……2人がお似合いだと思い……ます！」

「まあ、美男に美女だからな……絵になるのは確かだ」

「2人はラブラブ～」

3人？がそんな話をしている時、ジュードは……

「……」

仲よくしているレオンとミラを見つめていた。

その後、一行はカラハ・シャールに着いていた。

「やっとカラハ・シャールに着いたね」

「えらく遠回りしちまったな」

「もうでっかいおじさん来ないかなー？」

ティポが俺達の来た方を見て言う。

「大丈夫だろ。いくらなんでもこんな街中にまで入ってきてエリーゼとティポを連れて行こうとはしないだろうさ」

「ああ、レオンの言うとおりだ。それにこの雰囲気で追ってくるとは思えんしな」

そういい、俺達は売り場を見る。

「いらっしゃい！どうぞ見ていってください」

「骨董か……ふむふむ」

ミラは真剣に骨董品を見ている。

エリーゼも先客の後ろから骨董品やカップなどを見ている。

俺は周りにいる兵士たちのことを自然な形で見ている。

「なんだか、街のあちこちが物騒だな」

アルヴィンはアルヴィンで売っている人に情報を聞いている。

「ええ。なんでも首都の軍研究所にスパイが入ったらしくてね。王の親衛隊が直々に出張ってきて、怪しい奴らを検問してるんですよ。まったく迷惑な話で……」

売主は俺達の顔を見て、一瞬驚いていた。それにジュードが慌て、

「あ、あの、えっと……」

俺は慌てるジュードを見て、密かに苦笑した。

一方、エリーゼは先客が持ったカップを見て、

「……キレイなカップ」

「でも、こーゆーのって高いんだよねー」

売主はそれを聞いて誇ったようなふうに言う。

「そりゃあ、そいつは『イフリート紋』が浮かぶ逸品ですからねぇ」

その説明に驚く先客の女性。……あれ？この子、どこかで見たことがあるような……はて？

「『イフリート紋』！イフリートさんが焼いた品なのね」

それを聞き、女性の手元からカップを奪い、指先で回したりするミ

ラ。

「ふむ。それは無かろう。彼は秩序を重んじる生真面目な奴だ。こんな奔放な紋様は好まない」

「ああ、それにあいつはそんなことをしていないはずだがな……特にここ２０年は」

俺とミラはイフリートのことをよく知っている。こんな紋様をあいつが作るはずがない。

すると、女性の隣にいた……あ、ローエンだ。ってことは……この女性はドロッセルか！

「ほっほっほ、面白い方たちですね。四大精霊をまるで知人のように」

目を瞑ってしゃべっていたローエンが話し始める。

「確かに、本物のイフリート紋はもっと幾何学的な法則性をもつものです」

ローエンはカップの皿を手に取る。

「おや。このカップが作られたのは十八年前のようですね？」

「それが……何か？」

ローエンの言うことに少し焦りを見せる売主。

「おかしいですね。イフリートの召喚は二十年前から不可能になっていませんか？」

「う……」

ローエンに言われてローエンから視線を外す売主。

ドロッセルはミラノ手元からカップを取り、残念そうに言う。

「残念、イフリートさんがつくったんじゃないのね……。でも、いただくわ。このカップが素敵なことに変わりないもの」

そんなドロッセルの笑顔を見た売主は、ガックリとした仕草をし、

ローエンやドロッセルを見て言う。

「は、はい。……お値段の方は勉強させていただきます」

ドロッセルはカップを買い、少し離れたところで俺たちにお礼を言ってきた。

「ふふ、あなたたちのおかげで、いい買い物ができちゃった。ドロッセル・K・シャールよ。よろしくね」

「執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを」

2人は自己紹介をして、ドロッセルは俺たちに言った。

「お礼に、お茶にご招待させて頂けないかしら？」

「お、いいね。じゃあ後でお邪魔するとしますか」

「私の家は、街の南西地区です。お待ちしておりますわ」

そういい、ドロッセルはローエンを引き連れてこの場を離れて行った。俺に気づかないとは……まあ、数年前に会った時よりも身長や顔つきが変わっているから仕方ないか。

「そんな暇など無いのだがな」

「ま、この街にいる間は利用させてもらう方が色々好都合だろ」

その後、兵士たちとかの関係でドロッセルの家に行くことになったのであった。

その後、街で情報収集をしている時、ティポの家族のことを聞いた。

何でも商売をしていた商人はイラート海停へ向かったと……。今度、時間ができた時にでも行くことになった。

そして、街での情報収集を終えた俺達は南西地区へ来ていた。南西地区へ来て見るとドロッセルとローエンが待っていた。

「お待ちしておりましたわ」

「すごいお屋敷……」

ジュードはドロッセルの屋敷を見て、驚いていた。すると、その屋敷から数名の兵士と……ナハティガルと副官のジランドが出てきた。

そして、そのまま馬車に乗ってどこかへ去っていった。

「……お客様はお帰りになりましたか」

ローエンは少し暗い表情を一瞬したが、すぐにいつものような表情をする。

そして、ドロッセルは俺達を見て笑顔になり、歩き始める。俺達もドロッセルの後についていく。

そして、屋敷の門前に来ると、屋敷からクレインが出てきた。

「やぁ、お帰り。お友達かい？」

クレインが出てきたのを見てドロッセルは嬉しそうに笑顔になりながらクレインに近づいていく。

「お兄様！紹介します……あ、まだみんなの名前を聞いていなかった」

肝心の名前を聞いていないことに気付いたドロッセルは困ったように言う。

そして、クレインは俺達を見て……いや、俺を見て驚いていた。

「レオン！レオンじゃないか！」

「よお、クレイン。久しぶり」

俺はクレインに向けて手を振った。

「え？レオンさん？どこにいるんですか？」

「どこって……そこにいるじゃないか。昔よりも背も伸びているし、顔つきは変わっているけどレオンだろ」

クレインにそう言われ、俺の顔をじっと見るドロッセルは嬉しそうな表情をし、

ダキ！

俺に抱きついた。

「なっ！？」

それを見たミラが顔色を変えた。

「レオンさん！お久しぶり！元気でしたか？昔よりもカッコよくなっているのでわかりませんでしたわ」

「あ、あはは。まあ、気にしないでくれ……それよりもドロッセル」

「はい？なんでしょうか？」

？を浮かべるドロッセルに俺は言った。

「そろそろ離れてくれないか／／／？（胸が当たっているんだが／／／／／）」

「…そうですか。わかりました」

少し寂しそうにするドロッセル。

そして、

「……（ゴゴゴゴゴゴゴ）」

黒い怒りのオーラを纏うミラ。

そんなミラを見て、エリーゼとティポはジュードの後ろに隠れた。

「あ、あははは。レオンと再会するとは思っていなかったよ。さあ、みなさん立ち話もなんですし、屋敷へどうぞ」

クレインに言われて俺達はシャール家へと入って行った。

～オマケ～

屋敷へ行こうとするレオンたち。だが、レオンはミラに肩をいつものように掴まれ、

「な、なんだ、ミラ？」

「さっきは随分と……嬉しそうだったな」

「そ、そうか？」

ミラの雰囲気に押されるレオン。

そんなレオンの後ろからミラは、

ダキ！

抱きついた。自分の大きい胸を押しつけるかのように。

「な、ミ、ミラ／／／！？」

レオンはいきなりのミラの行動に顔を紅く染める。ミラのことを見ると、ミラ自身も顔を紅くしていた。

「わ、私のので我慢しろ／／／！これぐらいなら……い、いつでもしてやる／／／」

「わ、わかった／／／わかったから離れてくれ／／／」

レオンの言葉を聞いて満足したミラはレオンの背中から離れた。

「で、では、行くとしよう／／／」

「あ、ああ／／／」

2人は顔を真っ赤にしながら屋敷の中へ入って行った。

第１３話　知人との再会（後書き）

ミラが原作から若干崩れているな。レオンの前ではミラはただの女になってきている気がします。ああ、作者もミラに背中から抱きついてほしいです！

この２人が自分たちの気持ちが通じあったらどうなるのかも今後のお楽しみですｗ

次回もよろしくお願いします！

募集の方はいつでも受付しています。

第１４話　クレイン&住民救出へ（前書き）

引き続きアールは募集しているよ。

第１４話　クレイン&住民救出へ

～レオンＳＩＤＥ～

屋敷に入った俺達はお茶を御馳走になっていた……が、ドロッセルから熱い視線を受けている俺はミラに睨まれている。はっきり言って、まずいと思う。先ほど、ミラが大胆にも俺に自分から抱きつき、胸を俺の背中に押し付けて来ていた。もし、あのまま胸を押しつけられ続けていたら、理性が崩壊していたところだった。

そんな中、クレインはドロッセルに何があったのかを聞いている。その話しを聞いたクレインはなるほどっといった。

「なるほど、また無駄遣いするところをレオン達が助けてくれたんだね？」

そんなクレインの言い方に怒るドロッセル。

「無駄遣いなんて！協力して買い物をしたのよね」

そういいながらエリーゼやミラ、俺を見る。

「ねー」

ティポがそう答えた。

「ははは……。それにしてもまさかレオンがいるとは思わなかったよ。君は確か自分には守りたい…」

クレインが何をしゃべるのかを察した俺はクレインの口を手で塞いだ。

「ん!?」

「バカ野郎!そのことはここで言うな!」

「うんうん」

クレインはわかったと頷くのを確認すると俺は手を離した。

「ふう……」

そんな中、ローエンがクレインに近づき、耳元で話しをしている。

「……わかった。みなさんのお相手を頼むよ」

ローエンに何かを頼むとクレインは席を立つ。

「申しわけありませんが、僕はこれで」

「クレイン。あれは持っているのか？」

俺は席を立ってどこかへ行こうとするクレインに聞く。

「ああ、あれかい？あれならいつも肌に離さず持っているよ」

「そうか。ならいい」

そう俺は言うと、お茶を飲む。

そして、屋敷を出て行こうとするクレインを見て、アルヴィンもち

ょっとと言い、出て行った。

その後、エリーゼと話していて、ティポが海とかの話しをしだすと、ドロッセルは俺を見て言った。

「レオンさん。今度よかったら2人で行きませんか？海へ」

その言葉に反応する女性が一人いた。

「……いや、しかし……」

「駄目……ですか？（ウルウル）」

涙目で俺を見てくるドロッセル。うぅ、ドロッセルも美少女に分類されるから、そんなお願いの仕方をされると……

俺が困っていると、

「生憎、レオンは私と一緒にこなさなければならない使命がある。そんな暇はない」

ミラがドロッセルを睨む。

「あら？でしたらその使命が終わった後にでも……」

「それもすまないな。レオンはその後は私と一緒に住んでいるところに戻る予定だ」

「むぅ……」

バチバチ、バチバチ

2人の間で火花が散る。

しかし、この火花も終わりを迎えた。

「そろそろ、行くぞレオン」

ミラは俺の手を掴むと入口へ歩き出す。

「ちょっ！？ミラ？」

出口へ行くミラと引っ張られる俺。

だが、

「なにするんだよー！」

兵士を引き連れたクレインが兵士たちに俺やミラに武器を構える。

「まだ、お帰りいただくわけにはいきません……あなた方が、イル・ファンの研究所に潜入したと知った以上はね」

そういわれ、ミラは俺を引きずったまま、席へ戻る。

「な、なんのことか」

とぼけるジュードに俺は言う。

「無駄だぞ、ジュード。おそらくアルヴィンが教えたんだろうな。だろ？クレイン」

「その通り。アルヴィンさんが、すべて教えてくれました」

「アルヴィンが！？」

驚くジュード。

「まあ、あいつは傭兵だ。自分に利益のある話をしたって特別変なことでもないだろ」

「そんな！？」

まさかアルヴィンが自分達を裏切ったなどと思いたくないジュードは声を上げる。

「……軍に突き出すのか？」

「いいえ。イル・ファンの研究所で見たことを教えて欲しいのです。……ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変わってしまった」

クレインは座りながら話しを進める。

「何がなされているのか、六家（りくけ）の人間ですら知らされていない……」

クレインの話しを聞いたミラが俺を見る。俺は放してもいいという風にミラを見る。ミラもそれを感じ取ったのか、話しを始める。

「軍は、人間から強制的にマナを吸い出し、新兵器を開発していた」

ミラの話をしいたクレインは思わず席から立ち上がる。

「人体実験を？まさか、そこまで！？レオン……」

クレインは俺を見る。俺は静かに頷いた。

俺の頷くのを見たクレインは落ち着きを取り戻し、席に座る。

「嘘だと思いたいが……事実とすれば、すべてのつじつまが合う」

「実験の主導者はラ・シュガル王……ナハティガルなのか？」

「そうなるでしょう」

「……」

「……ドロッセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を離れていただきたい」

そう、クレインが言うとミラは席を立ち上がる。

俺もそれに続いて立ち上がる。

ジュードも立ち上がり、クレインに向かって言った。

「ありがとうございます、クレインさん」

そのまま、クレインは何も言わずにその場を離れた。

俺達も屋敷を出て、街を出るために入口まで向かうことにした。

入口へ向かう途中、アルヴィンを発見した。

アルヴィンも俺たちに気づいたのか挨拶をしてきた。

「よ」

「アルヴィン！」

「アルヴィン君、ヒドイよー！バカー、アホー、もう略してバホー！」

そういってアルヴィンに噛みつこうとするティポをミラが止めた。

「なぜ、私たちをクレインに売った？」

「売ったなんて人聞きの悪い。シャール卿が、今の政権に不満をもってるってのは有名だからな。情報を得るには、うってつけだ。交換で、こっちの情報をだしただけ。いい情報聞けたろ？」

そういうアルヴィンにミラは少し黙り、話しを進める。

「ラ・シュガル王ナハティガル……こいつが元凶のようだ。ナハティガルを討たねば第二、第三のクルスニクの槍が作られるかもしれん」

ミラの言葉に戸惑いを隠せないジュードがミラに聞いた。

「王様を討つの……？」

「ああ。君たち国民は混乱するだろうが、見過ごすことはできない」

「うん……人から無理やりマナを引き出して犠牲にするようなこと、放っておけない……」

「ああ。ミラが言うとおり、国民は混乱するだろうが……仕方がない」

俺達がそんな話をしていると、兵士たちが集まり始めた。

「お前らは……手配書の！？」

「はっ、往来で堂々としすぎたかもな」

剣を構えようとするミラ。そこへ、

「南西の風2……いい風ですね」

「執事さん？」

そう、現れたのはローエンだった。

そして、ローエンは俺達を見て、こう言った。

「この場は、私が……」

そういい、兵士たちに背を向けるローエン。不思議に思い兵士がローエンに言う。

「おい！じいさん！こっちを向け！何を企んでる」

前に向く際に、ナイフを空へ向けて投げた。これには兵士たちは気づいていない。

「おおっと。恐い恐い」

両手を振うローエン。

「おや？後ろのお二人。陣形が開きすぎていませんか？その位置は、一呼吸で互いをフォローできる間合いではないですよ？」

ローエンに言われて後ろの兵士たちは近づく。

「貴様……余計な口をきくな！」

ローエンが勝手に陣形の事を話すと怒りだす兵士。

「そしてあなた。もう少し前ではありませんか？それでは、私はともかく後ろのみなさんを拘束できません」

「ふん」

そう言われ、下がる兵士。

「いい子ですね」

そういうと……

ポォン！　ポォン！ポォン！

先ほど投げたナイフが地面に刺さり、３人の兵士たちを拘束した。

「ぐうっ！これは……」

驚き、慌てる兵士たち。

「では、これで失礼します。さぁ、みなさんこちらへ」

兵士たちに一礼し、俺達を案内するローエン。

ローエンに案内され、俺達は先ほどまでいたシャール家のある区域に来ている。

そして、ミラはローエンに俺たちに何か用があるんだろうと聞くと、ローエンは俺たちにお願いをしてきた。

そのお願いとは…

強制微用によって連れて行かれた民を連れ戻すためにクレインが連れて行かれたところへ向かったが、ナハティガル王は反抗者を許す男ではないと話すローエン。そこで、俺達に力を貸してほしいと頼んできた。

そして、話しを聞いて結論はミラに任せる。

「いいだろう。あれを使おうというナハティガルの企みは見逃せない」

「ああ、それに俺にとってクレインは数少ない親友。あいつに何かあったらドロッセルも悲しむだろう。俺は行くぜ」

皆も、行くといい、ローエンにお礼を言われる。

「お礼はクレインを助けてからだぜ？」

「フォフォフォ、そうですね。民が連れ去られた先は、バーミア峡谷。急ぎましょう！」

俺達は行動を開始した。クレイン＆住民救出作戦へ！

第１４話　クレイン&住民救出へ（後書き）

今回はローエンが登場！ローエンはお爺さんなのにカッコいいと思うのは俺だけでないはず！特に秘奥義の時は物凄くかっこいいと感じました。歳を取っただけはだてではない！ということでしょうね。

次回もお楽しみに！

第１５話　バーミア峡谷での戦い

～レオンＳＩＤＥ～

俺達はクレインや住民達を救出するためにクラマ間道に出ると魔物が待ち伏せしていた。

「先を急いでいます。どいていただきますよ！」

「こっちは親友の命や住民達のいのとが懸かっているんだ！てめえらにかまっている時間は無いんだよ！」

そういい、俺達は戦闘を始めた。

戦闘が始まると俺達はローエンの指示に従い、戦いを始める。さすが指揮官（コンダクター）の異名を持つ人だ。

そして、

「脈動する大地」

「全てを押し砕く」

俺とローエンの共鳴（リンク）アーツを発動させる。

「「アースクエイク！」」

俺とローエンで発動したアースクエイクは地面を次々に割り、魔物達を巻き込み、殲滅させた。

「爺には少し疲れますな」

「まだまだ現役だろ？」

セリフも決めて、戦闘は終わった。

それから何回か魔物達と戦い、ようやく、バーミア峡谷へ到着した。

そこはかなりの高さを誇る峡谷であった。

「もしかして、ここ登るのー？疲れちゃうよー」

ティポが峡谷を見てそういった。

そして、俺達を狙う影を俺は発見した。

即座に俺は行動し、撃ってきた矢を剣で弾き、撃った兵士を斬り倒した。

ザン！

ドタ！

カチャン

「ふぅ……」

「お見事」

ローエンが俺の鮮やかな剣使いを見て、そういった。

「あの兵士、ミラを狙っていたからな。すぐに倒してやったぜ」

矢の先にはミラがいたので、いつも以上のスピードで兵士のところまで跳躍し、切り倒したのだ。

そして、俺とミラはふっと何か異常な力を感じ、その方を見ると……紫色に光る洞窟を発見した。

「これは……イル・ファンで感じた気配……？」

「なになに？お化け？」

「まさか……ここにもあの装置が？」

ジュードもイル・ファンにあった装置のことを言う。

「急ぐぞ」

ミラに言われ、俺達は洞窟の中へ。

洞窟の中に入ると入口に術式が展開され、中では強制的にマナを吸収する装置が……。

中にはカラハ・シャールの住民やクレインの姿があった。

「ぐうう……」

苦しんでいるクレインを発見し、声を上げるローエン。

「クレイン様！……やはり人体実験を行っていましたか」

ローエンが何かショックを受けた表情をしているが、今はそんなときではない。クレインの命がかかっているんだ！

ミラは術式に手を触れようとするが、俺が止めた。

「それに触るなミラ。手が吹き飛ぶぞ」

ピク

俺に言われたミラは触れる寸前で手を止める。

ミラ達はどうしたらここに入れるかを話しているが、俺は剣を構える。

「レオン？」

それに気づいたミラが俺の名を呼ぶ。みなも、そんなミラにつられ俺を見る。

「邪魔な術式だな……人の親友の命をなんだと思っていやがる！剣よ！真の姿を現せ！」

俺はマテリアルブレードの二振り……ヴォーパルソードとフランベルジュを1つに合わせ……エターナルソードにした。

その光景に驚くミラ達。

「そんな術式……この一振りで消し去ってくれる！月牙……天衝！」

エターナルソードの刃先から超高密度のマナを巨大化させた斬撃そのものを放出し、術式と激突。

土煙が舞う中、術式にヒビが入る。

「何と！？あの頑丈な術式を力技でヒビを入れるとは！」

「レオン……凄い……です！」

「レオン君すごーいー！」

「なんて奴だ」

「す、すごいよレオン！」

皆が驚く中、ミラだけは驚いていなかった。その理由は、

「（あの二振りの剣が合体する時、一瞬だが強力なマナを感じた。それにあの剣、何か力を秘めているな。レオン……お前……何故そんな剣を？）」

と、レオンの持つ剣を不思議そうに見ていた。

そして……

「出力……全・開！」

巨大化した斬撃の大きさが増し、術式を破壊した。

「よし！行くぜ皆！」

俺はエターナルソードをヴォーパルソードとフランベルジュに戻し、鞘に納めると皆にそういって中に入った。皆も俺に続いて中に入り、アルヴィンはコアを破壊した。他の皆は閉じ込められてマナを強制的に吸収される人達を解放した。

「旦那さま！」

クレインは自力でドアを開け、外に出てきたのはいいがマナを吸収されていた影響で足元がおぼつかない。

倒れかかるクレインをローエンは受けとめた。

しかし、受けとめられたクレインは気を失っていた。

少ししてクレインが目を覚ました。

「……うう」

「気がついた？」

エリーゼは心配そうにクレインを見て言う。

クレインは何か申し訳ないような表情でローエンに言う。

「すまない。忠告を聞かずに突っ走った結果が、これだ……」

「ご無事でなによりです」

主人の無事なことに安堵するローエン。そこへ、ミラはクレインに聞いた。

「ナハティガルは、ここに来ているのか？」

「僕も、あの男を問い詰める気で来たのですが、親衛隊に捕えられてしまって……」

「そうか」

残念そうな表情をするミラ。

「もーこんなとこ、早く外に出よーよー！」

「だな。長居は無用だ」

ティポの言うことに賛成するアルヴィン。

だが、

ポォォォン！

コアがあったところの部分が光を発し、

【フォオォォォォォォォ！！】

虫のような……謎の魔物が誕生した。

「な、何こいつ……！？」

「来るぞ、構えろ！」

ミラの言葉と共に魔物は俺達へ向かって突っ込んできた。

「くぅ！こうも宙に浮く敵が厄介だとはな！」

ミラは剣を構えて切りかかるが魔物は当たる瞬間、宙に浮かんで避ける。ジュードとアルヴィンの攻撃も避ける。……あれ？何か強くなってないか？

「ジュード、アルヴィン！俺・ミラ・エリーゼ・ローエンの精霊術で魔物を地面に叩きつける！そこへ攻撃を入れてくれ！」

『わかった！』

2人は離れ、俺達は精霊術を使う。

「ネガティブゲイト！」

エリーゼの精霊術が魔物の足元中範囲に無数の手のようなものが出て来て魔物を引きずりこもうとする。そこへ、

「エアプレッシャー！」

ローエンの地属性で強力な圧力で魔物を地面に落とし、ミラと俺でアーツを使った。

「「こいつで地に落ちろ！！グラビティ！！」」

強力な重力の精霊術で魔物の羽を潰し、飛べなくした。

「今だ！ジュード！アルヴィン！」

「いくよ、アルヴィン！」

「いつでもいいぜ！」

「「転留追刃穿！！」」

水を纏った蹴りで蹴り倒し、アルヴィンの銃で追撃をした。

そして、魔物は……

【キュウゥゥゥゥゥ】

完全に動かなくなった魔物にミラが止めを刺そうとするが俺が止めた。

「レオン。何故止める！」

俺は魔物を見ながらミラに言う。

「ミラ、あいつをよく感じてみろ」

「何？」

俺にそう言われ、ミラは魔物を見る。

すると、

魔物の体から光が出始め、光の粒子のようになっていく。

そう、これは……

「微精霊だね」

「ああ」

ジュード呟きに俺は頷いた。

すると、ミラが俺に言う。

「レオン。ありがとう。私は危うく微精霊を滅してしまうところだった」

「ふぅ、気にするな。俺は気にしていない」

俺とミラは見つめ合い、

「「……／／／／／／」」

恥ずかしくなったのか顔を逸らす。

「さぁ、カラハ・シャールに戻りましょう。みな、大量にマナを吸い取られて相当弱っています」

ローエンに言われた俺達は急いでカラハ・シャールへ戻って行った。

第１５話　バーミア峡谷での戦い（後書き）

ようやくここまで来た！次の話しでストーリーでの出来事が変わります！プレイしてわかっている人はいると思いますが、この後あるキャラが死亡しますよね？そこで、レオン君のあるものが約になって死ななくなります！……わかる人、いるよね？

そして……まさかの月牙天衝の登場ですｗ何で出したかと言うと……作者が好きな技の１つだからです。

次回もお楽しみに！

第１６話　連行

～レオンＳＩＤＥ～

カラハ・シャールへ戻るとドロッセルが門のところで待っていた。

クレインの事を見ると、近づいてきた。

「お兄様！」

近づくドロッセルと共にいた兵士にクレインは言った。

「僕は大丈夫だ。それよりも、この人たちを早く病院へ」

クレインの指示に従い、兵士はマナを大量に吸い取られた民達を病院へ連れて行った。

屋敷に戻り、少しして落ち着きと疲れくぉ回復させたクレインがドロッセルとローエンを連れてきた。

「微集された民もみな、命に別状はないようです」

「みなさん、本当にありがとうございました」

「私からも、お礼を申し上げます。ありがとうございました」

3人にお礼を言われ、そして民達に命の別状がないことがわかったジュードは安堵していう。

「みんな無事でよかったです」

「では、私たちは行くとしよう」

ミラはもう大丈夫だと思い、カラハ・シャールを出発しようとするが、

「ちょい待ち、ミラ」

「なんだ？」

俺が止める。

「クレイン。ローエン。ガンダラ要塞の様子はどうだ？」

俺の質問にクレインが答える。

「どうだ……と言われても、あそこを突破する気なのか？」

「その通りだ」

俺が答える前にミラが答える。

ミラの返答に驚く俺達。

「……ミラ。それは無理だ」

「何故だ」

「あそこは……ガンダラ要塞を強行突破するのは今は無理だ。あそこには要塞の守りの要であるゴーレムがある。あれは並大抵実力がないと無理なんだ。それに……」

俺の言葉にクレインが続く。

「この時期のガンダラ要塞は非常体制を取っているはずです」

「だろうな……俺が昔、強行突破してみようと思って向かったことがあったが、兵士はともかく、４体のゴーレムの相手は苦労した。結局、逃げ帰ったがな」

俺の言ったことにアルヴィンが驚く。

「数年前にガンダラ要塞に侵入して兵士の殆どを行動不能させたってバカがいると聞いたが……まさかレオンだったとは」

「でも、一体どうやって？」

ジュードが疑問を持ったのか俺に聞いてきた。

「ミラの言ったことを実行した。真正面から堂々と小細工なしで……だ！門は精霊術で吹き飛ばした。おそらくあの頃よりも頑丈になっているだろうな」

俺は懐かしむように言う。

「フフ。僕の手のものを潜ませて通り抜けるよう手配してみます」

「僕たちに協力したりして大丈夫ですか？僕たち、軍に追われている身ですし……」

ジュードはクレインのことが心配で、聞いてみている。

「元々、我がシャール家はナハティガルに従順ではありませんし、先ほど軍に抗議し、兵をカラハ・シャールから退かせるよう手配したところです」

「これ以上軍との関係を悪化しようがない、ということか」

ミラがそういうとクレインは頷いた。

その後、話がまとまり、ガンダラ要塞への手配をしてもらうことになった。

その日の夜、俺とローエンは一緒に精霊術をミラに教えていた。剣を俺とアルヴィンに、精霊術も俺が、それに加わってローエンが教えた。

帰ってくる途中、ジュードを見つけ、ローエンが話をしてきた。ジュードはエリーゼのことで悩んでいたようだった。

「全く、本当にお節介なだなジュードは」

「そうだな。あの年であんなにもお節介なのには理由があるのだろ

うな」

俺とミラはローエンが去ってから2人っきりで星を見ていた。

「星は……ニ・アケリアで見ているのを同じだな」

「ああ。星の位置はどこに居ても変わりはしないと思う」

俺といる時のミラはいつもの表情とは違う。今時の女の子……俺が惚れた女性の素顔だ。

俺がじぃーっとミラのことを見ているのに気付いたミラが俺を見て言う。

「レ、レオン？そ、そんなに見つめるな／／／恥ずかしいではないか／／／」

ミラは少し困ったなと言う風なしぐさと共に顔を紅くする。

「す、すまない／／／」

そんなミラにつられて俺まで顔を紅くしてしまった。

紅かった顔が収まるとミラは俺にあることを聞いてきた。

「レオン……」

「ん……？なんだ？」

ミラが真剣な表情になる。

だが、それはすぐに消える。

「あ、いや……やはり……いい。何でもない」

「……？変なミラだな」

おかしなミラだなと思い、俺達は少し話しをして、部屋に戻っていった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

「私は、何を言おうとしたんだろうな」

私は部屋に戻ってから先ほどの私の行動について考えていた。

ここに戻ってきたときに、私はドロッセルに言われた。

「ミラはレオンさんのことが……好きなんですか？」

好き……本で読んだことがある。人は心がひかれることや気に入ることを好きと言う。だが、ドロッセルにそのことを言うとこう言ってきた。

「私が言う好きと言うのは男性として……男として好きか……ということよ」

？好き……男として〝。私はこれを聞き、顔を紅くしたのを今でも覚えている。だが、私には男を好きになる……ということがわからない。だが、ドロッセルがレオンのことが好きだということを聞いた時、嫉妬した時と同じように胸が痛くなった。

私は……どういうしたのだろうか。一体、私の身に何があったのだ？わからない。だが、レオンのことを考えると……心と身体が熱くなるのは確かだ。この気持ちを……いつかレオンに言えば、収まるのだろうか？

いや、駄目だ。私には使命が……しかし。先ほどもこのことが頭を過ったせいで言えなかった。
ふふ、私も案外情けないな。

さて、明日も早い。寝るとしよう。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

次の日の朝。俺はクレインに手配の方を聞いてみると、まだわからないということなのでローエンに手配状況の確認に向かわせるかと言われ、頼んだ。

んで、それを確認しに行こうとするローエンを送ろうとするために全員で屋敷を出ていた。

そんな中、ドロッセルがこんなことを言いだす。

「エリー、ミラ。お買い物に行きましょう！レオンも来て！」

ミラは行ってくるがいいといい、それを見いたエリーゼとドロッセルがミラの両サイドの腕を掴んで連行して行こうとする。

「お、おい」

焦るミラ。そんなミラを見ながら俺は笑った。

「レオンも行きましょう」

もう片方の手で俺の腕を掴む。

「お、女同士なんだし、楽しんで……」

行って来いと言おうとするが、

「駄目よ。女の買い物に男が来て荷物持ちをお願い」

じっと俺を見るドロッセルに俺は折れた。

「わかったよ。行くから離してくれ」

「そう、よかったわ」

結局、ミラはエリーゼとドロッセルの２人に強制連行されていった。

俺はそれについていった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

レオン達が去った後、クレインはこれからのことをジュード達に話していた。

「この今の幸せのために僕も決心しなければいけない……やはり、民の命をもてあそび、独裁に走る王に、これ以上従うことはできない」

クレインの言葉を聞いた2人はクレインに言う。

「……反乱をおこすのか？」

「……戦争になるの？」

頷くクレイン。

「ナハティガルの独裁は、ア・ジュール侵攻も視野に入れたものと考えられます。そして彼は、民の命を犠牲にしてでもその野心を満たそうとするでしょう。このままでは、ラ・シュガル、ア・ジュールとも無為に命が奪われる」

クレインの言葉にローエンの表情に少し影が映る。

「僕は領主です。僕の為すべきこと、それは、この地に生きる民を守ること」

「……なすべきこと……」

ジュードはクレインの言うことを復唱する。

「そう。僕の使命だ。力を貸してくれませんか？」

「……ぼ、僕は」

戸惑うジュードに

「僕たちは、ナハティガルを討つという同じ目的をもった同志です」

クレインは手を差し伸べる。

そんなクレインの手を握ろうとするジュードであったが、突如、クレインの胸に矢が。

そのまま倒れるクレイン。

「旦那さま！」

「クレインさん！」

ローエンとジュードは倒れたクレインに近づき、

「ちぃ！！」

ドンドン！

アルヴィンはクレインを狙撃した敵を撃ち殺した。

「早く治療を！」

そういい、クレインを起こすローエン。

「う、うん……」

ジュードは急いで治療をしようとするが、

「あれ？この矢……胸に刺さってないですよ！？」

ジュードは矢の見ると……確かに矢が刺さってない。

「これは一体……」

不思議がるローエンにクレインは言う。

「ハハ、レオンに助けられたな」

そういい、矢の刺さったところから何かを取りだす。

それは、

「ペンダント？」

「これは数年前、レオンが友情の証と言って僕にくれたものです。それを僕はいつもここに入れていました。まさか、レオンとの友情の証が僕を守ってくれるなんて」

クレインは驚いていた。

だが、ローエンはあることに気付いた。

「これは……まずいです！お嬢様達が危ない！」

『！？』

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

あの後、俺はミラ達の買い物に付き合っている。最初は嫌々だったミラもエリーゼとドロッセルの雰囲気に感化されたのか楽しんで買い物をしている。

チラ

俺はガンダラ要塞側の入り口を見る。確か今頃、クレインはジュード達と話すをしているはず。クレインに渡したペンダントには矢避けの加護の力が付加されたものがある。それに向かって矢が当たるようにしてあるし、クレインが死ぬはずがない。

「そういえば、ミラ。あなたの持っているそのペンダント。もしかしてレオンが？」

「ああ、2年ほど前に私に作ってくれたのだ」

ミラがペンダントを見せる。

それを見た装飾職人は驚き、声を上げた。

「ほぉ！これはすごいな。プロ顔負けなほどのでき具合ですね」

職人がほめるほど、俺が作ったペンダントは綺麗なんだろうな。

「……そうだ。店主、これを使ってペンダントにできないか？」

ミラはそういうとガラス玉を取り出した。

「ミラ、これでどうしたんですか？」

「昔、人間の子どもにもらったものだ」

ミラが昔話をし、ガラス玉をペンダントにしてもらった。

そして、その直後だった。

「わぁ、やめてください！」

俺達は声のした方を見ると、別の鎧を着た兵士たちが街の住民達を殴ったりしている。

「乱暴はおやめなさい！一体なんのつもりです！ラ・シュガル軍は、この街から退去するよう領主からの命を受けたはずですよ！」

ドロッセルが兵士たちに向かって言った。

すると、兵士たちの後ろから男……ジランドが出てきた。

「あなたは……？」

「シャール家の者です！」

ドロッセルをが自分の身分を言うと兵士の１人が言う。

「ふん、何も知らぬ小娘が」

そういう兵士にジランドは手を上げて言う。

「これは王勅命による反乱分子掃射作戦。おとなしくしていただきましょうか」

「な、なんですって？」

ジランドの言うことに驚くドロッセル。

「捕えなさい。謀反を画策した領主家シャールの者です」

「ミラ君！レオン君！ドロッセル君！早く逃げよー！」

「ああ。何かが起きている。完全に包囲される前に退くぞ。遅れるな。三人とも」

「う……うん！」

ミラの言うことに頷くエリーゼとドロッセル。

「誰にもの言ってんだよミラ」

俺は剣を構えながら言う。

しかし、倒しても倒しても湧いてくる兵士たちによってついに、

「ぐあぁ！」

「きゃぁ！」

「きゅう……」

攻撃を喰らって気を失ったミラとエリーゼ、何故か気を失ったティポ。ドロッセルは俺の後ろにいる。俺は４人を守るように戦う。

「はぁはぁ……（さすがに気絶した４人を守りながらはキツイな）」

そう、考えている時に俺の後ろに現れた兵士に雷の精霊術を

「がぁぁぁぁぁ！！！」

モロに受けた俺は視界がかすんできた。

「く、糞が！」

俺は剣を杖の代わりにして立っている。

「な、何をしているのです！は、はやくやってしまいなさい！」

腰を抜かした（振りをしている）ジランドの命に兵士たちは俺に向かって雷の精霊術を放つ。

バチチチチ！！！

「ぐぅあああああああ！」

全方位からの雷の精霊術を食らった俺の視界が黒くなってい……。

バタン

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

第16話　連行（後書き）

あわわわ……レオンがやられてしまった。なんてこった！
……と言ってみたり。まあ、こういう風になりました。
皆さん、読んでいてまさかレオンまでも捕まるとは！と思ったでしょう。
このようにした方が面白くなりそうだったのでこうさせてもらったぜ！

そして、何より原作よりも変わったことは……クレインが死んでいないこと！
こんないい人を殺させるなんてもってのほか！生存させてみました。

まあ、これが後の物語にどう影響するかは……考えていなかったりｗ

次回もお楽しみに！

第17話　身代わり（前書き）

今回のこの話はある人が感想で書いてくれたことを参考にしています。
タイトルの意味がわかる人はいると思いますよ。

第17話　身代わり

～レオンＳＩＤＥ～

「う……こ、こは……」

俺は身体の痛みと共に目を覚ますと……

ジャリィィ

両手両足には鎖でつながれ、動けないようにされていた。近くにミラ達の気配もない。俺だけ別の牢屋に入れられたか。

すると、

ブシュゥー

ドアが開き、ジランドが中に入ってきた。

「おお、お目覚めか」

「ああ、最悪な目覚めだよ」

何が悲しくて目を覚まして最初に見るのがこいつなんだよ。

「さて、私にもあまり時間がありません。イル・ファンの研究所から奪った『カギ』はどこですか？」

「言うわけないだろ？バカかお前は」

俺がジランドをバカにすると奴は額に青筋が浮かび上がる。

「……ちぃ！あの女と同じか……まあ、いい。どうせ貴様はここからは出られない。出れたとしても……その足についているのは呪環だ。この基地内にある術式に反応し、術式の外に出ると爆発する！アハハ！貴様はここからは出られん！……ん。では、またいつかお会いしましょう」

そういい、ジランドは出て行った。さて、これからどうするかな。

ジランドが去ってから数分後。

「あ、そうだ。あの状態になればいいじゃん」

俺はあることを思いついた。

そのあることとは……

「ウオォォォォォ――――――!!!!」

雷のマナを纏い、雷化した。

「始めっからこれをすればよかったぜ。さて、このウザったい鎖を破壊して……フンヌゥ!」

バキィ!バキバキバキ!ジャキィィィン!

鎖を破壊し、上を見る。太陽の光がはいらないところを見るとここは地下か。原作じゃあ地下牢何てなかった気もするが……まあいいや。

「さて、ミラ達は……あらら。もう、制御室にいるのか。じゃあ、俺も急ごう。近道……するか」

俺はそういうとミラ達の気配のする方を見る。

そして、

「行くぜ！雷速瞬動」

雷を全開にして壁にぶつかる。壊す。ぶつかる。壊すを続けていった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

私たちは今、制御室にいる。レオンがどこにもいないことを考えると私たちとは別の場所に閉じ込められているのだろう。

そして、実験中だった奴ら……ジランドに聞いた。

「おい、レオンはどこだ！」

私は剣を構えながら聞いた。すると、ジランドはこんなことを言ってきた。

「レオン？ああ、あの男ですか。奴ならこの基地内の地下牢にいますよ」

「くっ！何故レオンだけを別のところで閉じ込めた！」

私がそう聞くと奴は笑い始めた。

「クックック！簡単ですよ。奴は人間であるのにあの強力なマナの量。見逃すはずないでしょ？」

「なっ！？貴様！レオンを人体実験に使う気か！」

「その通りですよ。それに奴は脱出できませんよ。何たって……この基地内では最高硬度の鎖でつないであるのでね。アーハッハッハ！」

私の前で！レオンのことをまるで道具のように！

「貴様、許さん！」

私は剣で奴を切りかかろうとしたその時！

ズドォォォォォォン！！！！！

制御室の壁を誰かがブチ抜いてきた。いや、こんなことをできるのはあいつしかいない！

「ハロ～。ジランド、すぐに会ったな」

声のする方を見ると、そこには……雷化したレオンが堂々と立っていた。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「さあ、どうする？俺が来たからには……わかっているな？」

「くぅ！一体どうやって！」

ジランドは悔しそうにしている、しかも本気で。

だが、その悔しい表情が直った。その理由が、

「くだらんな」

別のドアが開き、中からナハティガルが現れた。

「……ナハティガル！」

ミラは突然現れたナハティガルを睨む。

「実験に邪魔が入ったのか？」

「はっ。しかしデータはすでに採取しました」

「よくやった」

そういい、ナハティガルはミラを見る。

「ナハティガル！」

ミラは抜いていた剣でナハティガルに切りかかるが腕で止められた。

「貴様のくだらん野望、ここで終わりにさせてもらうぞ！」

そういうミラを見てナハティガルはジランドを目線で見て言う。

「この者が？」

「はい」

ジランドの言葉を聞いて呆れた表情でミラに言う。

「貴様のような小娘が精霊の主だと……？この程度で笑わせる！」

そういい、ミラの腹を殴って放り投げた。それを俺はキャッチする。

「大丈夫かミラ？全く、いきなり切りかかるな。奴は仮にも一国の王だぞ」

「ごほごほ！す、すまない」

腹を抑えながら俺にすまないというミラ。その表情から見てとれる感情は悔しさ。前の自分ならこんな相手に負けないのに……そういう表情をしている。

そんな俺達の元に、

「ミラ！レオン！」

ジュード達が駆け付けた。

「儂は、クルスニクの槍の力を持ってア・ジュールをもたいらべる」

上から飛び降りたジュードがナハティガルに言う。

「それでカラハ・シャールを……！どうしてこんなヒドイことばかり……」

「下がれ！貴様のような小僧が出る幕ではないわ！」

「ナハティガル王！」

ナハティガルはジュードを無視し、俺とミラを見る。

「貴様らなどに我が野望阻めるものか」

そう言ってもっていたミラの剣を俺とミラめがけて投げる。

俺は動こうとしたが、急に身体にしびれる感覚が。

「（くっ！カラハ・シャールで電撃を受け過ぎたか！身体が動かん！）」

そのまま剣は俺の目の前……で、ローエンの投げたナイフで弾かれる。

「ぐうっ！」

ナハティガルはローエンを見て驚いた。

「インベルト、貴様か……！？」

ナハティガルの呟きに、１人の兵士が反応した。

「ローエン・Ｊ・イルベルト……」

「イルベルト？歴史で習ったあの『指揮者（コンダクター）イルベルト』！？」

ローエンの正体を知ったジュードは驚き、声を上げる。

「国も軍も捨てたあなたが、今更なんのご用ですかな？」

ジランドがそう言うが、ローエンは無言のまま、ドロッセルに近づく。

「お嬢様。無事で何よりです。心配いたしました。旦那様も心配なさっていますよ」

そんなローエンを見て、ナハティガルは鼻で笑った。

「ふん、落ちぶれたな、イルベルト。今の貴様には、それが相応だ」

「陛下、こちらへ！このような者どもにこれ以上構う必要はありません」

ジランドがそういうと、ナハティガルはドアの先へ進んでいった。

それを見た俺は小声で自分にリカバーを唱え、身体の痺れを解いた。

「逃がさん！」

「逃がさねえぞ！」

ミラは壁に刺さっていた剣を抜き、俺と共に走り、ドアの向こうへと向かうと同時にドアが閉まる。

俺とミラはそのまま、ナハティガルの後を追った。

「待て、ナハティガル！」

「逃がしはしないぜ！」

ようやく追いついた俺とミラはナハティガルを呼ぶ。

「はぁ！」

ミラは精霊術を発動させるが、例の術式が邪魔をして届かない。

「無駄だ、自称マクスウェル」

「……答えろ。なぜ黒匣（ジン）を使う？何故民を犠牲にしてまで必要以上の力を求めるのだ？王はその民を守るものだろう？」

「ふん、お前にはわかるまい。世界の王たる者の使命を！己が国を！地位を！意志を！守り通るためには力が必要なのだ！民は、そのための礎となる些細な犠牲だ！」

高らかに言うナハティガルを俺とミラは冷めた風に見ている。

そして、ミラが言う。

「……貴様はひとつ勘違いをしている」

「なんだと？」

ナハティガルはミラの言葉に反応する。

「このようなもので自分を守らなければ……」

「黒匣（ジン）の力に頼っているような自らの絞めを唱えることができない奴に」

「「できることなど何もない！！」」

俺は、この後の展開を知っている。故に俺が取るべき行動は……

「なすべきことを歪め、自らの意志を力として臨まない貴様などに！」

「はっ！儂に傷ひとつ負わせられぬお前たちが何を言っても負け惜しみにしか聞こえんわ」

そう言う、ナハティガルは勝ち誇った表情をする。

だがな、

「ナハティガル。貴様は少しミラを……いや、俺を見くびっているな」

「なんだと？」

「レオン？まさか……お前！」

ミラは何かに気づいたのか俺を見る。

「俺がこんな枷ぐらいで……止められるとは……思うなあああああ！」

俺は術式の外に出た。

それと共に爆発が俺を襲うが、気にしない。

「バ、バカな！？」

斬り飛ばしたナハティガルはあり得ないものを見るように俺を見る。

「俺が一番……嫌っていること。それは……」

シュドーーーーーン！

再び爆発し、

「うぉお！」

爆風に巻き込まれるナハティガル。

「ふ、ふはは！自称マクスウェルの付き人もこの程度か！」

そういう、ナハティガルの声をたどって俺は現れた。

「ミラが傷ついた姿を見ることだ！うぉおおおおおおお！！！」

「なんだと！？」

「ゼリャアアア！！！」

ザシュ！

「ぐあああああああ！」

バシュゥゥゥン！

「ぐぅうおおおおおお！」

腕を浅く切ったが、あまり効果は無かったか……だが、

「ハァハァハァ……」

俺は立っている。

「バ、バカな！？何故立っていられる！？あの爆発で立っているなど……貴様、本当に人間か！？」

ナハティガルはあり得ないという風に俺を見る。人間…かぁ。

「あいにく？まだ人間さ〃」

「くそぉ！」

バキッ！

立ち上がったナハティガルは俺を殴り飛ばす。殴り飛ばされた俺はミラの近くまで来た。

ドサ

「レ、レオン……」

どうようするミラ。その表情はナハティガルへ向ける表情は……怒りでいっぱいだった。

「貴様あああああああああ！！！」

斬りかかろうと走り出すミラを俺は止めた。

ガシッ！

「な、何をするレオン！」

「バカ……やろう！お前まで……こんなありさまになる……ぞ」

俺は苦しいなか、自分の身体を見るように言う。

「くぅ！ジランド！撤退だ！急いで馬車を出せ！」

「は、はいぃ！」

ナハティガルは急いで馬車に乗る。

それと共に俺はミラの腕を掴みながら気を失った。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

レオンが……レオンが私の…私の代わりに……爆発…した？

私は信じられないものを見るようにレオンを見る。

いつもの元気で私を励ましてくれた……あの笑顔が今では傷だらけ……私は、使命が大事だ。だが……だが！レオンもそれぐらい、私の中では存在が大きい！くぅ！私に治癒術が使えれば！

私が自分の力不足を悔いていると、

「ミラ！レオン！」

「はっ！」

声のした方を見るとジュードや皆が走ってこちらに近づいてきた。

エリーゼとドロッセルはレオンの状態を見て目を逸らす。

「こ、これって?!」

ジュードは急いで治癒術をし始める。

「エリーゼも手伝って!」

泣きそうな表情をするエリーゼもジュードと一緒に治癒術を使う。

「頼む……レオンを……レオンを助けて……くれ」

その言葉と共に私は目元に何かを感じた。これは……涙?

「どうして!?どうしてこんなことになっているの!?」

「そんなの……わかるわけねえだろ!」

動揺するジュード、珍しく怒ったような声を上げるアルヴィン。

「いたぞ、脱走者はこっちだ!」

私が泣いていると、兵士たちが集まり始めてきた。

「ともかく、これ以上は無理だ。カラハ・シャールに戻ろう」

一生懸命にレオンの傷を治療するジュードとエリーゼも一旦、その手を止める。

だが、

「ゴーレムを起動させろ！」

それを見たローエンが急いで確保してあった馬車を動かす。しかし、予想よりもゴーレムの動きが早い。

「レオン……すまない」

私は涙が止まらなくなっている。マクスウェルの私が……涙を流すなんて……

そんな時だ。私の目元にレオンの指が当たり、涙を指で拭いてくれ

たのは。

「泣く、なよミラ」

掠れた声で私の名前を呼ぶレオン。

「ゴー、レ、ムか？」

「あ、ああ」

外にいるゴーレムが馬車に近づいてくる。このままでは！

「ぐ、ぅ」

「レオン！？」

レオンは無理やり身体を起こし、手を一番近くにいるゴーレムに向ける。

「五、柱、鉄、貫」

その言葉と共に、ゴーレムの体に巨大な五本の鉄柱が撃ちつけられた。

「今だ……い、け」

そういい、レオンは再び眠りについた。

そして、私たちはそのままガンダラ要塞を脱出し、カラハ・シャールへと戻っていった。

第17話　身代わり（後書き）

ああ、ミラの代わりにレオンが……。
レオンが代わりに爆発されてしまいました。
何で、立っていらたのかと言うと、オリジナルスキル「リバース」のおかげです。ミラがいる・意識がある……この二つが揃って初めて発動するスキルです。
これがあったからボロボロな身体で動くことができました。
最後の五柱鉄貫もそうです。最後の力を振り絞ってこれがやっとでした。
さて、次回はル・ロンドへ行くことになるな。
次回もお楽しみに！

第１８話　名医のいるル・ロンドへ

～レオンＳＩＤＥ～

「うぅ……ここは……」

俺は身体に痛みを感じながら目を覚ました。最初に目に入ったのはシャール家の部屋。

俺は身体を起こすと俺のすぐ横でミラが寝ていた。

「うぅ……レ、オン？」

俺が身体を起こす時の少しの動きで目を覚ますミラ。

そして、意識が完全に覚醒したミラは俺を見て、

「レオン！」

抱きついてきた。

「よかった……本当によかった」

身体を震わせながら俺に抱きつくミラ。そんなミラの頭を撫でる。

「心配掛けたな」

「全くだ。何故お前が……本来であれば、今のレオンの立ち位置は私だったのだぞ？」

ミラはムスっとして俺に言う。よかった。ミラが元気で。

俺とミラがそうしていると、

ガチャ

ドロッセルが部屋に入ってきた。

「レオンさん！よかった目覚めたのね！」

「あ、ああ。ドロッセルも無事でよかったよ」

「そのままでいてね！今、先生とお兄様を呼んでくるわ」

そういい、部屋を退出するドロッセル。

「さあ、もう結構ですよ」

その後、ドロッセルが連れてきた先生が俺の身体を見てくれた。

どうやら、ここに運び込まれた時は熱が酷かったみたいだ。それも今では下がっていると先生は話してくれた。

「レオン。君が無事でよかったよ。僕は大事な友を失うところだった」

「それは俺のセリフだぞ。俺が上げたペンダントのおかげでお前も無事なんだからな」

「あはは、それもそうだな」

そういいながら笑う俺とクレイン。

「そういえば、他の皆はどうしているんだ？」

俺はローエンに聞いてみると、

「エリーゼさんは下にいます。ジュードさんはアルヴィンさんを探しに街の方へ」

「……そうか」

そんな時だ。

ぐうぅぅ～

俺とミラの腹の虫が鳴ったのは。

「「／／／／／／」」

顔を紅くする俺とミラ。

「ふふ、お腹がすいているのねミラもレオンさんも」

「たくさん食べて、体力をつけてくださいね」

「食事を用意させよう」

「ミラもレオンさんのことが気になってあまり食べていないんだし、ちゃんと食事を取りましょう」

そういい、ミラは立ち上がる。

だが、俺は……

「レオン、どうした？」

不思議がるミラ。それに気づいたのかドアに向かっていた他の４人も俺を見る。

「……ハハ、これは参ったな」

「レオン？」

「……足が……動かねえ」

ピキッ

俺の言葉に固まる皆。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

医師がレオンの両足の検査をした。その結果……

「なん…だと」

私は医師の言葉を聞いて驚いた。

「残念ですが……彼はもう、歩くことは……」

医師の言葉に固まる私たち。

「原因は……なんなんですか？」

「おそらく、君たちの話しに出てきた呪環というものだね。彼女に聞いた話だと彼は何回も爆発する足で、立っていたらしいじゃないか。おそらく、その時の無理がたたったのか、下半身何回も爆発させられたか……のどちらかだね」

そ、んな……では、これは……

「私の……せいなのか」

「そんな！ミラのせいじゃないよ！」

ジュードが私のせいではないと言っている……だが！

「本当だったらレオンの位置は私だった……」

私は耐えきれず、この場から去ってレオンの元へ行った。

ガチャン！

レオンのいる部屋に入った私は、レオンに謝った。

「すまないレオン！私の……私のせいで！」

レオンは驚いたふうに私を見る。だが、私にはそんなことを気にしている暇などなかった。

「すまない……本当に、すまない」

目元に涙が……まただ、レオンが関わると私はマクスウェルからただの人間になっている。何故。

そんな時だ。

ピン！

「あた！」

私は突如、額に痛みを感じ、額を抑える。

「な、何をする！」

私はレオンに抗議した。

「バァ～カ。俺がこうなったのは俺の意志。それにな……何で俺がミラにこんな目にあわす必要がある？昔に言っただろ？『ミラのことは……俺が守る！』ってな」

「し、しかし……私を守るためにこんなことに」

「そんなの本望だな。ミラにこんな怪我をさせるぐらいなら俺がなる」

私はそのレオンの言葉に心がドキッとしたのを感じた。この胸の鼓動は……一体？

「バカもの……」

私はそういいながら無意識にレオンに抱きついてしまった。

「ミ、ミラ／／／？」

「お前はどうしようもない……バカものだ」

私はそんな……私のためにこんな怪我をしたレオンのことを……愛おしく思ってしまった。これは一体……。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ジュードＳＩＤＥ～

僕はレオンの部屋に向かったミラが心配で見に来た……でも、

ミラはレオンに抱きついていた。

その光景を見た僕の心がズキっとした。

そうか……やっぱり、ミラはレオンのことが……

僕はそのまま、そこから去った。

～ジュードＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

お、俺はどうすればいい！？こんな足じゃあ、動くこともできない。
俺に抱きついているミラを見る。
どうやら、俺が自分のせいでこんな怪我をしたと思っていたみたいだ。だが、俺はそうは思えない。
俺はただ……１人の女性……俺が惚れた女をただ、守りたかった。
ただ、それだけだ。

だ、だがそんな俺が惚れた女性……ミラが俺に抱きついて来ている。
俺はどうすればいい！？ミラはおそらく人間の男女のすることは知らないだろうし、一体どうすれば……ん？なんだ？寝息が聞こえる？

俺は耳を澄ます。すると、

「スゥースゥースゥー」

ミラが寝息を立てて、寝ていた。

そう言えば、ミラがこの部屋にいないときにドロッセルは言っていた。

「ミラはレオンさんが眠っている間にずっち不慣れな看病をしていたわ」

と、言ってたってことはあまり寝ていなかったってことか。

「お休み……ミラ」

俺はミラにそういい、眠りについた。

次の日

俺はミラに肩を借りて、下に来ている。

「レオン！」

ダキ！

エリーゼと

「レオン君ー！」

ティポが俺に抱きついてきた。

「おいおい、そんなに抱きつくなって」

俺は困ったように言うが、２人は離れてくれない。

「エリーはずっと、レオンさんのことを心配してましたし」

ドロッセルに言われ、俺はエリーゼの頭を撫でる。

「心配掛けたな」

「ずっと……心配……してた……です」

「僕もすごーく心配してたんだよー！」

「あはは、すまなかったな」

俺は笑いながら2人に言った。

「それで、レオンさん。これからどうするおつもりですか？」

「ああ、俺はル・ロンドに行こうと思う」

「え！？」

俺の言うことにジュードが驚く。何たってジュードの故郷だしな。

「ル・ロンドにいるある医師が足が動かなくなった患者を治したことがあるって前に旅の途中で寄った時に聞いたことがあってな。そこに賭けてみる」

「私は行くぞ。レオン、お前にこんな怪我をさせてしまった責任がある」

ミラが、そう言う。

そして、

「なら、僕も行くよ」

「ジュード？」

ミラは驚いたふうにジュードを見る。

「ル・ロンドは僕の故郷だし、道案内はできるよ」

「そうか。なら頼む」

「うん」

「なら、私も！」

エリーゼが自分も行くという前に俺は言う。

「エリーゼ。お前はここにいろ」

「えっ？」

「元々、俺はエリーゼをここに預けようと思っていた」

「そう、なんですか？」

「ああ。クレインやドロッセルがいるからな。安心してお前を預けられる」

俺がそう言うと不安そうにするエリーゼ。そんなエリーゼの頭を撫でる。

「安心しろ。もし、怪我が治る方法があって直るなら手紙で知らせるよ」

「本当……ですか？」

「ああ、本当さ」

「わかり……ました」

その後、話をし、エリーゼをクレインのところで預けることになった。

さらに次の日

「すまないなクレイン。馬を借りて」

「気にしないでくれ。君の足が治るのを切に願うよ」

「それでは、道中お気をつけて」

「ああ、ローエンもクレインやドロッセル、エリーゼのことを頼んだぜ」

「はい、旦那さまやお嬢様、エリーゼさんのことはお任せください」

ローエンの言葉を聞いて俺は安心し、ミラとジュードに馬を引かれ、カラハ・シャールを出た。

カラハ・シャールを出てしばらくして、雲行きが怪しくなってきたので、今日はここまでと言うことになって雨宿りもしている。

ジュードは疲れからか、寝ている。

俺はミラと話をしている。

「レオン、大丈夫か？」

「ん？ああ、心配するな」

ミラは俺に寄り添い、肩をくっ付けている。

そして、ミラは俺の首に腕をまわして何かを首にかけた。

「私からの気持ちだ。受け取って欲しい」

「ミラ、これってあの時の……」

そう、俺の首に掛かっているのはミラが捕まる前に店主に加工してもらったあのガラス玉のペンダントだった。

「ああ、レオンには前にこのペンダントをもらったからな……そのお礼も兼ねて……な？」

「フフ、ミラからの初めてのプレゼントってわけか。大事にするよ」

「あ、ああ／／／」

そして、その日の夜も更けていった。

次の日も俺達はサマンガン海停へ向かっている。

その途中、穴に頭が挟まっている魔物を見た。……あ、思い出した。
確かこいつは……

そう思い、俺は精霊術を使う。

「レオン？」

「どうしたの？」

俺の行動を見て不思議に思った2人が俺を見る。

「グレイブ」

地面から石の槍がいくつか重なり、そして、

スポン！

穴から勢いよく飛び出してきた魔物をグレイブに当たりそのまま、
空へと吹き飛ばされていった。

「おお」

「凄い」

2人はその光景を凄いと思ったのか感心していた。

そして、俺達はその日、サマンガン海停に到着した。

海停に到着すると、ジュードが船があるかを確認しに行った。

そこへ、

「ミラ様。ようやく追いつけました」

「イバル？どうしてここに？」

イバルのことを不思議そうに見るミラ。

「手配書にミラ様を見つけ、心配で馳せ参じました」

「ニ・アケリアを守る使命はどうした？」

そう、イバルはニ・アケリアを守るのが使命のはず。

「皆には説得してここまで来ました！そして、来てみたら案の定……」

イバルは俺を見、そして足を見て笑った。

「ハハハ！来て正解でした。こいつがドジを踏んでこんな怪我をするとは。ミラ様！こいつなんてほっといて自分を旅の供に……」

イバルがそういうとジュードが来た。

「イバル？何でここに？」

「ふん！そんなこと決まっている！ミラ様のお手伝いだ！それで、どうですか？ミラ……様？」

イバルはミラを見て固まった。俺もジュードもミラを見ると同じように固まる。その理由は、

「イバル、貴様もう一度言ってみろ。レオンをどうするって？」

「は、はい！こんなミラ様の足を引っ張て怪我をするような奴はほっといて自分を供に……と」

そのイバルの言葉と共にイバルは吹き飛んだ。

俺とジュードは何が起こった？とお互いの顔を見あう。

その後、ミラを見てすぐにわかった。

ミラが魔神剣を覚えたようだ。俺の使う光景を今まで見てきたんだ。使えても問題ないな。

「イバル、レオンのこの怪我は私がするはずだった怪我さ。レオンは私の代わりにこんなことになってしまった。そんなレオンになんて事を言う」

「す、すみません！ミラ様！ですが、自分であればそもそも、ミラ様をそんな目には！」

「レオンは気を失っていた私や他の2人を守りながら敵に捕まってしまったんだ。お前は私の他に2人いても守るか？」

「何を言っているのですか！自分にとって一番大事なのはミラ様です！他の者など……ニ・アケリアの民以外など！」

そう、イバルは言った。その言葉を聞いたミラは呆れ、胸元から『カギ』を取り出し、イバルに渡す。

「イバル、お前にこれを託す。誰の手にも渡らぬよう守ってほしい。これは、私の命と同じくらい大事なもの。四大の命も、これにかかっている」

「そ、そのような重要な役目を……お任せください！」

元気よく言うイバルではあったが、ミラの次の言葉に固まる。

「頼む。そしてニ・アケリアに帰れ」

「は？」

「お前の使命はニ・アケリアを守ること」

「ミ、ミラ様！しかしですね……こいつは戦えないのですよ！？ただの足手まとい……」

イバルが俺のことを指差すが、

「ああ。立って戦うことはできない「ですよね！」が、馬の上からでも精霊術で攻撃はできる」

ミラがそういうと、イバルはぐぬぬぬぬ！っと拳を強く握る。

「そして、何よりお前を供するのにお前は……うるさい」

ピキッ

ショックで固まるイバル。

そんなイバルを無視してミラは俺とジュードに言う。

「ジュード。船はどうだ?」

「え、あ、うん。もうじき出航するって」

「では、いこうか」

そうい、ミラが馬の首に掛かっているひもを引っ張る。

船に乗る時、俺の事情を話し、馬を乗せてもらう許可をもらった。

そして、船はル・ロンドへ向かうのであった。

第18話　名医のいるル・ロンドへ（後書き）

イバルが不遇すぎる。まあいいかw
怪我をしたレオンは怪我を治すためにル・ロンドへ。そこで新たな出会いも……

そして、何よりも重要だったのは……ミラがレオンに送ったペンダント。これで2人はお互いに気にしている異性からプレゼントをもらったことになるw
そのことは後の伏線になっているんですよねw
まあ、それもこれからのお楽しみにしてくださいな！

次回もお楽しみに！

今回、ミラが覚えた技。

・魔神剣
　レオンがよく使う技でもある。一緒に旅をしている時に何回も見たおかげで覚えることができた。

第19話　ル・ロンド、到着！そして……

～レオンＳＩＤＥ～

あれから数時間後、俺達はル・ロンドの海停へ来ていた。ジュードの話によるともうすぐそこに病院があるという。

そんなわけで俺の乗る馬を引いてくれるミラ。ジュードはその横を歩く。

すると、

ゴロロロロロロ

何かを押す音がし、そちらを見ると、

「さあ、まだまだだよ！行けー！」

少女……レイアが車椅子に乗って子どもに押してもらい遊んでいた。

「えっ？」

「あ！人！」

子どもの1人が俺たちに気づき、俺に至っては馬に乗っているので、

「きゃ！どいてどいてー！」

どいてどいてって言われて退けるわけないだろ！

「くっ！」

ミラは急いで馬を引っ張り、ギリギリのタイミングで避ける。

キイィィィィーー！

ピュゥゥゥゥン！！

「うそ――っ！」

バシャ、バシャ、バッシャァン！

水面で三回も跳ねて海の中へ。

『……』

俺達はその光景を見て、呆れていた。特にジュードは。

「ごめんなさい。大丈夫でした……か？」

海から無事、帰還したレイアは俺たちに謝るが、ジュードのことを見て固まった。

「レイア……ただいま」

「なんで、ジュード？え、ええ！何してるの！？」

ジュードが帰ってきたことに驚いているレイア。

「いや、レイアこそ……」

ジュードの視線は先ほどレイアが乗っていた車椅子に。

「あ、あれはこの子たちがかけっこで競争したいっていうから」

いいわけをするレイア。

「私を押してハンデ付けないと勝負にならないって思って……」

「レイアが一番楽しんで見えたけど……」

ジュードの一言で目が泳ぐレイア。

「そ、それでさ……ジュードは何してるの？」

「知り合いかジュード？」

ジュードの横に立っていやミラが聞いた。

「その、幼なじみなんだ。えっと、彼女はミラ、彼がレオンっていって、なんて言えばいいのかな……」

俺達のことを紹介しようとするジュードだが、どう言ったらいいかわかんないみたいだ。

「よろしく、ミラ。レオン」

そう、笑顔でいうレイアであったが、俺の足を見てその笑顔は一変した。

「え、ちょっと、彼の足！」

そういい、レイアは子どもたちに指示を出す。

「大至急、大先生に連絡お願い。患者さんが来るって」

「ら、らじゃー！」

レイアに言われて走って病院へ向かう子どもたち。

レイアは車椅子を押してくる。

「家に帰るんでしょ？わたしも行く。これ、使って！馬だと足に負担を掛けるかもしれないし、こっちの方が安全だよ！」

そう言われた俺はミラとジュードの肩に手を置いて、車椅子に乗り換える。

そして、ル・ロンドの街に入り、そのまま病院へ直行。

ガラ

病院に入ると数名の患者たちが座っている。

「おお、ジュード。首都はどうだった。楽しくやってたのか？」

「ん、この男性(ひと)は？」

患者たちがジュードや俺を見て話をしていると、ジュードの母親…
…エリンさんが部屋から出てくる。

ジュードを見て笑顔になるが、俺の足を見るとその表情が一変する。

「先生、診察はまだかい？」

診察待ちの1人が聞いた。

「ごめんなさい。みなさん、急患がいらしたので続きは午後の診察に」

エリンさんに言われると、それがわかったのか頷いて病院を出ていく。

「ごめんね、みんな！またあとでねー！」

「ははっ。レイアちゃんも、すっかりここの仕事が板についたな」

「もう立派な看護師でしょ」

患者たちが出て行くのを見送り、エリンさんが指示をする。

「彼をこちらへ」

そう言われ、ミラは車椅子を押して、診察室へ向かう。

俺は診察室のベットに寝かされ、ジュードの父親が来るのを待っていた。

ガチャ

すると、ジュードの両親が入ってくる。

「ディラックだ。動かないで、そのまま」

「レオンだ。あなたがジュードの父親ですか？」

「そうだ。足に力は入るのか？」

ディラックさんは腕を組みながら俺に聞いてくる。

「いいえ。腰から下はほとんど感覚はないです」

俺がそう言うと、

「うーむ……」

うねりを上げるディラックさん。

「エリン、こちらはもう大丈夫だ。あの子の傍にいてやれ」

「え、はい……」

夫であるディラックさんに言われ、診察室から退出するエリンさん。

「あと、いくつか検査をする。もうしばらくそのままでいてくれ」

そのまま、数分間俺は色々と検査を受けることになった。

検査の結果が出るまで俺は診察室のベットで横になっている。

俺はすることがないので、エリンさんにこの家にある本とかを持ってきてもらい、それを読んでいる。

持ってきてもらった本を全部読み終わると、丁度エリンさんが入ってきた。

「レオンさん。気分はどうかしら？」

「ええ。足に力が入らない以外は元気です。それより、検査の結果はどうでしたか？」

俺がエリンさんに聞くと、俯くエリンさん。

「ええ、そのことは主人の……先生の方から話があると思うわ」

その後、ディラックさんにはやはり、原作と同じで無理だと言われた。まあ、駄目だと思っていたがやはり、鉱山に行かないといけないか……。仕方ないな。

と思っていると、

ガチャ

「ん？」

ミラ・ジュード・レイアの3人が部屋に入ってくる。

ジュードは持ってきた医療ジンテクスを俺の足に付けるが、何も起こらない。

そこで俺は言う。

「なあ、ジュード」

「何？」

「いや、特殊な石ってもしかして、精霊の化石じゃないか？」

「え？」

俺は医療ジンテクスについている石を外す。

「これは精霊の化石が力を失ってただの化石になっている。おそらく、特殊な石だろ」

「精霊の化石って……本当にあるの！？」

驚くジュード。そこでミラが言う。

「ああ、あるぞ？だが、採掘してすぐに使わなければマナを失うと……お前の父親から聞いた」

ミラがそう言うと驚く、ジュード。だが、すぐに表情が元に戻る。

でも、

「何でミラがそんなことを聞いたんだ？」

「ああ、レオンのことが心配で診察室の前で盗み聞きしていたからだ」

……ミラ。お前、変わったな（汗）

「あれ……でも、フェルガナ鉱山で昔、採れたって聞いたことがあるような……」

「何!?それは本当か、レイア！」

血相を変えてレイアに詰め寄るミラ。

レイアは少しミラを怖がる。

「ミ、ミラ！静かにして！……う、うん。本当だよ。お父さんに聞いたことがあったから」

それを聞いたジュードが言う。

「レオン……」

「ああ、わかっている。採りに行くのはいいけど俺も行くかってことだろ？無論行くぜ？でないと、直せないしな」

それを聞き、レイアはここに来るまで乗っていた車椅子を出してきた。

「はい……」

「レイア、ありがとう」

「悪いけど、ミラとジュードが乗せてあげてね」

「レイアは？」

「わたしは準備あるから。じゃ、街の出口で」

そういって、レイアは診察室を出て行った。

その後、俺はミラが車椅子を押して、街の出口に来た。

「さ、準備は万全！　閉山した山だから、気合いれて、行こー！」

何とも、元気なレイアが出発の合図をする。

俺達はそんなレイアを見て、苦笑しながらもフェルガナ鉱山へ向かうのであった。

しかし、その時、俺は知らなかった。原作ではいなかったはずの……『剣』の魔物のことを……倒せば倒すほど強くなっていくあの……剣使いの魔物は鉱山にいることを。

第19話　ル・ロンド、到着！そして……（後書き）

さて、最後の語りで分かる人いるかな？『剣』を使い、剣使いの魔物。
かつて、一番有名なのはアビスとシンフォニアに出て来ていたヤ押すほど強くなっていった魔物のことを。
それをエクシリアに取り入れてみました！どうなるのかが楽しみです！

いや～長かった。ここまでくるのが。毎日書く続けてきたかいがありましたよ。
後は足を直して、パーティー全員集合させる……前に、レオンとミラの恋の行方も楽しみです。
今後の予定ですが、原作では医療ジンテクスを使ってから3週間の空白期があります。
その間にレオンとミラの関係を強くしてみたり、ジュードとの友情を深めることをしたいですね。
無論、ジュードとレイアのことも……クフフ、楽しみですねぇ。

第２０話　怨念と執念の剣（前書き）

皆さん……台風が来てますが大丈夫ですか？作者は無事です。

第２０話　怨念と執念の剣

～レオンＳＩＤＥ～

俺はミラに車椅子を押してもらいながらフェルガナ鉱山を目指している。ジュードとレイアは話をしている。

「ね、ね、ジュード。イル・ファンの生活はどうだった？やっぱり都会～ってカンジ？ちゃんと友達とかできた？」

ワクワクするレイアにジュードはそっけなく言う。

「別に……割と普通だったよ」

「何、そのそっけなさー！？ジュードって解説しいのクセに、わたしにだけ、すっごく冷たいよね」

じっとジュードを見るレイア。

「被害妄想じゃない？」

「いいから、ちゃんと話す！十秒以内！い～ち、に～い、さ～ん……」

「えっと、医学校では看護師のプランさんが、よくしてくれたよ。でも、教授を迎えに行ったら、赤い服の女の子に襲われて」

レイアの強引な雰囲気に耐えきれなかったのか話し始めるジュード。

「医学校にもどれなくなっちゃた……おかげでミラやレオンと出会えたけど」

だが、ジュードの口から出てくる名前には女の子か女性の名前しか出てこないことにレイアは腹を立てる。

最終的には、

「た～くさん女の子の友達ができてよかったねっ！」

「レイアも相変わらずだね……」

怒って先へ進むレイアを見て、ジュードはそう言った。

けど、

「（ジュード。レイアの気持ちに気づいてやれよ。昔からの幼なじみが帰ってきたら出てくるのが女の名前じゃあ、あんな態度を取るに決まっているだろ）」

俺は物凄く呆れていた。

「？」

ミラはそんな呆れている俺を見て、何で呆れているのと思っている。

そのまま、俺達はフェルガナ鉱山に到着した。

そのまま、採掘場に来た。

「あ、あったあった！ここが採掘場だよ」

レイアに案内されて、周りを見る。

「えっとねー、確か精霊の化石って色が付いてて音がするんだって」

「俺もそう聞いたことがあるな。しかし、ここにはなさそうだな」

俺は周りを見ながらそう言う。

ジュードも俺が言うと周りを見始める。

「妙だな。作業途中で打ち捨てられているように見える」

ミラも当たりに散らばっている採掘道具を見て、そういった。

「レイア、何か知ってる？」

ジュードの質問にレイアは答える。

「ううん。もしかしたら、事故とかで危険だからって閉山したのか

な」

レイアがそう言うとジュードは考え始める。

「大丈夫かな……」

「でもね、やるしかないんだよ。うん！」

「気合い入ってるね……」

ジュードは異様に元気でやる気に満ちているレイアを見てそう言った。

「だって、こう燃えてくるものがあるじゃない！どっちが早く見つけられるか勝負だよね、もちろん！」

そんなお気楽に言うレイアに、

「はぁ……」

ため息をつくジュードであった。

「注意してね。レイアに何かあったら……」

「ジュードは昔からすぐにそうやって言うんだから」

ジュードはレイアを心配していっているが、レイアは大丈夫と言う。

「それに、わたしの心配よりも、今はレオンのことでしょ」

そういいながらジュードにつるはしを渡すレイア。

「さて、と。やっぱ、見えるとこに都合よくなんてないね」

「レオンはここで待っててくれ」

つるはしを持った3人は掘れる場所を探す。

少し経って、ジュードが塞がっていた道を見つけた。

「これって……」

「ジュード！見つけたの？」

「ジュード！見つけたか？」

ミラが車椅子を押してジュードのところに近づく。

「……わ。何これ」

レイアは道を見て驚き、ジュードは地面に光るものを発見し、見る

「それ……精霊の化石のようだ。この色、間違いないだろう」

「けど……こんな細かくちゃ……」

医療ジンテクスに使うには小さすぎ、細かすぎる。

「奥から風が吹いている。行き止まりじゃないってことか……」

奥があることがわかり、俺達は鉱山のさらに奥へ行くことになった。

奥へ進むにつれてレイアの表情に疲れが見えてきた。

「はぁはぁ……」

「レイア、やっぱり……」

その疲れが出て来ているレイアに気づいたジュードが声を掛けるが、レイアは話を逸らす。

「ね、ねえ、ところで、精霊の化石ってなんなの？」

「マナを失った精霊がこちらの世界に定着し、石になったものだ」

「もう……」

話を変えたレイアに呆れるジュード。

「マナを失うって、まあ、言ってみれば死んじゃうみたいな感じでしょ。でも、死ぬなんてあんまり聞かないよ。都会じゃよくあるの？」

「さあ、ないと思うけど」

いや、都会とか以前にそんなことを知っている人は少ないだろ。

「うーん。精霊も昔はたくさん死んじゃったってことかな」

「大半は、私が生まれる以前の話だ」

ミラが俺とジュードがわかるが、事情を知らないレイアは不審に思う。

「どういうこと？」

「今度、詳しく話すよ。それよりも先へ急ごう」

先に進むジュードをレイアは、

「いじわる。べー」

あっかんべーをしていた。

すると、ジュードやミラ、俺は何かの音がして周りを見始める。

「皆、何か音が聞こえなかったか？」

「ああ、私には聞こえたぞ」

「この音……どこから……」

周りを見回すと、

「あった……精霊の化石だ！」

俺達が求めていたものを見つけた。

あるのは俺達がいるところの反対側だった。

「皆、行くぞ！」

ミラがそういうと、早足で車椅子を押し始める。

「あ、待ってよミラ！」

「ミラ、待ってよ～」

そういいながら早足で歩くミラを追うジュードとレイア。

反対側に行く途中に地震のようなものが起こったが、それを気にしつつ、目的の場所に着くが……

「あれ……？さっきはあったよね……」

そう、先ほどまであったはずの精霊の化石がなくなっていたのだ。

その先には先ほどのように道があり、奥へと行くことができた。

俺達はその道を進んで奥へと進んでいくと……

広い空間が広がっていた。

「わぁ……何、ここ……不思議な場所」

キュンキュンキュン……

ここで、何かの音が聞こえてくる。

「音が大きくなったり、小さくなったりしてる」

「気をつけろ」

「わかっているさ」

俺達は警戒するが、レイアはこの場所を歩きながら眺めている。

「すごい……」

そして、音はレイアの足元から聞こえるようになった。

「下がれ！レイア！」

ミラがそう言うと、

「え？」

その声と共に

ドカァァン！

レイアの足元が割れ、

「危ない！」

割れてできた穴の中から

【シュワアァァァ！】

魔物……ハンマーズァームが俺達を睨んでいる。

「ジュード、やつの頭だ！」

ミラがそういい、ジュードやレイアはハンマーズァームの頭を見た。

「あれは精霊の化石！？」

「！」

レイアは棍を構え、

「レイア、出過ぎないで！」

「気をつけろ！来るぞ！」

3人が戦いを始めた。

戦いはすぐに終わった。原作と違い、最初からミラが戦闘パーティーにいる存在が大きかったようだ。

ハンマーズファームは動かなくなり、活動を停止した。

動かなくなったハンマーズファームの頭から精霊の化石を取るレイア。

俺を含む皆が安心していた。

だが、その安心が命取りになった。

レイアが俺に精霊の化石を渡し、それを医療ジンテクスにつけようとした時だ。

――――――――――チカラアリシモノヨ……ワレトタタカエ……ワレニオノレノチカラヲシメセ……シメサネバオトズレルハシ……ミセレバセイヲジッカンデキヨウ……――――――――――

ゾクッ！

俺達は背筋が凍るのを感じた。俺ですら感じたんだ。他の3人の感じ方は普通ではないはずだ。

レイアは身体が動かなくなり、ジュードもレイアと同じ、ミラはかろうじて動けるみたいだ。

そして、その声の主が……落ちてきた。

ガキィィィン！

天井から落ちてきたのは一本の剣。だが、その剣が纏う空気は普通の剣とは違った。

怨念・執念・憎悪・恨み・妬み・嫉妬……悲しい感情ばかりが伝わってくる剣だ。俺はこの剣に見覚えがあった。

そう、一番有名なのはシンフォニアとアビスに出てきた……倒せば倒すほど強くなる剣をもった魔物……その名を……『ソードダンサー』と言う。

ソードダンサーは光ると同時に俺達は吹き飛ばされ、俺は持っていた精霊の化石を落としてしまった。

「ぐぁ！」

「ぐぅ！」

俺とミラは軽く背中から地面にぶつけたが、

「がはぁ！」

「ぐふぅ！」

ジュードとレイアはそのまま、壁に激突し、動かなくなった。いや、意識はあるみたいだが、どうやら背中を強く強打したみたいで、一時的に動かなくなっているようだ。

――――――――タタカエ……ワレト……タタカエエエエエエエエ！！！！！！！！！！――――――――

そう言うとソードダンサーはミラへ攻撃を始める。

「くぅ！」

剣で何とか受けとめるミラだが、

――――――――アマイゾ……コムスメエエエエエエエエ！！！！！――――――――

ソードダンサーは残りの5本の腕に持った5本の剣でミラに攻撃し、ミラを吹き飛ばした。

「ぐぁ！」

「ミラ！」

くっそ！……あれは精霊の化石！

俺の少し前に精霊の化石が落ちていた。先ほど落としたものだ。

「ぐっ！この程度で……」

ソードダンサーがミラに近づくのが見える。

「この程度の怪我で……」

ソードダンサイーは動けないミラに剣を構える。

「俺は……」

化石まで……あと少し！

ソードダンサーが剣を上にあげ、

ガシッ！

化石を手にとって医療ジンテクスに嵌める。

ビリィ！ビリリリリ！

身体に痛みが走るが、俺は気にしない！

ソードダンサーがミラに向けて剣を振う。

「ミラアァァァァ！！！！！！！」

シュン！！

ガキィィィィィィン！

ギリギリのところで剣を受けとめる。

「レ、オン」

痛みでうまくしゃべれないミラが俺を見る。

「安心しろ。立てれば……こっちのもんだ！」

俺はミラを庇うように目に立つ。

――――――――――――ソウダ……ワレハキサマノヨウナキョウシャヲ……ツヨキモノヲ……モトメテイタ！サア、コロシアオウデ

ハナイカ！！ドチラカガソノイノチツキルマデ……ゾンブンニナ！！！――――――――

明らかにシリーズのいくつかに出て来ていたソードダンサーよりも遥かに凶悪だな。

「掛かってこいよ！ミラを傷付けた罪を……数えろ！」

そして、俺とソードダンサーだけの戦いが始まった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

カキィィン！ガキィン！

剣と剣が何回もぶつかり合う。

カキィィン！ガキィン！

1人は人間？であるレオン。もう1人は骸骨で腕が6本、剣も6本の異形の魔物……ソードダンサー。

「秋沙雨！」

レオンが連続で突きを繰り出すと、

――――――――――――コザカシイ！！――――――――――――

ソードダンサーは6本の剣でガードをする。だが、そこからレオンの攻撃は続く。

「噛烈襲」

剣を持ったまま、何回も何回もソードダンサーの剣を殴る。

「絶破烈氷撃！」

殴った後には氷のマナを腕に溜め、剣を凍らせる。

――――――――――――――オ、オノレ！――――――――

ソードダンサーは凍ったままの剣をレオンに向けて振りかざす。

シュドォォォォォォン！

レオンはそれを避けると土煙が舞う。

その土煙を利用して、ソードダンサーは６本の剣で同時攻撃を繰り出す。

「ちっ！」

レオンはヴォーパルソードとフランベルジュで、それをガードする。

その隙にソードダンサーは連続で攻撃を始める。

カードしながら避け続けるレオンであったが、

ドン

「しまっ！？」

避け続けた結果、壁際まで追いつめられた。

――――――

――――――――ナンダト！？――――――――

ドス！

ソードダンサーの剣はそのまま、壁に刺さる。

――――――――――――！？　ヌ、ヌケン！？――――――――――――

ソードダンサーは勢いよく剣を振りかざしたせいで壁に思いっきり剣が刺さってしまっている。

「終わりだ！」

レオンはヴォーパルソードとフランベルジュを1つにする。

「はあぁぁぁぁ！見せてやるぜ！」

レオンの周りに陣が発生し、光の渦と共にソードダンサーを浮き上がらせる。

――――――――――――コ、コレハ！？――――――――――

「終わりだ！天翔蒼破斬！！」

レオンが剣を１つにし、それをソードダンサーに叩きこみ、光が強く発生した。レオンの周囲を光が満ちる。

――――――――――――ナ、ナンナノダ……この……チカラハアアアアアア！！！！――――――――――

――――――――――――グオオオオオオオオオオオオオオオ！！！――――――――――――――――――

悲鳴に似た奇声を上げて、消えていくソードダンサー。

レオンは膝から倒れ、地に伏せる。

そのすぐ横には鏡……ヤタノカガミが落ちていた。

そして、レオンの意識は完全に失われた。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「うぅ……ここは？」

俺は目を覚ますと最初に目にしたのはル・ロンドの街だった。

「レオン！よかった、目を覚ましたのだな」

俺が声を出すとミラが顔を出す。その時、顔が近づきすぎたせいか俺とミラの顔が紅くなる。

「レ、レオン。それで、足の具合はいいのか？」

「あ、ああ。痛みは感じるが……特には」

「そ、そうか」

俺の言葉を聞いてほっとするミラ。

「そういえば、ジュードとレイアは？」

「2人なら後ろから歩いて来ているぞ」

俺は視線を後ろに向けると……確かに2人は歩いている。

だが、ジュードの纏う空気が重かった。

「ジュ、ジュードはどうしたんだ？」

「さあな」

そっけなく言うミラ。まあ、これがミラだとわかっているのでこれ以上聞くのはいけないな。

そんな俺たちに、いやジュードにか。

「ジュード……」

ジュードの母親……エリンさんがジュードを抱きしめた。

「どこかケガはない？鉱山に行ったのよね？どうして黙って行ったの」

「母さん……ごめ……」

「ジュード！」

エリンさんに謝ろうとするジュードの元へ父親であるディラックさんがジュードの頬を

パチン！

叩いた。

「あなた！」

「3人に何かあったらどうするつもりだった。最悪の事態を考えなかったのか？」

ジュードに説教をするディラックさんだったが、ジュードが反撃してきた。

「……できることをしないなんて……僕は父さんと一緒じゃないから……」

「お前はっ！」

そう言われ、手を出そうとするディラックさんを俺が止める。

ガシッ

「もう許してやったらどうですか？ジュードは俺の足を直すためにやってくれたことなんですから」

立っている俺を見て、ディラックさんは驚いている。

「立てる……のか？」

「ええ。３人が手伝ってくれたおかげですよ」

俺が笑顔で言うと、ディラックさんはジュードを見た。

「レオン。あまり無理はするな。お前は疲れているんだぞ？」

そういい、俺に車椅子を近づけるミラ。それはミラにそう言われ、再び、車椅子に乗る。

「レイア、悪いが彼を治療院に運んでくれ」

「あ、はい、わかりました。ミラ、こっちよ」

ミラはレイアに言われ、俺を治療院へ運んで行った。

さて、これからは大変なリハビリだな。ま、頑張りましょうか。

第２０話　怨念と執念の剣（後書き）

ふう、初めて秘奥義を出した気がする。天翔蒼破斬の表現がしにくい。まあ、これでもいいかな？
ふぅ……というわけで精霊の化石をゲットしたレオン。ソードダンサーも退け、後はリハビリをするだけです。
まあ、ここから何話かはリハビリ・恋の行方ｗとかですね。
次回もお楽しみに！

～オマケ～

ソードダンサーの初期レベルは４０です。ミラ達がかなうはずありませんｗ
レオンも足をけがしていて本来の力を出せず、少し苦戦しました。

第２１話　ミラ、己の心に気づく。その心とは……（前書き）

今回、レオンＳＩＤＥは無いです。ミラＳＩＤＥでミラとレイアしか出てきません。

第２１話　ミラ、己の心に気づく。その心とは……

～ミラＳＩＤＥ～

あの鉱山での出来事から早３日。この３日間の間、レオンは苦しみながらリハビリの日々を送っている。

私は鉱山で骸骨の化け物にやられそうになった時、レオンが助けてくれた時に心の鼓動が速くなるのを感じた。

いつもそうだ。レオンのことを考えると胸が苦しくなる。レオンが他の女と話をしているのを見ると胸がムカムカしてくる。レオンが……私のために命を掛けるのを見ると……悲しくもあり、嬉しくもある。

私はマクスウェルだ。世界を守るのが使命……人を精霊を守るのも私の使命だ……その、はずだ。

ここ最近の私は、頭の中には使命と同じぐらいレオンのことを考え、思ってしまっている。

最近ではレオンの声を聞くだけで、ドキッとする時もある。この気持ちがわからない。

私はそこでレイアに聞いてみることにした。

「だったら、女同士裸の付き合いをしようよ！」

すると、どうだ。

そう言われ、レイアの家にある……露天風呂に入ることになった。

私が服を脱いでいるとレイアの目線が私の胸にいっていた。

「どうして私の胸を見る？」

「ひぇ！？あ、いや……ミラってスタイルいいな～って。私よりも背が大きいし、腰は細いし、足は細くて長いし…髪は綺麗だし、胸は大きいし……何か、女としての自信がなくなっちゃうな」

「？　よくわからないが、私は自分のこの身体を気にいっている。レオンも私の髪を梳かしてくれる時も綺麗だなっと言ってくれたからな」

その時のことを思い出して私は少し顔が熱くなるのを感じた。

「ま、いっか！ささ、お風呂に入ろう！」

ガシッ！

「えっ？ちょ、待てレイア！引っ張るんじゃない」

「問答……無用！せりゃあああ！」

ポイ

「へぇ？う、うわあああ！」

ザッブーーーン！

「ガボ！？ガボボボボボ……プハァ！レイア！危ないだろ！」

私はレイアに湯船に投げられ、頭から入ってしまった。全く、湯を少し飲んでしまったではないか！

「フッフッフ、ミラってこういう風に露天風呂に入ったことないでしょ？」

「……むふ。昔、一度だけ入る機会があってな。その時、レオンに一緒に入ろうと言った時、断られたことがあったな」

その時のレオンの顔は……確か真っ赤になっていたな。４年ぐらい前だったか。

「あ～、そりゃあ、一緒に入りたくなくなるね」

「何故だ？」

「何故って……ミラってそういうことの知識ないの？」

し、失礼な！これでも人間の残した本や書物は大体読んでいるぞ！

「それとミラの相談だけど……どう見てもレオンのことが好きってことでしょ？」

「だ、だから、その好きっという感情が私には……」

そ、そりゃあ、本だけではそういった感情については説明されているが実際に自分で感じてみると……わからない。

「ん～。私もミラにアドバイスできることは限られているしな～（あのバカは鈍感だし、それに引き換えレオンはミラのことが好きなのは明白だからねぇ。両想いならさっさと告白しちゃえばいいのに）ハァ～」

ん？レイアがため息をついているな。疲れているのか？

「ミラ、ミラが私にしてきた相談だけど……まず、レオンのことをどう思っているの！」

「わ、私がレオンのことをどう思っているかか？」

私が聞き返すと、レイアは頷いた。

「レオンとの初めての出会いは私の住んでいるニ・アケリアにある参道だ。それから色々合ってレオンはニ・アケリアに住むことになった。それから（以下略）……というわけだ」

「うん。それはわかったけど……結局、レオンのことをどう思っているの？」

「レオンのことを思うと胸が熱くなるし、他の女と話をしているのを見るとムカムカする。だが、戦いの時、私がピンチになるといつも助けてくれる。その時、胸の奥が熱くなっていくんだ。私はこの熱くなっていくこの……感情を知りたい」

私が簡単に言うとレイアは何やら呆れた風に私を見る。

「それ、ただの自慢じゃないの……私なんか……。ん、ミラ、それは恋よ！」

「鯉？」

ガク！

「ちっがーう！魚の鯉じゃなくて、恋愛の恋よ！ミラはレオンのことを考えると苦しくなったり、熱くなるんでしょ？それってどう見たって……誰が聞いたって恋よ！」

恋……恋／／／／／／な、なんだ？何か身体が熱く／／／／／／これは湯船のせいではないな。

「そう！その顔よ！恋する乙女のような表情！お風呂のお湯で自分の顔を見てみてよ」

私はレイアにいわれ、湯船に映る自分の表情を見た。すると、どうだ。

私は今、顔を赤くし、瞳が潤んでいる。こ、これが……恋なのか？だが……悪い感じではないな。

「フフ。いい表情になってきたわねミラ」

「そ、そうなのだろうか」

「うん！きっとレオンの事を思っているんでしょ？フフ、まさに恋する乙女……ですな」

「うぅ……」

レ、レイアが私をからかってくるな／／／

しかし、ただでやられる私ではないぞ！

「では、レイア逆に聞くぞ」

「ん？何？」

「レイアはジュードの事が好きなのか？」

バシャァァァーーーン！

「な、なななななな、何言っているの？！／／／／／／／」

……図星か。

「ふむ。レイアは私とレオンがいるのにもかかわらず、鉱山でも２人は話している回数も多かったからな。ここに来るまで表情の暗かったジュードもレイアと話している間に少しずつ明るくなっていっていたからな」

「そ、そこまで見てたんだ／／／」

レイアは恥ずかしいのか口元まで湯船に浸かり、ブクブクしている。
顔は真っ赤になっているな。

「そ、そうよ!?悪い！あんな馬鹿でもアホでも根性なさそうな奴でも……私は……」

「好きなんだな」

「うん。でもね?ジュードがミラやレオンを連れてきたときにわかったの。ジュード、変わったなって。そして、ジュードを変えた一番の原因は……」

レイアが私を見る。

「私か?」

「うん。ほら、覚えてる?鉱山で私とジュードはあの骸骨に吹き飛ばされて気を失っていた。次に目を覚ましたらミラが気絶してただけのレオンのことを必死に呼んでいたでしょ?その時のジュードは……何か落ち込んでいたの。それでさ、私、わかったの。ジュードは

ミラに惚れているんだって」

私は固まった。何にだって？ジュードが私に惚れている？

「わ、私は何もしてないぞ！？ただ、ジュードには自分がするべきことを決めろ・自分で決めろ・自分の責任はちゃんと持てなどとそう言うことしか言っていないはずだ」

「多分、それだよ」

「なんだと？」

何でこんなことで？

「ジュードってさ、あの通りお節介なんだよね。自分の心配よりも他人の心配。子供っぽいところもあったけど……帰ってきた時のジュードは私が最後に遭った時よりも少し、大人になってた」

「……」

「でね？ジュードの視線がミラに言っているのに完全に気付いたのは鉱山の帰りだったの。気を失っているレオンを車椅子で運んでいるミラを……」

……まさか、ジュードが、な。

「だが、レイア。私は……」

「わかっているよ。ミラがレオンに好意……好きな感情を抱いていることは。だからね？私、ミラが相談してきたとき、思わず『やったぁー』って思っちゃったんだ」

レイアの声がどんどん、小さくなっていく。

「私、すっごく汚い女だよね」

「そんなことはない！レイアは私に無いモノを持っている！」

パッとレイアが私を見る。

「ミラになくてアタシにあるもの？」

「そうだ。レイアがいなかったらジュードはずっと暗かったかもしれない。レイアと言う存在がジュードに光をもたらしたのかもしれない。レイアは私に無い……元気がある。何事にも努力するその心。私は使命だと思っているものを必ずやり遂げる……それが使命だ。努力とは違う」

「？？」

レイアは不思議がっているな。仕方ないだろうな。私やレオンの使命を知っているのはジュードだけ。
アルヴィンもある程度知ってはいるが根本的なことは知らない。

「レイア。自信を持て」

「う、うん！でも、ミラこそ。レオンに告白したら？っというか、レオンとミラは両思いだと思うよ？」

「なんだと？！」

これには一番驚いたよ。レオンも私と同じ気持ちを？

「うん。だって、あんな怪我をしてまでミラのことを守るなんて…

…好きな女性を守りたいって言うレオンの意思でしょ？」

……確かにそうかもしれない。私は精霊の主、マクスウェル。だが、レオンからしたら私はマクスウェルではなく……ただの1人の女性……なのか？

その後、私とレイアは湯船から出て、身体を流し合い、ゆっくりとして過ごした。

それからしばらくして、夜になるのを待った私は……レオンの入院している部屋の前に立っている。

第２１話　ミラ、己の心に気づく。その心とは……（後書き）

はい、今回はこうなりました。恋愛の話は書きにくいですね。
あまり、恋愛ものを書かないで今までは書かなかったので……どうも、駄目な気がしました。でも、これでもいいですよね？
次回はレオンＳＩＤＥでのレオンとミラだけが出てきます。

第２２話　レオンとミラ……２人の想い

～レオンＳＩＤＥ～

Ｚｚｚ……オン……Ｚｚｚ……レオン！

ギシ

ん？なんだ？誰かが呼んでいる声が……それに俺の上に誰かが乗っているような感覚が。

俺は気になり、目を開けると……

「レオン……」

ミラが……俺の上に馬乗りして跨っていた。しかも、何やら瞳がウルウルしている。

「ミ、ミラ？何で俺の上に馬乗りで跨ってんの？」

「レオンの身体を何度も呼んでも揺すっても動かなかったから。レ

オンの上に乗って揺すっていたんだ」

なるほど……そういうことだったのか。それにしても……

「俺に何か用か？こんな時間に……しかも、部屋に鍵をして」

俺はドアを見ると鍵がかかっていた。

「あ……ああ／／／」

ミラは顔を真っ赤にしながら俺を見る。

「実は……昼間、レイアの家で風呂に一緒に入ったんだ」

「んで？」

「そ、その……レ、レオンのことで相談したんだ」

「俺のこと？」

俺のことを何で？

「実は……前からレオンのことが頭の中にいっぱいだったんだ」

「……！？……／／／」

俺は、ミラの言うことの意味がわかってしまった。

「そのことを……レイアに相談したんだ。そしたら……それは恋だって／／／」

「／／／」

俺達はお互いに顔を真っ赤にした。

そして、

「ミラ……1つ聞きたい」

「な、なんだ？／／／」

俺が真剣な表情をしたことで、ミラが動揺し始める。

「ミラは……俺のことが……好き……なのか？」

「／／／／／／」

図星……か／／／

「わ、私は……レオンのことを気にし始めたのはレオンが旅から帰って来てからだった。何故レオンのことを気にすることになったのかわからなかった。だが……最近の旅でわかった」

ミラは胸のところを抑える。

「この……胸が熱くなる感情……レオンが他の女と話しているのを見てムカムカするこの嫉妬の感情……これらが恋…というものが原因なら私は……

レオンのことが……好きだ」

輝くような笑顔に俺は顔が熱くなるのを感じる。

だが、それと同時に嬉しい気持ちが湧き上がってきた。初めて会ったあの時から俺は……ミラに恋をしていた。だが、ミラには使命があった。この気持ちを告げても断られるかと思っていた。

だけど……今、１０年の想いを告げることができる。

「ミラ。俺の話しを聞いてくれ」

「な、なんだ？／／／」

俺は……

「ミラ、俺は……１０年前にミラと出会ったあの時から……

ミラのことが好きだった」

「!?!?／／／」

てんぱっているミラ。

「ミラが俺に想いを告げてくれた……ミラはマクスウェルだから…俺の想いを告げても意味がないのではないか……そう思っていたせいで今まで告白できなかった。でも……」

ダキッ！

「な、レ、レオン／／／」

ミラは俺が突然抱きついてきたのに驚いている。だが、今の俺にはそんな余裕がない！

「ミラ！俺はお前のことが好きだ！愛しているともいえる！」

「あ、愛して！？」

さらに真っ赤にするミラ。

「どうやら……ようやく、長きにわたる……俺の気持ちを告げられることができた」

俺はミラを見る。

ミラも俺を見る。

俺達はお互いに見つめ合う。

そして、

「「ん……」」

お互いの唇にキスをする。

俺はミラを強く抱きしめ、深く長く甘くキスをする。ミラは抱きしめれば戸惑いながらも、俺に抱きつく。いつもと違ったこんな可愛い姿を見せ付けられて、理性がぶっ飛びそうになるのを何とか抑える。

「んっ…は…んむっ…んんっ…」

ミラを見ると、俺とのキスで段々目がトロンとしてきている。

「んんっ、ちゅ…ちゅぶ、ちゅ……ミラ……」

「んっ…は…んむっ…んんっ…レオ、ン」

唇を話すと唾液が橋のようにつながっている。

「はぁはぁはぁ……な、なあレオン」

「ど、どうした？」

ミラが何かモジモジしている。

「そ、その……レオンの何か固いもの、わ、私の脚に当たっているのだが／／／」

「そ、それは……／／／」

言えない……ミラが俺とキスをしている時に、その……エロい表情をしていたから興奮してしまったなんて／／／

「そ、その……私もだ、男女のい、営みというのは本で知っているが……その……わ、私は初めてなのだ……」

「だ、大丈夫だ／／／俺も初めてだし……」

再びお互いに顔を真っ赤にする俺達。

「シ、シたいのなら……いいぞ／／／？」

「……」

プツン

その言葉と共に、俺の理性と言う名の鎖が破壊された。

「ミィィラァァァァ！！！！！」

「へ？う、うわああ！？」

数時間後、

「あっーあーっあぁぁっっ……」

「はぁはぁはぁっ……」

行為中に少し理性を取り戻したが……あまりにもミラが可愛すぎるせいで再び理性を失ったせいで４，５時間ぐらい行為をしていた…気がする。

ミラは俺が出したものをいっぱい身体中に掛かってしまっている。

しかも、ベットが色々なもので汚れてしまっている。ま、まずいよな？

俺は気を失っているミラの身体を水・風の精霊術の応用でタオルで拭いていき、ベットのシーツや掛け布団には水・風・火の精霊術で汚れを落として乾かした。

部屋の生臭い匂いは風の精霊術で外に。

それにしても……

「んんっ……すぅ……」

先ほどまで俺の上で乱れに乱れていたミラはすやすやと寝ている。

そんな、ミラの髪を撫でる。ミラは髪を撫でると少し笑顔になって行く。いい夢でも見ているのか？

そんなミラを見て俺は嬉しくなった。

ミラが……俺の彼女になった。それが嬉しく、恥ずかしくもある。

長年の思いがようやく実ることができた。

これからミラにも俺にも激しく、長い戦いと旅が待っている。

俺は改めて心に決めた。ミラを……守ると！

第２２話　レオンとミラ……２人の想い（後書き）

はぁ～ようやくここまでかけたぜ。２人の夜の営みはノクターンに乗せるつもりです。まあ、いつになるかわかりませんが……。

次回もお楽しみに！

第２３話　レオンとミラ……恋人同士の一日（前書き）

前回に続いてレオンとミラの話です。彼氏彼女になった2人がその日の朝、まあ……つまり、ヤッてしまったその日、どうなったかの話です。

ただ、言えるのは……レオンとミラのキャラが完全に崩壊していると思います。いい意味で……そして悪い意味で

第２３話　レオンとミラ……恋人同士の一日

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラが……まあ、男女の営みをし、色々と処理を終えると丁度朝日が見え始めていた。

「ミラ、ミラ、起きろ」

俺は横で寝ているミラを起こす。

「ん～？なんだ？」

目を覚ますミラ。

「なんだ……じゃないだろ？服を着ろって……さすがに、こんな状態を誰かに見せるわけにもいかないだろ？」

「……！？／／／」

ミラは寝ぼけていたのか、夜に俺達がしたことを思い出して顔を真

っ赤に染める。

「わ、わかった！！／／／」

ミラはそういうと急いで服を着ようとするが、

グキッ

「？！？！？！？！？！？！」

ミラは腰を抑えながらベットに倒れこむ。こ、これは……

「い、痛い（涙）」

ミラは腰に来るあまりの激痛に涙を流す。

「す、すまん…やり過ぎた」

「ほ、本当だな！私がもう無理だと言ったのに……レオンが私の中に出すから／／／しかも、私が気絶している間もしてただろ！」

……そう、ミラは俺が5発目を流し込んだ後、気を失っていた。しかし、その時の俺には理性の枷が外れていたためそのままやり続けてしまった。

ミラが目を覚ましたのは気絶してから数分後……俺が3発ほど出した後だった。

まあ、その直後にまた気絶したんだが……さすがに合計で31発は出し過ぎたか？

「わ、悪い……キュア！」

俺はミラの腰に回復術をかける。ある程度、回復したミラは俺によって脱がされていた下着や服を着る。

「で、では……私は宿でもう一度風呂に入ってくる／／／」

「あ、ああ／／／いってらっしゃい／／／」

俺はミラを見送り、そのまま……惚けていた。

それから2時間後、エリンさんが部屋に朝食を持ってきてくれた。

ご飯に鮭、サラダ、味噌汁など、朝に食べる物の定番が出てきた。
普通なら病院食なのだが、俺はそれだけでは足りないことを3日間で分かったエリンさんが特別にOKされた。

俺が、朝食を食べようとしたら、

「レオン！今戻ったぞ！」

朝風呂に入ってきたミラが戻ってきた。

「おう、どうした？」

「うむ。そ、その……せっかく恋人同士になれたのだ！私が食事を食べさせようと……／／／」

もじもじするミラに萌えたのは秘密だぜ？

「じゃあ、お願いしようか」

「うむ！」

そういい、ミラは俺のベットの上に乗る。

そして、

「レオン、あ、あーん／／／」

箸を俺の口元に近づける。

「あ～ん……もぐもぐ」

俺はそれを美味しくいただく。

「おいしいか？」

「ああ、料理もうまいことはあるが……ミラに食べさせてもらっているのが嬉しくていつもよりもおいしく感じるぜ！」

ボンッ！

俺がミラに食べさせてもらって……というとミラの頭から煙が……。

「そ、そそそそ、そうか／／／／う、嬉しいぞ／／／／（もじもじ）」

あ、あああああああああ！なんだこのミラの仕草は?!なんなのこれ!?俺を萌え殺したいの!?

「じゃ、じゃあ、次を頼む／／／／」

「わ、わかった／／／／あ、あ～ん／／／／」

「あ～ん……」

俺とミラはこの雰囲気を食べるものがなくなるまで続けた。

食事をし終え、俺はディラックさんに言われている歩くリハビリをしている。だが、元々回復能力が規格外な俺は医療ジンテクスをつけてからあり得ないほどの回復をしている。このことをディラックさんに言うと「君は医者泣かせの患者だ」と言われた。

そりゃあ、回復能力が規格外だけど……おそらく、一番の原因は……ヤタノカガミだろうな。このアイテムは戦闘時、ＨＰとＴＰを回復するが……どうやら、元々この世界にいないはずのソードダンサーのせいかもしれないが、持っているだけで傷やマナを回復してくれる品物になったみたいだ。

これは思わぬ誤算だ。故に足の回復が早い理由は……俺の規格外の回復の能力＋ヤタノカガミの効果＋ミラへの愛！今の場合はこれにミラからの愛を加えよう。

ディラックさんも「この分だと一月、医療ジンテクスを使い続ければ足は直るかもしれん」なんて言われたよ。

それを聞いたミラやジュード、レイアは喜んでいた。特にミラの喜びようは異常だったが……。

そして、そんな俺のリハビリは……このル・ロンドの町を一周をゆっくり歩くこと……それだけだ。

そんなわけで俺はリハビリをすることになったんだが……ミラが俺の腕に抱きついて、歩きにくいが……胸の感触を楽しみながらゆっくり、ゆったり歩いている。

「ふぅ……今日はいい天気だなミラ」

「ああ。私の心の中も晴れだよ」

「俺もさ、ミラ」

今まで、我慢していたものを夜に打ち明け、こうして彼氏彼女になったおかげで今まであったものがなくなり、身体がすっきりしている。

「しかし、俺がこうしている間にも世界のどこかで黒匣（ジン）が使われていると思うと申し訳ないな」

「いいんだ。確かに、私の使命はあれを破壊し、精霊と人を守るこ

と。それと当時にレオンのこともこれと同等……いや、それ以上の存在になった」

そういいながら、俺達は自然と見つめ合う。

「ミラ……」

「レオン……」

そして……自然と唇を重ねようとすると……

「はいはい、ストップ」

パンパン！と手をたたく音がし、その音がした方を見るとレイアがいた。

「もう、ミラ！レオン！こんな白昼堂々とキスとかしないでよ。見てたこっちが恥ずかしいわ／／／」

そういいながら、頬を赤くするレイア。

「「す、すまない！」」

俺とミラは同時に謝る。

「ふふ、ミラの表情……昨日までとは違うね」

「ああ、レイアのおかげで私は……レ、レオンと結ばれた／／／」

再びもじもじするミラに俺の心の中では……悪魔と天使がいいあっている。

～レオンの心の中～

悪魔レオン「うひゃひゃひゃ、俺よ。襲っちまえよ～。そこの路地裏でよ～」

俺を誘惑する悪魔。

それに対し、

天使レオン「駄目だ！そんな、ヤってばかりではただの身体だけの関係になってしまうぞ！！」

「そ、そうだな！確かに、ヤってばかりはダメだな」

俺が納得しようとするが、

悪魔レオン「おいおい、何言っている！ミラはこんな仕草をしているのは襲ってくってことじゃないのか？自分を可愛がってほしい・愛してほしい……色々な感情が混ざってこんな仕草をしているに違いない！」

天使レオン「何を言う！それに俺はまだ、怪我を完治していないんだぞ！それでもし悪化したらミラは自分の責任だと……責めるだろうが！」

悪魔レオン「責めて自分を差し出すかもしれないぞ？クックック、そしたら俺好みに調教するのもありだろ」

俺の中で悪魔と天使が剣と剣をぶつけ合っている。

そんな中俺が出した結論は……

「だったら怪我が完全に完治したら、俺の気が済むまでヤり続けるのはどうだ？」

悪魔天使レオン「それだ！」

一致団結した。

～レオンの心の中　ＯＵＴ～

「ん？どうしたのレオン？」

レイアが俺が心の中で考えているのを不思議に思い声をかけてくる。

「な、何でもないよ。それよりもミラ。早く行こう。まだ、リハビリの歩きの途中だぜ」

「ハッ！そ、そうだな！行こう」

俺とミラは再び、歩き出した。

「私は治療院にいるから～何かあったらそこに来てね～」

レイアが大きな声で俺たちに言ってくる。

「わかったー！」

俺はそれに大きな声で答える。

それからしばらく歩き続け、俺とミラは治療院へ戻ってきていた。

「ふぅ……」

歩き疲れた俺にミラが、

「レオン、これを飲んで水分補給だ」

コップに水を入れて持ってきてくれた。

「ゴクゴクゴク……プハァー！生き返ったぜ」

ル・ロンドは田舎ではあるが、食べ物はおいしいし、水が新鮮でおいしいんだよな。

「レオンは……その、私の作った料理とかを食べたいか？」

「ん？まあ、彼女の料理は食べてみたいな」

俺はそう思っていた。一度でいいから彼女に手料理を作って欲しい…と。

「なら……レオンのリハビリが終わるまでに……料理を覚えて見せる！待っていてくれレオン！」

そういい、ミラは俺から離れ、どこかへ向かっていった。

「い、一体何なんだ？」

ミラの行動が……今までよりもすごく単純に思えた。俺のリハビリが終わるまでにって……後、約2週間だぜ？覚えられるのか？……いや、ミラのことだから、覚えてくるだろうな。それはそれで楽しみだな。

俺はその光景を浮かべ、笑顔になった。

ミラの手料理……か。楽しみにしているぜ！頑張れよ、ミラ！

その日からか……レイアの家、宿泊処ロランドから悲鳴のようなものが聞こえたとか、聞こえなかったとか。

ま、いいか！

第２３話　レオンとミラ……恋人同士の一日（後書き）

……うん、今までのレオンのキャラが完全に壊れた瞬間の気がします……俺は何がしたいんだろうか。

ミラはミラでレオンが関わると……原作の面影がない。それがいいのですがね。

次回は時間が少し飛んで一週間後の世界です。

第２４話　ジュードとレイア

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラが恋人同士になってから早１週間。その間、俺とミラの関係は普通にバレてしまっている。

ジュードもそのことを知った時はかなりショックを受けていたみたいだったが、少ししてからおめでとうと言ってきた。
これは無理をしているなとすぐにわかった。だが、あえて何も言わなかった。

退院まであと、１週間になったので俺は戦いの勘を取り戻すために偶に魔物達と戦いに出て行ったりもした。

その帰り道のことだ。

「ふぅ……いい汗かいたぜ」

魔物達を退治しながら勘を取り戻す俺はル・ロンドへ帰る途中、ジュードを発見した。

「お～いジュード」

俺は声を上げながらジュードを呼ぶと、

「あ……レオン」

そっけなく言うジュード。

「どうしたジュード」

「……別に」

プイっと俺から目を逸らすジュード。……やっぱり、か。

「俺がミラと付き合いだしたのがショックか？」

「！」

俺の言うことに反応するジュード。

「はぁ……お前、男の癖にいつまで落ち込んでんの？」

「……レオンには僕の気持ちは分かんないよ」

「ああ、俺にはお前の気持ちはわかんねえよ。けどな、いつまでもお前が落ち込んでいて悲しんでいる奴がいることを考えてやれ」

俺はジュードにそういうが、

「僕が落ち込んでて悲しむ人がいる？……そんな人、いないよ」

……ここまで鈍感とは……。

「人の気持ちにも気付かない奴が……人に恋するなんて１００年早い」

俺はそういい、ジュードの傍から離れる。

「ただ、忘れるな。どんな人間にも必ず、自分を心配してくれる人がいること」

……そして、その人は……お前のすぐ近くにいることを…な。

俺は治療院へ戻った。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ジュードＳＩＤＥ～

最初、僕はそのことを聞いて信じられなかった。

ミラがレオンと付き合うことになったってことを……。

嘘だと思いたかったけど、ミラは必ずレオンの病室に行くし、どこかに2人で歩いていくのを見る回数も増えた。それに、キスをするところも見てしまった。

これらで信じられないなんていうほど僕もバカじゃない。

それからというもの、僕はいつも上の空。

そんな時だ。

「お～いジュード」

僕がこんな状態になった原因のがやってきた。

「あ……レオン」

僕は一応、挨拶をする。だけど、すぐに目を逸らす。

「俺がミラを付き合いだしたのがショックか？」

「！」

僕の心を見とおすように言うレオン。

「はぁ……お前、男の癖にいつまで落ち込んでんの？」

カチン。

僕はその言葉に少し怒りを覚えた。

「……レオンには僕の気持ちは分かんないよ」

「ああ、俺にはお前の気持ちはわかんねえよ。けどな、いつまでもお前が落ち込んでいて悲しんでいる奴がいることを考えてやれ」

僕が落ち込んで悲しむ人？父さんも母さんも仕事で忙しいからないね。レイアだってただの幼なじみだし。

「僕が落ち込んでて悲しむ人がいる？……そんな人、いないよ」

僕がそう言うと呆れたものを見るように僕にレオンがいう。

「人の気持ちにも気付かない奴が……人に恋するなんて１００年早い」

そういい、レオンは僕に背を向ける。

「ただ、忘れるな。どんな人間にも必ず、自分を心配してくれる人がいること」

そういい、レオンは治療院へ戻って行った。

「何なんだよ……」

僕はただ、拳を握るしかなかった。

「僕はただ……」

ミラの……彼女の力になりたかった……そう、それだけだったはずだった。けど、

いつも、自分の使命に命を掛けるミラを見ていて、いつの間にか彼女の力になって……その隣で共に戦いたいと思っていた。けど、その隣にはいつもレオンが……いた。

だけど、もしかしたら……なんて思ってたけど……結局、ミラはレオンを選んだ。いや、そもそもレオン以外を選ぶって選択肢は無かったんだと思う。

僕は自分の無力さを感じながら、静かに涙を流している。

そんな時だ。

「ジュード……」

レイアの声が聞こえた。

「……な、何かなレイア？」

僕は急いで涙を拭いて笑顔で話す。

「いいよジュード。そんな作り笑顔」

「……うん」

レイアには全部わかっているんだね……。

「ねえ、ジュード」

「……なに？」

「私、こんな時にいうことじゃないってわかっているんだけど……」

……なんだろう？何かレイアが真剣に僕を見ているような……。

「私……小さい頃から……ジュードのことが……

好きだったの」

「……え？」

僕の中で何かが固まった。

え？レイアが…僕のことを好き？

ど、どういうこと？！

「好きって……」

「好きは好き！異性としての好きってことよ！／／／」

レイアは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしている。

「でも……僕は……」

「わかってる。ミラのことがジュードは好きだってことは。だから、ジュードがミラ達とまた、旅に出る前に答えを教えてほしいの」

……つまり、僕が後、考えられる期間は……1週間。つまりその前ってことは六日後

「……わかったよ。1週間のうちに……答えを出すね」

「うん……私、六日後にここで待っているから。じゃあね！」

レイアはそういい、走って自分の家に帰って行った。

「僕は……どうすればいいのかな……」

僕は夜空を見上げた。今日も星が輝いている。

僕は……一体どうすればいいのかな……わかんないや。

僕はその日、ずっと夜空を見上げていた。

第２４話　ジュードとレイア（後書き）

疲れた……何故か今日は非常に疲れているのだすよ。
でも、そんな中、何とか書きました。
原作ではレイアの告白シーンがないので、簡単ではありますが書きました。
次回もお楽しみに。

第２５話　レオンＶＳレイアママ（前書き）

はい、今回は前に感想に書かれていたレイアママとの戦いを書いてみました。まあ、簡単にですが。

第２５話　レオンＶＳレイアママ

～レオンＳＩＤＥ～

俺がジュードにまあ、色々と言った次の日、俺はレイアのママさんと対峙していた。

「じゃあ、行くわよ！」

レイアママは棍を構え、

「まずは小手調べよ！瞬迅爪！」

突進して棒で突いてくる。

「ふっ！」

俺は木刀でそれを防ぐ。

「防いでからの……三散華！」

空いていた片手で殴る。

「こっちも、三散華よ！」

レイアママは棍で三散華を放ちながら下がる。

バキィン！

「オラオラオラオラオラオラオラオラ！！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！！」

木刀＆拳と棍が激しくぶつかり合う。

「怪我をしているのによく動けるじゃないの！」

「怪我は大体直っていますからね！」

ぶつけ合いながら話しあう俺とレイアママ。

そんな俺達のぶつかり合いを見ているのは、

「全く……レオンはいつからあんなに戦うのが好きになったのやら…」

「レオンすごいわ。ママとあんなに互角に！」

ミラとレイアだ。

元々、2人にリハビリがてら戦おうと思ったら、レイアママが「私が相手になってあげるわ！」といい、今現在戦っているわけだ。

「せいやあああ！」

「チェリオォォォォォ！！！！」

戦っていたのだが……何時の間にか素手で戦い合っている。何故だ……。

「魔神拳！」

「獅子戦吼！」

飛んでくる魔神拳を獅子戦吼で吹き飛ばす。

「活神棍・円舞！」

レイアママは棍をまた構え、光を纏った棍を振り回してくる。

「ちぃ！」

それを避けるが……

「行くよ！活神棍・神楽！」

レイアママは上空に飛び、俺目掛けて棍を叩きつけてくる。

「掛かってこいやあああああ！！！はあああああああッ！　皇王天翔翼！！」

俺は身体に炎と鳳凰のオーラを纏って、レイアママに攻撃する。

そして、

ドカァァァァン！！！

お互いの秘奥義がぶつかり合い、お互いに吹き飛んだ。

「ぐはぁ！」

「ごほぉ！」

同時に地面に激突する俺とレイアママ。

立ち上がると、

ガシ！

お互いに握手を交わす。

「ありがとうございました！」

「ああ！私も久しぶりに燃えたよ！」

互いに笑顔で話しあっている。

そんな時だ。

ガシッ！

「へっ？」

俺の肩を誰かが掴む。

「アーハッハッハ……レオン、少し話がある」

「え、あ、ちょ……！？ミラ！？！？引っ張るな～」

俺はそのまま、路地裏まで引っ張られていく。

路地裏に引っ張られた俺はミラに、

「んじゅるるるっっ！　んっんっんっ……んむうっ……じゅるっじゅじゅっ……ぷはっ……はあはあ……んむううっっ！」

ミラに情熱的且貪るようなキスをされている。

しかも、いつ覚えたのか舌を俺の舌に絡ませてくる。

「はぁはぁ……レオン……」

「はぁはぁ……一体どうしたミラ？」

「レイアの母親と笑顔で話すお前を見て胸が苦しくなってな……つい／／／」

顔を真っ赤にしてプイっと俺から視線を外すミラ。

「クックック……何だ？ヤキモチかよ」

「／／／

数分後、路地裏からでてきた俺達。

ミラは顔を真っ赤にしながら自分の唇を指で触れると顔を余計に真っ赤にする。

「さて、完全に退院まであと6日か……」

「あ、ああ。レオンが退院したらすぐにイル・ファンに向かおう」

「ああ。だが、また、ガンダラ要塞を通ることになるな」

?ガンダラ要塞〃の名を聞いたミラは表情を硬くする。

「気にするなよミラ。これは俺がした結果だ」

「……ああ」

俺がそう言うといつもの表情に戻る。

「……ガンダラ要塞を通らないで行く場合は……ラコルム海停に…だが……ブツブツ」

俺はミラを見ながらそう言う。

「レオン？」

「あ、いや、何でもない」

俺はミラに向けて手を出す。

「さ、帰ろうぜって言っても俺は治療院だが」

「ああ、私も宿に戻るとしよう」

ミラは俺の手を掴み、俺達は恋人繋ぎをしながら戻って行った。

第２５話　レオンＶＳレイアママ（後書き）

次回はジュードの答えです。

第２６話　ジュードの決意（前書き）

ジュードの決意とは……どうなるのでしょうか？！

第２６話　ジュードの決意

～ジュードＳＩＤＥ～

あの……レイアからの告白から６日が経過した。僕は未だに悩んでいる。僕は……レイアのことをどう思っているのかがわからない。

「……僕がこんなに悩んでいるのに空は快晴だね」

空を見上げると快晴の空である。僕の心の中は曇っているのに。

「……一体どうすればいいのかな」

ミラの手伝いをしたいのには変わりは無い。でも、ミラへの恋心は今は薄れてきている。薄れ始めたのはレイアの告白からかな？

レイアの告白が原因なら僕は……レイアに気があるの……かな？

そして、時間が過ぎて行った。

夜になると僕は自然とレイアの待っているところへ向かっている。
何故向かっているのかはわからない。でも、行かないといけない気がする。

僕がレイアに告白された場所に行くとレイアが待っていた。

「あ、ジュード……」

「……レイア」

僕とレイアはお互いの顔を見あう。

「き、来てくれたん…だ」

「う、うん……約束だし」

ど、どうしよう……そうだ！

「ね、ねえレイア」

「な、なにかな？」

僕はどうしてレイアが僕のことを好きになったのかを……知らない。
だから、

「どうして、レイアは僕のことが好きになったの？」

「そ、それは……ジュードって昔っから人のことを心配してさ……
お節介じゃない？でも、私はそのお節介に助けられていたの。私が
怪我をしたときだって、私のことを自分のこと以上に心配してくれ

たり……私がリハビリのついでにって護身術を習うってときだってジュードは一緒に修行してくれた。この頃からかな？ジュードのことを意識し始めたのは」

僕は驚いた。まさか、そんな昔からだったなんて。

「イル・ファンの医学校に行った時よりもジュード……少し大人になって帰ってきた時は驚いたわ。人ってここまで変わることができるんだなって」

レイアは胸に手を置く。

「私は……心からジュードのことを好き……愛している……とはさすがに言えないけど。まだ、私たちは子どもだし」

「あはは……レイアらしい理由だね。……僕はレイアのことは気になる異性として見るのはあの告白からなんだ。その前まではミラのことで頭がいっぱいだったけど、レイアの告白を聞いてから不思議と……胸の中にあったモヤモヤが消えたんだ。けど、そこで僕は少し思うことがあるんだ」

「ん？」

「僕はレイアのことを好きになっても……今までのような関係を続けられるのかなって」

僕がそう言うと、

バシン！

「いった！？」

「もぉ～ジュード！男の子でしょ！今までの関係？例え、ジュードと恋人になっても今までとは変わんないわよ！何年の付き合いだと思っているの？」

「そ、それは……１０年以上の付き合いだけど……」

僕とレイアはこの村の出身だし、元々人口が少ないから結構長い付き合いなんだよね。

「そうね！ってことはお互いに性格のことも分かってんでしょ！」

「そ、そうだけどね……」

「あ～もう！ウジウジしないではっきり言う！私はジュードのことが好きなの！」

「ボ、僕だって……あっ！」

僕は思わず口をふさぐ。だけど、

「……／／／」

「お、遅かった／／／のかな」

し、失態だよ！？仮にも告白するんならもう少し、ムードを……はぁ、仕方ないか。レイアだもんね。

「プッ！」

「ククククッ！」

「「アハハハハハハハハ！！！！」」

僕たちは顔を見合うと同時に笑い始めた。

「な、何か僕達らしくないね」

「だね。告白って言っても……何か私らしくないね」

そう、何か僕たちらしくない。いつもの僕でもこんなことにはならない……かも。

「でも、僕はレイアのことは気になるんだ」

「そ、そうなの？」

「うん。久しぶりにレイアを見た時は結構変わったな～って」

「私もよ。ジュード、イル・ファンに行って少し雰囲気とかも変わった気がしたし」

僕たちは何気ない話を進める。

そして、

「レイア、こんな僕でもいいなら……」

「う、うん……」

僕は大きく深呼吸をして、レイアにいう。

「僕と……付き合ってくれる？」

ガクッ

「もぉ！そこは僕と付き合ってでしょ！……まあ、ジュードらしいわね」

「そ、それで答えは？」

「私に聞くのぉ？告白したのは私からよ？」

察してよねって表情をするレイア。

「僕と付き合ってレイア」

「うん！」

笑顔になるレイアを見て、何か身体がぽかぽかしてきた。

ああ、これが本当の恋なのかなって実感したよ。

その後、僕たちは手をつないで帰って行った。

途中、師匠にあって、僕たちが何で手を握り合っているのかをねほりはほり聞かれ、白状したら、宿では宴のような騒ぎようになった。

こんな、一日も悪くないって思ったな～。

第２６話　ジュードの決意（後書き）

答えは付き合う……でした！
いや～レイアの想いが報われてよかったよ～（涙）
レイア、これから幸せにね～。
次回から原作に戻るからね！

第27話　再開と再出発

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラ、ジュードとレイアが恋人同士……色々なことがあったこの3週間。俺はようやく退院できた。

俺とミラ達の４人で海停のところまで海を眺めている。ジュードはここに来る途中にディラックさんに手配書を見せられたようでそのことについてをレイアに追及されている。

そして、俺は聞いて、見た。

「ジュード君～～！」

ガブ！

「ちょ、なに！？」

ティポがジュードの顔に噛みつくのを。それに驚くレイアを。さらに、

ポヨ～ン、ポヨ～ン！

顔からティポを必死に取ろうとするジュードの姿を。

そんなティポに目もくれず、俺とミラに抱きついてくるエリーゼ。

「エリーゼ、どうしてここに？」

エリーゼがいることに不思議がるミラ。

「えと、ね……」

「レオンさんのお見舞いに参りました」

エリーゼの言いたかったことをローエンが現れ言う。

そして、顔からはがされたティポは、

「レオン君～～！」

ガブ！

俺にまで噛みついてきた。

「てぃほ、はなへろ」

俺は離れるようにティポにいう。

「やだ～～～！」

「……」

ガシッ！

俺は離れないティポの頭と顎に手を当て、そして、

「は・な・れ・ろ！」

カポン！ポヨ～～～～ン！！

「全く。久しぶりだなエリーゼ。ローエン」

「久しぶり……ですレオン『お兄ちゃん』……あ／／／また、言っちゃいました」

久しぶりのお兄ちゃん呼ばわり。うむ、相変わらずのうっかりぶり。

「それにしても、もう歩かれているとは……」

俺を見て驚くローエン。

「ああ。ミラ達のおかげさ。な！」

「うむ」

俺とミラは顔を見合い、ジュードとレイアは笑顔で頷く。

「ローエン！」

「お久しぶりですね、ジュードさん」

ローエンはジュードを見た後、レイアを見て言う。

「初めまして……ローエンと申します」

「あ、ども……」

レイアはローエンに挨拶されると挨拶し返す。

その後、俺達は何で俺のが立てるようになったのかを説明すると、

「ふむ……医療ジンテクスというのですか。これでこのわずかな期間に……」

俺の右足に付けてある医療ジンテクスを見てそう言うローエンに俺はいう。

「まあ、これのおかげでもあるが……一番の原因は俺の規格外な回復能力らしいぜ？」

「何ともまぁ、さすがはレオンさん……と言ったところでしょうか」

ローエンは何やらあきれたかのように言う。

「ねえ、ローエン。しばらくはこっちにいるの？」

「旦那さまとドロッセルお嬢様から、しばらく休むよう言いつけられました。エリーゼさんが、レオンさんとミラさんに会いたいとあまりに申されるもので」

そう、ローエンが言うとレイアの腕の中にいたティポがエリーゼの腕の中に収まり、言う、

「ぼくたちのせいじゃないぞー。この頃、ローエン君がボーッとしてたからじゃないかー」

ティポがローエンの最近の様子を言うとミラが言った。

「らしくないな？」

「いえいえ。私も悩みはいっぱいありますよ？……少し、私も考えるところがありましてね……」

「ふむ。ゆっくりと話を聞いてやりたいところだが……」

ミラは俺を見る。俺は頷いて言う。

「俺達は明日にでもル・ロンドを発つつもりでいる」

俺がそう言うと驚くローエン。

「そんな病みあがりの体で……イル・ファンに一体何があるのですか、ミラさん？レオンさん？」

ローエンがもっともな質問をしてきた。

「クルスニクの槍と名付けられた兵器だ。あれだけは……あれがある限り、精霊も人も破滅へと向かってしまう」

「ああ……あれだけは、あれだけはこの世にあってはならないもの

だ」

俺とミラは目をつぶりながらそう言う。

「……ラ・シュガルの王様がつくったんですか？」

頷く俺とミラ。

「イル・ファンを目指す……それはガンダラ要塞へ向かうということです。あなたをあんな目に遭わせたあの場所……レオンさん、恐ろしくはないんですか」

俺を見ながらローエンはそう言った。確かに、あそこではいい思い出はない。だが、

「そうだな……俺にとって恐怖があるとすれば……それは……目の前でミラを失い、ミラと共に使命を果たすことができなくなることだ！」

俺がはっきりとそういうと、ミラは顔を赤くする。

「なんでミラ君とレオン君がそんなに頑張んないといけないのさー

？」

ティポが疑問に思ったことを口に出して言う。

「私はマクスウェルだからな。世界を守る義務がある」

「そして、俺はそんなミラを守り、ミラと共に世界を守ることが俺の義務だ」

俺とミラの言う……いや、正確にはミラの言ったことに驚いているな。

「マクスウェル、ですと……」

「精霊の？え、ミラが？」

「ミ、ミラ……本当に……」

今までミラのことを知らなかったメンバーは驚き、俺やミラ、ジュードを見る。

俺とジュードは頷く。

「あんぐりー」

事実だと知るとティポが口を開けて言う。

「だが、そんなことは関係ない。ミラは……俺のミラだ」

?俺の〃という言葉にミラは顔を真っ赤に染める。そのことに気づいたローエンとエリーゼは俺に聞く。

「レオンさん……もしや、ミラさんと……」

「ああ、ここに来てから恋人になった」

隠さず言う俺にミラは慌てる。

「レ、レオン／／／」

「おめでとうございます、レオンさん、ミラさん」

「おめでとう……です」

「わ～～い！レオン君とミラ君は恋人～恋人～」

3人におめでとうと言われ少し照れる俺とミラ。

「さて、こんなところで立ち話もなんだし、戻ろうぜ」

「そうだな。いくら退院したからって、体に悪いしな」

そういい、俺の腕に絡みついてくるミラ。

俺は心地よい匂いと感触に笑顔になっていく。

「じゃあ、行こうぜ」

そういい、俺とミラは先に歩いていく。

それに続き、ジュードとレイア、エリーゼ、ローエンもここから離れて行った。

この日の夜、俺の病室でディラックさんとアルヴィンが話しているのを聞いていた俺は狸寝入りをして、会話を盗み聞きしていた。

翌日、

早めに起きてみると部屋の外には、ミラ、ジュード、レイアがいた。話を聞くとすぐにでもル・ロンドを発とうということだ。

そのため、俺達は宿屋に泊っていたエリーゼとローエンを迎えに行き、そのまま港へ直行した。

宿屋を出る前に色々と話を聞いた。ローエンとナハティガルは古くからの友人であることを。ローエンが旅についてくること、エリーゼはカラハ・シャールへ返すこと。

そして、港に行く時に何でレイアがいるんだ?とジュードに聞くと、「ジュードが行くなら私も行くよ!戦力にもなるし!」とのことだが、大方、ジュードの傍にいた言って理由だろうな。

そして、停まっている船に乗ることになるのだが、

「この船ってア・ジュール行きだけど、これがローエンの言ってた

考え？」

「はい」

「ローエンが言うのだから、大丈夫だろう。それに駄目だったとしてもレオンもイル・ファンに行くための他のルートを知っているしな」

ミラの言うことを聞いたローエンが俺を見る。

「レオンさんももしや……」

「ああ、おそらくローエンの行こうとしているルートだと思うぜ？」

「なるほど……」

俺とローエンはお互いに行こうとしているルートの話をしていると、ジュードがエリーゼのことをしばらく預かってくれと言う話をし、ティポが怒り、船に乗ろうとすると、

「ジュード！」

ディラックさんが走ってきた。

「父さん……ごめん。僕、ミラ達と行きたいんだ」

「ダメだ！行かせるわけにはいかない。彼女と彼は……お前が関わろうとしているのは……」

ディラックさんが重要なことを言おうとすると、

「おいおい、俺たちどんな縁なんだよ」

「アルヴィン！？」

どう見てもわざとらしく現れたアルヴィン。

「……」

「……」

俺とミラはアルヴィンを厳しい目で見る。ディラックさんとアルヴ

ィンの話のことをミラには伝えているからだ。

「新しい仕事、クビになっちまってね。その様子じゃ、また行くんだろ？俺、前にもらった分の働きしてないぜ」

そう、アルヴィンがいうとジュードは嬉しそうに言う。

「来てくれるんだね！」

「知り合い……なのか？」

「うん。前にずっと一緒だったんだ」

ディラックさんは驚き、ジュードに聞くが本当だと知ると何も言わなくなった。

そんなアルヴィンにエリーゼとティポが近づく。

「アルヴィン君ー。ぼくたち、置き去りにされるー」

そう、ティポがいい、アルヴィンはエリーゼの頭に手を置く。

「かわいそうだなー。十分戦えるのにな　なあ、連れてってやろうぜ」

アルヴィンはジュードに聞く。

一旦、アルヴィンから視線を逸らし、後ろを向くジュードにアルヴィンはいつものように腕を肩に回して言う。

「な」

そういいながら、アルヴィンはディラックさんを見る。まるで、「余計なことを言うんじゃねえぞ」的な風に見る。ディラックさんはアルヴィンから視線を逸らす。

「しかし、アルヴィンさん……」

「いざとなりゃ、俺が守ってやるからさ。頼むよ、ローエン」

「頼むよ、ローエン君ー！」

ガブ！

ティポはローエンの頭に噛り付く。

結局、ティポがローエンの頭から離れないこともあり、エリーゼも旅に同行することになった。

そして、俺とミラはディラックさんにジュードを頼むと言われ、船に乗り込み、船は出航した。

出航してしばらくしてから俺達はローエンの言う考えを聞いていた。

今はガンダラ要塞を抜けることは不可能であるということを話している。ゴーレムが起動してしまっているのが原因だと話をし終えたところだ。

結果、ア・ジュールの陸路を使ってイル・ファンへ向かうことになった。

「ほう、そりゃまた。でもよ、ファイザバード沼野はどうすんのよ？」

「そうだよね」

ファイザバード沼野……ここはイル・ファンの北にある広大な沼地であり、ガンダラ要塞と対をなす、ラ・シュガル最大の自然要塞といわれている。

「あそこ、霊勢がめちゃくちゃで通り抜けられないって話じゃなかったっけ」

「いえ、変節風が吹きましたので、現在は地霊小節（プラン）に入りました。つまり……霊勢が火場（イフリタ）から地場（ラノーム）になったこの時期であれば、ファイザバード沼野も落ち着いているはずです」

そう、説明するローエンであったが、

「全然わかりません……」

「安心しろ。私もだ」

「あ、あははは……実は私も」

女性陣が全滅。で、問題ないとアルヴィンが言うが、

「ローエン」

「なんですかレオンさん？」

俺は原作知識を思い出すかのように言う、

「もしかしたら霊勢は落ち着いていないかもしれないぞ」

「？どういうことですか」

「ああ。四大達が捕まっていることは話したよな？そのせいでおそらく霊勢は変化してないと思うぜ」

「なっ！？た、確かに……霊勢には四大精霊も関係していると聞いたことがありますが……うーむ」

「とにかく今はファイザバード沼野へ向かってみればわかるだろ」

「そうですね」

その後も皆で話し合いをし、アルヴィンがレイアのことに気づいて誰と言われたのでレイアが改めて自己紹介をした。

そして、ガンダラ要塞の状況を聞き、ア・ジュールとの戦闘を始めてかもしれないという話を聞いた。

色々と複雑になってきた情報をまとめながら俺達はラコルム海停へ到着するのであった。

第２７話　再開と再出発（後書き）

今回はここまでですね。次回もお楽しみに

第２８話　バカ襲来

～レオンＳＩＤＥ～

ラコルム海停に到着した俺達。

ふっと、アルヴィンが何かを思い出したのか言い始める。

「なあ、ここってニ・アケリアの近くじゃねーの？」

「そうなのか？」

ミラが俺を見る。

「ああ、確かにニ・アケリアは近くにあるが……」

「寄ってかなくていいの？」

「今、村に用はない。何か行きたい理由（わけ）でもあるのか？」

ミラはアルヴィンを見て、そういう。まあ、今この状況でニ・アケリアにでも行こうぜと言う風に言えば何かあると普通は思うがな。

「いーや。みんなおたくを心配して、帰りを待ちわびてるのかと思ってさ」

「村を気にかけてくれるのはありがたいが、今は急ぎたい」

ミラにそう言われて黙るアルヴィン。

「では、ラコルム街道を北へ進むとシャン・ドゥという街があります。まずはそこを目指しましょう」

「待った。その街道ってラコルムの主ってやばい魔物が出没するんじゃなかったか？」

ローエンはアルヴィンがそんなことを知っていることに驚きながらも感心している。

「おや、よくご存じで。ですがご安心を。ラコルムの主も霊勢の影響をうける魔物。地場（ラフノーム）に入ったこの時期は、活動を弱めていて街道まで出てくることはないでしょう」

「だってさ。アルヴィン君、ビビる必要ないよー」

「別にビビってないって」

ティポがアルヴィンにいうが、

「いや、そうとも言えないぞ」

「どうしてですか、レオンさん…？……まさか」

「ああ。船でも言ったが、今は霊勢がめちゃくちゃになっているんだ。だから、ラコルムの主もまだ、活動している可能性が高い」

俺がそう言うとローエンが頭を抱える。

「そうでした……そのことを忘れていました」

「だが、ラコルムの主が出て来てもこのメンバーに勝っていると思うか？戦闘中に前衛・後衛に完全に分かれているんだぜ？」

俺がそう言うとローエンがメンバーを見る。

「確かにそうですね。レイアさんはわかりませんが、他のメンバーとは一緒に戦いましたからね。コノメンバーであれば、戦闘中に己の力を最大限に使うことができますか」

「その通り。じゃあ、行こうぜ」

俺がそういい、皆は動き出す。

ミラは何かを考えているのか動かない。

「ミラ……考えるのはいいが、今は行動しようぜ」

「……！あ、ああ、そうだな」

俺はミラに声を掛けて一緒に歩く。俺達はラコルム街道に出た。

ラコルム街道を少し進むと、１羽が俺達の飢えを飛びまわる。

「アルヴィンの鳥だ」

「ほう。そうなのか？」

「うん。アルヴィン、前にもあの鳥で手紙のやり取りしてたよ」

そういいながら、ミラに近づくジュード。

「相手は女の人みたい」

そう言う、ジュードに

「ジュウゥゥゥドォォォォ？」

ピクッ！

「な、なに？レイア」

「こっちに来なさい」

ガシッ！

「え！？な、何何！？待ってレイア！そっちに関節は曲がらな……
アッ――――――――――！！」

岩の影に連れていかれて悲鳴を上げるジュード。

「やれやれ……ジュードもあんな風にするから……」

「悪いな。すぐ終わるからちょっと休んでてくれよ」

アルヴィンはなにもみなかった的な表情で俺たちに言う。岩場のあるところで鳥を腕に止め、手紙を読んでいる。

その間、俺達は各自休んでいる。俺はミラと話をしている。

「さて、もしラコルムの主が出てきたら霊勢は完全にめちゃくちゃな状態になっていると言ってもいい」

「だが、その場合はどうやってイル・ファンへ向かうのだ？」

「ああ。この先……北東に進んで、そこにある街のシャン・ドゥにあるワンバーンを借りて乗って行けばいい」

「なるほどな。だが、そう簡単に貸してくれたりするのか？」

ああ、そのことか。

「安心しろ。シャン・ドゥには俺の知り合いがいるから頼んでみる」

「……さすが、レオンだな。カラハ・シャールのクレインにドロッセルといい、昔、旅をしていたかいがあるな」

「だろ？人脈は使ってこそだ。ただ……」

「ただ……なんだ？」

俺はシャン・ドゥであることをしているため、ある意味で有名人なんだよな～。

俺がそうんなことを考えていると、アルヴィンの手紙が終わり、レイアのジュードへのお仕置きも終わったのか岩場の影から出てきた。

「そろそろ行こう」

ミラが皆にそういい、俺達はそのままラコルム街道の北東へと進んでいった。

ラコルム街道の北東へ来ると、

「ここにおられましたか――――っ！！」

どこからか聞き覚えのある声が……

シュタ！

後ろから音がし、見てみると、バカイバルがいた。

「ミラ様！お探ししていました！」

「イバル、どうして？」

「誰なの？」

「ミラの巫女だよ」

イバルを知らないレイアはジュードに聞いて、イバルのことを知る。

「ミラ様、このような奴らといないで、ぜひ村へお戻りください。
ミラ様の身に何かあれば俺は……」

「私はイル・ファンに向かわねばならん。今は戻る気はない」

「では俺がお供を！」

……こいつ、いい加減にしつこいな。村のことはどうしたんだ。

「必要ない。みながいる。それになにより私はレオンと一緒にいたい」

「なっ！？……ミラ様？何かありましたか？何やらミラ様の纏う雰囲気が……」

……こいつ、変なことに勘がいいな。

「そ、それは…だな／／／」

俺を見ながら顔を紅くするミラ。そんなミラを見てイバルは、

「ミ、ミラ様？！……まさか、おい！貴様、まさか……ミラ様に手を出したのではないだろうな！」

血相を変えるイバル。

「もし、手を出していたらどうする？」

ブチッ！

「きいいいいいいさあぁぁぁぁぁぁまあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

剣を持って俺に向かってくるとイバルであったが、

【ウゴォォォ！】

ドスンドスンドスン！

「うごおっ！」

横からの不意打ちに避けられなかったイバルは気絶した。

俺はすぐに避けたけどな。

けどよ……

「なんだこの数は！？」

「おいおい！何でラコルムの主が他の魔物を引く連れて来てんだ！？」

「こんなこと……聞いたことはありませんよ！」

「こ、怖い……です」

「ぎゃー！何この魔物の群れ！！こわーい！」

「これって……ちょっとまずくない？」

「けど、やらないとこっちがやられちゃうよ！」

「ああ、みな、行くぞ！」

俺達ＶＳラコルムの主率いる魔物の群れとの戦いが始まった。

「みんな、聞いてくれ。さすがにこの数……俺ですら相手にしたことはない」

「どうするの？」

「ここは、みんな……全員で共鳴（リンク）戦闘するぞ！」

俺が言うと全員驚き、声を上げていない。

「俺を軸に皆で共鳴奥義を使う」

『共鳴奥義？』

皆が首を傾げる。まあ、俺が考えたものだしな。

「ああ。２人でする共鳴（リンク）アーツがあるだろ？それの強化版だ」

「で、でも、どうするんですか？」

「共鳴奥義を使うには共鳴（リンク）戦闘する必要がある。まあ、俺と一緒に戦えば……わかることだ！みんな、俺の会わせろ！」

『わかった！（わかりました！／了解！／オーケー！／わかりました…です）』

そして、戦闘が本格的に始まる。

「まずは共鳴（リンク）して技が使えるようにエネルギーを溜めるぜ！アルヴィン！行くぞ！」

「おお！いくぜ！」

俺とアルヴィンが横に並び、俺は詠唱する。

「数打ちゃ当たると思うぜ！」

「こんな感じか？エレメンタルマスター！」

アルヴィンの持つ銃の先から4属性の術式陣が展開され、目の前にいた魔物達をその攻撃で吹き飛ばした。

「お見事な腕前だな」

「だろ？」

俺とアルヴィンでの間の共鳴奥義（リンクアーツ・セカンド）が発動可能になった。

「あつ～い炎」

「喰らっときな！」

「「剛・紅蓮剣！！」」

俺とアルヴィンが当時にジャンプし、アルヴィンの剣に宿った炎と俺が一緒に剣を振りかざし、炎と共に魔物を吹き飛ばす。

「よし！次だ！」

俺は近くにいたレイアの所へ行く。

「お待たせ！」

「もう！遅いよ！」

レイアは1人でかなり戦っていたみたいだ。

「じゃあ、行こうか！」

「うん！」

「突きまくるよ！」

「オーケー任せろ！」

「「霧沙雨！！」」

俺とレイアの剣と棍が風を纏い、突進してくる魔物達を突きまくる
……さらに突きまくる！

ズシャズシャズシャ！！！

みるみる突進してきた魔物を片付けていく。

「数があれば……敵など恐くなどないわ！」

「だね！これだけ突きまくれば問題な～い！」

数を減らし、ここをレイアに任せ、俺はまた別の場所へ。

次の所に来るとローエンとエリーゼが戦っていた。

「お待たせ！」

「待ってましたよレオンさん」

「待ちくたびれ……ました」

「おそいー！」

ティポがご立腹の様子。

「じゃあ、遅れた分は働きましょうか！ローエン！」

「行きましょう！」

俺達は2人で詠唱をし始める。

「台風に…」

「ご注意を」

「「テンペスト！！」」

魔物達の多くいるところに台風のような精霊術が発生し、魔物達を飲み込んでいく。

「だから言ったのに……」

「魔物がこちらの言葉がわかるとは思えませんがね」

「ごもっとも！さて、次はエリーゼ行くぞ！」

エリーゼがティポを抱えながら俺に近づく。

「はい！」

「いっくよー！」

今度はエリーゼと一緒に詠唱する。

「地中よりいでし闇の波動」

「現れて！」

「「ブラッティハウリング！！」」

魔物達の足元に大きな術式陣が現れ、そこから闇の波動が現れると、次々に魔物達を巻き込み、消し去って行く。

「闇の波動に飲まれて消えろ！」

「レオン……かっこいいです！」

「かっこいーぞ！」

2人のいるところの魔物も大体片付けたな……後はジュードとミラのところか。イバル？知らないな。

「じゃあ、後二人の所に行ってくる！」

「お気をつけて」

「いってらっしゃい……です」

「気をつけてねー！」

3人に見送られた俺はミラ達の所に。

ミラとジュードのところについた俺は、

「ジュード！行くぞ！」

「レオン！来てくれたんだ！うん、行こう！」

俺とジュードは同時に拳を握り、

「こいつで」

「落としてみせる！！」

「「魔神拳・竜牙！！」」

拳を振り上げ、巨大な衝撃波を魔物達に飛ばす。飛ばされた衝撃波は魔物達に直撃し、当たって行く魔物を手当たり次第に巻き込んでいった。

「やるな、ジュード！」

「レオンこそ、すごいよ！」

ジュードと一緒に魔物を倒して俺はミラのいるところへ。

「レオン！待っていたぞ！」

ミラのところにはラコルムの主である……ブルータスもいた。

「お待たせミラ！さあ、魔物達よ！こいつに」

「耐えられるか？」

「「天狼滅牙！！」」

俺が魔物の先頭にいるのを殴ってのけ反らせ、ミラと一緒に連続で斬撃を叩き込み、

「このまま続けて共鳴秘奥義（リンクアーツ・ファイナル）行ってみようか！」

「何だかわからんが……レオンに任せる！」

そう、ミラの言葉を聞き、俺の姿が消え、ミラの姿も消える。

「閃け、鮮烈なる刃！」

「無限の闇を鋭く切り裂き」

「「仇なすモノを微塵に砕く！」」

「こいつで…」

「終わりだ！」

今まで左右上下に高速移動しながら魔物達とブルータスを斬りまくっていた俺達は姿を見せ、

「「漸毅、狼影陣！！」」

最後に現れると、今までに溜まった斬撃の力が爆発した。

「私たちの道を阻むならば！」

「誰であろうが、切り崩す！」

俺とミラは互いに剣を合わせながら、鞘に収めた。

戦闘が終わると皆、地面に座り込んでいた。

「ふぅふぅふぅ……まさかこんなに魔物が来るなんてな」

アルヴィンも地面に座り込んでいる。

「ですな。私もこの年になってこんなに魔物を相手にしたのは久しぶりでした」

「俺もだ。こんなに魔物の群れと戦ったのは１０年ぶりだぜ」

俺も久しぶりの魔物の群れとの戦いに疲れた。

そう、俺達が話しているとイバルが目を覚まし、俺達を見る。

辺りにはまだ、消えかかっている魔物の死体が……。

「あがっ……」

自分が気絶しているあいだにこんなに魔物を倒したのか！？っていたそうな表情でイバルは俺達を見る。

「やはり、レオンの言っていたことが現実になるとは……」

「四大様がお姿を消したせいで、霊勢がほとんど変化しなくなっているんだっ！」

「それじゃ、ファイザバード沼野を越えて、イル・ファンに行くのは……！」

「……」

深刻そうにするジュードとローエンにイバルは笑いながら言う。

「ファイザバード沼野を超える？くくく……はーはっはっは！これは笑える。こうなっては……」

イバルが何かを言いかけるが、俺はミラに言う。

「ミラ。思っていたことが現実になった。これは予定通り……」

「ああ。シャン・ドゥでレオンの知り合いにワイバーンを借りるとしよう」

ピキッ

俺とミラの会話を聞いたイバルは固まる。

「どういうことですか？」

「ああ、もしかしてと思っていたからな……この先の街のシャン・ドゥには知り合いがいるんだ。その人はワイバーンを従えているから頼めば貸してくれるかもしれないとミラには話しておいたんだ」

「なるほど……ワイバーンですか」

そう、話していると固まっていたイバルが復活する。

「ふん！貴様のようなよそ者にワイバーンを貸すはずがない！ミラ様は俺がイル・ファンに連れていく！行きましょうミラ様！」

「断る」

「はっ？」

ミラの断る発言に変な声を出すイバル。

しだいに、ミラが何を言ったのかをわかり始める。

「で、ですが、ミラ様！！」

「くどいぞイバル。私はみなと……レオンと共にイル・ファンに向かう」

「グググググ！！！レオン、貴様！！さっきもミラ様の反応！貴様、ミラ様に手を出したことは……絶対に許さん！」

イバルはそういうと剣を抜いて俺に突っ込んでくる。

ミラが動こうとしたが俺が止める。

「いい加減にしつこいお前には……気絶しててもらおうか」

俺はどこからかハルバートを出す。

突っ込んでくるイバルをハルバートで打ち上げ、

「神空割砕人！」

俺はジャンプしてハルバートを振りかざす。

「ぐあっ！」

怯むイバルに、

「続けて喰らえ！震天裂空斬光旋風滅砕神罰割殺撃！！」

殴る・蹴る・叩くなどを連携でつなげていき、最後にハルバートを地面に叩きつけて、イバルを吹き飛ばす。

「がはっ！」

吹き飛ばされたイバルは岩に背中から叩きつけられ、気を失った。

「まあ、こんなもんか」

ハルバートを消すと、

「す、すごい」

レイアがすごいモノを見る目で俺を見る。

「さて、さっさとシャン・ドゥに行こうぜ」

「そうだな。余計な時間を喰ってしまった」

俺とミラは何もなかったかのようにその場を離れ、シャン・ドゥへ向かう。他の皆は気絶したイバルを背にしながら手と手を合わせて「成仏しろよ」といい、その場から離れ、俺とミラの後を追ってくる。

……この際、イバルがどうなろうと知ったことではないしな。

だが、この後、結局原作のようにイバルはアルヴィンの書いた手紙を見て、俺とジュードに勝つとか何とか言っているとは思いもしなかった。

第２８話　バカ襲来（後書き）

はい、皆さんからの応募してもらった共鳴奥義とミラとだけですが共鳴秘奥義を使ってみましたが……やはり、戦闘シーンは苦手ですね。どうやって表現するのかがあまりできませんでした。
でも、頑張って書いてみました。
これからも出していきたいと思いますのでよろしく！

イバルは……哀れですねｗ
作者にとっては操りやすいただのバカなキャラですから……だって、普通正体のわからない人物の手紙を信じますか？
しかも、何でそれがレオンやジュードに勝つことにつながるのかがわかりません。
こんなんでよく、ミラの巫女が務まるんだと思いました。

次回、レオンの知り合いが判明します。誰だと思いますか？皆さん……プレイしている人が知っている人です。何故その人がレオンの知り合いなのか……それはシャン・ドゥにある、ある施設が関係しています。

第２９話　シャン・ドゥでの再開

～レオンＳＩＤＥ～

あのバカをぶっ飛ばして俺達は今現在、ようやくシャン・ドゥへと来ていた。

「ここがシャン・ドゥ？」

「はい。ア・ジュールは古くから部族間の戦乱が絶えなかったため、このような場所に街をつくったそうです」

皆は周りにいる街の住民達の様子を見ていると、ミラが言う。

「人間が生き生きしているな。祭りでもあるのか」

「見て、こっちもおもしろい像だよー」

レイアは街の入り口につくってある像を見ている。

「偉大な先祖への崇拝と、精霊信仰が同一になったといわれる像だ」

「へ～」

感心しながら上を見ていくレイア。

「その調子その調子」

「ん？」

意味のわからないことを言うアルヴィンに疑問を覚えたレイアはアルヴィンを見る。

「こっち見ないで、ほら見上げとけよ。たまに崖から落石があるぞ」

「え！脅かさないでよっ」

上を見上げていたレイアはアルヴィンの一言に驚き、怒りアルヴィンにいう。

「詳しそうな口ぶりだな」

シャン・ドゥの街に詳しいことを不審に思ったミラがアルヴィンに聞いた。

「前に仕事で、だよ」

そういい、あしらうアルヴィン。

「あ！そういえば、レオンはここに来たことあるんだよね？その時、落石には……」

「ああ、街に来た直後に被害を受けたよ」

「えっ！」

「何だと！レオン、大丈夫だったのか！」

ミラが俺の体を触る。

「ああ。マジでびっくりしたよ。いきなり崖から落石が来るなんて思いもしなかったからな。まあ、落ちてきたのは吹き飛ばして塵にしてやったが……」

俺が皆に聞こえるように言っていると、エリーゼが街を見る。見渡す。そわそわする。

それを不審に思ったジュードがエリーゼに話しかける。

「どうしたの、エリーゼ？」

「あれ、ぼく、ここ知ってるよー。ねえ、エリー？」

「うん……。え、えと……ハ・ミルに連れてかれる前に来たんだと思います……」

「以前、この辺りにいたのですか？」

ローエンがこの辺りにいたのかを聞いてみるが

「わ、わかりません……」

わからないというエリーゼ。

それを余所にアルヴィンが単独行動を開始する。

「え、ちょっとアルヴィン君、どこいくの？」

「ちょっと用事があってな。んじゃ、そゆことで」

それだけ言って離れるアルヴィン。

「もー！協調性ないなぁ」

それにプンスカといったふうに怒っているレイア。

そんな中、俺とミラは、

「ミラ……」

「ああ……」

後でアルヴィンを探すことにした俺とミラ。皆にはワイバーンのところに案内すると俺がいい、動き始めるが。

ガラン！

俺達が通ろうとしたところの崖の上から崩れるような音がした。

「な、崩れるぞっ！」

そして、落石してくる岩。

「レイアさん！」

「エリーゼ！」

ローエンがレイアを、ミラがエリーゼを抱えた。

ジュードも落石の届かない場所にいたが、

「え～ん、え～ん」

その下にいる子どもが見えた。足をけがしているみたいだ。

「ちぃ！」

タッタッタ！

俺は子どもの前に立ち、

「無双正拳突き！！」

ドカァーーン！！

強烈な正拳突きで岩を破壊した。

「大丈夫か、坊主」

「う、うん……お兄ちゃんありがとう」

「よしよし、男ならもう泣くな……いいな？」

「うん！」

子どもはそのまま、友達の元へ向かって歩いて行った。

そして、俺がミラ達の方を見ると、女性が1人、レイアに手を貸していた。

「おい、何があった？」

「レオン。レイアが怪我をしたみたいでな、ジュードが治療しているところにイスラが……」

ミラが女性……イスラのことを言う。

「初めまして、イスラよ」

「俺はレオンだ」

俺が名を出すとイスラは顔色を変える。

「レオンってまさか……」

「……（汗）」

俺の名を聞いて驚くってことは……知っているな、俺のこと。

「じゃあ、私、用事があるので失礼するわ」

歩いて去って行くイスラに、

「ありがとうございました」

レイアはお礼を言った。

皆をワイバーンのいるところにまで案内して、そのワイバーンのいるところにいる。

「へいへいへい～」

ティポは檻の中にいるワイバーンを挑発するかのように言う。

【ガアアアア！！】

「ピクン！」

ブチャ

ティポは恐がり、そのままジュードの顔面に噛みつく。

「全く、久しぶりだなお前たち」

俺が声を掛けると俺のことを覚えていたのか、舌で俺の手を舐めてくる。

【♪】

「あはは、くすぐったいぞお前ら」

俺がワイバーンとじゃれていると、

「君たち、何をするつもりだ？そのワイバーンは我が部族のもの…って、レオンじゃないか！」

3人組でその中の1人が俺たちに話しかけ、その人物は俺の名を呼ぶ。

「おお、ユルゲンスじゃないか。お久」

「お久……じゃないぞ！君の住んでいるというニ・アケリアに手紙を出したのに一向に連絡が来ないから心配していたぞ！」

「ん？何言ってんの？俺、ここ最近はニ・アケリアにいなかったからな？」

俺がそう言うとユルゲンスは驚いた表情をする。

「そうか……だが、丁度良かった！明日は例の大会なんだ！」

「……ああ！そうか、そんな時期か。前に頼まれてたっけか」

俺とユルゲンスだけで納得するような話をしていると、ミラが話しかけてきた。

「レオン。この男は誰だ？」

「ああ、すまない。私はキタル族のユルゲンス。街が賑わっているのには気付いたか？実は十年に一度、部族間で行われる闘技大会が明日開催される」

「だが、その闘技大会に出るにもその出場する選手がいない」

「レオンの言うとおりだ。我がキタル族は唯一の武闘派である族長が王に仕えているため参加できないのだ。伝統ある我が部族が、このままでは戦わずして負けてしまう……だが！数年前にレオンがここに訪れて、俺が大会に出てやるよと行ってくれた時は嬉しかったよ。レオンの実力は知っているからね」

と、俺のことを言うユルゲンスにレイアが聞いた。

「レオンってこの街では有名なんですか？ここに来る途中にここの人たちがレオンの事を見て驚いていたし、何か期待しているふうに見えたんですが……」

レイアの質問を聞いたユルゲンスが……俺がここで起こしたことを言う。

「3年ぐらい……前だったか。ここの闘技場でレオンが大暴れしたのは」

『えっ!?』

「当時、闘技場ではこの街ができたことの記念大会をしていた。各地から力あるものが出る大会でね。その時のバトル方式はバトルロワイヤルだったんだよ。そしたら、レオンは参加者達全員を一撃で戦闘不能にしたんだよ。そしたら、参加してなかったその参加者達の仲間たちが、いきなりレオンに攻撃し出して、その攻撃が関係ない観客たちにまで被害が出るところをレオンが攻撃を全部防いで、そいつらをたたきのめしたことで……レオンのことを知らない住民達はいないんだよ」

『……』

ミラ達は何ともスケールの差が違いすぎる俺のある意味では伝説の話を聞いて唖然としている。

「でだ、レオン。参加してくれるか？」

「いいぜ！前からの約束だしな！」

「待った」

俺とユルゲンスが大会の話をしているとミラが待ったという。

「どうしたミラ？」

「ユルゲンスといったな。その大会に私たちも出場させてくれ」

「なんだって？」

ミラ？別に俺だけでいいだろ？

「……どうしてだい？何で大会に出たい」

「私たちはワイバーンを借りに来たんだが……ただで貸してくれるのか？」

「……そうだね。確かにタダでは貸すわけにはいかない。なるほど、そういうことか。君はレオンだけに戦わせるのが嫌なんだね？それで、大会に出て優勝できればワイバーンを貸せ……そういうことかな？」

ユルゲンスがミラの考えを見とおしてそう言った。

「そうだ。レオンにだけ戦わせるのも忍びない」

「……いいだろう。だが、レオンの実力しか知らないからね。君たちの実力を確かめさせてもらうよ」

話がまとまっていると、

「あれれ？何か話が付いたって感じか？少し目を離しただけで、面白そーなのに首つっ込んじゃって。俺はまぜてくれないのかぁ？」

アルヴィンが現れた。

「アルヴィン君、どこいってたんだよー。こっちは恐怖体験したんだぞー！

「わりーわりー。けど、なんかあったと思ってすぐに駆けつけたわけだし……勘弁してくれよ、な？」

「仲間か？」

ユルゲンスが俺に聞く。

「そうだぜ。これで全員集合」

「では、力を見させてもらう。空中闘技場へ来てくれ」

空中闘技場に移動した俺達はユルゲンス達に説明を受けた。

「では、こっちに来てくれ」

ユルゲンスに案内され、俺は3年ぶりに闘技場内に入った。

「うわー。立派な舞台だね」

闘技場を見て驚きながら感想を言うレイア。

そんなはしゃいでいるレイアにジュードが近づき、

「あんまりはしゃがないでよ」

「男の子なんだから、もっとこう燃えてきたぜー！みたいのないの？」

「ないよ、そんなの。それより、ケガは大丈夫？」

彼女であるレイアの怪我の事を気にするあたり、しっかりしているなジュードは。

「大丈夫だよ！まったく問題なし！だよ！」

「そう、ならよかったよ」

2人が仲よく話していると、

「そろそろ始めようと思うが、いいか？」

ユルゲンスがジュード達の実力をはかるためにいいか？と聞いてくる、

「ああ。皆の準備はＯＫみたいだぜ？」

「そうか。では、レオンは私たちと一緒に客席へ」

「わかった」

どうやら俺の今の実力は見ないみたいだな。

俺達が客席に移動すると、ミラ達の戦闘が始まるが……あの程度の魔物に苦戦するほど皆は弱くないな。

「いざとなったら出て行こうと思っていたが、必要なかったか」

「あったり前だよー！えっへん！」

「すまなかった。君を見くびっていたようだ」

ユルゲンスがそう言うとティポがユルゲンスの前に立つ？

「ぼくだけー！？」

「ははは。誰が見たってそうだよな」

アルヴィンがティポをバカに知るように言うとエリーゼが怒り、アルヴィンに言った。

「むー……わたしの友達、バカにしないでください」

「ごめんごめん」

謝るアルヴィンだが、どう見ても謝る人間の態度じゃないな。

「だが、それだけ厳しい戦いなんだ。どれだけ厳しいかと言うと…
…レオン。待たせてすまないな。見せてやってくれ」

「いいぜ……俺の久しぶりの闘技場の空気に感化されてきたぜ」

「では、他の皆さんは客席に」

ユルゲンスが皆を客席に移動させ、客席に座ると再び門が開き、そこから１００体ぐらいの魔物が出てくる。

「ハッハ！久しぶりに燃えてきたぜ！！！」

俺は剣を構え、魔物達に突撃していった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

なっ！何だあの数は！

「どういうことだ！何故あんなに数が多いんだ！」

「言っただろ厳しい戦いだと……例えるなら魔物１００体と戦う感じだ。闘技場の空気・雰囲気・客の観戦など、色々なものが君たちに圧力として降り注ぐはずだ」

「なるほどねぇ。だから、レオンに俺たちに客としての立場から見せるってわけか」

「そういうことだ。お、始まるぞ」

レオンの戦いが始まり、それを見ることになった私たち。

無理だと思ったが、それは間違いだった。

「オラ！どうした！！」

レオンは技も使わず、剣のみで魔物達をどんどん倒していっている。

「シャッハァァァ――――――っ！！！」

いつものレオンとは違う戦い方だ。迫りくる魔物達を寄せ付けない嵐のような猛攻撃。

「す、凄い」

「レオンってあんな戦い方をするんだ」

レオンの1人で闘う姿をあまり見ないジュード達は驚いている。ここに来る前にイバルと戦ったレオンは今とは違った戦い方だったしな。

「ハッハ！剣だけじゃつまんないな！なら……雷化でいくぜ！」

レオンの十八番である雷化をし、魔物達を今度は拳で吹き飛ばしていっている。

「早いですな……あれは一体」

ローエンが不思議がっている。そういえば、エリーゼとローエン、レイアはレオンの雷化を見たことがなかったな。

「あれはレオンが作った戦闘技法のひとつ……雷化だ」

「雷化……ですか？」

「ああ。雷のマナを体に取り込み、さらに外からも雷のマナを纏うことでパワー・スピードを最大限に高めることができるんだ」

「す、凄すぎます！」

「レオン君すごーいー！」

「が、その分、防御力が下がるのが難点だと言っていた」

「確かに、あれほどのパワー・スピードですからね、何かしらのデミリットがあると思いましたが……まさか、防御力とは」

ローエンは深刻そうな表情をして言う。

「ああ、だが……」

バキィィン！

ドス！

ドカァァーーン！

レオンが残っていた魔物達を一掃した。

「レオンにはそんなことは関係ない」

「ですな」

レオンの戦闘が終えると、

「では、本戦は明日だ。皆、よろしく頼む」

ユルゲンスに頼まれ、私たちは明日の大会に備えて、宿屋で休むことになった。

だが、私は思いもしなかった。あの落石、そして、明日の大会で再び奴らと戦うことになることを……思いもしなかった。

第２９話　シャン・ドゥでの再開（後書き）

はい、久しぶりの雷化でした！
シャン・ドゥにいる知り合いとはユルゲンスでした！
そして、明かされたレオンのシャン・ドゥでの出来事。
そんなレオンが闘技大会に出たらどうなるのか……次回もお楽しみに！

第３０話　本戦前（前書き）

今回は短いです。

第３０話　本戦前

～レオンＳＩＤＥ～

空中闘技場から宿屋にきたのはよかったが、

「何だと？１人あまってしまうだって？」

「はい。当宿は各部屋に３人となっていまして……女性の方たちはともかく、男性の方は１人あまってしまいまして……」

俺は少し考え、ある案が浮かんだ。

「２人部屋とかはあるのか？」

「はい、ございますが？」

ニヤリ。

「なら、その２人部屋を俺が借りてもいいですか？」

「はい、いいですよ」

よっしゃ！

「では、これが部屋の鍵になります」

俺・ミラ・ジュードが鍵を預かった。

皆で部屋に向かう途中、ミラに小さな声で言う。

「（夜、部屋を開けておくからな）」

「（なっ！？／／／／／／）」

案の定顔を真っ赤にするミラ。俺がしたいことを察したのか。

「（レ、レオン／／／／お前、明日が大会だって知ってて言っているのか／／／／？）」

「（ああ、それに痛みとかは……俺の治癒術で直せるしな）」

普段は子どもであるエリーゼに変な影響を与えないためにあまりベタベタしないでいるが、こういう宿に泊まるときぐらいはいいちゃいちゃ、ベタベタしたいからな。ジュードとレイアも人前じゃあまり、キスとかしてないしな。

「（わ、わかった／／／）」

話しは決まり、俺達は各部屋に入って休むことになった。

宿に泊まっているほとんどの客たちが眠り、静かになるとミラは静かに部屋を出て、俺の部屋に来ている。

「ミラ……」

「レ、レオン／／／」

俺はミラを抱き寄せ、唇を塞いだ。

「レオン……ん…ちゅちゅちゅちゅ……ちゅぷ……れろぉ」」

「ミラ……れろ…れろ…ちゅぷちゅっ…ちゅぱっ…ちゅっちゅっ」」

お互いにキスをし合いながら、俺はミラの服の隙間から手を入れて、胸を揉む。

そして、そのままミラの服を脱がしていき、俺達の長い夜が始まった。

～数時間後～

部屋の汚れを前のように精霊術で綺麗にしていき、ミラは風呂に入りに行った。

それにしても、ミラもこの行為に慣れてきたな……まさか、あんなことまでするとは……。

さて、そろそろミラも部屋に戻って準備を終わらせているだろうし、下に行ってみるか。

下に行ってみるとユルゲンスや皆がもう待っていた。

「よく休めたようだなレオン。さっそく今日の予定だが、参加数の関係で本戦は今日一日ですべて行うことになりそうだ」

「今日だけですか。ずいぶんハードなんですね」

「何戦なるかは、今日発表の組み合わせ次第だ」

「鐘が鳴ったら、闘技場まで来てくれ。それが大会開始の合図だ。私たちは闘技場で待っているよ」

鐘の合図か……。

時間ができたので俺達は別行動を開始した。俺とミラ、レイア、アルヴィンは広場に。ジュード、エリーゼ、ローエンは観光へ。

俺達は昨日落石のあった場所に来ている。

ミラは少し気になることがあるといい、俺が粉々にした岩や崖の上を見上げる。

そんなミラを不審に思ったアルヴィンが聞いた。

「コレ見に来たんじゃないのか？」

「気にしないでくれ」

アルヴィンに気にするなと言いながら周りを見回すミラ。

「あ、イスラさん！」

そこへ昨日会ったイスラがやってきた。

「ケガの具合はいいようね」

「はい、イスラさんのおかげです」

レイアがそう言うとイスラはアルヴィンを見ながら何も言わずじっと見る。

それに気づいたレイアがイスラに尋ねる。

「アルヴィン君がどうかしました？」

「い、いえ……」

動揺しているのか、イスラは少し慌てた。

「かまわないよ、イスラ先生。先生には母親を診てもらってるんだ」

そしたら、今まで黙っていたアルヴィンが口を開く。

「お前の母親を？この街にいるのか？」

「ああ！だからアルヴィン君、街に詳しかったんだね」

「ちょっと具合悪くてな。父親も兄弟もいないから、俺がいない間

を先生にお願いしているんだ」

「なるほどな」

こんなに自分のことを話すアルヴィンにミラが面白いモノを見るかのような目で見る。

「今日はやけに自分のことを話すじゃないか。珍しいな　気のせいだろ。ただ……治してやりたいだけだよ。そんで故郷につれてってやりたいんだ」

「お母さんの故郷って遠いの？」

「めちゃくちゃな」

アルヴィンはレイアの質問に答えながら空を見上げた。

「そうか。手を貸せることがあれば言ってくれても構わないぞ？」

「ああ、あればな」

「……」

一瞬、アルヴィンがミラを鋭い目つきで見てたな。まあ、アルヴィンも一応アルクノアだしな。

「ユルゲンス？今日は闘技場じゃなかったの？」

そこへ、闘技場にいるはずのユルゲンスが来て、イスラが話しかける。

「こっちに少し用があったんだ。それより、君たち、イスラの知り合いだったのか？」

ユルゲンスは俺達を見ながらそう聞いてきた。

「うん！イスラさんとユルゲンスさんも知り合いだったんだ」

レイアの言葉を聞いた2人は互いに顔を見合って笑った。

「知り合いも何もイスラは私の婚約者だよ」

「婚約……？」

「わぁ、すてきですね！（私も早く、ジュードと！）」

「ははっ、ありがとう。イスラ、この人たちが我が部族の代表になってくれた人たちだ」

「へえ、そう」

……イスラは俺のことをやっぱり知らない……か。

イスラはアルクノアの人間……に近い人物だ。ミラの命を狙い続けてきた組織の……。

まあ、守れればいいけどな。

「おお、あれか。結婚というやつだな。お前たちも、ネズミのようにたくさん子どもをつくるのだぞ」

プッーーー！

「ミ、ミラ……」

「くくく……」

「ミラ……お前な」

呆れるレイアと俺、笑うアルヴィン。

そんな楽しい時間を過ごしていると、

ゴォォン――――ゴォォン――――ゴォォン――――

鐘が鳴った。大会開始の合図だ。

「大会が始まる」

「ユルゲンス、ごめんなさい。私、今日は仕事なの」

「そうか。仕方ない。勝利を祈っててくれ」

そういいながら、イスラは俺達から離れ、俺達は空中闘技場へ向かうのであった。

第３０話　本戦前（後書き）

次回は闘技場での戦闘！共鳴奥義や共鳴アーツ（リンクアーツ・セカンドリンク）が結構出るかも？
まあ、次回もお楽しみに！

第３１話　本戦開始！（前書き）

注意！レオンのテンションが異様に上がっているため、リンクケージがＭａｘ状態になっています。

第３１話　本戦開始！

～レオンＳＩＤＥ～

俺達はボートに乗って空中闘技場の所まで来た。

「ユルゲンス、一緒だったのか」

「ミラさん達の連れは？」

「すでに来ているわ」

２人に案内され、みんなのところに行き、合流し終えると俺達は早速受付でエントリーした。

その後、俺達は闘技場の入り口に案内され、呼ばれるのを待っている。

そして、

「続いて登場するのは、キタル族代表だ！」

司会人の声が響き渡る。

ジュードは観客達を見て驚く。

「こんなに大勢……」

「過度の緊張は、本来の能力を低下させるという。気楽にだ、ジュード」

「そうだよ、ジュード！気楽に考えていけばいいのよ！」

「ですな。レオンさんを見てください」

皆が俺を見る。

「す、凄い……闘気を感じます！」

「レ、レオン君、すごーい」

今の俺の状態は完全戦闘モードみたいだな。

「皆、先に行け。俺は最後に出る」

「わかった。ではみな、私に続け」

ミラに言われて皆は次々闘技場内へ。

「登録選手の中で魔物を操らない選手は彼らだけです。その実力はまったくの未知数。いかほどのものなのか」

「え、魔物？」

司会人の言ったことに驚くレイア。

「そして！皆さん、覚えているでしょうか！３年前のバトルロワイヤルを！そのバトルロワイヤルで、客席に行く攻撃を全て防ぎ、見事優勝した人物を！その人物が彼らの……キタル族の代表の中にいるぞ！では、出て来てもらいましょう！レオン・ストライフ選手です！」

ワアアアアアアアア！！！！！！

観客からの歓声と共に俺は闘技場内に出る。

「さあ、レオン選手とその仲間たちの実力はいかに！おっと？ここで相手選手の登場だ！」

相手は魔物６体に操るのが１人か。

「さあ、レッツパーティー！」

大会ということもあって俺のテンションは最高値まで上がっている。

「では……試合、開始！」

司会人の合図で戦いが始まる。

「さあ、行こうぜえ！！！！」

俺とジュードが駆けだす。

「一気にいこう！」

「フルボッコにしてやんよ！！」

俺とジュードは魔物にパンチと蹴りを連続でたたみかけ、最後は一緒にジャンプし、

「「天衣無縫！！」」

魔物に突撃する！

「やりすぎたかな？」

「ハッハッハ！これぐらいが良いのさぁ！」

他の皆は、

「閉じ込めよ。闇の力」

「その力に押しつぶされて」

「「ブラックスフィア！」」

ローエンとエリーゼの共鳴（リンク）アーツが魔物を真っ黒な球体に閉じ込めたところに鎌を持ったものが切り裂いて消滅させていた。

だが、結構メンドくせえな！

「ミラ！」

「ああ！」

「「聖なる雫よ、降り注ぎ、我らに力を、ホーリーレイン！！」」

上空から光の雨を降らし、残っていた相手を倒した。

倒したら倒したで、新しい相手が出てくる。

「ローエン！」

「お任せを！」

「紳士に任せるぜ！！」

「あまり期待しないでください」

俺の闇の波動とローエンの光の波動の精霊術が合体し、二つの術式陣から、

「微塵に砕けろぉ！！！ジェノサイドブレイヴァァァァァー！！！」

バグキャラでおなじみのアナゴさんの技を出した。

「あはははは！！ローエン！意外とノリノリじゃねえか！」

何か、どんどんテンションが上がって行くな！まあ、いい気分だし問題ないな！

「闇の力、一つに集まって」

「敵を貫け！」

「「ブラッティスティング！」」

ミラとエリーゼはミラの目の前に陣が展開され、そこから無数の紫色の槍が現れ、現れてくる魔物を次々に倒していく。

「エリーゼ！行くぞぉぉぉ！！！」

「い、いきます！」

「ばっちこーいー！」

「解き放たれし不穏なる異界の力」

「目の前の邪悪に裁きを」

「「ヴァイオレントペイン！！」」

魔物達の足元に紫色の術式陣が展開され、そこから触手状の紫色の

物体が魔物達を押しつぶす。

「やりました！」

「エリーはさいきょー！」

「偉いぜエリーゼ！」

さぁさぁ！次はどいつだ！

そう思っているとワイバーンを使役するものが出てきた。

「ほぉ！ワイバーンか！面白い！」

4体の内、一体はジュードとアルヴィンの元へ。

「ジュード！アルヴィン！あの技を試してみな！」

「へえ、じゃあ、やるか！」

「うん！受けてみろ、この技を！」

「遠慮はいらねぇ、取っときな！」

「「喰らえ、星皇蒼破陣！！」」

2人を中心に術式が展開され、近づいたワイバーンを吹き飛ばした。

「よっし！成功だな！」

「うん！できてよかったよ！」

今までにない技が成功し、喜ぶジュードとアルヴィン。

「まだだぞ！！」

残っていたワイバーン3体が俺に向かってくる。

「アーハッハッハッハ！面白い！俺、1人に突っ込んでくるか！面白い！俺一人で相手してやる！」

俺は、剣に炎を纏わせ、

「荒れ狂う殺撃の炎の宴！殺劇舞荒おりゃりゃりゃりゃあぁ！ぜいやあああ！！」

炎を纏った剣で3体同時に斬る・蹴る・殴るを繰り返し、最後は炎と共に吹き飛ばす！

「あ、あり得ん！？」

ワイバーンはかなり強力な魔物で有名だが、俺の前では意味無し！

魔物を操っていた人が消えると、最後は巨大な魔物を3体、使役するものが現れた。

「ほぉ？こんなに大きな魔物を使役できるとは……けど、ミラ！」

「行くぞレオン！」

俺達は同時に赤い術式陣を展開していく。

「真紅の爆炎、我が身に宿れ！！」

「これは全てを焼き付くす、轟爆の疾走だ！！」

「「炎に消えろ！インフェルノ・ドライブ！！」」

【ギィィィヤアアアアアアアア！！！】

3体の魔物を一気に焼き尽くしていく。

最後には、

シュドォォォォォォォン！！！

爆発と共に消え去った。

「爆炎に飲まれて永遠に寝ていろ！」

「その頃には全ては終わっているがな！」

「レオンとミラ……すごいです」

「あの2人の絆に勝るものはないでしょう」

俺とミラの戦いっぷりに驚く、仲間達。

「司会！もう、終わりか！！」

「……はぁ！わ、私としたことが！あまりにも凄すぎる光景に心と目を奪われていました！キタル族代表は決勝進出です！」

ワアアアアアアアアアアア！！！！！

こうして、激闘の続いた……本戦が一時、終了した。

第３１話　本戦開始！（後書き）

……書いてて気づいた。レイアが活躍してないｗ
レオンは術を中心に使っていたり、他の皆がリンクしてたせいでレイアを使ってなかったｗ
まあ、決勝で使えばいいかな？

さて、レオンのテンションを１～１００に表しますと……軽くカンストしてますｗ
レオンはバトルジャンキーではありませんが、大会となると、若干性格がテンションと共に変化してしまいますｗ

後、原作にはなかったワイバーンを出したのは……何となくですｗ
では、次回もお楽しみに！

第３２話　卑劣な手口

～レオンＳＩＤＥ～

無事に決勝進出を果たした俺達は無事に進めたことを話していた。

「やったー！わたしたち勝ったんだね！」

「なんとかって感じだったけど……レオンがすごかったのは確かだよね」

「確かに、レオンはすごかったよな。楽勝だったぜ」

「ええ、レオンさんの知らない一面を見れた気がしました」

「うんー！レオン君はすごかったけど、エリーもすごかったよー！」

「ありがとうティポ」

皆が俺のことを色々と言っていると、ミラは自分の手を見て、握った。

「確実に力がついてきている……これなら……」

そう、呟いているミラを俺は見ている。まったく、1人で何でも背負いこもうとするなよな。

階段を下りていくとユルゲンス達が待っていた。

「やったな！見事な戦いだったよ」

「決勝は、食事休憩をはさんでから始まるわ。他の参加者も一緒だから、落ち着かないかもしれないけど、食事にしておきましょ」

俺達が決勝進出したのがとてもうれしいのかユルゲンスは笑顔でいる。

俺達はユルゲンス達に案内され、食事を取りに行くが、

「ミラ、行くぞ」

「あ、ああ」

俺の話しかけられて気付いたのか俺に駆け寄る。

「では、行こうか」

「おう」

俺達もユルゲンス達の後についていった。

食事する場所で料理が運ばれるのを待っている俺達。だが、俺は何かを忘れている気がして気にしている……なんだっけ？

ジュードは周りの人たちをソワソワして見回す。

そんなジュードに笑いながらアルヴィンが話しかける。

「決勝の相手気になっちゃう？」

「うん、それはね」

「ジュード君好みのめちゃかわいい子だったらどうする？」

アルヴィンがそんなことを言った瞬間！

げしっ！グリグリ！

「痛たたたた！？レ、レイア、何するの！！」

「何顔を紅くしてんのよ！ジュードのバカ！アルヴィン君も変なことを言わないでよ！」

ギロリ

すごい剣幕でアルヴィンを見るレイア。そんなレイアの冷や汗をかくアルヴィン。

「わ、悪かったよ」

「わかればいいのよ」

アルヴィンが謝ったことで普段の表情に戻るレイア。

「ははは！それにしても決勝か……本当にここまでこれるとはな」

「優勝するって言ったでしょ！」

「ははは、すまない」

レイアが私たち、優勝するためにここまで来たんですよ！ッ的な風に胸を張る。それに笑って謝るユルゲンス。

そうしているあいだに、皆の前に料理が置きおわった。

「さあ、食べよう。力をつけて、決勝も頼むぞ」

そこへ、ユルゲンスの仲間の男性が慌てて入ってきた。

「ユルゲンス、大変だ！」

「何、どうしたの？」

女性が男性に聞く。

「この前の落石、事故じゃなく事件だったらしい」

ミラは料理を運んでいた女性を見ている。

「人為的に破壊された痕が見つかったみたいだ」

！？　思い出したぞ！

「……！！」

ガタッ！

「「食事には手をつけるな！」」

ガタッ！

「え、何……？？」

俺とミラが同時に声を上げたことに驚いたエリーゼが声を上げながら席を立つ。

ピクッ！

「……？」

アルヴィンもスプーンを口に入れる寸前で止める。

だが、

ガシャン！

俺達以外は全員倒れた。

ジュードとローエンは倒れた人たちの元に近づく。

「な、なんだ……これは……」

倒れた人たちを見て、驚くユルゲンス。

「わずかですが、この独特の木の実のようなにおいはメディシニア……間違いありません。水溶性の毒です」

「みんなの食事に盛られてたってこと!?」

ジュードは声に出してながらローエンを見る。

それを聞いたアルヴィンが表情を変えていた。

「まさか決勝の相手が勝とうとして……」

「いや、違う」

「違う」

男性がこんなことをしたのが決勝の相手と言うが、俺とミラが否定

する。みんなは否定した俺達を見て、何故？っと語っている。

「このような卑劣な手口を使う連中に、私たちは思い当たる節がある……」

「ああ……こんなことをする奴らは……あいつらしかいないな」

俺とミラはお互いに顔を見合って言う。

そうしている、

「……」

タッタッタッタ！

「待て、アル……」

アルヴィンは席を立って廊下に向かい走って行き、どこかへ向かって言った。

「それよりも今は彼らを助ける方が先だな」

「助かるのか！？」

「無理です！彼らは水溶性の毒を……」

ローエンがさすがに無理だと言っているが、俺はそんなものをブチ壊す！

「命の奇跡よ！彼の者達を、死の淵より呼び戻し、再び光を与えたまえ！フルレイズリザレクション！！」

使ったのは俺が作った新しい治癒術。

これは広範囲で病気以外で時間があまりたっていない死んだ人を蘇えらせることができる。が、かなりのマナを消費する。

「す、すっごいねーエリー」

「う、うん」

「これほどの範囲の蘇生術を！」

「レオン、お前、こんなにマナを使ったら……」

ミラは俺を心配するように見ている。俺は目で大丈夫だと伝える。

そして、

「ゴホッ！ゴホッ！」

「み、水を！」

「か、からだが……」

「う、うごけねえ」

今まで死んでいた人たちが息を吹き返す。

「ユルゲンス……みんなを病院へ」

「！　あ、ああ！みんな、救護班を！病院に連絡だ！」

ユルゲンスの指示で男性と女性は行動を開始し、ジュードとエリーゼはお得意の治癒術で苦しそうにしている人達を治癒していく。

「よかった……」

クラ

俺の体が傾いていく。……マナを短時間で使いすぎたか。

ガシッ！

「レオン！だから、言っただろ！」

ミラが倒れかける俺を支えてくれた。

「すまないな……だが、こうなったのは」

「ああ……私たちのせいか」

俺達はこんなことになった原因を知っているので少し、みんなに申し訳なかった。

その後、俺はミラに肩を借りて宿屋に来ていた。他の人たちは救護班が来て、病院まで運んで行った。
命の別状はないとのことだ。

「……恐らくこの事件の首謀者はアルクノア」

「……アルクノア？」

「私とレオンの命を狙い続けている組織だ」

命を狙う……このことに驚きを隠せないジュード。

「え……それじゃさっきの毒は……」

「巻き込まれた者には済まないが、狙われたのは十中八九、私とレオンだろう」

「まさか……無関係な人をこれほど巻き込んで……一体それは……」

「うむ……もとより何でもありの連中だったが……今回は特にひどい」

「そうだな。今回のは今までの中で一番たちの悪いやり口だ」

今までは爆弾のようなものを俺達が通る場所に設置したり、俺達だけをピンポイントに狙撃したりと……無関係な人達をあまり巻き込まなかったのだが……今回のはやり過ぎだ。

「どうして!?何故狙われているの、ミラ、レオン?」

レイアの質問はもっともな質問だ。理由がなければ狙われはしないからな。

「私とレオンが、やつらの黒匣（ジン）を破壊し続けてきたからだ。やつらが二十年前、黒匣（ジン）と共に突如出現して以来な。レオンは数年前から一緒に破壊してもらっている」

「二十年前……」

「黒匣（ジン）と共に出現って……それじゃ、クルスニクの槍にも……黒匣（ジン）を使ってるあれにもアルクノアが関係してるの？」

ローエンは二十年前ということに反応し、ジュードはイル・ファンで見たクルスニクの槍のことを思い出しながら言う。

「確証はない。が、あれの出所はアルクノアだと考えている」

「あいつらは見た目でも判断できねえ。常に街の人間に溶け込み、紛れ込んでいる。今までに何回も俺達はそれにあった。ここ最近は何もなかったんだがな……」

ジュード達は俺とミラを見て驚き、ミラは本当だと、頷く。

「私もレオンもこれまで、黒匣（ジン）が使われる際の、精霊の死を感じることでしか対処ができなかった」

精霊の死……このことを知るのは俺とミラだけしか知らない。そんなことを言われて驚かない人はいないよな。

「え、精霊の死って……？黒匣（ジン）は精霊を殺すの？」

「術を発生させる度に精霊を死に追いやる」

「人間ってのは精霊の力を借りることで暮らし、精霊は人間の霊力（ゲー）野（ト）が生み出すマナで生きている……が」

俺とミラは交互に話しをしていく。

「黒匣（ジン）は一見、夢のようなものだ。だが、黒匣（ジン）は世界の循環を確実に崩す。黒匣（ジン）が存在する限り、人間も精霊も安心して暮らしてなどいけない」

説明を終えると、ローエンは物思いにふける。

「ふむ……私もまだまだですね……。そのような大事を全く知らなかったとは……」

「知らなくて当然だ。人間に知られぬよう私が1人で処理してきたのだから」

ミラの言ったことに対し、俺は付け加える。

「俺と出会ってからは俺も一緒に処理しているけどな」

「うむ」

俺達の言ったことを理解したエリーゼは悲しそうにジュードに言う。

「じゃあ今までずっとミラとレオンは……」

「世界の、僕たちのために……2人でずっと戦ってたんだ」

そんなエリーゼの言うことにジュードも話す。

「だが……私が四大の力を失ったせいでお前たち人間を巻き込んでしまったことになる。すまない」

「俺ももっと注意していればミラが四大達の力を失わなった。そうすればお前たちを巻き込まなかったのに……すまねえ」

俺とミラはジュードたちに頭を下げる。

そうしていると、

ガチャ

ユルゲンスが入ってきた。

「あ、ユルゲンスさん、どんな様子だった？」

「レオンのおかげで全員、命に別状はないそうだ。あと……決勝は明後日以降に持ち越しになった」

「中止じゃないんですか！」

申し訳なさそうに言う、ユルゲンスにジュードが怒ったように言う。

「大会執行部でもずいぶんもめたみたいだけど、十年に一度の大会

だからと……アルヴィンさんは？まだ戻ってないのか？」

ユルゲンスは部屋の中を見渡し、アルヴィンがいないことに気付き、俺たちに聞いてきた。

「ええ」

「そうか。では、彼にも伝えておいてくれ。詳細が決まったらまた来るよ」

そう言い終えるとユルゲンスが出ていった。

「大会、辞退した方がよくない？」

ユルゲンスが出て行ったのを確認するとレイアが提案を言う。

「あ、あの……わたしもそう思います」

レイアの提案に乗るエリーゼ。

「うむ……」

「そうだな……」

2人の意見を聞いた俺とミラは悩む。

それを見計らったのかローエンが言った。

「もう、今日は休みませんか？色々あってお疲れでしょう」

「うん。そうだね」

ローエンの提案により、俺達は休むことになった。

次の日の朝

俺とミラは誰にも気付かれないようにロビーで待ち合わせていた。

「こうなった以上は、見過ごすこともできない……母親がこの街にいると言っていたな……レオン」

「ああ。アルヴィンを探そう」

そして、俺とミラは宿屋を出て、アルヴィンを探すことにした。

第３２話　卑劣な手口（後書き）

今回はここまでです。今回でわかったかもしれませんが、レオンは原作知識……細かいことが忘れかけています。まあ、ストーリーで重要なことは覚えていますがね。

さて、次回はこの続きとなります。お楽しみに！

第３３話　決勝戦前

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラは昨日から帰ってこないアルヴィンを探している。アルヴィンにはどうしても聞きたいことがあるからな。

街の人たちに情報をもらいながらアルヴィンの母親のいる家を探していき、

ウィィィン

見つけた。

「っと、驚かすなよ」

いきなりの俺とミラの登場に驚くアルヴィン。

「ここがお前の家というわけか」

「親の、だな。勝手に抜け出して悪かったよ。もう宿にもどるから

さ」

頭を掻きながら謝るアルヴィン。

そういいながら歩き出すアルヴィンを俺が胸倉をつかみ、壁際まで追いやる。

「ってぇなー。何すんだよ」

痛がって俺を睨むアルヴィンを無視し、ミラがアルヴィンに聞いた。

「アルクノアのこと、どこまで知っている？」

「アルクノア……？なんだよ、食い物か？」

知らない振りをするアルヴィンに俺がル・ロンドでのことを言う。

「ル・ロンドでの夜に俺の入院していた部屋でディラックさんと話をしていただろ」

「たぬき寝入りしてやがったのかよ。キタネーなぁ」

「お互い様だ。答えろ。お前もアルクノアか」

「カンベンしてくれよ。俺だってアルクノアの連中に仕事を強要されてこまってるんだ。抜けたいが、そうもいかないんだよ」

ミラの質問に答えるアルヴィン。その答え方はいつものようなヘラヘラした感じではなかった。

「……母親か？」

「……（コクン）」

俺はミラを見て、ミラが話してやろうと言いたそうな風にしていたので手を離した。

「信じてもらえるのか？」

ミラがアルヴィンに背を向けていう。

「お前はウソツキだったな」

「そうそう。だから、何を聞いても無駄だぜ。俺ってそういう人間なのよ」

「……」

ミラはアルヴィンに何も言わず歩きだす。

「どこ行くんだよ？」

「アルクノアの連中を捜す」

「俺も行くよ。仲間だろ？」

「勝手にしろ」

ミラがそういい、付いていこうとするアルヴィンの肩を掴む。

「アルヴィン」

「なん……だぁ？！」

俺は俺の方を向いたアルヴィンの顔スレスレに剣を振りかざした。

「もしも……ミラに危害を加えるようなことがあれば……その時は右半身と左半身が……別れるものと思えよ♪」

ブラックスマイルでアルヴィンにそういった俺はミラの後を追った。

俺が最後見たアルヴィンは顔色が真っ青になっていたが、すぐにいつもの表情にして、俺達の後を追ってきた。

橋のところに来ると、

「ミラ！レオン！」

反対側からジュード達がやってきた。

「ジュードか」

「皆、おはよう」

ジュード達と合流した俺達はジュードに説教に近い怒られ方をしていた。

「どこ行ってたの。心配したんだよ。それとレオン、こんな時に朝の挨拶をしないでよ」

「あ、ああ。すまなかった」

「す、すまねえ」

「アルヴィンも。これからは行先をいってよね」

「そんなに怒るなよ。それより、エリーゼがなんか言いたそうにしてるぜ」

アルヴィンがそういうと皆はエリーゼに注目する。俺もだけどな。

「あのね……イスラさんが……わたしのこと、何か知ってるのかも……」

「イスラが……？」

不思議がるミラにジュードがミラに言う。

「うん。エリーゼをまじまじと見たあと……顔色変わってたから」

「でも、逃げるみたいにして、どっか行っちゃったんだー」

「そうか」

「イスラさんにあったら、もう少し詳しく聞こうね」

「……はい」

まあ、結局イスラに会ったらエリーゼのことを聞くことになった。

そんな時だ。

ゴォーン　ゴォーン　ゴォーン　ゴォーン

いきなり闘技場の鐘が鳴り始めたのだ。

不思議がっている俺たちに街の住民の親子が話しかけてきた。

「あんたたち、闘技場へ急いだ方がいいんじゃないの？」

「鐘が鳴ったら、大会が始まるのよー」

女の子がそう言うとティポが驚き、声を上げる。

「え、大会始まっちゃうのー？」

「もしかして早くいかないと失格になっちゃたり？」

昨日まで辞退しようと言っていたはずのレイアが失格になることを言っているが不思議に感じたのか、ミラが聞いた。

「いいのか？大会の辞退を考えていたのだろう？」

ミラの言ったことにローエンが答える。

「迷いながらでもやってみるのが人間、そう言ってくださったではないですか」

ローエンの言ったことに俺とアルヴィン以外が頷く。

「うむ。そうだった。助かるよ、みんな」

「さて、じゃあ、行くか」

「ちょっと待って」

俺が行こうといい始めたが、ジュードが待ったを掛ける。

「あの、どうして僕たちが参加者だってわかったんですか？」

「この時期に、よその街の人が集まっていたらそれは参加者か観客に間違いないよ」

「そんなのここじゃジューシキよ」

ジュードの問いに答えた親子はどこかへ行った。

そして、話しを聞いたジュードがこみかみを指で押えながら何かを考えている。

「ジュード……？」

「ごめん。何か頭の中でひっかかっただけで……」

動かないジュードを心配したエリーゼがジュードに話しかける。ジュードは何かがひっかかると言って悩んでいた。

「んじゃ、闘技場に行こうか」

改めて俺がそう言い、皆で闘技場へ向かった。

闘技場に入ると、ユルゲンスとその仲間が話しあっていた。

「ユルゲンス、さっきの鐘は何だ?」

ユルゲンスは俺達を見て安心した不に表情を変えた。

「ああ、来てくれて助かった!執行部が急遽決勝戦を行うと言い始めたんだ」

「それに突然、前王時代のルールに戻すなんてことも言い出している」

男性がそういうとレイアが驚息、声を上げる。アルヴィンですら、驚いていた。

「前王時代のルールって……まさか！？」

「前に話しただろ。相手が死ぬまで戦うあれだ。言ってなかったかもしれないが、その上、この戦いは1対1で行われるんだ」

ユルゲンスの説明を聞いた俺達は話しあう。

「どうするよ、ミラ」

「うむ……ワイバーンは必要だ。辞めるつもりはない。が、解せんな」

「何故前王時代のルールで行うことに……」

「……なるほどな、そういうことか」

俺はこのことも一応覚えていたので、察しが付いていた。

「何だレオン？何かわかったか？」

「ああ。最悪なことが、だな。アルクノアだよ」

「アルクノアだって！？」

俺がアルクノアの名を出すとジュードが声を上げた。

「ああ。大方、執行部の中にアルクノアの奴がいて、前王時代のルールにすれば、それに乗じてミラと俺のどちらかを殺せるってことだ。俺はミラの相棒であり、パートナーだ。どっちかを殺せば戦力ダウンするし、ミラを殺してもあっちには得になる。そうだろ？アルヴィン」

「……ああ、そうだぜ」

俺はアルヴィンを見ていう。アルヴィンもそうだと白状した。

「あれー？何でアルヴィン君がそんなことを言うのー？」

「いいのか？」

「言いも何もレオンが言っちゃったんだし、仕方ないだろ。それに……さっきの礼だよ」

俺・ミラ・アルヴィン以外は話しの流れについていけず、ジュードがミラに聞いた。

「なんの話？」

「アルヴィンは……アルクノアと関係している」

アルヴィンの返答に驚き声を上げていうレイア。

「え！？ウソ……でしょ？」

「んー、すまん。仕事頼まれたりしてたんだわ」

「まさか、今回の事件も……」

ジュードは落石のことと毒のことを言っているな。

「ジュード。それはないな。アルヴィンもあの時、料理を口に入れる寸前だったんだ。犯人がそんなへまをすると思うか？俺とミラがあの時に声を上げていなかったらアルヴィンはこの世にはいなかったぜ」

「ああ、俺は何もしてない。レオンの言うとおり、知っていたら始めから食べようとしなかったし、犯人も知らない。仕事つっても、小間使いにされただけだしな」

「なら、アルクノアの仕事はもうしないって約束してくれる？」

真剣な表情のジュードにアルヴィンは言う。

「わかった。誓うよ」

「よかった……」

安堵するジュードを見て、アルヴィンは少し黙る。

「……」

「アルクノアの作戦はわかるのですか？」

ローエンの質問にアルヴィンは答える。

「あ、ああ……俺が聞いた限りじゃ……　やつら、決勝のルール変えて、ミラを殺す気だ」

皆がミラを見る。ミラは腕を組んでアルヴィンの話しを聞く。

「勝ったとしても、疲労困ぱいになったおたくを客席から狙い撃つ二段構えだとよ」

ほぉ？俺のミラを狙撃……ねぇ？

バチッ！バチチチチ！

俺の体が帯電し始める。

「レオン、落ち着け！帯電し始めているぞ！」

「おっと、いけねえ。つい、な」

ミラに言われ、何とか抑える。

アルヴィンのアルクノアの作戦を聞いたユルゲンスが怒りだした。

「なんて奴らだ。大会をなんだと思っている！　ふ、何とも穴だらけの作戦だな。私が代表で出なければ簡単にくじける」

「そうだな。俺が出て、例え俺が狙撃されても俺は帯電状態になればそういったものは弾くことができるしな」

俺とミラがそういうと、レイアが安心したみたいに言う。

「そっか、そうだよね」

「だが……このくだらん罠にはまってやる。やつらを引きずりだしてやろう」

「おいっ！正気かよ？なんで……」

アルヴィンはあえて自分から火の海へ突っ込むような真似をしよう

とするミラに驚きながら言う。

「危険すぎます、命をかけるなど、今回ばかりは賛成しかねます」

「そうだよ。やめた方がいいって、ミラ！」

エリーゼはローエンの言うことに頷き、レイアもミラを説得する。

「ミラ君がしんじゃうー！」

ティポもミラを心配して、そう言う。

「レオンとジュードはそう思っていないようだぞ」

俺はジュードの代わりに話す。

「俺たちにミラを客席から狙うアルクノアを止めてほしい……そう思っているんだろ、ミラは？」

「さすが、レオンだな」

「お前と何年の付き合いだと思っている。ミラの思考ぐらい読めないと意味ないぜ」

「そうだな」

普通に話している俺達をあり得ないと言わんばかりにレイアが言ってくる。

「ちょっと、レオン！？ジュード！？」

「普通ならいつ出てくるかわからないけど、今ならおびき出せる…理にはかなってるよね」

ミラを見ながらジュードがそう話す。

「今ここで手を打っておかないと、次の手を考える時間を与えてしまう。そうすれば、もっと被害が大きくなる可能性も否定できない」

「だから、ミラはあえて自分を囮にする……そういいたいんだよ」

俺・ミラ・ジュードの話しを横で聞いていたユルゲンスがミラに話

しかけた。

「本当に出場する気なのか」

「お前の部族の誇りを託されたことも忘れてはいなからな」

「あなたって人は……」

ミラの返答に呆れてものが言えないユルゲンス。

「はぁ……何とか成功させるしかないのですね？」

「そういうことだ。さあ、行こう」

ミラの合図と共に皆が移動を開始する。そんな中、俺はミラに話しかける。

「ミラ」

「どうしたレオン」

「いいかげんにやつらとの因縁にケリをつけようぜ！」

「ああ！」

ミラも俺に答えるように、そういった。

第３３話　決勝戦前（後書き）

はい、今回はここまでですね！
次回はこの続きです。お楽しみに！

第３４話　エリーゼとティポの真実

～レオンＳＩＤＥ～

俺達はアルクノアがミラを客席から狙うことをアルヴィンに言われ、俺達は客席であたりを見回す。今のところ、怪しい人物はいない。

そうしていると、

「最初の登場したのは、キタル族代表だ！昨日、不幸な事故はありましたが、大会執行部の努力により、本日の決勝戦が実現しました！」

司会人の説明と共にミラと対戦相手が闘技場内の中央に立つ。

「その上で、今年の決勝戦は公平に行うため、過去の慣例にならい、前王時代のルールとなります」

「「どんな理屈だよ……」

離れたところにいた俺とアルヴィンが同時に同じことを言った気がした。

そんな中、対戦相手がいきなりミラに攻撃を始めた。

「今の感じは！」

俺は対戦相手の武器を見る。やっぱり、あれは！

「……っ！」

ドカァァン！

ミラはその攻撃を避けるも、険しい表情をする。間違いないな、あの武器は……黒匣（ジン）！

ジュード達も驚き、相手を見ている。

「……今、詠唱しなかった！」

「あれほどの力……まさかっ」

「黒匣（ジン）……！？」

ジュード達も武器の正体に気づき、声を上げていた。

「微精霊たちの悲鳴が……。また間に合わなかった……」

悔しそうにしているミラを見て、俺は悲しくなってきた。くっそ！記憶があやふやだぜ！大きな出来事は覚えているが……細かいことが頭にあんまり残ってない！

俺も悔しく思っていると、

「何、や、やめて！返して！」

俺とミラはエリーゼの声が聞こえ、そちらを見た。すると、

「やめろー、はなせー！」

複数のアルクノアのメンバーがエリーゼからティポを取り上げようとしていた。

「ちぃ！」

俺のいるところは一番観客が多いので、ここからエリーゼのいるところは反対側。ならば！

俺の手が光るとそこから、黒と赤の色に羽のついた弓……ソドムの弓矢が出現した。

俺は素早く矢を弓に装填し、

「屠龍！！」

放つ！

放たれた矢は小さく分離し、エリーゼからティポを取り上げようとしている奴らに、

「ぐあっ！」

「がはっ！」

「ああっ！」

直撃した。

しかし、

「やめろー！」

他のアルクノアのメンバーがまた、ティポを取ろうとする。

ジュード達もそれに気づいたのかエリーゼの元へ向かっている。

「屠龍！屠龍！屠龍！」

何回も矢を放って奴らをそこから動かさないようにしている。

「レオン！どうした！！」

俺が何度も矢を射ているのに気付いたミラが俺に話しかけてくる。

「ティポがアルクノアたちに狙われている！」

「なんだと！？私ではなかったのか！」

レイアとアルヴィンが合流しているのが見えた。こうなったら！

「ジュード！アルヴィン！ローエン！レイア！ここは俺とミラにって！？」

俺が少し目を話していたら何時の間にかティポとエリーゼがいなくなっているし？！

「俺とミラに任せてお前たちはアルクノア達を追うんだ！」

「で、でも！」

「いいから！やつらが何をする気かわからないが、行け！」

シュドォォォォン！

俺がジュード達を見て言っていると、ミラの対戦相手が増えている

し！

ミラは自分に打ちだす攻撃をことごとく避けていく。さすがだ！

「三人の相手じゃさすがに！」

レイアとアルヴィンが目を合わせ、頷き、行動を開始する。ジュードとローエンも動きだす。

「アルヴィンっ！！」

ミラは移動し始めるアルヴィンの名を言う。

「やつらの狙いはお前とレオンじゃない、きっと初めからティポだったんだ！客席から狙ってるやつなんてのも、いなかったんだ！俺は知らなかった！」

「お前とジュードたちに任せる！」

「何……？お前、俺を試して……」

「お前しかいない、皆を頼んだぞ！」

「なっ……！」

ミラの言ったことに驚愕するアルヴィン。

「そう来るかよ……」

「アルヴィン！」

皆がアルヴィンの元の着いた。

「ああもう！どうなっても知らないからな！皆ついてこい！」

アルヴィンはやけになったのか皆を先導し、走り出す。ジュード達もアルヴィンについていった。

さて、俺も

「はっ！」

シュン！

俺は客席から跳んだ。

シュタ！

跳んでミラの傍に立つ。

「さっさと、こいつらを倒して皆を追おう！」

俺は弓矢を構える。

「ああ！エリーゼとティポが心配だ！」

ミラも剣を構える。

「死ねぇ！」

黒匣（ジン）を使う奴らは俺たちに向かって攻撃を放つ。

だが、

「てめえらにかまってる暇ねえ！」

「ああ！行くぞレオン！」

俺とミラは初っ端からアーツを放つ。

「「聖なる意思よ、我らに仇なす敵を討て。ディバインセイバー！！」」

アルクノアのメンバーの足下に巨大な魔法陣を展開し、外側から中心に向かって雷を連続で落ちまくる。

「ぐあああああ！」

「しびれる！！！！！」

「ぐおわあああ！」

ディバインセイバーによって体が痺れる奴らに向かって俺とミラは攻撃を続ける。

「集え！万物を貫く業火！」

「これで潰す！！」

ミラが手から炎を上に投げ、それが太陽になり、俺は矢を放つ！

「「ワイルド・ギース！！」」

放たれた矢が炎を纏い、無数に別れ、アルクノアのメンバーを潰した。

「ミラ、ジュード達を追うぞ！」

「ああ！行こう！」

俺とミラは倒れたアルクノアの持っていた黒匣（ジン）を破壊して、闘技場内を出た。

闘技場内を出ると、ユルゲンスが待っていた。

「皆はどこへ行った？」

「仲間が追っているが、まだ連絡がない」

ユルゲンスがそういい、俺は聞いた。

「ユルゲンス！この辺りに人が来なさそうな場所は無いか？」

「人が……はっ！王の狩り場か！」

「あそこか！」

俺とユルゲンスだけで話していると、

「なんだそこは？」

「キタル族の管理する土地だ。街のぞばに広がる原生林帯で、代々ア・ジュール王が狩猟を行う場所なんだ」

「なるほどな……」

「危険な魔物も多い場所だ。十分、気をつけてくれ」

「わかった。行こう、ミラ！」

「ああ、ジュード達と合流しなければな！」

俺とミラはユルゲンスに礼を言い、俺達はジュード達が向かったであろう王の狩り場へ向かった。

王の狩り場についた俺達は無数の新しい足跡を発見した。

「これは……」

「皆だな。かなりの人数だし。これは……こっちだな」

足跡の多い、方へと走って行く俺とミラ。

王の狩り場の奥へ向かっていくと……

これまでのようなところとは、違った雰囲気の場所についた。

「レオン、これを見ろ」

ミラが足元にある足跡を見つけた。

「これは……新しいな」

「ああ、この奥に皆はいるのだろうな」

そう、俺達が言っていると、

ドカァァァン！

奥の方から爆発音がしてきた。

「ミラ！」

「行くぞ！」

俺はミラを抱きかかえた。

「しっかり捕まっていろよ！！」

「落とすなよ」

「誰に言ってんだ！」

そのまま俺は跳躍し、次々と地面に足を着けば跳躍、着けば跳躍を繰り返し、爆発音のしたところについた。

「このドアの先か！」

バキン！

ドアを破壊した俺。

中では、

「ティポを返すんだ！」

ジュードがアルクノアを殴っていたり、

「早く、データをコピーしろ！これを持って帰るのは無理だ！データをコピーしたのを持っていくしかない！」

「わかっている！俺を守れ！」

動かなくなったティポを手にし、機械を使って何かを操作するアルクノアのメンバー。

「ちぃ！」

ドンドン！

銃で応戦するアルヴィン。

「せいやあ！」

棍を使ってアルクノアのメンバーを吹き飛ばすレイア。

「食らいなさい！」

精霊術を駆使してアルクノアのメンバーを倒すローエン達がいた。

「よし、コピーできたぞ！」

「なら、それを早く、あいつに持たせろ！」

武器で攻撃を防いでいる奴は機械を持って作業していたやつに言う。

だが、そう簡単にさせないぜ？

「ハロォ～お待たせ」

「みな、待たせたな」

俺とミラの登場。

「なっ？！」

「にぃ！？」

俺とミラの登場に驚くアルクノアのメンバー。

「くそっ！いけ！」

アルクノアの1人は懐にひそませていた鳥?を出すと背中に何かやらメモリーのようなものを背中に貼りつけた。あれは……ティポにあった……なんだっけ?……何かのデータか!

「逃がさねえ!」

シュン!

矢を放つ。

スカッ!

鳥?避ける。

「この!」

シュンシュンシュン!

同時に矢を3発放つ。

スカッスカッスカッ！

「なんなんだあの鳥は！！！何でこんなに避けやがる！皆、ここは頼む！俺はあの鳥を」

「わかった！」

皆の代表としてミラが答える。

「逃がすかあああ！！！屠龍！屠龍！屠龍！」

矢が分裂する技を出すが、

スカカカカカカ！

全部避けられた！？

ブチッ！

「疾風ッ！！！」

一気に１０発放った。だが、

スカカカカカカカ！

ドサ

「と、鳥に全部避けられた」

さすがにここまで連続で鳥に技を避けられると自信がなくなってきた。

「レオン！あの鳥はどうし……た？」

中から出てきた皆は俺の状態を見て驚いていた。ミラも俺が地面に膝をついて落ち込んでいるのは初めて見たみたいで驚いている。

「ど、どうしたレオン？」

俺に優しく、動揺しながら話しかけてくるミラに俺はいう。

「と、鳥に……技を全部避けられた……何なんだあの鳥は……（ズーン）」

さすがにショックが大きい俺にエリーゼが言ってきた。

「だ、大丈夫ですか？ティポは無事です！」

「レオン君のおかげだねー！」

ティポにすら励まされる俺って一体……。

俺が落ち込んでいると、

ドスゥゥン！

上から何かが落ちてきた。

地響きに似た音を聞いた俺を含む皆は驚いた。

そして、

「すまなかったな。密猟者を追っていたのだ」

音の原因はジャオだった。

「ジャオ……！」

「久しぶりだなジャオ」

さすがに知り合いにこんな落ち込んだ姿を見せたくないので立ち上がる俺。

「ん、お前さんたちがどうして！？」

俺達がここにいることに驚くジャオはエリーゼを見て、言う。

「娘っ子。とうとうこの場所に来てしまったのじゃな。覚えておるのだろう？」

ジャオの言葉に俯くエリーゼ。

「エリーゼ、どういうこと……？」

「ここはお嬢ちゃんのそだった研究所だったんだよ」

黙っているエリーゼに代わってアルヴィンがここのことを言う。

「以前、侵入者を許してしまっての。その時、この場所は放棄されたのだ」

ジャオが侵入者のことを言うとミラはアルヴィンを見て言った。

「侵入者はお前だったのだろう？」

「いい勘してんな……ああ、そうだよ。増霊極（ブースター）についての調査だったんだ」

「なんと……お前さんじゃったのか」

アルヴィンの言ったことに驚きを隠せないジャオは声を上げていった。

「増霊極（ブースター）って何なの？」

「ア・ジュールが開発した、霊力野（ゲート）から分泌されるマナを増大させる装置だよ。そいつだよ。ティポがそうだ。第三世代型らしいがな

「ティポ……そうだったんですか？」

「そんなこと言われても、ぼくにはわかんないよー」

アルヴィンの説明を聞いて驚くエリーゼはティポに聞いたが、聞かれた本人もわからないと言う。

「ティポはエリーゼの心に反応し、持ち主の考えを言葉にするのじゃ」

「それじゃ、ティポはエリーゼの考えを喋ってたの？」

ジュードの問いに何も答えることのできないミラ達。

「いや、だがそれでもティポは自分の自我をもっているんじゃないか？確かにエリーゼの代わりに喋っていたとしても、それに影響されてティポに少しずつ自我が生まれた……そう言うこともありうる

のかもしれないぞ？」

「確かにのう。始めの頃よりもティポは何やら喋るのが多くなっていたしのう」

俺の考えを言うとジャオが答える。

「例え、今までのティポの喋っていたことが全部エリーゼの気持ちで、勘違いだったとしてもティポはティポだろ？何物でもない……ティポという生きた存在……じゃ、ないのか？」

俺はエリーゼにそういうと、黙った。言い過ぎたかな？俺がそう思っていると、

「ねえ、おっきなおじさんー！教えてほしいんだー！エリーゼのお父さんとお母さんはどこにいるのー？」

ティポがエリーゼの代わりに聞くと、

「それはの……もうこの世にはおらぬ」

一度、躊躇したが、ジャオは言う。

「え……」

「お前が四つの時、野党に遭い、殺されたのじゃ……」

エリーゼの家族の真実に何も言えない俺達。

「……もう、会えないんですね。お父さんにもお母さんにも……」

「エリーゼ……」

悲しむエリーゼに何も言えないジュード。

そこへレイアがエリーゼに話しかける。

「気を落とさないで……」

「ジュードやレイアにはちゃんといるじゃないですか！お父さんとお母さんが……」

「お父さんもお母さんもいる人たちにエリーの気持ちがわかるもんかー！」

ティポがさらに言うとエリーゼは走ってどこかへ行ってしまった。

「エリーゼ、待って！」

レイアはそんなエリーゼの後を追っていた。

バァーン！

「くっ、密猟者どもめ！」

音のした方へ向かおうとするジャオを

「待て！なぜエリーゼは研究所にいた？」

「うむ……連れてこられた。売られたようなものだ。娘っ子のような孤児を見つけては研究所に連れて来ていた女に……名は……」

ジャオの話しを着ているジュードは何かがひっかかるのかこみかみ

に指を当てる。

「まさか……イスラ……？」

「おお。確かそんな名であった」

イスラの名を聞いて驚くミラ達。

「密猟者みたいなもんだな」

「……わしが言えた義理ではないが、頼む。あの娘っ子を、これ以上1人にせんでやってくれ」

そう、俺たちにエリーゼのことを頼んだジャオじゃ下に飛び降りて行った。

俺達はレイア達の後を追うため、そこを離れて行った。

出口近くまで来るとエリーゼとティポ、レイアがいた。

「レイア……エリーゼは？」

「うん」

「……」

エリーゼを見ると……結構ショックだったみたいだ。

「まぁ、まだ元気はないけど……それより、ここは物騒だし、早く街に戻ろ」

レイアの提案で俺達はシャン・ドゥへ戻ることにした。

第３４話　エリーゼとティポの真実（後書き）

はい、今回はここまで。
原作と違い、レオンの妨害があったため、ティポのメモリーをコピーしたものをアルクノアは持っていきました。
が、ティポの真実を話されたエリーゼは今までのように接することができるのか？
ティポはそのままですが、エリーゼの心の奥で思っていることを喋ってしまっていますｗ
次回もお楽しみに！

第３５話　首都カン・バルクへ！（前書き）

今回、レオン君がブチキレます。

第３５話　首都カン・バルクへ！

～レオンＳＩＤＥ～

破棄された研究所からシャン・ドゥへ戻ってきた俺達。

「ジュード、何か気がかりなのか？」

ミラはずっと様子のおかしいジュードのことを心配し、聞いている。

「え？」

「ジャオの話しを聞いてから様子が変だぞ？」

「……うん」

そんな俺達の前に、イスラが走って駆けつけてきた。

「犯人を追って王の狩り場へ行ったと聞いて、心配していたのよ」

元々の原因はてめえだろうが！

「色々あったけど、とりあえずは無事、かな」

俺はその思いを表情に出さずにいる。

「偶然とはいえ、あなたたちを巻き込んでしまって、ごめんなさい」

イスラは謝っているが……嘘なんだよな。

そんなイスラにジュードが近づいて言う。

「イスラさん……それウソですよね？」

「な、何？私が心配したら変かしら」

いや、明らかに怪しいぞその慌てようは。

「ジュード、どうしちゃったの？」

いきなり変なことを言いだすジュードに疑問を持つレイア。

「イスラさんが僕たちと知り合ったのは、偶然じゃないんだよ。決勝を知らせる鐘が鳴った時、この街の人に言われたでしょ」

「ああ。この時期に、よその人間が集まっていたら、それは闘技大会の参加者か観客しかいないっていってたな」

「あ……」

ジュードの言葉に続き、俺が街の人に言われたことを話すと、イスラは動揺する。それはもうすでに自分が黒だと言っているよな。

「そういうことか。私たちがイスラに助けられたあの時だな……」

どうやら俺が子供を助けていた時の話しだな。

「きっと言わないよね、あんなこと……僕たちに近づくよう言われたんでしょう、アルクノアに……」

「イスラさん……ウソだよね？」

レイアはジュードの推理を聞いて信じられなかった。自分を治療してくれた優しい女性がそんなことを……と。

「あの人たち……ばれないから……平気だって言ったのに……でも、私だってあの人たちに……」

怯えながら言うイスラにジュードが言った。

「脅されてたんだよね……弱みがあったから」

「昔の仕事ですか……」

ローエンはエリーゼを少し見て言った。

「……ユルゲンスにバラされたいのかって……この子にはすまないと思っている。でも、あの時は私だって……！」

「お願い、彼には黙っていて！」

そう言いながら膝を地面に詰めるイスラ。

「ユルゲンスは知らないのか？」

「言えるわけないじゃない！……ユルゲンスはとても純粋な人なのよ」

あんた……って人は……！

「なぜ話さないんだ？すでに過ぎたことだろう」

ミラは直球に聞く。

「あなたも女ならわかるでしょ。こんな醜い女（わたし）を彼が愛してくれるわけない」

……言いきりやがった。こいつ、ユルゲンスのことを……！

俺は拳を握っているが我慢している。はっきり言おう……そろそろ限界だ！

「あのことを知られたら……私は捨てられる。私は幸せになりたいだけなの。お願い……彼には言わないで……ください」

ブチッ！

俺の中で何かかキレた。

「ミラ……ジュード……少しどいてろ」

ゾクッ

この周りの気温が下がったのをミラ達は感じた。

「あ、ああ」

「う、うん……」

俺の後ろに下がるミラとジュード。

「おい」

「……なんです……かぁ！？」

俺は顔を上げたイスラの頭を掴み取る。

「レ、レオン!?」

「……!?」

驚くレイアに、エリーゼも少なからず驚いている。ティポも驚いている様子だ。

「お前、本当にユルゲンスを愛しているのか?」

「あ、当り前でしょ!!私は幸せに……「だったら、どうして、ユルゲンスを信じない!」……!?」

俺の言葉に怒るイスラ。俺はそんなイスラの言葉を遮る。

「てめえの愛しているユルゲンスはそんなことでお前を捨てるような器の持ち主か!てめえの過去を知ったぐらいで揺らぐような愛の持ち主か!!何も話していない癖に何言ってやがる!てめえが普通に幸せに暮らせると本気で思ってんのか!?」

俺はそのまま胸倉をつかみ、頭から手を離した。

「あ、なたに何がわかるのよ！」

「知らねえよ！だったらてめえには寂しい思いをした……孤独を味わってきたエリーゼの気持ちがわかるのか！？わかんねえだろ！！それになぁ、自分の愛している女に信じてもらえていないユルゲンスの気持ちがわかるのか！？てめえにわかるのかよ！！なにも自分から話していない癖に知ったかぶってんじゃねえぞ！」

俺の気迫に怯えるイスラ。

ミラ達ですら体を震わせているみたいだ。

「そんな本当の自分を愛する男に言えない奴が愛を語ってんじゃねえよ！幸せになろうとするんじゃねえよ！捨てられるなんてただのてめえの妄想だろうが！」

俺はそう言い、イスラを投げ捨てる。

ドス！

「ごほっごほっ！」

「人の気持ちを理解できない奴が寝ぼけたことを言ってんじゃねえよ」

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

ミラ達は驚きの連発だった。あのレオンがここまでなるとは……と。

「ミラ……どうしてレオンはあんなに……」

ジュードは長い付き合いのあるミラにレオンのことを聞いた。

「……レオンには家族はいない。肉親ともいえる人間がいないんだ」

「……えっ？」

ミラの言ったことに一番に反応したのは……エリーゼだった。

「私がレオンと初めて会ってからこの１０年間、レオンから家族のことを聞いたことがなかった。だが、時折、レオンは家族を見ると……懐かしそうな、羨ましそうな目で見ていたのを覚えているよ」

「……そうか。だから、レオンの奴はエリーゼ嬢ちゃんが俺達の旅についていくってときに反対しなかったのか」

アルヴィンがレオンが何故、エリーゼが旅についてくるときにダメだししなかったのかを言う。

「……レオンはおそらくだが、自分と同じように家族のいないエリーゼに自分と同じような想いをしてほしくなかった。だから、エリーゼにお兄ちゃんと呼ばれた時も嬉しそうにしていたのだろうな」

「……っ」

エリーゼの視線はレオンに向いていた。エリーゼはレオンを見て、何を思ったのかは……わからない。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「……もう失せろ。てめえをこれ以上見てると殴り殺したくなる」

「う……うう……」

イスラは泣き、そのまま立ち上がってこの場から去って行った。

「それじゃ、ユルゲンスさん捜そっか。ワイバーンの話ししなきゃね」

レイアの提案で俺達は予定通り、ワイバーンを借りるためにユルゲンスを探すことにした。

「ちょっと寄って行くか」

アルヴィンの独り言が聞こえ、ミラが話しかけた。

「どこへだ？」

「おっと、聞いてたのかよ」

驚くアルヴィン。

話しを聞く限り、ここにアルヴィンの知人がいると聞き、俺・ミラ・ジュード・アルヴィン・エリーゼはその知人の家に行くことになった。

アルヴィンの知人の家……いや、アルヴィンの母親の家に俺達は来た。

家に入ると寝たっきりの女性がいた。

「この人は……？」

「ん、俺のお袋。ちょっと具合が悪くてな」

アルヴィンは母親を見ながら言う。

「父親も兄弟もいないから、俺がいない間、イスラに看てもらってるんだ」

ギシッ

イスラの名前を聞いて足に力が入ってしまった。

すると、アルヴィンの母親が目を覚ます。

そして、ジュードを見て言う。

「あら、あなたは……」

「ど、どうも……」

反射的に挨拶をするジュード。だが、

「バランじゃない。また家を抜け出して遊びに来たのね。せっかくバランが来てくれたのに、アルフレドったら、どこへ行ったのかしら？」

いきなりの聞きなれない人の名前を言われた俺達は呆然としている中、ティポがいった。

「この人、何言ってるのー？」

「レティシャさん、アルフレドは、幼年学校の寄宿舎じゃないですか」

「ああ、そうだったわね……」

ティポの言ったことを無視し、アルヴィンと母親の会話が続く。

「あの子、きっと泣いてるわ。気が弱くて寂しがり屋だから……」

「大丈夫。元気だって手紙が届いています」

……聞いているこっちは切ないな。親子なのに認知してもらってないなんて。

「ええ、休暇には帰ってくるんですって。大きな船で旅をする約束をしたのよ」

「……アルフレドも楽しみにしてましたよ」

「ふふ……あの子、手紙でね、私が泣いていないか心配してるのよ。おかしいでしょう？でも、とっても優しい子なの……」

そういい、少し話をしたら母親は眠りについた。

「若い頃に故郷を離れて苦労したんだ。親父も死んじまってさ。親父と暮らした家に帰りたいって、そればっかり言ってた……」

眠りについた母親を見て、アルヴィンが話し始める。

「こんなになっちまったけど、故郷を思い出さない分、幸せなのかもな」

「アルヴィン……」

エリーゼはアルヴィンの境遇に自分に似たものを感じている。両親のいない自分と母親が自分のことを分かってもらえないアルヴィン……と。

「お前は今まで母親のために？」

「そ。ママのために汚れ仕事をこなしてきたんだ。美しい話だろ？」

「そんな言い方……」

「同情はいいって。実際、きれいごとじゃないんだ。たまんないよ、ほんと」

ジュードはアルヴィンの言い方に少し言いかけるが、アルヴィンの言うことが正しいので口を閉じた。

家を出ると、外には、

「あ、あの……」

イスラがいた。

「アル……」

イスラはアルヴィンの名を呼ぶ。

「ありゃ、俺をご指名？」

2人は俺達から少し離れて何かを話している。

「う、ううううっ……」

すると、イスラが泣きだした。

「ただいま」

そういい、俺たちに近づくアルヴィン。

「……あの人……泣いてます」

「ああ、泣き虫なんだ」

そういう問題じゃないけどな。

「いいの？」

「気になるなら、慰めてやれよ。悲劇のヒロインさんを……さ」

「ほっとけ。自分勝手な奴なんかさ……」

「おっ！気が合うねレオン」

「ふん……行こうぜ」

俺達は泣いているイスラを余所にこの場を離れ、ユルゲンスを捜しているレイアとローエンに合流した。

街の中をどれだけ探してもいないユルゲンス。俺達は一度、一カ所

にとどまっている。

「ユルゲンスさんいないね」

「エリーゼ大丈夫かな」

「さあな。ティポに関しては今までと同じだが……問題はエリーゼの心の傷だ」

俺とジュードはエリーゼを心配していると、ローエンが真剣な表情で俺たちに話しかける。

「増霊極（ブースター）について少し気に掛かることがあるのですが　ナハティガルがガンダラ要塞で行っていた実験……あれは増霊極（ブースター）を使用するためのものだったのではないでしょうか」

「増霊極（ブースター）がすでにラ・シュガルにも渡っているというのか？」

「そう考えるべきでしょうね」

ミラの言ったことにそうであろうと答えるローエン。

「増霊極（ブースター）はエリーゼみたいな子でも魔物と戦えるようになるものだよ。大丈夫かな」

「両国の兵が増霊極（ブースター）をもって争えば、かつてないほどの惨事が待っている」

増霊極（ブースター）について心配するジュードを余所に、ミラがこの先に起こるであろうことを言う。

「ホントにそんな戦いが始まるの？」

「始まるだろうな。ナハティガルにはその戦いに踏み切れる理由があるしな」

「クルスニクの槍だね……」

ジュードが槍のことを言い、俺とミラは頷く。

そこに、

「おお、戻ったのか！」

今まで捜していたユルゲンスが現れた。

「イスラから戻ったことを聞いたんだ。無事でよかった！」

一瞬、イスラの名を聞いて落ち込むジュードであったが、

「は、はい……」

何とかこたえる。

「んなことより、約束のワイバーンの準備できてるの？」

頷くユルゲンス。

「ただ、今は戦の雰囲気が高まっているとかで、王の許可なしには空を飛べないんだ。私はこれから主とカン・バルクへ行って、王の許可をもらってくるつもりだ」

ユルゲンスの話しを聞きながら考え事をしていたジュードが俺やミラを見て言ってきた。

「ねえ、ア・ジュール王に戦いが起きたら危ないってことを伝えた方がいいんじゃない？」

「王様、評判いいみたいだし、わたしたちと一緒に戦ってくれたりしないかな」

……確かに、あいつは評判はいいし、強いけど……なぁ。

レイアの言ったことに驚きながらアルヴィンは言う。

「おいおい、その戦いって戦争だぞ！？」

「私も直接会って研究所の真意を確かめたいと思っていた……」

ミラの話しを聞き、頭をかくアルヴィン。

「ア・ジュール王に会いたい。すぐカン・バルクとやらに出発するぞ」

「あ、ああ。それじゃ、荷物をまとめてくるよ」

そういい、この場からいったん離れていくユルゲンス。

「ねえ、研究所の真意って？」

「エリーゼがいた研究所って、他にもたくさんの子どもが連れてこられてたらしいんだ」

「ジャオさんが言ってたの？」

レイアの言うことに頷くジュード。

「ア・ジュールお王が民を守る存在なら、私の望む答えをもちあわせているはずだ。だが、別の答えをもつのであれば、金輪際やめると誓わせる。どんな手を使っても」

「うん、そうだね。ガツンと問いただしちゃおう！」

意気込むレイアであった。

「あ、そうだ。そういえば宿屋に荷物置きっぱなしじゃない？」

「私たちが取ってきましょう」

荷物のことを思い出したレイアがそう言うとローエンとジュードが取りに行こうと言い、エリーゼも連れて行こうとするも、反応の薄いエリーゼを引っ張って連れて行った。

「そんじゃ、俺もちょっくら……」

アルヴィンも一旦俺達から離れて行った。

「ミラ……」

「ああ……もう少しだ。後少しで、クルスニクの槍を……」

「四大達も解放してやんないとな」

「……ああ」

俺とミラは黙って肩を寄せあう。

「頑張ろうぜ」

「ああ！」

そして、少しして皆が集まった。

「さて、カン・バルクへ出発だ」

ユルゲンスの案内の元俺達は、カン・バルクを目指した。

第３５話　首都カン・バルクへ！（後書き）

ふぅ、ここまでですね。次回には彼と彼の部下達が出て来るはずです。
お楽しみに！

作者はイスラが嫌いです！大っ嫌いです

第３６話　エリーゼとレイア……（前書き）

ふぅ、ギリギリ２９日以内に更新できました。

第３６話　エリーゼとレイア……

～レオンＳＩＤＥ～

俺達はシャン・ドゥを出てモン高原を歩いていた。ここは雪山のような吹雪が偶に吹くと言う。道を間違わないようにユルゲンスの後についていく。

「くしゅん！」

歩いていると隣にいるミラがくしゃみをした。

「ミラ、寒いのか？」

「う、うむ。イフリートがいないとここまで寒いとは……」

ミラの服装は露出度が高いからな。そりゃあ、寒いはずだな。それに加えて今までと違ってイフリートもいないしな。

「仕方ないな……ほら、これでも着てろって」

俺は自分が着ていた黒と赤のロングコードをミラに差し出す。

「ん？いいのか？これはレオンの……」

「自分の彼女に風邪を引かれたら困るしな」

「か、彼女／／／／／／」

彼女……という言葉を聞いたミラは顔を紅くしながら俺のコートを手にし、着た。

「あ、温かいな／／／」

「そりゃあ、俺がさっきまで着ていたからその温もりが残っているしな」

「ぬ、温もり！？／／／」

……何を思い出したのか顔を真っ赤にし、もじもじするミラ。……やべえ、皆がいなかったら野外プレイしそうな勢いだぞ。今のミラはすげえ可愛いし。

「で、では……い、いこうか／／／」

動揺しているミラはそのまま、皆の後を追っていく。そんなミラも可愛いと思いながら俺も皆を追った。

カン・バルクまであと少しの所に来るとジュードがあるものを見つけた。

「ねえ、ユルゲンスさん」

「ん？何だ？」

ジュードは前を歩くユルゲンスにあることを聞いた。

「あの……岩壁はあんなに戦った跡が残っているの？剣の後だったり、術を使った後もあるよ？」

「ん？ああ、あれか。あれは3，4年前に現ア・ジュール王とその部下たちがある人物と一日、戦い続けてできた痕だよ」

ユルゲンスの言ったことに驚くジュード。

「そんなにすごい戦いだったの！？」

「ああ、私は実際に見たわけではないが、爆発音がすごかったのは覚えているよ」

「へぇ～そんな戦いがあったのか。俺も知らなかったぜ」

色々と知っているアルヴィンですら知らないことだった。

だが、そのある人物は……オレだったりする。

俺は汗をかく。気付かれたくないので。

「さあ、カン・バルクはもうすぐだ」

ユルゲンスに言われ、俺達は歩くのを再開した。

それから歩き続け、俺達はカン・バルクに到着した。

カン・バルクは前に来た時と同じで、変わったところはなかった。

「シャン・ドゥもそうだったけど、ここも少し変わった街だね」

「ア・ジュールはラ・シュガルに比べて精霊信仰が強いからな」

ジュード、変わった街って言うなよ。ラ・シュガルとア・ジュールは違うんだからな?

「わ、何あれ?」

レイアが空中滑車を見て驚いていた。まあ、カン・バルクにしかないもんな。

「あれが世界でもカン・バルクでしかお目にかかれない、空中滑車さ」

「空中滑車？」

「カン・バルクは山地につくられた街で、いくつかの地区をあれで繋いでいるのです」

初めて聞く名前にレイアが首をひねっているとローエンが説明した。

「景色がよくて楽しそうだね」

レイアはエリーゼにそういうが、エリーゼは知らんぷりする。

エリーゼの態度に固まるレイア。

「ユルゲンス、ア・ジュール王と会うにはどうすればいい？」

「ワイバーンの許可を取るついでに、謁見を申し入れてみるよ。ただ、多くの民が謁見を望んでいるから、ずいぶん待たされると思う」

ミラがガ……ア・ジュール王に会うのにはどうするかをユルゲンスに聞き、ユルゲンスがワイバーンの許可のついでに謁見を申し込んでおくと言ってくれた。

「なら、俺達は宿を取ってまっているから、頼んだぜ」

「ああ」

そういい、俺達から離れていくユルゲンスは空中滑車に乗り込んで上へと上がって行った。

俺達はひとまず、宿に行くことにした。

ユルゲンスが許可をもらいにいってから約2時間後。

俺達は暇な時間、ずっと部屋で待機していた。

「まだユルゲンスさん、戻ってこないのー？」

さすがに待つのが飽きてきたレイアがそう呟いた。

「まだだよ」

レイアの言ったことに答えたジュード。

「ねえ、エリーゼ。街の観光でもしよーか？」

「……」

レイアは暇な時間を観光に使おうと思い、元気のないエリーゼを誘うが、エリーゼは何の反応もしない。

「エリーゼさん、行ってきたらどうですか？」

ローエンも気晴らしになると思い、エリーゼにいう。

「ねえ、エリーゼってば～」

黙るエリーゼ。

「ティポがはしゃいでくれないから、わたしばっか、うるさいみたいだよ」

エリーゼは両親とティポのことを聞いてから、話すこともなくなり、ティポですら、話すことがなくなってしまった。おそらく、ティポはエリーゼの心の奥で思っていることが関係して話さないんだろうな。原作と違ってメモリーが抜かれてないのに……。やっぱり、両親の死と友達と思っていたティポのことが原因か……。

「前からそうでしょ？」

恋人であるレイアにある意味酷いことを言うジュード。ここは恋人同士になっても変わんない関係だな。

「べー！」

そんな彼氏の態度に起こるレイア。

「じゃあさ、ティポを見習ってエリーゼも元気におしゃべりする練習をしない？私、エリーゼの口から、自分のことを話してほしいんだ」

バッ！？

「おい、レイア（汗）」

この、レイアの気遣いのない一言がエリーゼの心の奥で思っていたことを……

「レイアはうるさいなー。みんなの足をいっつもひっぱってるくせにー」

ティポが言った。最悪な展開で。

その……ティポの言葉に固まる俺達。言われたレイアも

「え……」

固まった。

「エリーゼ、言い過ぎじゃないか？謝った方がいい」

そんなエリーゼにミラがレイアに謝るように言う。

「ミラが言うんだから、相当だぞ」

「ミラも……レイアも……！」

「うるさいんだよーばかー！」

エリーゼは立ち上がりながら2人の名前を言い、ティポは2人をバカといい話し、怒ったようにして部屋を飛び出していった。

「おい、どこ行くんだよ」

バタンッ！

「あ痛たた、今のは効いたな～」

笑いながら言うレイアだが、表情は少し暗い。

「レイアさん……」

「ほら、わたしはいいから。エリーゼ連れ戻しに行こっ！」

レイアを心配する俺達。だが、レイアは気にしていないって感じにエリーゼを連れ戻しに行こうと言う。

そんなレイアを見て俺はジュードの耳元で小さく呟いた。

「ジュード……俺達は先に行く。レイアに何か言ってやれ」

「え……？」

「お前はレイアと付き合い長いだろ。レイアのことをい一番知っているのはお前だ。それに……お前はレイアの彼氏だろ？」

「う、うん……わかった」

「よし。皆、エリーゼを捜しに行くぞー。レイア、ジュードが話しがあるってさ」

「え？」

不思議がるレイアはジュードを見る。ジュードは小さく頷く。

「行くぞ」

俺はミラ・アルヴィン・ローエンを連れて先に部屋を出た。

「おたく、気がきくね」

「ええ、さすがレオンさんですな」

いち早く俺の行動の意味に気づいたアルヴィンとローエンが俺に話しかけてくる。

「まあ、ああいうのはジュードの出番だろ」

「ですね」

「エリーゼを捜すぞ」

俺達は先に宿を出た。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ジュードＳＩＤＥ～

「レイア」

「な、何？早くエリーゼを連れ戻さないと！」

「レイア。無理しないでいいよ」

ピクッ

レイアは僕の言ったことに体を固まらせる。

「な、何を言っているのか、わかんないなー」

「エリーゼの言葉に傷ついているのに気付かないはず……ないでしょ？（レオンはこのことがわかったから僕にレイアのことを頼んだんだね……さすがだ）」

僕がそう言うと俯くレイア。

「……確かに、わたし……このメンバーの中で一番足を引っ張っている気がしてたんだ」

「気にしないでいいよ。レイアは昔の怪我が原因で……」

「そのことを抜きにしても……わたし、皆の……ジュードの足を引っ張ってる」

手で顔を隠すレイア。体が少し震えているよ。

「レイア……」

ダキッ！

「無理、しないでね？僕はレイアの、か、彼氏……なんだから」

自分でいってて少し、恥ずかしいね／／／レオンはよくミラに言えるね……ある意味尊敬するよ。

「ジュ、ジュード！？／／／……うん、ありがとう／／／」

ガシッ

レイアが僕の背中に手をまわした。

「「……／／／／／／／」」

見つめ合う僕たちだけど、やっぱり、キスとかはまだできないや／／／

「さ、さて、み、皆を追おうよ／／／」

「そ、そそそ、そうだね／／／」

僕たちは手をつないで部屋を出て行った。

～ジュードＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

ジュードとレイアが手をつないで出てきたのを確認した俺達は改めてエリーゼを捜し始めた。

少し、街を捜すとすぐに見つけた。

しかも、ジャオがいた。

身構えるジュードにジャオは言う。

「安心せい。偶然会っただけじゃ」

そういったジャオはエリーゼから離れ、レイアがエリーゼに近づく。

「さっきはごめんね。エリーゼ、ティポのことや両親のことで、寂しい想いしてたのにね」

「ほら、わたしって遠慮なく言っちゃうとこあるでしょ。許してよ」

許してほしく、謝るレイアであったが、

「……いやです……」

エリーゼは拒絶し、そんなエリーゼに驚くレイア。

「そんなこと言わないでよ。ね！」

何とかしようとするレイアに、エリーゼはレイアやミラを見て言う。

「レイアモミラもキライ！友達だと思ってたのに！」

起こるエリーゼに、何も言わないが表情が怒っているティポ。

「エリーゼ、わたしはただ、あなたが心配で」

レイアは心の底からエリーゼの事を心配している。だが、エリーゼにはその思いが届かない。

「ウソ！わたしのことなんてホントはどーでもいいくせにっ！もう友達やめるっ！」

そういい、走ってこの場を去ろうとするエリーゼ。

そんなエリーゼに、

「「エリーゼ（さん）！！」」

俺とローエンが声を掛ける。

その声で走るのをやめるエリーゼ。

「みんな、あなたを思って優しくしているのですよ」

「エリーゼ……お前は自分の心が傷つけられたって言っているけど、お前はどうなんだ？」

「先ほどのティポさんの言葉にレイアさんが心痛めていることに気付いていますか？」

「レイアが……ホント？」

俺とローエンの話しを聞いたエリーゼはレイアを見ながら聞いた。

「あ、いや、傷ついたっていうかさ……その、へこんだっていうか……」

「わたし、レイアを傷つけてるなんて……思ってなかった……」

エリーゼはレイアが自分の言ったことに傷ついていることに気付いていなかったのか……声が小さくなりながらも言った。ティポも心なしか落ち込んでいる。

「エリーゼ。それじゃあ、レイアに謝っちゃおうか」

「でも、わたしひどいこと言っちゃった……」

落ち込んでいるエリーゼにジュードが謝ろうと言っているが、エリーゼは自分の言ったことに気づき、許してくれるか……と、心の中で思っているな。

「ちゃんと謝れば許してくれますとも。それが友達です」

ローエン……お前が言うとすっごく説得力があるな。

ローエンの話しを聞いたエリーゼはレイアに近づき、言った。

「れいあ……ごめんなさい。許してくれますか？」

「うん。だけど、これからはエリーゼの言葉でエリーゼのことをもっと教えてほしいな」

謝ったエリーゼにレイアは自分のことは自分でいってほしいと言う。

「三歳しか違わないのにエラそうだねー」

「ダメ、ティポ！しゃべらないで！」

そんないい雰囲気だったのにティポが台無しにしたな（笑）

「エリーゼ」

「は、はい……？」

「それでもわたしの方が年上だからねっ」

「は、はぅ……」

ドヤ顔のレイアに何も反抗できないエリーゼ。

「レイア、怖ーっ！」

ティポがまた、エリーゼの思っていることを口にする。

「ふふふ……ははは」

そんな3人が面白いのかミラが笑う。

「娘っ子、友達を大事にな」

そういいながら、ジャオは去って行った。

さて、俺もここらで考えていたことを言うか。

俺はエリーゼに近づく。

「エリーゼ」

「レオン『お兄ちゃん』……!?はぅ、また言っちゃいました／／／」

久しぶりに『お兄ちゃん』って言われたな（笑）

「エリーゼ。俺から提案があるんだが」

「提案……ですか？」

「提案ってーなーにー？」

不思議がるエリーゼに、ティポも不思議がる。

「エリーゼ、俺とミラの？家族〃にならないか？」

ピキッ

「な、ななななな！？／／／／／／／／／／」

？家族〃……この言葉を聞いたミラが顔を真っ赤にする。

「えっ？！」

「アングリー！」

言われたエリーゼも驚き、ティポも驚き口を開ける。

「レ、レレレレレ、レオン!?／／／い、一体何を言い出すんだ！」

「前々から思っていたんだ。この旅が終わってもエリーゼはどこに預けるつもりだった？さすがにずっと、クレインのところに置いておくわけにはいかないし、もし、学校に通うなら俺とミラは少しの間だけカラハ・シャールに暮らせばいい……そう思っていたんだ」

俺を指差すミラは余計に顔を真っ赤にする。

「うわー、レオン、すっごく大胆なことを言うね～」

「うん。レオン、遠まわしに結婚しようとか言っている感じだよね」

レイアとジュードも、俺の言ったことに顔を紅くしている。

いつか、自分たちも……とでも思っているんだな。

「わ、わわわわ、私は、べ、別に、か、かかかか、構わんぞ！／／／」

ミラはＯＫみたいだな。

「エリーゼ。このことは旅が終わるまでに考えておくんだ。時間はたっぷりあるしな？」

「は、はい！」

「うわーい！エリーと僕に家族ができる～♪」

だが、もうエリーゼの心の中では決まっているのかもな。

「それで、僕たちはどうしよう？ユルゲンスさんはまだ戻ってこないけど……」

「直接王城に乗り込んでみる？」

どうするかを決めようとしているとアルヴィンがジュードにそう言

った。

「あはは、それはいいな！それにおそらくユルゲンスもそろそろ、城から出てくるかもしれないし、城へ一旦行ってみるのはどうだ？」

俺がそう言うとジュードは頷いていう。

「うん、そうだね。城の中でなく外で待っていればユルゲンスさんに会う可能性があるかも……行ってみよう」

アルヴィンの提案によって、乗り込むのではなく外から一旦みてみることにした俺達。

俺達はそのまま徒歩で城を目指すのであった。

第３６話　エリーゼとレイア……（後書き）

次回、ガイアスとウィンガル達の登場です！
エリーゼを家族にしようとするレオン。それに顔を真っ赤にするミラに萌えた（妄想だけど）
次回もお楽しみに！

第37話　ア・ジュール王ガイアス

～レオンＳＩＤＥ～

俺達は今、人の行列のできている城の門にいる。中に入って行った。

「お城の前、行列だったね」

「みんなの声をちゃんと聞いてくれる、いい王様なんだね」

「現在のア・ジュール王は、かつて混乱を極めた国内をその圧倒的なカリスマで統率した人物だと言われています」

ローエンのア・ジュール王の話しを聞いたレイアは目を光らせた。

「それなら、わたしたちに協力してくれるよ」

そう意気込むレイアに対してミラが言う。

「だが、影でエリーゼのような境遇の人間を生み出しているのであれば許せはしない」

「ミラ……ありがとう……です」

ミラが自分のことを思っていってくれているのが嬉しいエリーゼは礼を言った。

そんな話しをしていると城からユルゲンスが出てきた。

「ごめんなさい、待ちきれなくて」

ユルゲンスには宿屋で待っていると言ったのにここまで来てしまったことを謝るジュード。

「いや、ちょうどよかったよ」

「ワイバーンの方はどうなった？」

「問題なしだ。それと、ミラさんに頼まれた謁見の件だが、ちょっと驚いたよ」

「……？」

ミラはユルゲンスが何を言いたいのかがわかんないようだ。

「みんなの名を伝えたら、逆に陛下が会いたいと仰ったんだ。特にレオン、君の名を言ったら驚いていたよ」

皆が俺を見る。俺は目を逸らす。

「ひょっとして、ラ・シュガルじゃ有名人なのか？」

「あ、いえ、そんなことはないと思うんですけど……」

慌てるジュード。ジュードよ、そんな風に慌てると色々とばれるぞ。俺なんか、折角言わないでいたのに……ユルゲンス、恨むぞ。

「闘技大会の結果が陛下に届いたのかな。それならキタル族にとっても栄誉だ。じゃ。私は一足先にシャン・ドゥに戻って、ワイバーンの用意をしておくからな」

俺たちにそう言ったユルゲンスは先にシャン・ドゥへ帰って行った。

「ふむ、思わぬ歓待だな」

「何かの罠だったりしないよね？」

「あまりいい予感はしませんね」

「そうかなー。会えないで帰るよりはよかったんじゃない」

「……」

皆が色々と言っている中、また何かを考えるアルヴィン。

「また隠しごとかアルヴィン？」

皆がアルヴィンを見る。

「ったり前だよ。だから俺は魅力的なんだ」

「……？」

首を傾げるミラ。呆れて何も言えないジュード。

「レオン、今のはどういう意味だ？」

「ああ、秘密のある男はよりかっこよく見える……とかだろ？」

俺も呆れて言うのがバカバカしくなってきたぜ。

「さっさと、王様に会いに行こうぜ」

先に進むアルヴィンにジュードは言った。

「アルヴィン、ウソはイヤだからね」

「お前たちが俺を信じてくれてるってのは知ってるよ」

そう言うと階段を上って行くアルヴィン。

そのアルヴィンの後ろ姿を見ながらジュードは笑っていた。

……無駄にカッコいいことを言うやつだねアルヴィンは。

俺達はアルヴィンに続いて城に入って行った。

城に入った俺達……いや、俺はミラやレイアに問いただされていた。

「それで、レオン。お前はア・ジュール王と知り合いなのか？ユルゲンスの話しを聞くと知り合いみたいに感じたが？」

「そうだよ！もし、知り合いなら王様のことを知っているんでしょ？どうして話してくれなかったの～」

2人が詰め寄る。こころなしかジュード・ローエン・エリーゼ・アルヴィンが笑って俺を見る。

「あ～、どの道これから会いに行くやつの話しをしても意味ないだろ？それに一々、話すのが面倒だったんだよ」

「……そんな、理由で？」

レイアが呆れて俺を見る。

「当り前だろ？聞くお前たちはともかく俺は話すから疲れるんだぞ？」

そういうと、納得するレイア。

「仕方ないな。そう言うことにしておこう」

ミラも何とか納得してくれた。

少し進み、王座の間へ階段のあるところにいる兵士に呼びとめられた。

「お待ちください。王への謁見は、城の外で順を待って頂かなければなりません」

「ア・ジュール王が僕たちに会いたがっていると聞いたんですけど」

ジュードがそう言うと兵士2人はお互いに見合う。

「ミラ様とレオン様ですか？」

「私だ」

「俺だ」

「わかりました。このままお進みください」

そういうと道を開ける兵士2人。

進んでいく俺達。が、ローエンとエリーゼが動かないのを不思議に思ったレイアが話しかけた。

「どうしたの？」

「王との謁見にぬいぐるみはどうかと思いますので、預かって頂こうかと」

「いいの、エリーゼ？」

レイアの問いに、

「はい」

大丈夫だと答えるエリーゼ。

「責任をもって私が預からせて頂きます」

2人いる1人に兵士にティポを預けるエリーゼ。

「さあ、参りましょう」

そうローエンが言うと改めて俺達は進んだ。

進んでいくと広い王座の間に出た。

そこにはジャオもいた。

「ジャオさんがどうして？」

何故王座の間にジャオがいるのかと疑問に思ったジュードがそう聞いた。

「わしは四象刃（フォーヴ）が一人、不動のジャオじゃ」

「四象刃（フォーヴ）？」

「王直属の四人の戦士です。あの方がその一人だったとは……」

ローエンはジャオが四象刃（フォーヴ）の一人であることにとても驚いていた。

ガシャァ

すると、奥の扉が開き、2人の男が出てきた。一人は王座にアグラを掻きながら座り、もう一人はその男のすぐそばに立っている。

「イルベルト元参謀総長。お会いできて光栄だ」

「まさかア・ジュールの黒き片翼。革命のウィンガル……」

黒衣の男……ウィンガルのことがわかったローエンはそう呟いた。

「お前がア・ジュール王か」

「我が字(あざな)はア・ジュール王、ガイアス。よく来たな、マクスウェル、そしてレオン」

ガイアスは自分の名前を皆に告げ、俺とミラを見ていう。。

「お前たちは陛下に謁見を申し出たそうだが、話を聞かせてもらおうか？」

ウィンガルが謁見しにきた理由である話を聞いてくる。

「ア・ジュールでつくられた増霊極（ブースター）はすでにラ・シュガルに渡っています。もし両国で戦争が始まれば、とりかえしのつかない事態になってしまうんです」

ジュードが皆を代表して話をする。

その話をガイアスは眉ひとつ動かさないで言う。

「ほう……それを伝えるためにわざわざ来たというのか？」

「は、はい……」

ジュードはガイアスの威圧感を肌で感じているのか言葉に力が入らなくなっていく。

「それでわたしたち、ラ・シュガルの兵器を壊そうと思っているんです。それがなくなれば、ラ・シュガル王は戦争を始められないんじゃないかって……」

「協力とか……してもらえ……ませんか？」

レイアもジュードと同じでどんどん、声に力が入らなくなっていく。

「要件はそれだけか？」

ウィンガルの言葉に黙るジュードとレイア。

「もう一つお伺いしたいことがあります。以前、王の狩り場にあったという増霊極（ブースター）の研究所についてです」

増霊極（ブースター）の研究所……これを聞いたジャオが一瞬、顔色を変える。

「あの場所に親を亡くした子供を集め、実験利用していたというのは本当か？」

ミラが少し目の色と変えながらそうガイアスに聞く。

「ふっ、何を言い出すかと思えば。精霊のお前に関係があるのか？」

一歩前に出るミラ。

「私はマクスウェル。精霊と人間を守る義務がある」

「精霊が人を守るとは。実に面白いことを言ったな」

「貴様は王でありながらも、民を自らの手で弄んだ、違うか？」

ミラが言いきるとウィンガルが話しだした。

「その件はすべて私に任されている。あの研究所に集められた子どもたちは、生きる術を失った者たちだった。お前たちが想像するようなことはない。実験において非道な行いはしていない」

「ウィンガル」

今度は俺が話す番だな。

「なんだ、レオン？」

「エリーゼの事はどうなんだ？」

俺はそう言うとエリーゼを前に出す。

「わ、わたしは……」

エリーゼをみたウィンガルは目を細め、ジャオを見る。

「この娘……例の被験体か？」

「そうじゃ」

「エリーゼはハ・ミルの村でも閉じ込められていたんですよ。それじゃ、あまりにも……」

「非道だと？」

ジュードが言いかけるとガイアスがそれを遮って言った。

「え、あ、はい……」

すると、また声に力のなくなるジュード。ジュード、一々そうなるなよ。

「お前は民の幸せとはなんなのか、考えたことがあるか？」

「幸せ……？」

「人の生涯の幸せだ。何をもって幸せか答えられるか？」

「それは……」

ガイアスの問いに答えないジュード。

「己の考えを持ち、選び、生きること」

「そ、そう、僕もそう思う」

……ミラに乗せられたなジュード。

「マクスウェル……お前はレオンと同じことを言うのだな。だが、俺は違う」

そう言いながらガイアスは立ち上がる。

「人が生きる道に迷うこと、それは底なしの泥沼にはまっていく感覚に似ている」

「生きるのに迷う……？」

「そう。生き方がわからないくなった者は、その苦しみから抜け出せずもがき、苦しむ」

「……」

ガイアスの人の生き方についての話を聞いたジュードは黙り込む。

「故に民の幸福とは、その生に迷わぬ道筋を見出すことだと俺は考える。俺の国では決して脱落者を生まぬ。王とは民に生きる道を指し示さねばならぬ。それこそが俺の進む道……俺の義務だ」

「ふっ。変わらないな、その考え方は……」

3年前に会った頃と何にも変わっていないな。

俺は密かにほほ笑んだ。

「お前たちをここに呼んだ理由を、単刀直入に話そう。マクスウェル、レオン。ラ・シュガルの研究所から『カギ』を奪ったな？それをこちらに渡せ！」

「断る。あれは人が扱いきれるものではない。人は世界を破滅に向かわせるような力を前に、己を保つことなどできない」

「ガイアス。お前が何を言いたいのかはわかる。が、あれを渡すわけにはいかない。いくらお前の頼みでもな」

俺とミラは思っていたことを言いきった。

「俺の言葉が、お前たちには理解できなかったとみえるな」

「ふふ、どれだけ高尚な道とやらを説いたところで、人は変わらない。二千年以上見てきた」

「ま、俺は数年だけどな」

睨みあう俺とミラ、ガイアス。

「では、あなたに『カギ』の所在を聞くとしよう」

ウィンガルがそう言うとアルヴィンが前に出ていく。

「え……？」

「アルヴィン……ウソ……だよね？」

「……ひどいです」

「……アルヴィン」

俺とローエン以外は口に出して信じられないものを見ているかのように言う。

「すまんね。これも仕事ってやつなのよ」

「アルヴィン。マクスウェルは『カギ』を誰に預けた？」

「巫女のイバルだ。今頃はニ・アケリアでおとなしくしてるんじゃないか」

アルヴィンの奴、普通に言いやがった。

そう、話をしていると、

ガシャ！

ガイアス達が出てきた扉からプレザが出てきた。

「アル……どうしてあなたが！？」

「よ、プレザ。久しぶり」

プレザに挨拶をするアルヴィン。

「プレザ。何用だ」

ウィンガルに聞かれたプレザだが、俺達がいるので話すのを躊躇している。

「構わん。報告しろ」

「ハ・ミルがラ・シュガル軍に侵攻されました」

プレザの報告を聞いた俺達は固まった。

「なんですと……」

「村民の大半が捕えられ、ラ・シュガルへ送られた模様。殺害された者も多数おります。そして、その場には大精霊の力と思わしき痕跡が多数ありました」

プレザの報告に眉をひそめるガイアス。

「大精霊？四大召喚は二十年前から、召喚できなくなっているはずだったな」

ガイアスはミラを見る。

「……バカな、四大が解放されていれば感知できるはずだ。まさか、クルスニクの槍の力……ナハティガルは新たな『カギ』を生み出したのか！？」

驚いているミラを余所にガイアスは指示を出す。

「すべての部族に通告しろ。宣戦布告の準備だ。我が民を手にかける者は何人たりと許しはしない！」

そういい、王座の間から離れていくガイアス。

ウィンガルが俺達を見る。まずいな、この状況は……。

「さて、あなたたちはもう用済みになってしまったが……陛下が精霊マクスウェルを得たとなれば、反抗的な部族も従わざるを得ない」

「くっ！」

俺達は兵士に後ろを取られたが、

「エリーゼさん！」

ローエンの言葉を聞いたエリーゼが行動を開始する。

「ティポ！」

兵士の一人の腕の中にいたティポが動き出し、その兵士は動揺してしまい、手を離してしまった。

「今のうちだー、逃げろー！」

俺達はティポが作った穴を利用し、ここから逃げることにした。

「悪く思うなよ。ライトニング！」

数名の兵士たちの上から小さな雷を発生させ、動きを止める。

「いくぞ！」

俺も走り出す。

ジュードは走りながら後ろで手を振っているアルヴィンを見た。

「マクスウェルとレオンを捕らえろ！実験体も回収するんだ！」

「って、俺も捕獲対象なのか！？」

ウィンガルの指示が聞こえた俺は突っ込んでしまった。

俺達はそのまま、城の外を目指していった。

第37話　ア・ジュール王ガイアス（後書き）

はい、遂にガイアスとウィンガルの登場！待っていたぜ2人とも！
さて、ここまできたらゲームをプレイした人はわかるよね？
そう、ウィンガルとプレザコンビとの戦いが待っている！これは…
…楽しみにしててね！
次回もお楽しみに！

第３８話　ＶＳ翼のウィンガル＆爪のプレザ

～レオンＳＩＤＥ～

ウィンガルの奴、さりげなく俺のことも捕獲対象にしやがった！全く持って不愉快だぞ！？

俺達は走りながら門を目指している。

「作戦、大成功～！」

「ティポを門番に預けたのは、脱出に備えてだったんだね」

「はい。なんといっても交渉するのはミラさんですから。ミラさんが意志を貫く時は……」

「はは。何か起こりそうな気がしちゃうね」

「予想どおりだったねー」

「知ってます！それってトラブルメーカーって言うんですよね」

４人ともミラに聞こえていないと思っているな……ミラ、聞こえているんだけど（汗）

「……ふむ」

聞こえていたミラはティポに近づいていた。

「ぎょえー！ミラ君！聞いてたの！？」

「否定できない話だがひとつ言わせてもらおう。ティポもトラブルメーカーに含まれるのではないか？」

ジュ・ロ「それは……」

ミラの言ったことに何も言えないジュードとローエン。

「えー！フォロー無し！？」

ブチッ！

「お前たち！話している暇があればキリキリ走れ！」

話しているみんなに俺は文句を言うと全員黙り、走って言った。

城の外に出た俺達は一旦は知るのをやめた。

「や、やっぱり……アルヴィンはウソつきです」

「事情があるのかとも思いましたが、今回はさすがに」

「アルヴィン君をダンザイしろー！引きずりだせー！」

アルヴィンを信じていたエリーゼは悲しい気持ちになっており、そのエリーゼの気持ちをティポが言う。エリーゼ、心の奥で断罪しろって……考えているのか。

「ミラ……アルヴィン君はどうして？」

「さすがに本心まではわからないが……」

「何が僕たちが信じてるのを知ってるだ。アルヴィンなんか……もう！」

……ハァ。

「お前ら！二度も同じことを言わせるな！兵士が追って来ているのにここで時間を喰っている暇があるか！それとジュード！お前もいい加減、素直に信じすぎるな！あいつは自分に利益のある方法を選んだだけだ！あいつは傭兵だ！自分に有利な条件を飲むに決まっているだろ！」

「……！？レオン、まさか、アルヴィンがまたこうすることを……」

「当り前だろ！いい加減に学習しろ。そもそも、何回も別行動をとったり、色々していれば疑う気持ちの方が大きいわ！」

俺がそう言うと黙る皆。そこへ、

カンカンカンカンカンカン！！！

城の鐘が鳴り響く。

「やつらは城外に出だぞっ！」

ガシャッ！

「マズ！？」

話しているあいだに門を閉ざされてしまったか！

「開かない！」

どうするかを考えているとローエンが何かを見つけて、俺たちにいってきた。

「5ヵ所の制御石を復帰させれば、ロックを解除できるかもしれません。石にマナを注いでください。石が完全に赤く輝いたら、完了の合図です」

「ガンダラ要塞の時と同じですね」

エリーゼの言うことに頷くローエン。

「ただし、みなが近いタイミングで完了させなければ、ロックは解除できません」

「なら、マナを扱うことに長けている俺・ミラ・ジュード・エリーゼ・ローエンでやろう。レイア、すまないが、兵士たちがこちらに近づいてくるかを見張ってくれないか？」

「う、うん……わかった！」

俺達5人は制御石の前に立つ。

「いきますよ！」

ローエンの合図と共に俺達は同時に制御石にマナを注ぐ。

「終わったぜ」

「終わりました」

俺とローエンが先に終わる。

「もう！？」

見張っているレイアはそれを聞いて驚いている。

「こちらも完了だ」

「終わったよ！」

「できました……」

５人全員がマナを注ぐのを終えると、

ガシュン…ガッガッガ

門が開く。

「急ぐぞ！」

俺達はその場からすぐに離れて、モン高原方面の出口へ向かった。

モン高原方面の出口に近づくと、プレザとウィンガルが待ち伏せていた。

「私を置いて先に行くなんて、そんなやつ滅多にいないわよ」

「プレザといったな。まさかガイアスの部下だったとは。イル・フアンを脱出した私たちを初めから狙われていたわけか」

「ニ・アケリアじゃ、アルが陛下にあなたたちの情報を売ったのよ」

「やっぱりか……」

やっぱり、あの時……ミラの社で一度別れた時か。

「さすがレオンね。気付いていたの？」

「まあな。まず、村人達は俺がいれば問題ないからアルヴィンに頼む必要はないし、バカイバルがそもそも、他人であるアルヴィンにミラのことを頼むわけはなかった」

「へぇ、初めから怪しいって気付いてたんだ。陛下があなたを部下にしたい気持ちがわかったわ。力は強く、頭の回転速度は早く、文武に長けているあなたを……ね」

「俺は何度も断っているがな。大方、ウィンガルが俺も捕獲対象にしたのはガイアスの道の力になると思ってのことだろ」

「さすがだな……」

黙って聞いていたウィンガルも俺の言うことには答える。

「じゃあ、アルヴィンは……最初からあなたたちの仲間だったんだね」

「いや、それはない」

俺がジュードの言うことを否定する。

「ええ、そんなことはないし、そんなこと言わないでくれる？あんな男……仲間でもなんでもないわ」

「……？」

若干怒りの表情を見せるプレザを不思議に思っているジュード。

「……ふふ、私たちの関係はご想像にお任せするわ。けど、アルは組織を渡り歩く、根無し草の一匹オオカミよ。誰にも心を許さない。信じた方が悪いわ、ボーヤ」

「戦になればクルスニクの槍が、最たる脅威となるのは明白。それがわからぬマクスウェルとお前ではないだろう」

ウィンガルが俺とミラを見て言う。確かに、クルスニクの槍の力は戦になれば脅威になるが。

「お前たちの縄張り争いに手を貸すつもりもない。あれをお前たち人間が手にすれば、待っているのは悲惨な結末だけだ」

ミラはそう、言いきった。だが、その言い方が癪に障ったのか構えを取るプレザと刀を抜くウィンガル。

「ずいぶん、上から見られたものだな」

ミラも剣を抜こうとするが、ローエンに遮られる。

「おやめなさい。戦巧者と名高いあなたでも、その誉、剣で得たものではないでしょう。若さが見誤らせているのでは？」

ローエンの話を聞いたウィンガルは剣を向ける。

「イルベルト殿。それがあなたの限界。古い。……故に間違い」

「……っ」

「……逃げ出す！はあああああっ！」

シュウウウウ――――バシュン！

声を上げるウィンガルの体を光が包み、光が消えると……髪の色が白くなったウィンガルが出てきた。

「な、なにあれ！？」

「マナが急激に……！？」

「増霊極（ブースター）……！」

「どうして……」

「なんだお前ーっ！」

急激に変わったウィンガルの雰囲気・マナの量に驚くミラ達。

（エリーゼ、誰に向かってそんな口をきいてる？先輩には敬意を払うものだ）

（ウィンガル、んなことをエリーゼに言ってもお前のことを知らないんだ。そんなことは言うなよ）

（っ！？レオン、お前、いつの間に……）

俺とウィンガルの喋っている言葉がわからないミラ達は驚きていた。

「言葉が……レオンの言葉も……」

「これはロンダウ語……！？レオンさんも何故しゃべれるんですか！？」

「んなことは後でいいだろ！」

ジュードとローエンは俺が何でウィンガルの部族のロンダウ語を話せるのかが不思議でならないみたいだ。

（マクスウェル、捕えるつもりだったが……殺した方が早そうだ）

（ほぉ？この俺を前にミラを殺す……ねえ。舐めてんじゃねえぞウィンガル。人の女を狙うなら容赦しねえぞ）

（お前、マクスウェルと恋仲なのか？面白い）

殺気立つ俺とウィンガル。

（殺す！）

（微塵に斬り刻んでやる！）

ここに、四象刃（フォーヴ）の４人の内、翼のウィンガルと爪のプレザとの戦闘を開始する。

「ふふっスプラッシュ！」

プレザの水の精霊術が俺の頭上に出現する。

「っと！あぶねえ。相変わらずの詠唱スピードだな」

「あなたも相変わらず早いわね……でも」

（俺がいるからな！）

ウィンガルが俺を斬りに来る。

「ちぃ！」

どうやら、先に厄介な俺を倒すと言う魂胆か。だが、

「ファイアーボール！」

「ブラックガイド！」

「フリーズランサー！」

ミラの火が、エリーゼの闇が、ローエンの氷の精霊術がプレザとウィンガルを襲う。

「くっ！」

（ちっ！）

それを避ける2人。だが、これは好都合！

俺はミラと共鳴（リンク）アーツをしようとするが、

（させるか！鳳凰天駆！）

避ける途中から空中に飛んで俺に向かって炎を纏って突っ込んでくるウィンガル。

「ちぃ！」

ガキィィィン！

俺はそれを剣で受けとめる。

（終わりにしてやる！）

その瞬間、俺はウィンガルに斬られ、雷でできた鎖に拘束された。

「しまっ！」

（ライトニングノヴァ！！）

「ぐはっ！」

攻撃が当たる瞬間に、雷のマナを纏ったおかげでダメージを軽減できた。

『レオン！』

皆が俺を見る。俺は大丈夫だと頷く。

「終わり？それはな……こっちのセリフだ！くらえ、バインド！」

カシュン！カシュン！

「なっ！？」

（これは！？）

俺はかつて、プレザがミラにしたようなバインド強化バージョンで2人を拘束した。

「ミラ、行くぞ！」

「あ、ああ！」

俺の傷を見て戸惑うミラだったが、俺の掛け声で正気に戻った。

「魔神剣の応用、いけるか！？」

「任せておけ、やってみせる！」

「「破邪十字星！！」」

俺とミラの剣を重ねるようにプレザとウィンガルに向けて振りかざすと十字の巨大な斬撃を放つ。

「あぁっ！」

（己ぇ！）

十字の巨大な斬撃に吹き飛ばされる2人にさらに、追い打ちを掛ける！

「剣よ、輝け！！」

「その輝きをもって、敵を滅っせよ！！」

俺とミラは一瞬で2人の背後に回って斬り上げると共に同時に空を跳び、目に見えない速さで敵を切り裂いく。

「「翔旺神影斬！！」」

最後は真上から二人同時に雷と一緒に剣を振り下ろす。

「ぐあああああ！」

（ぐおおおおおお！）

ドサ

空中から落とされた2人は地面に倒れた。

「はぁはぁ……」

ポタ……ポタ……

やべえ、ウィンガルのライトニングノヴァを受けたせいで血が……
回復はできるが失った血はすぐには……いや、確かあれがあったな。

俺が考えていると倒れていたプレザとウィンガルは何とかといった
感じで立ち上がる。

「やってくれたな……」

剣を構えるミラ。

「まだ……相手をしてくれるのかしら？」

「ミラ……」

俺はミラの前に手を出す。

「レオン、邪魔をするな」

「違う……この2人はただの時間稼ぎだ」

「なんだと？」

城の方から数名の兵士たちが出てくる。

「潮時というわけか」

俺達は逃げることにしてこの場から離れようと走り出す。

「また逃げるのか、イルベルト殿？」

逃げようとしているとウィンガルに言われ、立ち止まるローエン。

「あなたが逃げたから、ナハティガル王は……！」

「……っ」

返す言葉のないローエンは何も言わず、走っていった。

俺もその後を追って走って言った。

第３８話　ＶＳ翼のウィンガル&爪のプレザ（後書き）

はい、今回はこんなものでしょうか。さて、レオンは怪我をしてしまいましたね。まあ、そこまでダメージはありませんが……レオンがいっていた?あれ〃とは何なのか?それは次回にわかります。ヒントは忍者漫画に出てくる血を増やす丸薬ですｗ
次回もお楽しみに！

第３９話　ワイバーンに乗ってフライト～～（前書き）

最初にいっておこう……レオンがキレます。キレた相手を一撃で倒します。

第３９話　ワイバーンに乗ってフライト～～

～レオンＳＩＤＥ～

カン・バルクを脱出した俺達はシャン・ドゥを目指していた。

俺は血を流し過ぎたので昔作った増血丸を口に入れて噛み砕く。

パクッ……ガリガリ……

「ふぅ……」

「レオン、大丈夫か？」

ミラが俺を心配して身を寄せてくる。

「ああ。大丈夫だ、心配するなって」

俺はミラの頭に手を置き、撫でる。

「ん…／／／少し、今の関係で頭を撫でられると恥ずかしいな／／／」

「そうか？」

ミラ……段々と人の女性らしさが身について来ているのか？まあ、それはそれで嬉しいけどな／／／

「さっさと、シャン・ドゥに向かおう」

俺達は急いでシャン・ドゥへ向かっていった。

シャン・ドゥに到着すると、すぐ目の前にユルゲンスが屋台を見ていた。

「私たちのことで城から報せが届いているかもしれませんね」

ローエンがそういっていると、ユルゲンスが俺たちに気づいて近づいてくる。

緊張が走る。

「謁見はどうだった？」

ユルゲンスが俺たちに謁見のことを聞いてきた。俺とミラは顔を見合い、頷く。

「すまないユルゲンス。話はまたの機会にしたい。すぐ発てるか？」

「まあ、できないことはないが……何か急ぐ理由でもできたのか？」

「うん、ぼくたちガイアスに……」

正直に話そうとするティポの口をふさぐジュード。

「？」

不思議がるユルゲンス。

そこへ、

「急ぐ必要はなくなったよ」

「アルヴィン！」

アルヴィンの登場に驚くジュード。

「やつら、今頃せっせと山狩りでもしてるからな」

そんなアルヴィンに俺とミラが近づいていう。

「なるほど……プレザ達に偽情報を流したか」

「手土産のつもりか？」

「土産も何も、仲間だろ、俺たち」

「「……」」

俺とミラはアルヴィンが言ったことに黙る。

「なんだよ、信じられないって？お前たちが信じてくれているって知ってる、そう言っただろ」

アルヴィンは俺たちの横を通り、ジュードの所へ。

「まだ俺のことを信じてくれるよな？」

いつものように腕を肩まで回すアルヴィン。

「う、うん……」

……ジュード。お前、さっき、アルヴィン何か！って言ってただろ。意思が弱すぎだろ。

「サンキュな、ジュード」

アルヴィンを見ながら腕を組むレイア。

「お、おかえり……帰ってきてくれて、うれしい……です」

警戒しながら下がるエリーゼ。さすがに、ここまで裏切られればこういう反応だよな。

「くくく、なんだそれ」

笑いながら腕を組むアルヴィン。

「とにかく、しばらく時間は稼げそうですね」

「ああ、いい意味でいいのか悪い意味でいいのか……わかったものではないがな」

俺はアルヴィンの態度に呆れてものも言えなくなってきた。ことわざに三度目の正直があるが……こいつのにはそのことわざは当てはまらないと見える。

「事情は聞かない方がよさそうだな。まったく、君たちと関わって

いると飽きないよ」

ユルゲンスは怒ったり不審に思わず、笑っていた。

「私はワイバーンの檻の前にいるので、飛ぶつもりになったら、来てくれ」

そういい、去っていくユルゲンスであった。

「いよいよ、か……」

「ああ、長かったようで短かったな」

イル・ファンに戻るだけだったはずが、ここまで時間を喰ってしまうとは……まあ、俺が足を怪我したのも原因だが。

俺たちは一旦、ワイバーンに乗りに行く前に少し宿で休むことにな

り、宿に向かっていると、

「待って、アルヴィン」

ジュードが先を歩くアルヴィンを呼び止める。

「まーだ、納得いってないってか。他の連中もだいたい同じってとこかな。しゃーないか」

頭を掻きながらめんどくさそうにするアルヴィン。

「四人で初めてニ・アケリアに行った時だよ。社から俺一人でどこかに行ったろ」

「確か、私とレオンが社を出ると、ジュード一人でいた時だな」

「そう、その時だよ。ウィンガルと会ったのは」

アルヴィンの話しを聞いたローエンは1つの考えが頭に浮かんだのかそれを言う。

「密約を交わしていたのでは？いざとなればミラさんを引き渡すと」

それを聞いたレイアはアルヴィンに向かって文句を言った。

「アルヴィン君ひどい！やっぱミラやレオン、ジュードを裏切ったんだ！」

「待てよ。確かにあの時は色々考えてたけど、今回は逆にそれを利用できると思ったんだ。ワイバーンの許可が下りたのだって、事前に話を通してたからなんだぜ」

「え、それって、ガイアスの前で裏切ったのは……」

「そう。あの場で裏切ったフリしてなきゃ、ワイバーンも使えなかったってこと。だから、わざわざシャン・ドゥとは真逆に逃げたってウソついたんだ。そもそも、ローエン。レオンがいるのにミラのことを引き渡すことができるはずないでしょ」

「むぅ、確かに……」

……嘘は言っていないが、本当のことも言っていない。ホント、アルヴィンは読めない男だねぇ。

「僕はアルヴィンを信じたい……けど、まだ……」

「そうだったな。あのプレザという女だ。キジル海瀑の時といい、知った仲のようだったぞ」

プレザの事を聞かれて、困っているように見えるアルヴィン。

「何が聞きたい？」

「あのプレザって人、どういう人なの？」

直球に聞くジュードに言葉がつまるアルヴィン。

「……」

「……アルヴィン！」

黙り込むアルヴィンに大声で聞くジュード。

「なんだお前……泣いて……」

「泣いてなんかない！ただ、僕は……僕は……」

泣きだしかけているジュードを見て、アルヴィンは話し始める。

「出会いは俺がラ・シュガルの情報機関に雇われてた時だよ。あいつはア・ジュールの工作員として、イル・ファンに潜入中だったけどな」

「それで？」

……いや、ここまで聞けば2人の関係がどうだったかわかると思うが……。

「その後、個人的になんつーのよ、色々あったのは聞かないでくれよ」

……うん。そのことは俺だけ知っているんだよね。3年前にプレザの愚痴を聞いた時に。男に裏切られたって。

「納得はした。けど、まだ、信用しきったわけじゃないからねっ」

「くくく、ジュード君はかわいいね」

「な、なんだよそれ！僕は怒ってるんだよ！」

「わかった、わかった」

……何か一瞬、変な電波を感じたような。まあ、気にしないでおこう。

「ふむ。アルヴィン、最後にひとつだけいいか？」

「なんなりと」

「お前が私たちに肩入れする理由を教えて欲しい。メリットがあるのか？」

「今さら聞く？優等生やみんなが大好きだからに決まってるでしょーよ！」

ガクン！

アルヴィンの返答に呆れかえる俺たち。

「ウソつきやがってー！」

「なんだそれ、ちょっとヒデーじゃねえか！」

俺、傷ついたぜ！って言っているように聞こえたぜ。ってか、背筋がうすら寒く感じたぞ（ブルブル）

宿で少し休んだ俺たち腹溜めてワイバーンに乗るためにユルゲンスのいるワイバーンの檻のところに来ていた。

「イル・ファンへ向けて出発するのか？」

「頼む」

「さすがにラ・シュガル王都に降りるわけにはいかないぞ。近くの街道にでも降りることになると思う」

そして、俺たちはワイバーンを借りた。

ちなみになるペアは……俺・ミラペア、ジュード・レイアペア、アルヴィン・エリーゼペア、ローエンと合計４組に４頭のワイバーンを借りることができた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

「ヒャッハアアアア！」

レオンは久しぶりのワイバーンに心なしかあらぶっている。ミラはレオンの腰に腕をまわしてしがみついている。

「うわあああああ！！！」

「いやあー！落ちる！落ちるー！」

ジュードとレイアは悲鳴を上げながらも、ワイバーンにつなげられている縄をしっかり握っている。

「くっ……なかなか難しい……！レオンさんが羨ましいです！」

レオン一人は慣れているんでなんなくワイバーンで飛行している。

「くっ！　まっすぐ飛んでほしいですー！」

「ちゃんと操縦しろ――――！」

「うるせえ！だまってろ！」

アルヴィンも余裕がないのか、エリーゼとティポに黙るように文句を言う。

「うわ、うわあああああああ！」

物凄い飛行を繰り返すワイバーンにジュードは悲鳴を上げていく。

「ジュード、しっかり操縦してえええええ！！！」

「無理言わないでよお！！！！」

ジュード・レイアペアのワイバーンが一番、あらぶっている。

雲を抜け、雲の上に出るとワイバーンも大人しくなっていった。

「ヒュウゥ～！久しぶりのフライトだったぜ！」

「何故そんなにも元気なんだ？」

ミラは異様な元気のレオンにそう聞いた。

「こういう、スリルのあるフライトはいいんだよ♪それに……背中に当たる気持ちのいい感触も楽しんだしな♪」

「……？……／／／！？」

ミラは始めなにを言われたのかがわからなかったが、自分の胸をレオンの背中に押し付けていたことを思い出して顔を紅くする。

「バ、バカもの！」

そっぽを向くミラ。

そうしていると次々と皆が乗るワイバーンが顔を見せる。

「うわー」

「キレイー」

「わあ……！」

「ピカピカだー♪」

雲の上には青々とした美しい景色が広がっていた。

「いい景色……！」

「……！」

景色を楽しんでいたレオンとアルヴィンは不穏な気配に気付き、そちらを見る。すると、

巨大な空を飛ぶ魔物が出現した。

「な、なんだコイツは！？」

「でか過ぎ――！」

一番近くで見ていたアルヴィンとティポが驚き、声を上げている。

【ギィィガアアアアアア！！！】

「くぅっ！」

いきなり噛みついてきた魔物の攻撃を避けるアルヴィン・エリーゼペアの乗るワイバーン。

「このままじゃ落とされちゃう！」

「全員！下に降りるぞ！！」

レオンは素早く指示を出し、ジュード達はそれに従い、ワイバーンを下に降ろしていく。

その魔物もレオン達を追っていく。

しかも追ってきながら火炎弾を放ってきた。

しかも、

ドカン！

その一発がレオン・ミラの乗るワイバーンに直撃した。

「レオン！！！」

「ミラさん！！」

落ちていくレオン・ミラの乗るワイバーンを追うジュード達。

そして、その落ちていくワイバーンは……ある街に墜落して行った。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

ドン！

「つ……ぅ……」

「痛ってぇ～あの魔物！！俺の……俺の楽しいフライト時間を！！」

「レオン、ミラ！大丈夫？！」

いち早くワイバーンから降りたジュードが俺たちに怪我がないかを見る。

「ジュード、敵に背を向けるな！」

「えっ！？」

ジュードが振りかえると、魔物……プテラブロンクがジュードに向かって突っ込んでいく。

シュタ！

そこへ、ジュードの前にアルヴィンが降りて来て、庇った。

「アルヴィン……」

驚くジュードにアルヴィンが言った。

「今はよそ見してる暇ないぜ！」

「ぶっ殺す！」

俺は殺気だっているためか、プテラブロンクは俺を見て震えている。

「エリーゼ、いくぜえ！」

「は、はい！」

エリーゼも殺気だっている俺に驚きながらも返事をする。

「今こそ裁きの時です」

「罪を数え、虚無と消えろ！！」

「「エクセキューション！！」」

プテラブロンクの真下とその後方上空から噴出する闇のエネルギーでプテラブロンクを攻撃し、その命を狩り取った。

「貴様の罪を数えて消えろ！」

「レオン……恐いです」

「レオン君、ちょーこわい！」

一緒に技を使ったエリーゼとティポにも恐がられてしまったぜ。

俺がそう言い終えると、

「皆さん、落ち着いてください。女性と子どもは家の中に入って出てきてはいけませんよ」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その声のする方向を見ると、

「男性の皆さんは協力して私と戦ってください」

クレインが剣を持っていた。

「クレイン！」

「旦那さま！」

俺とローエンが声を上げると、クレインも俺たちに気づいたのか、

「レオン！？それにローエン！」

驚くクレイン。そんな中、

ドサ

後ろから音がし、そちらを見ると、アルヴィンが膝をついていた。

どうやら、先ほど、ジュードを庇った時に怪我をしたんだな。

「彼を私の屋敷に運んで治療を！それと、先生を呼んできてください」

クレインは的確な指示を飛ばし、皆はそれぞれの仕事についていった。

その後、馬の調教師であったがその先生がワイバーンの様子を見て、1日休めば回復すると言われ、その日、俺たちはクレインの家で休

ませてもらうことになった。

第３９話　ワイバーンに乗ってフライト～～（後書き）

はい、ここまでですね。レオンの意外な楽しみがワイバーンに乗ってのフライトだったとはｗ
まあ、そう言う設定を作ったのは作者自身ですがねｗ
次回もお楽しみに！

第４０話　イル・ファンへ（前書き）

今回は短いです。次話の都合上。

第４０話　イル・ファンへ

～レオンＳＩＤＥ～

俺たちはワイバーンの治療が一日かかると言われたので十分に休むことになり、クレインの屋敷で休んでいる。

ミラは皆の様子を見てくると言って屋敷を出ている。俺は屋敷の屋根の上に登って空を見上げている。

「空はこんなにも綺麗なのに……人の心は欲に満ち、無関係な者を殺すんだな……この世界に転生してからの１０年間……いやってほど、見てきたけど、その結果が今の仲間が集まったことになるんだよな」

こんなにも大きな出来事がなければ今の仲間たちは揃わなかっただろうな。ミラとは、まあ、ずっと一緒だけど。

カラン

俺は空を見上げながら寝っ転がる。

「ここは平和だな……戦いなんて起こさず、平和に暮らそうとしている人達のことがよくわかるよ」

ここの住民たちは本当に笑顔で暮らしているからな。

「フフ……」

この街は活気であふれかえっているので俺まで笑顔になってくるよ。

「何がおかしいんだ？」

すると、

「お、ミラか」

皆と話してきたミラが屋根の上に登ってきた。

「ここに帰ってくるときにレオンが見えてな」

「まあ、ここにいれば門から見えるよな」

屋根の上だし。

「ここ、座るぞ」

「ああ」

ミラは俺の隣に座る。

そして、自然とくっ付きあう。

「もうすぐ……イル・ファンだな」

「ああ。ようやく、私の使命を行うことができるよ」

「が、無理はするなよ。ミラ、お前が傷つけば俺は傷つく」

ミラは一瞬、きょとんっとするが、笑いながら俺に言う、

「フフフ……レオン、それは私のセリフだぞ？もし、レオンが傷ついて死んでもしたら……」

最初は笑っていたミラだが、俺が死んだら……と考えてしまい、暗くなってしまった。

「全く……ミラ」

「なんだ……レ「ん…」ん!?」

俺の方を向いたミラにキスをする。

「ん…ちゅちゅちゅ……ちゅぷ……れろぉ」

ぬるっと唇より熱く柔らかい感触がミラの唇をなぞる。

ミラが口を軽く開けると、ぬるりと、俺の舌がミラの口内に侵入してくる。

「レオン……れろ…れろ…ちゅぷちゅっ…ちゅぱっ…ちゅっちゅっ」

ミラも俺とのキスでスイッチが入ったのかミラからも俺の口内に侵入してくる。

数分間、俺たちはキスをし続けた。

「／／／

「そ、そうだな／／／」

俺たちは屋根から降りて、各部屋に向かい、眠りについた。

次の日

屋敷でばったりミラと会い、他の皆は既に広場へ向かったとドロッセルが言っていた。俺とミラはどうやら寝坊したらしい。よっぽど疲れていたらしいからギリギリまで寝かせていたと聞いた。

広場に行くとアルヴィン以外のメンバーが揃っていた。

「アルヴィンはいないのか？」

俺はジュードにアルヴィン事を聞くと、

「うん、まだ来てないよ」

やはりまだ来ていないようだ。

「また……ウソつく……準備ですよ」

「そんなはずないよ、エリーゼ」

ジュードはまだ、アルヴィンのことを信じている。まあ、助けてもらったし、アルヴィンの性格を考えるとな……。

「他の者はアルヴィンをどう思う？この先の戦いを共にしてもいいのか？」

ミラは皆を見渡しながら言った。

「お母さんのことで頑張ってるんだから、わたしは応援してあげた

いな」

「私は彼自身このままでいるのか、とても心配しています」

「ぷい……」

「でも、ぼくを悪いヤツから守ってくれたのはアルヴィン君なんだよねー」

「ミラとレオンはどう思っているの？」

各々が自分のアルヴィンに考えを言いあう。

そんな中、ジュードは俺とミラがどう思っているのかを聞いてくる。

「真意が測れない以上、油断はできんが……戦いにおいては、こと信頼している」

「俺の場合は、あいつは本音とウソの両方を言っているからな。戦闘以外では信用以上信頼以内って感じか？」

「か？って、僕に聞かないでよ」

「わりぃわりぃ」

質問を疑問文で返したのをジュードに怒られてしまったぜ。

「本人のいないところで悪口なんて、イケナイ子のすることだぞ、エリーゼ」

そこへ現れるアルヴィン。

「知りません……」

お手上げって風に手を広げるアルヴィンはジュードとレイアを見ていう。

「俺の味方は、お前らだけだよ」

そんなアルヴィンに呆れるジュードとレイア。

「これで全員そろったな。では……」

「待って……ください！」

ミラの話を遮ってエリーゼはローエンを見る。

「ローエン君、友達とケンカするのー？」

心配そうな表情で見るエリーゼとティポに笑いかけてローエンは言う、

「ナハティガルがこうなってしまったのには、私にも責任があります。私は私の覚悟をもって戦います」

決意しているローエン。

「ローエン……」

「がんばろうね、ローエン！わたしもがんばるから！」

「ぼくも応援してるよー！」

「戦いの時になったら力を貸すぜ？」

俺たちはローエンを励ますように言った。

「みなさん、ありがとうございます」

「骨は拾ってやるよ、じいさん」

「その時は、よろしくお願いします」

驚くアルヴィン。軽い気持ちで言ったつもりがこんな切り返しを受けたのだ。驚かない方がおかしいがな。

「マジにとるなよ」

「覚悟は決まったね。あとは……」

「うむ、準備を整えて出発するのみ」

「っていっても、すでに準備は終わっているし……」

準備もあらかじめ終えているので、行くことになる。

「世話になったな、クレイン、ドロッセル」

「皆さん、お気をつけて」

「皆、気をつけていってくださいね」

クレインとドロッセルに見送られ、俺たちはワイバーンに乗る。

「さあ、行くぞ」

「ひゃっは！再びフライト時間だぜぇ！」

順番に飛び立っていく俺たち。

目的地は……イル・ファン近くにあるバルナウル街道だ！

第４０話　イル・ファンへ（後書き）

次回、イル・ファン！
次回もお楽しみに！

第４１話　ＶＳ針のアグリア（前書き）

皆さんに言っておきます……ジュードがキレます。

第４１話　ＶＳ針のアグリア

～レオンＳＩＤＥ～

バサ……バサ……シュタ！

俺たちはカラハ・シャールから一気にイル・ファンの近くにあるバルナウル街道に到着した。

ワイバーンから降りた俺たちはこの先にあるイル・ファンがあるかを確かめていた。

「イル・ファンはこの道を行けばいいんだな？」

ラ・シュガルの地理に一番詳しいローエンに聞いたミラ。そんなミラにローエンは静かに頷く。

「よし、行くぞ」

そのまま、イル・ファンへの道を歩いて行った。

歩き始めて数分が経過し、空の景色が段々と暗くなっていく。夜域だ。

「夜域に入ったな。ってことはイル・ファンは近いな」

辺りには照らすための木の形をした街灯が置いてある。この街灯のある方向に進んでいけばイル・ファンというわけか。わかりやすいな。

「お、見えてきたな」

「うん。あそこは……中央広場かな」

イル・ファンにいたジュードはここから見える場所がイル・ファンの中央広場だと言う。

「行こう」

ミラを先頭にイル・ファンへ入っていく。

イル・ファン二は言って最初に目にしたのは、

走り回る兵士たち・泣いている子供・指示を飛ばす指揮官・学者ｅｃｔ……

そんな慌しいイル・ファンを見たジュードは驚いていた。

「どうなっているの？？」

「ねえ、あっち！煙が上がってる！」

レイアが指差す方向を見ると確かに煙が上がっていた。

「おいおい！」

「あっちは……」

「研究所だよ！」

その方向にある建築物のことを知っている俺たちは驚いている。

俺とミラは険しい表情をし、皆に言う。

「クルスニクの槍は研究所だ。行こう！」

「ああ！嫌な予感がするしな！！」

俺たちは研究所のある方へ走って移動していく。

研究所のある地区に来ると、数名の兵士と研究員達が倒れていた。

「大丈夫ですか！」

ジュードは近くで倒れていた兵士のヘルメットを取ると驚いていた。

「エデさん……？」

「先生……ジュード先生なのか？」

目を開けたエデはジュードの声を聞いてジュードなのかを確かめる。

にしても、この人数……俺が回復させた方が早いか。

「全員、その場から動くなよ。リザレクション！」

俺を中心に回復陣が展開され、傷ついていた兵士や研究員を癒していく。

「ジュード先生、聞いてくれ。研究員の中にア・ジュールのスパイが紛れ込んでいた。逮捕しようとしたら……そいつらが実験室を爆

発させて……」

ふぅ……回復は終わったが、失った血液を元に戻すわけじゃないしな。

「ケガ人は病院へ搬送する。こちらへ」

一人の男性がそういうと、丁度よかったので俺はその男性に近づいて増血丸の入った袋を渡した。

「大体の傷は治した。後は失った血を補充しないといけないから病院へ搬送させたら一人に一個ずつこの増血丸を渡してくれ」

「？増血丸？？わからないが、名前の通りなら血を増やすんだな？わかった！」

ケガ人たちは傷も治ったが血が足らないのかフラフラしている。

そして、そのまま病院へと向かった。

それを見届けた俺たちは話をしている。

「ミラ。ガイアスが動き出したのかもしれない」

「ああ。これは急いだ方がいいな」

全員頷き、研究所の中へ入っていく。

研究所に入った俺たちは、前にクルスニクの槍のあった部屋の前に立っている。

だが、扉は固く閉ざされていた。

「この中に入るのは、ちとキツイぜ」

ぼやくアルヴィンを余所に、ミラが扉に近づき、剣を抜いて振るった！

カァ――ン！カァ――ン！カァ――ン！カァ――ン！

何度も何度も扉をたたくミラ。だが、扉は壊れない。

「すぐそこにクルスニクの槍がありながら……！」

悔しがるミラ。俺はそんなミラの肩に手を置く。

「下がってろ……」

俺はミラに下がるように言い、

「スゥ～～～～ハァ～～～～」

俺はマナを高めていく。

「まずはこいつだ！ファイアストーム！」

炎の嵐を扉に放つ。

「続いてブリザード！」

今度は氷の嵐。

「ファイアストーム！ブリザード！ファイアストーム！ブリザード！」

何度も同じことを繰り返す。

「一体何やってんの？」

「さ、さあ？」

俺の行動を不思議がるアルヴィンとレイア。

そんな中、ジュードとローエンは俺が何をするのかがわかってきたみたいだ。

「そうか！どんなに堅く・強固な壁や扉も！」

「急激に暖める・冷やし・暖める・冷やすを繰り返していけば！」

「その個所は脆くなるということか！」

ミラも俺が何をするのかがわかったようだな。

それから何度か繰り返すと、

ピキッ！ピキキキ！

扉にヒビが入った。

「これで終わりだ！空破爆炎弾！」

炎を体に纏ってヒビの入っている個所に向かって突撃する。

ドシャ――――ン！

扉を破った。

「おお！！」

「レオン君ーすごーい！」

驚く皆を余所に、俺とミラは部屋を見渡すが……

「クルスニクの槍が……」

「なくなっている！？（そういえば、移動しているんだっけ？忘れてたわ）」

驚く俺はそう言えば、ここから別の場所に移動させたのを思い出す。

「くぅ！一体どうすれば」

悩むミラ。そこへ、

「槍が無くなった理由がわかるかもしれないし、どこかの部屋で何があったか確かめてみようよ！」

ジュードの提案に俺とミラは頷く。

「なら、俺とミラがジュードと初めて出会った部屋に行ってみよう」

「そうか、確かあそこには……」

「そうだ。何かを動かす端末があったしな」

「じゃあ、そこを目指そう」

俺たちの次の目的地は俺とミラが初めてジュードと出会った研究室だ。

ガタンッ！

俺たちは研究室のすぐ近くに来ると中から物音がした。

「なんだろう？」

「入ってみればわかる」

そういい、俺は部屋の中へ入っていく。

中には……一人の老婆が倒れていた。

「大丈夫か？」

俺たちはその老婆を近くで見ると、

「わ、わたしはもう何も……許してください……」

「このバアさん……」

「村長さん……！」

「しっかりしてよー！」

「ハ・ミルの村長か」

ハ・ミルの村長の婆さんだった。

「ラ・シュガル軍に侵攻されたと言っていたな」

「ああ。おそらくクルスニクの槍に使うマナを吸収されていたんだろうな」

「ああ！みなが……凍りづけにされる……やめてくだされ――っ！」

俺たちの声が聞こえていないのか一人でに話をする村長。

「おい、しっかりしろ」

「あ……ぁ……ぁ……」

そのまま村長は消滅した。

「村長さん、村長さん！」

「ハウス教授の時と一緒だ……」

エリーゼはあまりのショックで俺とミラに抱きつく。俺とミラは静かにエリーゼの頭を撫でる。

「村の人たちが凍りづけにされるとは一体……ガイアスのところで聞いた大精霊の力でしょうか？」

ローエンの言うことに腕を組みながらアルヴィンは言う。

「あの状態での言葉だから、どこまでアテになるか」

「許せることではないな」

ミラも静かに怒りを見せる。

「さて、今は感傷にしたっている暇はないな。クルスニクの槍を止

めなければこんなことが第二・第三と続くぞ。あそこにある端末で調べよう」

俺は指差すほうには端末があった。

梯子を登って端末の電源を入れた俺たちはクルスニクの槍がどこに行ったのかを調べている。

「映像を出すぞ」

俺が端末を操作し、クルスニクの槍が無くなったのはいつかを調べる。

操作していると、

「ん？こいつは……」

「どうしたレオン？」

「いや、情報を捜していたらこんなのが出てきたぞ。見ろよ」

俺はミラに今映している記録を見せる。

「この女、確か前にここで……」

「ああ。俺とミラにボコボコにされた赤服の女だ。待てよ？ってことはエデが言っていたスパイはこいつか」

俺は頭の中ら原作知識を絞り出す。

「こいつ、おそらくだがクルスニクの槍がないから今頃は捜しているんじゃないか？そして、そいつを俺たちが探し出して……情報をもらえば」

「槍の在りかがわかる……そういうことか」

「その通り」

「じゃあ、皆で探そうよ！まだ、記録を見る限りじゃそんなに時間

もたっていないし！」

ジュードもアグリアを捜すことに賛成して、皆で一度研究所の外を出て捜すことになった。

研究所の外に出た俺たちは今、中央広場に来ていた。

「さて、どこにいるのかね」

俺はあたりを見渡す。すると、

「あ――――っ、見つけた」

俺はサンサーラ商会前の左側ロープのところにいるのを発見した。

「行くぞ」

俺たちは急いでそこへ移動する。

ロープのところに着くと、

「あんたたちは……！」

アグリアも気付いたのか俺とミラを見る。

「アハハハハ！ようやくあんたたちを殺れる日が来た！！」

「恨みたっぷりのところを悪いが、聞かせてもらいたいことがある」

「アハハハハ！バーカ。答えるわけないだろ！」

ミラの質問に笑いながら答えるアグリア。はっきり行って不愉快なんだが。

「あなた……どこかで……ひょっとして……トラヴィス家のナディ

ア様ではありませんか？」

「な……！」

ローエンの言った……自分の本名を言われたアグリアは驚き、声を上げる。

「やはりそうでしたか。六家（りくけ）のお嬢様がア・ジュールのスパイとは……一体なぜ」

「あたしはトラヴィスなんて関係ない。あたしは四象刃（フォーヴ）、無影のアグリアだ！」

アグリアは自ら自身の名を名乗り、二つ名を名乗る。

「四象刃（フォーヴ）って！」

「つまり、ガイアスの命令で動いているのか」

「だったら、何だよ」

「お前はクルスニクの槍を破壊しようとしていたのだな」

「あたりだよ、アハ～！」

「私も同じだ。つまり私たちは敵では……「待てミラ」……何だレオン？」

ミラの言葉を俺が遮る。

「こいつはどう見ても一緒に破壊しようとかそんなことを言っても意味はない奴だ。それにこいつがバカなことをしなかったら四大達はクルスニクの槍に捕らわれることはなかった」

「だぁれがバカだ！！」

「てめえだドアホ。お前が不用意にクルスニクの槍を起動させるからだろうが。そんなことをしなかったらミラがクルスニクの槍を破壊できていたと言うのに……」

「だ、黙れ！あたしには関係ないね！」

アグリアの態度に俺は呆れている。

「やれやれ……面倒だ。力ずくで話をさせてもらおう。なぁ～に、槍の在りかを知っていれば……命だけは助けてやるよ」

ニヤリとほほ笑む俺。

「はん！やってみろ！」

アグリアは武器を構える。

「待って！お願いよ。あなたもあんな危ないもの、壊したいって思うでしょう」

レイアを見てアグリアは言う。

「くせぇな……」

驚くレイア。

「アハハハハ！決めた～！槍を壊す前にラ・シュガルに向けて一発ぶっぱなしてやるよ。アハハハハ！」

狂ったような笑い声を上げるアグリアを見て、信じられないものを見るようにアグリアを見るレイア。

「何言ってるの、あなた。みんな一生懸命やろうとしているのに、どうして邪魔しようとするの！」

怒るレイアにアグリアは笑いながら言う。

「アハハハハ！やっぱりくせぇよ、お前！」

「何？失礼な人！　お前、がんばれば世の中どうにかなると思ってるだろ？アハハハハ！お前からはそんな悪臭がぷんぷんすんだよ」

「がんばればいいことじゃない！」

「うっせー、ブス！しゃべるんじゃねーよ！」

ブチッ

「ん？今、何かがキレるような音……が？！」

俺は音がした方を見ると固まる。

「レオン？どうし……た？」

ミラも固まる。

他の皆もどうしたんだろうと俺とミラの見ている方向……いや、人物を見る。

その人物とは、

「ねえ、君さ」

「ああ～～ん？」

アグリアに近づくジュードを見る。

「今、レイアになんて言ったのかな？」

「ああ？ああ、あの時のガキか。はっ！悪臭のするブスって言ったんだよ」

アグリアは高らかに言う。

「へぇ～じゃあ、僕も言わせてもらうけど、僕から見て君の方が？ブス〝だよ」

「んだと！」

「だって、君みたいな人が六家（りくけ）のお嬢様のわけないよね？だって、汚い喋り方・くねくねした変な動き・作法のなっていない・どう見ても僕たちと同い年ぐらいなのに、レイアと違って本当の？子ども〝みたいだからさ。いや、別に君のことは何とも思ってないよ？？子ども〝で？ブス〝な？ガキ〝に言っているんだから」

……汗。ジュードが黒い。物凄く黒い。遠まわしにアグリアのことを言っているな。

「み、皆、下がろう（汗）」

「そ、そうだな（汗）」

「さ、賛成だぜ（汗）」

「こ、怖いです（ブルブル）」

「こ、こわーいよー！」

「ろ、老人には堪えますね（汗）」

ジュードとレイアを除く6人は2人から距離を取る。

「レイア、行くよ！あんな？子ども〃で？ブス〃な？ガキ〃に礼儀を教えてあげようよ！」

「そ、そうだね（汗）行こうか！」

「アハハハ……アハハハハハハハハ！……ぶっ殺す！」

ジュード・レイアＶＳアグリアの戦闘が始まった。尚、アグリアの部下らしき2人は俺が拘束した。

「炎舞陣！」

アグリアは仕込み杖を変形させ頭上で回転させることで周辺狭範囲に炎の竜巻を作ってジュードとレイアの攻撃を防ごうとするが、今の鬼神になりかけているジュードには無意味だな。

「輪舞旋風！」

回し蹴りで回転を止めた。

「んだとぉ！？」

「三散華！連牙弾！転泡ぉ！！」

連続で殴って殴って転ばせる。……いつもよりも技を出すスピードが増しているな。

「ジュ、ジュードさん……気のせいかいつもよりも技のキレがありませんか？」

「ああ。おそらくレイアのことをバカにされたことでジュードの潜在能力を引き出しているんだろうな」

俺とローエンは今のジュードの動きを見て、感想を述べていた。

「私も行くよ！！瞬迅爪！三散華！昇掃撃！三散華ぁぁ！！」

突いて打ちあげ、棍による三連続攻撃を繰り返すレイアもいつも以上にキレがある。

「ぐおぉ！？ぐはぁ！？」

完全にリンチにあっているアグリア。技を出す暇も防御する暇もない。

「これで」

「吹き飛んじゃえ！」

「「断空剣！！」」

2人の息のあった攻撃で竜巻を発生させ、アグリアを吹き飛ばし、
そして、

「ジュード！」

「任せて、レイア！」

ジュードは殺劇舞荒拳を繰り出し、アグリアを吹き飛ばしたところをレイアが活伸棍を回転させて敵に棍の連撃を当てた後にアグリアを上に吹き飛ばし、それと同時にレイアは活伸棍・神楽の構えを取り、真下ではジュードが拳に力を込めながら待機している。

「「これが二人の！殺劇舞荒拳・神楽！！」」

そして、空中にいるアグリアに上と下から挟み込むように活伸棍と拳を同時に叩き込みんだ！

「これが僕とレイアの」

「愛の力だね！／／／」

「う、うん……そうだね／／／／」

さっきまでの殺気が嘘のような雰囲気を作り出す2人。

「ぐはぁ！」

階段から転がるアグリア。

倒れているアグリアの頭に俺とミラは剣を構え、当てる。

「はっ……

「あいにく、剣は不得手でな。うっかり手がすべらないよう、よく考えて答えることだ」

「疲れているから手をすべらないようしないとな～死んじゃうぜ？」

「「槍はどこだ？」」

俺とミラの要求にアグリアは舌うちしながら答える。

「ちっ……！研究所の地下には秘密の通路があって、オルダ宮につながってたんだ」

「オルダ宮？」

「ナハティガルのいる……王宮のことだよ」

ミラはオルダ宮のことを知らないので俺が教えた。

「そのような通路があったとは初耳ですね」

「まだあるのか？」

「残念。もうつぶされたみたいだよ」

ミラの質問にそう、答えたアグリア。

「使えないか……」

「そうだな……」

「……」

ガサガサガサガサ！

俺とミラがアグリアから目を離すと、アグリアは黒きGのように素早く脱出した。動きがキモいと思ったがな。

「あ、逃げるな！」

「マクスウェル、ストライフ、あんたたちもいつかぐちゃぐちゃにしてやるからね！」

ビシッ！

レイアを指差してアグリアは言う。

「それと、ブス！これだけは言っておいてやる。お前がいくら努力しよーが、報われることなんてないんだよ」

「どうしてそんなことをあなたに……！」

レイアが話している最中なのにアグリアはこの場から逃げて行った。

「なんなのよ、あの子！」

ベーとするレイア。

「オルダ宮か……敵の本陣だな」

「でも、行くんだろ？ミラ」

「ああ。だが、まずは様子をうかがう」

俺たちは中央広場からオルダ宮前へ向かうこととなった。

第４１話　ＶＳ針のアグリア（後書き）

はい、今回は戦闘に参加しなかったレオンでした！
ジュードとレイア……怖かったぜ！ブルブル！
次回は遂にナハティガルとの戦闘です！
お楽しみに！

第４２話　ＶＳラ・シュガル王ナハティガル

～レオンＳＩＤＥ～

アグリアを倒した（ジュードとレイアだけでだが）俺たちはオルダ宮の門前まで来ているのだが……警備がかなり手薄になっている。

「あれ？なんだか警備が手薄じゃない？」

「できれば、このまま突破したいところだね」

「だが、敵の本拠だ。慎重に行くべきだろうな」

警備は手薄、だがここは敵の本拠地。罠もあることを考えると慎重に行動するのが当たり前になってくるのだが、

ガサ…ガサ…ガサ…ガサ…

「？」

何かの音がし、その音のする方を見るとローエンが自分の髭を何度

も手で触っていた。

「ローエン？どうしたんですか？」

「いえ……ジュードさんの言うように……やってみませんか？」

ガクッ！

ローエンの言うことにエリーゼは何でぇ？って感じに首をしたに下げる。

「おいおい。珍しくミラが慎重にって言ってんのに」

アルヴィン。珍しくは余計だぞ。……本当のことだけど。

「考えがあるのか？」

「俺たちはオルダ宮の中には詳しくない。ローエン、考えがあるなら言ってくれ」

「考えと言うほどのものではありませんが、どうでしょうか？」

「ローエンが言うなら、そうした方がいい気がする」

ローエンがどうだ？という風に俺たちに聞き、俺たちはローエンの言うことをした方がいいと思い、門へと走っていく。

「何者だ、止まれっ！」

「悪いが、止まれと言って止まるバカはいない」

シュン！ドス！

「ぐあ！」

「ぐほぉ！」

「くぴゃ！」

「ぼほぉ！」

ドサ

戦闘が面倒なので俺が４人の兵士を気絶させた。アグリアと戦おうと思ったのにジュードとレイアの２人だけで倒してたからつまんなかったしな。

「行こう」

そのまま、俺たちはオルダ宮の中へ入っていく。

「それにしても、王宮ってもっとこう……警備が厳重だと思ってたけど……何でこんなに手薄なのローエン？」

ジュードがローエンに聞く。

「すでにラ・シュガル軍はア・ジュールとの戦いに向けて動いてい

るからでしょう」

「え、でも普通戦いが迫ったら王宮の守りは厚くなるんじゃないの？」

「いや、そうとも言えないな。ここ、イル・ファンは南北を要害に守られている……しかし」

「ええ、ここは決戦都市としてはつくられていません。街の内部にまで突破されれば敗戦は濃厚です」

「だから、戦時下は兵の大半を王宮や街を離れさせて、海上の防衛とガンダラ要塞にでも配置される……だろ、ローエン？」

俺の言ったことにローエンは静かに頷き言う。

「ええ、レオンさんの言うとおりです」

中に入って進むと陣のようなものが引かれていた。

「オルダ宮の各所をつなぐ蓮華陣（ロータス）です。これを使わないと奥には進めません」

「よし、行こう！」

俺たちは蓮華陣（ロータス）に乗り、その場から離れ、別のところげと移動した。

蓮華陣（ロータス）から出ると、扉があった。だが、何やら光を発している。

その扉の魔法陣から魔物のようなものが出てきた。

「何これ、魔物なの！？」

「魔法陣が変化したように見えたが……」

「警備用に作られた特殊な術のようです」

「はっ！そんなの倒せば問題ないな！」

例え、どんなものでも意味はないな。

俺たちはそいつをすぐに片付けた。

「よーし、次行ってみよう」

そういい、俺たちは扉を開けて入っていった。

そんなことを2度ほどあったが俺たちは無事、王座の間へ到着した。

中にはナハティガルとジランドがいた。

「来たか、マクスウェル……ほぉ？小僧もよくあのケガから復活してここにこれたものだな」

ナハティガルはミラを見た後俺を見て、そう言ってきた。

「……ナハティガル」

「貴様は槍のもとで待っておれ。マクスウェル狩りのあとは、北の部族狩りといくぞ」

「かしこまりました」

ジランドはナハティガルに一礼し、この場を離れた。

「イルベルト。主である儂に、本気で逆らうのか？」

「私の主はクレイン様、ただお一人だけです」

ローエン……それをクレインが聞いたら喜ぶぜきっと。

「ふん。今なら許してやる。儂のもとに戻ってこい！」

ナハティガルはローエンの話しを聞いていなかったのか自分の元に戻ってこいという。

「あの頃、あなたの内に見た王の器は、すっかりかげりをみせてしまった」

「ふん、儂以外に、王にふさわしい者など存在はせぬ」

自国の民を傷つけている者が何を言っているんだか……。

「まだ、わかっていないようだな。人を統べる資質とは何かを」

「資質など王には無縁。王は生まれ出ずる時より王よ」

「だから、民を犠牲にしてもいいと？」

「そうだ。それが儂の権利だ。精霊も、今に支配してみせよう」

……精霊を支配……ねぇ？

「お前には無理だな」

「……何だと？」

「お前には無理だと言った。精霊を支配する？バカバカしい。ミラ

も四大達もお前みたいな小物に従うはずがない」

「……貴様、王である儂を愚弄するか！」

「愚弄も何も傲慢なことを言うやつに事実を言ったまでだ。人の身でありながら精霊を支配するだと？人も精霊もお前なんかに支配されたりするはずないだろ」

「ふん、マクスウェルとつるんでいるから力をもってつけあがっている奴に言われたくないな」

……ナハティガルは人を見る目がないのか？

「あんたは人を見る目がないな。俺の今の力がミラと一緒にいるから手にしたと……思っている当たり、笑えるな。俺のこの力はな……」

バチィ！

俺は体に雷を纏う。

「数年に及ぶ修行の旅で手にした……俺だけの物だ。ミラとこの力

は関係ないんだよ。それに……」

俺はローエンを見る。

「お前のことで悩んでいたローエンの気持ちを理解できないのか？あんたは」

「レオンさん……」

「民が悩むなど、当然！貴様らに安息と生きる権利などない！儂のために命を費やせ！それが儂の民たる者の使命だ！」

完全な独裁政治の原型だな。こいつはもう、

「「救いようがないな」」

「時間のムダだったようだな。今、すべてを終わらせてやる」

ナハティガルが武器を構えると上から何やら紫色のエネルギーがナハティガルの武器を取り巻く。

「ううぉおおおおおおおおおおお！！！！！」

上からのエネルギーが止まると、武器を見せびらかすように言う。

「クルスニクの槍が吸収したマナの部分転用よ」

そんなナハティガルを見ていたローエンは語り始める。

「私は、あなたを同じ道を歩む友だと思っていましたが……どうやら、もう引き返す道はないのですね」

武器を抜くローエン。

それに続き、皆も武器を抜いていく。

「お前みたいに考えられたら、どんだけ楽だろうな。だけどよ、正直つきあってらんねーわ。裸の王様さんよ」

「こんな人が自分たちの王様だなんて、信じられない！ぜったい、変わってもらうから！」

「レオンやミラ……みんな……友達を……守ります！」

「やるぞー！敵討ちだー！」

「あなたの野望も終わりだ！ううん、ここで終わりにしなきゃ！」

「覚悟しろ、ナハティガル！」

皆が武器を構えるのを見た俺も……武器を構えていう。

「俺からいえることは……ただ、１つ。さあ、お前の罪を数えろ！」

「見せてやる。リーゼ・マクシアを統一する力を！」

「イルベルト。全て儂の手で引導を渡してやろう！」

「できますか。あなたの歪んだ槍で」

「この槍で今まで戦ってきた！これからもだ！」

「もはや、語る余地なし！」

「そうとも！戦場に言葉などいらぬ！戦いで語れぃ！」

「そうですね！ローエン・Ｊ・イルベルト……参る！」

「ウオォォォォオ――――――――――！！！」

ナハティガルの使っている槍はかなりのリーチだ。

「猛覇槍！」

故に、避ける時には結構大変だ！

「逃がさんぞ！」

「くぅ！」

「瞬殺轟爆鐘」

俺は槍をガードするが、槍で突き刺され、地面に叩きつけられた。

「うぉ！？」

「死ね！小僧！」

ナハティガルが俺に槍を突き刺してくる。が、

「甘いぜ？アクアタワー！」

俺は地面に手を置き、そこから水が吹き出し、タワーのような形をしてナハティガルを吹き飛ばす。

「ちぃ！破邪地竜陣」

槍を何度も地面に打ち込み、俺たちの足元から竜が出現した。

俺たちはそれを避けると、

「本気で貴様らを始末する！」

青白いオーラを纏った……オーバーリミッツ状態のナハティガルがいた。

「エアプレッシャー！」

詠唱なしでのエアプレッシャーが俺たちを襲う。

「くっ！」

「ふん！天上天下　唯我独尊！デモンズランス」

上空で槍を振りまわしたナハティガルは俺たちに向かって槍を投げてきた。

「マズ!?間に合えよ?!――――――――――!」

シュドォォォォォォン!

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

「ふん。死んだか……イルベルト、貴様もバカな男だ。あのような奴が貴様の主だと?笑わせる」

ナハティガルはレオン達が死んだと思い、背を向けた。だが、

「輝く御名の下」

「地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん」

「安息に眠れ、罪深き者よ」

「!?何だと!」

ナハティガルは爆発したところを見ると、そこには無傷のレオン達が立っていた。

しかもレオンとローエンが詠唱を終えたところだった。

「しまっ……!」

「「ジャッジメント!!」」

ナハティガルを中心に裁きの光が降り注がれる。

「ぐあああああ!!!」

裁きの光を受けたナハティガルはダメージで動けずにいる。

「ナハティガル……全てを終わりにしましょう」

「俺達の本気……見せてやるよ！！」

ナハティガルの足元に魔法陣を展開し、

「「ディバイン・ジャッジメント！！」」

その中で無数の光の雨がナハティガルを襲った。

「ナハティガル、私は……」

「ローエン、決着をつけてこいよ」

「レオンさん、ありがとうございます」

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

いや～マジでやばかったぜ。エターナル・インフィニティ……本来、エターニアのリッドしか使えない技。闇の剣を光の壁で遮り、完全に打ち消すというのもだが、俺のは俺が独自でこの技を作ったため、仲間たちには回復する効果はない。しかも、爆風とかが普通に起こる。まあ、これで目くらましして、ローエンとの共鳴奥義（リンクアーツ・セカンド）と共鳴秘奥義（ファイナル）を使うことが出来たんだがな。

カラン！

「ぐうぅ……」

槍を吹き飛ばされ、膝をつくナハティガル。

「バカ者どもが……儂を殺せばラ・シュガルはガイアスに飲み込まれるぞ……」

傷ついた体で王座に向かうナハティガルにローエンは話す。

「ですが、王とて罪は償わなければなりません」

「関係あるか！……クルスニクの槍があれば……儂は絶対の力を……」

「ナハティガル！」

クルスニクの槍の力……それがあれば……というナハティガルにミラは言う。

「人の分を超えた力は世界そのものを滅ぼす。お前も同様だ」

「くっ……」

剣をナハティガルに向けているミラに、エリーゼが話しかける。

「ミラ、待って！この人はローエンの友達だから……ローエンに……」

エリーゼの言ったことを聞いたミラは剣を鞘に入れ、ローエンはナハティガルに近づく。

「ナハティガル……この国には民を導く王が必要です。私もあなたと同じなのです。背負うべき責任から目を背けた……ナハティガル」

ローエンの言葉の真意に気付いたナハティガルは驚きながらローエンを見る。

「まさかイルベルト、貴様……」

「私とあなたとで、もう一度ラ・シュガルの未来を……」

「貴様は儂の生み出した業まで背負って……」

「構いません」

何の迷いなく言ったローエンにナハティガルは先ほどまでの王として表情ではなく親友を見る目でローエンを見る。

「ローエン……」

目を瞑るナハティガル。

「……！フレアニードル！」

俺は上から殺気を感じ、ナハティガルの頭上に炎の針を飛ばす。

それと当時に頭上から氷の槍が飛んできた。

「ナハティガル！避けろ！」

「何だと！？」

俺の声と共に目を開けると、自分に氷の槍が迫ってきていた。

「ぐぅ！」

ナハティガルは先ほどの戦闘でのダメージを感じながらも何とか避けようとするも、

グサグサ！

「ぐあぁ！」

俺の放ったフレアニードルで何とか大半の氷の槍は対処したが、数発がナハティガルに刺さった。

「ナハティガル！」

ローエンは倒れたナハティガルに駆け寄る。

「大丈夫ですか！？ジュードさん、レオンさん、エリーゼさん！早く治療を」

『う、うん！（ああ！は……はい！）』

俺たち3人はナハティガルに治療を施していく。

ミラは上を見上げる。

「まさか、クルスニクの槍を！」

「ぐぅ……行け……そこにある蓮華陣（ロータス）から直接上の階へ行ける……」

ナハティガルはそう言うと気を失った。

「ナハティガル！」

「大丈夫だ。戦闘による疲労と急激に体を冷やされ、血を流したから気を失っただけだ。体の体温と傷は癒した」

「では、一旦、わたしたちは上へ行くぞ！」

「そうだな。ローエン。あんたは兵士たちを捕まえてナハティガルを病院へ！病院へ搬送させたら宮殿の外で待ち合わせるぞ」

「わかりました！皆さん、後はお任せします！」

そういい、俺たちは一旦、ローエンと別れて、蓮華陣（ロータス）を使って上の階へ。

「遅かったか……」

上の階に来たのはいいが、すでに槍は無かった。

「何も……ないです！」

「ホントにここにあったのかな？」

「さっきの戦いでナハティガルは槍の力を自分に集めて使ってたんだから、ここにあったはずだよ」

「ジランドがいない……まさかあいつが？」

「すでに運ばれたことを考えると場所の特定は難しくなってくるな。ひとまず宮殿の外に出よう。ローエンもいるはずだ」

俺たちはローエンが待っているであろう宮殿の外へひとまず出ることにした。

第４２話　ＶＳラ・シュガル王ナハティガル（後書き）

はい！ナハティガル生存フラグ！
原作死亡キャラその２を助けました。
このナハティガルを助けたことがどういう風に転ぶのか……お楽しみに！
次回はファイザバード沼野へです。お楽しみに！

第４３話　ファイザバード沼野へ（前書き）

次回の都合上、今回は短くしてあります。

第４３話　ファイザバード沼野へ

～レオンＳＩＤＥ～

宮殿の外に出るとローエンが待っていた。

「もういいのか？」

「はい。ナハティガルは病院へ。運ばれていきました」

「じゃあ、俺たちも……」

行こうかと言おうとしたら宮殿の中から出てきた兵士がローエンに報告していた。

「イルベルト殿！先ほど伝令がありました！ア・ジュール軍の侵攻が始まりました！！敵兵力およそ５万！」

５万……この圧倒的な数値に驚く俺たち。

「戦争が……始まった」

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

とある戦場の地で。ア・ジュール軍総勢５万はア・ジュール王ガイアスの指示を待っていた。

「全軍、前へ出せ」

「全軍、前へ！」

ガイアスの指示をウィンガルは素早く伝令兵に伝える。

馬に乗った伝令兵は兵士たちに前へ進むことを伝えていく。

指示に従い前へ進む兵士たち。

そして……

ウオォォォォォォ――――――――――――！！！

ウオォォォォォォ――――――――――――！！！

ラ・シュガル軍とア・ジュール軍が激突をし始める。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「ご、五万の大軍？東方辺境（サマンガン）か！？」

「違う！イル・ファン北方、ファイザバード沼野だ！」

もう一人の兵士はローエンと話している兵士に聞き、驚いている。
ローエンもあり得ないと言う風に言う。

「バカな！どのようにしてあの地を攻略するつもりなのですか！？
霊勢は変化していないはず！」

「わかりません！ア・ジュール軍がどのように進軍しているのかは
未だ不明です」

「大丈夫なの？兵力はガンダラ要塞や海上に集中してるんでしょ？」

「今から兵を移動させて間にあうかどうか……」

兵力差をどう埋めるかを考えるローエンに兵士は伝える。

「ご安心ください　ジランド参謀副長が敵の攻撃を予期し、すでに
新兵器を移送中です」

それを聞いた俺たちは納得していた。

「やはり……」

「あなた、その伝令は誰の命令によるものですか？」

「ジランド参謀副長ですが……それが何か？」

ローエンの質問に疑問を持つ兵士。

「いえ、ありがとう」

兵士たちはローエンに一礼をして、その場から離れて行った。

「何やら裏がありそうだな」

「ですが、今はファイザバード沼野へ急ぎましょう」

「ああ！アルカンド湿原からファイザバード沼野へ向かおう」

俺たちはまずファイザバード沼野へ入るためにアルカンド湿原へ向かった。

アルカンド湿原に到着すると魔物達が溢れている。おそらく近くで戦争が始まっているからそれのせいで活発化しているのか？

「ファイザバード沼野はこの先なのですが……」

「さすがにこんなに魔物がいたんじゃ！」

さすがにこれほどの魔物の数に驚く俺たち。

「魔物風情が……止むを得んな！出でよ！創世の輝き！ビッグバン！！」

フィールド全体に及ぶ広い攻撃範囲でビックバンを発生させ、群れていた魔物達を一掃した。

「す、凄い」

「これがレオンさん、個人の力……」

皆、唖然としていた。

「おい、何唖然としている！急ぐぞ！」

俺は唖然として動かない皆に声を掛け、皆もそれで反応し、再び俺たちはファイザバード沼野へ向かった。

第４３話　ファイザバード沼野へ（後書き）

前書きに在ったように今回は短くなりました。ですが、次回はファイザバード沼野を抜け、四象刃（フォーヴ）の三人との戦闘と結構豪華に書くつもりです。
次回もお楽しみに！

第４４話　ＶＳ角・翼・爪（前書き）

タイトルはジャオ達の略させてもらいました

第４４話　ＶＳ角・翼・爪

～レオンＳＩＤＥ～

ファイザバード沼野についた俺たちは兵士たちに呼び止められた。

「なんだ、お前たち。所属と名前は？」

「兵士にそう聞かれるとローエンが俺たちの前に立つ。

「私はローエン・Ｊ・イルベルト」

ローエンが名前を名乗ると驚く兵士。

「え？『指揮者（コンダクター）イルベルト』殿？」

「こんな事態です。戦況を伺えませんか？」

「ハッ！ではこちらへ」

俺たちは作戦司令部へ連れて行かれる。

作戦司令部についた俺たちは戦局図のようなものを見せさせてもらっている。

「これはリリアルオーブの反応を拾い、戦局図を見るものです」

戦局図には駒のようなものが映っている。白がラ・シュガル軍で赤がア・ジュール軍である。

「あれ？これだけなんか違うね」

レイアが一つだけ大きさの違うものを見ている。

そのことを兵士が教えてくれた。

「それは参謀副長殿が進めている戦略のための部隊です。四象刃アグリアの妨害を突破したようですね」

「ジランドの戦略だと？」

ミラはこの部隊というのがジランドの戦略と聞いて疑問に思って兵士に聞く。

「ええ。一の鐘の後には、予定到達点に至ると思われます。詳細は聞かされていませんが、戦局の流れを一気にこちらへ向ける切り札だとか。作戦実行の際には、予定到達点へできるだけ部隊を集結させるよう指示が出ています」

「ふむ……この進路だと、予定到達点はここですね？」

ローエンは戦局図に進路を記していく。

「は、はい。その通りです。さすがですね。『指揮者（コンダクター）』

兵士はローエンが教えていないのに予定到達点を当てたことに驚いていた。

「嫌な予感がしますね……」

「ああ。クルスニクの槍を使うつもりだろうが、自軍に詳細を明かさない理由が見えない」

「……クルスニクの槍がジランドという人がもっていったんでしょうか……」

「状況から考えたら、そうだろうな。だが……」

俺とミラは顔を見合って頷く。

「クルスニクの槍の起動に必要な『カギ』は私が奪い、イバルに託してある」

「だから槍は使われることないと思ってたんだ」

ジュードも槍は使われることはないだろうと思っているようだ。

「ですが槍はもち出され、おそらく使用準備を進めている。それはつまり……」

「新たな『カギ』が生み出されたのかもしれん」

……ん？俺は何かを忘れているような……そういえば、この後、どうしてクルスニクの槍は起動したんだっけ……？う～む……

「ア・ジュール軍はどのようにして、沼野を行進しているのでしょうか？地場（ラフーム）は訪れていないはずですが」

う～む……何で……カギ……起動……イバル……あ、そうか！思い出したぞ！

「あ、はい。ア・ジュールが開発した増霊極（ブースター）をご存じでしょうか？」

俺が考え事をしているあいだに話が進んでいるみたいだ。何故か皆がエリーゼとティポを見てるし。

「そんな見ないでよーハズカシイ～」

皆に注目されてエリーゼは顔を紅くしている。

「敵はその増霊極（ブースター）によってマナを増大させ、自分たちの周囲の霊勢を変化させています」

「マナで地の微精霊を大量に召喚し、地場（ラノーム）に変えたのですか」

「さすがウィンガルってところか……」

「ええ……驚嘆に値します」

「ラ・シュガル軍はどうやって抵抗してるんですか？」

ジュードの質問に兵士は答える。ってか、軍と関係ない人間にこんなことを教えていいのかね？いくらローエンがいるからって情報機密とかないのか？

「我々にも、増霊極（ブースター）がありますから」

「兵全員に配備し、小隊の一人に、霊勢を変化させる者を充てたのですね？」

「は、はい。おっしゃるとおりです」

「もしかして、ぼくらの出番？」

ティポは自分が増霊極（ブースター）であることを知っているので俺たちにそう聞いてきた。

「いや、ここはレオンかローエンに任せよう。地の術に長けた者がやる方がいい」

ガクン

自分の出番だと思っていたのに俺かローエンに任せると言われ落ち込むエリーゼとティポ。

「時間がありません。すぐにジランドの部隊を追いましょう」

ローエンに言われ、俺たちは一旦外に出る。

「ミラ、少しいいか？」

「ん？どうしたレオン」

「『カギ』のことなんだが……」

ミラが目を細める。

「聞かせてくれ」

「『カギ』はイバルに預けているんだよな？」

「そうだが？」

「もしかしたら、敵はイバルが『カギ』をもっていることを知っていて、何かしらの方法でイバルを戦場に呼びつける気かもしれん。例えば……ミラがお前の力を必要としている。ここにくればミラはお前を見てくれる……とかな」

俺がそう言うと、ミラは頭を抱える。

「あり得る話だから怖いな」

「だろ？」

「だが、いくらイバルでもそんな誰とも知らない者の指示を聞くはずがないと思うが」

「だと……いいんだがな」

あのバカは絶対に来る……薄れている記憶がそう教えてくれた。

「さて、皆に合流しよう」

「そうだな」

俺たちは改めて作戦司令部から出る。

出てみるとアルヴィンが何かを言われていた。

どうやら、また別行動してたみたいだ。

「アルヴィンさん、今の状況で一人で動かれると、さすがに疑われますよ」

「アルヴィン、今は勝手に僕たちから離れないでよ」

「ホントだよ。約束だからね！」

皆にそう言われたアルヴィンは、

「はいはい」

と軽く答えた。

そのまま、少し歩きながら俺・ミラ・ローエンは話をしている。

「ラ・シュガルの戦略要点は、両軍が衝突する盆地を見下ろせる丘の上です」

「そこにクルスニクの槍をすえる気か」

「だろうな。そこからなら密集した敵を確実に捉えられる……絶好な場所だ」

「ええ。クルスニクの槍がマナを使用する兵器なら絶好の場所です」

「しかし、奇襲に動ぜず、的確にこの場所を見抜くとは……」

「参謀副長ジランド……油断のならない男だな」

ファイザバード沼野の戦場前に着くと、

「みなさん、私から離れないでください」

増霊極（ブースター）はローエンが使うことになった。

カシャン！ボシュン！

ローエンが増霊極（ブースター）を足元に投げるとそこに地の精霊術式が展開される。

その後、ジュードは周りを見る。

「思ったより視界が悪いね。敵がどこにいるか、全然わからないよ」

「迂回して、安全なルートを探すか？」

「いや、直線（まっすぐ）に駆け抜けるぞ。時間もあまりなし、こっちのほうが早い」

俺がアルヴィンの後にそういったらティポが不吉なことを言い始める。

「ぼくたち死んじゃうかもねー」

「大丈夫だろう。レオンが言っているのだからな」

ミラが俺を見る。俺は頷く。

「それに恐れるな。今、最も恐れるべきは、人間と精霊の命が脅かされることだ」

「ミラ、かっこいい！」

ミラの物凄くかっこいいセリフを聞いたレイアがキラキラした目でミラを見る。

「行くぞ、みんな！」

俺たちは走り出す。

走り出した先にはア・ジュール兵。

「止まるな！」

「このまま押し通す！」

俺とミラは剣を抜く。

「道を切り開く、ミラ！！」

「わかった、いくぞレオン！！」

「「覇道…滅封！！」」

地面から炎の衝撃波を放つ。

「ぐあああああ！」

前方にいた兵士たちを吹き飛ばす。

「進むぞ！」

俺たちはそのまま俺とミラで覇道滅封を放ちながら進んでいっていた。そこへ、ラ・シュガル兵が俺たちに攻撃してくる。

「なにしやがる！」

「ジランド参謀副長より全軍に通達があった！『指揮者（コンダクター）イルベルト』は敵になった！殺してでも排除せよ、とな！」

「なんですと？」

「ラ・シュガル戦略要点の破壊など、絶対にさせん！」

そう言って俺に突っ込んでくるラ・シュガル兵。

「うぜえ」

ドス！

「ぐぅえ！」

バタン

『……はっ？』

俺に突っ込んできた兵がいきなり倒れたことに他の兵士たちが驚く。

「こっちは……急いでんだよ。邪魔すると……コロスゾ？」

ゾクッ

バタン！バタバタン！

俺の放った殺気に耐えられず、兵士たちは気を失った。

「行くぞ」

「ああ！」

俺とミラは走りながら覇道滅封を放って進んでいく。

奥へ進んでいくと多くの兵士たちが何かを囲んでいた。

「ジランドかっ！？」

「いや、あれは……ウィンガル達か」

兵士たちが囲んでいたのはジャオ・プレザ・ウィンガルの3人だった。

「まだ増えるか。アグリアは合流できそうにないのう」

「ああ、たまんない。じらさないでよ、ウィンガル」

ここから見て、ウィンガルは何かを探している。おそらく、探しているのは……指揮官。

「奥の赤鎧。あれが指揮官だな」

「よし！」

「敵は三人だ。かかれ！」

指揮官の赤鎧の態度を聞いたウィンガルが不機嫌になるのが見えた。

そして、戦闘はすぐに終わった。

戦闘が終わるのを見届けた俺たちはウィンガル達の前に出る。

「来たか。マクスウェル」

「……やはり戦場でまみえることになった、か。悲しい時代だのぉ」

「山狩りは楽しかったわ、アル」

……ガイアスはやはり奥か。

「そいつはよかった」

「ジランドを討ったの？」

「答える義理はないな」

ジュードの質問に答えないウィンガル。

「ならば話を変えるとしよう。道をあけろ！」

「うふふ。冗談でしょ？」

プレザはミラの言ったことを冗談だと思っているようだ。

「槍は破壊する。それでこの戦いはお前たちの勝利だろう。何故それで満足できない？」

ミラの質問にジャオが答える。

「陛下の望みだからだ」

「この戦は通過点に過ぎない」

「ここで争えば、あなたたちも命を落とすかもしれない。王を支えるものがいなくなるのですよ！」

ローエンの言っていることは正論だ。いくらガイアスが一人でも歩んでいけるとしても国を支えているのはガイアスと四象刃（フォーヴ）だ。それなのに戦いで四象刃（フォーヴ）が死ねば国の政治とかで影響が出るだろうな。

「陛下は、お一人でも歩まれるわ」

「あなたのように、後ろに隠れて、こそこそ戦うようなマネはされない」

「どういう意味でしょうか？」

ローエンにはウィンガルの言っている意味がわからないようだ。

「イルベルト殿、なお、ごまかされるつもりか？民の先陣を切り、戦わねばならない者であるあなたが、最後尾に回ってしまった。その結果がナハティガルの独裁を許し、ナハティガルは謎の奇襲を受けて怪我をして今、ここにはいない」

「情報、はえーな　ローエンは悪くないよ。悪いのはナハティガルだ」

「国にとって個人の是非など関わり合いのないことだ」

「……どういうこと？」

レイアはウィンガルの言うことがわからず、聞く。

「……」

「導く指導者がいなければ、民は路頭に迷うだけ、と言っている」

「なら……今からでもローエンが……ナハティガルが怪我を治すまでの間」

ジュードは案を出すが、ローエンが否定する。

「そう簡単にはいきません。私など、しょせんは一介の軍師。王の代理にはなれません。私には代理にも王にもなる器がありませんよ」

そんなローエンの言ったことにはっきりとジャオが答える。

「我らが王はその器をもっておる」

「そして民を導くための道をこの先に見いだされたのよ」

「槍は我らが、陛下の力として貫い受ける！」

3人のそんな言葉を聞きながらも、

「何度も言わせるな。クルスニクの槍は渡さない。どんな理由があろうとも、だ！」

ミラははっきりと言いきる。

なら、俺がすべきは……。

「俺たちの……ミラの思いは邪魔させないぜ？」

シュゥウン……バシュン！

ウィンガルがまた、増霊極（ブースター）で戦闘モードになる。

（ふん！決着をつけてやる！）

（悪いが、この先にガイアスがいるなら……俺は！）

バチィ！バチチチチィ！

「レオン？」

ミラは俺を不思議そうに見る。

「ミラ！皆！俺は奥にいるであろうガイアスの元に行く！ここは任せた！」

「なるほど、ここで足止めを喰らうよりも一番の戦力であるレオンをガイアスの元に……か。頼むぞレオン！」

「おうともさ！」

俺はミラに言われ、走り出す！

（逃がさん！）

ウィンガルが俺に剣で斬りかかる。

が、

スカ！

「甘いぞウィンガル！この状態の俺を捕えられるはずないだろ！」

俺は壁を走りきって、奥へ。

皆、頼んだぜ！

俺はそう思い、奥へと進んでいった。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

（ちぃ！逃がしたか！だが、貴様らは逃がさんぞ！）

「みな、二人一組になって奴らを倒すぞ！」

『うん！（おう！／うん！／は、はい！／了解です／いっくぞぉ～！）』

ミラとエリーゼはジャオを、レイアとローエンはウィンガルを、ジュードとアルヴィンがプレザをそれぞれ相手にすることに。

～ミラとエリーゼ～

「娘っ子！今からでも遅くないぞ！こっちにこい！金剛拳！」

「いや、です！」

ジャオは前進しながら拳撃でミラへ攻撃する。

「エリーゼは私たちの仲間だ！渡すわけにはいかない！アサルトダンス！」

ミラは連続斬りでジャオに攻撃するも、

「効かんわ！」

ジャオは片手でミラの攻撃ごと吹き飛ばす。

「ふぅ！わかっているさ！エリーゼ！」

「はい！レオン『お兄ちゃん』直伝！悠久の時を廻る優しき風よ、我が前に集いて裂刃となせ……サイクロン！」

シュウゥゥゥゥン！

「ぬう！？」

ジャオの足元に竜巻が発生する。

「一剣を以って万業を滅却せん、抜刀！サンダーブレード！」

竜巻から落ちてくるジャオに雷でできた剣を投げる。

バチィィ！

「ぬうおお！」

「ハイアーザンスカイ！」

サンダーブレードで浮いているジャオにミラが奥義を食らわす。

ズシャ！

「ぐあ！」

「始まりの力、手の内に！我が導（しるべ）となり、こじ開けろ！」

火が水が風が地がジャオに攻撃する。

「スプリームエレメンツ！」

「ぬぅあああああああああ！」

ドサ

「よし、これ……」

ミラはジャオを倒したと思い、他の皆の所に行こうとするが、

「ちぃと痛いぞ！」

ミラはジャオに頭を掴まれ、地面に叩きつけられてから投げ飛ばされた。

「そりゃあ！轟魔隆衝断！」

ドシャァァァン！

「ぐあああああ！」

ジャオの秘奥義を喰らったミラは傷つき、倒れかける。

「ミラ！今回復します！」

「がんばれーミラ君！」

「ハートレスサークル！」

ミラの足元に治癒陣が展開され、ミラの傷を癒す。

「すまないエリーゼ！」

「い、いえ！でも、今度は……」

「ぼくたちの番だねエリー！」

エリーゼとティポの前に術式が展開され、

「深淵の盟約を果たせ！リベールイグニッション！」

闇のレーザーを照射された。

「くぅ！娘っ子……」

「目標ロック！」「チャージ完了！」「発射！」

「覚悟しろ～！」

ティポがジャオの周りを飛び回り、闇の術式を刻んでいく。

「ただいま！」

そして、戻ってきたティポと共にエリーゼは決める！

「「リベールゴーランド！！」」

術式が爆発し、それがジャオを襲った。

「ぬぅあああああ！……娘っ子、強くなった……」

ドサ！

「ハァハァ」

「た、倒しました～！」

「さっすがエリーだね！」

ミラ＆エリーゼ・ティポＶＳジャオ……ＷＩＮミラ＆エリーゼ・ティポ！

～ジュード・アルヴィン～

「アル、死になさい！ドラゴネス・ハンド」

プレザの持つ本から竜の腕が出て来てアルヴィンを襲う。

「お断り。俺、こんなとこじゃ死ねないのよね！タイドバレット！」

アルヴィンはプレザの足元を攻撃し、プレザは体勢を崩す。

「ジュード！」

「う、うん！ごめんなさい！獅子戦吼！」

体勢を崩したプレザを吹き飛ばすジュード……であったが、躊躇っている模様。

「ぐぅ！ボーヤ、よくもやったわね！それにアルも！相変わらず汚い戦い方ね！スプラッシュ！」

今度はジュードとアルヴィンの頭上に水の塊が出現し、２人を襲う。

「おっと！」

「わわ！」

２人は精霊術を避ける。

「汚い結構！俺は今までこういう戦い方をしてきたんでな！ジュード！」

「うん！」

「「魔神連牙斬！！」」

二人は無数の衝撃波を放つ。

「くっ！」

「今だ！臥狼砲虎！」

ジュードはプレザを吹き飛ばしながらダウンさせる。

「殺劇！

はぁやあ！

たぁやあはぁ！

舞荒拳！！」

ジュードは最後に渾身のストレートで吹っ飛ばす！

「甘いわよ！」

だが、プレザはジュードの秘奥義中、最小限にダメージに抑えるために殴られる・蹴られる個所をずらしていた。

「女性を殴る・蹴るなんて……おいたのすぎたボーヤね！龍精召喚！」

本から竜が2体現れる。

「ドラゴネス・スニーカー！！！いっちゃいなさい」

2人……いや、ジュードだけがその秘奥義を喰らった。

「！？アルがいない！どこに……」

「ここさぁ！」

アルヴィンはいつの間にかプレザの後ろにいた。

「しまっ？！」

「我流紅蓮剣！！」

アルヴィンは炎を纏った剣で斬り上げて自分もジャンプし斬る。

「目ぇかっぽじってよく見てな！」

銃を乱射する。

「おたくの最期の光景だ！エクスペンダブルプライド！！」

アルヴィンが最後に地面に大剣を空中から叩きつけ、大爆発を起こす。

「あああああああああ！！！！」

バタン！

「ア、アル……」

ガク

プレザは気絶した。

「い、いたたた……治癒功！もう、アルヴィン！僕を囮にするなんてひどいよ！」

「悪い悪い～」

2人はそのまま、その場を離れた。

ジュード&アルヴィンＶＳプレザ……ＷＩＮジュード&アルヴィン

～レイア・ローエン～

「いっくよ！散沙雨！」

無数の連続突きで敵を圧倒しようとするも、

（はっ！そんな突き、レオンと比べたら屁でもないわ！白牙追蓮！！）

ウィンガルの素早い突進多段斬りによって弾かれ、逆に攻撃を喰らう。

「きゃあああ！」

「レイアさん！フリーズランサー！」

ローエンがウィンガルに向かって無数の氷の槍を飛ばす。

（ちぃ！老いてもその実力は健在か！）

ウィンガルはローエンに向かって攻撃しようとするが、

「女の子に……」

（ああ？）

ウィンガルは見た。先ほど自分が吹き飛ばしたレイアが鬼のような表情で自分を見ているのを。

（……汗）

「活伸棍・円舞！！（怒）」

（ぐぉ！？（な、なんだこの威力は？！））

レイアは自分の肌を思いっきり傷つけたウィンガルにキレていた。

「消えなさい！（怒）さぁ！いっくよー！ぶっとべ！　ぐるぐるぐ

る～！」

レイアの持つ棍が光を発しながらぐるぐると棍を回す。

「お母さん直伝！！」

倒れているウィンガルに向かって上空から棍を

「活伸棍・神楽！！」

叩きつけた。

（ぐぼぉあ！）

「パーフェクトォ！！さあ、ローエン！決めちゃって（怒）」

レイアは怒りの表情の状態でローエンにいう。

「は、はい（汗）タイダルウェイブ！」

倒れているウィンガルを水流が襲う。

「フェローチェ　荒々しく」

水流を水柱にして巻き上げ、

「グラツィオーソ　優雅に！」

凍らせ、

コツンコツン

「グランドフィナーレ！！」

最後に砕き散らした。

「どぉ？乙女を傷付けた罪は重いのよ！」

（り、理不尽だ……）

ガク

「（ウィンガルさん……お気の毒です）」

「さ、行こうかローエン！」

「は、はい」

レイア&ローエンVSウィンガル……WINレイア&ローエン

～皆が合流～

ミラ達が合流すると、傷ついた体を引きずりながらウィンガル達も合流した。

「ぐっ……がはっ……」

「ウィンガルさん、あなたの増霊極（ブースター）はどこですか？」

再び倒れかけているウィンガルにローエンが尋ねる。

「ここ……だよ……」

ドサ

ウィンガルは指で頭をさし、倒れた。

「そうまでしてガイアスに仕えるのですね……」

ローエンは真剣に考え事をする表情になる。

「悪い。遺言訊くつもりないから」

アルヴィンは倒れかけているプレザに銃を向けるが、

「アルヴィン！もう決着はついているじゃない！」

「わーったよ。お前が言うなら、そうするよ」

アルヴィンはジュードに言われて、銃を仕舞う。

「怖い怖い。そうやって、生きてくのよね。ボーヤ、そうやって弄ばれて、いつかは捨てられるのよ」

アルヴィンを睨みながらジュードにアルヴィンがあなたを捨てるわよというプレザに対して、ジュードははっきりという。

「けど、アルヴィンは僕の気持ち、わかってくれていると思う」

「……そ、う」

ドサ

「あの……どうして……わたしを心配……してくれるんですか？」

「理由を言えー！」

エリーゼとティポはジャオに何故自分のことを心配するのかを聞いている。

「……」

黙るジャオ。

「ど、どうして……」

黙り込むジャオに少し怒り気味のエリーゼとティポ。

「エリーゼ……」

そんなエリーゼに近づくレイア。

「クルスニクの槍まであと少しだ。みな、思うところもあるだろうが、先へ行かせてくれ！レオンもこの先で待っているんだ！」

そう、ミラが言った瞬間！

シュドオオォォォォォォォォォォン！！！

「な、何！？」

「なんだってんだ、この揺れは！？」

「な、なんですか！？」

「この揺れは一体！」

「何？何なの？！」

「こ、これは……このマナは……レオン！？」

ミラは長く一緒にいたのでこの揺れの原因はレオンのマナであると感じている。

しかも、

ビィシャアァァァァァン！！

クルスニクの槍のある方向……レオンがガイアスと戦っているであろうところに強力な雷が落ちる。

「今のは……レオンさんでしょうか？」

「みな、急ぐぞ！」

『うん！（おう！／は、はい！／はい）』

ミラ達はレオンの言った方へと向かった。

そして、

「なに……これ」

「マジ……かよ！」

「これは一体……」

「何があったん……でしょうか？」

「何よ……これ」

「レオン……何があった」

ミラ達がレオンとガイアスのいるところに着くとそこは……沼野でなく……焼け野原になっていた。

その中心には、

「……」

「……」

剣と長剣を構えているレオンとガイアスが対峙していた。

第４４話　ＶＳ角・翼・爪（後書き）

ふぅ、時間ぎりぎり！間に合った。
みんなの秘奥義を全部出してみた！どうでしたか？
次回は……レオンＶＳガイアスです！お楽しみに！

第４５話　レオンＶＳガイアス（前書き）

はっきり言いたい……ガイアスが原作以上に強くなってしまったかもしれない。

第４５話　レオンＶＳガイアス

～レオンＳＩＤＥ～

俺はウィンガル達の相手をミラたちに任せて先に来ている。来る途中、両軍の兵士たちが死んでいるのを見た。

ここまで戦が広がっているのか……悲しいものだな。

シュタ！

俺は人……ガイアスを見つけ、そこに降り立つ。

「……レオンか」

「……ああ」

ガイアスが俺を見る。

「貴様とこうして２人で話すのは久しいな」

「そうだな。前に城ではミラ達がいたしな」

俺とガイアスは覇気を出しながら話し合う。

「貴様が昔、守りたい人がいると言っていたのは……マクスウェルだったのだな」

「そうだぜ。いい女だろ？」

「ああ。貴様にお似合いだとは思うが……お前の力を出し切れていない節があるな」

ぬ……バレてたか。

「貴様がここに一足先に来たのはマクスウェル達の成長のためと……」

ガイアスが長剣を抜く。

「俺と戦って倒し、槍を破壊するためであろう」

シャキィィン！

ガイアスが構える。

「その通りだ……」

俺も剣……ヴォーパルソードとフランベルジュを1つにしてエターナルソードにした。

「槍は破壊させてもらうぞ」

俺も剣を構え……

「……」

「……」

ヒュウウウウウウウウ～～～～～

「！」

「！」

風の鳴る音を聞き、同時に動き出した。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

「「魔神剣！！」」

レオンとガイアスは同時に同じ衝撃波を繰り出し、相殺される。

「ハアァァァ！！」

「ヌウゥゥゥゥ！！」

ガキィィィンと剣と剣がぶつかり合う。何合も何合も……ぶつかり合う。

「虎牙破斬！」

ぶつかり合っているとガイアスが斬り上げ、斬り落としてくるのをレオンは、

「おっと！」

バックステップで避け、避けてからの

「魔王炎撃波！！」

ボオォォォっと音を立てながらガイアスのいる軌道に炎を放出する。

「ヌウゥゥ！獅子戦吼！」

炎の熱を耐えながらガイアスはレオンを闘気で叩きつけ、吹き飛ばす。

「ぐうぉ！まだだぜ！絶風刃！」

レオンは剣を高速に動かして疾風の衝撃波をガイアスに跳ばす。

ブシュ！

「ちぃ！舐めるな！飛燕瞬連斬！」

ガイアスはレオンの後ろに回り込み、空中を駆ける連続飛翔斬ってきた。

ザシュザシュザシュ！

ポタ……ポタ……

レオンは直撃を避けようとするも少し食らっていまい、血を流す。

「っ！ファイアストーム！」

ボオォォォォ！！！

炎の嵐がガイアスを襲う。

「くっ！」

チリィ……

ガイアスは当たる直前で避けたが、髪が少しだけ焼けた。

「まだまだ！続いてホーリィランス！」

ガイアスの避けた位置に光の槍が突き刺さる……

「ハアアアア！！！」

ガキィンガキィン！！！

かと思いきや、ガイアスはその長剣の長さを使い、槍を斬り倒す。

シュタ

ガイアスは無事、着地する。

「腕を上げたなガイアス」

「お前こそ、前よりも剣速、精霊術の使い方に磨きが出ているな」

レオンとガイアスはお互いに距離を取る。

そして、最初に動いたのは

「轟くは雷鳴の如し…天は泣きて、裁きのという名のもとに灰燼と化せ！レイジングボルト！！」

レオンは手を上空に向け、その手から雷が上空へと吸い込まれていく。そして、

ジュシャアアアアアアン！！！

ガイアスのいる場所へ落ちる。

「……どうだ？」

煙が舞い、ガイアスの姿が見えず、そう呟くレオン。

だが、

「雷神剣！」

「なにっ！？」

レオンは声のした方……上空を見ると、雷を剣に宿しながらレオンに剣を振りかざすガイアスの姿があった。

「くそっ！崩雷殺！」

レオンは地面に剣を突きさし、周りにドーム状の雷撃を発生させる。

バチィィィィ！！

雷と雷が激突し、お互いの雷は消え去る。

「瞬迅剣！」

ガイアスはそのまま、突きの一撃を繰り出してくる。

「間に合わんか！なら……フレアボム！」

剣に向かって手をかざし、炎の爆発と共に後ろへ跳ぶ。

「なるほど……あの体勢では普通に避けるのは不可能。なら、精霊術で……というわけか」

「ああ。まあ、これはミラがよくやっていた魔技を真似たんだがな」

そう、レオンの使ったフレアボムはミラがやる精霊術の詠唱なしで使う魔技だ。咄嗟にそれを実行したレオンである。

「雷神十連撃！！」

「爪竜連牙斬！！」

レオンは雷を纏った剣と拳で、ガイアスは接近してから斬り刻んでくる。

「まだだ！覇王天衝剣！」

ガイアスは爪竜連牙斬の４連続斬りを終える瞬間、刀身に光を纏わせ貫いてくる。

「双牙掌ぉぉぉぉ！！！」

光を纏った刀身をアッパーカットで強引に上へ打ちあげる。

「何だと！？」

さすがにこんな強引に技を逸らされたことに驚くガイアス。

「双撞掌底破！！」

レオンは一旦、エターナルソードから手を離し、片手でガイアスを叩きつけ、そのまま両手の掌でふっとばした。

ドォォォン！！

「ぐあ！」

ガイアスはそのまま壁に叩きつけられる。

「食らえ！サンダースピア！」

手に雷でできた槍をもってそれをガイアスに目掛けて投げる。

「舐め……るな！」

ガイアスはそのまま、剣を構え雷の槍を、

「ウオオオオォォォォォォォォォ！！！」

バキィィィン！

弾き、破壊した。

「……マジで！？」

レオンはまさか、サンダースピアが弾かれただけで破壊されるとは思いもしていなかったので驚いた。

「魔神連牙斬！！」

呆けているレオンにガイアスは連続して地面を這う衝撃波を放つ。

ザン！ザン！ザン！

「ぐぅ！ぐぉ！ぐあ！！」

ドシャァァァン！

今度はレオンが吹き飛ばされる。レオンは剣を持ちながら吹き飛ばされるが、ただで吹き飛ばされるレオンではない。

「この重力の中でもだえ苦しむがいい、グラビティ！！」

吹き飛ばされながら詠唱し、ガイアスの周りに半球状の過重力空間を発生させた。

「ぬうぅ！」

「がはっ！」

ガイアスは重力で苦しみ、レオンは壁に激突する。

両者は一歩も引かない戦いをしている。

「フレイムバースト！！」

レオンは壁に埋まりながらも術を使う。

ドカァァン！

炎の爆発がガイアスに迫る。

「ふん！」

ガイアスは過重力空間から抜け出し、爆発を避ける。

「覇道滅封！！」

「げっ！？」

レオンとミラが使う覇道滅封とは違い、ガイアスの覇道滅封はレーザーだ。

「くっ！抜け出せない！？ならば、破邪十字星！」

レオンは体が壁に埋まって動かせるのが剣をもっている右手だけを覇道滅封に向け、光の刃を飛ばす。

シュンシュン！

破邪十字星の刃がレーザーの覇道滅封の先端に接触して、レーザーの軌道を逸らす。

「あっぶねえ。っと、ここから出ないとな。はあああ！」

レオンは再び、手を壁に向け、

「フレアボム」

ドカァァン！

少しマナを多めにして精霊術を打つ。

その爆風と共にレオンは壁から脱出する。

「エクスプロード！エクスプロード！」

脱出したレオンは大火球により大爆発を起こすエクスプロードを連発する。

「ぬうぅあああああ！」

爆発と爆風がガイアスを襲う。

「メイルシュトローム！」

その爆発地点に大きな渦巻きを発生させる。

「はあああああ！！！」

レオンはそのまま、その渦巻く地点へ走る。

「こんな……ものぉぉぉぉ！！！」

ガイアスは渦巻きを斬り裂く。

「うおおおぉぉッ！　負けられないんだ！舞え！紅蓮の翼！」

「覚めよ！黄昏の地より呼び寄せし、流転の狼王！」

レオンとガイアスはお互いに秘奥義を繰り出した。

「皇王天翔翼！！」

「闢・魔神王剣！！」

炎と炎が互いにぶつかり合い、そして、

ドカアアアアアアアアン！！！！

大爆発が起きた。

「ぐあああ！」

「ぬうああ！」

2人は同時に地面に叩きつけられる。

「ハァハァハァ……」

「ハァハァハァ……」

2人はボロボロになりながらも、剣を杖代わりにして立ち上がる。

そして、

シャキ

剣をお互いに構える。

「……」

「……」

そんなレオンとガイアスが対峙していると……

「レオン！」

ウィンガル達を倒したミラ達が合流した。

「……ここまでのようだな」

「……みたいだな」

レオンとガイアスは同時に構えを解く。

「しっかし……俺たちの戦いで随分とまぁ、沼野が焼け野原だな」

「大半はお前のせいであろう」

「違いないな」

レオンはこの沼野のあり様を見て呟き、ガイアスはこれの原因がレオンにあると言う。レオンはそれを否定しないでいる。

レオンＶＳガイアス……Ｄｒａｗ

第４５話　レオンＶＳガイアス（後書き）

はい、レオンＶＳガイアスの勝敗は引き分け。原作では使わない技もいくつか使わせてみました！
しかも、今回はかなり技や術のオンパレードでした。
レオンの戦闘は結構炎や雷が多く、前話の最後辺の沼野が焼け野原になってしまっているのは大半がレオンの炎の精霊術や雷の精霊術のせいでした。
尚、ミラ達が戦闘終了後にみた雷の正体はレイジングボルトでした！
レイジングボルトはＦａｉｒｙ　ｔａｉｌのラクサスの魔法です。
何となく使ってみました。なお、詠唱は自分で考えてみました！いかがでしたかな？
ガイアスの強さは原作以上になってしまっているのはレオンのせいでもあります。
レオンがガイアスと昔、戦ったせいですからｗｗ

さて、では次回もお楽しみに！

第４６話　クルスニクの槍……起動

～レオンＳＩＤＥ～

ったく！ガイアスのやつ、いつの間にここまで強くなったんだ！？
俺も結構やばかったぞ！

「レオン！大丈夫か！」

「今、回復しますね！」

ミラが俺の傍に駆け寄り、エリーゼは俺の傷を癒していく。

「おお、ミラ達か。ウィンガル達は倒したんだな」

「ああ。かなり時間を喰ったがな」

ミラを見ると所々傷ができている。

「はい、終わりました」

エリーゼの回復術を掛け終わった。うむ、痛くないな。

「サンキュ、エリーゼ」

「い……いえ……」

「てれるなーもう～」

エリーゼは頬を紅くし、ティポも照れている。

「さて……」

俺はガイアスを見る。

「レオン。少し、やつと話をさせてくれないか？」

「……いいぞ。だが、今のガイアスには攻撃するなよ？かなり体力を消耗しているからな。そんな状態のガイアスを襲うのはさすがにな」

「……レオン。君が私をどういう風に見ているかがわかったよ」

ブスゥっとしてから俺を見るミラが可愛いト思ってしまった。

そして、ミラは俺の前に立つ。

「答えろガイアス。なぜクルスニクの槍を手に入れようとする？」

ミラの質問にガイアスは答える。

「すべての民を守るためだ。力はすべて、俺に集約させ管理する」

そんなガイアスの返答を聞いて、ミラは言う。

「それはただの独占にすぎない。結果、お前も、守るべき民も槍の力が災いし、身を滅ぼすだろう」

「俺は滅びぬ。弱きものを導くこの意志がある限りな」

ガイアスの揺るがない意志を聞いたミラはガイアスの意志を指摘する。

「……お前はひとつの重要な事実から目を背けている」

「なんだと？」

「お前がいくら力ある者であっても、いつかは必ず死ぬ。そのあとはどうなる？」

確かに……人はいつか必ず死ぬ。ガイアスもいくら覇王とも言われる王であっても、人だ。

「人の系譜の中でお前のような者がもう一度現れるのだろうか？」

「……！」

「遺された者たちは過ぎたる力をもてあまし、自らの身を滅ぼす選択をする……それが人だ。歴史がそれを証明している」

ミラが言い終えると、ガイアスはミラを見る。

「……ならば俺が、その歴史に新たな道を標そう」

「……ガイアス。やはりお前も人間だな」

「ふ、そうだ。人間だからこそ俺にはリーゼ・マクシア平定という野望がある。お前は、ただの欲望と捉えるだろうがな」

「最後だ、ガイアス。槍は渡さない。どうしても退かないか？」

……おい、ミラ。剣を抜こうとするな。

「退かぬ！」

そして、ガイアス。お前も剣を構えるな！

「はいはい。お前らいい加減にしろ。ミラ、お前もさっき言ったことを忘れるな。ガイアス。お前も俺との戦いで消耗だ。やめておけ」

それに……と言いながら俺は剣を構える。

「ここから槍を破壊すればいいだけのこと」

「させぬ！クルスニクの槍は必ず手に入れる！」

ガイアスはそういいながら体に覇気と闘気を纏う。

「おいおい……お前、マジで腕上げているな（汗）」

消耗しているはずなのにまだここまでとは……。

「さらばだ！」

ガイアスが一撃を繰り出そうとした、その時！

シュン！シュン！

剣がガイアスに向かって投げられてきた。ガイアスはそれを弾く。

「何者だ！」

ガイアスが上空を見る。上空を見ると、ワイバーンが一頭。

「とぉ！」

シュタ！

「そこまでだ！」

「イバル？何故ここに……まさか？！」

「そのまさか……かもしれないな」

ミラはここに来る前に俺が話したことを思い出したのか顔色を変える。

「ミラ様！本来のお力を取り戻し、その者を打ち倒してください！」

あのバカは懐から『カギ』を取り出しやがった！

「貴様！」

ガイアスはバカの持っているのが『カギ』だと察していた。

俺とミラは頭を抱えている。まさか本当にここに来てしまうとは…
…と。

「ははははっ！どうだレオン！偽物！お前らとの違いを見せつけてや
る！」

バカが槍の方を見る。

「バ、バカ野郎！？そんなことをしたら！」

俺の静止を聞こえているはずなのだがバカは止まらない。

「でえぇぇやあぁぁぁぁ！！！」

バシュン！

『カギ』を……装置にセットしやがった！

「こんのぉ、バカ野郎！！！」

キュウゥゥゥゥゥ――――――！

そして……クルスニクの槍が起動した。

ガシャン

槍が開く。

「ぐぅ！」

「どうだレオン！この俺が本物の巫子だっ！四大様のお力が、今よみがえる！」

「イバル……この大バカ者がああああ！！！！」

ミラはあまりにもバカなことをしでかしたバカに大声でいう。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

ゴオォォォォン！

雷が鳴り響く。

ギュウゥゥゥゥゥゥン

「あ、うぅ、ぐぅ！」

「ぐぅああ！」

「うぅ、ぐうぅああ！」

沼野にいたレオンたち・ガイアス・両国の兵士たちからマナを吸収

するクルスニクの槍。

「ど、ちくしょうがあ！」

レオンはマナを吸収されながらも槍に向かって斬撃を放つ。

が、

ガキィィィン！

槍に当たったが、破壊されなかった。

「やべえ、さっきの戦いで……」

レオンはガイアスとの戦いで大分消耗していたのか、いつも以上力が出ないようだ。

そして、

バシュウウウウウウウウウン！！！

槍はレオンたちから吸収したマナを空に放った。

バキィィィィン！

マナを圧縮した槍の攻撃は空にあった？何か〝を壊す音がした。

沼野にいる全ての者たちが空を見上げる。

そして、空から突風が吹き荒れる。

「どう、なったの……？」

「おい……ミラ」

「そんな……破られてしまった」

何が起こったのかがわからない皆を余所にレオンとミラが顔色を変えて空を見上げていた。

「そうか……そういうことだったのか！」

「槍は兵器なんかじゃなかったんだ！」

「ミラ？レオン？」

ジュードは顔色の悪い２人を見て不思議がっている。

そうしていると、

ドカァァァァン！

「な、なに！？」

槍が開けた穴のから攻撃が振ってくる。

ドカァァァァン！ドカァァァン！

レオンたちの周りでは爆発音が響く。

その爆発音は戦場となっている沼野の各地からどんどん聞こえてく

る。

そして、その穴からは……

「なっ……！どういうことだ……！」

アルヴィンは空から現れた物を見て、驚いていた。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「な、何あれ……」

「こわいよー！めっちゃこわいよー！」

「空を駆ける船だと……」

皆は空を駆けている船に驚いていると、

「ついにやった。くくくく……」

そこには、ラ・シュガル軍参謀副長であるジランドが、髪をオールバックにして、

「くははははは！」

笑っていた。

そんなジランドにアルヴィンが言う。

「ジランド！どうなってる」

「あれが、ジランド！？」

ミラ達はジランドの変わりように驚いていた。まあ、あんなに腰抜けそうな演技をしてたやつがいきなりこんなに様変わりすれば当り前だが……。

「ジランド……お前！」

アルヴィンがジランドに銃を向けると、

シュシュシュシュシュン！

氷の槍がアルヴィンの周りに突き刺さる。

「あっ！」

「おっ！」

ジュードとローエンはその氷の槍に見覚えがあった。そう、ナハティガルを重傷に追い込んだ氷の槍だ。

パリイィィィン！

ガイアスもその氷の槍を見てジランドに聞く。

「ハ・ミルをやったのは貴様らか？」

ジランドはガイアスに聞かれて話す。

「そう俺の精霊、このセルシウスがな」

ジランドは匣のような入れ物を取り出すと、そこから氷のマナが急激に活発化し、そこから精霊……セルシウスが出てくる。

「精霊セルシウスだと……？そのような名、聞いたことも……いや、待て？レオン……確かお前は……」

ミラが俺を見る。

「そうだ。俺が昔、ミラに教えた今は亡き、四精霊の内の一人だ」

今、この世界では火・水・風・地の大精霊が存在する。だが、属性的に言えば俺が使う雷・氷・光・闇の精霊術の精霊がいる。そのことを知っているのはミラだけ。

「我が民を手にかけたこと……許しはせん」

ガイアスが再び、構えを取ると

バシュンバシュン！

船からの砲撃が始まる。

「くっ！」

ミラが砲撃を行う船を見ると、上から人……兵士が降りてくる。しかもかなりの数が。

「なんなの……この人たち……」

レイアはそんな奴らを見て、驚き、怖がっている。

「アルクノアのジランドさんですね？」

兵士の一人がジランドに話しかける。

「ああ、そうだ。あれが例の女だ」

「……アルクノアだと……？貴様がナハティガルに黒匣（ジン）を伝えたのか？」

「くくくく。その女は殺すなよ。台無しになる」

ジランドは自分を睨むミラを見ながら笑い、兵士たちに指示を出す。

「装甲機動兵、前へ！」

「はっ！」

兵士たちは地面をすべりながら俺たちに近づき、

バシュンバシュン！

手に持っていたマシンガンみたいなもので俺たちに攻撃してきた。

戸惑う俺たち。

「うわあ！」

「ミラ！」

ミラとジュード、エリーゼが敵の攻撃で吹き飛ばされたのが見えた。

ミラはその拍子で剣を手から離してしまった。

俺はミラに近寄る。

「聞いてなかったのか？勝手なことはさせねえぜ」

そうしているあいだにアルヴィンは片手を抑えているし、ジランドと睨み合っている。

俺とミラ、ローエンは武器を構えるが、

「エリーゼさん！」

「はっ！」

「なに！」

俺とミラはローエンの見ている方を見るとエリーゼが気絶していた。

まずい！

「雷化！」

俺はすぐに雷を纏ってエリーゼに近寄る兵士を吹き飛ばす。

ミラも俺に近寄ろうとするが、

ドスッ！

「ガイ……アス……」

ガイアスがミラを気絶させた。

「……寝ていろ。事態が複雑になる」

「だ、な！」

俺はエリーゼとティポを両脇に抱えながらガイアスに攻撃しようとする兵士たちを蹴りで薙ぎ払う。

「ローエン！エリーゼとティポを！ジュード！お前はガイアスからミラを受け取ってくれ！」

俺はローエンにエリーゼとティポを預け、ガイアスはジュードにミラを預ける。

「お前らは先に逃げろ！ここは俺が時間を稼ぐ」

「なっ！そんなことよりもレオンがミラを！」

ジュードは俺にそう言ってくる。

「バカ野郎！こんなに船が空にあると守るべき者も守れんわ！……頼む」

俺はジュードを見る。ジュードも俺の意志が伝わったのか、わかってくれた。

「わかったよ。でも、ちゃんと無事に帰って来てよ？僕がミラに怒られるんだからね？」

「ああ……大丈夫だ。何たって俺は……不死身のレオンだから」

ニッコリと笑う俺を見て安心したのかジュードは皆を連れてこの場を離れた。

皆を見送った俺はガイアスと背中合わせに戦っていた。

「陛下！」

そこへ、ジャオ・プレザ・ウィンガルが合流する。

「レオン……何故お前がここにいるのかは置いておこう」

「そうしてくれや」

ウィンガル達も周りにいる敵を倒していく。

「ハアァァァァ！！」

バシュウゥゥゥゥゥゥン！

ガイアスは覇道滅封を放って敵を吹き飛ばす。

「ゼリャアアアアア！！！」

俺は雷化を維持しながら高速戦闘で敵を倒していく。

倒していくが無限に増えていく兵士たち。

そんな兵士たちを見たジャオは、ガイアスの目を見る。

ガイアスもジャオを見る。

「長年、世話になった」

「みなを頼みます」

ガイアスはジャオに背を向け、この場から去っていく。

ウィンガルとプレザは後退していきながらジャオにお辞儀をし、この場から去っていく。

「レオン……お主もここから離れるのじゃ」

ジャオは俺にまでを気を使ってきた。

だがな、

「断る」

「なぬぅ？」

ジャオは俺の返答に驚く。

「生憎、俺は自分の女と仲間を守るためにここに残ったんだ。今さら引けないな。それに……」

俺はジャオを見る。

「お前とは今度一緒に酒を飲もうって約束もあるし、お前はエリーゼに言うべきことがあるだろ？」

「……全く。お主にはかなわんのぅ」

ジャオは鎚を構え、俺は雷化をしながら再び剣を構える。

ジャオは地場にいる敵を、俺は？空〃にいる敵を倒す。俺は雷のマナで翼を作る。

バサッ

「お主、本当に規格外じゃの」

ジャオは空を飛んでいる俺にそう言う。

「ハッ！俺の規格外は今に始まったことじゃねえさ」

バシュウゥゥウン！

ジャオのいるところに攻撃が当たる。

が、不動の異名を持つジャオはそこから一歩も動いてなかった。

俺は剣に雷のマナを溜め、

「「霊力（ゲート）野……全っ開！！」」

俺とジャオは同時に地上と上空に己の力いっぱいの攻撃を繰り出す。

シュドオォォォォン！バキュゥゥゥウン！

ジャオの一撃は地上にいた兵士たちを吹き飛ばす。

俺の一撃は空を駆ける船を何隻か破壊した。

俺は翼を消してジャオの隣に立つ。

ジャオは己の力に耐えられなかった鎚を捨てる。

ガシャン！

船が俺たちに砲撃を向ける。

「まずい！」

俺はジャオの手を掴み、

「間に合えよ！」

もう一つの手を地面にかざす。

「――――――――――！！」

俺があることを言うのと同時に砲撃された。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

ドカアァァァン！

『っ！？』

ジュード達は自分達が逃げてきた方からの爆発に目を向ける。

だが、それが命取りになった。

レオンに破壊されなかった船からの砲撃でパーティーを分断された。

「うわあああああ！！」

「きゃあああああ！！」

ジュード・アルヴィン・エリーゼとミラ・ローエン・レイアに分断される。

「レイア！レイアアア！！」

「ジュードオォ！！！」

ドカアァァァァァン！

２人の声は爆発音によって聞こえなくなっていった。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

第４６話　クルスニクの槍……起動（後書き）

はい、ここまでで一旦終わりですね。レオンはパーティーの皆と別れましたね。
そして、ジャオを助けるレオン。レオンとジャオの生死はいかに！
でも、こんなことになったのってイバルのせいだよね。
ゲームではそのことを指摘されてなかったし……まあ、この小説内では指摘するつもりですがね……クフフ。
次回もお楽しみに！

第４７話　ミラ組とジュード組。そして、新たな仲間？（前書き）

戦闘がありますが……省きます。レオンＳＩＤＥはありません。

第47話　ミラ組とジュード組。そして、新たな仲間？

～第三者ＳＩＤＥ～

空から現れた船と兵士たちによってファイザバード沼野はボロボロになっていた。そんなボロボロになった沼野のあるところでジュードはただ、一人だけ倒れていた。

それを敵がいるかを捜しに来ていたアグリアとプレザが見つける。

アグリアは倒れているジュードに手を合わせたり、顔を踏んだりする。

「アハ～。アハハハ」

「気を失っているとわかってやるなんて、バカね。そういうのは反応があるから楽しいんじゃない」

呆れながらプレザはアギリアにいう。そこへ、

「アグリア」

ガイアスとウィンガルが来た。

「は、はい」

ガイアスに呼ばれ、ジュードを踏むのをやめるアグリア。

「……ふふ」

アグリアが自分の後ろに静かに立つのを見てプレザは苦笑する。

ガイアスは倒れているジュードを見て言う。

「マクスウェルはいるか？もしくはレオンは」

ウィンガルは周りを見渡す。

「いえ、一人のようです」

話をしていると反対側から謎の兵士達が来た。

「もうここまで来たようですね」

「面倒だ。身を隠せ」

ガイアス達は兵士に見つからないように身を隠す。

「マクスウェルを見たか？ただの女にしか見えなかったな」

「あんな女が断界殻（シェル）をつくりだしたとは信じられんよ」

話をしている兵士2人は倒れているジュードを見つけ、駆け寄る。

「断界殻（シェル）……？」

ガイアスとウィンガルは目線を合わせ、ウィンガルは頷く。

そして、ガイアス・ウィンガル・プレザ・アグリアはその兵士たちへ駆けより倒す。

「断界殻（シェル）ってなんだよ、おらおら。あはは」

アグリアはジュードの時みたいに兵士を踏みつける。

そうしていると、

ガタガタガタガタ！

「う……ぅ……」

振動で目を覚ましかけるジュード。そんなジュードに近づこうとするプレザであったが。

「近づくな、巻き込まれるぞ」

ガイアスがそう言うと同時に、振動が強くなり、プレザとアグリアは素早く後ろに下がった。

そして、その振動のせいでできた穴にジュードと倒されていた兵士2人は落ちて行った。

「生きていれば、必ず俺の前に現れよう。その時、俺の役に立ってもらうだけだ」

そういい、ガイアスは離れようとするが、

ドシャアァァァァン！

『！！』

ガイアス達は後ろの壁が崩れるのが聞こえ、そちらを見ると……

「へ……陛下……」

そこには傷だらけで片手にレオンを背負ったジャオを立っていた。

「ジャオ殿！」

ウィンガルとプレザはそんな傷ついたジャオに近づく。

「よっこらせっと」

ジャオはレオンを静かに降ろし、腰を壁にかける。

「無事だったのか」

ガイアスがジャオに聞く。

「はい。レオンに助けられましたわ」

「レオンにだと？」

「ええ。陛下達と離れた後、儂は奴らを蹴散らし、死ぬ覚悟をしておりました。ですが……」

ジャオは寝ているレオンを見る。

「奴らの砲撃が当たる瞬間にレオンに手を掴まれ、地の中に引きづり込まれました」

「ああ？地の中に引きづり込まれるだぁ？」

「そうじゃ。レオンは精霊術にも長けておるためかの？片手を地面にかざしたら地面に穴があき、そこに入ることで砲撃から身を守ることにできたのじゃ」

ガイアスは腕を組みながら言う。

「なるほどな。レオンには感謝せねばなるまい」

「そうですね。はい、治療終わりましたよ」

ジャオの傷はガイアスと話をしながらプレザが治療していた。

「では、ジャオ。レオンをこれから行くザイラの森の教会へ連れて行け」

「わかりました」

ジャオはガイアスに言われ、レオンを肩に乗せる。

「行くぞ」

ガイアス達は沼野を離れ、ザイラの森の教会へ向かった。

～その頃、ミラは～

「はっ！」

ある洞窟で目を覚ましていた。

「（あの夢の声……ずいぶん久々に聞いた気がするが……）」

ミラは生まれて初めて夢を見たようだ。

「痛っ！」

立ち上がったミラは体に走る痛みに声を上げた。

「（あのあと一体どうなったんだ……？みなは……レオンは無事なのか……）」

ミラはレオンから貰ったペンダントを見る。

「（レオンなら、きっと大丈夫だ。レオンは強い……）」

ミラはペンダントを仕舞い、洞窟の先に見える出口から外に出る。

外に出たミラは周りを見る。

「みんな！レオン！」

だが、その声には誰も答えない。辺りは吹雪いているだけである。

ガシャ！

「レオン？」

音の主がレオンだと思ったミラは嬉しそうにするもその表情もすぐに変わる。

「なっ！」

「定時連絡か？あっ！」

岩影から出てきたのはあの兵士だった。兵士もミラを見て声を上げる。

戦いが始まるが、戦いはすぐに終わった。

戦いが終わると辺りを見渡すミラ。

すると、奥から別の兵士がミラの方へやってくる。

「くっ！」

ミラはその場を走って逃げる。

走って逃げたミラであったが、ここがどこだかが余計にわからなくなってしまった。

「うかつ過ぎた……！」

ミラは自分の行動がうかつ過ぎるのを悔いてその場を歩いて移動する。

歩き続けているとミラはこんなことを話し始める。

「ふ……私は戸惑っていたということか……。……さっきの夢と言い、まるで人間だな……おっと、こんなことを言っていたらレオンに怒られてしまうか」

ミラは立ち止まり、周りを見渡し、言う。

「……久々の一人、か……思い起こせば今まではレオンがずっといたからな。これが……寂しいと言うやつか」

ミラはそのまま、辺りを歩き続けること数分。

「……はぁ」

ミラは何も見つからないことにため息をついていると、

「ミラー！！」

レイアとローエンの２人が駆け付けてきた。

レイアは肩で息をしている。

「ミラさん、よかった。まさか出て行かれるとは……心配いたしました」

「……すまない。うかつだった。他のみんなは？レオンはどうしている？」

ミラに聞かれ、首を振るレイア。

「……わからないの」

「何？一体あの後何があった？」

そして、レイアとローエンはミラが気絶してから何があったのかを話す。レオンは自分達を逃がすために時間を稼いだことも。

「……そうか」

「ア・ジュールの人たちが助けてくれるなんて思ってなかったよね」

「……ああ。そうだな」

「レオンさんたちもきっと無事でいてくれます」

「……うむ」

話をしていると空から音が鳴り響いた。

シュウゥゴオォォォォォォン――――――

「沼野に現れた空飛ぶ船だよね」

「あれは……一体何なのでしょうか……」

ローエンが珍しくそういうとレイアは驚いてローエンにいう。

「意外。ローエンでも見当つかないことってあるんだ」

「もちろんいっぱいありますとも」

「……」

「どうかしたの、ミラ？」

レイアはあまりにも元気のないミラを見て聞いてみる。

「いや……なんでもない」

だが、なんでもないと言うミラである。

そんなミラを不思議そうに見る2人。

「それよりレオンたちを捜そう。きっと近くにいるはずだ」

「うん」

「洞窟を進んでみましょうか」

先に歩きだす2人。

そんな中、ミラは動かず胸を抑える。

「何だ……夢のせいか……？……レオン。早く無事な姿を見せてくれ……」

そういい、レイア達の方を見ると、レイアが手を振っていた。

ミラはそちらのほうへ歩き始めた。

～その頃のジュードは～

ジュードは目を覚ますとミラの姉と名乗る精霊……ミュゼと出会い、マナを回復させるためということで使役するようになっていた。

その後、移動し続け、洞窟内に入るとアルヴィンとエリーゼ、ティポと合流し洞窟を進んでいた。

「ホントにこっちでいいのかな、ジュード君？」

「え、どうして僕に訊くの？」

「お嬢ちゃん？」

「ジュードにお任せです」

何とも人任せに進むメンバーである。

「アルヴィンはどう思ってるの？」

「俺が決めた道で信用できんの？」

「無理～。やだ～」

エリーゼの代わりにティポが答えた。

「だってよ？」

ジュードは何も言わずミュゼを見る。

「どうぞ御心のままに」

「う、うん……」

結局は自分なのか……と思っていると、

「ジュード！何かいます！」

「え……！」

エリーゼに言われて湖を見るジュード。

バシャアァァン！

【グウオォォォォォォ！！！！】

いきなり現れた魔物に驚くエリーゼ。

「あら。アクアドラゴン。とても怒っているよう」

魔物……アクアドラゴンを見て優雅に笑うミュゼにアルヴィンが言う。

「なに、優雅に笑ってんの。もうやるしかないぜ！」

「うわわ～！」

二体のアクアドラゴンがジュード達に襲いかかる。

戦闘にはミュゼも参加してジュード達を援護している。

その援護とエリーゼの精霊術でアクアドラゴンを翻弄し、止めと言わんばかりにアルヴィンが技を繰り出す。

「我流紅蓮剣！！」

アルヴィンは炎を纏った剣で斬り上げて自分もジャンプし斬る。

「目ぇかっぽじってよく見てな！」

銃を乱射する。

「おたくの最期の光景だ！エクスペンダブルプライド！！」

アルヴィンが最後に地面に大剣を空中から叩きつけ、大爆発を起こす。

【グウオォォォォォォ！！！！】

二体のアクアドラゴンはアルヴィンの秘奥義を喰らって絶命した。

「どうしたんだよ～、ジュード君。ぼーっとしちゃダメ～！」

「ご、ごめん……」

「ま、いいんじゃないの？みんな無事なんだから、さ」

アルヴィンは特に気にした様子はなかった。

ジュード達はそのまま、奥へ進むのであった。出口を捜して。

～その頃のミラ達は～

ミラ達も洞窟の奥を目指していた。

奥へ行く途中、兵士たちを見つけ、情報を聞き出そうとするが洞窟にいた炎の魔物に殺されてしまい、情報を聞くことができなくなってしまった。

そのまま、立ち止まっている暇はないので奥へと来ていた。

「ねえ、二人とも。訊いていい？」

ミラとローエンはレイアを見る。

「わたし、看護師になる資格あると思う？」

「さっきの兵のことを気に病んでいるのか？あれはしょうがないだろう」

そう言って先に進むミラ。

「……それだけじゃないの。わたしが看護師になりたいのって、ジュードを手伝って働けたらいいなってぐらいだったから」

レイアは少し顔を紅くしながら言う。

「いけないことなのか？」

「首都でアグリアさんに言われたことを気になされていたのですね？」

ローエンに言われ、頷くレイア。

「看護師って、病気の人を助ける仕事でしょ。患者さんや、その家族から見たらわたしの動機なんてすっごく不純かもって……」

「ふむ……。動機がそれほど重要だとは、私には思えないがな」

そう、自分の思ったことをミラはレイアに言うが、

「けど……それが自分で自分の失敗を許しちゃう原因なのかなって。努力していれば、それがいいって思えちゃうんだ。結果は二の次だって」

レイアは自分のすることが二の次といった。

そんな話をしている最中に、

【ガウガウ！ガウシャアァァァァァァン！！】

魔物の声が鳴り響く。

「さっきのやつか？」

「なんか、さっきより機嫌悪くない？」

「兵たちが我々の捜索をする際、縄張りを荒らしたのでしょう」

ミラは周りを見渡す。

「……どこから来る？」

「ミラさん、逆です！」

【グゥオオオオオオオン！！！】

魔物……ファイアティグルがミラ達に襲いかかる。

「ちっ……」

戦闘が始まる。

戦闘が始まってからはローエンとミラの水の精霊術で攻撃し、レイアが棍で攻撃する簡単な戦闘だった。

最後は、

「タイダルウェイブ！」

水の渦がファイアティグルを巻き込み、

「フェローチェ　荒々しく」

水流を水柱にして巻き上げ、

「グラツィオーソ　優雅に！」

凍らせ、

コツンコツン

「グランドフィナーレ！！」

ファイアティグルは凍ったまま砕き散れた。

戦闘が終わるとミラが自分の油断で危うくやられるのがわかっていた。レイアとローエンの助けがなければどうなっていたか……と。

「私は……迷惑ばかりかけているな」

「そういう時もあります。そうお気になさらずに」

ローエンにそう言われるミラであったが、胸の中でざわつく何かにイライラしている。

「……レオンがいないだけで、こうも違うのだな。いつもはレオンがいるから落ちつけていたのだが……」

「それでしたら、さら早くレオンさんと合流しましょう」

「……そうだな……」

ミラはレイアを見る。

「レイア、先ほどの答えだが……」

「あ、うん……」

「何ごとも結果は重要だ。だが、私はやろうとする意志が大切だと思っている。四大を失った時、私はそれでもレオンと共にやろうと決めただけだ」

「……そうですね。その意志をもたねば結果は伴いません」

二人に言われて元気が出てきたレイアは二人にお礼を言う。

「うん。そうだね……ありがとう。二人とも」

ミラはそんなレイアを見て、ほほ笑む。

「さぁ、行こう。出口はきっとこの先だ」

3人は奥へ進み出口を捜すのであった。

そして、ミラ組とジュード組が洞窟から出たのは同時であった。二組はそのまま、何かがあるであろうと思い、先へ進むのであった。

第４７話　ミラ組とジュード組。そして、新たな仲間？（後書き）

はい、今回一度もレオンは話しませんでした。
そして、やはり、ジャオは生存していましたねｗ
今回は第三者ＳＩＤＥのみでお送りしました。
次回もお楽しみに！

第４８話　合流

～ミラＳＩＤＥ～

洞窟を出てから道筋を進んでいくと、見覚えのある教会を見つけた。

「ここって……」

レイアも見覚えがあり、教会を見ている。

「見ろ。カン・バルクの城だ」

私はここから見える以前来たカン・バルクの城がここから見えるのを二人に言う。

「……ミラっ！レイアっ！」

そう、話しているとジュードの声が聞こえてきた。

その方を見ると、

ダキ！

エリーゼが私の腰に抱きついてきた。

「ミラ！」

「会いたかったよー！」

ティポは私の……む、胸に顔を押し付けてくる／／／

あ、こら！そこを擦るな／／／

私は表情に出さないようにした。

「ジュード！」

レイアもジュードの無事を確認できてうれしいようだ。

「みんな無事でよかった……レオンは？」

ジュードの言葉に私たちの表情が固まる。

「そちらでは会っていないのか？」

「うん……てっきりミラの方にいるかなって思ってたけど」

私も他の皆も暗くなっている。

そんな中、

「ミラ」

羽の生えた知らない女が話しかけてきた。

「む？誰だ？初めて見る者だが……」

「え？」

ジュードが私の言ったことに驚いている……何故だ？

「私はあなたの姉です」

「姉……？私に姉などいないぞ」

そうだ。私には姉などいないはず。生まれてからずっとそのような者に会ったことなどないぞ？

「どういうこと、ミュゼ？」

ジュードもおかしいと思ったのかミュゼに聞いた。

「私も話をするのは初めてです。けれど、私たちは同時にこの世に生を受けた精霊であることは事実」

そう言われ、私は意識を集中する。すると、私と似たような存在をミュゼから感じる。

「確かに……精霊であることは間違いない」

「うふふ。そんなに警戒しないで。姉と偽ってあなたを騙す意味など精霊にはないでしょう」

ミュゼは私を見ながら言う。

「だって、あなたはマクスウェルなのだから」

「……確かになんの得にもならないもんね」

「では、なぜ、ジュードの前に現れた？」

何もジュードではなく私の前に現れればいいものを……。

「さあ？それは私にもわからないのよ。私が降り立った場所に彼がいた……ただ、それだけなのよ」

「……そうか」

……あまり納得しない理由だが、一応信じよう。

そう、私が思っていると、

ガシャン

教会の扉が開き、中から

「ウィンガルさん！？」

ガイアスの部下であるウィンガルが出てきた。

「話はあとにしてもらおう」

ウィンガルが手で私たちに待てと合図を出す。

ピイィィィィィン

何かが響く音がしてきた。

「情報どおりか……」

ピィーガガァ

「私はジランド。まずは、君たちの街に強引に進駐した非礼を詫びよう。だが、我々の目的は支配などではない！」

声の主はあのジランドだった。やつめ、何を企んでいるのだ！

「これは大国間による最終戦争を回避するための、非常処置だ。諸君の生活と安全はアルクノアが責任をもって保障しよう！」

……クルスニクの槍を使っておいて……どの口がこのようなことを言っている！！

私はジランドの話を聞いて拳を強く握る。

「我々と諸君の願いは、ひとつのはずだ！リーゼ・マクシアに永遠の平和を！！」

そして、声がしなくなった。

「ふざけた男だ。ジランド……。黒匣（ジン）などを使って人や精霊に害をなしながら！」

「……もう、あの者たちを討つしか道はないのではないかしら？」

「うむ」

ミュゼの言うことには賛成だ。あの男が話し合いだけでやめる男ではないことは明白。

「でも、どうするんですか？」

「あいつら、めっちゃつよかったでしょ～？」

確かに……エリーゼとティポの言うとおりだ。やつらは強い。黒匣（ジン）のレベルが今までとはケタ違いだった。

「……アルヴィン。もう知ってること、全部話してよ」

ジュードがアルヴィンに話を聞こうとしているがアルヴィンはそれを無視して立ち上がった。

「アルヴィン！！」

ジュードもそんなアルヴィンに少々怒り気味でいう。

アルヴィンはそれをも無視し、鳥がアルヴィンの腕に止まる。

それを見てから私はウィンガルに聞く。

「ガイアスはヤツらに抗うのだろう？」

私の問いに何も答えず、ウィンガルはそのまま教会の中へ向かっていく。

「誘っていますね……。わざと私たちの前に現れるとは」

「僕たちを試してるの？」

「罠……とか？」

皆がそれぞれ言っていると、アルヴィンが話してきた。

「……行こうぜ。ケリつけるんだろ？」

いつもと雰囲気が違うのにはジュードや他の皆も気付いたみたいだ。

「何か……あったの？」

アルヴィンは私を見る。

「もう裏切らない……約束する」

「……信じろと言うのか？」

何度も裏切ったアルヴィンをさすがにすぐは信じられんぞ。

「ジランドは許せねぇ。頼む……俺にジランドを殺せてくれ。次にもし裏切ったら、迷わずお前の剣を俺に突き立ててくれてもいい」

……目が本気だな。本気で裏切ったら自分を殺してもいいと言っている。一体何があったのだ？

「だから、俺も一緒に行かせてくれ」

「ダメだと言ったら？」

「……俺だけでもヤツを殺る」

……本気、なのだな。己の命をも賭けてでもジランドを殺りたいのか。

「……いいだろう」

「悪ぃ……サンキュな」

私は教会……いや、中にいるであろうガイアス達とも話をする必要があるようだな。

「ガイアスたちの思惑も確認せねばな」

「うん」

私たちは、ガイアス達と話し合うために教会に入った。

教会に入って最初に目についたのは、ガイアスと四象刃（フォーヴ）だった。

「来たか」

「……結局その男を信じるというのか。意外と甘いな。マクスウェル」

ウィンガルはアルヴィンを見て、そう言っているのだな。まあ、確かに甘いと言えば甘いのだろうな。

「私たちをここへ導いた狙いはなんだ？」

「我らはヤツらと雌雄を決すべく、立つ。お前たちが勝手にヤツらに挑むというならそれはそれでいい」

「だが、その前にお前には話してもらうぞ。お前とレオンがひた隠しにしてきた「断界殻（シェル）のことだろ？」……レオン。目を覚ましたか」

レオン……！？

私は声のした方を見ると、

「オス。皆、無事でよかったぜ」

頭に包帯を巻いたレオンが立っていた。

無事で……無事で、よかった。

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

皆は俺のことと俺とミラが隠してきた断界殻（シェル）のことで喜び、疑問に思っている。

「ミラ。話してもいいんじゃねえか？こうなった以上、隠し通せる

ものでもないだろ」

「……そう、だな。……今から二千年前……このリーゼ・マクシアは私の施した精霊術、断界殻（シェル）によって閉ざされた世界として生まれた」

ミラの話を聞いて驚く皆。

「この世界が……ミラにつくられた世界？」

「びっくりー！神様見たい！」

レイアとティポはすごい驚きようだ。まあ、今まで一緒に旅をしてきた仲間がこの世界を作った……なんて言われて驚かないはずがないな。

「すべては精霊と人間を守るためだった」

「閉ざされた、といったな。それでは断界殻（シェル）の外にはまだ世界が広がっているというのか？」

ガイアスのピンポイントの問いが出てきた。

「うむ。その世界をエレンピオスという」

ミラがガイアスの問いに答えると皆はさっき以上に驚いていた。まさかこの世界……リーゼ・マクシアの外にそんな世界があるなんてっと驚いている。

「だが、クルスニクの槍について私とレオンは大きな思い違いをしてしまった」

「そう、ジランド達がナハティガルを使って作らせたクルスニクの槍は兵器ではなく、断界殻（シエル）を打ち消す装置だったんだ」

俺がミラの説明に続いて話をする。

「打ち消すだと……？それに何の意味がある？」

ガイアスの問いにミラは、わからない、と首を振る。

「わからない……断界殻（シエル）を打ち消し、エレンピオスにマナを還元する算段でもしていたか……」

「あるいは何か別の目的があったのか……」

「ちがう……」

皆の視線がアルヴィンに集まる。

「アルクノアはただ……帰りたかっただけだ。生まれ故郷のエレンピオスにな。この世界に閉じ込められた二十年余り……そのためだけに動いてきた」

アルヴィンが俺とミラを見て話を続ける。

「断界殻（シェル）をぶち破る方法を見つけるか断界殻（シェル）を消すか……」

「断界殻（シェル）を消すためには生み出した者を排除しなければならない」

「……アルクノアがミラの命を狙ったのはそのためだったんだね」

レイアが何でミラがアルクノアに狙われていたのかがわかり、そういうとミラと俺は頷く。

「解せんな……ジランド、何を企んでいる？」

「え、どういうことですか？」

エリーゼは何でガイアスがジランドが何かを企んでいるのかがわからず、そう呟くとローエンがそれに答える。

「アルクノアの目的とジランドの行動はそぐわないものです」

「エレンピオスから軍を呼び寄せる必要なんかない」

再び、皆の視線がアルヴィンに集まる。

「リーゼ・マクシア統一……？俺たちは……そんなこと望んじゃいない」

「ジランドは断界殻（シェル）がある今の世界のあり方を、何かに利用しようとしているのかもしれない」

ウィンガルの言ったことに、アルヴィンは何かを思い出したのか言い始めた。

「そうか、異界炉計画だ……」

「え……？」

「あ？なんだ、それ？」

皆は異界炉計画という初めて聞く、その名前に首を傾げる。

「通称、精霊燃料計画」

「燃料……？」

「まだ俺が向こうにいたガキの頃、従兄が話していたのを覚えてる。黒匣（ジン）の燃料である精霊を捕まえるって話があるってな」

アルヴィンの話しを聞いたプレザがその話を元に簡単にジランドのすることを話し始める。

「……つまり、ジランドの狙いは精霊の囲い込みってワケ？」

「だけど……それおかしいよ　精霊だけなら、あんなウソつく必要ない。ジランドは……」

ジュードは俺たちを見ながら言う。

「霊力野（ゲート）をもつ僕たちも一緒にリーゼ・マクシアに閉じ込めるつもりだよ」

バキィィン！

俺はそれを聞いて、イラつきが限界に来ていたのかがわからないが椅子を握力だけで壊してしまった。

「「リーゼ・マクシアの人たち（民）を資源にする気か！！（するつもりか）」」

俺とガイアスが同時に言った。

「ふざけたことを！」

「……バカげたことを」

「多分ジランドは海上にあるアルクノアの本拠地に戻ってる。エレンピオス軍も来てるんだ。船で近づくにも厳しいぜ」

アルヴィンが船でアルクノアの本拠地に行くのは無理だというと、ウィンガルが提案を出す。

「では、カン・バルクに停泊している連中の空駆ける船を奪うのはどうかと」

何とも凄いことを平然と言うウィンガルに驚くレイアはエリーゼやローエンに言う。

「あの人、さらっとすごいこと言ってない？」

「ですが、それしか手はないでしょうね」

ローエンも自分がウィンガルの立場であったらそう決断するんだろうな。

「よし！明日決行する」

ガイアスがそういい、この場を去ろうとすると、

「まって！ガイアス！一緒に戦ってくれるんでしょ」

ジュードが呼びとめ、ウィンガル達はジュードを見る。

「僕たちの目的は同じでしょ。だから……」

「冗談ではない」

ジュードの言うことを否定するガイアス。

「勘違いしてんじゃねーよ！」

「マクスウェルが勝手に断界殻（シェル）をつくりだし、我らをこの世界に閉じ込めている事実……これも知った以上は捨て置けん。お前たちとはまた争うことになるかもしれぬ」

「そんな人たちとは必要以上に馴れ合えないわ」

「お前たちは勝手にやるがいい。が、我らの邪魔はするな」

ガイアス達は言いたいことを全部言ってこの場から去っていった。

「もー！なにあれー！」

「ヤツらも手が足りないのだろう。情報を共有させたのが何よりの証拠だ」

「ああ言いつつも、今は私たちをアテにしているのでしょうね」

「今は、な……」

「さて、明日に備えてゆっくりしようじゃねえか」

俺は疲れているであろう皆に、そういうが、

ガシッ！

「え……」

ミラが俺に笑顔を見せながら肩を掴む。

「レオン……話を聞かせてもらおう」

「ひぃ！？」

笑顔の後ろに阿修羅が見えた。

な、何で怒っているの？！

「私たちを逃がすためとはいえ、ファイザバード沼野でのこと……忘れたとは言わせんぞ？……お前とだけ合流できなくて……心配していたのだぞ……」

悲しい表情をするミラ。

俺はそんなミラを見て、申し訳ないと思う。

「すまない」

「……わかってくれればいいさ」

ミラが再び、普通の笑顔になる。

「さあ、皆。今日は休もう」

ミラがいい、皆で休むことにした。

第４８話　合流（後書き）

次回はこの続きと行きますかね。
次回もお楽しみに！

第４９話　レオンとミラ、そしてガイアス（前書き）

何か今回は無理な気がするぜ。そして、短いぜ。次回の都合上。
それと皆さんが待っていたかわかりませんが、ノクターンで記念すべき第一話を投稿しました。こちらがそのＵＲＬです。
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３４０１ｘ／

第４９話　レオンとミラ、そしてガイアス

～レオンＳＩＤＥ～

俺は夜、皆のように寝ないで教会の椅子に座ってボォーとしている。
さすがに2，3日眠り続ければ眠くなどない。

と、そんな眠れない俺の元に、

「眠れないのか？レオン」

ミラがやってきた。

「まあな。ファイザバード沼野での出来事から今日まで眠り続けていたからな」

「……そうか。でも、レオン、本当に無事でよかった」

「……サンキュ」

俺はミラの肩を抱き、ミラは俺に静かに寄りそう。

「レオン……私が今までしてきたことは……どう思う？」

「どうって……ミラが自分で決めたことを……自分の中で正義だと思ったことを実行してきたんだろ？俺はそれに今まで付いていく、一緒にやってきただろ？」

「正義か……」

俺が言ったことに反応するミラ。

「正義とは、見る者によって定義を変える。難しいものだ」

「まあ、確かにそうではあるな。俺には俺の。ミラにはミラの正義がある。見る人によって変わってくるだろうな……俺から言っておいて何だが」

ガシャン

「では、お前たちの正義とはなんだ？」

「ふ。馴れ合わないのではないのか？」

「答えろマクスウェル、レオン」

ミラの言うことに答えず、自分の質問に答えろと言わんばかりに話を進める。

「自らの胸の内にだけ秘めた、意志の力だ」

「そして、それを行うために自身がすべきことを見失わない、心だと俺は思う」

俺はミラの意志とは別に心も大事だと思う、どんなに意志が強くなろうとも心の弱いものがそれを成し得るはできない……そう思っている。心と意志は二つで一つ。それが俺独自の考えだ。

「ふっ、マクスウェル。俺も同じだ。強き者は自らその意志で、その責を果たさなければならない。それ故、俺は弱き者を守り、導いてやらなければならない。」

「ガイアス。人の弱さとは力そのものではなく、心の弱さ……レオンが言っていたことだ。心弱き者は必ず生まれる。だが、それ自体は悪ではないだろう」

「では、弱き者が強くなれる時まで支えること。それが俺たちの義務だと考えよう」

「俺たち……か」

「そうだ。俺たちだけではない。すべての強き者たちがすべての弱き者を支える。これであれば人の系譜の中でも生き続けるであろう、マクスウェル？」

うわー。ガイアスのやつ、ミラに対してすげえ、挑戦的な……これが俺の答えだって表情をしているな。これが一国を支える王のか。

「ふふ、ファイザバード沼野の続きをしようというのか？」

ミラもあの時のガイアスの言葉を思えているのか苦笑しながらガイアスに聞く。

「あの時、言ったように、俺が力を手にしたのなら、人の歴史は変わる。だが、ジランドのような力を己のためにしか使えぬ者が台頭すれば、人は同じ過ちを繰り返す」

「そうか……。だが、私が答えを出してやれるものではない。お前の正義はお前だけのもの。私やレオンなど関係ない」

「ふふ……そのとおりだな」

俺は話しあう二人を見ていてやっぱりと思っていた。

「くっくっく……やっぱ、ミラとガイアスは似ているな」

「俺がマクスウェルに似ているだと？」

「ああ。ミラの言葉は聞くと無茶だとは思えてくるんだが、それがウソじゃねえって思えてくる。ガイアスの言葉も偶に無茶だと感じることもあったが……それもウソじゃねえって思えてくるんだよ。そこが似ているなって思ってな」

ガイアスは一瞬、ポカーンとしたのを俺は見た。いやはや、珍しいもんも見た気がしたぜ。

「ククク……そうか、俺がマクスウェルみたいか……。確かにな」

珍しくガイアスが笑ったのを見たぜ！？いつもはキリって感じだが、

笑えたんだな……ガイアスって。

「ではな……」

ガイアスはそう言うと教会を出て行った。

第４９話　レオンとミラ、そしてガイアス（後書き）

次回、あのバカが登場するとこまで行きます。

第５０話　バカとの別れ（前書き）

イバル……さようなら。
あと、久しぶりにオマケを書きました。

第５０話　バカとの別れ

～レオンＳＩＤＥ～

次の日の朝

俺とミラは出口で出くわし、一緒に外に出るとジュード達やガイアス達が集まっていた。

「空中に停泊している艦へはどのように攻め入るつもりなのですか？」

まあ、確かに空にいる艦へどう行くかはわかんないよな。俺だけだったらマナで作った翼で行けるけど……。

「城に繋いであるワイバーンを使う」

ワイバーン？ああ、そういえば、居たっけか。

「城まではどうする？」

「俺の城に向かうのに策を弄するつもりはない」

「大通りから突破する」

ガイアスとウィンガルの言ったことにジュードが驚き、言う。

「そんな！無茶だよ」

「そうです。せめて二手に分かれて……」

そういってローエンは何かに気付いたのか黙りこむ。

「てめえらの意見なんて求めてねーんだよ」

「レオン……」

ガイアスが俺を見る。その目で語っていることも俺には分かる。

「ガイアス……お前が何を言いたいのかはわかっているぜ？」

「ふっ……そうか。行くぞ」

俺がそう言うとガイアスは納得し、ウィンガル達を連れていく。その途中、プレザが俺の前にで止まって、呟く。

「教会の脇から市街に続いている道があるわ」

プレザはそれだけを言ってガイアス達の痕を追った。

「もー！なんで仲よくしてくんないのー！」

「うふふ、どうしましょうか？」

「そうだな……」

皆はどうするかを考えているとローエンが話をし始める。

「教会の脇を抜けて、裏道から市街へ入り、そこからは屋根伝いで城を目指しましょう。そして、空中戦艦奪取と共に城と兵たちを奪い返すのです。彼らは陽動を買って出てくれたんですよ」

ローエンの言った?陽動〟を言うのを聞いたジュードやレイアは一瞬驚くが、

「素直じゃないなぁ」

「うん、ホント、素直じゃないね。ガイアス達は」

笑っていた。

「では、行こう」

俺たちはガイアス達が陽動している間に戦艦を奪取するために城へ向かうのであった。

俺たちは裏道から市街に入るり、歩いていると

「全員、伏せるんだ」

俺は皆に一度、伏せるように指示を出す。

下を見るとガイアス達がエレンピオス兵達と戦っていた。

瞬く間にその場にいたエレンピオス兵達を倒す。

「ガイアス、強いですね」

「だろ？あいつと戦うのって結構面白いんだよ……な！」

俺は隠し持っていたナイフを自分の後ろに投げる。

「ぐあ！」

すると、俺の後ろの屋根上にいたエレンピオス兵を倒した。

「……僕、時々レオンには後ろにも目があるんじゃないの？って思うときがあるよ」

ジュードがそう言うと何故か皆頷く。

「そうか？気配がしたからナイフを投げただけ…だよ！」

今度は同時に６本投げる。しかも、今回はナイフ同志が弾きあって別々の場所に落ちていく。

ドサ

その音と共にエレンピオス兵が６名、落ちてきた。

「じゃあ、行こうか」

俺はそれを見て、先に進もうと皆に言う。

その時の皆の目が……「こいつやっぱり、後ろに目があるんじゃないか？」と語っていた。

進んでいる途中、ガイアスと目が合い、頷くとガイアスも頷き、ガイアス達も城へ向かっていった。

そのまま、俺たちは屋根伝いに進んでいき、城のワイバーンのいる前に降り立つ。

ガシャン

ワイバーンの檻を開け、前に乗った時のメンバーでワイバーンに乗る。

「皆、行くぞ！」

バサ……バサ……バサ……

ワイバーンにそのまま、空高くへ上昇し、カン・バルクの上空に停泊していた艦へ乗り込んだ。

ワイバーン達は俺たちを降ろすと戻っていった。

「艦橋を掌握しましょう」

「船尾のあれじゃないか？」

アルヴィンの見ている方を見るとあそこが一番怪しいな。

「敵に侵入されたぞ！」

皆で船尾を見ているとエレンピオス兵が現れた。

「ここからは力押しだ」

「皆！遅れるなよ！」

戦闘を開始した。

「行くぞレオン！」

「最大火力で！」

光の波動が敵の動きを止め、

「「フェイタルケイジ！」」

そこにインディグネイションが降り注ぐ。

『ぐうあああああ！』

全体にインディグネイションが降り注がれ、出て来ていた兵士たちをすべて消滅させた。

「レオン……手加減しないよね（汗）」

「あの歳でこのようなことをできようとは……歳は取りたくないですな（汗）」

ジュードとローエンは俺を見て汗をかいている。まあ、確かに俺のぐらいの年齢でこんなこと普通はできないよな。

「ミラ、続けていくぜ！」

「いつでもいいぞ！」

俺はミラと一緒にどんどん敵を薙ぎ払っていく。

「「受けよ、無慈悲なる白銀の抱擁！！アブソリュート！！」」

エレンピオス兵を氷付けにし、氷の塊を降らせると、砕け散った。

「飛燕連脚！虎牙破斬！閃空裂破！襲爪閃空破！！」

連続して回し蹴り、斬り上げから斬り下ろし、回転斬りでエレンピオス兵を打ち上げて突き、最後はエレンピオス兵を打ち上げてから、斬り上げて雷弾を放ち、落雷と同時に斬り下ろす！

流れるような技のコンボを使ってエレンピオス兵達を倒していく俺。

だが、次から次へと現れるエレンピオス兵。

「ちょっとちょっと。さすがに多くない！？」

「確かにな！！」

俺は剣と足を使って敵を斬り、蹴り飛ばす。

「グランドダッシャー！」

『うわあああぁぁぁぁ――――――――！！！』

エレンピオス兵の現れる方向に地割れを起こし岩石を噴き出すグランドダッシャーを放つ。

「ちぃ！（ここでビックバンとかメテオスォームとか使ったら艦を破壊しちゃうしな……やっぱり……）」

俺は艦橋を見る。

「（あそこで船を操作するしかないか）」

俺は皆に話す。

「皆、俺が今から艦橋へ行ってこの船を地上に降ろす」

バンバン！

「確かに。そうすりゃガイアスたちの支援もある。ここの敵もどうにかなるな」

「では、レオン、頼む！」

ミラも俺に任せてくれたので俺がいざ、艦橋へ行こうとすると……

グゥオォォォン！

どこからかワイバーンの鳴き声が聞こえてきた。

「はーっはっはっは！俺の地獄耳で話は聞かせてもらったぞ」

「この声って……」

ジュードもこの声の主に気づく。

「とぉ！」

上を見ると上空にワイバーンがいて、その上からあのバカが降りてきた。

そんなバカに俺は、

「アイシクルボルト」

バカの頭上に氷の塊を落とし、更に電撃で追撃する。

ビリリリリ！！

「アバババババ！？」

着地しようとしたバカは痺れて落ちてくる。

ドサ

「レ、レオン！？」

ジュードも俺のしたことに驚いている。ミラを除いた他の皆もだ。

「な、なんだ貴様……」

エレンピオス兵達もいきなり現れていきなり精霊術を喰らって落ちてきたバカを見ている。

すると、

ドシャアアァァァン！

『うわあぁぁぁぁぁ！！』

バカの落ちたところで爆発すると共にエレンピオス兵達が吹き飛ぶ。

そして、

ザッ！

バカが出てきた。

そんなバカを俺とミラは鋭い目で見る。

「アーハッハッハッハ！！」

笑いながら俺たちを見るバカ。

「おい、レオン！貴様の出番などない。ここからは俺の……ブルゥア！？」

俺を見ながら喋るバカにライトニングブラスターを放つ。ライトニングブラスターでバカの周りにいたエレンピオス兵達も吹き飛ばす。

「うるさいんだよ。この元凶が」

俺はかなりキテいる。それはもう、怒りメーターがあったら振り切れるほどに。

「さて、艦を降ろすかな」

俺は艦橋へ向かった。

艦橋にいた兵士を倒し、艦の操縦するボタンや舵を確認し放送ボタンをＯＮにする。

それと同時にガイアス達が艦に乗り込んできた。

「あーあー、こちらレオン。エレンピオス兵達よ。戦闘をやめろ。この艦は俺たちが掌握した。無駄な抵抗をやめ、速やかに武器を捨て、降伏しろ」

俺が放送すると戦闘していたエレンピオス兵達は武器を捨て、手を上げる。

「ガイアス。このまま、艦を地上に降ろすぞ。それとそこで寝ているバカを拘束しておいてくれ」

ガイアスは自分の近くで気絶しているバカを掴んで俺に見せる。

「そう、そいつだ。そいつを裁く権利はア・ジュールにもあるのを忘れるなよ～」

俺がそう言うとガイアスも思いだしたのかジロリっと気絶しているバカを見る。

そのまま、俺が艦を操縦し、地上に降ろした。

艦橋をア・ジュール兵たちに任せ、俺は拘束されたバカの元へ。

バカの元へ行くと案の定、暴れていた。

「離せ！貴様ら！俺を誰だと思っている！俺は特別な存在……巫子だぞ！」

……このバカはまだ、そんなことを言っているのか！？

俺はあまりにもバカがバカなのを見て、呆れていた。

「おい、バカ」

「貴様はレオン！この俺になんて事……ブルゥウア！？」

俺は俺を見て睨んでくるバカの顔面を蹴る。

「何睨んでやがる？ああ？」

俺はバカの髪を掴んで持ち上げる。

「てめえは自分が何をしたのかがわかっているのか？自分のしたバカな行動が！」

俺が睨みながら言うとこのバカ、何言っているんだこいつはって顔をしてやがる。

「ハァ？何を言っているんだお前は？」

……ブチッ

「てめえのせいでファイザバード沼野で両国の兵士が何人死んだと思ってやがる！！！」

俺がそういうとジュード達（ミラやガイアスを除く）はようやく俺が何を言いたいのかがわかったようだ。

「俺はただ、ミラ様のお力を取り戻そうと……」

ドカン！

「ガアァ……がはぁ！」

「ふざけた言ってんじゃねえよ！！お前の軽はずみな行動が両国の兵士を死なせ、エレンピオス兵達をここに呼ぶ羽目になったんだろうが！！」

「ふ、ふざけるな！俺はただ手紙が来て、それで……」

「手紙だとぉ？てめえは誰かもわからないやつからの手紙を信じて、クルスニクの槍を起動させたのか！？ざけんじゃねえぞ！！！」

俺が再び、殴ろうとするとミラが止める。

「ミ、ミラ様！お助けください！こやつ、無礼にも巫子である俺を……」

パチン！

バカがミラに言っていると、ミラがバカの顔にピンタをする。

「ミ、ミラ様？な、何を……」

「イバル……お前は自分がどれだけのことを引き起こしたのかがわかっているのか！！この大バカものがあああ！！！」

ドスン！

ミラは今度は顔を殴る。

「お前がクルスニクの槍を起動させたせいで断界殻（シェル）は破られ、ラ・シュガル、ア・ジュールの両国の多くの兵士を殺したのだぞ！！」

「そ、そんな！自分は殺してなんて……」

「お前が殺したようなものだ！お前が槍を起動させなければエレンピオスのヤツらはこちらには来なくて済んだ……それをお前は！」

ミラがまた、拳を握ってバカを殴ろうするのを俺が止める。

「レオン？何を……」

「……」

ミラは俺の表情を見て、何かを察したのか拳を収める。

「ガイアス。本来であれば俺がこいつを断罪するところだが……こいつを一旦、ア・ジュールの牢屋に閉じ込めてくれないか？ナハティガルの怪我が治ったらお前とナハティガルの二人でこのバカをどうするかを決めてくれ」

俺は先ほどから黙っているガイアスに言うと、

「……いいだろう。ラ・シュガル王が回復次第、こ奴の処罰を決める。貴様、我が兵士達を殺す原因を作ったこと……ただで済むとは思うな」

ガイアスは眼力だけで人を殺せそうな眼でバカを見る。

「!?」

バカはガタガタ震えだす。

「ガイアス。一旦、城に言ってこれからのことを話し合う必要があるな」

「ああ。ウィンガル」

ガイアスはウィンガルを呼ぶ。

「はっ！」

「この空駆ける船を調べさせろ。どのくらいで使えるようになるかを確認させろ」

「承知」

シュン！

ウィンガルはガイアスの指示で動き始める。

「プレザ！ジャオ！アグリア！今集められる兵士達を確認しろ」

「わかりました」

「うむ、了解じゃ」

「はい」

3人も指示に従い、この場を離れる。

「そこの兵士3人。この男を最下層の牢屋に監禁しておけ」

「ちょい待ち」

ガイアスの指示に割り込む俺。

「暴れられて痕で邪魔になるからな……アイシクルバインド」

バカの手足に氷の枷をつける。これで暴れることはできない。これは俺が死なない限りか俺が解除しないと取ることはできない。

「これでよしっと。連れてっていいぞ」

「では、失礼して……」

兵士3人はバカを引っ張って連れて行った。

「さて、俺たちは少し休むとしようか」

「うむ……レオン、お前たちは呼ばれるまで休んでいろ」

ガイアスにも言われ、俺たちは休むことにした。

～オマケ編～

「ミュゼ、ジュードのこと、守ってくれてありがとう！」

レオンが合流して、レオン・ミラ・ジュード・レイア・ミュゼの５人は話しあっていた。

「いいえ。私こそジュードにはお世話になりました。私を？直接〃使役し、失ったマナを補充していただいたんですから」

？直接〃……これを聞いた俺たちはジュードを見る。

「ジュード！ミュゼを直接使役したのか！？」

「う、うん。ミュゼがそうしてくれって言うから……いけなかった？」

「いけないとは言わないが、精霊が人間に直接使役されるってことはだな……」

レオンがジュードに言いかけると、

「ずっと一緒で、た～っぷりマナを与えてくれたんですよ」

頬を赤らめて言うミュゼを見て、そして、聞いてミラはジュードから距離を取ってじっと見る。

「……知らなかったよ。君が……レイアという恋人がいながらそんなことをする男だったとは……」

そういって、この場から去っていくミラ。

レオンも去ろうとするが、

ガシッ！

レイアに捕まる。

「どういうことなのかしら（黒笑）」

黒いオーラを発するレイアに逆らえずレオンは精霊を人間が直接使役することの意味を教えると……

「ジュゥ～～～～ドォ？ちょぉぉぉぉ～～っと……ＯＨＡＮＡＳＨＩしましょうか？」

「え、レ、レイア！？は、離して！？一体何が……ドウナッテイルノオォォォォ！！！！」

岩影に連れて行かれたジュード。その岩影からは、

ドス！バキ！ドスン！ガキィィンン！ドシャ！グチャ！

何とも言えない音が聞こえてくる。

レオンはそれを耳を押さえながらその場を去って言った。

～オマケその？～

「ごめんね、ミュゼ。戦いに巻き込んじゃって」

「いいえ。むしろ望むところです。精霊として、黒匣（ジン）を使う者たちを許すわけにはいきません」

「今、戦力が増えることはありがたい。礼を言うぞ、ミュゼ」

「お礼なんて。姉として、無謀な妹を放っておけませんしね」

「クックック、ミラ、お前はやっぱり、無謀だとさ……」

ミュゼの言ったことに笑うレオン。そんなレオンをミラは酷いな全くという表情をするが、口に出さないでいる。

「む、ずいぶん上から目線だな」

「いいんじゃねえか？家族ってそんなもんだろ」

「そういうものか？」

「ええ、多分ね」

「ん？ミュゼが家族ってことは将来は俺の義姉か？」

レオンがそういうとミラは顔を真っ赤にする。

「レ、レオン！？／／／」

「あらあら？あなたとミラはそういう関係なのね？出来の悪い妹ですが、よろしくお願いしますね」

「いえいえ、こちらこそ……」

「レオン！！！／／／／／／」

～オマケ？～

「ミュゼ、どこまでついてくる気だ？」

「どこまでも。マクスウェル様の手足となって、黒匣（ジン）を使うアルクノアをせん滅するのが私の役目ですから」

「そんなこと命じた覚えはないが……」

「あなたが覚えていないのは勝手ですが、事実です」

「けど、大精霊が仲間になってくれるなんて心強いよ」

「はい。これからも私を『直接使役』してくださいね」

再び、悪夢の始まりそうな予感のしたレオンはささっとジュードから離れる。

「……やはり、お前たちはそういう関係なのだな。レイアが可哀想だぞジュード！」

ミラはレオンの腕を掴んで離れていく。

そして、

「ジュウゥゥゥ～～～～ドオォォォ？？（黒笑）」

「レ、レイア、ま、待って……アッ――――――――――――――！！！！」

再び、ジュードに襲いかかる魔の手（レイアの制裁）

第５０話　バカとの別れ（後書き）

はい、バカは死なないで死ぬまで牢屋で過ごすか、戦いの後、処罰が下されるでしょう……ザマアｗｗｗ
そして、オマケ編でのレイアの黒笑ｗｗｗ
どうでしたか？結構面白くかけましたが……特にオマケ編がｗ
物語も結構進みましたね。
次回はアルクノアの本拠地へ行く前に皆との会話ですかね？
次回もお楽しみに！

第５１話　出発前（前書き）

ここで原作にはない話が出てきます。

第５１話　出発前

～レオンＳＩＤＥ～

あれから時間がたち、俺たちは城の中……王座の間にいる。あれから数時間たったので今はどうなっているかを知るためだ。

「ウィンガル、出発までは？」

「船の機能掌握にまだ数刻はかかるかと」

どうやら、まだ時間がかかるらしいな。

「まだかかるみたいだし、また少しの間、休んでいようか」

「そうだな。皆、各自で休んでてくれ」

俺たちは一旦解散した。

俺はミラと一緒に王座の間を出て歩いていると、

「あんたさ、看護師になりたいんだろ？あのボーヤのためか～？」

レイアがアグリアに絡まれていた。俺とミラは物陰に隠れ、様子を伺うことにした。

「だ、だからなによ！」

「どんなにキレイごと言ったって、頭の中はボーヤとのエロいことばっかりだろ」

うわーストレートに言うなアグリアの奴。レイアも頬を紅くしているし、聞いていたミラまで赤くしているし。

「ちがっ……そんなことないってば！」

いや、レイアよ。お前ら、恋人なんだしいつかはそういう行為をするんだろ？

「けど、あたし、そんなあんたのことを結構、見直したんだ」

「え、そなの？」

何かアグリアって絶対に人の傷つくことを言うよな……期待させるような言い方してさ。

「その志なら、いつか死人を出してくれるってさ～アハハハ！」

アグリアの奴、すげえ、笑い方だな。地面をたたいているし……って！？

「（ミラ、落ち着け！）」

「（これが落ち着いて居られるか！！レイアの夢をバカにしているのだぞ！！）」

「（ここはレイアの対応を見ていよう！それにこれは俺たちが入りこんでいい問題じゃない！）」

「（……わかった）」

……ふぅ……ミラが落ち着いてくれたか。

「努力が人を殺してもいいんだ？」

「……そんなことにならないよ！」

怒ったように言うレイアであったが、アグリアを見て笑いだす。

「ああ、そうか！アグリアってそんな性格だから男もできないんだね？私、夢の一つは叶っているからね？ジュードと付き合うって言う夢が！」

「んな！？」

レイアの斬り返しに驚くアグリア。

「あなた見ないな人に私の夢をバカにしてほしくないな～夢を見て何が悪いの？どんな人にだって夢を叶えるための努力をするものだよ。できないできないって決めつけるのもよくないよ？うふふ、あなたは自分の夢を叶えられないからそうやって私に絡んでくるのね？妬み？嫉妬？」

「うぐぐぐぐぐぐ！！！！てめえ……あたしに喧嘩を売っているのか！！」

「別に？そもそもあなたが私に絡んできたのが原因でしょ？こんなふうに言われても自業自得って知ってる？」

「……ち、面白くねえ」

アグリアはそのまま、レイアから離れてどこかへ行った。

少し中を見ていると今度はアルヴィンを見つけた。

「よ、ぶらぶらしてていいのか？」

プレザに話しかけているところだった。

「そうやって気安く話されると、気分悪いんだけど？」

「怒るなって、ひさびさにこうやって一緒に戦ってるんだからよ」

機嫌の悪くなっていくプレザにいつものような話し方をするアルヴィン。

「あなた……いつか殺してやるわ」

ここからでもプレザの殺気を感じるな。

「物騒な話すんなって、また、前みたく仲よくやろうぜ」

手を差し伸べるアルヴィン。ここから見てもプレザが頬を紅くするのが見える。

パァン！

プレザはアルヴィンの手を叩いた。

「あなたのおかげで、私の仲間が何人死んだのか忘れたのかしら」

「昔の話しはよそうぜ」

「私だって、敵に捕まって……どんな目にあったと思ってるのよ……」

「……」

プレザの言うことに何も言えないアルヴィン。

「あの頃のあなたのいる場所が私の居場所だった……二度と、私に期待させないで……もう……捨てられるのはゴメンよ」

そんな重い空気の二人の間に、

「プレザ、すぐに来てくれ。ラ・シュガル兵との編成について意見がほしい」

ウィンガルが現れた。

「ええ、行くわ」

そして、アルヴィンから離れていくプレザ。その彼女の背中を見ながらアルヴィンは呟いた。

「仲間に頼られちゃって……あるじゃねーか。居場所……」

何か寂しそうなアルヴィンだな。さて、他に行こう……か？

「……」

「ど、どうしたミラ？」

ミラの俺を見る目が何やら怖いぞ。

「お前はプレザとは知り合いだったな……」

「あ、ああ。3年前からな」

「3年前、何を話した？何をした？」

ん？何やらへんな方向に話が……。

「3年前にプレザの愚痴を聞いたんだよ。前にも話したろ?男に裏切られたって。……アルヴィンのことだったのか」

「……他にはなかったのか?プレザは私から見てもかなりいい女だ」

「……おいおい。俺は初めて会った時からミラのことが好きだったんだぞ?他の女なんて見向きも……」

「しないのか?」

「……(汗)」

俺は逃げようとするが、

ガシッ!

「ニガサナイゾレオン!」

いつもの如く、肩を掴まれる。

こうなれば！

「ミラ！」

「ん――！？んっ…は…んむっ…んんっ…」

さすがにここでは色々とできないがキスならできるし、こうすればミラも落ち着くだろう。

「んんっ、ちゅ…ちゅぶ、ちゅ……ミラ……」

「んっ…は…んむっ…んんっ…レオ、ン」

唇をゆっくり離す。

「落ち着いたか？」

「バ、バカもの！こ、こんなところでなど／／／」

「ミラが俺を信じないのがいけないんだぞ？そりゃあ、俺だって男だぜ？好きな彼女に告白できなかったんだ。他の女性を見るだけな

ら罰は当たらないだろ？何をしてないんだし。キスも色々なものは全部ミラが初めてだったんだから」

「そ、そうか／／／なら、いいんだ／／／」

顔を紅く染めるミラを見ながらククククっと俺は笑う。

「じゃあ、次行こうか」

「そ、そうだな／／／」

また、中を歩いているとエリーゼとティポ、ジャオが話していた。

「じゃあ、私のお母さんとお父さんを殺した野党って……ジャオさんだったんですか！」

「嘘だと言ってよ！おっきい大きいおじさん！」

……どうやらエリーゼの両親の話をしているみたいだ。

「……本当じゃ」

「……それ、本当なんですか？」

「ぬぅ？」

エリーゼはジャオが本当に両親を殺したのかを疑っているな。……そういえば、原作でもジャオが殺したっていう確たる証拠もなかったな。ジャオがそう言っていただけだし……。

「本当じゃ。儂が娘っ子の両親を……」

「じゃあ、何で目を逸らすんですか？」

「っ！？」

エリーゼの指摘にジャオが慌てる。

「レオンは言っていました。人は嘘をつくと話している相手と目を逸らすことがあるって。そんな時は大抵嘘を話している……と」

「レオン君はそーいってたよ？大きいおじさん、本当のことを話してよ！」

エリーゼとティポ……二人に見つめられるジャオ。

そんなジャオが遂に、

「……わかった。真実を話そう」

折れた。

「今から数年前、儂は密猟者どもを追っておった。そんなときじゃ。悲鳴が聞こえてきたのは。その悲鳴のしたところに行くと男女が腹から血を流しておった。儂は密猟者を追わず、治療するために男女を担ごうとしたのじゃが……男女はこう言いおった。

≪わたしたちはもう、長くないでしょう。だから……名も知らない人にこのようなことを頼むのはダメであると思っていますがお願いします≫

≪俺たちの娘を……エリーゼのことをお願いします。あの子はまだ幼い……たのみ、ま……≫

それが儂が離した男女の最後じゃった。その後、儂はその周辺を捜したが、娘っ子、お主はいなかった。それから数年後、お主をあの研究所で見つけたのじゃ。後は娘っ子が知ってからの生活じゃ」

エリーゼは驚いている。いや、これには俺も驚いている。まさか、エリーゼの両親を殺したのはジャオじゃなくて密猟者だったんだから。

「そう……でしたか。だから、ジャオさんは私を心配してくれたんですね」

「おどろいたけど……ありがとう、大きいおじさん！」

「本当にありがとうございます！」

「娘っ子……」

ジャオが泣いている……そんな気がした。

「ミラ……」

「ああ……外に行こう」

俺はエリーゼとジャオを見守りながら外へ出る。

外に出るとミュゼがいた。

「ミラ。少し二人でお話ししたいの。いいかしら？」

困ったような表情をするミラに俺は言う。

「ミラ、話があるんだってさ。俺は先に城に戻っているよ」

そういい、俺は出たばかりなのに城に入って言った。

俺は王座の間の前に集まっている皆と話をしているとミラがミュゼと一緒に来た。

「お、来たか」

「全員そろったな。それじゃ、ガイアスのところに行こうぜ」

「お待ちください、みなさん」

アルヴィンがいざ行こうと言わんばかりに言っているのをローエンが待ったをかける。

「この戦い、ガイアスさんたちも本気のようです。準備だけは怠らないようにしましょう」

「ああ。そうだな」

俺たちは王座の間に入って、ガイアスに準備ができたことを伝え、艦に乗り込んだ。

いよいよ、アルクノア……いや、ジランドとの戦いだ！

第５１話　出発前（後書き）

次回、ついにジランド&セルシウスとの戦いです。セルシウスは消えるけど……どうしよう。消えて欲しくないし……う～む、ここは一番の悩みどころ。

ま、お楽しみにってことで！

それと次回はレオンが己がよく使う雷であることをします。

ヒントは……ビリビリ中学生の代名詞であるあの技ですｗ

何で使うのかは……お楽しみにｗ

第５２話　ＶＳジランド＆セルシウス　アルクノアとの決戦！

～レオンＳＩＤＥ～

艦の準備が終わり、俺たちは艦に乗り込んでみると、そこにはラ・シュガル兵とア・ジュール兵が多く乗っていた。

「ラ・シュガルの兵隊さん？」

「はい。ナハティガルに事情を話したら兵を招集してくれたのです」

「ナハティガルは目を覚ましたのか」

「ええ。ベットの上から兵達に指示を出しているらしいです」

それはよかったぜ。

「陛下、みなに一言を」

時間が来たのかウィンガルがガイアスに兵士たちに喝を入れるために話を始める。

「かつて俺たちはリーゼ・マクシアの覇権を争い、互いに剣を向けた。だが、この戦いはこれまでとは一線を画するものだ。敵の本拠地、ジルニトラの場所はすでにわかっている」

兵士たちも俺たちもガイアスを見る。ガイアスの話す……言う言葉を聞き洩らさないで聞く。

「臆するな、話が同胞よ！信頼せよ、昨日までの敵を！我らの尊厳を再びこの手に！！」

『ウオォオオオ――――――――――――っ！！！！！！』

兵士たちは叫び声を上げる。ガイアスの言葉に火が付いたんだな。

「船を出せ！」

「お、お待ちください！リーゼ・マクシア全域に高出力魔法陣の展開を感知！」

ウィンガルが船を動かすように指示をすると、女兵士が報告してきた。

「来ます！！！」

ゴオォォォォォ！！！

音と共に俺は自分のマナが吸い出される感覚を感じ始める。

「きゃっ……！なに、これ……マナが抜けるみたい」

「この感覚は……！？」

「ちぃ！ジランドの野郎、クルスニクの槍のマナ吸収機能を世界中に向けて使いやがったな！」

「燃料計画が始まったか……」

「民を犠牲にはさせん……リーゼ・マクシアは俺が！今すぐ船を出せ！！」

ガイアスはマナを吸収されながらも兵士に指示を出した。

そして、それから船はかなりの高度にまで上昇するとマナが吸収されなくなった。

俺はいつの間にかいないミラを捜している。

捜しているとミラの姿を見つける。

「ミラ、こんなところにいたのか」

ミラは俺に気づき、俺を見て微笑む。

「ようやく、ここまで来たな」

「……そうだな。イル・ファンでクルスニクの槍を破壊しようとしたら……」

「四大達を捕えられて、ジュードやアルヴィンを入れて４人での旅が始まって……」

「その後、エリーゼやローエンが仲間になり、レオンが足を怪我をして……」

「足の治療でル・ロンドでレイアと出会って、それから仲間になり……」

「様々な場所に渡り歩き、ガイアスとも出会い……」

「アルクノアのトップがジランドとわかって……」

「今はこうしてそのジランドを討ちに行っている。本当に色々とあったが……」

「ああ。それもここで終わりにしたいぜ」

俺とミラは目の前に広がる景色を見る。

「……」

「……ミラ？」

いきなり黙るミラを不審に思った俺はミラを見ると、何か思いつめた表情をしていた。

そして、何かを決意したのか、真剣な表情で俺を見る。

「レオン……騙しているつもりはなかったのだが、私は――――」

ミラが何かを言いかけると、

シュドオォォォォォン！！

船が突如、激しい揺れに襲われた。

「な、なんだ？！」

シュウゥウンシュゥウンシュウゥウン！

俺とミラは音のした方を見ると、一条の光が……空高くへ流れていた。

「あれは……」

「まさか……」

俺とミラは皆のいるところへ向かった。

皆のいる甲板へ向かうと、

「遅れてすまない」

「悪い、遅れた」

「クルスニクの槍みたいでした」

「光の発信源はジルニトラで間違いなさそうだ」

やっぱり、さっきの光はクルスニクの槍か。

「あの光……再び断界殻（シェル）に穴が……」

また、あの光が空へ向かって言ったってことはまあ、そういうことだろうな。

「けど、前と違って、船が入ってこなかったわね」

確かに前は船が入ってきたが、今回の場合は、

「集めたマナをエレンピオスに送った感じじゃなかったか？」

「アルヴィンの考えは正しかったんだね」

そう、マナを送るために使ったんだろうな。

「最悪な現実だけは、ウソにならねえってのが皮肉だよな」

呆れているアルヴィン。

「なんだ……」

そんな中、アグリアが何かを見つけたのか、

「アハハハハ！上等じゃない！」

アグリアが指さす方を見るとそこには……エレンピオスの船がこちらに近づいて来ていた。

「こちらに、接近する敵の船を発見！全員、衝撃に備えてください！」

こちらに砲撃しながら近づく船に向かって俺は言う。

「なあ……、レールガンって知ってるか？」

「レール……ガン？」

近くにいたジュードが言いなおす。

「別名「超電磁砲」。フレミングの運動量を借りて、砲弾を打ち出したり出来るもんなんだが……」

俺は指でコインを弾き、

「こういうのを言うらしいんだよね！」

親指で弾いた。

シュドオォォォォォ――――――ン！！！

ドカアァァ――――――ン！！！

エレンピオス兵の乗った船に直撃し、破壊した。

『ウオオォォォォォォ――――――――――！！！！』

味方兵からは歓声が起こる。

「ひ、非常識すぎるよレオンは……」

驚いているジュードは俺を見ながら非常識というが、

「非常識？規格外？これほど俺に当てはまることはないな！アーハッハッハッハ！！」

非常識とか規格外は俺にとってはほめ言葉だぜ。

「艦橋！このまま、同じことが繰り返されるかもしれん！このまま船をジルニトラへ突っ込ませろ！！！」

「りょ、了解しました！ガイアス様！」

兵士はガイアスの指示に従い、船を海上にある船に突っ込ませる。

船は海の上に降りて、そのままの勢いでジルニトラへ突っ込んだ！

ガシャァァァン！

俺は先にジルニトラに侵入すると歓迎が待っていた。

ダンダン！！

侵入してきた俺にエレンピオスの兵士対tが攻撃をしてくるが俺はそれらをすべて回避する。

ミラも俺に続いて侵入してきた。

「レオン！」

「おうともさ！」

俺とミラは共鳴奥義（リンクアーツ・セカンド）を発動させる。

「永久の礎に」

「虚無と消えよ！」

竜巻と隕石での同時攻撃をする。

「「ルインドヴェインウィッシュ！」」

他の船から降りて来ていたエレンピオス兵達を巻き込んでの技を炸裂させる。

が、

次から次へと現れる兵達を見ていたミュゼがキレ、

「ごちゃごちゃとうるさいっ」

空へ飛んで手から重力のような球体を作り出して周りにいた船を次々と押しつぶしていった。

「ミュゼ、すごい……」

ジュードは降りてきたミュゼにそう言う。

「ジュードの使役のおかげ。力が戻ってきたようです」

「それほどの力の持ち主だったのか」

ミラも純粋にミュゼの力に驚いている。

「さっすが、ミラのお姉さん」

「心強いです、ミュゼ」

皆もミュゼの力が心強いんだな。だが……いや、今は何も言うまい。

「わたしはここで皆様に力をお貸しします」

「どういうつもりだ？」

「ここを落とされたら作戦は終わりでしょう？」

確かにここを落とされたらこの作戦は無駄になる。正論だな。

「そうか……では任せていいんだな？」

「ありがとうミュゼ。気をつけてね」

「ジュード、ご無事で」

ジュードにそう言うミュゼはミラを見て言う。

「ミラ、忘れないでね。あなたはマクスウェルなのよ」

「……」

そう言われたミラは黙り込み。

ミュゼはそのまま、上空へ。

「時間はあまりありません。敵の増援を防いでいる間が好機です」

「なら、ここは二手にわかれた方がよさそうだな」

ローエンの言ったことにミラがそう答えているとガイアスが左側の道へ行こうとしていた。

「ヤツらの企み、ここで必ず阻止する！目標はジランド、並びにクルスニクの槍だ」

ガイアスは四象刃（フォーヴ）を連れて、左側へ進んでいく。

「アル……」

「なんだよ？」

そんな中、プレザが何やらアルヴィンに言いたいことがあるようだが、

「……死なないで」

アルヴィンに背を向けて、そういった。

「私たちも行くぞ！」

俺たちは右側の道を進むことにした。

右側の道を進んでいた。最初、ジュードの提案でアルヴィンに道案内を頼もうとしたがアルヴィンもジルニトラに来るのは２０年ぶりらしいので、当てにならず、当てずっぽう船の中を進んでいく。まあ、進んでいくと兵士にばったり出くわすが、時間がないので瞬殺して進んでいっている。

その倒した兵士が通信機のような者を落とし拾うと、

「敵はすでに侵入している。ただちに確保せよ！」

「すげえ、声出てる」

ティポがそういうと、

「あはははは……」

ジュードがティポをじっと見ながらそう言った。

そうしていると船が揺れ始める。

「なんですか？」

「精霊がまた大量に消滅した……」

「クルスニクの槍を使ったってことか」

「急ぐぞ！」

俺たちは再び進み始める。

少し進み、他とは違う扉を見つけ、中に入ると立派な構造になっていた。

「すごい……」

「わ、お城みたい！」

レイアはシャンデリアを見てそう言う。確かに船なのに中が城のような構造になっているんだからな……そう思っても無理はないか。

「これで戦艦なの？」

「違うよ。このジルニトラは二十年前、エレンピオスの海を旅した旅客船だ。二十年前に断界殻（シエル）の一部が破れた時に、こっちに来ちまったんだ」

二十年前……これを聞いたミラは呟く。

「二十年前か……エレンピオスの軍勢に断界殻（シェル）の一部が破られた時だな」

「そんなことがあったの？」

「エレンピオスはクルスニクの槍もなく、どのようにして断界殻（シェル）を破ったのですか？」

ローエンに言われて、わからない、と首を振るミラ。

「詳しいことは私も知らないが……」

「クルスニクの槍のオリジナルを、エレンピオス軍が開発したんだ」

アルヴィンが話出す。

俺たちはあるきながらアルヴィンの説明を聞くことにした。

「知っているのか？」

「聞いた話だ。今あるクルスニクの槍は、それをマネしてつくったもんらしい」

「それって、精霊が欲しかったから？」

「エレンピオスは黒匣（ジン）に支えられて発達した世界だ。黒匣（ジン）と精霊は文明の要なんだよ」

アルヴィンの言ったことにエリーゼは思ったことを言う。

「どうしてやめられないんですか？精霊を殺すなら、やめるべきです」

「きっと、みんなアルヴィン君と一緒でウソつきで、野蛮なんだろー」

ティポ……お前、直球すぎだぞ。

「俺、野蛮か～？でもさ、黒匣（ジン）がなけりゃ、何もできないんだよ、俺たちは」

そういい、歩くのをやめてアルヴィンは俺たちに言う。

「俺たちには霊力野（ゲート）とやらはねーのよ」

「え、そうなの！？」

アルヴィンの言った驚愕な事実に、今まで黙っていたレイアが反応し、驚く。

「だから、精霊術は使えない。マナを操るなんてマネできねえんだ」

「それで黒匣（ジン）を使っていたのか？」

「そゆこと」

アルヴィンは軽い風に言うが、それで困ったことはあったんだろうな。この世界ではマナを使えないことは結構致命的だしな。仕事するにもマナを使うこともあるし。

立ち止まった俺たちはアルヴィンが扉の少し前いくと、歩くのをやめたのを不審に思っているとアルヴィンが言う。

「くそ、封鎖線を張りやがったな」

「なにこれー？」

そんなアルヴィンにティポは近づき、赤外線のようなものに触ろうとするのをアルヴィンが止める。

「気をつけろ。触ったら、まっぷたつだぞ」

「こわー！」

「どうすれば……」

アルヴィンの言うことを聞いたジュードはいつものように指を考えるポーズを取る。

ザッザー！

すると、ミラの持っていた通信機から連絡が来た。

「警告！中央に封鎖線を展開完了、しかし、他区画の封鎖線が起動しません！」

「なんだと！？発動機の不調か？」

「いえ、発動機は二基とも正常に稼働中。他の装置の故障と思われます」

「中央の封鎖線を消すわけにはいかない。全力で左右の発動機を死守しろ！」

「了解！」

プツン！

そして、通信機からの連絡は途絶えた。

「なんともまあ、ナイスタイミングって感じだな」

「どうやら、左右にある発動機をとめれば、封鎖線は消えるようですね」

「なら、急ごうぜ！兵士達が集まる前に！」

俺たちはまずは左舷機関室を目指すようにした。

急いで左舷機関室に来たおかげで兵士たちに会わずに済んだ。

「これをとめる方法は……？」

制御装置があるかを周りを見るジュードとレイア。そこにアルヴィンが前に出ながら言う。

「こうした方が早いって」

銃を構えて、制御装置らしきものを撃つ。

バァン！

ビリリビリリ

発動機を機能しなくなった。

ジュードは驚きながら、呆れたものを見るかのようにアルヴィンを見る。

「さあ、次は右舷機関室だな」

俺たちは左舷機関室から出て、次は右舷機関室へ向かう。

右舷機関室につくと、

「アルヴィン、頼むぞ」

「次もよろしく」

「あいよ」

先ほどと同じように銃で撃つ。

パァン！

ビリリビリリ

ジュード、今度は俺とミラを見るなって。

「よし、中央に戻ろう」

俺たちは中央ホールへ戻った。

中央ホールに戻ると封鎖線はちゃんと消えており、そこから中央甲板へ出る。

痕はそのまま道を進んでいくと、扉があり、そこは統合制御室と書かれていた。

中に入ると、ジランドが座り込んでいた。

「ご苦労なこった。わざわざ……マクスウェルを連れて来てくれるなんてな。アルフレド・ヴィント・スヴェント。裏切った理由を聞かせてもらおうか」

「簡単だよ。あんたが昔から大嫌いだっただけだ」

立ち上がるジランドはアルヴィンに言う。

「一生、リーゼ・マクシアで過ごす覚悟ができたようだな」

「……関係ねえだろ」

「くくく」

ジランドが笑いだすと周りに術式が現れる。

そこから無数の氷の槍が飛んできた。

俺たちはそれを避ける。

「なっ……どうやった!?」

「微精霊の消滅は感じていない！どういうことだ」

「ジランドォ！」

ドンドン！

アルヴィンはジランドに向かって銃を撃つが、
セルシウスが現れ、ジランドの前に氷の壁を作り出し、銃弾を防いだ。

「なっ！」

「また、あの精霊さんっ！」

セルシウスが氷の壁を拳で壊すとその氷の破片が礫のようになって俺たちに襲いかかるが、

「ふんっ！」

俺が皆の前に出て、炎の壁を作り出して、氷の礫を蒸発させた。

セルシウスは俺の隣にいるミラを見て呟く。

「あなたがマクスウェルとはな。ずいぶん姿を変えたな」

喋り出すセルシウスをジランドは叩く。

「俺の許可なく、口を動かすな」

「はい、マスター」

セルシウスは痛がる様子もなく、ジランドに従っている。

「ひどい……どうしてそんな人に従ってるの？」

「道具は主人に仕えるのが当然だろう？」

セルシウスの頭に手を置きながらジランドは言った。

「精霊と人は一緒に生きていくものでしょ！それを道具だなんて！」

レイアはジランドのセルシウスへの仕打ち、そして、道具という発言に怒っている。

「こいつは精霊だが、ただの精霊とは少々違う」

「人工的に作られた……いや、復活させた氷の精霊か？」

皆が俺を見る。

「ほお？この世界にも賢い奴がいるのか。そうだ。こいつは源霊匣（オリジン）だ！」

「源霊匣（オリジン）……？」

「増霊極（ブースター）を使い、精霊の化石に眠っていたセルシウスを再現した。こいつは、精霊術自体が形をなした存在だ」

「源霊匣（オリジン）のマナをお前自身が術として使ってるのか！？」

「くくく、だから道具だってんだ。納得したか？」

悪いことをしているという気持ちの欠片も持ち合わせていないないないこいつは！！

「あなた、最っ低！」

「ティポのデータをコピーしたのは、このためだったんですか！？」

「お嬢さん。あんたには感謝しているぜ。源霊匣（オリジン）が生まれたのも、リーゼ・マクシアが燃料になったのもそいつのデータのおかげなんだからよ」

それを聞いて俯くエリーゼ。

「なんだ、嬉しくて泣きそうか？」

あまりにもひどいジランドの言い方に泣きだすエリーゼ。

「あなたという人は！」

「指揮者（コンダクター）。ジジイの出る幕はもうないぜ？それとも踊り足らないのか？」

「ええ。ジジイは、しぶといのが売りですので」

武器を抜くローエン。

「我が友を弄んだこと、決して許しません」

「僕たちは負けない！絶対！」

「ふん。なんお力も野望もないくせにのぼせ上がってるてめえを見てるとムカついてヘドがでるぜ。場違いなガキが！」

ジュードの言ったことにイラついているジランドを見ているとこっちもムカついてくるんだが。

「あなたみたいな人が、力とか野望とか口にしないでよ！僕は、あなたが間違っているのを知ってる！」

「野望とか言っているけどよ、どうせ大した野望じゃないんだろ？んなことで怒っている方がよっぽどガキだと俺は思うがな。力がない？こっちから言わせれば黒匣（ジン）がないと戦えない奴が大きなことを言っているんじゃねえよ」

「て、てめえ！！！言わせておけば！」

「俺は事実しかいってないぜ？アルヴィンを見習えよ。黒匣（ジン）がなく

ても戦えるんだからな」

「……レオン、お前……」

アルヴィンが驚いたふうに俺を見る。

俺はアルヴィンを見てニッコリと笑う。

「もはやお前などと語る口はもっていないが……。最後に一つだけ問おう。お前とレオン達の違いがわかるか？」

「ハッ！知るかよ」

「だろうな。だからお前は愚かものなのだ」

キュウゥゥゥゥ――――

「そろそろ、マナの定時摂取のお時間だ。マクスウェル、お前だけは生かしてやる。だが……他は皆殺しだ！」

ジランドは銃を取り出し、銃弾を装填しながら言った。

「リーゼ・マクシアの精霊と人は私が守る！」

「ジランド、俺はお前を許さねえ！精霊を道具という貴様を！」

そして、戦闘が始まった。

俺はセルシウスと1対1で対峙している。

「セルシウス！お前はあんな男がマスターでいいのか！！双撞掌底破！」

なお、俺は素手で戦っている。

「私はマスターのために生きている。マスターの邪魔はさせん！氷襲連撃！」

互いに拳と蹴りが激突する。

「だが、お前は昔は大精霊に近い存在だったはずだ！そんな存在があんな男に従う義理はないはずだ！」

拳を繰り出すが、止められる。

「貴様に何がわかる！私の中にあったマナが消えていく感覚を！苦しみを！わかるものか！」

蹴りを放ってくるセルシウス。

「んなことは、わかるはずがないだろうが！」

蹴りを蹴りで返し、

「飛燕連脚！！空破爆炎弾！！」

「ぐうぅぅ、あああああああ！！」

連続して回し蹴りからの炎を纏って突進する。

「くうぅ！凍刃穿爆隆！！」

俺に向かって氷の槍を無数に飛ばしてくる。

「フレアトーネード！！」

地面から噴き出すマグマで防ぐ。

「続いて喰らえ！断罪の剣よ、七光の輝きを持ちて降り注げ！プリズムソード！！」

七色の剣を地上に降り注ぎ、セルシウスの動きを止める。

「くそ！離せ！！」

「……終わりだ！連撃、行くぜ！疾風雷閃舞！」

俺は拳と蹴りによる高速の連撃を叩き込む。

「……これでとどめだ！！」

「ぐぅあああああ！！」

プリズムソードの今の秘奥義の影響で壊れたか。

「術式起動……」

俺は複雑にできた俺だけが使える魔術陣を発動させる。そこには、火・水・風・地の術式陣の他に、氷・雷・光・闇の術式が存在している。火・水・風・地の術式が光を発しているが、氷・雷・光・闇の術式は光を発していない。

「なに、をする気、だ？」

セルシウスが動けない体で俺に聞いてくる。

「今から、俺のマナを使ってお前を大精霊に近い存在にする」

「なん……だと」

「折角、復活したのにあんな男に従って再び眠りにつかれての俺は後味が悪い。だから……」

８つの術式の……氷の部分が光を発し始めた。

「しばらく、この術式の中で眠れ」

「……ありが…とう」

セルシウスは光になりながら、俺にほほ笑んだのかわからないが、お礼を言って術式に吸い込まれていった。

「さて、あっちはどうなっているかな？

俺はミラ達の戦うところに戻って言った。

戻ると言っても少し離れた場所で戦っていただけだが、戻ってくると、結構苦戦しているな。

「たっだいま！」

「レオン！帰ったか！」

ミラは俺の登場を喜んでいた。

「バカな！？セルシウスが負けたのか！？あいつの気配も感じない……貴様！何をした！」

ジランドはセルシウスの源霊匣（オリジン）を見る。そこには何も入っていない。

「ふっ、簡単さ！お前のような奴がセルシウスを使うことが嫌だって思った俺がセルシウスにマナを与えて、今は力を溜めるために俺の作った術式の中で寝ているんだよ」

「なんだとぉ！？」

ジランドは戦っている最中なのに、固まっている。

いや、ジランドだけでなくミラ達もか。

「レオンって……」

「ほんとぉーに、規格外ね」

「マジかよあいつ……」

「レオン……すごいです」

「レオン君、すごーい！」

「レオン、お前というやつは」

呆れているが、頼もしいよって感じに俺を見ているのか？

「よくも……よくも俺の力を！道具を！」

「精霊はお前の道具じゃねえ！アルヴィン行くぜ！」

俺は剣を構えてアルヴィンに言う。

「ああ！こいつとは俺が決着をつける！」

俺とアルヴィンはジランドに突っ込む。

「おのれえええええ！！！バニッシュレイ！バニッシュレイ！」

ジランドは自棄になったのか俺とアルヴィンに同じ技を使いまくる。

だが、自棄になり、錯乱状態になった奴の攻撃なんて当たるはずがない。

「あつ～い炎」

「喰らっときな！」

「「剛・紅蓮剣！！」」

俺とアルヴィンが当時にジャンプし、アルヴィンの剣に宿った炎と俺が一緒に剣を振りかざし、炎と共にジランドを吹き飛ばす。

「ぐうぁあああああああ！！」

吹き飛んで行くジランドに俺とアルヴィンは追撃をする。

「炎よ、この剣に宿れ！」

「全部焼き尽くす！」

二人同時に炎を纏った剣でジランドを切り上げ、

「「炎覇、鳳翼翔！！燃え尽きろ！！！」」

最後に巨大な鳳凰をジランドに向かって飛ばします。

「そんな、バカなあああああああああああ！！！！」

吹き飛ばされて地面に倒れるジランド。

「どうだ！これが俺の……力だ！」

「アルヴィン！ここからはお前の問題だ！好きにしろ！」

「レオン……恩にきるぜ！」

「ぐふっ！ようやく源霊匣（オリジン）を生み出せたってのに……くそ……」

「あんたの目的はせいぜい向こうのやつらに恩売って、のし上がるためだろ。源霊匣（オリジン）とやらに何の意味があるっていうんだ」

「源霊匣（オリジン）は黒匣（ジン）とは違い、精霊を消費せずに強大な力を使役できる。だから、人と技術に溢れた、エレンピオスには必要なんだよ」

「どういうこと……？」

ジュードはジランドが言っていることの意味がわからず、そういった。ジランドは源霊匣（オリジン）を取り出す。だが、源霊匣（オリジン）は光となって消えていった。

「エレンピオスは精霊が減少したせいで……マナが枯渇し、消え行く運命の世界だ」

「異界炉計画にそのような意味があったとは……」

「そんなの黒匣（ジン）を使い続けたあなたたちの自業自得じゃない……」

レイアが言うことは正しい。だが、エレンピオスの世界は黒匣（ジン）を使わないと生きていけない世界なんだな……。

「源霊匣（オリジン）が広まれば、エレンピオス人もマナを得られる」

「今さら何を……二千年前、黒匣（ジン）に頼る道を選んだのはお前たちだ」

「俺じゃねえ！」

そういう、ジランドであったが突如、悲鳴を上げる。

「ぐがああ……！」

ジランドの体に赤黒い何かが走る。

「おい、大丈夫か！？」

さすがにアルヴィンも心配になり、近寄るが、

「俺が死んでもリーゼ・マクシアの運命は変わりはしねぇ！」

アルヴィンはそんなジランドを見る目は……悲しそうだった。

「お、俺たちの計画は断界殻（シェル）がある限り、続けられるぞ……ザマぁみやがれ。ぐ、ぐあああああああ――――！」

そして……ジランドは動かなくなった。

「死んじゃった……？？」

「セルシウスを使った反動が出たのかもしれません」

「力を得るためとはいえ……高い代償だ」

アルヴィンは死んだジランドの懐から金色の銃を取り出す。

「これは返してもらうぜ。ジランドール・ユル・スヴェント……叔父さん」

アルヴィンは目を開けながら死んでいるジランドの目をそっと閉じた。

第５２話　ＶＳジランド＆セルシウス　アルクノアとの決戦！（後書き）

はい。ここまでですね。ちょっと中途半端ですが。
セルシウス……ゲットだぜ！（ポケモン風）
さて、次回はミラが一度死んで？精霊界に行きますが……どうしよう。
この後はどうするかを今、考えています。マジでどうしよう（汗）

次回もお楽しみに！

第５３話　さらば、ミラ……そしてレオン（前書き）

タイトルを見れば……何が起こったかわかります（涙）

第５３話　さらば、ミラ……そしてレオン

～レオンＳＩＤＥ～

アルヴィンが死んだジランドの目を閉じていると、

「すでに決していたか」

ガイアス達がやってきた。

「一足先にな」

「でもなんだか、これじゃ……」

「リーゼ・マクシアのためにもアルクノアの野望は挫かなければならないんだ」

「うん……」

ミラは真ん中にある機会を触ると、機械は光を発する。

そして、辺りにマナが散乱し始め、ミラが四大召喚の陣を作ると四方にイフリート・ウンディーネ・シルフ・ノームが現れる。

「お前たち、無事で嬉しいぞ」

ミラは四大達の無事を確認するとクルスニクの槍に近づく。

「マクスウェル」

「これぱかりはお前でも邪魔はさせない。破壊する」

四大がミラを囲み、手を上にかざすと四大達はクルスニクの槍を四方で囲もうとする。

しかし、

ズドオォォォォォン！

俺たちに突如、強力な重力が襲う。

「（ふざけるなっ！）なんだこの術は！」

「お、押しつぶされちゃいます！」

「ジランドの罠……！？」

「ババア！てめえの術はどうした！おっさん！てめえはパワーが取りだろうが！なんとかしろ！」

「あ、ああん！術が違いすぎるわ」

「さ、さすがの儂でもこんな術の中、なにかすることなどできん！」

「ぐぬぬぬっ！この程度の術、破ってみせる」

「こんな重力など！俺の術で吹き飛ばしてくれる！！」

俺は術を発動させようとするが、

ズドオォォォォォォン！！

「ぐあああ！」

俺だけ、受ける重力が変わった。

「ぐぬぬぬぬ！！こぉんのぉ！！」

でも、俺は未だ立っている。

「破る……そうだ。クルスニクの槍を使うんだよ。あれは術を打ち消す装置なんだっ！」

「槍、か……！」

ジュードの案はいい。だが！

「けど、もうマナが残ってないんじゃ……」

「……ここにいる全員がマナを振り絞って槍に注ぎ込めばあるいは……」

「ア、アハハ！あれに自分から力をあげるって？」

「命懸けか……」

「だがやらねば……いずれにせよ終わりだ」

皆は助かるために自分からマナを注ぐつもりだが、

「いや……俺がやる」

俺は歩き出す。

「何……？レオン、お前」

ガイアスが俺を見る。俺はニィっと笑う。

「俺のマナは大精霊クラスある。俺がマナをクルスニクの槍に注げば……」

「待ってください！そのようなことをすれば、レオンさん！あなたの命が……！」

ローエンが俺に待ったをかける。ふぅ、確かに俺のマナを全力で槍に注げば、俺の命は……だがな！

「仲間のため……愛する女のため……守るためにそれぐらいの……覚悟はある！」

「……！！」

ミラが俺を見る。

俺はゆっくり、歩き出す。

俺がミラの横を通ろうとすると、

「はあああっ！」

ミラも立ち上がって歩き出す。

一歩、一歩、ゆっくりと、一緒に。

「くそっ！とっととしやがれ！」

「あぁん……もうダメ……」

後ろで何かを言っている気がしたがそんな暇がない。

「はぁ……はぁ……」

「ぜぇ……ぜぇ……」

「マクスウェル……槍を起動させろ」

俺とミラはあと少しの所にまで来ている。

そして、ミラが言い始める。

「わざわざみなが死ぬ危険を冒す必要はない」

「……おい、ミラ？」

ミラが俺を見て微笑む。

バリィィィィン！

音がした。そちらを見ると床に亀裂ができ始めている。

「なぜだ。あんたはその手で世界を……人々を守るんじゃないのか？まだなすべきことってのが残ってるんだろう！」

いち早く、ミラが俺と一緒にしようとしていることに気づくアルヴィン。

「断界殻（シェル）が消えれば……アルクノアの計画は完全に潰れる。そうだろう？」

「お前……」

ミラが何を言いたいのかがわかったアルヴィンは唖然としているようだ……見てないけど。

そして、ミラは皆を見渡し、槍を起動させる機械を見る。

「お前たち……ジュードたちと共に去れと言っただろう」

精霊達はミラを見て微笑んでいる。

「すまない……巻き込んでしまったな」

【――――あなた、何か変わりましたね】

ウンディーネが言う。

「私はマクスウェルとして生きたいだけだ……」

【――――それで自分から死のっての？】

シルフが言う。

「矛盾してるのはわかっているよ」

【――――だたらヤメるでしょ】

ノームが言う。

「みなを……今まで関わった仲間を守りたい。レオンを守りたい」

「そして、俺がそんなミラを守りたいんだがな」

俺は苦笑する。ミラはどこまで行ってもミラだな。

【――――マクスウェルが何を恐れる？】

「……私はレオンとの……絆を……共に生きていくことを失うのが……恐かったのか。……失うことを……」

「俺もさ。だから、俺が代わりにマナを槍に注ごうと思ったのに……俺の想いを無駄にしやがって」

俺は槍を起動させる。

「だが……ここで一緒に死ぬのも……いいかもな……」

俺は静かに目を閉じて言う。

「やだ、ミラ……レオン……」

「ミラ……レオン……」

「ダメー！！」

「ミラさん……レオンさん……」

「……くっ」

「ミラ……レオン！」

皆が俺たちを見る。行くな！やめてくれ……と。

「そんな顔をするな……皆」

「さらばだ、みな」

俺とミラのマナが吸収され始める。

そして、俺はミラの手を掴む。

「ミラ……死ぬときは一緒だぜ？」

「レオン……愛しているぞ……」

「俺もさ……ミラ」

俺たちは静かに、そして触れるだけのキスをしてマナを放出する。

「はあああああああ！！」

「うおおおおおおお！！」

四大達も己のマナを放出する。

そして……俺たち二人の意識は……遠のいた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

マナの溜まったクルスニクの槍によって術は打ち消された。

だが、その代償はあまりにも大きかった。

レオンとミラ……二人の人物の命が……消えかかっていた。

「ミラっ！レオンっ！」

ジュードは二人に声をかけるが、二人の体は倒れ始める。

ジュードは倒れ始める二人に近づこうとするが、船が崩壊し始めた。

そして、

ドシャアァァァアン！！

二人のいたところに大きなガラスの破片が落ちる。

そんな時だった。

＜……俺……最後……力……受け……とれ……＞

「「！？」」

アルヴィン・レイアの頭の中に誰かの声が響く。それと同時に二人に黄色いオーラのものが……。

「今のって……」

「なんなんだ!?」

二人は動揺するが、今はそれどころではなかった。

船は完全に……崩壊していった。

そして、

レオンとミラ。二人は海へ抱きつきあいながら一緒に光となって消えていった。その存在を残さないよう……綺麗さっぱり……と。

第53話　さらば、ミラ……そしてレオン（後書き）

はい、ここまでですね（涙）
レオンにはミラと一緒に消えてしまいました。最初は感想にあったガイアス達と一緒に行動をするのもありかと思いましたが、いくらレオンでもミラを目の前で消えるのと見るのは忍びないと思い、一緒に消えさせてもらいました。
そして、布石としてですが、アルヴィンとレイアに黄色いオーラが……とありましたね？さて、この2人の共通点は……なんでしょう～か？
次回もお楽しみに！

第５４話　精霊界（前書き）

ぜぇ、ぜぇ……8日に投稿できなかった……一日2話更新がｏｒｚ
でも、いいか！間に合わなかったんだし。

今回、レオンは名前しか出てきません。そして、この話はミラの話しのにです。

第５４話　精霊界

～第三者ＳＩＤＥ～

――――人間と精霊の世を逝きかう流れに、身をゆだねし者よ――

――

――――我が魂の洗浄を経て、新たな生へと進むがよい――――

どこかの空間で声が響く。

【あなたは生きるべき存在。私たちが手を貸します！】

【意識を保て……！お前であれば消されはしない！】

【急ぐでし！時間がないでし……あれ？レオンがいないでし】

【仕方ない！こいつだけは……！さあ、もっと！気を緩めないで！】

【今です、さあ、こちらへ！】

４つの光は１つの光を囲みながらどこかへと導いていった。

どこかの湖を見つめるミラ……いや、今はミラとは言えない存在か。

ミラは四大達に話しかける。

～ノームと～

【ノームでし。また会えてうれしいでしー。いつものアレやてでし～】

ノームはミラがいつもどおりであると思っている。しかし、

【あれれ……？覚えてるでしよね？と、とぼけてるだけでしよね？】

何もしゃべらないミラを見てノームは落ち込む。

【僕たち……失敗したでしか……】

～ウンディーネと～

【何やら雰囲気が……】

ウンディーネはミラの纏う雰囲気が違うことにすぐに気付いた。

【まさかとは思いますが……私たちやレオンとニ・アケリアで過ごした頃の記憶はありますか？】

何もしゃべらないミラを見てウンディーネは困っている。

【記憶がないのですね……これからどうしたものでしょう。いえ、すみません。あなたが悪いわけではないのです】

～イフリートと～

【その姿……】

イフリートはミラの姿を見て驚き、さらに驚くことを聞く。

【何？名前を思い出せない……？うぬ……】

イフリートはノームと同じように落ち込む。

【俺たちは失敗したのか……？すまぬ。お前に尋ねたところで答えられるわけもないな……】

～シルフと～

【僕は他の三人の話しに乗っただけ。仕方なくね】

シルフはミラから視線を逸らすが、ミラの異変に気づく。

【ん、どうしたの？】

【待ってよ。ひょっとして君……】

シルフもミラの身に起きたことに気づく。

四大達と会話したミラはここからどこかへ行こうとすると、

【待て。どこへ行くというのだ】

イフリートが呼びとめる。シルフはミラに近づきいう。

【やっぱ様子が変だよ。自分が誰だかわかってないみたいな……】

【ニ・アケリアでレオンと一緒に遊んだでし。お、覚えてるでしょね？】

ノームはミラの身に起きている事実を信じたくなく、そう聞く。

【答えてくれ。俺とレオンの勝負で勝ったのはどちらだ？】

【では、槍に囚われた私たちを助け出したのはどうです？】

イフリートとウンディーネの言うことに無言のまま、首を振るミラ。

【レオンのことも忘れている……記憶がほとんど残っていないのですね……】

ウンディーネは悲しそうにミラを見る。

【あの機に魂をすくいあげれば、完全に記憶を残しているはずだ……】

【僕たちが何か間違えたのかもしれない。いや、待てよ……】

シルフはウンディーネとイフリートの前に出て言う。

【……僕たちが知らない何かがあったとしたら……その原因がわか

れば……】

ミラの記憶が戻るかも……と、シルフが言いかけるが、

【やめてでし！】

【ノーム……】

シルフは自分の話しを止めるノームを見る。

【もう、あの方に逆らう真似なんてできないでし……】

【ノームの言うとおりだ。それに、ニ・アケリアに戻るなど、今さらできぬ】

【ああ、そう！どうせ、記憶のない中途半端なこんなのならいらないしね】

【シルフ、受け入れましょう。私たちの計画は失敗したのです……せめて私たちの傍にいることを幸福と思いましょう】

四大達は黙ってミラを見る。

ノームとシルフは落ち込んでいる。

【俺たちのせいだ。お前をこれからどうしたらいいものか……。すまぬ】

【行きたいところがあれば、せめて私たちにお供させてください。それで何か少しでも思い出せればいいのですが……】

ウンディーネの案にノームが落ち込みから戻る。

【そうでし　思い出の場所へ行くでし。それなら！】

【それが二・アケリアじゃないの？】

シルフの指摘に固まるノーム。

【でし……】

【もしかしたら、俺たちが囚われていた時に、レオンと一緒に回っ

たところを見てみればいいのではないか？】

シルフが、ふっとイフリートを見る。

【確かにそうだね。レオンがこいつと一緒に回った場所をいくつか見れば……】

レオン……この名前を何度も聞いたミラが微かに体が反応する。

【レオンのこと……覚えてるでしか？】

ミラは首を振る。わからないと。

【どうやら、頭が覚えてなくとも、体が覚えているのかもしれませんね】

【じゃあ、ちゃちゃっと行こうか】

四大達はミラの行きたい場所へ……思い出のある場所へと向かった。

精霊界のキジル海瀑からハ・ミルに来たミラは、小屋を見て立ち止まる。

【どうしたでしか？知てる場所なんでしか？】

【俺たちが囚われている間に、訪れでもしたのだろう】

【ふんっ】

四大達が話をしていると、

バサ…バサ…バサ

魔物が人（精霊）を襲っている。

【襲われそうになてるでし】

【俺に任せろ】

【お願いします】

そういい、イフリートは魔物達を追っていった。

果樹園の奥にミラは他の四大を連れてやってきた。

【何のつもりだ！俺がやると言っただろう】

怒ったように言うイフリートを無視し、ミラは前に出る。

【誰がやろうと関係ない、とでも言いたそうですね】

【なっ……！】

驚くイフリートを余所に、ミラは魔物に向かって走る。

【今はこの者たちを助けるのです】

【でしー！】

戦闘が始まった。

戦闘はすぐに終わった。四大の力を使うミラの前に普通の魔物はただの弱いものでしかなかった。

「助かりました。ありがとうございます」

「村に私たちの家があります。ぜひ、休んでいってください！」

助けられた親子（精霊）は家にミラ達を招待しようとするが、

シュウゥゥゥゥ～～～

音がする方を見ると、何か黒いモヤモヤが発生している。

【ちょちょ、この感じ！】

いち早く、それに気づいたシルフが慌てる。

黒いモヤモヤはエレンピオス兵の姿を形造り、何かをすると音が鳴りだし、ミラ達は苦しいのか頭を……胸を抑える。

そして、親子（精霊）は死んで、塵となった。

音が止みむと、イフリートが皆に聞く。

【みな、無事か？】

そう聞いたら、皆は先ほどまでいた親子（精霊）のところを見ると、精霊の化石が落ちていた。

【……だめだたでし】

ミラは精霊の化石に触れようとするが、手が通り抜けてしまう。

【こうなっては触れることはできません】

【今のはどうしようもなかった。仕方ないよ】

【ミラのせいじゃないでし】

【……行きましょう】

ミラはそのまま、ハ・ミル（精霊界）の家に入る。

【果樹園の二人のことは忘れろ】

【あなたはもう安らぎの中で生きるべきなのかもしれません】

【戦う必要なんてないでしよ】

【ええ。あなたは自分の幸せだけを考えればよいのです】

四大達に言われた後、ミラは家のベットで眠りについた。

――――どうしたんだ……私。安らぎ……あの者にはあったのだろうか……どうして私が心配する……戦う必要がないといわれただろう……――――

どこかを歩くミラ。だが、ふっとした瞬間、歩くのをやめる。

――――守ってやれなかった……――――

そして、ミラは目を閉じた。

目を覚ましたミラはハ・ミルから出て、イラート海停に来ていた。

イラート海停についたミラは二人の男（精霊）を見ていた。

「何、見てる！あっちへ行け」

そういう二人の男（精霊）であったが、四大達が姿を現すと態度が急変した。

「ま、まさか……四大精霊様っ！」

【……貴様ら、何をしてる？】

イフリートが腕を組みながらそう言っていると、男たちは後ろに下がる。

「ひぃ！？」

「あ、これはその……」

言いにくいのか、躊躇う二人。

すると、一人の女性（精霊）が宿に入っていくのが見えた。

「あ、待て！」

「申し訳ありません。これはあなた様方にも話せないことです！」

「おい、行くぞ！」

一人は四大達にお辞儀をしてからこの場から去って行った。

宿に入ると先ほどの女性が子どもと一緒に椅子に座っていた。

【さっきの男たちに憶えある？】

「私を……監視していたんだと思います。逃げ出した人間じゃないかと」

それを見いて、イフリートは女性がどこから逃げてきたのかが見当がついた。

【まさか、ニ・アケリアからか？】

女性は頷いた。

「はい。私、ニ・アケリアで聞いてはいけない話を聞いてしまったようで、それで……」

【詳しく教えてくれますか？】

ウンディーネが聞いてみると女性は四大達を見る。

「……はい。四大精霊様になら。なんでも……不正に生まれ変わった者がいて、それを捜している人がいるようなんです」

ギクッ

【不正、ね】

ドキッ

【そ、その捜しているというのは誰なんでしかねー？】

シルフとノームは心の中ではかなり焦っていたりする。

「壁越しに聞いたので、誰だったのかまではわかりません。ですが、その者を見つけだして抹殺しなければならないとも言っていました」

それを聞いた四大達の反応は、

【（ヤバ……）】

【（ヤバいでし……）】

【（……ヤバいな）】

【（ちょっと……ヤバですね……）】

上からシルフ・ノーム・イフリート・ウンディーネである。

「その話を聞いて、私たちはその疑いをかけられたんだと気付いたから……」

【そうだったのか】

【お話ありがとう。助かりました。気をつけて、お行きなさい】

女性は子どもを連れて、宿を出て行った。

その日、ミラはその宿で眠ることにした。

――――！――――

「……ん？」

「？……ああ、これは手を手を握って握手をするんだよ。よろしくって意味だ」

「ああ、なるほど、そういうことか。こちらもよろしく。そして、ありがとう。村の者たちを守ってくれて」

幼い頃のミラと……そして、レオンの姿があった。

パアァ！

光を発し、次は、

「またか？」

「ああ。やはり、黒匣（ジン）の力かもしれない。確かめる必要があるな」

「しっかし、黒匣（ジン）か。６年ぶりじゃないか？」

「ああ、そうだ。６年ぶりだな……久しぶりだな」

「全くだな。ここ６年間は静かだったのは案外、嵐の前触れかもしれないぜ？」

「まさにその通りだな」

「「行こう。イル・ファンへ」」

次に移ったのはそれから１０年後のミラとレオン。だが、ミラはレオンのことを覚えていない。

――誰だ……お前は……私は……知っている……だが……――

また、場面が変わり、再び１０年前の姿の二人が映る。

「俺は――――。――――――――――だ。よろしくな、――――」

――私は……マクスウェル……そうだ、私はミラ・マクスウェル。私は自ら死を選んだ……――――と共に――――

――だが、なぜ……その誰と死んだのか……どのような理由で死んだのか思い出せない……彼はいったい私の……――――

そして、ミラは目を覚ました。

次の日、ミラはイラート海停の出入り口前にいると、四大達が話を始める。

【いい加減、離してもいいんじゃない？記憶がないから無駄かもしれないけどさ】

【僕もシルフに賛成でし】

二人はイフリートを見ながら言った。

【うぬ……わかった】

イフリートはミラを見て言う。

【俺たちがお前に何をしたのか話しておこう。お前は以前、ミラという名の存在であり、ニ・アケリアでレオンと俺たちと過ごしていた】

【そして、あなたはレオンと共に死にました。そこまでは憶えているのでしょう。その後です。私たちはミラとレオンの魂が洗浄され、生まれ変わる前に回収しようとしたのです】

【ミラのまま生まれ変わると思たんでし】

【だけど、失敗。ははっ！記憶の大半が消えて、レオンの魂はなくて回収できなかったってオチ】

【そういうことだ】

イラート海停からニ・アケリアに戻ってきたミラ達。

だが、

ボオォォォォォォ――――！

風が吹く。

【……風が変わった】

風の大精霊であるシルフがいち早く感知する。

【やつか？】

イフリートに言われ、頷くシルフ。

シルフはノームの方を見て言う。

【ノーム、彼女を隠せ】

【がてんでし～】

ノームはミラの方を向く。

【ちょと、我慢するでしよ】

そう、ノームがいうと、ミラの足元に地の術式が展開されると同時に、ミラが地面の中に隠される。

【やはり……ミュゼですね】

そう、ウンディーネが言うと、遠くにいたミュゼが現れる。

【ミュゼよ……ここにいた者たちはどうした？お前が集めていたのだろう？】

「もちろん、疑わしき者ですもの。死んで頂くことになります」

【やはり、お前の目的はミラを探し出すことだったのか】

「ええ。あなたたちもわかっていたじゃない。私は断界殻（シェル）という存在とその秘密に気付いた者を、消し去らなければならない」

【ああ、それがあんたの使命だもんな】

「ふふ、けど、意外。ミラをかばって私のところに顔を出すなんてないと思ってたわどうなっているの？」

ミュゼに問われ、目を閉じていたウンディーネが話を始める。

【ミラの記憶は完璧に失われていました】

【ミラはもうどこを捜してもいないでし】

ウンディーネとノームの話を聞いたミュゼは、

「そう、だったの……では……あなたたちの役目も終わったのですね」

役目の終わり……それはつまり、四大達の……死んで生まれ変わることを意味するものである。

【ええ、そうなりますね】

「主のお望みはわかっているんでしょう？あなたたちは知りすぎています。生まれ変わるべきです」

【死んで、次の四大精霊に……か】

「ええ。マクスウェル様の分体は社におられるわ。待っているわね」

そういい、飛び立とうとするミュゼを、

【ちょっと待ってくれないか？】

イフリートが止める。

「なんでしょう？」

【ミラと共に死んだ……レオンを知らないか？】

【そうですね。……ミュゼ、レオンについて何か知りませんか？】

四大達はミラと同様にレオンのことも心配していた。

ミラと一緒に死んだはずなの魂がなかったことに疑問をもっていたからだ。

「レオン？……ああ、ミラの男だったあの……彼、本当に死んでいるの？」

【どういうことでしか？】

「死んでいれば私にだって感知できるわ。でも……彼の魂も何もこの世界からは感じない。彼は……生きているんじゃないの？」

ミュゼの返答に驚く四大達。ミラと共に消えたはずのレオンが……生きているはずはないと思っている。

【……そうか。すまないな、呼びとめてしまって】

「そう？じゃあ、私は行くわね」

そういって、今度こそ、ミュゼはここから離れて行った。

それを見送ると、

【みな、いいな】

【そうですね】

ノームは後ろを見ると、先ほどの術式を出し、ミラを出す。

【ここでお別れでし】

【私たちのやりとりは聞こえていましたね。ミュゼの言葉は正しいのです。断界殻（シェル）の存在を知りすぎた我々は、危険な存在です】

【こうなる覚悟はしていた】

【でし】

【僕たち四大精霊にとって大事なのは、その存在さ。わかったら、さっさとここから去れよ】

【それじゃ、僕たち行くでしね】

【ミラ……いや、ミラではないな。お前はお前自身だ。ミラの名は忘れて生きてくれ】

【もし次の次第に会うことがあれば、よろしく伝えてください……そして、もしレオンに会ったら……あなたと共に過ごした日々を誇りに思いますと伝えてください】

そういい、四大達は移動しようとするがミラを見る。

【もういいだろう。早く、行こ】

見かねたシルフが他の四大達にいい、四大達はミラの前から去って言った。

四大が去った後。ミラはニ・アケリア参道に来ていた。

そこには四大達もいる。

【そんな!?……来てしまうなんて】

【この!まさか僕たちが消えるのを許せない、なんてつもりじゃないよな!】

【待て、シルフ。姿が変わり、記憶がなくとも、やはりお前はミラということなのかもしれんな】

【ええ。それであれば、仕方ありません】

【あのね、僕、ミラの記憶が還ってこなくて、ミラに戻れなくても……大好きでしょ】

【ちっ、こんなのミラかよ】

シルフが今のミラについて言う。

【ミラなら、もっと合理的にかんがえるはずさ。僕たちのところに来るもんか】

【シルフ……】

そんなシルフを見て、悲しくなるウンディーネ。

【お前の覚悟があれば、俺たちは何も言うつもりはない。この先を進もうが、引き返そうがお前の判断に従おう】

【でし！】

【ええ】

【ったく、わーったよ】

再び、四大達はミラにつくことにした。

社に行くとミュゼがいた。

ミュゼはミラを見て驚いていた。

「あら……？ひょっとして、あなた……！」

ミラから四大達に目を向けるミュゼ。

「……私をだましたのか、それとも気が変わったのか。この際、問いただすなんて不粋な真似をするつもりはないわ」

ミュゼはミラを見ながら言う。

「ふふふ……けど、あなたに一つだけ質問があるの。あなた、本当にこの者たちを信用できる？」

今のミラにはミュゼが何を言っているのかがわからない。

「わからないようなら、教えてあげる。私に使命があるように、あなたにも、そう言ってもミラだけど、使命があったわ」

【ミュゼ、それ以上話す必要はありません】

ミュゼの話しをウンディーネは終わりにさせようとする。だが、

「あら、あなたたちが手を貸したことなのに、口を閉じるなんて都合がよすぎない？」

ミュゼは止まらない。

【そ、それはでし……】

戸惑うノーム。

「私が従うべき最優先の命令は、アルクノアの殲滅だったわ。そしてミラはね、その為に……マクスウェル様がアルクノアを引きずりだすために用意された餌だったの。マクスウェル様はアルクノアが自分の命を狙っていることに気づいていたからあなたをマクスウェルに仕立て上げた。予定通り、アルクノアはあなたの命を狙って必死になっていたでしょ。つまり……何が言いたいのかわかる？」

【ミュゼ！】

今まで隠していた事実をミュゼがすべて言い、さらに話そうとするミュゼをシルフは睨む。

「残念だけど、ミラはマクスウェルとして貫こうとしていた使命は、ウソなの。まやかしよ。あなたはマクスウェルではなかった」

そう言いきるミュゼ。

さらに、話を進めるミュゼ。

「いい、よく聞きなさい。この四大精霊はマクスウェル様の命で元素の力で生み出した人間ミラをマクスウェルとして育て、教育したのよ。ミラは……マクスウェル様には最初から見捨てられ、頼みの四大精霊にも騙されていたの！」

なにやら、嬉しそうに言うミュゼ。

【……認めましょう。私たちは全員であなたを騙していた】

【それ故に魂の洗浄の最中、俺たちはお前の魂をすくいあげた】

【私たちにとっても、マクスウェル様を欺く行為でした。……言い訳にすぎませんね】

「そうね」

【ですが、ミュゼ！この方は、私たちに生きて欲しいと思ってくださった！】

【僕たち、まだ彼女と……ここにいないレオンと一緒にいたくなっ

ちゃったんだよね】

【生まれ変わるという話は改めて、断らせてもらう】

【そうでし！僕たちはまだ。ミラやレオンと一緒にいたいでし！】

四大達の言ったことを聞いたミュゼは四大達をあり得ないと言わんばかりに見る。

「……どうして。私には使命がある！なさなくては私に生きる意味はない！あなたたちを生かしておくわけにはいかないの！」

ミュゼとの戦闘が始まった。

ミュゼは髪を自在に操ってミラ達を翻弄し、ミラ達は巧く動けずにいた。

【面倒ない～もうぅ！】

シルフはミュゼの髪をうざったく感じて来ていた。

【……ミラ？どうしたのですか？】

ウンディーネは先ほどから動かないミラを見る。他の四大達もミラを見る。

そのミラはというと……

「フリーズランサー！」

シュシュシュシュン！

「なっ！」

ミュゼはミラが使った精霊術を見て驚きながらも避ける。

そして、四大達もミラを見て驚く。

【バカな……ミラは俺たちの四大の加護を受けた属性の精霊術しか使えないはずだぞ！】

【……まさか、レオン？】

シルフがそういうとイフリート達はシルフを見る。

【ずっと、レオンと旅をしていたせいで本来使えないはずの精霊術を覚えた……とか？】

【でも、そんなことがあるんでしか～？】

【……もしかしたら、頭には覚えてなくとも……体が覚えているのかもしれませんね。レオンと共に戦った時のことを……レオンの技を】

四大達はミラを見る。

「食らいなさい！聖なる槍よ、敵を貫け！ホーリィーランス！」

ズガガガガ！

「きゃあああああああ！！！」

ミラはレオンが使っていた精霊術を駆使し、ミュウを倒した。

倒れこむミュゼはミラや四大達を睨む。

「っ……どうして！なぜ、主の意思に逆らおうとするの！」

【僕はミラに還てきて欲しいでし！ミラが僕を大事だと思てくれたのと同じだけ、僕もミラが大事なんでし！】

【ミラの記憶が蘇るかはわかりません。いえ、そのようなことなどまずないのでしょう。ですが、私たちにとって彼女は……！】

【共に過ごした過去など重要ではない。そういうことだったのだろ

う】

3人の言ったことを聞いたミュゼは言う。

「それはつまり……あなたたちにとって大事なのは……」

【その先はやめてよね。過去じゃなきゃ……クサイ台詞になるよ】

【秘密を知り過ぎたなんて理由で消えるのはいやでしー】

「なら、なぜ逃げなかったの？」

そう、ミュゼの言うとおり、ここに来なければよかったのだ。ここに来ないで逃げていればよかった。なのになぜ、四大達はここに来たのか……ミュゼには到底理解できない。

【変な話でしけど、彼女のためなら、消えてもいいと思たからでし！】

【ミュゼ、俺たちのことは俺たち自身で決める】

【主の命令を聞くのも、聞かないのも、私たちの心のままです】

【な、お前もそう思うだろ？】

四大達はミラを見て笑っている。

「でも、一度消された記憶が戻るなんて、ありえない！ミラにはなれない！」

そう言いながら後ろにある社を見るミュゼ。

「そうですよね！」

ミュゼがそう言うとそこに、本物のマクスウェルの分体が現れる。

【盟主マクスウェル様の分体です】

【分体は死んだ者の魂を洗浄するだけの意識体。安心しろ】

ウンディーネとイフリートの二人が説明をする。

そして、ミュゼの問いにマクスウェルは答える。

「その問いは、否」

そういうと、マクスウェルの体から光が出てきた。

「この光は、かつての魂の情報、つまり記憶と人格を呼び戻す奇跡の術」

「え……」

ミュゼは固まる。そんなこと、私は知らないと。

そう思ったミュゼは空高くに声を上げる。

「なぜ、教えてくださらなかったのですか！マクスウェル様！」

【まずい、マクスウェル様に僕たちまで気取られるよ！】

シルフはそういうが、

何も起こらない。

【どうした？マクスウェル様が応えられない】

「なぜ……また何もお応えになってくださらないのっ！いつになったらお応えくださるのですか！」

嘆いているミュゼを見てイフリートが言う。

【理由はわからぬが、交信を閉じられたのかもしれぬ】

「いやっ……どうしてこんな！」

そういい、猛スピードでこの場を去るミュゼ。

【おい、待て！】

シルフは追おうとするが、

【いいわ、シルフ】

【今は優先することがある】

そういい、ウンディーネはマクスウェル（分体）からミラの記憶と人格の情報の光を受け取り、ミラに手渡す。

【なにはともあれ、やりましたね。これで、ミラ、あなたの記憶は戻ります】

「ニ・アケリア霊山の山頂にて、その光をふるうがいい」

そういい、マクスウェル（分体）は消えていった。

ミラは一度、戦いの疲れを癒すために一旦、ニ・アケリアで休むことにした。

【――――あなた、何か変わりましたね】

「私はマクスウェルとして生きたいだけだ……」

【――――それで自分から死のっての？】

「矛盾してるのはわかっているよ」

【――――だたらヤメるでしよ】

「みなを……今まで関わった仲間を守りたい。――――を守りたい」

「そして、俺がそんなミラを守りたいんだがな」

【――――マクスウェルが何を恐れる？】

「……私は――――との……絆を……共に生きていくことを失うのが……恐かったのか。……失うことを……」

「俺もさ。だから、俺が代わりにマナを槍に注ごうと思ったのに…
…俺の想いを無駄にしやがって」

「だが……ここで一緒に死ぬのも……いいかもな……」

目を覚ましたミラは社に向かい、社にある扉から霊山へと向かった
のであった。

第５４話　精霊界（後書き）

はい。今回はこんなところですね。さて、皆さん、今まで気になっていたかと思いますが、レオンの正体は……精霊に近い人間でした。言わば半精半人ってことです。本人も?まだ〝人間だと言っていましたし。

ゆえに、ミラと一緒に四大達は回収しようとしたが、レオンの魂がなく、ミラしか回収できませんでした。

では、そんなレオンはどこにいったのか?それは……後にわかります。

第５５話　ミラとレオン

～第三者ＳＩＤＥ～

ミラが四大達と共に霊山を登っている頃、ジュード達はミラとレオンに会うため、そして、本物のマクスウェルに会うために霊山の山頂まで来ていた。

山頂に着くまでの間にジュード達はミュゼがガイアスと戦っているのを幾度か見ることになった。

ガイアスはミュゼを追ってどこかへ……山頂へと向かっていったのだが、いざジュード達が山頂に到着すると、そこにはアグリアとプレザ……そして、アルヴィンが待ち構えていた。

「お前たち……だったのか」

アルヴィンは山頂に来るのがジュード達とは思ってなかったらしい。

「アルヴィン！どうして……」

ジュードは何故ここにアルヴィンがアグリア達といるのか驚いてい

る。

「ジュード……」

そんなジュードをアルヴィンは見る。

「お二人まで……ジャオさんは何処に？」

ローエンはジャオがいないことに気づき、アグリア達に聞くと、

「また敵同士になれるなんて、喜んでいいのかしら？それとジャオ殿は今はア・ジュールよ。あの時、船が崩壊した時に私たちを助けた時の傷が原因で休養中よ」

「アハハ！またあんたたちをいたぶれるなんてサイコー！おいブス！あんたこの男に撃たれたんだって？」

アグリアは自分の後ろにいるアルヴィンを指差す。

「……」

レイアはアルヴィンに撃たれたことは事実なので黙る。

「やめろ、アグリア」

そんなアグリアをアルヴィンは止める。

「アハハハハ！」

が、アグリアは止まらないで笑い始める。

「悪いけど、今度こそ死んでもらうわ」

「お前たちがここに来たのは無駄だったことを教えてやるよ！」

アグリアは武器を構える。

「そうはいきません。私は、ジュードさんをマクスウェルに会わせなければならない」

「ローエン……？」

「あなたがガイアスさんたちを特別と感じたのは……あの三人が真に大人たる生き方をしているからです」

「アハハ！ジイさんはしてねーけどな！」

アグリアはローエンのことをバカにしている。それを聞いてローエンは怒ったそぶりを見せない。

「お恥ずかしい話、そうなのでしょう。そして、アルヴィンさん、あなたも」

「俺が……」

アルヴィンは自分が大人になっていないことを指摘され、ローエンを見なくなる。

「ご託はもういいよ、ジジイ！あんたは先にヘブンリーしな！」

そういい、構えていた武器を地面に突き刺し、術を発動させようとするアグリア。

そのアグリアの前にアルヴィンが立ち塞がる。

「アル……」

プレザはそんなアルヴィンを見る。

「いや、俺は……」

「おい、ニイちゃん！どけ！」

アグリアがそういうと、術が完成し、炎がアルヴィンを軽く吹き飛ばす。

よろけるアルヴィンの前にレイアが立つ。

「アグリア！どうしてあなたは！」

「うるせえ！　あたしはな、陛下を裏切るわけにはいかないんだよ。ババア！あんただって同じだろ！あたしたちの居場所はここだ！」

アグリアはそう言いながらプレザを見る。

「そうね……陛下は私たちのようなゴミとされた人間まで傍においてくれた」

「プレザ……」

「ごめん、アル……あなたはやっぱり私の敵っ！」

悲しそうに見つめ合っているアルヴィンとプレザ。

「ここで役に立たなきゃ、お払い箱なんだよ！」

アグリアとプレザは出式を展開し始める。

そんな時だ。

ポオォォォォ――――――！

アルヴィンとレイアの体が黄色く光り始めたのは。

「これは……なんだ？」

「なに……この光？温かい……」

二人から飛び出した光は、一つになっていき、

＜全く……アグリア、プレザ。お前たちはガイアスのことがわかってないんだな＞

光は一人の人間……レオンとなった。

『レオンっ！？』

この場にいた全員が驚いた。何故、ミラと共に消えたはずのレオンがここにいるのだと。

＜よお、って言ってもこれは俺の分体。ただの分身だよ＞

「分身……ですか」

＜そうだ。あの時、俺は消えかかった時に力の一部をアルヴィンと

レイアに憑かせた。こんなことがあるかなと思ってな＞

レオンはニィっと笑ってジュード達を見る。

そんな中、

「おい、てめえ！あたしたちが陛下のことをわかっていないって…
…何で言える！」

アグリアが真っ先にレオンに突っかかる。

＜はぁ……お前たちはガイアスの考えを忘れたか。あいつは自分の国からは脱落者は出させないって言っているんだ。失敗しようがしないはお前たちをあいつが手放すはずがないし、ましてやお払い箱にするはずないだろうが＞

レオンがそういうとジュードは確かに……という。ガイアスと言葉を交わしたジュードにはガイアスがどういう人間かがわかっている。そんなガイアスが部下である二人を切り捨てるはずがない……そう思っている。

「うるせえ！てめえ何かにあたしのなのがわかる！失敗すれば何もかもが無駄なんだよ！」

無駄……この言葉に一番喰いついたのは、

「無駄なんかないよ！」

レイアだった。

「あぁん！！」

「無駄になることはないよ！失敗しても何度も何度も挑戦して、駄目だったらもう一度！何度も挑戦すればいいじゃない！無駄なことなんかないよ！その挑戦が一歩……また一歩って前に進んでいけるんだよ！どうして、自分のすることや他人のすることに無駄だってケチをつけるの！」

レイアがそう、自分の心の底から思っていることをアグリアにぶつける。

「だ、黙れ！無駄なものは無駄なんだよ！」

「だったら……私がしてきたこと、無駄かどうか見せてあげるわ！」

「おもしれえ！やってみやがれ！ブス！」

レイアも武器を構える。

「……構えなさいアル」

「プレザ……くっ！」

アルヴィンも戦うことに躊躇いながらも武器を構える。

＜アルヴィン。戦いの中で躊躇いをもつな。己のことを戦いでプレザに伝えろ。お前の気持ちを＞

「俺の……気持ち」

＜そうだ。お前の気持ちをだ。言葉にしたってわからないこともある。そういう時は言葉でなく……戦いの中で語れ＞

アルヴィンはレオンを見る。

アルヴィンは決心がついたのか真剣な表情でプレザを見る。

＜んじゃま、行きますか！俺にも時間があるからな。ちゃちゃっといきますか！＞

そして、戦いが始まった。

「アハハハ！燃えちまいな！ファイアボール！」

「フリーズランサー！！」

二人は初めに精霊術を使うが、

＜エアプレッシャー！＞

二人から飛んでくる精霊術をレオンはエアプレッシャーの空気の重圧で押し潰す。

「くっ！相変わらずやることが器用ね！」

プレザはレオンのした術を術で相殺するやり方を見て舌打ちする。

＜ハッハッハ！それは今に始まったことじゃないけどな！巨岩の主、荒ぶる憤りをここに顕せ…！深淵の咆哮！！グランドダッシャー！！＞

レオンが術を完成させるとアグリアとプレザの足元に巨大な岩を噴出され、二人を吹き飛ばす。

＜エリーゼ！ローエン！＞

「はい！湧き出でよ、闇の腕（かいな）！ネガティブゲイト！」

「ええ。フリーズランサー！」

エリーゼの闇の精霊術で二人の動きを止め、そこへローエンの氷の精霊術の槍が降り注ぐ。

「「ぐあああっ！！」」

倒れかける二人に、

＜ジュード！＞

「うん！獅子戦吼！」

ジュードは素早く二人の後ろに回り、獅子の形を闘気を敵に叩きつけ、こちらに吹き飛ばす。

＜レイア、行くぜ！！＞

「うん！神速の突き！行っくよー！」

＜貴様に見切れるか？＞

レイアがアグリアを空中に浮かせ、レオンとレイアの二人で、

「＜翔破裂光閃！！！＞」

連続で貫く。

「がっ！？」

連続の突きを喰らったアグリアは怯む。

「＜行くぞ！（わよ！）＞」

＜我らに仇なす者＞

レオンが蹴る。

「冥府へ送りし、朧月の棺！」

レイアは棍で殴り、アグリアを吹き飛ばす。

「＜覇王！籠月槍！！＞」

最後にレオンがレイアの棍に雷を付加させ、それをアグリアに向けてレイアが投げる。

「ぐがあああああ！！！」

空中から受け身を取れず、倒れるアグリア。

「アグリア！これが私が頑張った結果だよ！」

＜お前はどんなに頑張っても無駄だと言ったが、お前はその無駄に負けたんだよ＞

「ちっく……しょう」

倒れながらレオンとレイアを睨むアグリア。

「はぁはぁ……アル」

「プレザ……」

アルヴィンとプレザは対峙していた。

＜アルヴィン……＞

「レオンか……」

「ふふ……あなた、居場所があるじゃない。ないってことはないのよ」

レオンとアルヴィンを見ていたプレザがいきなりそう言いだす。

「でも……これで終わりよ！！」

プレザからの威圧感が高まる。

＜アルヴィン！これで終わりにするぞ！！＞

「……ああ！」

レオンとアルヴィンは武器を構える。

＜炎よ、この剣に宿れ！＞

「全部焼き尽くす！」

「龍精召喚！」

レオンとアルヴィンは剣に炎を宿し、プレザは本から龍の頭が出てくる。

「＜炎覇、鳳翼翔！！燃え尽きろ！！！＞」

「ドラゴネス・スニーカー！！！いっちゃいなさい！！」

巨大な鳳凰と龍がぶつかり合う。

バチィ！！！

激しくぶつかり合っている3人の秘奥義。

「プ、レザアァァァァ！！！！」

「ア、ルゥウゥウゥウゥ！！！！」

アルヴィンとプレザは互いの名前を呼び合い、それにより技の大きさが変わっていく。

「ウオォォォォォォ――――――――！！！！！」

「ハアァァァァァ――――――――！！！！！」

そして、ぶつかり合った結果、

バシャ！！

プレザの秘奥義……ドラゴネス・スニーカーがレオンとアルヴィンの共鳴秘奥義（リンクアーツ・ファイナル）に敗れた。

「きゃあああああああ！！！！」

鳳凰に吹き飛ばされるプレザ。

「プレザ……俺は……」

＜アルヴィン。言いたいことがあるならはっきり言って来い！＞

「レオン……すまねえ」

「くっ！」

「うぅ！」

倒れるアグリアとプレザの二人。

「アル……たった数日間だったけど……あなたといられて幸せだっ

た……」

「プレザ、俺は……」

戸惑うアルヴィン。

そんなアルヴィンを見て、プレザはアルヴィンを見ながら微笑んでいる。

「アル……居場所は……あなたにもあるのよ……気づいて」

そう、言った瞬間！

グラグラグラグラ！！

山頂が激しく揺れ始める。

アグリアとプレザのいるところの岩が崩れた。

「プレザ！！」

アルヴィンは急いで手を伸ばすが……届かない。

＜ちぃ！＞

シュン！！

それを見ていたレオンは雷化して、落ちていくプレザを拾いに行く。

そして、アグリアも落ちけるが

「アグ……リア！」

レイアが手を掴んだ。

「今、助ける！」

「！」

アグリアはそれを聞いて、驚くがいつものようにレイアに口悪く言う。

「おい、ブス！てめーがいくらがんばっても、どうにもならないことってのがあんだよ！」

そういって、アグリアは自分から手を離した。

「あっ！」

「アハハハハ！絶望しろ！」

そういいながら、落ちていくアグリアであったが、

＜ところがギッチョン！＞

ガシッ！

「んな！？」

プレザを拾いに行っていたレオンが右脇にプレザを抱え、左脇にアグリアを抱えて、山頂に戻ってきた。

＜俺がいるんだ。死なせるかよ＞

「「レオン！」」

アルヴィンとレイアは笑顔になる。死んでしまったと思った二人が生きてここに戻ってきたことを喜んでいた。

レオンは二人を降ろす。

「プレザ！」

ダキッ！

「ア、アル……！？」

アルヴィンはプレザに抱きつく。

「よかった……本当によかった」

アルヴィンはプレザに見れない位置で泣いている。

「ア、アル……」

アルヴィンが泣いていることに気づいたプレザはアルヴィンに優しく手を回す。

「おい、この野郎！よくも……！」

アグリアはレオンに文句を言っていた。死ぬ覚悟をしてレイアの手を離したのに助けれたことに不満をもっていた。

そんなアグリアに、

「……」

パァン！

「なっ……！」

レイアがアグリアの頬を平手打ちを食らわす。

「なにすん……」

「バカ！」

いきなり平手打ちをするレイアに文句を言おうとするアグリアであったが、レイアが怒った表情で自分を見ていることに戸惑う。

「死んだら……死んだら本当の無駄になるじゃない！生きてよ……生きていれば、いいこともある！できないことは皆で一緒にすればいい！でも、死んだら……意味がないのよ？」

アグリアを見ながら涙を流すレイア。

「お前……」

アグリアは自分のために泣くレイアを見て、何も言えなくなる。

そして、

バチィィ、バチィィ！

レオンの体が雷を発生させながら、どんどん薄くなっていく。

＜ちぃ！タイムリミットか……ジュード！皆、あとはお前たちがやれ！＞

「レオン！君とミラは生きているの？」

ジュードがレオンとミラの生死を聞く。

＜ああ。俺とミラは…て……る。だ……俺……皆……力＞

「何？何を言っているの？」

力が弱まり、レオンが何を喋っているのかがわからないジュード。

＜とに……今……マクス……いけ！＞

そういって、レオンの分身体は消えた。

「……行こう！皆！」

ジュードがそう言うと他のメンバーは頷く。

「プレザ。お前は一足先に戻ってろ」

「アグリア。後でお話しようね」

アルヴィンとレイアはアグリアとプレザにそういって、ジュード達は空間の穴に入って言った。

その頃、精霊界にいるミラは、

やっとの思いで山頂に到着していた。

そして、マクスウェル（分体）に貰った記憶と人格の情報が宿っている光を自分の中に入れた。

その直後だ。

ドックン！

【ぐっ！力を召喚される……！】

【この強力な交信は……マクスウェル様！】

【でも、一体！誰と戦っているというのです！？】

【行けるでしょ、今のミラなら！】

【さあ、行くぞ！】

そういい、四大達は吸い込まれていき、ミラの視界には真っ黒な景色だけになる。

真っ黒な景色だけのところに一つだけ穴がポツンと開いていた。

そこを覗きこむと……ジュード達がマクスウェルと戦っていた。

それを見たミラは表情を変える。

――――胸の鼓動がなりやまない……そうだろ？――――

――――助けに行きたい……そう思っているのだろ？――――

ミラに目の前に記憶を失う前のミラと……レオンの姿があった。

「バカものめ！今のお前は立っているのがやっと。もう私に抗う力

などないではないか！」

――――なぜ私は抗ってまで死を選んだ！――――

――――俺たちは何故、死んでまで彼らを助けた！――――

ジュードがマクスウェルに突っ込んでいく。

――――彼らは……彼らは誰だっ！！――――

そして、ジュードが、マクスウェルの障壁を殴る。

「ジュード！皆！！レオォォォォン！！」

その瞬間、ミラはその真っ黒な空間から抜け出し、一瞬でマクスウェルの障壁を破壊し、ジュードはマクスウェルを殴り飛ばす。

皆は突如、現れたミラを見て、驚いていた。

「ミラ……なのか」

「「ミラ！！」」

「まさか……ミラさん」

「ミラ……ミラ！」

「ミラ……よかった」

ジュード達はミラが生きていてくれたことに喜んでもいた。

「すべてのものの未来を守るのが、マクスウェルの使命ではないのか？」

ミラは倒れているマクスウェルを睨みながら言った。

「なぜ……こんなことが……四大が謀ったというのか……」

「迷ったな。それでは本来の力が出ないぞ」

ミラがそういうと、四大達がジュードを含む、メンバーに回復を施す。

そして、ミラの後ろに立つ四大達。

「いいのか？お前たち？」

「き、きさま！」

四大を従わせるミラを見て、マクスウェルは激怒した。

「……さあ、マクスウェル！お前の罪を数えろ！」

ミラがレオンが言う口癖を言う。

「待って！レオンは？レオンはどこにいるの？

ジュードは今ここにいない、最後の仲間……レオンのことをミラに聞く。

他のメンバーもそれに気づき、慌てている。

だが、ミラが慌てているそぶりはない。

何故なら

「レオン……ともに行こう！」

――――おうともさ！！――――

そう、レオンの声が聞こえるのと同時にミラの隣に８つの術式が現れる。

術式が現れるのと同時に、ミラの体から火・水・風・地の属性の色が８つの内の４つに反応し、色が染まる。

そして、エリーゼからは闇、ローエンからは氷、アルヴィンとレイアからは雷の属性の色が３つの術式に吸い込まれ、色を染める。

最後にジュードとミラからは光の属性が現れ、最後の術式の色を染めると、

シュドオォオォォ――――ン！！！

８つの術式が染まった時、光を発し、爆発が起こる。

「うわっ――――――！」

近くにいたジュードは爆風から自身を守る。

煙が舞い、そして、煙が晴れていくとそこには……

今までと同じ黒赤のロングコートをその身に着て、手には炎と氷の剣を……そして、赤かった髪は金髪になっても、変わることのない表情で堂々とミラの隣に立つ……

『レオン！！！』

レオンがそこに立っていた。

「降臨……満を持して」

レオンはそう言いながら、ミラを見る。

「ミラ……」

「レオン……」

二人は見つめ合い、そして、マクスウェルを睨む。

「さ～て、俺の女を困らせた罪は重いぜ？マクスウェルの爺さんよ」

剣を構えるレオン。

「き、貴様か！貴様の存在がミラを変えたのか！！！」

レオンを睨むマクスウェル。

「はっ！この世に変わらない人間はいないんだよ！ミラだって例外じゃねえんだよ。お前の思惑通りにすべてが進むと思わない方がい

いぜ？」

「きぃぃさぁまぁぁぁ！！！」

手をかざすマクスウェル。

「さあ、始めようか！戦いを！！」

そしてここに人と精霊の主の戦いが始まるのであった。

第５５話　ミラとレオン（後書き）

はい、急展開になってしまいましたが、今回はこんな感じです。
次回はレオンＳＩＤＥから始まり、マクスウェルとの戦いです。
次回もお楽しみに

第５６話　ＶＳマクスウェル　精霊となりし者（前書き）

今回、共鳴が多いです。大判振る舞いです。マクスウェルボコボコタイムの始まり♪

第５６話　ＶＳマクスウェル　精霊となりし者

～レオンＳＩＤＥ～

復活した俺は皆と共にマクスウェルと対峙している。

「レイジングサン！！」

っ！さすがは精霊の主！だが、

「出て来い！氷を統べる精霊……セルシウス！」

【はい、マスター！】

氷の術式からセル……シウスか？

術式から出てきたセルシウスの姿が変わっていた。

まず、髪の毛は前よりも長くなっているし、身長も伸びている。胸も何故かでっかくなっているし……あとは変わってないけど、どうなってんの？

「くらえぇ！」

「おっと！考えている暇はないな！セルシウス！お前の氷の精霊術であの炎の塊を凍らせられるか！」

俺はセルシウスに言うと、彼女は微笑む。

【誰に言っているのですか？あの程度の炎など……】

セルシウスが手をかざすと、炎の塊は凍りついた。

「なんだと！？」

マクスウェルは精霊術を防がれたことよりも大精霊クラスのセルシウスを見て驚いているのか？

「さて、行くぜ！ミラ！

「ああ！共に行こう、レオン！」

俺とミラは詠唱を始める。

「真紅の焔よ」

「その檻にて、敵を焼き尽くせ」

「「イグニートプリズン！！」」

マクスウェルの四方から火柱を吹き上げ敵を拘束、更に足下から巨大な火柱を吹き上げる。

「お、のれえぇぇぇぇ！！！！人間が精霊になるだと！ふざけるなぁ！！！」

攻撃を受けながら俺を睨むマクスウェル。

「ハッ！俺は元々、半精半人だったんだね！今更精霊にあろうがなるまいが、俺には関係ないな！ミラを守るためならこの身を精霊になろうが、俺がミラを守ることには変わりがない！」

ビシッ！っと俺はマクスウェルを指差す。

「大体、てめえは精霊の主だからって生意気なんだよ。マクスウェルは人と精霊を守る存在なんだろ？だったら、その中にはミラも俺も、四大達も、ジュード達も入っているはずだ！自分の決めたことを守りとおさない奴に何か負ける気はないな！」

「きいいいいさあぁぁぁまあぁぁぁ！！！！」

体勢を立て直すマクスウェルを見て俺はミラと次の術を放つ。

「吼えろ、古の焔！」

「不浄なる生命を、灰塵へと誘え！」

「「エンシェントノヴァ！！」」

マクスウェルの真上から中心に周囲を焼き尽くす巨大な炎を落とした。

「ぐあああああ！！おのれ！！儂を誰だと思っている！属性チェンジ（エレメントチェンジ！）」

むっ？マクスウェルの纏うマナのオーラが変わった？

「インスペクトアイ」

俺はマクスウェルの今の属性を調べる。属性は……炎！

「ローエン！」

「お任せを！」

ミラの次にローエンと共鳴する。

「静寂の森に眠りし氷姫よ」

「彼の者に手向けの抱擁を」

「「インブレイスエンド！！」」

マクスウェルの足下（っていっても乗っている椅子）を凍らし、動きを封じ、真上から巨大な氷塊を落とした。

「こ、これほどの……力を！」

マクスウェルは睨んでいた俺を今度は目の色を変えて焦ってきている。

「てめえは俺を怒らせた。人の女を餌呼ばわりしやがって」

俺を中心に大量のマナが渦巻く。

「風の力、今ここに！」

「我等が敵に裁きを！」

「「ゴッドブレス！！」」

術が完成し、マクスウェルの頭上から風圧で押し潰す。

「ぐうぅおおおお――――！」

風圧に押しつぶされるマクスウェル。

ダメージを受けながらマクスウェルは属性を変える。

「レイア！」

「ジュード！」

「「行くよ！！」」

ジュードとレイアが俺とローエンの横を走って通り抜けていく。

「棍と蹴りと」

「炎の連撃！」

レイアが敵を打ち上げた後、ジュードが炎を纏った５連続蹴りを喰らわし、最後は蹴りでマクスウェルを地面に向けて吹き飛ばす。

「「哭空紅蓮撃！！」」

ジュードとレイアの技で吹き飛んで来るマクスウェルの先には俺とエリーゼ。

「いらっしゃ～い」

「行きます！現れて！闇の炎！」

「塵も残さん！！」

俺の持つ双剣に光と闇の炎が絡みつく。

「「浄破滅焼闇！！」」

「ぐるぅあああああ！」

吹き飛んできたのにまた吹き飛んで行くマクスウェル。

「お、来たな！行くぞジュード！」

「うん！行こうアルヴィン！！」

「受けてみろ、この技を！」

「遠慮はいらねぇ、取っときな！」

「「喰らえ、星皇蒼破陣！！」」

アルヴィンが剣を地面に突き付け、そこから陣が展開され、立ち昇る光で周囲を攻撃した後ｄふぇジュードがマクスウェルを吹き飛ばす。

「集え！聖断の冷気！！」

「そして歌いなさい！絶氷　の剣（つるぎ）！！」

マクスウェルの吹き飛んだ先には俺とローエン。既に共鳴奥義（リンクアーツ・セカンド）を使う体制にいた。剣から巨大化した氷の剣を振り下ろす。

「セルシウス・キャリバー！！」

バシィィィィン！

「……るさん」

吹き飛びながらマクスウェルが何かを言っている。

「？」

「許さんぞ……貴様らあぁぁぁぁ――――――！！！！」

マクスウェルが手をかざす。これは……まずい！

「皆！俺に後ろに来い！！」

俺が大声で皆に言うと全員、俺の後ろに来る。

「結晶せよ　根源たる元素！」

「神の槌、虚空より来たりて裁きを振るわん！」

マクスウェルの頭上に４つの術式。

「「メテオスウォーム！！」」

マクスウェルのメテオスウォームは頭上から。

俺のメテオスウォームは空高くから降ってくる。

ドンドンドン！！

ズドンズドンズドン！

メテオスウォーム同士で相殺し合う。

「バカな……！」

マクスウェルは自分の技を相殺されたことにとても驚いている。

「ミラ！シルフ！力を！！」

「了解した！！」

【仕方ないね！僕の力、貸してあげるよ！】

シルフの力を借りて、俺とミラは４人に分身し、シルフの力で空に飛びマクスウェルを上空から強襲し、四方から雷を纏った斬撃を連続で喰らわせ、

「「極光蓮華！！」」

最後の斬撃を喰らわせたら剣を鞘に納めると同時に二人がそれぞれ一人に戻る。

「ぐぅがあああああああああ！！！」

四大の一人、シルフの力を借りての技だったので先ほどまでよりもダメージは大きいみたいだ。

倒れ伏すマクスウェルを見て、俺はミラを見る。

ミラは俺が何をしようとするのかがわかったのか頷く。

「これで終わりだ！来たれ、生誕の雷！」

俺とミラが剣を構えると共に当たりに雷が走る。

「怒れ、創生の大地！」

二人で剣を同時に上に向けると、雷が上へと昇っていく。

「「リバースクルセイダー！！！」」

俺とミラの剣を中心に雷が落ち、マクスウェルに直撃した。

「これは俺とミラの再誕を冠する術だ。見に染みただろ？マクスウェル！」

「この戦い、私たちの勝ちだ！」

そして、戦いは……終わった。

第５６話　ＶＳマクスウェル　精霊となりし者（後書き）

はい、今回は戦いだけにしました。共鳴秘奥義……使わなかったな。
でも、その分共鳴奥義を出しまくりましたＷマクスウェルのフルボッコタイム♪
メテオスウォームをメテオスウォームで相殺……斬新な考えでしょ？
次回は、ガイアスが……ミュゼと……。
次回もお楽しみに！

第57話　異世界エレンピオスへ

～レオンＳＩＤＥ～

ガシャン！

マクスウェルの座っていた椅子が地面に落ちる。

「ぐはっ！」

そして、マクスウェルは椅子から落ち、地面に転がる。

「ミラ……レオン……」

ジュードは俺とミラを見る。本当にここにいるんだと実感しているんだろうな。

「ミラ――！（君！）」

レイア、エリーゼ、ティポはミラに抱きつく。

「エリーゼ、レイア、ティポ」

ミラは3人の頭を撫でる。

「このかんしょく、本物のミラ君だ――」

がし

「えっ――――」

ティポがミラの胸をスリスリしているのを俺は止める。

「おいこら、ティポ！何どさくさに紛れてミラの胸を触ってる」

「あわわわわ！こっちも本物のレオン君だ！！」

ガブッ！

そういいながらティポは俺に噛みつく。

「はなへ！てぃほ！」

俺はティポを思いっきり引っ張って顔から外す。

ボヨオォォォ～～～

「全く」

俺は変わらないティポを見て、呆れている。

「これほど嬉しいことにまた出会えるとは。長生きしてみるものですね」

「信じられねえ……けど、現実なんだよな」

ローエンとアルヴィンは俺とミラを見て改めて再び会えたことを喜んでいる。

「元気そうだな、二人とも」

「全くだな。怪我もなさそうでよかったぜ」

俺がそう言うと、アルヴィンとレイアが俺を見て、言う。

「レオン……ありがとうよ」

「レオン……ありがとう！」

いきなり礼を言われた俺には何が何だか分かんなかった。

「……ん？」

「レオンがあの時、私とアルヴィン君に何かをしてくれたでしょ？」

「……あ～、あの時か。何だ？保険のつもりで憑けたけど、役に立ったのか？」

そう、俺が言うとレイアがそれはもう！！っと大きな声で言う。

「レオンのおかげでアグリアもプレザも死ななくて済んだのよ！」

「ああ……目の前で死ぬと思ったプレザをお前の分身体が助けてくれた。……ありがとうよ」

アルヴィンはお礼を言うのが慣れていないのか照れながら言う。

そして、

「……ミラ」

「……レオン」

俺とミラは見つめいあい、

ガバッ！

抱きつきあう。

「また会えてうれしいぞミラ」

「ああ……私もだ。レオンも……私のために……」

ミラはどうやら俺の体のことがわかっているようだ。まあ、マクスウェルの名をもっているからな。俺が人から精霊になったのには気付くか。

ガサ

「ん？」

「はっ！」

音がする方を見ると、マクスウェルが宙に浮いていた。

「はぁ……はぁ……」

だが、俺たちの猛攻によってかなりお疲れのご様子。

「ま、まだやるかー、相手になってやるぞ、レオン君がー！」

「おい、人任せか」

あ、ついティポの言ったことにツッコミを……。

「わからん……なぜだ……四大……どういうつもりだ」

どうやら、ティポの言ったことは無視しているな。だが、なんで四大が裏切ったのかがわからないのか？

そう、俺が思っているとマクスウェルの前に四大達が現れる。

【すまぬ。俺はもう我慢できなかった】

【うん。だから僕たちミラを助けちゃった。精霊界に連れて行ってね。でも、驚いたよ。まさか魂が見つかんなかったレオンが僕たちと同じ精霊になっているなんて】

イフリートとシルフが話すと目を細めるマクスウェル。

「そのような指示、出してはおらぬ」

指示……ねぇ。四大達もミラもお前の道具じゃないんだがな。ただ、指示に従うしかできないあの女とは違って。

【盟主。私たちに心があるように誰しもそれをもっています】

【道具扱いするのはダメでし。それが世界のためでもー】

ウンディーネとノームに言われて黙るマクスウェル。

「マクスウェル、私の使命はあなたのものだったが、同時に私のものでもあった」

「自らの意思……お前の心が決めた答えだというのか」

「うむ」

頷くミラ。

「お前の言う世界ってのは、ただ存在するだけの世界でしかない……俺はそう感じだ。けどな、それは生きるとはいわないんじゃねえか？俺は……俺たちは自分の意思で生き、考え、行動する。それが……本当の生きて行くってことじゃないのか？なあ、マクスウェル」

俺が生き方についていうとミラがほほ笑む。俺はそれにほほ笑んで返す。

俺の話しを聞いたマクスウェルは目を閉じて何かを考え始め、俺たちに言う。

「それもお前の行動を解せぬ原因か。人の心は時として難解よ……それをないがしろにした結果、道を誤ったということか」

そして、何かを決意したのか俺たちに言う。

「……断界殻（シェル）を解こう」

「本気（マジ）なのか！？」

マクスウェルの言ったことに一番驚いたのはアルヴィンだった。今まで、この世界を守るために張っていた断界殻（シェル）を本人の口から解こうと聞いたのだ。疑いたくもなるな。

「断界殻（シェル）を解けば、断界殻（シェル）を形成していた膨大なマナを世界中に供給することができる。さすればしばらくの間、世界中の精霊を守ることができるだろう」

四大達がその姿を消していく。

「数年……いや、長ければ数十年の猶予は稼げる」

「ありがとうマクスウェル。考えるから！エレンピオスもリーゼ・マクシアもみんな一緒に生きられる方法を！」

ジュード……お前、本当に１５歳？すんげえ、大人でも考えなさそうなことを言うな。

そう、俺たちがマクスウェルと話しあっていると、

「この世界の神に等しい座から降りるというのか。マクスウェル」

そこにいたのは、

「「ガイアス！」」

俺とミラはガイアスを見て驚く。

ガイアスは一瞬俺とミラを見た後、マクスウェルを睨み、言う。

「答えろ、マクスウェル」

ガイアスの問いにマクスウェルは疲れた表情でガイアスに言う。

「人の子ことに振り回されるのに、いいかげん疲れたのだ」

「マクスウェル……」

「マクスウェル……お前」

そこにいるのは精霊の主ではなく、年老いた人の爺さんのようだった。

「お前がリーゼ・マクシアの神の座から降りるのであれば、俺がそこに座ろう」

「ただの人間がマクスウェルになるだと?笑い話よ。貴様など資格をもたず」

「資格の有無ではない。覚悟をもったものだけが認められる話だ。お前がやらないのであれば、俺がやる」

マクスウェルの言葉を遮って、ガイアスは自分がこの世界の神になるという。

だが、いくら覚悟があるからと言っていきなりこの世界の神になれるはずがない。ましてや、ガイアスは人間。この世界に何か影響を及ぼすこともあるかもしれない。
それでもガイアスはこの世界の神になろうというのか？

「その話、私も認めるわけにはいかないな」

「お前たちに認められる必要などない」

ミラの言うことをすぐに切り捨てるガイアス。

そして、手をかざすと、空間が揺れ始める。

ゴゴゴゴゴゴッ！パリィン！

さらに、空間に亀裂ができる。

「この力……まさか」

マクスウェルにはこの現象の原因がわかった。

ボオォォォン

空間に穴が開いて、そこから出てきたのは、

「！！　クルスニクの槍！？」

「おいおい、何でこんなところに槍が来るんだ！」

俺とミラはクルスニクの槍の出現に驚く。まさか、ここに来てまで槍を見る羽目になるとは……と。

そんなクルスニクの槍の上には……ミュゼがいた。

「仕方なかったのです……だって……あなたは私を導いてくれませんもの」

「ミュゼ、気は確かか！」

マクスウェルはミュゼの行動に驚いている。まさか、ミュゼがクルスニクの槍をここに持ってくるとは思っていなかったのだろう。

「断界殻（シェル）を消すなんてヒドイ！」

「マクスゥエル、貴様は世界の礎となれ」

「っ！まずい！」

ミュゼがマクスウェルに近づく。

俺は急いで剣をエターナルソードにし、

「間に合うか！ソニックブーム！！」

マナを溜めた斬撃をミュゼに放つ。

だが、

「何を！？ぐぅ！」

「きゃあああ！」

一歩遅かった。

マクスウェルはミュゼの術によって拘束され、クルスニクの槍に張り付けられた。

ミュゼは俺の斬撃を食らい、羽に傷ができている。

「ちぃ！遅かったか！」

「うっ！私には断界殻（シェル）を守る役目が大事……大事、大事なの！」

チッ！狂っていやがるな。何でもかんでも役目だの導いてくれないだの……少しは自分で考えるってことをしないのか！？

俺はエターナルソードを構えながら拘束されているマクスウェルの元へと走る。

「放せ、これは命令だ」

「あなたはすべて……遅すぎる！そして……あなたは一番ウザいのよ！！」

マクスウェルに近づく俺に小さな黒い球体を飛ばすミュゼ。

「くっ！」

俺はそれをすぐに避けるが、その小さな黒い球体の当たったところは消滅していた。

「おいおい……（汗）」

あの小ささでこんな威力かよ。さすがは大精霊クラスの精霊。バカにはできないな。

「うごおおおあああああ！」

「っ！」

マクスウェルの苦しむ声が聞こえ、見てみるとクルスニクのマナ吸収機能が起動しており、マクスウェルからマナを吸収していた。

「ミュゼ、来い」

ミュゼはガイアスの言葉に従い、ガイアスの傍に立つ。

「よいな？」

「あなた様の御心のままに」

そういうと、ミュゼの胸のところに黒い穴があき、そこにガイアスは手を突っ込んだ。

突っ込んだ手を取り出すと蒼い刀身の長剣が握られていた。

「やめ……ろ……解放する……気か……」

マクスウェルはミュゼを作った存在。ミュゼの中から取り出された剣の正体を知っているのか、苦しみながら焦っている。

ミラ達もガイアスの握っている剣を見て、何かを感じている。

「これこそ、ミュゼのもつ力、時空を斬り裂く剣だ」

「二度と会うことはないでしょう。さようなら、ミラ」

「ミュゼ、お前！」

「どうして僕たちが！ガイアス！」

「ガイアス……お前、そこまでして神の座を欲するのか！」

「俺は死んでいった者のためにエレンピオスへ行く！お前たちはリーゼ・マクシアで大人しくしていろっ！」

ザンッ！

ガイアスは剣を振い、斬撃を飛ばす。ただの斬撃ではない……時空を斬り裂く斬撃だ。

だがな！

「断る！！」

ザンッ！

俺もエターナルソードを振う。ガイアスの斬撃が赤なら俺の斬撃は青。

バシュン！

「なんだと！」

「ウソ……なんであなたが時空を斬り裂く剣を！？あり得ない！あり得ないわ！！」

ガイアスとミュゼは驚いているな。俺の持っている剣のことが。

「ふっふ！これが俺の双剣を一つにした姿……名をエターナルソード。時間と空間を？操る〃ことができる」

ピクッ

「時間と空間を?操る〃だと?」

「そっ。ただし、時間とかを操るって言っても過去を変えることはできない。そもそも、ミュゼのその剣は時空といっても元々は時間と空間を意味する剣だ。そうだろ?マクスウェル」

俺はマクスウェルを見る。苦しみながらもマクスウェルは頷く。

「そうか……だがな!俺のすることにお前たちは……邪魔だ!!」

ガイアスは俺の説明を聞いて納得するが、俺たちがよほど邪魔のようだ。何度も斬撃を放ってくる。

俺をそれに合わせて何度も斬撃を放つ。だが、

「ガイアスの邪魔はさせない!」

シュン!

「っうお！？」

斬撃を放ちあっているとミュゼが俺を妨害してきた。マズイ！！

斬撃の一つが俺たちの後ろ当たりの空間を斬り裂いた。

「空間を斬りやがった！」

斬り裂かれた空間から吸い込む力が働く。

「あ……あ……、だ、だめ……引っ張られる……」

「が、がんばれエリー～！」

「きゃああ！」

持ちこたえていたが吸い込まれそうになるが、

「エリーゼ！つかまれ！」

アルヴィンがキャッチする。よかった。

「レオン！どうにかできないの！？」

「ジュード！無理を言うな！俺だって剣を地面に刺して何とか持ち堪えているんだ！こんな状態で剣を構えでもしたら俺が吸い込まれちまう！」

俺たちがどうするかを考えていると、

「マクスウェル！」

ミラがマクスウェルの名を呼んでいた。

すると、

バシュン！

マクスウェルの左下辺りに同じような空間の裂け目ができる。

「うおぉ！？」

「何、どうなってるの！？」

「こっちにもかよ！」

二つ目の裂け目ができたことに戸惑う俺たちにマクスウェルが言う。

「行け！この者にマクスウェルの名を与えてはならん！」

「マクスウェル！」

ガイアスはマクスウェルの行動に怒りを覚える。

「レオン！みんな！」

「ああ！みんな！体から力を抜け！」

そう言うと共に皆は体から力を抜き、マクスウェルの力でできた穴に吸い込まれる。

「うわーっ！！」

「きゃああ！！」

「どわあ！！」

「ぬああ！！」

悲鳴を上げながら吸い込まれる者もいた。

俺は吸い込まれながらマクスウェルの声が頭に響く。

――――人の身でありながら精霊になりし者よ――――

「マクスウェルか！」

――――ミラを頼むぞ――――

「ああ、任せておけ！」

――――そ……か――――

そして、声が途切れる。

俺の意識もそれと同時に失った。

第57話　異世界エレンピオスへ（後書き）

はい、ようやくここまで来れました。さて、次回からはエレンピオスが舞台ですが……オリジナル要素が出始める頃でもありますね。例えば……光と闇とか。剣とか。他にもあるかもね？

次回もお楽しみに！

主人公設定3（前書き）

エレンピオス編前に主人公の設定です。

主人公設定3

名前：レオン・ストライフ

年齢：２０歳

身長：１７７ｃｍ

体重：６３ｋｇ

種族：人間？→半精半人→精霊

性格：特に変化なし

趣味：身体と精神を鍛えること

好きなこと：ミラとの会話。四大達との会話。

好きな人：ミラ

嫌いなこと：ミラを傷つけることもの

容姿：身長も伸びて、大人になったせいか男の色気がにじみ出ている。（そのせいで、偶にミラに怒られる）髪の色は赤から金髪になっている。

参考：脚の怪我を治すため、ル・ロンドで少しの間だけ過ごしている間、ミラが恋人になる。

その後、仲間を助けるためにミラと共にクルスニクの槍のマナを吸

収させ、一度は死ぬ。
一度死んで甦ったことにより半精半人であった存在が精霊へと変わった。何故、精霊になったのかは物語で語ります。

ステータス（ｆａｔｅ風）

筋力：Ａ＋　　魔力：ＥＸ

耐久：Ａ＋　　幸運：ＥＸ

敏捷：ＥＸ　　宝具：Ａ＋

武器：メイン・マテリアルブレイド（エターナルソード）　後は色々

術技及び精霊術
・テイルズシリーズに出てくる武器技は全てマスターしている
・テイルズシリーズに出てくる魔術系・治癒術系・補助系・精霊術は全てマスターしている

オリジナルスキル
・ウェポンマスター5
全ての武器を使用できる
・スペルキャンセレーション3
全ての精霊術を詠唱なしで発動できる
・ミラが好き
ミラと共に戦っている時、ステータスが2倍になる（何このチートw）
・四大使役
ミラと共に一緒にいたため、四大を使役できるようになった
・オーバーリミッツ
リンクをしなくてもオーバーリミッツを1人で発動できる
・リミッター5
オーバーリミッツ状態が通常の2倍になる代わりに戦闘中に体力と魔力を激しく消費する
・リバース
例え、瀕死になろうともミラが戦っている時、執念によって自動復活する
・セルシウス使役
セルシウスを使役できる
・分身体
己のマナを分身体に振り分けることができる
・？
このスキルはまだ解放されていない

称号

・ミラが好き
ミラが好きになった男へ送られる称号

・ミラの騎士
ミラを守ると決めた者へ送られる称号

・ウェポンマスター
数々の武器を使いこなした者に送られる称号

・スペルマスター
数々の魔術を使いこなした者に送られる称号

・有名人
各地で色々と名が広まっている人に贈られる称号

・女性キラー
その無自覚な男の色気で女を惑わした男へ送られる称号

・ミラの彼氏
ミラに長年の想いが通じ合い、愛し合った男に送られる称号

・精霊に成りし者
人の身でありながら精霊へとなったものに送られる称号

・ミラの守護精霊
騎士から守護精霊へとランクアップしたものに送られる称号

第５８話　話（前書き）

今回、レオンが何故半精霊化、そして精霊化したのかが最後辺りにわかります。

第５８話　話

～レオンＳＩＤＥ～

「うっ！……知らない天井だ」

目を覚ました俺の目に映ったのは今まで見たことのない天井だった。

身を起こすと俺の隣にあるベットにはミラが起きていた。

「よお、ミラ」

「……レオン」

俺とミラはいつものように見つめ合っていると、

ガチャン

ジュード達が部屋に入ってきた。

「ミラ、レオン、おはよう！」

エリーゼとレイアが俺たちに元気よく挨拶をする。

「……おはよう」

「おはようさん」

俺たちも挨拶をする。

「なあ、ここってどこだ？」

「ここはバランさんのお宅です」

「バラン？誰だ」

「バラン……ああ！アルヴィンの従兄の！ってことはここはエレンピオスか」

「正解」

エレンピオス……ここに来たってことは原作の通りに物語は進んでいるのか？記憶があやふやであんまり覚えてないけど。

ガチャン

また扉が開く音がし、一人の男が入ってくる。そう、アルヴィンの従兄であるバランだ。

「お目覚めのようだね。調子はどう？」

「全然大丈夫だ」

「問題ない。お前がバランか？」

「そうだよ。あんたたちを助けたバラン。君たちを見つけたのは偶然。特別感謝はいらないからね」

そう言いながら足を引きずって椅子に座るバラン。

「そうか……」

バランは机の上で何か作業をしているが俺のいる位置からでは見えない。

「なあ、バラン。俺たちが珍しくねえのか？」

「まあねー」

何となく聞いてみたくなって聞いてみたが反応が薄いな。

「けど、よく俺がわかったな？二十年も経ってるんだぜ」

「それ、おじさんの銃だろ。おじさんに感謝しとけ」

なるほど、ここに運ぶ時にでもアルヴィンの懐にあるあの金色の銃が目に入ったのか。それでアルヴィンが二十年前に消えた自分の従弟のアルフレドだってわかったのか。

「けど、死んだんじゃな……」

「それもそうか。あれ、ないな……」

机の上で作業していたバランだったが、何かの部品がないのか椅子から立ち上がり、棚の中を捜している。

そんな足を引きずって歩くバランをジュードはじっと見ていた。

「少し、変わった人ですね」

「エレンピオスの人間全員がああってわけじゃないぜ」

エリーゼはバランを見て、変わっているというが、アルヴィンがエレンピオス人の基準を間違えないでくれと言う。

「足のこと？」

「あ、いえ……」

「ジュード」

ジュードの視線に気づき、ジュードを見ながらバランは言った。そう言われて少し戸惑うジュードにレイアが呆れている。ふふ、この二人はいいカップルだね。けど、あんまり恋人らしいことはしてな

いよな。まあ、二人ともまだ15歳だし、心の準備が足りないのかね。

「いいよいいよ。子どもの頃に事故でね。よし調整終了っと」

何かの部品を取り、椅子に座ると何かを装着しようとする。

「よせよ、バラン」

アルヴィンはバランが何を装着しようとしているのかがわかり、俺とミラを見て、バランを止める。

「なんで？」

皆も何故アルヴィンがバランを止めるのかがわからなかったが、ジュードはバランの手にあるものを見て、声を上げる。

「それって！」

「向こうから来たんじゃ、なじみはないと思ってたけど」

「黒匣（ジン）！」

剣を構えようとするミラを俺は止める。

「待てミラ」

「そうだ。待ってくれミラ」

「……？」

俺とアルヴィンに止められたミラは不思議そうに俺たちを見る。

「これがないと歩けなくてね」

そのバランの言葉を聞いてミラは俺の右足に付けられている医療ジンテクスを見る。

「そうだ。腹減っただろう？準備するからその間、街を見てきたら？こっちは初めてなんだろ？」

「そうだな。皆、街を少し見て回ったら話がある」

俺は街の見て回ることに賛成し、そのついでに話をしようと皆に持ち掛ける。

「そうだね。僕たちもミラとレオンに聞きたいことがあるし」

ジュードも頷き、後で話をすることとなった。

街の商業区に来た俺たちであったが、やはりリーゼ・マクシアとは違うので違和感を感じ始めている。

「やっぱり……変な感じがします」

「うん……なんだか落ち着かないところだよね」

リーゼ・マクシアの街にあって、エレンピオスの街にないもの……

それは！

「自然がないんだよ。リーゼ・マクシアにはどんな街にでも自然……木や草、植物は存在していた。だが、ここにはその自然がない」

「なるほど。確かに木どころか草一本生えていませんね」

「黒匣（ジン）使ってるからー？」

「ああ。そうだな。黒匣（ジン）は知っての通り、精霊が動力源だ。その精霊がいなくなれば自然は失っていく」

「ああ。その通りだよ。この世界は精霊がどんどん減っていくから自然がどんどんなくなっていくんだ。エレンピオスの死は遠くない」

まあ、二千年（ジン）間黒匣を使い続けてきたからだろうな。

「……精霊は必要か」

「……ああ。けど、それだけのためにリーゼ・マクシアの人々を燃料にする計画を立てるなんてのはやり過ぎだ」

俺とミラは静かにそう言った。

「ミラ？レオン？」

一番近くにいたレイアが俺たちを不思議に思って見ている。

ミラはなんでもないよっと首を振り、俺もなんでもない。気にするなという風に首を振る。

すると、ローエンの目に何かが映ったのかアルヴィンに聞く。

「アルヴィンさん、あれは……」

「『異界炉計画を我々は支持します』黒匣（ジン）を扱っている商人たちが出したんだろ」

確かにポスターにはそう書かれているな。

「黒匣（ジン）を使うの、やめられないんでしょうか……」

エリーゼはポスターを見て、エレンピオスの人たちが黒匣（ジン）をやめられないかというが……今は無理だろうな。

「異界炉計画の撤廃のために募金を！」

そうしていると一人の爺さんが募金とか言っているし。

「……ジイさん。撤廃するのにどうして募金だよ？」

「政府へ意見書を出すにも、タダじゃなかろうて！」

まあ、確かに政府に意見書を出すんだ。ただで済むはずがない。

「酒くさジジイー」

「なんじゃ、このぬいぐるみ？」

爺さんはティポを初めて見たのにそこまで驚いたそぶりがない。

「はい、おじいさん。僕も異界炉計画を止めたいんだ」

「おい、ジュード」

ジュードは普通に募金をしていた。アルヴィンもそんなジュードを見て、驚き、呆れている。

「ヒッヒッ！ありがとの」

そういい、爺さんはここからは去って行った。

「ガイアスはどうやって、異界炉計画を止めるつもりなんだろう」

「ミュゼのあの力があれば、こちらへはいつ来てもおかしくはないだろうな」

「うん、そうだよね」

……さて、そろそろいいかな。

「さて、皆。話があるし、どこかゆっくり話ができるところに行こうか」

「なら、こっちに来いよ。トリグラフ海停がある」

アルヴィンに案内されて俺たちはトリグラフ海停へ向かう。

トリグラフ海停につくと俺以外は椅子に座っている。

「さて、まず俺があの後、一度死んでからどうなったのかを説明しよう」

皆を見渡し、全員が頷くのを確認した俺は話を始める。

「あの後、ミラと共に消えた俺は精霊界とは別の……そうだな、異空間というべきか。そこにいた」

「異空間？」

「そうだ。お前たちが俺とミラが登場するまでいた世精ノ途。ミラが一度死んでいた精霊界。まあ、この二つの中間に位置する空間だ

な。精霊界でもなく、世精ノ途でもない空間に俺は漂っていた」

皆の頭の上に?が浮かんでいる。

「そもそも、まず俺という種族は微妙なものだった」

「どういうことです?」

「俺は数年前に四大達と契約して使役できるようになっているんだ」

俺がそういうとローエンは驚いている。

「人の身でありながら……ですか?」

「まあな。ただ、その契約が問題だった。元々、俺は数年間の修行の旅のせいで霊力野(ゲート)がかなり発達していて、マナの量も通常の人間の数十倍だったんだ。それが四大達との契約でさらに上昇して、遂に人間としての限界を超えてしまった」

「……そうか。だから、レオンは人間離れした身体能力とかがあったんだ」

「その通りだ。結果、俺は数年前から半分が人間で、半分が精霊っていう、中途半端な存在だったんだが……」

「……もしや、一度死んだせいで人としての部分が無くなった……そういうことですか？」

『っ？！』

ローエンの仮設にジュード達は驚き、俺を凝視する。

「……う～ん、そうだな。今の俺は精霊だし、そういうことになるな」

「でも……どうして精霊になったの？」

「う～ん……そこはわかんないんだよね（言えないよな……これは絶対に俺が死んだ時にこの世界に転生させたあの神が原因だって。俺も何時の間にか精霊化してたからな）」

「……そうなんだ……」

ジュードも納得しているようでしてないって感じだな。

「まあ、俺がすることは変わりないしな。ミラを守る。半精半人だった時はミラの騎士だったし……今はそうだな……名乗るのであれば守護騎士だな。ミラだけの」

「わ……私だけの守護騎士／／／／／／（い、いいかもしれん／／／）」

あ、ミラが顔を紅くしてる。可愛いなｗ

「じゃあ、一つだけ。セルシウスはどうして外見が変わっていたの？」

「そういえば……そうね。初めは誰！？って思ったけど、レオンがセルシウスって言った時は、ええ！？この人があのセルシウスなの！？って驚いたもん」

セルシウスのことか……なんでなんだろうな？

「俺にもわからん。が、もしかしたら俺が精霊化したことが影響しているのかもしれない。今の俺は大精霊クラスのマナを所持している身だ。その俺の膨大なマナが俺の術式の中で寝ていたセルシウス

に影響を及ぼしたのかもしれん」

「……けど、それだけでスタイルとかも変わるもんか？」

ピキッ

アルヴィンのその一言にミラの雰囲気が変わる。

「確かにな……フッフッフ……レオン、どういうことか、教えてほしいのだが？」

剣を抜いて構えるミラ。

「ミ、ミラ……？お、落ち着け！俺にだって何が何だか……もしかしたら……心の中でミラのことを心配していたからセルシウスのスタイルが変わったのかも」

シュウゥ～

それを言うとミラの雰囲気が元に戻る。

「どういうことだ？」

「ミラのことをあまりにも考え過ぎたせいでセルシウスにミラの体のスタイルがそのまま、コピーされたのかもしれん。髪の長さとかも一緒だし、胸の大きさも」

「／／／／／／？！」

俺がそう言うと胸を抑えるミラ。

「バ、ババババ、バカもの！皆がいる前でなんてことを！！」

剣を抜いて俺に迫るミラ。

しかも、

「ねえ、ジュード。レオンがミラの胸のことを言った時、見ていたよね（黒笑）」

シャキ

レイアは黒い笑みを浮かべながらジュードに迫っていた。

「ま、待って！待ってよレイア！？」

俺とジュードはミラとレイアから離れようとするが、

ドスン

後ろは壁。

「「さあ、少し、Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをさせてもらおうか？」」

二人がそれぞれ武器を構える。

そして、

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！』

トリグラフ海停に俺とジュードの悲鳴が響き渡ったのであった。

第５８話　話（後書き）

はい、今回はここまで。
レオンの正体についてがわかりましたね？何で精霊化していたのかも。
レオンとジュードは最後辺りにミラとレイアのＯＨＡＮＡＳＨＩされましたｗ
次回はできればヴォルトのところにまでいきたいですね。

第５９話　ＶＳヴォルト

～レオンＳＩＤＥ～

話を終えたところでエリーゼとレイアの腹の虫が鳴り、俺たちはバランの家へと戻っていくと丁度バランが玄関に向かって歩いてきた。

「バラン、出かけるのか？」

「ヘリオボーグへ行ってくるよ。新しい黒匣（ジン）の研究結果が出たらしくてね」

「そっか、バランさん技師っていってたもんね」

……この人が源霊匣（オリジン）を成功させるんだよな。頑張ってほしいものだな。

「ねえねえ、ごはんはー？」

ティポがそう言い、皆はエリーゼを見る。エリーゼは顔を紅くして顔を伏せる。

「用意してあるから、勝手に食べていいよ」

「やった！」

バランの用意してあると聞いた一番反応して喜んでいる。が、俺たちの視線を感じたエリーゼは手で顔を隠して照れている。

「バランさん、僕たちを見つけた場所を教えてくれませんか？」

「……？」

レイアは何でジュードがそんなことを聞くのかがわからず首を傾げる。

「これから行くヘリオボーグの先だよ。街の対岸にある丘の下で倒れてたんだ」

ジュードの質問に答えるバランにジュードは礼を言う。

「ありがとうございます」

「うん、それじゃ、行ってくるよ」

俺たちにそう言ってバランは外に出て行った。

俺たちはバランの家で食事を取ることにした。

食事を終えた俺たちはこれからのことを話しあっていた。

「んで、みんなはこれからどうするよ。バランに聞いた場所に行けば、リーゼ・マクシアに帰れるかもしれねえぞ」

「それってさっき、ジュードがバランさんに聞いていたことよね？ジュードはどうする？」

俺が話していることは先ほどジュードが聞いていたことだ。

「リーゼ・マクシアとエレンピオスの両方を救う方法を見つけるまでは帰らない」

ジュードのその言葉を聞いたレイアや他の皆も驚いている。

そして、エリーゼが椅子から立ち上がり、ジュードに言う。

「ジュード、わたしたちじゃ役に立ちませんか？」

「もちろん、みんなのやりたいことが僕と一緒なら残って欲しい。役に立つとか、立たないとか。それ以前に心強いよ」

「ですが、黒匣（ジン）や異界炉計画、ガイアスさんのことを考えると危険でしょう」

「だからこそ、今一度、これからの行動を自身で決めて欲しいのだな？レオン、ジュード」

ミラの言うことに頷く俺とジュード。レイアは少し俯いてから言う。

「本気……なんだね？一緒にいたい、だけじゃダメなんだよね」

「うーむ……」

悩んでいるローエン。ジュードは自分を見るレイアを見て話す。

「僕、エレンピオスに来て改めて思ったことがあるんだ。エレンピオスから黒匣（ジン）はなくせないよ。それでも断界殻（シェル）はなくさなきゃいけない」

「確かにな。この街を見ただけでもこのエレンピオスからは黒匣（ジン）をなくすことはほぼ不可能だ」

「うん。だから、僕は、僕なりの答えを見つけなきゃいけないんだ」

「俺はエレンピオスの人間が困るような、答えを出すつもりねーぜ」

アルヴィンは自分の答えは自分の故郷の世界を困らせることはしないと答える。

「こうやって悩んでいる間にも……精霊さん死んでいってるんですよね」

「そうだな……だが、中途半端なことをすれば余計に精霊たちは……死んでいく」

俺たちがこうしている間にも精霊は死んでいく。だが、答えが見つからない状態で事を運べば、大変なことになることがあるだろう。

「みんな、聞いてくれ。黒匣（ジン）がなくならないのであれば、私は精霊が減らないよう新たな誕生を見守る。レオンと共にな」

ミラが俺を見て微笑む。俺も微笑み返す。

「でも、それじゃ……　精霊も世界を循る一部。人間も精霊も、私が支えてみせる」

「一人できないことも……二人ですればいいしな。俺は精霊になったし。死ぬことはないに等しいしな」

俺もミラと共に生きる覚悟は１０年前からできている。悔いはない。

「ミラ……レオン……」

「このことはレオンと一緒に考えていたことだよ。黒匣（ジン）をなくせない。ジュードがそう思ったのなら、それでいい」

そう言いながら立ちあがるミラ。

「迷っている時間が惜しい。ヘリオボーグへ向かおう」

「だな。それにヘリオボーグへ行けば……」

「黒匣（ジン）の研究をやっているとこだし、異界炉計画についても何かわかるかも……だろ？」

「そのとおりだ」

「三人は着くまでに、答えを出してくれないかな」

ジュードは答えがまだないエリーゼ、ローエン、レイアに言う。

「うん……」

レイアはいつもの元気がない。自分の答えが見つかっていないみたいだな。俺とミラは元々、決まっているしな。

「私の役目は見守り、導くことか……」

ローエンは俺たちを見ながら、そう呟いた。

ヘリオボーグへ向かうために街の出入り口に向かうとそこから人々が慌てて街に入ってきている。

「何かあったんですか？」

ジュードが一組の男女に話を聞いてみると

「ヘリオボーグが攻撃を受けたんだ！」

聞きたくないことを聞いてしまった気がした。

「……なんだって？」

「信じられない。仮にも政府軍の基地よ！黒匣（ジン）の生産と研究の拠点だからってそこを襲うなんて……」

「誰が襲ったの？」

誰が襲ったのか……俺たちにはその見当が何となくついていた。だが、あまり信じたくもなかったのだ。

「それがわからないんだ。連中、黒匣（ジン）なしに算譜法（ジンテクス）使うんだ！あんなの初めてだった！」

「算譜法（ジンテクス）ー？」

算譜法（ジンテクス）……リーゼ・マクスアから来た俺たちには馴染みのない言葉だな。

「黒匣（ジン）で起こした精霊術のことだ。それが必要ないってことは……」

「ガイアスだ」

こんなことをすぐに実行できるのはガイアスしかいな。

「そんなバカな！ガイアスがもう動き出したのか？」

「行こう。バランさんも心配だよ」

俺たちは急いでヘリオボーグへと向かった。

トルバラン街道を通って俺たちは今、ヘリオボーグに到着した。しかし、

「人の気配がない……」

そう、人の気配というものが全くないのだ。

辺りを見回しているとジュードが何かを拾っていた。

「黒匣（ジン）の外装だ……」

ローエンはジュードの目の前にある箱を見る。

「黒匣（ジン）を詰めていた荷のようですね……中はすべて破壊されています」

「ガイアスがこれをやったのかな……？」

「十中八九、これはガイアスがやったな。この剣で斬り裂かれた痕……こんなに大きな痕を残すにはかなり長い剣で斬り裂くしかない。ガイアスしか思い浮かばないな」

ミラもそう思っていたのか、俺は言うと頷いている。ローエンも犯人はガイアスだろうと思っているようだ。

「大きな施設や倉庫は壊されていますが、その他の建物は残っているようです」

「つまり、目的が侵略や軍そのものの殲滅ではない、ということか」

まあ、確かにもし殲滅が目的だったらガイアスが本気を出せばこの施設を吹き飛ばすこともできるしな。

「ミラ、バランさん捜しましょう」

「うむ」

エリーゼ……お前、アルヴィンがバランを心配しているのに気づいて……優しい子だな、お前は。

「よし、まずは奥を目指すか」

俺たちはヘリオボーグ内へ入って行った。

ヘリオボーグに入ってしばらくすると、建物の外に出た。

外に出てみると、

「誰、か……」

声のする方を見ると一人の女兵士が倒れていた。

「大丈夫ですか！？」

ジュードが治療をし、壁に腰掛ける女兵士。

「手間かけさせた……もう大丈夫だ」

「他に人が見当たらないんですけど……どこにいったか、わかりますか？」

レイアの質問に女兵士は答える。

「早くに逃げ出した者もいたが……連中のおかげでひどい混乱だったからな……」

「基地を襲撃した人物を見たのですか？」

「長剣の剣士と宙を飛ぶ女を中心に大勢の兵隊が波のように押し寄せた」

長剣の剣士に宙を飛ぶ女……ここまでガッチリ一致する人物と言ったら……

「間違いないな。ガイアスとミュゼだ」

「ああ。レオンの予想通りだ」

「やつら黒匣（ジン）を一切残らず破壊すると言って、我々に退去するよう要求してきたんだ」

「黒匣（ジン）を破壊？」

……ガイアス。お前、そこまでする気なのか。この世界を見れば、黒匣（ジン）をすべて破壊されでもしたらこの世界の人々が死ぬことになるんだぞ。お前はそれでいいのか？

そして、いつのものように何かを考えているジュードは、パッと顔を上げる。

「まさかガイアス……！」

「エレンピオスにある黒匣（ジン）をすべて破壊する気なんじゃ！……だろ？」

「レオン！？気づいてたの？！」

皆が俺を見る。

「ああ、まあな。あいつとはライバルであり、友でもあるからな。あいつは一度決めたら徹底的に物事を進める。俺がやめろって言っても無駄みたいだしな」

ヤレヤレっと首を回す。

「ちょっと待て!?異界炉計画を潰すためにか!?極端すぎだろ?」

「……いや、黒匣（ジン）がある限りエレンピオスの状況は変化しない。異界炉計画は何度でも立ち上がるだろう」

「ガイアスは、黒匣（ジン）をなくすことで、二つの世界の問題を、根本から解決する気なんだよ」

「正直しんどい話だが……レオンの言うとおりだとしたら、ヤローならあり得るか、くそ。なら、バランは……」

アルヴィンはバランが殺されているかもしれないと思っているのだろうな。

そうしているとエリーゼが女兵士に聞く。

「あの……バランという名前に……心当たりはありませんか?黒匣（ジン）の技術者なんです」

「それなら……源霊匣（オリジン）を研究している棟かもしれない」

「源霊匣（オリジン）だと！？」

源霊匣（オリジン）……セルシウスを蘇らせた技術か。

「ああ。兵装研究棟という所だが、今頃は……あまり期待しない方がいいかもな。襲撃した連中もそこにいる可能性が高い」

「……」

アルヴィンは悔しそうな表情をしている。当り前か……二十年ぶりに再開した従兄が死んでいるかもしれないという……ことが頭を過ったんだからな。

「アルヴィン……」

「大丈夫だ。……気にすんな。お前はガイアスのことだけ考えてろ」

アルヴィンを心配しているジュードだが、アルヴィンは大丈夫だという、

「でも……」

「そうじゃねーだろ、お前は。前に進むんだろ」

「……」

「正しいとか、人に優しくとか今は……そうじゃねえだろ」

いつまでも自分のことを心配するジュードにアルヴィンは今はこれからのことを考えろとジュードに言っている。

「アルヴィン……ありがと」

ジュードは自分のことを心配しているアルヴィンに礼を言う。

「ねえねえ、その研究棟ってどこー？」

ティポがバランのいる研究棟について聞き始める。

「この先に行ったところだ。まだあればの話だがな」

女兵士は傷ついた体で立ちあがり、俺たちに言う。

「気をつけろよ」

「あなたも気をつけてくださいね」

女兵士はここから去って行った。

俺たちは女兵士に言われた方へと進むことにした。

「アルヴィン？」

「大丈夫だ。問題ねーよ」

ミラは動かないアルヴィンに話しかけるが、アルヴィンは問題ないと言い、移動し始める。

女兵士に言われた棟に来た俺たちであったが、広すぎてどこに行けば分からなくなっていた。

「バランの居場所も……ガイアスもこれじゃわからないな」

「他の場所を探そう」

ピコピコピコ

「……」

何やら隣の部屋から音がしたな。何の音だ？

それに気づいたアルヴィンがその部屋のドアに手をかける。

「待ってくれ」

「どうかしたのか？」

ガチャ

アルヴィンがその部屋に入って行くので俺たちも後に続いて部屋の中へと入って行く。

カタカタカタ……カタカタカタ……

アルヴィンは機械を動かして情報を集める。

「間違いない。アルクノアから渡ったデータで源霊匣（オリジン）の……ヴォルトってのを作ってたようだぜ」

「ヴォルト、か」

「雷の精霊……ヴォルトか」

「知っているのか？」

「まあな。それにセルシウスにも聞いたことがある名前だし」

そうかっと納得するミラ。

「ジランド、本気で源霊匣でエレンピオスを救おうとしていたんだ」

「なんだ？源霊匣のやろう……半刻ぐらい前に強制起動された記憶があるな」

「誰かが源霊匣を動かしたのですか……？」

「……」

「それはわかんらねーが、源霊匣はこの研究棟の上の階にのぼったみたいだぜ……追うか？」

アルヴィンは俺とミラを見て聞く。

「追うぜ。セルシウスと同じ存在なら、俺がどうにかできるし、ヴォルトを動かしたのはガイアスの可能性が高い」

「何か思い当たるのか？」

ミラとアルヴィンが俺を見る。まあ、こんな言い方をすればそう聞いてくるか。

「確信はないが、ガイアスはジランドと同じことを考えた可能性がある」

「源霊匣（オリジン）の可能性か？」

「そうだ」

俺が頷くとジュードが話しかけてくる。

「僕、ガイアスと会って話がしたい」

「ねえジュード、行くのはいいけど……どっちにしてもガイアスが、黒匣（ジン）を壊すつもりなら……もう話はできないんじゃ……」

「その時はその時だよ。ガイアスがそのつもりなら僕は……」

何かを決意しているジュードを見てローエンが聞く。

「いいのですか？ジュードさんはガイアスさんを尊敬しているのでしょう？ミラさんを尊敬するのと同じように」

「私と同じ……」

「そんなんで、本気でやりあえるのかよ？」

「アルヴィンが、どうしてそこまで言うんですか」

「さっきの説教もそうだぞー！調子にのるなよー！」

ジュードに色々というアルヴィンにエリーゼとティポが文句……なのか？を言っているな。

「いいんだ、エリーゼ。僕はガイアスを尊敬している。だからって、ガイアスと同じ道じゃないと歩めないわけじゃないよ」

ジュードは俺とミラを見る。

「……そうじゃなきゃ、ガイアスやミラ、レオンのような大人にはなれない」

「ジュード……」

「ジュード……お前」

俺とミラはそのジュードになんて言えばいいのかわからなくなる。
まあ、俺たちのような大人になれない……なんて言われたらなぁ～
困るぜ。

ヴォルトがのぼって行ったという上に来てみると、バチバチ言っている球体を発見。

「あれが源霊匣（オリジン）、ヴォルトか……？」

アルヴィンはあんな球体が源霊匣（オリジン）なのかと疑っている。

「ジジ……ガガ……」

ガン！バチィィン！

「きゃ！」

「びりびりするー」

「本当に雷を操る精霊なのですね」

「言ったとおりだろ？」

「ええ」

「ジランドのような、使役する人間が見当たらない……」

「これって暴走してるんじゃないよね……？」

皆でヴォルトのことを言っていると、球体の中にヴォルトが人の形をしていたのが見えた。

バチィィィ！ジィジィジィ！

雷を何かに当てている。

「どっちでも同じこと。まずはおとなしくさせる！」

「来い！セルシウス！」

シュ！バァーン！

氷の術式からセルシウスが出てくる。

「お呼びに参上しました。マスター！」

「一緒に戦ってヴォルトを止めるぞ！」

「はっ！」

セルシウスを入れての戦闘が始まった。

「ジジジ……！」

ヴォルトが雷で作った小さな球体をいくつも周りに飛ばす。

俺は雷化しているので雷の属性はほぼ通用しない。

「オラアアア！！！」

今回は剣ではなく素手で戦っている。

「輪舞旋風ぅ！！！」

蹴りで絡めてこちら側の懐に呼び寄せてからの！

「獅吼翔破陣！！」

吹き飛ばし、地面に叩きつける。

「エアプレッシャー！！」

「ネガティブゲイト！！」

地面に叩きつけられているヴォルトにローエンとエリーゼの術で追い打ちをかける。

「ジジ……グガガガ！」

苦しんでいるヴォルトに、俺とセルシウスの術が発動する。

「氷霧に彷徨え！凍河に果てよ！」

「冷気に抱かれて刹那に眠りなさい」

「「インブレイスエンド！！」」

ローエンとエリーゼの術で地面にから起き上がれないヴォルトを氷

の棺に閉じ込めた。

「ミラ、決めるぜ！」

「ああ！行こう！レオン！」

止めは俺とミラの術式を展開する。

「万象を成しえる根源たる力、太古に刻まれしその記憶！！」

「我らの呼び声に答え、今ここによみがえろ！！」

ヴォルトの周りに、火・水・風・地属性の球体が現れ、

「「エンシェント・カタストロフィ！！」」

ヴォルトを中心に大爆発を起こした。

「ギギギ……ガガガガガ――――――――――！！！」

ドカアァァ――――ン！

「お前はおとなしくしていろ、ヴォルト」

「少ししたらお前も俺の術式の中で寝ていろ」

倒れているヴォルトにそういってこの戦いは終わった。

第５９話　ＶＳヴォルト（後書き）

はい、ここまでですね。いや～ずっと使いたかったエンシェント・カタストロフィが仕えて良かった！だって、使うなら四大達が無事に戻ってきたら使おうって思っていましたので！ヴォルトもフルボッコ。何もできずに終了～。

これでヴォルトもレオンはゲットすることになりますね。

これでゲットした精霊は……２体。後、２体は……オリジナル編に。

次回もお楽しみに！

第６０話　否定される理想（前書き）

タイトルの理想……だれの理想かわかるかな？

第６０話　否定される理想

～レオンＳＩＤＥ～

バタン！

俺たちと戦っていた雷の精霊……ヴォルトは俺とミラの技によって力尽き、倒れた。

「やっとおとなしくなった」

「ぼくにかかれば、こんなものらくしょー」

レイアとティポは戦い終わってホッとしている様子だ。

「セルシウスといい、源霊匣（オリジン）てのはかなりやっかいだな」

「はい。大精霊クラスの力を感じました」

アルヴィンとエリーゼは倒れているヴォルトを見ながらそう言った。

そう、話していると、

ボシュン

空間が割れ、そこからガイアスとミュゼが出てきた。

「ガイアス、ミュゼ！」

「こんな場所で出会うとは。意外なこともあるものだな」

「やっぱりエレンピオスに来ていたのね」

俺はガイアスに目を向ける。

「おい、ガイアス。ヴォルトを動かしたのはお前か？」

「ガイアスも源霊匣（オリジン）の可能性に気づいていたの？」

ジュードが俺の言葉に続いてそう言う。

「可能性？俺はそのようなものの上で民たちを生かすつもりはない。ジュード、俺が源霊匣（オリジン）の使役を試みたのは、お前が考えそうなことだったからだ」

「え？」

ガイアスにいきなり自分の考えそうなことだと言われて、驚くジュード。

「だが、ムダだった。到底、人に御しきれるものではない」

「ちょっと待て」

「なんだレオン」

俺はガイアスの話しを遮る。

「御しきれないってのは大精霊クラスのセルシウスやヴォルトのことだろ？源霊匣（オリジン）は別にこんな強力な精霊を扱わなくてもいいんだ。例えば精霊の化石に宿っている微精霊とかな」

そう……確か原作では精霊の化石に宿っている微精霊を呼び起こすものだったはずだ。別に今ガイアスに説明しても問題ないだろ。

「俺は例えば……の話を聞く気にはならん」

「……頑固だね。そう思うんだったらここの研究員とかに聞いたらどうよ」

「断る。そのようなものは時間の無駄だ」

「そうよ。ガイアスは正しい…「てめえは黙れ糞女」……なんですって！？」

……俺はミュゼのことはあまり好きではない。何でもかんでも人に指示とかを聞かないと行動できない奴はな。

「お前は黙っていろ。俺は今、ガイアスと話しているんだ。マクスウェルが応えてくれないだけで今度はガイアスに応えてもらおうとする……一々、人に何かを言われないと何もできない奴が俺に話しかけるな」

「くっ！！！！」

俺を睨んでくるミュゼ。

「だが、結局、俺がすることは変わらん。この世界の黒匣（ジン）を一掃する。それだけだ」

「やっぱりそんなこと考えてたのかよ……」

ガイアスの考えは俺やジュードが立てていた仮設が当たっていた。
エレンピオス人であるアルヴィンは黒匣（ジン）がなくなれば、何が起こるかも目に見えている。

「でも、そんなことしたら！」

「異界炉計画は確実に終わらせられる。異論はあるだろうがな」

「断界殻（シェル）はどうする？」

「断界殻（シェル）はなくさないわ。黒匣（ジン）がある限り。リーゼ・マクシアがエレンピオスに蹂躙されてしまう可能性は消えないもの」

「マクスウェルもあのままにしておくつもりか」

「弱き者を死なせないのは、強き者の義務だ」

「間違っているよ、ガイアス！」

「何が間違っているというのだ！断界殻（シェル）を維持し、黒匣（ジン）をすべて破壊した後に、世界を一つに戻せばいいだろう！」

……全部、か。その中には病気で苦しんでいる人も入っているんだろうな。

「黒匣（ジン）をなくせば苦しむ人間が生まれる。その者たちを無視するというのか！」

「苦しむ弱い人間は、ガイアスが守ってくれるわ」

ガイアスは俺・ミラ・ジュードを指差す。

「レオン、ジュード、ミラ！俺の理想がわからぬお前たちではないだろう？」

そういう、ガイアスの言葉に首を振るジュード。

「どんな理想も、人の気持ちを無視して押しつけたら意味ないよ。人が自由に生きるために黒匣（ジン）が必要なんだ！」

黒匣（ジン）が必要……ジュード。お前はこの世界に来て、そう思うんだな。フフ……いい奴じゃないか。

俺は自然と笑みがこぼれる。

「お前の言葉は可能性だけを語る恣意的なものに過ぎんぞ」

「そうかもしれない。でも、やめるわけにはいかない」

ジュードのそれを聞いたミュゼがガイアスに言う。

「これ以上ここにいるのは無意味です。行きましょう」

さて、ここからは俺のターンだな。

「ちょっと待ってもらおうか」

「……あなた、何のつもり？」

ミュゼが俺を睨む。

「ガイアス。お前の考えも可能性に過ぎん」

「……なんだと」

ガイアスも俺を睨み始める。

「まず、「黒匣（ジン）をすべて破壊した後に、世界を一つに戻せばいいだろう」って言ったよな。すべての黒匣（ジン）を破壊する……間違いないな？」

「ああ」

「なら、そのすべてには体の不自由で黒匣（ジン）によって命を繋いでいる者も入るんだろ？」

俺がそのことを言うと目を見開くガイアス。

「それと世界を一つに戻す……どうやってやる気だ」

「そんなの、わたしの力にガイアスの力を組み合わせれば……」

……論外だ。

「無理だな」

「……何故」

「リーゼ・マクシアは元々マクスウェルが作った世界。文明から何から全部違うのに二つの世界を一つの世界にしたら、文明の差でどちらかが差別される」

＊読者の皆さんはわかるかと思いますが、シンフォニアの舞台となっていた「シルヴァラント」と「テセアラ」は最後には世界を一つにしましたよね？その続編のラタトスクの騎士ではその一つにしたことが原因で文明の差が出ていました。つまり、リーゼ・マクシアとエレンピオスを一つにしたら、どうなるか……お分かりですよね？

「それにミュゼ。お前、弱い人間はガイアスが守るって言ったな？」

「言っていたらどうなるのかしら？」

「すでにガイアスの言っていることは矛盾している」

「……」

ガイアスは黙って俺を見ている。

「さっき言ったように黒匣（ジン）がないと生活できない人間だって、このエレンピオスの世界にはたくさんいるはずだ。その人たちから黒匣（ジン）を取り上げれば待っているのは……死。リーゼ・マクシアには黒匣（ジン）の代わりになるものはない。つまり、さっきミラが言った苦しむ人間はこれに該当する」

「それと、さっきガイアスはジュードの言っていることは可能性だと言っていたが、結局のところガイアスの理想も「可能性」でしかない」

ピキッ

ガイアスは目を大きく開き、動揺しているのが目に取るように分か

る。

「だが……それでも俺がすることは変わらん！」

そういい、黒い空間に入ってガイアスとミュゼは消えて行った。

話が終わると、

「バラン……？バラン！！」

アルヴィンが何かを見つけたのか声を上げる。

「アルフレド……アルフレド！」

昇降機の中にバランと研究員のが乗っていた。

「動力が落ちたせいで昇降機が止まったようですね。どうにかしないと」

「ここは俺に任せな」

皆は俺を見る。

「さて、まずはヴォルトをっと」

俺は８つの術式を展開させ、その中の一つ……雷の術式をヴォルトの前に出す。

「ヴォルト……お前もセルシウスと同じように……生まれ変われ！」

ヴォルトは術式に吸い込まれる。

「続いて……来い！ヴォルト！！」

ビィシャアアアアン！！

俺の目の前に雷が落ち、そこには……

「この俺を救ってくれたことを感謝する」

先ほどとほぼ同じ容姿のヴォルトが立っていた。

「しゃ、しゃべったー！？」

ティポが一番驚いている。

「さすがレオン。私たちにはできないことを平気でやるな」

ただ一人、ミラだけは驚かないで感心している。

「ヴォルト。出てきてすぐ出悪いが、あそこに雷……電気を注いでくれないか？」

俺が指さす方を見るヴォルト。

「お安いご用です」

バチィィィン！

強力な雷が動力を動かす装置に注がれ、昇降機が動き出す。

バランは無事に昇降機から降りられることができたのであった。

第６０話　否定される理想（後書き）

はい、今回は短いですがここまで。
それと読んで驚いた読者もいるかと思いますが……今までのシリーズで喋っていなかったと記憶しますが、ヴォルトを喋らせてみましたｗ
まあ、特に意味はありませんがね。
さて、レオンはガイアスの理想を否定しています。民たちが聞けばいいものだと思いますが、結構矛盾している気もしますので、レオンにはガイアスの理想を否定してもらいました。
次回もお楽しみに！

第６１話　可能性は現実へ

～レオンＳＩＤＥ～

昇降機を動かすことができ、バランと数名の人たちは無事、下に降りられることができた。

「助かったよ、ありがとう」

「バランさん、この人たちは？」

ジュードはバランの後ろにいる数人の人たちを見て、バランに聞いた。

「みんな、黒匣（ジン）があっても、普通に生活を送るのが難しい人たちなんだ」

ミラは数人の足元にいる生き物を見て、もしやと思いバランに聞いた。

「バラン……ひょっとして、新型黒匣（ジン）の研究結果というのは」

「うん、ここのみんな、源霊匣を使っているんだ」

「この子たちが源霊匣……？」

ジュードの視線は源霊匣といわれている生き物たちに行く。

「かわいいですねー。でも、力は微精霊ぐらいに感じます」

「そりゃそうだ。微精霊の源霊匣だからね」

バランが軽くそう言うと驚く皆。ってあれ？俺、さっき喋ってなかったっけ？

「意外だな。源霊匣がどうやって生まれてるのか知らないの？」

「源霊匣は精霊の化石から生まれる……だろ？バラン」

「なんだ、知っている子もいるじゃないか。うん、君の言うとおりだよ。それに付け加えるとリーゼ・マクシアの人がマナを注ぐと、源霊匣が生まれるんだ」

「おかしな話だ」

ミラは首を傾げながら、俺の足についている医療ジンテクスの装着してある精霊の化石を見て言う。

「あ、そうだよね。レオンだって精霊の化石使ってるもんね？」

「ただし、増霊極（ブースター）が必要になる」

「増霊極（ブースター）」

「……ですか？」

「増霊極（ブースター）に一番、反応したのはエリーゼとティポ。まあ、ティポも増霊極（ブースター）の一つだしな。

「増霊極（ブースター）を使ってマナを注ぎ込むと、精霊の化石に宿っている術自体が実体化する。それが源霊匣（オリジン）だ」

「黒匣（ジン）とどこが違うんだ？」

アルヴィンはバランの話を聞いて、源霊匣（オリジン）と黒匣（ジン）の違いの説明を求める。

「術の精度の雲泥の差。昔会った医療算譜法（ジンテクス）ぐらいの精度が出るんだ」

「医療算譜法（ジンテクス）……だと」

「マジかよ……」

俺とミラは、俺の足についている医療ジンテクスを見る。まさか、ここにきて、これの話しを聞けるとは思いもしなかった。

「医療算譜法（ジンテクス）じゃ、精霊を消費しちゃうからね」

「それってつまり、源霊匣（オリジン）は精霊を殺さないってことですか？」

「まあね。精霊の化石に溜めたマナを使っているから」

……これを考えた奴は本当に天才的発想の持ち主だな。

「バラン。ヴォルトやセルシウスといった大精霊クラスとはどう違うんだ？」

「大精霊クラスは別物だね。どうやら精霊の力が大きくなれば、成功率は下がっていくみたいでね。ここの成功率はまだ五分五分かな」

「でも、それだけあれば……！」

皆の中で希望が芽生える。

「微精霊の源霊匣（オリジン）が黒匣（ジン）の代わりになる日も来る！」

「そうすれば、みんな黒匣（ジン）を失わない。精霊も死にません！やりました。ティポがみんなの助けになりました」

「ぼくってやっぱりすごいー！」

エリーゼとティポの喜びようは仲間の中で一番だった。そりゃ、そうだな。自分たちのデータがまさかこんな形で役に立ってくれるなんて……と思っているな。

「ってことは……エレンピオスにも自然が戻るかもしれないのか」

「だろうな」

ガシッ！

「ありがとう、バランさん！この研究のおかげで、僕たち……！」

ジュードはあまりの感激でバラン手を握って、振る。

「ハハ、なんでそこまで喜んでるかは知らないけどさ、俺たちだけじゃないよ。君たちがこの研究を守ってくれたんだ」

「僕たちが……？」

「そう。助けてくれなかったら、源霊匣（オリジン）の研究はきっと潰えていた。みんなもいつの日か社会に戻っていける」

俺たちによって助け出された人たちは俺たちに笑顔を見せてくれている。助けてくれてありがとうっと。

「源霊匣（オリジン）の研究……もっと必要になる」

「目指すべき将来（みち）が見つかったようだな」

「ああ。これがもっと成功していけば……この世界の黒匣（ジン）は源霊匣（オリジン）へと変わる」

俺とミラはこれからのことが目に浮かんできている。

だが、そんな俺とミラを見ていたジュードは疑問を持ち始める。

「……レオン？ミラ……？」

俺たちの雰囲気で何かを感じたのか、俺たちを見ている。俺は気づいているが……無視した。面倒なことになるかもしれないし。

「バラン、俺たちが現れた場所って言うのを詳しく教えてくれないか」

「ああ、もちろん。君たちが倒れていたのは、ルサル街道を進んだ先だ」

バランはそういいながら、そのルサル街道のある方向を見る。

「ルサル街道へは、この通路を進めば出られるよ」

「ジュード。これでガイアスもわかってくれるね！」

「もう……ムリだよ」

まあ、確かに可能性が現実になった今、このことをガイアスに話せば、普通だったらわかってくれる。だが、相手はあのガイアス……ムリだな。

「なんとなくわかるんだ。ガイアスも……あれが最後だったんだよ」

「ああ。ガイアスは一度は信じてみようと思っていた。だが、結果は駄目だったんだよ。ヴォルトを使役しようとした時点で。もし、ガイアスがここにいたらわかってくれていたかもしれないがな」

希望を持てたが、結局はガイアスと戦うことになることが少し、俺たちに暗い気持ちが出始めた。

俺たちは、そのままルサル街道に出て、俺たちが倒れていたという丘へ向かうのであった。

第６１話　可能性は現実へ（後書き）

次回は丘から皆の決めるべき答えです。
次回もお楽しみに。
それが終わったらオリジナル編に入る……と思う。

第６２話　それぞれの進むべき道。そして……（前書き）

更新遅れました。これからの進み方を考えていたら一日２話更新が一話だけになるかもしれません。何しろ、オリジナル編に入るので原作があるのと違い、初めから考えるので時間がかかるかと。とにかく、一日一話は更新するつもりです。

ゲームではガイアスは出てきたけど、ここでは出ないよん。
それと、最後辺から遂にオリジナル編の兆しが。

第６２話　それぞれの進むべき道。そして……

～レオンＳＩＤＥ～

ルサル街道に向かっている途中、レイアは上機嫌だった。

「嬉しそうですね、レイア」

「うん。ジュードがあきらめなかったおかげで、源霊匣（オリジン）の可能性がわかったんだもん。なんか、もー、やったー！って感じ」

いつも以上に元気なレイアはある意味このパーティーの元気の源かもな。

「ジュードはやる時はやる人です」

「ぼくは前から、そう思ってたー！」

「ふふふ、まるで自分のことのように」

レイアもエリーゼも自分のことのように喜んでいるな。子どもは元

気の源だ。俺たちおとな組みにとっては。

「でも、気持ちはわかります。以前のジュードさんは、先頭をきって進むタイプではありませんでしたが、今回は、見事に自分の意志を貫きました」

「確かに、以前のジュードは俺やミラの言っていることに流されていたタイプだったが、今は変わったな」

「うむ。人は変わるものだ　そりゃ、誰かさんたちの影響だろ」

「アルヴィンの影響でないことは確かだな」

プッ……ククク、た、確かに（笑）

「ククク、もしアルヴィンの影響だったら捻くれていたかもな」

「んな！？そこまで言うか普通」

「お前、心の中で反面教師とか思ってたりしただろ？」

俺がじぃ～っと見ると、アルヴィンは視線を逸らす。

「アハハ！みんな嬉しそうだね！」

「ですよね！」

あははは！俺たちはジュードの知らぬところで大笑いしていた。

そして、俺たちはバランの話しに出て来ていた丘に到着した。

「この丘の下に俺たちが倒れてたってよ」

「下に行く道を探そう」

俺たちは倒れていた丘の下に行こうとするとエリーゼが何かに気づ

く。

「あれ、なんですか？」

そこにはマクスウェルやミュゼが開けることのできる空間の裂け目があった。

「僕たち、きっとあそこから、崖の下に落ちたんだ」

「裂け目がずいぶん小さくないか？」

「消えかかっているようだ。飛び込むのはいちかばちかになるな」

……っておい！

「ちょっと待て！ミラ、俺が持っている剣のことを忘れてないか？」

「……そうか。レオンの持つ剣、エターナルソードでも空間に裂け目を作ることができたな」

「そうだ。出発する時にでも俺が斬れば問題ない」

……俺がそう言うと皆は確かに……と頷き、エレンピオスを出発する時に俺が斬ることになった。

そして、いざ、皆で一旦、街へ帰ることになると

「みんな……」

ジュードが静かに声を出して言う。

「リーゼ・マクシアに帰るつもりなら、僕たちはここで別れた方がいいと思うんだ」

「な、何言い出すの!?」

ジュードの言ったことにレイアが驚き、声を上げる。まあ、何も言わずいきなりそんなことを言われたら声を上げるな。

「みんなでここにきて、源霊匣（オリジン）のことがわかって、これからの未来にも希望はできた。けど……もう戦うしか、ガイアスを止める方法はないと思うんだ。レオンも前に言っていた通り、ガイアスは一度決めたことを曲げる男じゃないよ。だから、一時の感情に流されて、

本当の気持ちをごまかさないでほしいんだ」

「私も同感だ自分の心をごまかすような戦いなら、意味はない」

「自分の本当の気持ちをごまかしながら戦っては、いざという時にはその気持ちが命取りにもなる。それではここまで頑張ってきた意味がない」

「己の心で、己の道を決める、ですね」

「そりゃそうだ。でなきゃ、マクスウェルにミラを認めさせたことがウソになっちまう」

「……」

「もう少しだけ考えさせて。ジュードたちが出発するまででいいの」

「うん。わかった」

話も終わり、一旦街に戻ることになる。

その時だ。

ゾクッ！

「っ！？」

俺は突如、寒気に襲われた。

この丘から北西の位置、南東、南西の場所から何やら感じる。一つは前に戦ったことのある敵に似た気配。

もう二つは、セルシウスとヴォルトに似た気配だ。かなり、強い。二つの方はバランにでも聞いてみるか……。

「レオン？どうした？」

「っ！いや、何でもない。行こうミラ」

俺はこの嫌な感じを感じたまま、トリグラフへ戻って行った。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

その日の夜、アルヴィンは一人、ブランコに座っていた。

そんな一人でいるアルヴィンにエリーゼが近づく。

「何してるんですか？」

「……一緒にいたら、あいつらも疲れるだろ」

「ひねくれてるなー」

「そういう人間なの。エリーゼこそ、どうした？」

アルヴィンは何でエリーゼがここに来たのかを聞いた。

「迷ってるのか？」

エリーゼはブランコに座りながら

「わたし、どうしたらいいかわからないんです……」

「子どもの気持ちはなぁ。まともに過ごしてねーからな。アドバイスは」

暗い表情をしるアルヴィンを見て、エリーゼは聞く。

「アルヴィンは子どもの時から、アルクノアだったんですか？」

「まーな。人をだまして、欺いて、都合悪くなれば姿を消して、おかげでいつの間にか自分が傷つかないやり方ばっかなのが俺だよ」

アルヴィンの話しを聞いたエリーゼはこれからのことをアルヴィンに聞く。

「なら、ミラとレオン、ジュードと一緒には行かないんですか？」

少し間が空き、アルヴィンはエリーゼに話す。

「……あいつ……ジュードが俺を焦らせるんだよ。あいつらはみんな大人だよ。俺を気遣ってくる」

「そっかー、それが寂しいんだろー、アルヴィン君は」

「ホントの気持ちを言葉にするのは下手なもんでね」

エリーゼはアルヴィンを見ている。確かにアルヴィンはホントの気持ちを言葉にするのは下手ですからねっと思いながら。

「ただ……嫌われようとも、この場所に喰いついて離れないようにしないとな」

「みんなと友達になりたいんですか？」

エリーゼに言われ、少し笑みをこぼすアルヴィン。

「本音で信頼関係を築いていくのは、努力が必要みたいでね」

「大人は面倒なんだねー」

「大人になればなるほど、他人に自分の気持ちを明かすのは難しい。それなのに、自分が踏み出さなくちゃ、誰も俺とつながろうとしてくれない」

アルヴィンは自分の気持ちをエリーゼに話している。自分が今まで生きてきた中でレオン達との出会いが自分をここまで変えてくれたことを自分でも感じている。

「だけど、一人よりずっといい」

そう言うアルヴィンを見てエリーゼは言う。

「子どもはどうすればいいんでしょうね。子どもらしくって……」

「自分で見て、感じて、自分の可能性を見つけられたらいいんじゃない？素直な気持ちあるんだろ？」

エリーゼは自分の気持ちは何かをアルヴィンに話す。

「わたし……みんなと一緒にいたから、友達がなんなのかもわかりました。だから、もっと色々わかりたいんです。それをみんなと一緒に知りたいんです」

エリーゼの本当の気持ちを聞いたアルヴィンは微笑みながら、エリーゼに言う。

「なら、それでいいんじゃないの？」

「つれない返事ー」

「言ったろ。俺にもよくわからないんだ、許してくれよ」

そういい、アルヴィンが目を閉じた……次の瞬間！

Ｃｈｕ！

「なんだ？」

アルヴィンは突如、自分の頬に温かい感触を感じ、目を開けるとそこにはエリーゼがいた。

「お礼です。あとアルヴィンとはこれからも仲よくしてあげますね」

そういい、エリーゼは家に戻って行った。一方、アルヴィンはいきなりの出来事に固まっている。

そして、ようやく動き出すと、

「あ～、ガキばっかどんどん大人になってくね」

明らかに自分よりもエリーゼの方が大人になっているのに少なからずショックを受けているアルヴィンであった。

その頃、レイアとローエンは話をしていた。

「眠れないんですか」

「うん、まだ答えでなくて。ローエンは？」

「私は一緒に行くことにしました」

「そっかぁー」

レイアは自分と違って答えが見つかっているローエンが少し羨ましく思っている。

「わたしだけかなぁ。フラフラしてんの」

「私もですね……」

「うん？」

「ナハティガルが今、怪我の治らない状態の時、治るまで国を守ってくれと言われた時は、焦ったものです」

「でも、ローエンはどうするかを決めたんでしょう。わたしは、がんばればどうにかなるって言ってるけど、いつも……」

レイアは誰かを思い出している。それに気づいたローエンは言う。

「もしや、アグリアさんの言っていたことですか？」

ローエンに言われ、頷くレイア。

「無駄じゃないってことはアグリアに証明できたけど、それも一つだけしか証明できていないの」

「ですが、レイアさんはアグリアさんが言っていたことを実現できています。レイアさんのしてきたことは無駄ではなかった。それは私たちが保証します」

「……ありがとう。ローエン」

「ほほほ。これも年を重ねて生きてきた者の経験からなることでもありますので」

しかし、ッと言いながらローエンは髭を触る。

「意外でしたよ。私はてっきりジュードさんのことでお悩みになっているかと」

「……あはは。ジュードのことが好き……というか付き合っているけど、そのジュードが心配だからって理由じゃダメなのかなってのも考えていたのよね」

「……レイアさん、私がレオンさん、ミラさん、ジュードさんとご一緒する理由を話していませんでしたね」

レイアは話を始めるローエンを見る。

「教えてくれるの？」

ローエンは静かに頷いて話す。

「私は、彼らが歩であろう未来を一緒に歩みたい」

「ローエンらしい」

いかにもローエンが言いそうなことだねっと、レイアは解釈しているが、

「違いますよ」

違ったようだ。

「……？」

「私が最前列で、彼らを引っ張っていくのです！これが私の本心です」

ローエンの本心を聞いたレイアは……自分の本心を言い始める。

「私の……私の本心は……皆のため、人々のために前に進んでいくジュードをサポートして、一緒に皆が笑顔になれる……そんな世界にしたいな。私たちの努力が目の前で、違うところで傷ついて、悩んでいる人達を助けたい。そして……」

「レイアさん……もう、あなたの本心はわかっているじゃないですか」

「私はジュードの喜ぶ顔が見たい！傍にいて！」

レイアの目に火が付いている。いつものレイアに戻ったようだ。

「それが私の……本心。こんな理由でもいいのかな？」

ローエンは頷く。レイアは自分の気持ちを知ることができ、頬を紅く染めた。

その頃、レオンとミラは一緒に外に出て来ていた。外は雪が降っていて、ベンチにはジュードが座っていた。

「ミラ……レオン……」

レオンとミラはジュードの隣で立っている。

「座らないの？二人とも」

立ったままの二人に聞くジュード。

「ジュードは変わったな」

「ああ。初めて会った時とは比べ物にもならないほどな」

レオンとミラに自分は変わったと言われたジュードは、首を振りながら言う。

「そんなことないよ。今だって眠るのが怖いんだ」

「前にも言っただろう。断界殻（シェル）さえ解放できれば、私とレオンがどうにかする」

ミラはジュードを見て言う。

「だから不安を感じることなど……」

「ミラ、レオン。断界殻（シェル）がなくなったら、世精ノ途（ウルスカーラ）もなくなるの？」

ジュードの問いにレオンとミラは一瞬息をつまらせるが、ミラは話す。

「……ああ。断界殻（シェル）の消失とマクスウェルの死は同義だ。マクスウェルの力と霊勢が生み出した世精ノ途（ウルスカーラ）も、同じく消える」

「断界殻（シェル）の消失＝世精ノ途（ウルスカーラ）の消失は同じなんだよ」

レオンも話す。

「……ミラもレオンも僕が答えを出すのを待っていてくれたんでしょ。こっちに来てからはずっと……」

「……ああ。俺もミラもお前がどんな答えを出すか、聞いてみたかったからな。これからの世界の未来がかかっているんだからな」

「だが、安心したよ。ジュード。君は自身の答えを見つけた」

ミラは一度、大きく息を吸う。

「私は……次なるマクスウェルになろうと思う」

「俺は本格的に精霊となって、マクスウェルになるミラも永遠に支えるつもりだ」

俺とミラはジュードを見る。

「ジュード、世界中の人々と精霊たちのための未来を私たちでつくろう」

「俺たちは精霊としての立場から。ジュードは人の立場からそれぞれの未来をつくっていこうぜ」

ジュードが驚いた表情で俺たちを見る。

「僕たちで……」

「そうだ。俺たちでだ」

「……うん！」

ジュードはいい未来をつくりたい、そう思いながら頷いた。

「さて、話も終わったし、そろそろ寝ようぜ」

「そうだな」

「うん」

レオン達は家に戻り、眠りについたのであった。

次の日の朝。

レオン達は集合していた。

そして、皆の本心を聞き、全員で戦いに挑むことになった。

だが、ただ一人、浮かれない表情をしている人物がいた。その人物とは、

「レオン。どうした？」

そう、レオンだった。

「あ、ああ。少し、気になることがあってな」

「気になること、ですか？」

「ああ……。あ、バラン！」

何か悩んでいるレオンだったが、家から丁度出てきたバランに声をかける。

「どうかしたのかい？」

「ああ。少し聞きたいことがあって」

「聞きたいこと？僕でよければ話せる範囲で話すよ」

バランがそう言ってくれてほっとしたレオン。

「実は聞きたいことって言うのは……源霊匣（オリジン）の大精霊クラスはヴォルト以外にいるか？」

『！？』

この場にいたメンバー全員が驚く。

「……」

バランは驚きながらも、何も喋らない。だが、

「……どうしてそのことを聞くのは不思議だけど、答えはＹＥＳって言わせてもらうよ」

「源霊匣（オリジン）はヴォルト以外にもいたの！？」

ジュードは一番驚き、声を上げる。

「ああ。後、２体ほどね。ただ、その２体には問題があってね」

「問題？なんだよそれ」

アルヴィンがバランに聞く。

「うん。ヴォルトが完成する前に出来ていたんだけど……暴走を起こして、２体ともどこかに消えちゃったんだ」

「……そのことで聞きたいんだが、俺たちが倒れていた丘から北西、南東、南西の３つの地点に光や闇に関する場所は無いか？」

「え？あの丘から北西、南東、南西……確か北西の方には光明の塔って言う建造物があって、工芸都市シャンベリルアンって街が近くにあったね。南西には、暗黒の洞窟という名の洞窟があったはずだよ。近くには闘争都市ダークエリオンって街があったよ。南東がわかんないな」

レオンの中で、嫌な予感が的中した。

「バラン、消えた2体の源霊匣（オリジン）の名前はまさか……シャドウとレム又はアスカって名前か？」

「よくわかったね！そうだよ。シャドウとレムが消えた2体だ」

「……そうか。その二つの街にはどうやって行けばいい？」

「うん？そうだね、まずはトリグラフ海停から工芸都市シャンベリルアンに向かって、そこの海停から闘争都市ダークエリオンに向かう……かな」

「そうか……」

俺は皆を見る。

「皆、悪いんだが、野暮用が出来てしまったようだ」

俺は皆に謝るが、

「気にすることはないぞレオン」

「うん。暴走した源霊匣（オリジン）の2体を止めないと！」

「ああ。エレンピオスに災いを及ぼすかもしれねえしな」

「気にしないでいいですよレオン」

「きにすんなー！」

「気にしないでくださいレオンさん」

「そうだよ。別に悪くなんかないしね！」

笑っている。怒っている様子もないようだ。

「すまねえ。ガイアス達と決戦をつける前にこっちを優先させてくれ」

レオンは再び、謝り、ガイアス達との決戦よりもすることができた

のであった。

最初に目指すは工芸都市シャンベリルアンである。

第６２話　それぞれの進むべき道。そして……（後書き）

はい、今回はここまで。ついにオリジナル編です。
最初は光の精霊レムが相手になるかと。まずは、工芸都市シャンベリルアンへ。

第６３話　工芸都市シャンベリルアン（前書き）

ついに来てしまったオリジナル編。
読者の皆さんに聞きたいのですが、オリジナル編に入るにあたって、光と闇の精霊の他に精霊は出した方がいいでしょうか？
まあ、もし出してもシリーズに出て来ていた精霊になりますが……
口調とかは作者のオリジナルになるでしょうが。

それと闘争都市ダークエリオン編になったら……闘技大会を開かせようと思っています。まあ、闘争都市なので、もしかしたらＴＯＶみたいな闘技場があるかもｗ
あのキャラやあのキャラがゲストとして出てくるかもｗ

もし、希望があれば作者のできる範囲で書いていこうと思います。

第６３話　工芸都市シャンベリルアン

～レオンＳＩＤＥ～

俺たちはトリグラフ海停から船に乗って、工芸都市シャンベリルアンを目指している。

その途中で、ミラが俺に聞いてきた。

「しかし、レオン。今さらだが、何故光と闇の精霊に会いに行くのだ？」

「そうだね。まあ、暴走した源霊匣（オリジン）の２体を止めないといけないとはいえ、何でその２体がいるのに気づいたの？」

ミラに続き、ジュードも俺に聞いてきた。他のメンバーも俺を見る。

俺はため息をつきながら、８つの術式を展開する。

「これを見てくれ。光り輝いているのが今現在、俺が契約している火・水・風・地・氷・雷の精霊だ。後２つ、光と闇の精霊の部分が光ってないだろ？」

皆は俺の出した術式を見る。

「確かに、他の6つと違ってこの2つは光ってないな」

「そう、俺がジランドがセルシウスを精霊の化石から復活させたと聞いた時に、既にヴォルト・レム・シャドウがいるであろうとわかっていた」

俺は一旦息を吸い、吐く。

「そして、あの時……丘から街に帰る時に俺は感じた。3つの強い気配を。その内2つは精霊だったわけだ」

「では、もう一つは？」

「……いや、これは確信がない。今いっても意味はないし、そのもう一つの気配については後で調べるよ」

話をする俺はアルヴィンを見る。

「そういえば、アルヴィン。工芸都市シャンベリルアンってのはどういった街なんだ？」

「あ？あー……俺が２０年前にこっちにいた時は、まだそこまで有名じゃなかったが、バランに聞いたら何でもその街に偶然来ていた旅人の工芸士が作った工芸品が、かなり価値のある物で、それを皆が作ろうとしていったら、いつの間にか数々の名品を残したんだと。その結果、街は年々大きくなっていき、今では工芸都市シャンベリルアンって呼ばれているんだと」

「なるほどな……他の情報は無いか？」

「んー……精霊レムがいるっていう光明の塔ってのは何か１０年前に街の記念祭の時に、街の工芸士達全員が総動員して作った、確かその塔は夜でも光り続けていて街を照らしているから工芸都市シャンベリルアンは別名：光が途絶えない街……って呼ばれているってよ」

「……レムが居座るのも頷けるな」

レムは光の精霊。光が多い所にいると思っていたが、まさかそんなところにいるとは思いもしてなかったぞ。だが、暴走状態なのに何でシャンベリルアンの人々に危害を加えない？おかしいぞ。……まさか、正気を取り戻しているんじゃないだろうな。まあ、会ってみればわかるか。

「（だが、何だこの嫌な予感は……？）」

俺は、嫌な予感がしていた。光の精霊レムとの戦いで何かあると。

「レオン、どうした？」

「！　いや、何でもないぜミラ」

「そうか？ならいいのだが」

考え事をしていたらミラが心配して俺に話しかけてきた。ふぅ、ホント、ミラは可愛い奴だ。

「おっ、見えてきたぜ」

アルヴィンがそう言いながら指をさす。その方向には、

「うわー」

「これは…」

「すごい、です」

「すっごいー！」

「これはまた、爽快ですな」

「すっごく大きいね！」

「こんなにでかいのか……」

工芸都市といわれていたわけがわかったぜ。何故なら、ここから見えるもんは、

街の四方と中央には、俺がかつて住んでいた日本で、有名な四神によく似た大きなガラスでできた像が立っていた。東の青竜・南の朱雀・西の白虎・北の玄武、そして中央に黄竜である。

しかも、よく見たらその四方を見れば、他にも置いてあるな。あれは……麒麟・鳳凰・霊亀・応竜か？

俺は元々、生前は日本や外国の神話や神獣、幻想種とかが好きで調

べていたことがあったからな。そういった知識はかなりある。あの像は俺が昔に見たものとそっくりだ。……まさかと思うが、アルヴィンが言っていた工芸士って、俺と同じ存在か？でも、あれはどう見てもここ１０年以内に作られたものだ。おそらくだが、その工芸士がもっていた本か何かを参考に作ったんだろうな。

俺はあれらの像を見て、呆れていた。だが、同時にあの合計で９つから何やらマナを感じている。何故だ？

俺と同じなのか、ミラも気づいているようだ。

「レオン……」

「わかっている。あの像だろ？マナを感じるな。しかも、ご丁寧に火・水・風・地の属性のマナを感じる」

そう、何故あの像からマナを感じるのかはわからないが、そこまで協力でないので平気だろうな。

「あの像についてはシャンベリルアンについてから調べるとしよう。それにしても……まさに工芸都市だな」

像以外を見てみると改めてそう感じる。

まるで俺がいた日本の新宿を見ているかのように大きな建物やビルが見える。故郷に帰ってきた感じがするな。

「そろそろ、だな」

船はシャンベリルアン海停に到着するところであった。

シャンベリルアン海停について俺たちが一番に思ったこと、それは……

『すごく、大きいです』

そう、街が街なら海停は海停だった。そう、大きいく広いのだ。周りには荷物が多く、置かれていた。
荷物をよく見ると、工芸品を作るのに必要な素材、材料だ。けど、すごい量だな。

「これが……工芸都市シャンベリルアンか……」

「本当に光がすごいな……街の中が輝いているぞ」

俺もミラもこれを見て、驚くなというのが難しいと同時に思っている。しかも、この街に来て思ったこと。それは……

「この街は黒匣（ジン）を……」

「ああ。使ってないな。この街からは精霊たちの死を感じない」

そう、黒匣（ジン）を使ってないのだ。だが、源霊匣（オリジン）も使ってない。なのに、光……電気が通っているようだ。これではまるで……

「（俺の元いた世界そのものじゃねえか……どうなってんだ？）」

船でも思っていたことだが、近くで見れば見るほど……俺がいた世界に似た環境だった。

すると、俺たちの目の前をこの街の人間の工芸士が通り、俺は話しかける。

「少し、話を聞かせてもらえないか？」

「ん？なんだ、あんたら？」

工芸士の男は俺たちを見る。

「この街は他の街と違うみたいだが、なんでなんだ？」

男はまるで、ああ、そのことかっという風に笑う。

「そりゃ、この街がここまで発展したのは２０年前にこの街に訪れた旅人の工芸士が置いて行った本のおかげさ」

「本の？」

「ああ。俺はその頃、子どもだったが、親から聞かされていたよ。今まで、この世界にはないであろう技術で街を発展させる方法が書かれていたってな」

「この世界にない技術？」

「そうだ。例えば、この街は黒匣（ジン）を使ってないだろ？なのに、何で電気が通っているか……それは、この街の各工房には熱エネルギーを溜めることのできる装置があるんだよ」

……熱エネルギーを溜める……だと。

「工芸品を作る際に火を使うだろ？その熱とかを溜めてその熱エネルギーを利用して家の電気や街の電気に使うことができるというシステムがあるんだ。他の街にもこの方法を進めたんだが、黒匣（ジン）信者が多くてな。この街でしか使っていない方法さ」

「……そうか。ありがとう。それともう一つ。光明の塔ってのはどこにあるんだ？」

「北西にあるぜ。光明の塔に行くにはこの街のシンボルである四神の像に置いてある証と黄竜の証を集めるんだな。そうすれば、光明の塔に入るための扉は開く。けど、最近は光明の塔が変なんだよ」

……変だって？

「どういうことだ？」

「数日前の三日月の夜の日のことだ。その日、光明の塔がいつも以上に光を発したかと思ったら3つの光が降り注がれた」

「なん……だと……」

3つ……3つだと!?光の精霊……レム……3つ……まさか、な。まさか、他の光の精霊じゃないよな。

「それからかね?夜になると必ず3つの光が塔から発し始めたのは」

「……そうか。ありがとう」

「いいってことよ!じゃあな!俺は仕事があるんでな」

アーハッハッハ!っと笑いながら男は去って行った。

その後、俺たちは話しあっていた。

「さて、光明の塔に入るには合計で5つの証が必要。さっきの街の人の話じゃ、夜になると3つの光が塔から出て来ている……つまり」

「夜までに5つの証を手に入れて、塔に持っていけばいいのか。簡単じゃねえか。まだ昼ごろだしな」

「うん。今から5つの証を手に入れて、夜まで休むってことで……これでいいよね？レオン」

「ああ。今は証を手にして、休むことを考えよう」

俺たちはシャンベリルアン海停から街の中に入って行き、証を手に入れることにした。

第６３話　工芸都市シャンベリルアン（後書き）

はい、オリジナル編が始まりましたが、光の精霊で３つの光……これはわかりますよね？一つはレム。後の二つは……。次回は５つの証を手に入れながら街の中を観光気分に回ります。次回もお楽しみに！

第６４話　証集め兼観光という名のデート

～レオンＳＩＤＥ～

俺たちは工芸都市シャンベリルアンに入った。入ったのだが……

ピカアーーーーーーン！

『ま、眩しすぎる！』

そう、眩しすぎるのだ。この街の人々はずっとここに暮らしているから目が慣れている。だが、よそ者の俺たちには耐性がない。さすが、光が途絶えない街といわれているだけのことはある。

「こ、これはキツイな。皆、そのままでいてくれ」

俺は皆にその場から動かないように言い、精霊術を使う。

「ライトバリア（今命名）」

俺がそう言うと、俺たち全員を光が包む。すると、

「おお、そこまで眩しくなくなったぞ」

皆は喜んでいてくれている。

「さて、皆。一旦、ここで解散しよう。それぞれでこの街の像にある証を自分で見つけて取ってくる。んで、時間が夕方ぐらいの時間帯になったらここに集合な。ここには丁度、目印になる看板があるし」

俺が指差すところには、≪ようこそ！光が途絶えない街、工芸都市シャンベリルアンへ！あなたの望む工芸品があるかも？是非見ていってね！≫という看板が立てられていた。

「そうだね。各自、自由行動ってことで」

皆で頷き、俺たちは解散した。なお、俺はミラに腕を組まれ、一緒に回ることにした。

～東地区・青竜～

工芸都市シャンベリルアンの東地区に来てみると緑色でできた多くの工芸品が並んでいる。どれもかなりのできだ。ミラも珍しそうに目を輝かせながら見ている。

「すごいなこれは……リーゼ・マクシアにはないものばかりだ」

【うむ。確かにこれは見事なでき具合だ】

人々には見えない霊体化……モドキ状態のイフリートはミラが見ている者と同じ工芸品を見ている。

「ミラ、こっちにもいいできの工芸品があるぜ」

「！　見せてくれ！」

ギュッ！

ミラは腕を組んでいる状態でさらに力を入れるので、ミラの胸がかなり強調される。あ、いかん。ここ最近、てか、最近は死んでた状態だったし、色々あって溜まっている状態なんだ。そう、胸をされ

たら……いやいや！我慢だレオン！

「さて、ミラ……少し力を腕から抜いてくれないか？その、胸が当たっていて、理性が……」

「……？」

ミラは己の腕を見る。押し付けている胸を見る。結果、

ボンッ！

「／／／／／／！？」

パッ！

顔を真っ赤にして腕を放すミラ。それを見て、俺はウンディーネ達に目を向ける。

【！　皆さん、私たちは私たちで街を見回りましょう】

【（ニヤニヤ）そうだね。僕たちはお邪魔虫見たいだし】

【そうでし】

【わかった。ではな、ミラ、レオン】

そう言い、ウンディーネ達はこの場から離れて行った。

「さ、二人っきりの観光を始めようか」

「そ、そうだな／／／／／」

今度は静かに、力を入れず、俺と腕を組むミラ。

俺はそんな彼女を見て、ほほ笑んだ。こんな時間が永遠に続けばいいのにと。

「さあ、行こう！まずは証を探そう」

「ああ！」

俺たちはまず、東地区の隅から隅まで見ることにした。

東地区を回り始めたのはいいが、はっきり言おう。ミラの胸の感触がたまんないです！

「レ、レオン？どうかしたのか？さっきから私のことを見て／／／は、恥ずかしいぞ／／／」

モジモジするミラ。

プツン

「ミラアァァァァ――――――――！！」

ガシッ！

「わ！？ちょ、レオン！？」

俺はミラを誰もいない裏道に引っ張って連れていき、そして、

「レ、レオン!?いきなり何――――んむっ!?」

裏道に引きずり込んだミラに抱き強く唇を押し付ける。そのままミラの唇を嘗め回すと直ぐに舌をねじ込んでいく。

「んじゅるるるっ!?んっんっんっ……じゅるっじゅっ……ぷはっ……はあはあ……んむううっっ!」

ミラは俺のキスに驚き、腕を背中に回す。そのまま、俺に強くしがみ付き、俺のキスを受け入れていく。

「はぁはぁ……ミラ」

「はぁはぁ……レオン///バカもの。いきなりする奴があるか///。こ、ここまでだぞ!これ以上はここでなんてできんぞ///」

「わかっているさ」

俺はミラを離す。ミラは赤い顔を隠している。さっきのキスでスイッチが入る直前だったのかね？

「で、では行くぞ／／／証のある像のところに行かないといけないのだからな！／／／」

「はいはい」

再び、腕を組み、青竜の像のところまで行くのであった。

像の前に到着した俺とミラは証らしきものを見つける。東の青竜であるからか、方角の東と書かれた青竜の絵が描かれているパズルのピースみたいなものだ。

「これが証の一つか？」

「だろうな。おそらく残りの４つもこれと似たような形をしているだろうな」

「確かに……東と書かれていることを考えると他のも似たようなことであってもおかしくないな」

「ああ。じゃあ、次に行こうか。ミラ、次はどっちに行きたい？」

俺はミラが行きたい地区を聞くと、

「そうだな……では、北地区に行こう」

「北地区……玄武のほうか、よし！じゃあ行こう」

東地区で青竜の証を手に入れた俺たちは、次に回る北地区へと向かった。

北地区に来てみると水色の工芸品が多く置かれている。噴水もあったりする。

噴水の中に子どもたちは入って、水遊びをして、賑わっている。

「ここも人間達は賑わっているな」

「ああ。子どもも元気で笑顔だ。この笑顔も俺たちが守っていくものの一つだな」

子どもたちの笑顔を見ていた俺たちだが、

バシャァ――ン！

「うわっぷ！？」

「ミラ！？」

子どもたちが水を掛け合っていた水がミラに掛かってしまった。しかも、

「ま、全く、何なのだ！」

頭がずぶ濡れ状態のミラを見て、俺は思った。

エロい……と。

しかも、頭に掛かった水が服にまで濡れて行っている。

ミラの胸の形をより、……って！

「ミラ！こっちにこい！」

「な、何故だ！」

「お前の今の状態を見ろ！？」

「……？……／／／！？」

ミラもようやく自分の服まで濡れて、胸の形が余計に目立つようになっていることに気づく。手で胸を隠すミラ。

「いいからこい！乾かすから」

「わ、わかった／／／」

再び、裏道に入る俺たち。

俺はミラの周りの薄く熱くない程度の火のマナで暖める。

「おお、暖かいな」

「ミラ、頼むから自分が女性だってことは認識しているんならせめてああいうのには気付いてくれ」

「す、すまない／／／」

ミラも恥じらいというものを少しずつ覚えてくれるのはありがたいがな。

そして、俺はミラの服を乾かしている時、あることに気づいた。

「なあ、ミラ」

「どうした？」

「お前、胸、大きくなってない？」

「んな！？／／／」

俺の言うことに顔を真っ赤にするミラ。

「お、お、お前は、何を聞いているんだ！？／／／た、確かにここ最近、胸のところがキツく感じることはあるが……レオンとその、／／／／／色々してから」

「あ～やっぱりそうか。俺、行為するときにミラの胸を最大で３０分間揉んだことあるもんな」

「全くだぞ！あんなに引っ張ったり、揉んだり、舐めたり、噛まれたりと／／／／／って？！何を言わせるか！！」

「ミラが勝手にしゃべり始めたんだろうが」

「むぅ……」

プイっとそっぽを向く。

「ほれ、渇いたぞ。機嫌を直せよミラ。……そんな風にしていると
ここで襲うぞ（ボソッ）」

ミラも耳元で言うと、ミラの顔がこれでもかといわんばかりに真っ
赤に染まる。

「／／／／／／／／！？？！？！！？？」

パクパクと口を開けながら、俺を指をさしながらミラ。

「はっはっは！冗談だよ冗談！」

ミラを抱き寄せ、言う。

「行くぞ！」

「うむ／／／／」

ミラは恥ずかしいのかモジモジしながら俺と歩く。玄武の証を取りに行かなくてはな。

像の前に着くと、そこには思った通り、青竜と同じようにパズルのピースに北と書かれた玄武の絵が書いてあった。

「これで二つ目か」

「思ったとおりだったな」

俺の腕に抱きついているミラは俺が持つパズルのピースを見る。

「ああ。にしても、ジュード達と一度も鉢合わせしないとはな。もしかしたら、他の皆は残りの南・西・中央にいるのかもな」

「そうだな。あり得ない話ではないな。しかし、この街は本当に広いな。一日では見回れないぞ」

「だな。光の精霊と戦った後にでも、また見て回ろうぜ。無論、二人っきりで」

クスクスとミラは笑う。どうしたんだ？

「いや何、レオンとこうして恋人同士になるなど、社にいた頃には考えもしなかったからな。こうやってデ、デートをしたりとか、あ、あのような行為をするとは思っていなかったからな」

「……確かにそうだな。俺もミラとこういう関係になれるとは思っていなかった。諦めていたかもしれないな。けど……」

ミラを強く抱きしめる。

「こうして俺はミラの傍に、ミラの傍には俺がいる。こんな幸せな時間が続けばいいと思っている」

「私もだ。だが……」

「ああ。俺たちのするべきことは人と精霊を守って行くということ。そのためには――――――――――になる必要がある」

「……ああ。だが、悔いはない。レオンと」

「ミラと」

「「一緒ならな」」

俺とミラは顔を見合う。

「さて……ん？そろそろ時間か？」

「見たいだな」

時計らしきものを見れば時間が丁度5時ごろをさしている。

「さっきの看板のところに行こうか」

「そうだな」

玄武の証を懐にしまい、集合場所へと向かった。

集合場所に着くとそこにはすでに皆が集まっていた。

「遅れてすまない」

「いえ、私たちも先ほど来たところです」

俺は懐から青竜と玄武の証を見せる。

「俺はこの二つだ」

そう、俺が言うと、

「僕とレイアは朱雀だよ」

「俺は白虎だ」

「私とエリーゼさんは黄竜です」

お、都合よく5つ揃ったか。

「よし、じゃあ、宿屋で飯を食って少し休んでから光明の塔へ行こう」

「うん、そうしよう」

俺たちはそのまま宿屋へ向かったのであった。

第６４話　証集め兼観光という名のデート（後書き）

次回は……ＶＳ光の精霊だと思います

第６５話　ＶＳ光の精霊

～レオンＳＩＤＥ～

証を集め終わった俺たちは宿屋で食事を取り、休み終わり時間が夜８時ごろになるのを待っていると、その瞬間が来た。

ピカカアァァァァン！

『っ！？』

光明の塔が３つの光を発し始めた。

「時間だな」

俺が立ち上がると皆も立ち上がる。

「（問題はあの３つの光……俺が知る限りでは光の精霊はレム・ルナ・アスカの３人。光の属性の精霊術……ジャッジメントを３人同時に使われたらやばいかもな）」

「レオン。どうかしたのか？」

「！　いや、何でもないぞミラ。行こうか」

俺は嫌な予感を感じながら、光明の塔を目指した。

数分歩き続け、光明の塔の前についた。光明の塔の入り口には５つの窪みがあった。

「これって一体……？」

「さ、さあ？でも、５つってことはこれを嵌めていけばいいんじゃないの？」

５つの窪みを見たジュードは不思議に思い、レイアは俺が持っていた証を勝手に取って窪みにはめていく。

「これで……どうよ！」

5つ全てを嵌めるが、何も起こらない。

「あれ？」

「はぁ……レイア、どいてくれ」

俺はレイアに退いてくれといい、窪みに嵌っている証を取る。そして、

「東の青竜」

まずは東の方角の部分に青竜の証を。

ピカァン

証が緑色に光る。

「南の朱雀」

南の方角には朱雀の証を嵌めると証が赤色に光る。

「西の白虎」

西の方角には白虎の証を嵌め、茶色に光る。

「北の玄武」

北の方角には玄武の証を嵌め、水色に光る。

「そして、最後は中央の黄竜」

最後に真ん中には黄竜の証を嵌めると金色に光る。

そして、

証が共鳴するかのように輝き始める。

ピカァァ――――――――――――ン！

今まで以上に輝き始める証。その光を受け、扉がゆっくり音を立てながら動き始める。

ズゴゴゴゴ……ガタン。

扉が開き、中に入れるようになる。

そして、塔の中に入って行くと……

ドン！

「うわー！」

「なんだこの階段……」

「塔の頂上まで続いている階段のようですね」

そう、塔の階段は螺旋階段になっていた。壁際からぐるぐる回って行かないといけないようだ。

「皆、これ、歩いて登って行くようだぜ」

「えっ、マジかよ……」

ガクリとするアルヴィン。

「これは腰に来ますね…（汗）」

ローエンもさすがにこれは……と、汗をかく。

「まあ、そう言わずに頑張りましょうかね」

といい、俺は階段を登り始める。俺に続いてミラ達も登り始める。

「あ！おい、置いていくなよ！」

「待ってください」

少し遅れてアルヴィンとローエンも登り始める。

登り始めて数分後、ようやく塔の半分の地点にいる。

「ぜぇぜぇ……」

「はぁはぁ……」

アルヴィンやローエンだけではなく、俺を除いたメンバー全員が疲れ切っていた。

「こ、の階段は、鬼畜すぎ……だろう」

「ど、同感で、す。これは、年寄り、にはキツイで、す」

まあ、特に疲れているのはアルヴィンとローエンだな。

やれやれ……そう思っているとミラがあることを思い出す。

「レオン……」

「どうした？」

「私はあることを忘れてた」

「あること？」

なんだろうか？そう思っているとミラは話す。

「うむ。シルフの風の力で運んでもらえば良かったのではないかと」

ピキッ

俺の中で何かが壊れた音がした。

ガクッ

「そ、その手があったか！！すっかり忘れていたぜ」

よくよく考えてみれば四大達が囚われる前まではシルフの力で空を飛んでいたっけか。

「よし、皆！少し休んだらシルフの力で頂上へいくぜ！」

『お、おお～』

疲れているせいかみんな元気がなかったのを言っておこう。

休憩し、皆の体力が戻るのを確認した俺たちは、ミラがシルフを呼び出した。いきなり、この人数を運べと言われたシルフは嫌がっていたが、俺が剣を見えるように見させると、表情を青くし、わかったといい、俺たち全員を頂上まで運んだ。

頂上に着くと再び扉があり、今度は普通の扉のようだった。扉を開けたその先には……

椅子に座っている絶世の美女とその上にはこれまた絶世の美女、そして赤と薄い金色の鳥だった。

「ようこそ……リーゼ・マクシアからきた方々。私の名はレム」

「私はルナ」

「我はアスカ」

あちらから挨拶をしてくれるとは……。

「あんたたちは光の精霊でいいのか？」

「いかにも。私、ルナ・アスカは光の精霊です」

……だが、何で3人に分裂したいるんだ？

「お前たちは何故、3人に分裂しているのだ？」

「マクスウェル……ですか。そうですね。元々、光の精霊は私、レムでしたが、この世に復活した時はまだ、力を制御できず、暴走しました」

「その話は聞いているぜ」

「そうですか。では、その後の話をしましょう。その後、力を放出しすぎた私はここ、光明の塔につきました。そしたら、驚くことにここにいるだけで力が戻っていったのです」

「どういう、ことですか？」

「そうだよね。ここにいるだけで回復って……」

エリーゼとレイアは何故、ここにいるだけで力が回復するのかがわからないようだ。俺は薄々感ずいているが、本当にこれで合っているのかがわからず何も言わない。

「フフ、そこの精霊の男の方はわかっているのでは？」

……！？俺の心を読んだのか！？

「レオン。どういうことだ？」

「……この街は光が途絶えることのない街だ。光の精霊には、光が回復源となる。例えば、イフリートが傷ついているとき、炎を与えると傷を回復することがある。それと同じ原理で、この塔は街の光が一番集まる場所に位置する。つまり……」

「ここにるだけで回復することができるのはそういうことなのですね」

「ああ。それと何で3人に分裂しているのかは……光を毎日のように浴び続けたせいだろ？」

俺が3人に分裂したことの考えをレムに伝えると、レムはクスリと笑い、俺に言う。

「正解です。正確に言えば、三日月の夜の日にルナが生まれ、半月の時にアスカは生まれました」

「唯一、夜の時に地上をてらす月は光そのもの。……なるほどな。だから、3人に別れたのか」

「レオン、どういうことなのだ？私たちには意味が……」

「月には3種類ある。三日月・半月・満月とな。月は太陽と違って夜を照らしてくれている役割がある。元々1人しかいなかったはずの光の精霊は、この街の光のエネルギーを吸収し、三日月と半月の日に溜まった力を放出する代わりに、ルナとアスカを作りだした……で、いいのかな？」

「おほほ、正解です。言ってみれば私たち3人は3人で一人の光の精霊ということです」

レムは鉄扇を構える。ルナは杖を。アスカは羽を広げる。

「あなた方が何をしにここに来たのかは見当はついています。精霊の男の方。あなたは私たちと契約がしたいのですね？」

「そうだが」

「では、力を示してください。私たちを使役するものが弱ければ意味はない。もし、私たちが勝った時は……あなたをもらいます！」

ビシっと鉄扇で俺を指すレムに俺は唖然としていた。いや、こんな

場所でそんなことを言ったら……

ブチッ！

ミラの方から何かがキレる音がした。ミラを見てみると、

「……」

紫色のオーラを纏ったミラが鋭い目つきでレム達を見ていた。

「……四大召喚」

小さな声でミラがそう言うとミラの周りに四大が召喚され、召喚された四大達はミラを見て驚いている。

【な、なんだ！？】

【い、一体何が！？】

【こ、こええ……】

【ミラが……ミラが怖いでし！】

ミラの状態を見て四大達ですら恐れている。さらに、

「……セルシウス、ヴォルトも召喚」

「んな！？」

ミラはセルシウスとヴォルトの名を呼ぶと、俺の周りにセルシウスとヴォルトが召喚された。

【こ、これはどういうことだ！？何故マスターでないミラ様に召喚されるのだ！？】

【理解不能？！】

さすがの2人も契約していないミラに強制召喚されたことに驚いていた。

「レオン……私たちだけで殺るぞ」

「……ミラ。やるぞが殺るになっている……ぞ」

ギロリとミラに睨まれ、俺は黙った。

「……皆、下がっていた方がいいぞ。俺たちの戦闘に巻き込まれる」

『うんうん！！』

6人を見るとガタガタ震えていた。ミラの殺気に恐れているようだ。

「フフ、マクスウェル様、嫉妬ですか？」

「人の男を取ろうとすると……どうなるかを教えてやる」

「あらあら？怖いですね。別にいいではないですか。私も彼を気にいったのですよ」

「ふざけるなあああああ！！！！」

ミラは剣を抜いて、レムに飛びかかる。

「あ、おいミラ！？ってか、ミラの奴、いつもより早くね！？」

ミラの走る早さがいつも以上だった。これが暴走モードのミラなのか！

「四大達！お前たちも手伝え！（怒）」

四大達は顔色が悪いがミラの言われ、レム達に突っ込んでいく。

「ああ、もう！行くぞセルシウス！ヴォルト！」

【はっ！】

【御意】

暴走状態のミラに呆れながら、俺もレム達に向かって駆ける。

「レオン！イフリート！行くぞ！（怒）」

「お、おう！」

【う、うむ！】

「イフリートの炎は」

「かなりきついぜ？」

【燃え尽きるがいい！】

「「レイジングドライヴ！！」」

レム・ルナ・アスカの足元から中心に地面に巨大な火の術式を展開し、その術式からすべてを焼き尽くすイフリートの炎が吹き上がり、3人を飲み込んだ。

「くうぅ！！やりますね！では、私たちも行かせてもらいます！」

3人が同時に詠唱を始める。

「「「降り注げ、裁きの光よ。彼のもの達に安息を与えよ。ジャッ

ジメント！」」」

3人同時に同じ精霊術が発動する。

それと同時に俺たちも精霊術を使う。

「すべてを滅する神の雷よ」

「終焉（おわり）という名の安らぎを与えよ」

【これが俺の裁きの雷だ！！】

「「ヴォルトアロー！！」」

3人を雷を纏ったバインドで拘束し、上空からヴォルトの雷が連続で降り落ちる。

「「ぐあああああ！！！」」

「「「きゅあああああああ！！（ぬあああああああ！！）」」」

ドカアァァ――――――ン！

光と雷の精霊術が互いに直撃する。が、俺たちは事前に俺のライトバリアで威力を半減してくれたため、そこまでダメージはない。

「あ、あぶねえ（汗）」

ジャッジメントの降り注がれた場所を見て俺は思った。もし、ライトバリアがなければ俺とミラは消し飛んでいたかもしれないと。

「くっ！さすがは人間から精霊になられたお方……マクスウェル様から奪う価値のあるお方です！」

レムは鉄扇を構え、立ちながら言う。

「貴様……私の男を奪うだと？冗談もいいところだな」

「あら？冗談ではなくてよ？私、レオン様を気にいりましたの。頭の回転が速く、逞しく、優しい彼をね……ウフフフフ」

「ほぉ？面白い。私はレオンの体の隅から隅まで知っているし、レ

オンとは長い付き合いだ。出てきたばかりの奴に何ぞ渡せられるか」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

ミラとレムの背後に青竜と白虎が見える。

「さあ、続きと行きましょうか！」

「行きますよ！光よ！レイ！」

ルナの光の精霊術が俺たちに降り注ぐ。

【こちらも行くぞ！フリーズランサー！】

【僕も行くよ！食らえ！ウィンドランサー！】

降り注がれる光の精霊術を避けて行きながらセルシウスとシルフが氷と風の無数の槍を飛ばす。

ズガガガガガガ！

3人はそれを避け、攻撃は地面に刺さる。

「食らえ！シャイニングバースト！」

アスカは口に溜めている光のマナを俺たちに向けて吐きだす。

ドカァァン！

「うわ！」

「くう！」

俺とミラは爆風で吹き飛ばされる。

「おっと！」

吹き飛ばされながら片手で地面に手を置き、バク転してそのまま、アスカに迫る。

「抜砕竜斬！！」

アスカに迫るスピードを利用してそのまま、神速の居合いで切り刻む。

「ぐうあ！」

ダメージで地面に落ちていくアスカ。

「許しませんよ！」

「ん！？」

俺の頭上にはルナが詠唱していた。ま、まずい！

術が完成する直前に、

「ディバインストリーク！」

「っ！？　きゃあ！」

術が完成直前だったので、ルナは動けなかったのでミラの術を直撃した。

「レオン、大丈夫か！」

「ああ、ナイス援護だぜミラ」

俺とミラは再度、レム達3人を見る。

「やはり、私が見込んだ男なだけありますね……クフフ」

ゾクッ

レムの獲物を狙っているかのような目つきを見た瞬間、俺は寒気に襲われた。

この感覚は前に街の女性達に見られていた時の感覚に似ている。

「ミ、ミラ！俺の何かが失われそうな感覚が襲った！こいつらを早く倒そうぜ（汗）」

「ああ。私もあの目を見たらレオンの色々なものが危ない気がしたきたぞ」

お互いに顔を見合い、頷く。

「ヴォルト！あの3人を少し足止めできるか？」

【誰に言っているのだ主よ。俺は雷の……精霊だぞ！】

バチィィィィィ！

3人の周りに雷の網が現れ、動きを止める。

「いくぜセルシウス！」

【はい、マスター！】

「私たちもだ、ウンディーネ！」

【任せてください！】

「「水に呑まれ、氷に墜ちろ！フリジットコフィン！！これで終わりだ！！」」

ウンディーネの水で3人を拘束し、セルシウスの力で作り出した巨大な氷の剣を上空から突き刺され、剣が刺さると、剣を中心に巨大な氷塊が現れ、氷塊ごと粉砕した。

「「「きゃあああ！！！（ぐあああああ！！）」」」

ヴォルトの雷の網によって動くことができなかった3人は技を回避できず直撃した。

バタン！

3人は倒れた。

「別の意味でやばかったぜ」

「レオンは私の男だ！手を出すな」

【あのミラが、ここまで変わるとは…】

【これもマスターとマクスウェルの愛の力だな】

女性であるウンディーネとセルシウスはレオンとミラの関係を色々と考えていた。

戦いが終わり、レムが俺の前に立つ。

「負けました。これで私たちを使役できます。契約をしましょう」

「おう、そうだな」

俺は8つの術式を展開し、その中から光と書かれた術式がレム達3人を吸い込む。

「では、必要なことがあれば私たちをお呼びください。？ご主人さま〃」

ピキッ！

「ご、ご主人さま！？」

「んな、な、なななな！！！」

ミラが口をパクパクさせてレムを見る。

「では、またお会いしましょう？ご主人さま〃」

「では、また会おう。主よ」

そういい、３人は消えていった。

それと同時に光の術式が光り出す。

後は、闇のだけだが……レムとルナめ！なんて言葉を残して消えやがって！！

「さ、さあ、皆、帰ろうか」

俺はその場を去ろうとするが、

ガシッ！

ミラに方を掴まれ、逃げられなくなった。他の皆は薄情なのか俺たちを置いて階段で降りていった。

そして、

「どういうことか話してもらおうか？レ・オ・ン？」

黒い笑みを浮かべたミラが俺を見ていた。

「……俺に聞かないであいつらに聞いて」

「こ・と・わ・る」

「お、俺は悪くねえぞ！？」

「ふ……ふふふふふふふふ」

コツン……コツン……

俺を掴んだまま、壁際まで俺を引っ張っていくミラ。

「ま、待て！話せば…」

「Ｏ・ＳＨＩ・Ｏ・ＫＩ・ＤＡ☆」

拳を握るミラ。

そして、

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

頂上から俺の叫び声が塔の中に響いたのであった。

その後、俺がミラと一緒に塔を出てきたとき、ミラの肌がツヤツヤで、俺がゲッソリしていたことをここに述べておこう。塔の中で何があったかは聞かないでくれ。

そのまま、俺たちは塔の前で待っていたジュード達と宿屋に戻っていった。

第６５話　ＶＳ光の精霊（後書き）

ふう、オリジナル編は一番疲れる。でも、これでレム・ルナ・アスカをゲット！
後は闇だけだぜ！

次回はこの続きです。工芸都市シャンベリルアンをここまで発展させた人物に迫る……かも。

第６６話　朝の不幸？　謎の男、楽しい一日（前書き）

さて、今回は謎の男のことについてが述べられています。名前はまだ出てきません。

第６６話　朝の不幸？　謎の男、楽しい一日

～レオンＳＩＤＥ～

光明の塔でミラに色々と搾り取られてから宿屋に戻り、俺たちは眠りについた。俺もかなり疲れていたので爆睡していた。

そして、次の日の朝……不幸が俺を襲った。

モゾモゾ……

ん？なんだ？俺の布団の中に何かが動いているな。ミラ……のわけないよな。

ガチャガチャ

！？ベルトを外そうとしていやがる！？

バサッ！

俺は嫌な予感がしたので、布団をどけるとそこには……

【ご主人様、おはようございます♪】

【マスター、おはようございます】

レムとセルシウスが何故かいた。

「お前らな……勝手に出てくるな!!ビックリしただろうが!」

心臓に悪いぞ!?もう少し起きるのが遅かったら俺、襲われていたぞ!?

【私はこの身をご主人様に捧げる準備はできています。ご主人さまの太く、長い剛槍で私を貫いてください】

【わ、私はレムに、その、誘われて／／／】

「おいおい!?レム、お前、マジで精霊なのか!?それにセルシウス!主を襲うのに協力するな!!って!?いつの間にかルナまで出て来ているし!?しかも、何で腕を拘束する!?」

わけわかんねえぞ！？うぐぐぐぐ！ダメだ！両腕を光のリングで拘束されているから壊せねえ！ルナまで俺にする気か！？

【はぁはぁ／／／／／ご主人様の槍を私の中に／／／／／／】

【そ、その次は私だぞレム／／／／／／】

【で、ではセルシウスの後に私が／／／／／／】

くっ！幸い、ここの宿屋は一人部屋ずつでよかった。もし、これでジュード達がいたら大変な目にあっていたぞ！？って！

「だから、ベルトを取ろうとするな！」

ジタバタ俺は体を動かす。これで何とかベルトとズボンを取られまいとする。

だが、

ピカァン！

両足を今度はセルシウスの氷のリングで拘束された。

「うげえっ！？」

さすがにここまでされると動けないぞ！？

【はぁはぁ……ジュルルル……あら、いけない。よだれが】

【はぁはぁ／／／／／／】

【……ポッ／／／／／／】

3人の精霊に迫られる俺。両腕脚は拘束され、身動きが取れない。

「誰かヘルプミー――――――――――！！！」

【フフフ……この部屋の鍵はかけてあります／／／さあ、ご主人様、私たちがあなたを別の意味での天国へ送って差し上げます】

ガチャガチャ……バサ！

「おいぃ！？」

ズボンを脱がされた。

【つ、次はパンツですね／／／／はぁはぁ】

【これを取り除けば／／／／／／】

【ゴクリ／／／／／／】

3人が俺のパンツに手をかけようとした時であった！

ズドオォォォン！バラ、バラ

扉を何かが破壊した。そこにいたのは、

「……」

剣を構えたミラだった。

【マ、マクスウェル様（汗）】

【あわわわわわ……（汗）】

【ガクガクブルブル（汗）】

顔を真っ青にする3人。その3人に近づいていくミラ。俺が見てもかなり怖い（汗）

「昨日も言っただろう……人の男をとろうとしたら、どうなるかを……どうやら、教えないといけないようだな」

そういい、ミラは俺の手足を拘束していたリングを破壊する。

「レオン……私はこいつらに用がある。先に食事をして待っていてくれ」

「わ、わかった（汗）」

俺はそういい、部屋の外に出ようとすると、レム達と目が合う。

口ぱくで何かを言っている。何々？

タ・ス・ケ・テ・ク・ダ・サ・イ・ゴ・シュ・ジ・ン・サ・マ……

だと？元々、お前たちが撒いた種じゃねえか。そう思い、俺はレムに口ぱくで言う。

自業自得って言葉……知っているかと。

そう、言うと目を逸らすレム。

「じゃあ、下で食事をとって待っているからな」

そういい、外に出る俺。

そして、

【【【いいいいいいやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！】】】

俺の部屋からレム達の悲鳴が響いてきたのであった。

ミラはレム達へのお仕置きを終えて、食事の席についている。怒りの表情だったが、食事をするにつれていつもの表情へと戻っていった。

食べ終わった後、今日の予定を決めているところである。

「さて、これからの予定はどうする？闘争都市ダークエリオンに行くか？」

「そのことなんだがよ……」

アルヴィンが話し始める。

「実は今朝早く起きちまったから海停に闘争都市ダークエリオン行きの船はいつあるか聞いたら明日だってさ」

「そうか。なら、今日一日は各自、自由に行動しよう」

そういい、皆は解散した。ミラは俺に近づき、腕を組んでくる。

「では、昨日いけなかった南・西・中央区へ行こうレオン」

「そうだな。じゃあ、行こうか」

俺とミラは宿屋を出ていった。

～南地区・朱雀～

南地区に来ると、赤い工芸品が並んでいる。炎のように真っ赤な工芸品から薄い赤色の工芸品が置いてある。

「おお、この工芸品の模様『イフリート紋』にそっくりじゃないか？」

「確かに……これは『イフリート紋』にそっくりだ！」

一つのセットのマグカップを手に取る。

「これ、いいな！」

「うむ、マグカップ、買うか？」

どうするかを考えていると、このマグカップを売っている店主のお爺さんが話しかけてきた。

「フォッフォッフォ。お若いカップルかの？」

お爺さんに言われ、俺とミラは顔を紅くする。

「え、ええ、まあ」

「う、うむ／／／」

「フォッフォッフォ。そのマグカップはお主たちに譲ろう」

「「えっ！？」」

お爺さんがこのマグカップを譲るというのを聞いた俺とミラは驚き、声を上げる。

「お主たちを見ておると、二十年前にこの街に来たあの旅人の工芸士を思い出すの」

「！？　その人物を知っているのか！？」

俺の前世に生きていた時の世界の人物かもしれないのかで話が聞きたい俺はお爺さんに聞く。

「そうじゃ。あれは今から二十年前、儂がまだ４０代の頃じゃった」

お爺さんが話を始める。

「元々この街は小さな村じゃった。儂はその小さな村で小さい工芸品を売っていたのじゃよ。そんなある日、その旅人である男が訪れたのじゃ。その者は儂の前でこう言いおった。

『ここの工房をお貸ししてくれないか？』とな儂は良いぞと言った。

それから5時間、男は工房から出て来て、儂に作った工芸品を見せたのじゃが、これが素晴らしいものでの。山のような形をして、美しい白と青、水色などといった色々な色を使った工芸品じゃった。

儂はこの山は何と言う山なのかの？と聞いて、男は『この山は俺の故郷の山、富士山というんだよ』と言っていたの」

「!?　（富士山だと!?工芸品で富士山を作るってある意味すごくねえか!?一体誰だよその男は）」

「儂はその男の作った工芸品をもっと見てみたいと言うと、男はこう言いおった。『では、工芸品を作る代わりに数日間、ここに泊めてはくれないか?』と言った。儂は無論、いいぞと言い、それから数日間の間、男は儂の工房で工芸品を作り続けた。このマグカップもその男の工芸品の一つじゃよ」

俺とミラは手に持っているマグカップを見る。

「今、この街で売っている工芸品はその時に男が作ったものを手本に少しずつ方を変え、大きさも変えていったものも多い。さて、続きを話すかの。数日間、工芸品を作り続けた男はある日、フッとした瞬間、儂の目の前から消えたのじゃよ。
その後、男に貸していた部屋を調べるとこの街の発展させる仕方などが書かれた手紙と工芸品の事を書かれてあった本を置いておった。その手紙と本を使い、二十年の時間を経て、ここまで大きくなったのじゃよ」

俺は絶句した。やっぱり、そうだったのか。富士山といい、この街の作り方といい、間違いないな。その男は俺と同じ世界の人間だ。
だが、その男はどこにいたんだ?

「なあ、その男ってどこに行ったのかわかんないのか?」

「うむ。礼を言いたいのだが、全く見つからん。じゃが、十年程前に闘争都市ダークエリオンで、姿を確認したと聞いたぞい」

「闘争都市ダークエリオンだって?!」

「レオン。丁度いいのではないか?これから行く目的地ではないか」

な、何という偶然。これから行く目的地に男の情報があるかもしれないとは……。

「もし、男のことを聞きたいのであれば、闘争都市ダークエリオンに行ってみればいいぞい」

「そうするよ。ありがとうなお爺さん」

「感謝するぞ、店主」

「フォッフォッフォ」

俺とミラは、その場を離れていった。

～西地区・白虎～

お爺さんの話を聞いた俺たちは、その後、ここ、西地区・白虎へ来ていた。

「ここは……白いな」

「白いな」

そう、白虎だけに白い工芸品が多かった。ただ、品数は今まで回った地区を上回っている。皿だけで小皿～特大皿まであるし、コップも小～特大だし、ここにある品は全部小～特大まであるな。何でこんなにデカイのが多いんだろうか？そう思っていると、納得した。

「デカイな」

「ああ、デカイな」

明らかに身長が2メートルを超える大男がたくさん歩いていた。なるほどな、背の高い人や腕の大きな人用だったのか。納得だな。

「さて、ここは特に見るものがないし、最後の中央区へ行こう」

「うむ、そうだな」

そのまま俺たちは中央区へ向かった。

～中央区・黄竜～

「うへ～」

「ほぉ？」

中央区に来た俺たち。

中央区は工芸品ではなく、服類を売っている地区だった。

「すごい数の服だな」

「そうだな……」

ん？ミラの視線が……あ～あの店か。

「店の中、見て行こうぜ。気にいったのがあれば俺が買うぞ」

「い、いいのか？」

「おう、俺はウソはつかない！」

「で、では行くぞ！」

ミラは俺の腕を引っ張って店の中へ入っていった。

店の中に入ると、女性物の下着やら服が多く置かれていた。そんな中、男は俺ただ一人。複数の視線を感じている。だが、嫌がっている視線はない。暖かい視線のみが俺に注がれる。

「レオン、私にはどういった服が似合うと思う？私はこういったものはよく知らないのだ」

「ん？ほしい、服があったんじゃいのか？」

「あ、ああ。それは既に籠に入れた。他に、その……レ、レオンの

好みの服はないのかと思ってな」

……俺のために、か。ふふ、ミラも本当に昔よりも女性らしくなったもんだな。

「よし、俺が選んでやる！ミラは下着でも見てろよ」

「わかったそうする」

そういい、ミラは下着のコーナーへ行った。

「さて、さあ、服達よ。数の貯蔵は……十分か？」

さあ、ここからは俺の戦いだ！

結果を言おう。どういうことだこれは!?何で俺のいた時代の服まであるんだ!?チャイナ服にナース服。キャミソールやプリーツスカート、サマーセーター、メイド服、タンクトップ、網タイツ、ｅｃｔ。

ここまであるとは……ミラに似合う服を全部買ってしまいそうだ。

俺が悩んでいると、

「レオン」

「おお、ミラか。どうした？」

「うむ。買う下着／／／／／／決めたのだが」

「そうか。こっちはミラに似合いそうな服を集めたらこうなった」

「……こ、これを私が着るのか／／／／／／」

今着ている服よりも露出度が高いものもあるので、ミラは顔を紅くする。

「面倒だし、全部買うわ」

「んな！？」

ミラはさすがにこの量を一気に買おうとする俺を見て驚く。

ミラの買うという下着も一緒に持っていき、俺は会計を済ませる。
〇〇〇万円したことを言っておこう。ケケケ……これでミラとの行為の時にコスプレ行為をすることができるぜ。

俺は買ったものをすべて影の中にしまう。いや～便利だよな影の魔法は。

「さて、帰ろうか」

「そ、そう、だな／／／／／／」

顔を真っ赤にする。俺たちはそのまま、宿屋へと帰っていったのであった。

宿屋に帰ってきた、俺はこの街を発展させたきっかけを作った男の話しを皆にし、今日は眠りについた。

さあ、明日は闘争都市ダークエリオンだ！楽しみだぜ！

第６６話　朝の不幸？　謎の男、楽しい一日（後書き）

次回！闘争都市ダークエリオンへ！

第６７話　闘争都市ダークエリオンへ（前書き）

短いです

第67話　闘争都市ダークエリオンへ

～レオンＳＩＤＥ～

翌日、俺たちはシャンベリルアン海停から船に乗ってダークエリオン海停へ向かっていた。

俺たちはアルヴィンにこれから行く闘争都市ダークエリオンについてを聞いてみる。

「あ～、闘争都市ダークエリオンって、俺が二十年前にいた頃にはなかった街だ。悪いが、俺じゃあ話ができん」

アルヴィンも困っているのか顔を手で触る。さて、情報を集めるのにどうするか。シャンベリルアンの住民にも聞いてみたが、誰も詳しく知らず、俺もアルヴィンが知っていると思い、他には効かなかった。さて、どうしようか。

俺たちが困っていると、

「ん？乗客さんの皆さん、どうかしましたか？」

この船の船長が俺たちに近寄ってきた。

俺は船長にいう。

「ええ。実はこれから行く闘争都市ダークエリオンについての話しをしていたんです」

「おお、闘争都市ダークエリオンのことか。よかったら、儂が話をしてあげますが？」

「本当ですか！では、お願いします」

ラッキーだな。ここで話を聞けるとは。

「闘争都市ダークエリオンは今から二十年前にできた街なのです。二十年前、まだ小さい村だったところの旅人の男が訪れました」

「（！　確か、二十年前に謎の男がダークエリオンのあるところに行ったのも確か二十年前……合致するな）」

「その男はこう言いましたのです。『この村をもっと大きくしないか？闘技場のような者を作って人々の見世物にすれば儲かるぞ？』

と。その男が言ったことが何故か信用でき、村の皆さんは村を発展させるため、各地から腕っ節の強い男たちを連れて来て、５年と言う年月を経て、今の闘争都市ダークエリオンができました」

５年……つまり今から１５年前に闘争都市ダークエリオンが完成したのか。

「十五年前に完成した闘争都市ダークエリオンは５年に一回、街を改装します。そして、その５年に一度の改装を記念し、街では多規模な闘技大会を実施するのです」

「へぇ～、それは面白いな。船長、その大会のルールってわかったりする？」

アルヴィンが面白いことを聞いたと言わんばかりの表情で船長に聞く。

「ええ。闘技大会は大規模なので大会は最低でも１週間はするのが今までの記録にあります。闘技大会のルールは……といっても、戦闘方法は、シングル・タッグ・パーティーの３つのです。パーティーは仲間が５人なら５人、８人なら８人となっています。タッグの場合は男女のペアですね」

「そっか、タッグは男女のペアなんだ……」

「ええ。今、集まっているペアは全部で１４組です」

……おい、１４組だと。

「船長。一つ聞きたいが、そのタッグは名前とか分かるか？」

「さ、さあ？あ、ですが、一組だけわかります。確か……クレス・ミントペアでしたか？」

ガクッ

その名を聞いた俺は膝からガクンときた。

「（ま、マジかよ。ソードダンサーや謎の男だけじゃなくて、まさかクレス達まで！？じょ、冗談じゃないぞ！？）」

「レ、レオン、大丈夫か？」

いきなり膝をついている俺を見たミラが心配して声をかけてくる。

「あ、ああ……大丈夫だ」

いかんいかん。ミラに心配させてしまった。

「今年の大会は荒れるぞ？何しろその１４組を見て、他の参加者達はビビってしまってな。参加タッグは全部で２０組。儂がこの船に乗る前はまだ１４組だけじゃったし、着いてからすぐにエントリーすれば間に合うぞ？」

よし、着いたらすぐにエントリーしに行こう。

「船は後、３時間で闘争都市ダークエリオンに着く。まあ、のんびりして待っていなさい」

そういい、船長は俺たちの前から去っていった。

そして、3時間後、船は闘争都市ダークエリオン、ダークエリオン海停に到着したのであった。

第６７話　闘争都市ダークエリオンへ（後書き）

次回は、エントリーしに行くレオン達です

第６８話　闘技大会、準備

～レオンＳＩＤＥ～

ダークエリオン海停についた俺たちの目に最初に映ったのは……どデカイ闘技場のドームだった。

ここまで大きいのも……しかも、街の中でなく海停から見えるとなると近くで見たらどデカイんだろうな。ミラ達もその大きさに少し、身を引いている。まあ、あんなデカイ闘技場を見れば当たり前か。

外から見てあの大きさだから、闘技場内はかなり広いと思えるぜ！

「さて……さっさとエントリーしに行かないとな」

「レオン。この中ではお前が一番早い。先に行っててくれ」

「わかった。じゃあ、先に行くな」

俺は足にマナを溜めて、瞬動術でその場から離れていった。

闘争都市ダークエリオンに建っている家の屋根を伝って、闘技場を目指す。

跳んでいる時に下の街の様子を見ていると工芸都市シャンベリルアンと同じように人々が笑顔で過ごしている。

やはり、エレンピオスの街でもこことシャンベリルアンだけは、雰囲気も人々の活気が違うな。

しっかし、何でクレスとかがここに？アビスの闘技場やヴェスペリアの闘技場みたいなもんか？いや、１４組で思いつくのは……歴代テイルズシリーズだよな。エクシリアは１５周年記念の作品。つまり、ファンタジア～グレイセスまでが１４作品……ま、まさかな。まさか、歴代主人公達が出てきたり……しないよな！？もし、出てきたら感動のあまり、倒れちゃうぞ！？だが、ベフゥ！？

ガ～～～～ン！

か、顔を壁にぶつけてしまった……い、痛い（涙）

考え過ぎて目の前に迫る壁に気づかないとは……俺もまだまだだな。

さて、闘技場に急ぎますかね。

シュン！

再び、瞬動でその場から離れ、闘技場に行った。

シュタ！

「で、でかい（汗）」

遠目で見た闘技場は予想通り、大きかった。シャン・ドゥのおよそ……5倍か？

「は！いかんいかん」

さっさとエントリーしないとな。

俺は中へ入っていった。

中に入るとマジでデカく、広かった。

その真ん中で受け付けの女性が座っていた。

「すいません」

「いらっしゃいませ。ご用件はなんでしょうか？」

「闘技大会エントリーしたいんですが……まだ大丈夫ですか？」

俺が聞くと、受付嬢は笑顔で対応してくる。

「はい、大丈夫です。お客様、何名ですか？」

「自分を含めて7名です」

「7名……シングル・タッグ・パーティー戦ですか？」

「はい、そうです」

「わかりました。では、代表としてあなたがエントリーしてください」

そう言われ、書類を出される。

俺はその書類にすらすら記入していく。

記入し終わると受付嬢に渡す。

「では、これを」

受付嬢は人数分のバッジを渡す。

「これを大会当日……明日、持ってきてください。それが参加者の証なので」

「わかりました」

俺はバッジをポケットにしまう。

「では、当日はよろしくお願いします」

お辞儀をされる。

「では」

俺も受付嬢に挨拶をして、闘技場から外に出ていった。

外に出るとミラ達が丁度来ていた。

「おう、エントリーは終えたぜ」

俺は皆にバッジを渡す。バッジの説明をする。

「さて、明日に備えて、今日は宿屋に行って休もう」

俺がそう言うと、皆頷き、宿屋へ向かう。

宿屋に着いた俺たちは明日の闘技大会で戦うシングルとタッグをロ

ビーで話しあってた。

「シングルは俺が出る。タッグは俺とミラでいいだろう？」

「だな。この中で一番強いのはレオンだし、タッグの場合はレオンとミラ様だし」

アルヴィンが納得のいくことを言うと、皆頷く。

「だってさ、ミラ。どうする？タッグ出るか？」

「無論だ。私とレオンは最強タッグだ／／／」

顔を紅くしながらミラは俺を見る。

そんな俺たちに、話しかける者がいた。

「へぇ～、最強タッグね。自分たちで最強とか、恥ずかしくねえのか？」

「なんだと！」

ミラは紅く染めていた顔を怒りの表情に変化した。

俺もその声の主を見てみると……そこにいたのは、

「だってよ、そうだろ？自分達が最強とかいっている奴に限って」

「ユーリ！何、大会の参加者を挑発しているんだ！」

騎士のような格好をした金髪の青年……フレンが黒髪の男……ユーリの肩を掴む。

「何って、挨拶だよ挨拶」

「そんなわけないだろう！あんな挑発するような言い方……」

「相変わらずお固いなフレン」

「君が不真面目すぎるんだよユーリ」

何やら言い争いになりそうな雰囲気だな。

俺は立ち上がり、フレンの肩を掴む。

「気にしないでください」

「だが！」

「自分が弱いからってこれから戦うかもしれない相手を挑発する奴の言葉なんか気にしないんで。なっ、ミラ？」

「そ、そうだな／／／」

ニコリとミラに笑みを見せると、顔を紅くして大人しくなるミラ。

「まあ、そういうことなので気にしなくて結構ですよ。？子ども〃の言葉に一々、反応していたらきりがないので」

子どもの部分を強調して言うと、ユーリの表情に若干の怒りを感じる。

「誰が子どもだって？」

「俺は誰かとは言っていないぜ？」

睨みあう俺とユーリ。

そこへ、

「うわわわわ！！ユ、ユーリ！ダメだよ！喧嘩しちゃ！」

「そうですよ！落ち着いてくださいユーリ！」

子ども……カロルと女性……エステルがユーリに近づいて落ち着かせる。

「別に喧嘩しちゃいねーよ」

「エステリーゼ様。ご安心を。相手が温厚な方でしたので、大事には至りませんでした」

「そ、そうですか……それならいいのですが」

エステルは俺たちを見て、頭を下げる。

「ごめんなさい。ユーリがご迷惑を」

「いえいえ、気になさらず。？子ども〝の言っていることなので」

「そ、そうですか？なら、よかったです。では、私たちはこれで……」

そういい、エステルとフレンはユーリの肩を掴んでこの場から離れていった。

だが、ミラを見てみると……

「フフフ……あの男、私たちと当たったら、コテンパンのギッタンギッタンにしてやる……ククク」

よほど、先ほどバカにされたことが頭に来ているようだ。あ～あ、こんな状態になったらミラは止まらないぞ。

今のミラには俺ですら近づけない。そんなミラに近寄る二つの影。

「ねえねえ、彼女、今暇？俺様とデートしない？」

「いやいや、ここは俺とだろ？ワイルドな俺！どうだ？デートしないか？」

黒モードのミラに近づいていた影の正体は……ゼロスとロニだった。
あの二人って、作品違うよね？なのに何であんなに仲がいいの？！

「ねえ、聞いてる彼女？」

「聞いてんのか？」

2人はミラに近づく。

そして、

「さっきから……」

ミラの右手が光る。

「ん？俺様、嫌な予感が……」

「ゼロス、お前もか？」

汗をかいている2人に、ミラが拳で殴る。

「断絶拳！」

バコォォォォォン！

「ブルゥゥゥア！？」

「ゴホォォォオ！？」

ドカァァン！！

2人は丁度開いていた窓ガラスから空へと旅立っていった。何なんだかねえ～

「さて、これ以上ここにいると他の参加者達に話しかけられるかもしれないし、各自部屋に行こう。今回は闘争都市だけあって、広い部屋もあるしな。男女で別れることもできるし、食事は各自の部屋でとることもできるし、また明日な」

「そうだな。では、休むとしよう」

俺とミラが先頭になって部屋に向かい、男女の部屋に分かれ、一旦休むこととなった。

にしても、まさかクレスだけじゃなくて、ユーリ達に、ゼロス、ロニとかもいるとは……この世界は一体どうなっているだ？
まあ、別に平気だろうな。闘技場だし、問題ない。今日はのんびりするかねえ～

第６８話　闘技大会、準備（後書き）

ピロロ～ン！

ミラは奥義・断絶拳を覚えた！

はい、なんとなく書いてみんたかったので→を書きました。
今回は別の意味でカオスだった気がしますｗ
大会が始まったらキャラの数も増えそうです。
次回もお楽しみに！

アンケート（前書き）

アンケートにご協力ください

アンケート

タイトルと前書きでも書きましたが、アンケートにご協力ください。
内容は大会のトーナメントでの組み合わせです。
それぞれ、シングル・タッグ・パーティーでレオン達が戦う歴代シリーズのキャラ達を決めて欲しいんです。

シングル：レオンＶＳ○

タッグ：レオン&ミラＶＳ○&○

パーティー：レオンパＶＳ○パ

と言った風に書いてください。大体、４戦～５戦する予定なので４～５人、４～５タッグ、４～５パーティーを書いてください。

１０月２１日の１６時００分までアンケートを受け付け、集計し、大会編を書きます。皆さんのご協力をお待ちします。

追加アンケートです！

感想をもらい、男と男同志のペアがあったのですが、男女でなくてもいいか、それとも男女がいいかを教えてください。

男女のペアのことは第６７話に書いてありますが、もしも、男女ではなくてもいいという方は、このアンケートの前のものと一緒に感想にお書きください。

度々のアンケートをお許しください。
では、引き続き、アンケートをお待ちしています。皆さまのご協力をお待ちしています。

一体どういった組み合わせになるかは作者にもわかりませんｗ
どうなるかは皆さんのアンケートによるものになるます。

こちらの期限も先のアンケートと同じで１０月２１日の１６時００分までです。

第６９話　闘技大会、組み合わせ（前書き）

思っていたほど、アンケートが来なかった……（涙）
アンケートの感想が少ないので書いてくださった方々の相手を作者が決めます。
これでは集計しても、あまり意味がないので。

アンケートにご協力くださった深遠の翼様、ルファイト様、レヴァテイン様、雪月花様、ありがとうございました！

第６９話　闘技大会、組み合わせ

～レオンＳＩＤＥ～

闘技場でエントリーした次の日の朝、つまり大会当日だな。俺たちは受け付け前に来ている。他の参加者達は各控室で待機しているらしい。

「では、こちらです」

昨日、俺が話をした受け付け嬢が俺たちの控室に連れていく。控室に行く途中、他の参加者達の声が聞こえてきた。

――――このバカ、あんなにあたしが名にしたって言うのよ！！

――――誰がバカだ！このアホ女！てめえの方がバカだろうが！

――――まあまあ、二人とも落ち着いて……

――――クレスさんの言うとおりですよ？これから大会なのですし、落ち着いてくださいアーチェさん、チェスターさん

――――ハハハ、若者たちは元気でいいな

――――クラースさん、そういっていますと、本当におじさんみたいですね

……これはどう見ても、ファンタジアチームだな

他には、

――――Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……

――――スタン！起きなさいよ！そろそろ、組み合わせが決まるのよ！！ちょっと！

――――ルーティーさん、どいてください。ここは私が……

――――そ、そお？悪いわねリリス

――――いえいえ！家の兄が迷惑をおかけしていますので！……では、右手にお玉を！左手にフライパンを！横たわりし者に正義の鉄槌を！唸れ！エルロン家秘技！死者の目覚め！

ゴンゴンゴン！

――――んおっ！？　やあリリス。おはよう

――――ほんっとうに寝起きが悪いんだから

――――アハハハ……それで、何？

――――ハァ、バカかお前は。これから組み合わせだろうが

――――……あ～、そうだったなリオン

――――（ピキッ）

――――リ、リオンさん、落ち着いてください（汗）

――――おい、スタン！フィリアさんに迷惑をかけんじゃねえ！

――――ハッハッハ！皆元気だねえ～

――――そうだね。元気なことはいいことだよ

――――その通りです！ウッドロウ様！

――――あんた……あたしの勇士を見ててくれよ……

こっちはデスティニーか。

――――皆！ドワーフの誓いだぜ！！

――――ロイド……いきなり何言ってんの？

――――いや、何か言わないといけない気がして……

――――ロイドさん、疲れているんじゃないんですか？

――――エミル……そうかもな……昨日、先生の料理を……ウゥ……

――――ロ、ロイド!?大丈夫?!……きゃうっ!

――――ちょっと、コレットの方が大丈夫かい!?何でいつも何もないところで転ぶのかねえ?

――――昨日の女の子……可愛かったな~?俺様、惚れちゃい……ブルゥアア!?

――――このアホ巫女!あんたはまた、ナンパでもしてたのかい!?

――――節操無し……です

――――プレセア、それは使い方が違うのだがな……

――――……(これはああで、この遺跡は……クハハハハ!!!)

――――これがカオスな光景ってやつなので……(汗)一番普通なのわたしとエミルだけね

こっちはシンフォニア&ラタトクスか。

――――こういうのは……やっぱりなれないな……

――――なんだよルーク。相変わらず、戦いを見せるのは好きじゃないのか？

――――まあ、な。これが闘技場じゃなきゃ、殺し合いなんだぜ？さすがにな……

――――大丈夫よ、ルーク。闘技場なんだから

――――そうですわよ？今、緊張していては、己の全力を出せませんわよ

――――ですです、元気出してくださいよルーク～（優勝賞品にお金を要求してやるぜ！）

――――皆さんも若いですね～いやはや、自分が歳をとっているのがわかりますね

――――ジェイド、何だ？戦いたくはないのか

――いえいえ、何しろ、私が全力で戦ったら相手が精神崩壊するかもれませんので……まあ、別に他人ですし、構いませんがね♪

――ジェイド、怖え

――だな

――二人とも、聞こえていますよ？

――「えっ！？ぎゃあああああああああ！！！！」

……これは、アビスだ、よな？ルークにガイ、ドンマイ。

――み、みみみ、皆！頑張ろうね！出動！凛々の明星（ブレイブヴェスペリア）

――おーいカロル。今、緊張しても仕方ないだろうが。それに、一日目がシングルかタッグ、パーティー戦かもわかんねえんだからよ

――――ユーリの言うとおりですよカロル。落ち着きましょう

――――これぐらいで緊張なんて、まだまだガキね

――――そういう、リタっちも身体はこどもおぉぉぉぉ！？

――――ぶっ飛ばすわよ？

――――ぶっ飛ばしてから言うセリフかしら？

――――皆のもの、おでんでも食べるのじゃ

――――全く、戦いの前だというのに、なんでこう、静かにできないのかな、ユーリ達は。な、ラピード

――――アオォォォォーーーーンワン！

こっちはヴェスペリアっと。

――――皆、油断せずに行こう！

――――ええ！チームで戦う場合、一番大事なのは！

――――チームワーク……だよね、アスベル？

――――ソフィの言うとおりだ。パーティー戦において、一番重要なのは個々の力じゃない！チームワークなんだ！

――――兄さんの言うことには一理ありますね。では、今からチーム戦に必要なことを書きますので……（カキカキ）

――――ヒューバートも相変わらず、形から入るな

――――そこが弟君のいいところだよ♪

――――確かにね。兄妹とはいいものだね

んで、こっちはグレイセスか。

「こちらがレオン様達の控室になります。中にあるモニターの電源をつけ、トーナメントの組み合わせが出ますので、そちらでご確認を。では」

受け付け嬢はそういい、俺たちを控室に案内し終え、帰っていった。

～数分後～

モニターに動きがあった。

トーナメント表のような者が現れ、名前が点滅してある。その名前は……俺の名前、レオンだ。

モニター上を見ると、シングルと書かれてある。下にはタッグ及びパーティー戦の組み合わせはまた後日と書かれている。

俺の相手は……ユーリだった。

しかも、ご丁寧に写真まで出ているし。

「相手は……こいつか。面白い。昨日、ミラをバカにした罪を償わせてやる」

「レオン、頑張れ！」

「おうともさ！」

～同時刻・ヴェスペリアチーム、控室～

「へえ、あいつが相手か」

「あ、この人、昨日の……」

「何というか……ある意味縁があるね、ユーリ」

「ああ。昨日、俺のことを子ども扱いしたんだ。その報いは受けてもらうぜ」

ゴゴゴゴゴゴッ！！！

「ユ、ユーリが燃えているよ！！」

「あらあら？珍しいわね」

「……バカっぽい」

「青年らしいっちゃあ、らしいわな」

「さすがユーリなのじゃ！」

～レオン達の控室～

「さ～て、何の武器を使おうかな～♪この斧でもいいし、槍でも…
…ああ、あいつらのパーティーの技を使ってのもいいかもな……ク
ク」

俺は頭の中でユーリに使う武器を考えている。そんな俺からミラ以
外は距離をとっている。何でだ？

！　そうだ！あれを使おう！

フッフッフ！あいつが驚く顔が目に浮かぶぜｗｗｗ

ウケケケケケケケ……アヒャヒャヒャヒャ！！！

高らかに笑う俺であった。

さあ、狩りの時間だぜ！！

第６９話　闘技大会、組み合わせ（後書き）

はい、ここまでですね。次回はＶＳユーリ。ですが、レオンの様子を見る限り、酷い目に遭うかもｗｗｗ

次回もお楽しみに！

第７０話　レオンＶＳユーリ！　火花散らして！

～レオンＳＩＤＥ～

さて、トーナメントの組み合わせも決まり、一回戦の相手はユーリだ。俺は闘技場の舞台前の入り口で呼ばれるのを待っている。

反対側にはユーリがいるはずだ。チームメンバーは専用の応援席があるので、そっちで待っている。

そして、時は来たり！

≪さあ、５年に一度の闘技大会！この街、闘争都市ダークエリオンが作られてから早１５年。今回は記念すべき第３回目の大会だあああああ！！！そして、今日はシングルトーナメント、第一戦目だ！その一戦目を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

「うわ！」

俺とユーリのいるであろう入口に白いスモッグが吹き出る。ここまで演出を派手にするのか！？

≪赤コーナー！チームヴェスペリアからユーリ・ローウェル！！≫

「しゃあ！！」

ユーリが駆け出てくる。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン・ストライフ！≫

「行くぜえ！！！」

俺も名前を呼ばれて、舞台の中央に立つ。

「お前といきなり戦えるとは……好都合だぜ？」

「はっ！ガキに負けるほど、俺は弱くねえぜ？」

「……その余裕、なくしてやんよ」

「なくさせてみな！」

ユーリは剣……鞘を投げ、ニバンボシを構える。

対する俺は、双刃ボルテクスを構える。

≪それでは、シングルトーナメント、第一回戦……レディー……ファイト！≫

「！」

「！」

ガキィィィン！

【ＢＧＭ：火花散らして】

「そらああ！」

「ぜいやああ！！」

ガキィン！ガキガキ、ガキィィン！

俺とユーリは技を使わず、剣で斬り合っている。

「やるなお前！」

「そっちこそな！」

カキィィンカキ、カキィィィン！

「なら……飛ばしていくぜ？蒼破追蓮！！」

「っ！フレアショット！！」

ユーリが飛ばしてきたエネルギーの塊を撃ち落とす。

「今度はこっちだな？旋風裂駆！」

ユーリに近づきながら、双刃を回転させていく。

「うおっと！あぶねえあぶねえ（汗）」

「まだだぜ？クラックビースト！」

ガウ！ガウゥゥ！

「マジか？！」

放たれた獣2匹がユーリを襲う。

「絶風刃！続いて、焼き尽くす！　天狼滅牙・飛炎！」

風の刃で獣を吹き飛ばしたユーリは俺に近づき、連続で炎を纏った剣で斬りかかる。

「R（ローリング）・サンダーボルト！！」

俺は跳び上がって、ドーム状の電撃を放つ。

ビリリリリリ！！！

「アバババババババ！？」

雷で痺れるユーリ。

「虎牙破斬！空破絶掌撃！アクアバレット！双幻乱舞！！」

「ぐあああああああ！！！」

俺の流れるような攻撃の嵐にユーリは膝をつく。

「止めだ！！」

剣を高く振りかざそうとすると、

「飛ばしていきますかあああ！！！」

「ぐぁ！」

ユーリが闘気を纏う。……オーバーリミッツか！

「これで決めてやる！閃け、鮮烈なる刃！無辺の闇を鋭く切り裂き、仇名す者を微塵に砕く！！決まったぁ！漸毅狼影陣！！」

ユーリの秘奥義が……

「ぐあああああああああっ！！！」

俺に決まる。

「レオン！」

応援席から見ているミラが俺を心配する目で見る。

……ハッ！俺は負けられねえ……ミラの前だけはな！

俺は踏みとどまる。

「マジ……か！？」

ユーリは決まるかと思ったのだろう。俺が立っていることに驚いている。

「覚悟を決めろ！派手に踊れッ！アンスタンヴァルス！！」

連続射撃でユーリに吹き飛ばす。

そのまま、ユーリは動かない。審判がユーリの意識有無を確認し、首を振る。

≪第一回戦、レオンＶＳユーリ、勝者レオン選手！！いい戦いを見せてくれてありがとう！！次も期待しているぜ！！≫

ふう……無事、第一回戦を終えたか。次の対戦相手の試合も見ないとな。

第７０話　レオンＶＳユーリ！　火花散らして！（後書き）

はい、ＶＳユーリ戦でした。次回もお楽しみに！

第７１話　リオンＶＳアスベル！　剣士と騎士

～第三者ＳＩＤＥ～

～レオン達の控室～

「レオン！大丈夫か！」

試合を終えたレオンは控室に戻ってきている。控室にはミラ達全員が待っていた。レオンが控室に入るとミラが抱きついてきた。

「ミ、ミラ、痛い……す、少し力を緩めてくれ」

「あ、す、すまない／／／／／／」

自分のしている行動に気づき、抱きつくのをやめる。

「い、今、治療します！」

エリーゼは椅子に座るレオンの傷を癒す。

「僕も手伝うよ」

ジュードも椅子に座るレオンに近づき、傷を癒す。

2人の治癒術でどんどん、傷が塞がっていく。

「さて、次の試合の勝者がレオンの相手だが……おっ、出てきたぜ」

アルヴィンがそういい、レオンはジュードとエリーゼに治療を受けながらモニターを見る。

そこに映っていたのは、

デスティニーのリオンとグレイセスのアスベルであった。

～舞台～

「ふん、お前が僕の対戦相手か」

「ああ。俺はアスベル・ラントだ。よろしく」

「ふん。僕はリオン・マグナスだ。よろしくしてやらなくてもいいが……」

リオンはソーディアン・シャルティエとクリスダガーを構える。

「これから戦う相手と馴れ合う気は僕にはないぞ」

「まあ、そう言わず……俺の礼儀みたいなもんだしな」

アスベルも鞘に入れたまま、剣の柄を掴む。

「勝たせてもらうぞ」

【行きましょう、坊っちゃん！！】

「俺も仲間を守るため、勝たせてもらうぞ！！」

≪それでは、シングルトーナメント、第一回戦第二試合目、レディ……ファイト！！≫

【ＢＧＭ：Ｂａｒｅ　ｉｔｓ　ｆａｎｇｓ】

試合が始まった。

「「魔神剣！！」」

２人は同じ技を同時に使う。衝撃波は互いにぶつかり合い、相殺される。

「エアプレッシャー！」

「くっ！」

リオンは素早く、精霊術でアスベルの動きを止める。

「覚悟はできたか？デモンズランス！」

「出来ているわけないだろう！邪霊一閃！！」

アスベルは自分に飛んでくる巨大な魔神の槍を技をリオン目掛けて飛び込み、それを避け、リオンを右へ斬る。

「ちっ！」

リオンはそれを避けるが、

「逃がさないぞ！灰燼（かいじん）の焔！魔王炎撃波！」

アスベルは攻撃範囲の広い、魔王炎撃波で避けたリオンに当てる。

ジリィ

「がっ！」

焼ける音がし、リオンはそのままバク転しながらアスベルから距離をとる。

「僕の目の前から消えろ！グランドダッシャー！！」

「んなっ！？なんて詠唱の速さ！」

アスベルの足元に巨大な岩を噴出され、アスベルはそれに巻き込まれた。

「ぐあああああああ！」

「これで終わりにしてやる！いい気になるな！目障りなんだよ！僕の目の前から・・・消えてしまえ！魔神！煉獄殺！！」

リオンは闇のオーラを纏った一閃後、空中へと切り刻んでいき、斬り下ろしの後、アスベルを突進突きで突き抜けさせる。

「うわあああああああああ！！！」

リオンの秘奥義を受けたアスベル。リオンはこれで終わったと思ったが、

「俺は……負けるわけにはいかない！終わらせてやる！」

「なにっ！？」

倒れていると思っていたアスベルが剣を帯刀状態にしながら自分に迫ってくるのを見たリオンはその場から離れようと思ったが、一足遅かった。

「閃く刃は勝利の証！白夜殲滅剣！」

リオンを切り刻み、納刀ともに粉砕した。

「がはっ！！」

血を口から吐くリオン。

「はぁはぁ……やったか？」

アスベルは倒れるリオンを見てそう呟く。

審判も近づこうとするが、リオンがシャルティエを杖代わりにして立ち上がる。

「はぁ……はぁ……ヒ、ヒール」

リオンは治癒術で傷を回復させる。

「よくもやってくれたな……だが、いい気になるな！」

リオンは双剣に炎を纏う。

「塵も残さん！奥義！浄破滅焼閻！！闇の炎に抱かれて消えろ！！」

光と闇の炎を巻き起こし、その炎と共にアスベルを斬りつける。

「ぐあああああああ！マモレナカッタ」

ドサッ

アスベルはそういいながら、剣を手から放し、倒れた。

すぐに審判が意識の確認をし、首を振る。

≪試合終了!!勝者!チームデスティニー、リオン・マグナス!!≫

勝利者宣言をする、司会者であった。

～レオン達の控室～

「俺の次の相手はリオンか」

「レオン……頑張れ」

「ミラ……おう！俺は負けねえぜ！」

心配するミラに笑顔で答える。

～数時間後～

≪えー、第一回戦がすべて終えました！少ししてから、第二回戦第一試合を行います！選手であるレオン選手とリオン選手は準備をしてください≫

放送が流れ、レオンは舞台入口に、ミラ達は特別応援室へと向かったのであった。

第７１話　リオンＶＳアスベル！　剣士と騎士（後書き）

はい、今回はリオンＶＳアスベルでした。
次回はレオンＶＳリオン……あっ！一文字違いですねｗｗ
次回もお楽しみに！

第７２話　レオンＶＳリオン！

～レオンＳＩＤＥ～

俺は今、一回戦と同じように入口で名を呼ばれるのを待っている。
次の対戦相手はあのリオンだ。デスティニーでは天才剣士とも言われ、そしてソーディアン使いだ。侮れない相手だ。

≪皆さま、大変長くお待たせしました！これより、シングルトーナメント、第二回戦第一試合を始めま～～～す！！≫

わあああああああああ！！！！

歓声が舞台に響き渡る。

≪第二回戦第一試合を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

「うわ！またか！？しかも今度は赤と青か！？」

俺とリオンのいるであろう入口に赤と青のスモッグが吹き出る。ここまで演出を派手にするのかがわからんぞ！

≪赤コーナー！チームデスティニーからリオン・マグナス！！≫

「……ふん」

リオンは静かに駆け出てくる。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン・ストライフ！≫

「しゃあ！」

俺も名前を呼ばれて、舞台の中央に立つ。

「……一つ言っておく」

「なんだ？」

「この戦い、勝つのは僕だ」

「かっ！それはおかしいぜ？」

眉をひそめるリオン。

「……何が言いたい」

「チビに負けるほど、俺は弱くないんでな」

ブチッ

「……その口、切り刻んでやる」

【ぼ、坊っちゃん！？そんな物騒なことを言わなくても……事実なんですし……痛い！？痛いですよ坊っちゃん！！静かにしますのでコアをグリグリしないでぇ！】

「ふん、わかればいい」

……こうしてみると一人漫才をしているようだぜ。

シャキッ！

「僕は負けられない」

ジャキッ

「それは俺のセリフだぜ」

俺とリオンは剣を構える。俺はフランベルジュを、リオンはソーディアン・シャルティエとクリスダガーを構える。

≪それでは、シングルトーナメント、第二回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

「！」

「！」

ガキィィィン！

【ＢＧＭ：Ｌｉｏｎ　ｌｒｏｎｙ　ｏｆ　Ｆａｔｅ】

「はああ！」

「ぜいやああ！！」

ガキィン！ガキガキ、ガキィィン！

「魔神剣！」

「そんなもの、当たるものか！魔人闇！」

「んげっ！？」

リオンの奴、いきなりそれを使うのか！？リオンは剣に闇の力を収束し、前方に突き出すと共に魔神剣を吹き飛ばしやがったぞ！？

ザシュッ！

「ちぃ！なめんなよ！蒼破刃！」

バシュン！

剣を振るい発生する衝撃波を放つ。

ドンッ！

「くっ！」

対戦を崩すリオン。今が攻めの好機！

「散沙雨！続けて虎牙破斬！まだまだ！魔神双破斬！！」

連続の突きで拘束し、斬り上げ、衝撃波を飛ばしながら斬り上げた。

ザシュシュシュ！ドカーン！

「がはっ！」

バタン！

「そして、ダウンしてからの翔凰烈火！」

炎を放ちながら回転斬り上げ、左手から鳳凰を形どった炎を斜め上空に放った。

「ぐあああああああ！」

そのまま吹き飛んで行くリオンは壁に激突する。

バタン！！

「がっ、はぁ！」

ザン！

シャルティエを地面に突き刺し、杖の代わりにして立ちあがるリオ

ン。だが、その姿はまさに満身創痍。

「はぁはぁ……負けられん……優勝すれば……」

「ん？」

リオンが何かを呟いている。

「優勝すれば……マリアンの特別プリンが……待っているんだ！」

周りに聞こえないように呟いているが、俺にはまる聞こえだな。

「はあああ！！」

リオンはトップスピードで俺に近寄る。マズッ！？

「遅い！空襲剣！虎牙破斬！！爪竜連牙斬！！」

斜め後方上空へ斬り上げ、斬り上げから斬り下ろされ、流れるような動きで敵を斬りつけられた。

「ごほっ！」

踏みとどまるが、リオンの追撃。

「斬り刻む・・・遅いッ！魔人千裂衝！！」

先ほどの3連続技を一気に出され、吹きとばされた。

「ぐぅあああああああ！！」

ドカァァァン！！

俺は壁に激突し、身体が埋まってしまう。

「ごほっ、が、はぁ！」

「止めだ！！覚悟はできたか？デモンズランス！」

巨大な槍と共に俺に魔弾１２発が俺に迫る。

「んな！？間に合うか！？」

シュン！ドカ――――ン！！

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

「レオン！？」

まさか、レオンがやられたのか？いや、ありえないぞ！あのレオンが……。

「ちっ！煙で何も見えやしねえ」

「レ、レオン……無事ですよね？」

「レオン君が心配だよー！」

「レオン……」

「レオン……」

「レオンさん……」

皆もレオンが心配なのだろう。私も今すぐ、助けに行きたい。だが、これは大会のシングルトーナメント。もし、戦いに割り込んだらレオンは落ち込む……レオン！無事な姿を見せてくれ！

そう、私が思っていると、

ドカァァァァァァン！！！

レオンのいた場所から高密度の炎のマナを感じた。この感じは……イフリート？

私はイフリートを召喚しようとするが、召喚に応じない。どういうことだ!?

【イフリートの奴なら、さっきレオンに召喚されてたよ】

「なんだと?」

シルフが召喚していないのに勝手に出てきた。何故?

【イフリートに言われてね。?少し、レオンに力を貸しに行ってくる。ミラに言っておいてくれシルフ〃ってね。見てみなよ。あれがレオンだよ】

シルフに言われ、私はレオンのいる場所を見る。そこには、

金髪だった髪が前のように真っ赤な髪の色に戻っており、しかも長髪になっていた。剣には炎のマナを纏わせている。

レオン、勝て!

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

ふぅ……うまく言ったな。

【全く。いきなり召喚されるから何だと思えば、まさか俺をその身に纏うとわ。恐れ入ったぞ】

そう、俺はリオンのデモンズランスが当たる瞬間、イフリートを召喚し、俺の体に宿らせたのだ。それによって俺は炎の加護によって防御力・魔法防御力が飛躍的に上昇したんだ。

「だが、この状態も長くは続かない。持って5分……だが、」

【5分もいらない……そう言いたいのであろう？】

さすが、イフリート。俺が言いたいことがわかっているな。

シャキン

剣を構える。

「まさか、あの攻撃を受けて立っていられるとわな。あのバカと同じで身体が頑丈なのだろうな」

【坊っちゃん、いくら自分の防御力が紙に近いからって……って！？痛いです！ごめんなさい！許してえええ！】

また、漫才しているな（笑）

「悪いがリオン。これで終わりだ」

「ふん、面白い！……こい！」

俺とリオンは再び斬り合う。

カキィィン！　カン！カン！カキィィィン！

ザシュ！ザシュシュシュ！

「くっ！」

リオンは傷を負い、後退するが俺は追撃する。

「剛・爆炎剣！！」

【フハハハ！燃えてしまええ！！】

イフリートの力でパワーアップした爆炎剣を地面に叩きつけると砕けた石が炎を纏ってリオンを襲う。

ズバババババ！！！

「んな！？なんという理不尽さだ！」

【滅茶苦茶ですよ！？あの子！？】

「フハハハハ！燃え滾るうぅぅぅぅ！」

炎が俺を包む。

「うおおおおぉぉッ！　緋凰絶炎衝！焼き尽くせ！」

俺はジャンプし、斜め下に突撃し、リオンを駆け抜けて火柱を上げる。

「ぐぅあああああああ！（な、なんだこの威力と熱量は！？スタンの比ではないぞ！？）」

「まだだ！続けて喰らえ！うおおおおぉぉッ！　負けられないんだ！舞え！紅蓮の翼！皇王天翔翼！」

俺は最後の一撃として鳳凰のオーラを纏い突進する。

「うぐぅあああああああ！！！」

【ぼ、坊っちゃーーーん！？】

ガシャン

リオンは連続で秘奥義を食らったため、シャルティエを手放す。

ドサ

シュタ！

「はぁはぁ……」

倒れるリオンを見て、俺はフランベルジュを杖代わりにして立つ。

審判が近づき、リオンの意識を確かめる。確かめると首を振る。

≪き、決まったあああああああああ！！！壮絶な戦いを制して、第二回戦第一試合を見事突破したのは、チームエクシリアのレオン・ストライフだあああああああああ！≫

わあああああああ！！！！！！

歓声を聞きながら、俺は控室へと向かったのであった。

第７２話　レオンＶＳリオン！（後書き）

はい、なかなか熱い戦いがかけた気がしました。
次回は再び、対戦相手の観戦です。
次回もお楽しみに！

～今回出た精霊との融合～

今回出たレオンがイフリートを取り込んでその力を使ったのをスピリットヒュージョン。
イフリートを取り込んだ（融合した）場合は炎の技を倍にし、防御力と魔法防御力を上昇させる。

第７３話　クラトスＶＳアッシュ

～レオンＳＩＤＥ～

いってて…リオンの技をモロに食らったせいで体中痛いぜ。

ガチャ

俺は控室に入ると同時に、

ダキッ！

ミラに抱きつかれる。いつもなら胸の感触を楽しむところだが、今の俺は怪我人。

「ミラ……先に傷を治療させてくれ」

「……うむ」

ミラは静かに俺からな離れ、ジュードとエリーゼが俺に治癒術を施す。

俺は治癒術を受けながらモニターを見る。

舞台には次の俺の相手になる……クラトスとアッシュの2人がすでに中央で試合開始を待っていた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、第二回戦第二試合を飾るのは……チームシンフォニアからはクラトス・アウリオン！それに対するはチーム六神将からアッシュ！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、第二回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

クラトスとアッシュは同時に駆ける。

「飛燕瞬連斬！」

アッシュは駆け寄りながら技を繰り出す。

「ふっ……」

クラトスは何もなかったかのようにそれを避ける。

空中に跳び上がってしまたアッシュは一見、無防備に見えるが、

「崩襲脚！」

上空から蹴りを喰らわそうとする。

「襲爪雷斬！」

上空から攻撃してくるアッシュに対し、カウンター気味に雷を纏った剣で斬る。

「糞が！氷の刃よ、降り注げ、アイシクルレイン！」

地面に着地したアッシュは術を使う。クラトスの頭上に円錐状の氷柱が降ってくる。

「まだまだ甘いな」

クラトスはアイシクルレインの落ちてこない場所を瞬時に見定め、避けながらアッシュに接近する。

「風雷神剣」

ビシャァァァン！

「ぐああ！」

風圧をまとった突きを出し、アッシュはそれをガードするが雷を落ちて来てアッシュにダメージを負わせる。

「閃光墜刃牙」

斬り上げアッシュを浮かせ、突きで追い討ちを掛けるクラトス。

ザシュ！

「うぐうううう！！」

傷を負い、腕を抑えるアッシュ。左腕を痛めたようだ。

「これで終わりだ！聖なる鎖に抗って見せろ！シャイニング・バインド！！」

聖なる鎖でアッシュは拘束され、足元に魔法陣を展開し、周辺を聖なる光がアッシュに襲いかかる。

「この……クソがあああああああああ！！！！」

聖なる光に包まれたアッシュはそのまま壁にまで吹き飛び、気絶した。

審判は念のためにアッシュの意識を確認する。首を振る審判。

≪き、決まったあああああ！クラトス選手の圧倒的強さの前にアッシュ選手、傷を負わすことなく、破れてしまった！！！勝者、チームシンフォニアのクラトス選手！！≫

わあああああああああ！！！

歓声が鳴り響く。

「……」

クラトスは静かにその場から去っていった。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「す、すげえ……何者だ、あの男……」

アルヴィンは汗を流している。皆から見てもアッシュはかなりの強者。だが、そんなアッシュをも赤子のように扱うクラトスに皆は驚いている。

とか言っている俺もクラトスの強さに驚いている。まさか、ここまでとは……と。

そして、こうも思った。

？相手が強ければ強いほど……戦いが楽しみだ〃と。

俺はジュードとエリーゼに治癒術をしてもらった身体を解す。

本気の本気で戦えるのは……俺としてもありがたい！シンフォニアでは４０００年前のカーラーン大戦を終戦に導いた四大英雄の１人……４０００年生きている英雄の一人と剣を交えることができる……これ以上の喜びはない！

フフフ……楽しみだな。

「皆、行ってくる！」

俺は皆にそう言い、先に控室を出る。

控室を出て、舞台の入り口で待っていると、ミラがやってきた。

「どうした？」

「……次の対戦相手は生半可な実力者ではない。レオン、気をつけて」

どうやらクラトスの強さを見て、俺が心配になったんだな。ふふ、可愛い彼女にそう言われると……やられるわけにも傷を負うわけにもいかないな。

「あはは、心配してくれてありがとうなミラ。安心しろ……勝つのは俺だ」

いつになく真剣な表情をとると、ミラが顔を真っ赤にさせる。

「そ、そうか。なら、安心だな／／／では、私は、特別応援席にいる」

そう言ってミラは応援席へと行ったのであった。

ククク……久しぶりだな。ここまでワクワクするのは。さあ、俺を満足させてくれよ！！

第７３話　クラトスＶＳアッシュ（後書き）

次回！レオンＶＳクラトス！です
お楽しみに！

第７４話　レオンＶＳクラトス！　怒涛の雷！（前書き）

戦いの途中からレオンの出す技がテイルズから離れますｗ

第７４話　レオンＶＳクラトス！　怒涛の雷！

～レオンＳＩＤＥ～

毎回の如く、俺は入り口で待っている。次の相手には今まで以上に気が抜けない。何たってあのクラトスだ。ユーリやリオンよりも数倍の実力者だ。……ミラにもあんな応援をされたら……負けるわけにも……傷つくこともできないな。

俺はすでに闘気を纏っている。これからの強者との戦い……激しいものになる。

≪皆さま、大変長くお待たせしました！これより、シングルトーナメント、第三回戦第一試合を始めま～～～す！！≫

わあああああああああ！！！！

うおおおおおおおおお！！！！

今まで以上の歓声が舞台に響き渡る。

≪第三回戦第一試合を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

「……もう驚かねえな」

毎回のように、俺とクラトスのいるであろう入り口にスモッグが吹き出る。今度はオレンジと緑か。

≪赤コーナー！チームシンフォニアからクラトス・アウリオン！！！≫

「……」

クラトスは静かに駆け出てくる。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン・ストライフ！≫

「……行くぜ」

俺も名前を呼ばれて、舞台の中央に立つ。

「お前の力……今までにないほどの波動を感じる。私も本気で行かせてもらうぞ」

パアァァァ――――！

そういうクラトスは翼を広げる。

「それはこちらの台詞だ。俺も全力をもってあんたと戦おう」

バチィ！ビリリ！ビリィ！

俺も雷化する。

シャキッ！

「……行くぞ」

ジャキッ

「……ああ、掛かってきな！」

俺とクラトスは剣を構える。俺はヴォーパルソードを、クラトスはフランベルジュを構える。

≪それでは、シングルトーナメント、第三回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

「！」

「！」

ガキィィィン！

【ＢＧＭ：Ｔｈｅ　ｅｎｄ　ｏｆ　ａ　ｔｈｏｕｇｈｔ】

ガキィィン！ガキガキ、ガキィィン！

俺とクラトスは空中を飛びながら戦っている。クラトスは翼があるから飛べるが、何で俺も空中で飛んで戦えるのか……それは、風のマナを足に集中し、その力で飛んでいる。

「魔神剣・双牙」

バシュンバシュン！！

「孤月閃！」

俺は飛んでくる衝撃波を斬撃の真空破で斬り裂き、相殺する。

「魔王炎撃波！」

クラトスに近づき、斬りかかりながらクラトスの避ける軌道に炎を放出する。

「くっ……」

「まだまだ！雷斬衝！雷神双破斬！！獅吼爆雷陣！！！」

怒涛の攻めでクラトスを吹き飛ばす。

「ぐあああああああ！！！」

ドカアァァァァンン！！！

獅吼爆雷陣で地上に向かって吹き飛ばし、地面に激突するクラトス。

「これはおまけだ！完全雷化！千磐破雷（チハヤブルイカヅチ）！！」

シュウゥゥ～～～～ン！ドカアァァァン！！

俺は上空から全力の千磐破雷（チハヤブルイカヅチ）をクラトスに食らわす。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

≪こ、これはすごいぞ！！！レオン選手、雷を纏った攻撃がクラトス選手に直撃ぃ～～～！しかし、レオン選手の使う技は見たことのないものばかりだぞ！！≫

司会者が驚いているな。まあ、あのレオンの技はレオンオリジナルの技だからな（＊別にオリジナルではないけどな　Ｂｙレオン）

「すっげえな。何なんだよあれは」

「今まで本気で戦っていなかったのレオンって！？」

「いっけー！そこよレオン！！！」

「頑張ってください！です」

「レオン君、頑張れ―！」

「いやはや、凄まじいですね」

アルヴィンとジュードはレオンの戦闘力に驚いているし、レイアとエリーゼ、ティポは普通に応援しているな。
ローエンは感心しているみたいだな。

しかし、何故レオンはあんなに本気で？……まさかと思うが、私が言ったことが原因か？もし、そうだったら……う、嬉しいな／／／

レオン、勝て！私に輝くお前を見せてくれ！

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

ふぅ……かなり本気の千磐破雷（チハヤブルイカヅチ）を使ったけど……クラトスはミンチになっていないよな（汗）

その場から後退し、クラトスの様子を窺ってみるかな。俺はそう思い、その場から下がる。

すると、

「くっ……！やってくれたな」

手傷を負ったクラトスが姿を現す。すげえな、千磐破雷（チハヤブルイカヅチ）を受けてあの程度の傷で済んでいるのかよ。

俺は汗をかく。それはもう、壮大に。

俺は再び、雷化する。

「ヒールストリーム」

クラトスは傷を癒すため、治癒術を使う。やっぱり、治癒術が使える者と使えない者では違いが出てくるな。

「驚きの連続だな……ここまで強いとは」

「まだまだだぜ？俺の攻撃は……ここからさ！」

シュン！

俺は雷速瞬動でクラトスに近づき、

「極大雷鳴剣！！！」

「ッ！？風雷神剣！」

バチィィィィン！！！

雷と雷がぶつかり合う。が、俺の方が雷の威力は強い。そのまま、押し返すぜ！」

「しゃおらあああああ！！」

ザシュ！

クラトスの突きを吹き飛ばし、そのまま斬りかかる。

ガシッ！

俺は剣を持っていない方の手でクラトスの腕を掴む。

「なにっ！？」

「この距離なら……逃げられねえぜ？零距離……千雷招来だあああ！！」

バチィィィィィィィィン！！！！！

俺の全身に纏っている雷を全力で放出する。

無論、俺の近く……零距離にいるクラトスにはその放出された雷は１００％当たる。

「うぐあああああああああああああ！！！！」

悲鳴を上げながら逃げようとするクラトス。しかし、それは問屋がおろさねえ！俺が離すと思っているのか？

俺は右手に持つ剣を手放し、右手に放出する雷を一カ所に集める。

「悪いが……俺の彼女との約束でな。やられるわけにも傷つくわけにもいかねえんだわ。【ヴォルト！行くぜ！】」

【お任せを我が主】

俺はヴォルトと精霊融合する。

髪の色が金髪から紫色になる。

「これで終わりだ」

【覚悟しろ！】

シュウウウウウウウ！！！ビリリリリリリリ！！！

右手に雷が完全に溜まる。

【ブッ飛べ！】

「雷華崩神拳！！！」

ドン！！！

「がっ、う、うぐあああああああ！！！！」

シュゥ～～～～～ン、ドシャアアアアアン！

クラトスはまたも零距離からの攻撃……雷華崩神拳を喰らって、壁に激突する。

パラ……パラ……

壁にめり込んでいるクラトス。手にしていた剣を手放す。

カラン

審判は近づき、意識の有無を確認する。確認すると首を振る。

そして、

≪き、決まったあああああああああ！！！壮絶な戦いを制して、見たことのない技等を見せ、圧倒的な強さを見せつけ、第三回戦第一試合を見事突破したのは……チームエクシリアのレオン・ストライフだあああああああああああ！≫

わあああああああ！！！！！

うおおおおおお！！！！！

歓声を聞きながら、俺は控室へと向かったのであった。

ミラが待っているからな。早く無事な姿をしっかり見せてやりたいぜ。

第７４話　レオンＶＳクラトス！　怒涛の雷！（後書き）

はい、ここまでですね。
いや～クラトスに圧倒的な強さで倒すレオン。
ミラの試合前の言葉が聞いたんですねｗ
タイトルのように怒涛の雷の攻撃。そして、イフリートに続いてヴォルトとの精霊融合。

ヴォルトとの融合の場合は、雷の技を倍加し、素早さを極限にまで上昇させる。

次回は、再び観戦です。お楽しみに！

第７５話　バルバドスＶＳクレス！　英雄殺しの恐ろしさ

～レオンＳＩＤＥ～

ガチャ

控室に戻るとミラが笑顔で出迎えてくれた。うむ、いい気分だな♪

「レオン……その、すごく……かっこよかったぞ／／／」

「お、おう……ありがとうよ／／／」

面と向かってそう言われると、照れるな／／／

『ニヤニヤ』

【ニヤニヤ】

俺は視線を感じ、その視線のする方を見るとジュード達にイフリート達がニヤついていた。

ミラもそれに気づいたのか、ボンッ！という音と共に顔を真っ赤に染める。

「あはは……さて、次の相手は誰になる……か！？」

俺はモニターを見て驚き、声を上げてしまった。皆……顔を真っ赤にしていたミラも驚いている俺を見ている。

俺はそんな視線を気にせず、モニター内に映っている人物を見て驚いた。

何故なら……その人物とは……

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、第三回戦第二試合を飾るのは……チームファンタジアからはクレス・アルベイン！それに対するはチームボスからバルバトス・ゲーティア！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、第三回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

試合が開始したと共に、バルバドスが、

「ぶぅるうあああああああああああ！！！」

ビリビリビリ！！！

咆哮を上げる。その咆哮にクレスも観客も、そして、控室にいるレオン達に他の参加者達は驚き、耳を抑える。

「ククク……クレス・アルベイン……貴様からは強者の匂いに……英雄の匂いがするな……」

ギロリッ！

ゾクッ！

「……っ！」

クレスはバルバドスに睨まれ、背筋に寒気が走るのを感じた。

そして、思った。この男、何者だ!?と。

「クハハハハ……この俺を楽しませろうぅ!!!そして、俺の渇きを癒せッ！」

そういい、クレス目掛けて突進してくるバルバドス。

「くっ!そんな一直線な突進なんて……」

そういい、突進してくるバルバドスを避け、?背後〃に立つ。

それが、悪夢の始まりだった。

「俺の背後に…立つんじゃねぇ!!」

「んな!?ぐあああああ！」

バルバドスの背後に立ったクレスは突如、後ろを向いたバルバドスの斧で上空にぶっ飛ばされる。

そのまま、上空から落ちてくるクレスに、

「ふんぬぅぅぅ！！」

ドスン！

「がっはぁ！」

腹に思いっきりボディーブローを食らわす。

ドサッ！

「う、ごほ、ごほっ！」

腹を抑えるクレスを見下ろすバルバドス。

「弱いな……もういい、今死ね！！すぐ死ね！！骨まで砕けろぉ！！」

三連殺……バルバドスの「理不尽」の連携技。轟炎斬・斬空断・裂砕断の三連撃をクレスに食らわす。

「ぐあああああああああ！！」

「これぞ我が奥義・三連殺」

たたきつかれるクレスは地面に倒れる。だが、まだ戦おうとして立とうとする。

「止めだ……貴様では俺の渇きを潤すことはできなかったな」

シュウウウウウ～～～～ン

「皆殺しだッ！！ジェノサイドブレイバー！！」

溜めていた闘気を斧から巨大な波動として放つ。

無論、ダメージで動けないクレスは……その攻撃をダイレクトに食らう。

「うわあああああああああああああ！！！！！」

波動と共に壁際まで吹き飛ばされるクレス。

そして、

ドカアァァァァ～～～～～ン！！！！

「これはおまけだ……食らっておけぇいぃぃ！！ワールドデストロイヤー！！！！」

壁にめり込んでいるクレスは闇のオーラで受け、そのまま、地面に倒れる。見て分かるほど重傷だ。

審判も慌てて、駆けより意識を確認し、首を振るとどこかに連絡している。

≪き、決まったあああああ！バルバドス選手の圧倒的強さの前

にクレス選手、傷を負わすことなく、破れてしまった！！！勝者、チームボスのバルバドス選手！！というか、救護班！タンカーを早く！！クレス選手がマズことになるぞ！！！≫

司会者がそういっていると、救護班の格好をした人たちがクレスをタンカーに乗せ、運んで行った。

「ふん、雑魚が」

バルバドスはそう言い、その場から離れていった。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～レオンＳＩＤＥ～

「……行ってくる」

俺は静かに控室を出ようとするが、

「ま、待てっ！」

ガシッ

ミラが俺の腕を掴む。

「レ、レオン！行くな！お前まであのクレスというやつのようになるのだぞ！？」

「……ミラ」

俺は静かにミラの手に触れ、腕を離すようにする。

「確かにバルバドスは強いな。だが……」

バチィ！

「っ！？」

俺は若干雷化している。先ほどの試合を見てから俺の中で怒りがわき出て来ている。

「何もあそこまでする必要はないのに奴はクレスをあそこまで重傷にさせた……参加者として、奴を許すことはできねえ」

俺はミラを見る。

「ミラ。お前が俺のことを心配してくれているのは分かる。だが、あいつのような危険人物をこのまま野放しにしておくわけにはいかない。俺が棄権したら俺の次の人が奴の餌食になる。なにより……」

ガチャ

「……戦った相手に雑魚とかほざいている奴を……俺は許せねえ」

ガチャン

俺はそう言い、ドアを閉める。

「……」

俺は入口へと向かった。静かな怒りと闘志を纏い、そして……。

バルバドスをぶっ殺すことを心に決めて……。

第７５話　バルバドスＶＳクレス！　英雄殺しの恐ろしさ（後書き）

クレスが可哀想ですｗｗｗ
だが、レオンの心に火をつけた。
戦った相手に雑魚というバルバドスに。
レオンの怒りを買ったバルバドスの運命はいかに！
次回もお楽しみに！

第７６話　レオンＶＳバルバドス！　物理攻撃？無駄無駄無駄無駄ッ！！（前書き）

レオンの不完全だったあの技が……ついに。

第７６話　レオンＶＳバルバドス！　物理攻撃？無駄無駄無駄無駄ッ！！

～レオンＳＩＤＥ～

「……」

ああ、早く呼ばれないかな……あいつをぶっ殺してえからな。

俺の今の状態は身体は落ち着き、心は燃えている状態だ。何故かって？バルバドスはクレスを雑魚って言った……俺はそれが許せねえ。戦った相手に敬意も持たない奴を俺は許せねえ！

≪皆さま、大変長くお待たせしました！これより、シングルトーナメント、準決勝第一試合を始めま～～～す！！≫

わあああああああああ！！！！

うおおおおおおおおお！！！！

今まで以上の歓声が舞台に響き渡る。

≪準決勝第一試合を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

「……」

今度は金と銀のスモッグかよ。ハァ……。

≪赤コーナー！チームボスから圧倒的なパワーでクレス選手を重症に追い込んだバルバトス・ゲーティア！！！≫

「……ぶるうぅあぁ」

バルバドスは狂気の表情をして舞台に出てくる。。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン・ストライフ！≫

「……」

俺も名前を呼ばれて、舞台の中央に立つ。

「貴様からはぁ～とてつもないほどの英雄の気質を感じるぅ～故に貴様を……ブッコローす！！！」

バルバドスは斧を出しながらいう。

「それはこっちのセリフだ。クレスを雑魚と言った貴様を俺は……許せねえ……許さねえぞ！！」

今回は武器を持たず、最初から素手で戦う。

バチイィ！

無論、雷化して。クラトスとの戦いで気付いたのだが、今の俺は――――だ。バルバドスにとって愛称最悪な相手だ。

≪さあ、長くも短くも感じたシングルトーナメントも準決勝だ！両者、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、準

決勝第一試合……レディー……ファイト≫

「！」

「ぶるうぁあああああああああ！！！」

バルバドスが一瞬で俺の前に現れた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：Ｆｉｎｉｓｈ　ｔｈｅ　Ｐｒｏｍｉｓｅ　Ｔｈｅｍｅ】

ザシュ！

観客たちの歓声が一気に収まる。そう、レオンがバルバドスに斬られた。ミラ達もそんな光景を見て嘘だと……そう思っていた。

バルバドスは笑っていた。しかし、その笑っている表情はすぐに固まった。

なぜなら……

バチィィィィ！

斬ったと思っていたレオンの姿が雷となって消えたのだ。

「ど、どうなっているぅぅ～～！？」

バルバドスも初めて目にする光景に戸惑っているようだ。

そんなバルバドスの背後に、

「教えてやるよ」

レオンがいた。

「俺の背後に…立つんじゃねぇ！！」

条件反射なのかバルバドスは背後にいるレオンに向かって斧で上空に吹き飛ばそうとするが、

バチィィィ

「なん……だと……」

斧はレオンを？すり抜けた〃のだ。この光景にもミラ達も驚く。今までレオンにはこんなことはできなかったはずだと。

「無駄だ。俺はクラトスとの試合の時、完全雷化をしたおかげで…？不完全〃だった雷化を完成させることができた」

レオンは静かに語る。

「ヴォルトと契約したおかげで雷のマナを完全に制御できるようになったおかげで、不完全であった雷化を完成させることができ、それを証明することもクラトスとの試合で確認した」

レオンは雷化している手でバルバドスの斧を掴む。

「今の俺には物理系の攻撃は効かない。お前の攻撃の大半は……物理系の攻撃。故に……」

レオンは斧を掴んだまま……斧をもったバルバドスを持ち上げる。

「お前の攻撃は……俺には届かない」

ブンッ！！！

ドシャーーーン！！

「ぐはっ！」

持ち上げたバルバドスをそのまま地面に叩きつけた。

「き、きぃぃぃぃさぁぁぁぁまぁぁぁぁ！！！！！（怒）」

怒りの表情でレオンを見るバルバドス。すると、足元に術式が展開される。

「物理系の攻撃が効かんのならぁ～灼熱のバーンストライク！！！」

３つの火炎弾がレオンを襲うが、雷化しているレオンのスピードには追いつけない。

「ぬぅ～～！！破滅のグランヴァニッシュ！！」

今度は地割れ。が、それもレオンは避ける。

「屑がぁ！微塵に砕けろ！貴様の死に場所は…ここだぁ！！！」

バルバドスは次々と術をレオンに放つ。シャドウエッジ・ブラッディクロス・クレイジーコメットと。

しかし、レオンにはあたらない。

「ぜぇぜぇぜぇ……」

バルバドスも連続で術を使うと疲れている様子。

「……」

そんなバルバドスを見てレオンは、

「巨神槍『巨神ころし（ティタノクトノン）』」

シュドーーーン！！バチィ！ビリリリリ！！！

「ごふっ！？」

疲労しているバルバドスの背後から腕を背中に突きさし、技を放つ。

放たれた巨大な槍はバルバドスを壁に突き刺させる。

「おぉぉぉぉのぉぉぉぉぉれぇぇぇぇぇぇ！！！」

後ろ向きでレオンに殺気を送るバルバドス。

そのレオンは、

「うぜえよ。千の雷」

バチィィィィ！！！

「ぶぅるあああああああああああ？！？！？！？！？」

背中から突き刺さっていた槍から強力な雷が解放され、バルバドスの体内をも雷が放出される。

「この一撃で終わりにしてやる。行くぜヴォルト」

【はっ！仰せのままに！】

レオンは跳躍して舞台の遥か上空まで跳ぶ。

バチィィィィ！ビリィ！ビリリリリ！！！

両手に雷のマナを集め始めるレオン。

巨大な球体状に固まる雷のマナ。レオンはそれを一つにする。

合わさった球体は形状を槍のようなものに変わっていく。

その槍は先ほどの槍の数倍にもなっていく。

「クレスを侮辱した罪を数えろ！これで……」

【終わりだ！】

「【轟き渡る雷の神槍（グングナール）】！！！！」

バシュン！

放たれた巨大な雷の槍はバルバドス目掛けていく。

そして、

ガガア――――――ン！！！！

巨大な雷の槍は大爆発を起こし、バルバドスを巻き込み、雷は空へも届いていった。

シュタ！

雷化状態のまま、地上に戻るレオンの視線の先にはバルバドスのいた場所を見ていた。

そのバルバドスは……

「……」

ピク、ピクピク！！！バチ、バチチ！

黒焦げで身体が痙攣し、身体中に雷が走っている。

どう見ても動ける状態ではなかった。

審判もゴム手袋をしてバルバドスの意識を有無を確認し、首を振る。

そして、

≪き、決まったあああああああああ！！！準決勝第一試合を見事突破したのは……チームエクシリアのレオン・ストライフだあああああああああああ！≫

わあああああああ！！！！！

うおおおおおお！！！！！

歓声を聞きながら、レオンは控室へと向かったのであった。

その途中、観客席にいるチームファンタジアメンバー（クレスを含む）が手を振っていた。

レオンはそれに気づき、手を振りかえし、控室へと向かったのであった。

第７６話　レオンＶＳバルバドス！　物理攻撃？無駄無駄無駄無駄ッ！！（後書き）

はい、完全にネギま！の技のオンパレードでしたｗｗｗ
でも、後悔はしていない！だって、書いていておもしろかったから！
次回もお楽しみに！

第77話　リッドVSジェイド！

～レオンSIDE～

控室に戻ってきた俺を出迎えたのはミラ達の笑顔だった。俺はそれが嬉しく思い、笑顔で無事だと言う。

「さて、次の準決勝の勝者が俺の相手か」

「うむ。ここまで勝ち続けてきたからにはどちらがレオンの相手でも不足はないな」

ミラが俺の隣でそう語る。確かに……。ここまで戦って来て思ったのだが、歴代シリーズのキャラ達のレベルがかなり高い。クラトスやバルバドスを抜いて、ユーリとリオンはかなりの強さだった。つまり、次の俺の相手もかなりの強さだともいえる。気を引き締めなければな。

俺はモニターに注目する。

～レオンSIDE　OUT～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、準決勝第二試合を飾るのは……チームエターニアからはリッド・ハーシェル！それに対するはチームアビスからジェイド・カーティス！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、準決勝戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

「んじゃ、めんどいけど……勝たせてもらうぜおっさん」

「フフフ、私をおっさん、ですか。ええ、自分でもおっさんと言う年齢だというのは自覚していますが……面と向かってそう言われたのは初めてかもしれませんねぇ」

リッドは剣を構え、ジェイドは槍を構える。

「行くぜ！」

駆け寄るリッド。

「ええ、行きますよ」

そういい、ジェイドは槍を?投げた〃

「はあっ?!うわ!?」

いきなりの武器投げに驚くリッド。慌てて槍を避けるが、

「フフ、その避け方はいけませんねえ。終わりの安らぎを与えよ、フレイムバースト!」

炎の爆発がリッドを襲う。

「うおっと!へっへ~ん!そんな術、当たんねえよ!伊達に、キールに毎日のように術の的にされてねえんだ!」

リッドは笑いながらジェイドにいう。

～それを聞いていたキールはというと……～

「あんのバカ……大会が割ったらハチの巣にするぞ！！」

黒いオーラを纏っていた。

それを仲間のファらたちは見て、距離をとっていたりした。

～戻って第三者ＳＩＤＥ～

「おやおや？ではこれでどうですか？無数の流星よ！彼の地より来たれ！　メテオスォーム！！」

「んなっ！？そんな大技を使うか普通！？」

「ええ。だってあなたが当たらないと申していたので」

「にしても、限度があるだろうが！！うわっ！」

上空から隕石がリッド目掛けて降ってくる。

「まだまだ行きますよ？この重力の中でもだえ苦しむがいい、グラビティ！」

隕石を避けるリッド目掛けて広範囲に半球状の過重力空間を発生させる。

「しまった！」

動きを封じられたリッド。まだ、先ほど放ったメテオスォームが降ってくる。

そして、

ドカアアアン！！！

「ぐあああああああ！」

残っていたメテオスォームが直撃した。

～それを見ていたレオン達はと言うと……～

「あーあれはもう駄目だな。レオンの次の相手はあのジェイドってやつに決まりだな」

アルヴィンは完全にリッドがやられたと思い、そう言う。それに賛同するレオンを抜いたメンバー。レオンだけはじっとモニターを見ている。

「……まだだ」

「レオン？」

ミラは呟いたレオンを見る。

「まだ……リッドの奴は負けていない」

「何だと？」

「んなバカ……な？」

アルヴィンはレオンの行ったことを信じられず、モニターに視線を戻すと驚き、固まる。

アルヴィンに続いて、ジュード達も目を向けると……そこには……

あまり傷のないリッドを立っていた。

～戻って第三者ＳＩＤＥ～

リッドの無事を見たジェイドも少なからず驚いていた。

「驚きました。メテオスォームを喰らったはずではないのですか？」

ジェイドの問いにリッドは言う。

「ああ。確かに少なからず、俺はあんたのメテオスォームは食らったぜ？でもな……」

リッドは剣で地面を指す。

「あんたが俺に食らわしたグラビティの時、地面に剣を突き刺して、力の限り地面を抉ってその時に抉ったので壁を作ったんだよ。まあ、時間も大きさも足んなくて少し食らったがな」

リッドは得意げにジェイドにいう。

「……フゥー。やれやれ、若いというのはいいものですね。咄嗟にそんなことを思いつくとは……」

「へへ！あんた、強いな。けど……俺の方が強いぜ？」

リッドはそう言うと腰を低くし、そして、

パッ！

今までにないスピードでジェイドに迫る。

「（早い！？）くっ！雷神旋風槍！！」

近づくリッドを見て、ジェイドは槍を出し、槍から幾重もの雷撃を落として攻撃する。しかし、雷のわずかな隙間をリッドは進む。

「雷神剣！」

バチィィィン！

「ぐあ！」

槍で防ぐが、金属でできた槍は雷が通って、ジェイドに攻撃する。

「秋沙雨！まだまだ！猛虎連撃破！」

連続突きのあとに４連続で虎牙破斬をくりだす。

「ごほっ！？がはっ！？」

連続で技を食らい、膝をつくジェイド。

「鳳凰天駆！」

鳳凰をかたどった炎を纏いジェイドへ向かって突進する。

「ぐあああ！！」

鳳凰天駆で吹き飛ぶジェイド。

そして、

「緋凰！絶炎衝！」

鳳凰天駆からジェイド目掛けて駆け抜けて火柱を上げる。

「ぐあああああああ！……お、みご……と」

ドサッ！

炎に焼かれたジェイドは倒れた。

審判はジェイドに近づき、意識の有無を確認し、首を振る。

≪き、決まったあああああ！リッド選手、前半負け書けるかと思いきや、最後は見事ジェイド選手を打ち破り、決勝戦への切符を手に入れたぞぉ！！！勝者はチームエターニアのリッド選手！！これにて、決勝以外のすべてのプログラムを終え、後は決勝戦だけだ！！！３０分間のインターバルに入った後、レオン選手ＶＳリッド選手による決勝戦を行います！≫

シングルトーナメント決勝戦

チームエクシリアのレオンＶＳチームエターニアのリッド……この２人が戦うことになるのであった。

第77話　リッドVSジェイド！（後書き）

はい、ようやく決勝戦まで来れました。
このシングル決勝戦が終わって、一話だけ、休憩した後、タッグ戦を行います！
お楽しみに～！

第７８話　レオンＶＳリッド！　シングル決勝戦！

～レオンＳＩＤＥ～

≪皆さま！大変長くお待たせしました！これより、シングルトーナメント、決勝戦を開始したいと思いまーす！！≫

わあああああああああ！！！！

うおおおおおおおおお！！！！

フォオオオオオオオオ！！！！

決勝戦ということもあって、観客の数が増えている気がするな。まあ、そこはどうでもいいんだが……

「……ニィ！」

反対側にいるリッドは俺を見ると笑う。どうやら、反対側の入り口から俺が見えるらしい。
なので俺もリッドに、

「……ニィ！」

笑い返す。それに気づくリッドは驚いた表情をするが、すぐに元に戻る。

≪決勝戦まで勝ち続け、見事をここまでたどり着いた二人の選手をご紹介しよう！≫

プシュウゥゥゥ――――――！

スモッグ……白か。

≪赤コーナー！チームエターニアからリッド・ハーシェル選手！≫

司会者に紹介されながら出てくるリッド。

≪多彩な剣術を使い、ここまで強敵である参加者達を倒し、ここまできました！彼は決勝戦でどんな戦いを見せてくれるのか、楽しみです！≫

「まあ、期待にはこたえるさ」

≪対する青コーナーからはチームエクシリアからレオン・ストライフ選手！≫

名を呼ばれ、俺も出る。

≪数々の剣術・精霊術などを見せてくれたレオン選手！決勝戦ではどのような技を見せてくれるのかが、楽しみであります！≫

「ふふ、まあ、期待しててくれ」

俺とリッドは向かいあう。

「こうしてみると、お前、強いな」

「そっちこそ、自然な姿勢でいるが、いざという時に動けるように手が剣の近くにあるな」

「お前もな。いつでも、拳で相手を殴ることのできるようにしているな」

「はっ！違いねえな」

俺とリッドはこれから戦うというのに他愛のない話をしている。

≪では、両者が位置に着いたので……シングルトーナメント、決勝戦！レオン選手ＶＳリッド選手！己の全力を見せてくれ！では、レディー……ファイト！！！！≫

「！」

「！」

ガキィィィン！

俺の双剣とリッドの剣がぶつかり合う。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：Ｔｈｅ　ｗｉｌｄｅｒｎｅｓｓ　ｏｆ　ｓａｄｎｅｓｓ】

「斬光時雨！」

「秋沙雨！」

レオンとリッドの２人は互いに連続の突きで突きあう。

「雷神剣！」

「瞬迅剣！」

技と技がぶつかり合い、２人は一旦距離を置く。

「フリーズランサー！！」

距離を置いたことでレオンは遠距離からの攻撃として、術を放つ。

氷の槍がリッドを襲う。

「断空剣！」

襲ってくる氷の槍を回転斬りで上昇しながら竜巻を起こして吹き飛ばす。

「続けて鳳凰天駆！」

上昇しながらリッドはそのまま、鳳凰の形をした炎を纏いながらレオンに迫る。

「獅吼爆雷陣！！」

レオンは自分に迫るリッドに獅子の闘気を纏った形に雷を付加した技で迎え撃つ。

バチイィィィン！！！ドカアァァァァン！！！

炎と雷がぶつかり合い、爆発を起こす。

シュタ！

地面に着地するリッドにレオンが今度は迫る。

「空破絶風撃！」

バシュン！バシュン！

レオンは突風を纏った神速の2連撃をくりだす。

「ぐうぅぅぅ！」

それを耐えるリッド。

「ハッ！まだ行くぜ！襲爪雷斬！」

ビリィィィ！バシャアァァァン！！！

「ぐあああああああ！」

雷をその身に浴びるリッドは悲鳴を上げながら膝をつく。

「これで終わりだ！万象を為しえる根源たる力…太古に刻まれしその記憶…我が呼び声に応え、今ここに蘇れ！エンシェント・カタストロフィ！！」

リッドの周りに４属性の球体が現れ、爆発を起こす……はずだった。

「おおおおおおおおおおおお！」

リッドが何か壁を作った。

「な……にっ？！」

レオンは技をキャンセルされたことに驚いている。そして、思い出した。

「（しまった！リッドの秘奥義の一つ、極光壁か！！体力が少ない時にのみ、発動できる！ってことは……まずい！？）」

レオンはその場から離れようとした。しかし、遅かった。

「これでッ！　終わりだーーッ！！」

怒涛の7連続斬りをレオンは食らってしまい、吹き飛んで壁に激突する。

「がっは！」

レオンは壁に激突する勢いが強く、口から血を吐く。

「レオン！！」

特別応援席にいるミラの声が舞台内に響く。

ドカアァァァン！

その声と共にレオンが上空から回転して飛び出してきた。

「痛いぜ。だが、戦っているって実感がするぜ」

「俺もだよ。ここまで楽しく戦えるのは久しぶりだ」

レオンとリッドは剣を握り直す。

「これで決める!!集え!風よ!雷よ!!我に仇なすものをすべてを斬り刻み、その身を滅ぼせ!」

「これで……終わりだ!!!」

レオンとリッド……2人の秘奥義がぶつかり合う。

「極光剣!!」

「双覇業天陣!!」

光と風・雷の業嵐がぶつかり合う。

だが、体力の限界だったリッドの技は破られ、業嵐の中から剣はレオンの元に戻り、レオンはそのまま、その嵐に向かって、

「斬！！！」

嵐を断つ二閃を放った。そして、嵐は断たれ、衝撃波を残しリッドを吹き飛ばした。

「ぐあああああああああああ！！！」

その衝撃波にリッドは飛ばされ、壁に激突する。

そのまま、ズルズルと壁から剥がれおち、倒れる。

審判が近づき、意識を有無を確認する。

「ぐっ！」

が、リッドは意識があるようだ。

「参ったぜ……身体が動かねえ。俺の負け……だな」

リッドは自分の負けを認める。

≪リッド選手、自身の負けを認めた！と、言うことはあああ！！！シングルトーナメント、決勝戦！レオン選手ＶＳリッド選手、長き戦いを生死、シングルトーナメントの王者になったのは……チームエクシリアのレオン・ストライフ選手だあああああああああああ！！！！≫

レオンは静かに手を天に向ける。俺が勝者だ！といわんばかりに。

それを見た観客たちは

わあああああああああああ！！！！

うおおおおおおおおおお！！！！

フォオオオオオオオオオ！！！！

大きな歓声を上げ、その歓声はどこまでも響いていった。

第７８話　レオンＶＳリッド！　シングル決勝戦！（後書き）

はい！これで、シングルは終わりです！
さて、次回は一度、大会はお休みしてレオンたち、シングル参加者達は休息の一日です。
無論、レオンもです。
ですので、タッグ戦は次の次ですね。
次回もお楽しみに！

～今回登場した、オリジナル秘奥義～

【双覇業天陣】
・二刀流剣士専用秘奥義。　右に風　左に雷を集わせ　その二つを放ち、　放たれた二刀は宙を舞い、業嵐を巻き起こし、止めとして二刀は主の手元に戻り、その嵐を断つ二閃を放つ。　嵐は断たれたのち、衝撃波を残し相手を吹き飛ばす。

初、オリジナル秘奥義でした～

第７９話（前書き）

タイトルは思いつかなかった・・・・・・。
昨日は更新できず、申し訳ない。

第７９話

～第三者ＳＩＤＥ～

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

シングルトーナメント決勝戦の次の日、レオンの部屋にミラ達は来ていた。が、その部屋に寝ているはずのレオンはと言うと、ベッドの上で熟睡していた。

「起きないな……」

「うん、まあ、昨日の今日だし、こうなっちゃ仕方ないね」

寝ているレオンを見て、アルヴィンは呆れ、ジュードは熟睡してしまっているのは仕方ないといい、笑っている。

「……皆、レオンのことは私が見ていよう。皆は街にでも言っているといい」

「……そうね。なら、お願いしようかな」

そういい、レイアはジュードの手を取り、扉へ向かう。

「では、私たちも行くとしましょう。エリーゼさん、アルヴィンさんも私と一緒に観光しませんか？」

ローエンに言われ、エリーゼとティポは頷き、アルヴィンは言う。

「確かにな。これだけ、大きい街だし、一緒に観光でもするかな」

よっこらせっと言いながら立ちあがるアルヴィンは、そのまま扉に向かう。それに続いてローエンエリーゼ、ティポもレオンの部屋から出ていき、ミラだけとなった。

～第三者ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミラＳＩＤＥ～

皆が出ていくのを確認し、私は寝ているレオンを見る。昨日のレオ

ンの戦い……凄かったな。

戦っているレオンの姿を思い出すと頬が紅くなるのを感じた。

そのレオンは今、私の目の前で寝ている……。

レオン……。

私は寝ているレオンの布団の中に入り込む。
そんな時だ。

「う～～む……」

ガシッ！

「んなっ！」

寝がえりをするレオンが私に抱きついてきた。レ、レオン！？相変わらず、寝相が悪いな。

しかも、か、顔が……／／／

「レ、レオン／／／か、顔が胸間に／／／あん！ちょ、レオン！？す、吸うな！んあ！」

レ、レオンめ！寝ているのにどうして、こ、こんなに的確に私の胸間を吸う／／／

「う～目の前に～～メロンが～～ガブ」

「ひゃあぁぁぁん！レ、レオン！」

レオン……服をずらして、わ、私の胸の乳首を／／／、あ、ダメ！しゃ、しゃぶらないで！あ、ん……だ、だめだ……変になってしまう／／／

～ミラＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

そして、１時間後

～レオンＳＩＤＥ～

う……ふぁあ～～～よく寝た。まだ、眠いけど……ん？目の前の柔らかいものが……これは胸？

俺は顔を上にあげると、

「あ、やあ……んあ！」

ミラがトロンとした瞳でいた。えっ！？俺が寝ている間に何があったの！？

「おはようミラ」

とりあえず挨拶することにすると、

「あ、お、はようレオン／／／」

俺と瞳が会うと、顔を先ほどよりも真っ赤にして、視線を逸らす。

「あ～～、俺、寝ている間に何かしたか？夢でメロンを食べているのを見たんだが……」

夢で何故かメロンを食べているのを見て、不思議に思っているのをミラにいうと、

ボンッ！！

「！？？！！？！？！？！？？！！」

皿に顔を真っ赤に染め、何か驚きすぎているせいか何を言っているかが聞き取れなかった。

「な、なんて言ったんだ？」

俺が聞き直すと、モジモジしながらミラは答えた。

「レ、レオンが気持ちよさそうに寝ているから私も一緒にベッドで寝ようとしたら……レ、レオンが私に抱きついて、胸間に唇を押し付け、吸いつき／／／そ、それから……ふ、服をずらしてわ、私のち、乳首を／／／」

「……ね、寝ぼけていたとはいえ……すまん」

夢に出てきたメロンは、果実のメロンじゃなくてミラのメロンだったのか……。

「い、いや、いいんだ／／／そもそも、私がベッドに入り込んだのが原因だしな」

「そ、そうか／／／」

俺とミラは互いに顔を見合う。

そして、

「よし、もう一度、一緒に寝ようか。まだ、眠いし」

「そ、そうだな／／／だが、もう、こんなことはよしてくれよ？」

「安心しろって。ミラが最初から一緒に寝ていることがわかればそんなことはしないって」

俺がそういうとミラは安心したのか、そうか／／／と言って、俺に抱きついてきた。

バサッ！

掛け布団をかけ直し、ミラと一緒にベッドに入る。

「んじゃ、お休みミラ」

「あ、ああ……おやすみレオン／／／」

こうして、俺は再び、今度はミラと共に眠りについた。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

余談であるが、この後、街の観光から一足先に戻ってきたジュードとレイアがレオンの部屋に入ってみると、ミラがレオンと一緒に寝ているのを見て赤面したことをここに述べよう。

年齢的にまだ子供な2人にはある意味、刺激があったのであった。

第７９話（後書き）

ふう、書きおわった。
次回からタッグ戦です！
レオン＆ミラペアの戦いをお楽しみに！

第８０話　開幕！男女タッグトーナメント！　レオン＆ミラＶＳロイド＆コレット

お待たせしました！タッグトーナメントの開幕です！

それと戦闘ＢＧＭをテイルズ以外使います。

第８０話　開幕！男女タッグトーナメント！　レオン&ミラＶＳロイド&コレット

～レオンＳＩＤＥ～

休息を一日取った次の日、この日はタッグトーナメントが行われる。
シングルの時に使用していた控室に直行した俺たちは対戦相手を確かめた。
一回戦第一試合の相手は……チームシンフォニアのロイド&コレットだ。幼なじみ同士の組み合わせでもあるのでコンビネーションはかなりのものだと俺は思う。

俺はミラの手を引いてシングルの時と同じ入口に来ている。

「さて、ミラ。タッグでは互いのコンビネーションも必要だ。気を引き締めていこう」

「ああ！私たちのコンビネーションに見せてやろう」

腕をクロスして組む。

そうしていると司会者の声が聞こえてきた。

≪さあ！シングルに続いて今宵はタッグトーナメントだあああ！観客の皆！盛り上がっているか～～～い！≫

『いぇえええええええいい！！』

『わあああああああああ！！』

観客たちは一昨日よりも盛り上がっているようだな。

≪では、タッグトーナメント第一回戦第一試合だ！その一戦目を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

「うわ！」

シングルの時と同じようにスモッグが吹き出てきた。初めて見たミラは驚いて、声を上げ、俺を見ると顔を紅くする。

≪赤コーナー！チームシンフォニアからロイド&コレット！≫

「行くぜコレット！」

「う、うん！」

ロイドに手を引かれて舞台に出てくるコレット。

≪対する青コーナーからはチームエクシリアからレオン&ミラ！≫

「ミラ、行くぜ！」

「ああ！」

俺とミラは2人一緒に舞台に駆けていく。

俺たちは舞台の中央に立つ。

「お前、確かクラトスに勝っていたよな？」

「ああ。それがどうした？」

俺はロイドにクラトスと戦ったことを聞かれ、答えるとロイドはニッコリと笑みを浮かべる。

「いや～凄かったぜ！クラトスとタイマンで勝つなんてな！今回はクラトスの仇討ちだぜ！」

シャキン！

剣を構えるロイド。それに続いてコレットはチャクラムを構え、羽を出す。

「はっ！仇討ちだって？おもしれえ！かかってきな！」

「ああ！私たちも本気で戦う！」

俺とミラも剣を鞘から剣を抜いて構える。

≪それでは、タッグトーナメント、第一回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：ドラゴンフォース】

戦闘が始まると共にコレットは後ろに下がり、詠唱を始めた、

「聖なる翼よ、此処に集いて神の御心を示さん！エンジェル・フェザー！！」

光輝く翼から光輪を飛ばされてきた。

しかし、

「岩斬滅砕陣！」

レオンは剣を地面を叩きつけ、数多の岩片を飛ばし飛ばされてきた光輪を岩片で相殺した。その隙にミラが走ってコレットに近づいて、アサルトダンスの連続斬りで迫る。

「きゃあああ！」

チャクラムで防ぐコレットは尻もちをつく。

「コレット！お前え！魔神剣・双牙！！」

ロイドは衝撃波を連続でミラに向かって飛ばした。その衝撃波とミラの間に針のように薄い槍が降ってきて、衝撃波を消滅させた。

「なにっ！？」

ロイドはレオンの方を見ると手をかざしていた。

「ニードルスピア……てな！聖なる槍よ、敵を貫け！ホーリーランス！」

光でできた槍がロイドとコレットの周りに出現する。

「っ！？ロイド！」

「コレット！行くぜ！」

「「スターダストレイン！！」」

2人の周りに小さな星がいくつも現れ、ホーリーランスを破壊した。

「マジ！？」

その光景を目のあたりにしたレオンとミラは驚き、動きを止めてしまった。

「今だ！魔神連牙斬！！」

動きを止めている2人にロイドは攻撃を加える。

バシュンバシュンバシュン！！

３つの衝撃波をモロに食らうレオンとミラ。

「くっ！俺としたことが！あまりにも不自然な光景を見て、動きを止めてしまった！」

「いや！私もあり得ない光景に動きを止めてしまったぞ！？」

吹き飛ぶレオンとミラに追撃をかけるコレット。

「その御名の下、この穢れた魂に裁きの光を降らせたまえ。裁きの光を！ジャッジメント！」

コレットの術が成功し、上空から裁きの光が降ってくる。

「おいおい！ミラ！」

「ああ！こっちも反撃だ！」

俺は身体にヴォルトを瞬間召喚し、精霊術を放つ。

「すべてを滅する神の雷よ、」

「終焉（おわり）という名の安らぎを与えよ」

【これで終われ！】

【「「ヴォルトアロー！！」」】

雷のバインドでロイドとコレットを拘束し、上空からヴォルトが雷を降らす。

それと同時に俺たちには裁きの光が降り注ぐ。

「「ぐあああああああああ！！」」

「「あああああああああ！！！」」

ドカアァァァァァン！

爆発が起き、舞台を煙が舞う。

その隙を突き、レオンは、

「はあああああ！！！」

ロイド目掛けえ走っていた。

「なにっ！？コレットのジャッジメントを喰らってダメージがないのか！？」

ロイドは先ほどのレオンとミラ、そしてヴォルトのヴォルトアローのダメージで動けなかった。

「はあああああ！！」

レオンに続いて、ミラも煙の中から脱出し、ロイドに迫る。

「俺たちの速さに」

「ついてこれるか？」

「「雷牙瞬連斬！！」」

2人は瞬時にロイドの背後に回り込み、斬り上げた後、空中で雷を纏った斬撃を連続でくらわせる。

ザシュシュシュ！！！

「ぐあああああああ！！！」

身体中を斬られたロイドはそのまま、重力に逆らえず、空中から地面に落ちていった。

「ロ、ロイドオォォォォォ！！！」

倒れるロイドに近づくコレット。

だが、神は彼女とロイドに慈悲などを与えなかった。

「これで終わりだ」

「ああ。終焉だ」

レオンとミラは2人に近づき、技を解き放つ。

「「聖なる鎖に抗ってみせろ！」」

【【【これはすべてを浄化する光の洗礼！受けよ！】】】

「「シャイニングバインド！！」」

背中合わせの二人を中心に三つの光の術式が描かれた巨大な魔方陣を展開し、二人の背中から光の翼が現れ、空を飛ぶと同時に、魔方陣からレム・ルナ・アスカの光の力が噴出し、倒れたロイドと近くにいたコレットに襲いかかる。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

噴出された光の力に吹き飛ばされるロイドとコレット。

バタン！

２人は一緒に壁に激突し、動かなくなった。

審判が近づき、意識の有無を確認し、首を振る。

≪き、決まったあああああああああああ！男女タッグトーナメント第一回戦第一試合、レオン＆ミラＶＳロイド＆コレット……勝者はレオン＆ミラだあああああ！！これは良い戦いでした！これからもこんな熱くなり、面白みのある戦いを期待するぜ！！！≫

『わあああああああああ！！！』

『うおおおおおおおお！！！』

観客たちの声が舞台に響くのを感じながらレオンとミラは舞台を後にしたのであった。

第８０話　開幕！男女タッグトーナメント！　レオン＆ミラＶＳロイド＆コレット

ふう、完成した。
次回はシングルの時と同じで次に対戦するチームのタッグの試合を観戦します。
次回もお楽しみに！

第８１話　リッド＆ファラＶＳヴェイグ＆アニー

～レオンＳＩＤＥ～

ロイドとコレットとの戦いを終えた俺とミラは控室にいる。控室に来ると俺をジュードが、ミラをエリーゼが治療している。治療を受けながら俺とミラは次の対戦相手になるであろうリッド＆ファラとヴェイグ＆アニーの試合を見ているところだ。

モニターにはいつものように丁度、二チームが舞台の中央に立っているところだ。

それにしても、この勝負はヴェイグ達には不利かもな。前衛バリバリのリッドとファラに対して、前衛後衛の別れているヴェイグとアニー。この勝負、おそらく試合開始すぐにリッドとファラはアニーを潰しに行くな。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、タッグトーナメント第一回戦第二試合を飾るのは……チームエターニアからはリッド・ハーシェルとファラ・エルステッド！それに対するはチームリバースからヴェイグ・リュングベルとアニー・バース！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、第一回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

「行くぞ！見ててくれ、クレアアアアアアアアアアアア！！！お前にこの勝利を捧げる！！」

試合開始の合図と共にヴェイグはリッドとファラに突撃をする。

「幻龍斬！」

両手で持った大剣でリッドの背後に回り込もうとしたが、

「あなた……邪魔よ！はあ！双撞掌底破！」

「クレアアアアアアアアア！！！」

リッドを斬ろうとしたヴェイグの横からファラが両掌底から高まった気を叩き込んで、ヴェイグを吹き飛ばした。

「これはチャンスだな！」

それを見ていたリッドはアニー目掛けて駆ける。

「も、もう！ヴェイグさんのバカ！暴走しないでくださいよ！！」

迫るリッドを見て焦るアニー。

「はぁぁぁっ・・・・・・お願い！レデュース・レーゲン！シェイブ・レーゲン！」

アニーは陣術を使い、リッドとファラの攻撃力と防御力を下げるが、

「ん？雨か？まあ、いいや。こんなの関係ないしな！！俺はレオンと再戦したいからな……絶対に勝たせてもらうぜ！鳳凰天駆！」

鳳凰をかたどった炎を纏いアニーへ向かって突進する。

「きゃあああああ！」

突進されて、知り持ちをつくアニー。その隙を見逃さないのがリッ

ド。

「緋凰！絶炎衝！」

リッドがアニーに駆け抜けると火柱を上がり、アニーは炎に包まれた。

「きゃあああああああ！！ヴェ、イグさん、のバ、カ」

バタン！

「……何か呆気なさすぎの気がするな」

「仕方ないわよ。相方の男の人が一人で突っ込んできちゃったんだから」

リッドはファラに言われて、ヴェイグの吹っ飛んで行った方を見る。

「確かにな。あの場合は、あいつが彼女の前に立って補助を受けながら戦うのが普通だと思ったんだがな……予想外にも突っ込んでくるんだから驚きもんだな」

呆れているリッドをファラは慰める。

そんな時だ。

ピキィィィィィン！

舞台一面が凍りついた。

「俺は……負けられない！クレアアアアアアアアアアア！！！！」

凍気を纏ったヴェイグが立っていた。

「絶氷の剣！その身に刻め！セルシウスキャリバー！！」

「させるか！風刃縛封」

氷の剣をもったヴェイグを風の刃で空中に放り投げる。

「わが刃にて…風塵と化せ！風塵封縛殺！！」

リッドの風刃縛封によって動きを封じこまれたヴェイグに強烈な真空の刃を放ってトドメをさした。

「クレアアア

余談であるが、ヴェイグは控室に戻ると仲間たちに責められ、クレアに説教されたのか、チームリバースの控室から「クレアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」という叫び声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

第８１話　リッド＆ファラＶＳヴェイグ＆アニー（後書き）

次回はレオン＆ミラＶＳリッド＆ファラです！
お楽しみに！

第８２話　レオン＆ミラＶＳリッド＆ファラ！　炎の祭り

～レオンＳＩＤＥ～

さて、本日２戦目か。相手はシングル決勝戦で戦ったリッドのいるチーム。楽しみだぜ！

「レオン。嬉しそうだな」

「まあな。なにせ、次の相手はシングル決勝戦で戦った相手だからな」

「そうか。フフフ、レオンが嬉しそうにしていると私まで嬉しくなってくるよ」

俺とミラは時間までたがいに笑い合っている。ホント、ミラが隣にいるだけで落ち着いてくるな。
改めて思うよ。俺はミラがいないともう生きていけないとな。

≪では、タッグトーナメント第二回戦第一試合だ！その一戦目を飾るのは……≫

プシュウゥゥ――――――！

「うわ！またこれか！いい加減にやめてほしいものだぞ！」

「ミラ。気にしたら負けだ。俺も2回目から馴れた」

「……これは馴れるなれないの問題ではない気がするのだがな」

ため息をつくミラ。まあ、誰だってこんなスモッグがいきなり出てくれば驚くよな。

一回戦の時と同じようにスモッグが出てくるのに驚き、怒るミラを落ち着かせる。
ミラは何とか落ち着きを取り戻したが、表情は若干怒っている状態だ。仕方ない。

「ミラ」

「何だ？レオン……ん！？ん…ちゅ…んあ…ん…ちゅ…」

とにかく、キスをして落ち着かせてみた。

「落ち着いたか？」

「あ、ああ／／／／／／が、頑張るぞおおおお！！！」

「お、おう」

キスをされてテンションが上がっているミラ。顔を真っ赤にしながらも勝つと言う闘気に包まれている。

≪赤コーナー！チームエターニアからリッド＆ファラ！≫

「行くぜファラ！！」

「うん！リッドのシングル戦での仇を取るんだ！」

リッドとファラも既に闘気を纏いながら出てくる。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン＆ミラ！！≫

「俺たちも行くぜミラ！」

「ああ！私たちのあ、愛の力を見せてやろう／／／！」

お、ミラが大胆にそんなことを言うとは……いいねえ（笑）

俺たちとリッド達が舞台中央に立つ。

≪それでは、タッグトーナメント、第二回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：形勢逆転】

司会者の合図と共に走り出すレオン、リッド、ファラ。ミラは後ろで詠唱を唱えている。

「天照らせ日輪、今こそ消滅の時！　レイジングサン！」

頭上に発生させた火球を巨大化させ、フィールド中心部に火球が落ちる。

炎の波動はフィールド全体に広がり、レオンに迫るリッドとファラを襲う。

「あちちちちっ！？」

「あ、あついわねぇ（汗）」

レイジングサンの炎の熱が強いせいか、2人は汗を流している。

「風牙絶咬！」

レオンは熱がる2人に瞬速の突きを繰り出す。

「っ！やべえ！ファラ！下がれ！」

リッドはファラの前に立ち、

ガキィィィン！

レオンの瞬速の突きを剣で受けとめる。

「……甘いなリッド。俺にはまだ、左手が残っているんだぜ？烈破掌！！」

「ぐあああ！」

レオンは開いていた左手で掌底を叩きこみ気を炸裂させ、リッドを吹き飛ばす。

「リッド！よくも！はあ！たぁ！連牙弾！飛燕連脚！散華猛襲脚！双童掌底波！！（怒）」

リッドを吹き飛ばしたせいかファラが怒涛の攻めに出る。

レオンはそれを避ける。

パアァン！

「うおぉ！？」

拳速が上がったことでレオンも避けるスピードを上げる。そこに、ミラが、

「レオンに何をするか！（怒）龍王随風、神魔を裁斬せよ！　サイクロン！」

ミラは怒りの表情を見せながらファラの足元に巨大な竜巻を作り出して大きく打ち上げる。

「きゃあああああああ！！！」

空中に打ち上げられたファラはそのまま地面に向かって落ちる。地面に落ちかけると、

「うおぉぉぉぉぉぉ！！！」

ガシッ！

吹き飛んで行ったリッドがキャッチする。

その隙にレオンはミラのいる地点にまで下がり、ミラを見て頷く。

「真紅の焔よ」

「その檻にて、敵を焼き尽くせ」

「「イグニートプリズン！！」」

リッドとファラの四方から火柱を吹き上げ拘束し、足下から巨大な火柱を吹き上げ攻撃した。

「ぐあああああああ！！」

「きゃあああああああ！！」

炎に包まれるリッドとファラ。

「フハハハハ！続けていくぜ！吼えろ、古の焔！」

「不浄なる生命を、灰塵へと誘え！」

「「エンシェントノヴァ！！」」

拘束されているリッドとファラの真上を中心に周囲を焼き尽くす巨大な炎を落とす。

ドカアアアアン！

「ぐおおおおお！」

「うあああああ！」

炎の中で苦しむ2人。だが、レオンとミラは攻撃の手を休めない。

「イフリートの炎は」

「かなりきついぜ？」

【燃え尽きるがいい！】

【「「レイジングドライヴ！！」」】

リッドとファラを中心に地面に巨大な火の術式を展開し、その術式からすべてを焼き尽くすイフリートの炎が吹き上がる。

「「ぐあああああああああ！！」」

悲鳴を上げる2人。レオンとミラの怒涛の炎の攻撃になすすべなくやられてしまっている。

だが、

「うおおおおおおお！！！」

「はあああああああああ！！！」

炎を纏いながらリッドとファラはレオンとミラに突っ込む。特にレオンに。

「点穴縛態！」

ファラは炎の中で溜めていた気を一気にレオンに放つ。レオンはいきなりのことに動けず、喰らってしまう。

「がはっ！」

「はあああああ！！！」

そのまま、ファラは４連続で技をたたみかけ、そして、

「火龍炎舞！燃えろおおぉッ！！」

炎を纏い、サマーソルトしながら飛び込み蹴り、二連サマーソルトでレオンを吹き飛ばす。

「ぐあああああああああ！」

吹き飛んだ先にはリッドがいた。そのそばには剣を吹き飛ばされたミラが横たわっていた。

「ぐっ！レオン！逃げろ！」

傷を負った身体でレオンに呼び掛けるミラだが、レオンは動けなかった。ファラの秘奥義を喰らったのですぐには動けるはずがない。

「鳳凰天駆！」

上空から鳳凰のオーラを纏って突撃し、

「緋凰！絶炎衝！！！」

レオンのいるところを駆け抜けて火柱を上げる。

バアアアアン！

「ぐあああああああ！！」

そのまま、吹き飛ばされ、横たわるレオン。

「レ、レオン！」

ミラは剣を拾い、レオンに近づく。

「大丈夫か！？」

「……っぐぅ、あ、ああ」

レオンは剣を杖代わりに立ちあがる。

「……うおおおおおお！！！！」

雄たけびを上げるレオン。その雄たけびと共にレオンのマナが上昇していく。

「行くぞミラ！」

「ああ！」

今までにないマナを纏うレオンに戸惑うミラだったが、レオンが本気だと悟り、頷く。

「焼き尽くせ！地獄の業火！」

「それはすべてを灰燼と化す煉獄の炎！」

「「光跡炎翔翼！！」」

フィールドに残っていた炎系の技・精霊術のマナがレオンに背中に集い、レオンは思いっきりジャンプし、そのマナを一気に全力解放した。

「うおおおおおおおおおおお！！！！焼き尽くせえええええええ！！」

レオンの雄たけびと共にフィールドに灼熱の地獄の業火が……煉獄の炎がリッドとファラを襲う。

「ぐあああああああああ！！」

「きゃあああああああああ！！」

炎に包まれ、叫びながら若干溶けている壁に激突する2人。

そのまま、炎は勢いを失い、次第に消えていった。

審判は汗を拭きながら2人の意識の有無を確認する。首を振る審判に司会者が見ると、言う。

≪き、決まったあああああああああ！男女タッグトーナメント第二回戦第一試合、レオン&ミラVSリッド&ファラ……勝者はレオン&ミラだあああああ！！燃え上がる戦いをありがとう！！修理班！急いで舞台を修理するのです！！≫

舞台はレオンとミラが……レオンのが放った炎系秘奥義、光跡炎翔翼によって一部が溶けている。

次の試合に影響するので、急いで修理するようだ。

それを見ながらレオンとミラは控室へと戻っていった。

第８２話　レオン＆ミラＶＳリッド＆ファラ！　炎の祭り（後書き）

次回もお楽しみにしててください。

～今回出たオリジナル秘奥義、第二弾！～

・光跡炎翔翼
戦闘中に使った炎系精霊術やマナを背中に集め、それを空中で一気に解放する。
地獄の業火……煉獄の炎がフィールド全体を包み敵を灰塵と化す。

第８３話　スタン＆ルーティーＶＳカイル＆リアラ！　親子対決？（前書き）

今回、カイルが可哀想な目に会います。まあ、タイトルで気付く人もいるかも。
そして、短いです。

第８３話　スタン＆ルーティーＶＳカイル＆リアラ！　親子対決？

～レオンＳＩＤＥ～

熱い……今、俺の身体は猛烈に熱くなっている。炎系の精霊術連発に、炎系の秘奥義を使ったせいだな。

舞台も溶かしてしまったし、今も舞台はかなりの熱さのはずだ。まあ、俺が戦うわけじゃないからいいけどなｗ

ミラも熱いので手で煽いでいる。そうしている、ウンディーネが出て来て俺たちにいう。

【熱いのでしたら……これでいいでしょう】

ウンディーネが俺とミラに手をかざすと俺とミラに薄い水の膜が現れ、身体の熱を吸収し始めた。

「おお、助かったぞウンディーネ。危うく、服を脱ごうとも考え……て（汗。しまった！）」

「ミ～～ラ～～？今のはどういうことかな？かな？」

俺はミラに詰め寄る。ミラは下がる。俺、詰める。ミラ下がる。これを何度も繰り返す。次第にミラの背後には壁が。

ドンッ！

「し、しまった！」

「ミラ～、大会が終わったらお前のこと、一日中抱くからな？覚悟しとけよ」

「……／／／／／／」

？抱く〃と聞いたミラは顔を真っ赤に染める。その顔を真っ赤に染めたミラの手を引いて、俺たちは控室に戻ってきた。

「あ！お帰りレオン！ミラ！ってあれ？ミラ、顔が赤いけど大丈夫？」

レイアが俺たちに近づき、ミラの顔が赤いことに気づく。

「ああ、多分、最後に浸かった技の影響で体が温まってしまっているんだ。時間が立てば治るさ（嘘だけど）」

「あ、そうか！あんなにすごい炎だったもんね！そんな風に顔を赤くしてもおかしくないかな」

一人、納得するレイア。ジュードとエリーゼはいつものように俺たちの傷を治してくれている。

ふっと、モニターを見ると丁度舞台の修理が終わったらしい。よかったよかった。あのまま、壊れたままの舞台で戦うことになっていたらどうなるかなって思っていたところだし。安心したぜ。

にしても、この対戦カード……ある意味酷いよな。

俺は目の前……モニターに映る対戦カードを見て、そう思った。

何たって、その対戦カードが……

スタン＆ルーティーＶＳカイル＆リアラだったのだから。これ、カイルは自分の父親に攻撃できんのかね？ＴＯＭ２，３みたいに正史の世界から来たチームかもなデスティニー２は。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、タッグトーナメント第二回戦第二試合を飾るのは……チームデスティニーからはスタン・エルロンとルーティ・カトレット！それに対するはチームデスティニー２からカイル・デュナミスとリアラ！何でチーム名が似ているのかは気になり、スタン選手とカイル選手が似ていることは……まあ置いておきましょう！！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、第二回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

司会者が試合開始の合図をし、いざ、試合が始まり、スタン・ルーティー・リアラは武器を構えるが、

「どうしよう。父さんに武器を向けるなんて……でも、この世界と俺の知る父さんは違う……けどぉ！？ああ！俺はどうすればいいんだあああああああああ！！」

頭を抱えて、悩んでいた。そんなカイルを見て、リアラは、

「ちょ、ちょっと！カイル！今は武器を構えて……って来ちゃったわ！？」

リアラの視線の先には詠唱するルーティーとカイルに突っ込んでくるスタンの姿だった。

「飲み込め！　タイダルウェーブ！！」

ルーティーの術が発動し、激しい大津波がカイルとリアラを飲み込む。

「ぐあああああああ！」

「きゃあああああ！」

激しい大津波で2人は分断され、カイルの方にはスタンが、リアラの方にはルーティーが迫る。

「おいおい。戦いの最中に気を抜いちゃダメだろ？」

「……うぅ」

図星を突かれたカイルは黙る。

「まあ。俺もルーティーにこの大会に出るって言う物が目的だし…
…悪いな」

剣に炎を宿すスタン。

「これも勝負だからな！悪く思うなよ！うおおおおぉぉッ！　真の姿を現せ！業炎の剣！その身に焼き付けろ！奥義！業魔！灰燼剣！」

熱破旋風陣から2連突進斬り後、剣を叩きつけて猛烈な火柱でカイルを焼き尽くす。

「うあああああああああああああ！！（と、父さん！やっぱり、すごいや！）」

身体を炎で焼かれながらカイルは吹き飛び、倒れた。

「な、何か……呆気なかったな」

汗をかくスタンはルーティーが戦っている方を見た。

一方、スタンがカイルを倒している時、ルーティーはリアラに斬りかかりまくっていた。

「そらそらそらそらそら！！！」

バシュシュシュシュシュシュ！

「うわわわわわ！！」

前衛タイプでないリアラは完全に押されていた。

「えいっ！」

ポカン！

リアラは何の拍子もなく、杖を前に振り下ろすとルーティーの頭にぶつかった。

「いったあああああああいい！！あんた！よくもやったわね！？」

頭を押さえながら言うルーティー。その剣幕にリアラは飲み込まれ、後退する。

「本気にさせたわね！　氷霧に彷徨え！凍牙に果てよ！冷気に抱かれて刹那に沈め！インブレイスエンド！」

リアラはそれと共に氷の棺に閉じ込められ、氷の棺は砕け、リアラは倒れた。

「何も……できなか……った」

ガクンッ！

そのまま、意識を失った。審判は一応2人の意識の有無を確認し、首を振る。

≪え、ええ……何といいますか……スタン&ルーティー選手……勝

者はチームデスティニー！今度はちゃんとした戦いが見たいぞ！！≫

観客たちもあまり、歓声を上げていない。そこまで、盛り上がらない戦いだったのであった。

スタンも会場の空気に、苦笑いをしている。が、唯一、ルーティーだけは大はしゃぎであった

第８３話　スタン＆ルーティーＶＳカイル＆リアラ！　親子対決？（後書き）

次回はレオン＆ミラＶＳスタン＆ルーティーですお楽しみに！

第８４話　レオン＆ミラＶＳスタン＆ルーティ（前書き）

遅れました！
少し指を痛めていたため、あまり書く時間を作れませんでした！

第８４話　レオン&ミラＶＳスタン&ルーティ

～レオンＳＩＤＥ～

俺とミラは毎回の如く、舞台入口で名を呼ばれるのを待っている。

「次の相手の実力はよくわからないな」

「まあ、仕方ないさ。全然戦闘を見ることができなかったんだからな。けど、勝つのは俺たちだ」

俺が真顔でそういうとミラはふふっと笑う。

「確かにな。私たちに勝てる奴はいない。そう、思っていればいいのだしな」

「その通り」

そう、２人で話していると、

≪では、タッグトーナメント第三回戦第一試合だ！その一戦目を飾

るのは……≫

プシュウウウウ――――――！

「……はぁ。この演出、飽きてきたぞ」

「俺はこれをシングルの時に味わっているから完全に飽きて来ているぞ。でも、パーティー戦の時にもこれを見るんだぜ？」

そう、ミラにこの演出がパーティー戦にもするというとはぁ～とため息をつく。

≪赤コーナー！チームデスティニーからスタン＆ルーティ！≫

「行くわよスタン！後、これを合わせて3戦勝てば……ぐふふふ…」

「でも、次の相手はリオンに勝ったやつだぞ？」

ピキッ

「気、気にしないで行きましょう！」

「何だかな～」

スタンとルーティーが出てきた。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン＆ミラ！！≫

「行くぜミラ！」

「ああ！」

俺たちとスタン達が舞台中央に立つ。

そして、武器を構える。

≪それでは、タッグトーナメント、第三回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：死闘】

戦闘が始まったのと同時にレオンとミラは動く。

「なぞなぞだ。上は洪水、下は大火事、レオン！答えは？」

「答えはこれさ！！レイジングミスト！！」

スタンとルーティの間に発生する立ち上る高温の蒸気が２人を襲う。

「あちちちち！？」

「ちょ！？いきなりこんなの使うわけ！？」

2人は左右に分かれ、蒸気を避ける。

だが、これはレオンとミラの計算の内で合ったかのように次の術の準備に入っていた。

「「聖なる雫よ、降り注ぎ、我らに力を、ホーリーレイン！！」」

続いて使ったのはフィールド全域へと光の雨を降らす。

「うわわわ！？」

「ちょっと！さっきから好き放題……きゃあああ！」

スタンは剣で器用に光の雨を弾いているが、ルーティはそんな芸当ができるはずもなく、光の雨がルーティーを襲う。

「ルーティー！」

スタンは光の雨が直撃したルーティを心配し、近づこうとするも、

「そうは……」

「させんぞ！」

そんなスタンにレオンとミラが接近する。

「「砕け散れ！紫電滅天翔！！」」

レオンが紫の雷を纏った剣でスタンに連続突きをくり出し、斬り上げた時にサンダーブレードを手に持ったミラと一緒に敵を高く斬り上げた。

「ぐあああああああ！」

身体に雷が走り、声を上げるスタン。そこへ、

「本気にさせたわね！　全てを癒す導きを示さん…悠久の海に集え！ライフディスチャージ！」

水の球体がレオンとミラを襲う。が、それを察知したレオンは瞬時雷化し、その場から離れた。それと共に、スタンの身体の傷とルーティの傷が治る。

「ちっ！ルーティが合流する前にスタンを倒したかったんだがな」

「さっきはよくもバカスカ術を使ってくれたわね！？許さないわよ！！飲み込め！メイルシュトローム！」

「むっ！？」

レオンとミラの足元の地面から大渦巻きを発生した。しかし、雷化状態のレオンがいたので、すぐにその場から離れ、避ける。

「ちょっと！当たりなさいよ！！バカーーーーーー！」

シュタ！

術を避け、地面に立ったレオンはルーティにいう。

「当たれと言って当たるバカいないぞ」

「うん。確かにそうだな」

ステーン！

ルーティは隣に立っていたスタンが対戦相手の言葉に同意することに驚き、転ぶ。

ガシッ！

そして、立ち上がるや否やスタンの胸倉を掴む。

「あ・ん・た・はどっちの味方なのよ！？」

「あーそれはもちろんルーティだけど……」

頭を掻きながら言うスタン。そんなスタンの態度に怒るルーティ。
そんな2人を見ていたレオンとミラは、

「……今、俺たち戦っているよな？」

「……ああ。相手は隙だらけだな」

2人は顔を見合い、頷く。

「あんたは前からなんでそうなのよ!?」

スタンに説教近いことを言うルーティにスタンは言う。

「ルーティ……今は試合中だぞ?いいのか?相手から目を離して?」

「……あ」

ギギギ……

ルーティはレオンとミラを見る。スタンも見る。

その先に立っているレオンとミラは、

「天光満所に我はあり」

「黄泉の門ひらく所に汝あり」

2人を中心に巨大な雷の術式が完成していた。

「「出でよ、神の雷！」」

神の雷と聞き、ルーティは焦り出す。

「ちょっと待って！？タンマタンマ！！」

「あはははは……これは……負けだな」

焦るルーティに、笑うスタン。

「「インディグネイション！」」

ビシャアアアアアアアアン！！！

「きゃあああああああああああ！」

「ぐあああああああああああああ！」

術は発動し、２人の頭上から雷が落ちた。

そして、

ピクピク……

２人は身体が黒焦げになっており、ピクピクと痙攣していた。

審判は汗を拭きながら２人の意識の有無を確認する。首を振る審判に司会者が見ると、言う。

≪き、決まったあああああああああ！男女タッグトーナメント第三回戦第一試合、レオン＆ミラＶＳスタン＆ルーティ……勝者はレオン＆ミラだあああああ！！チームデスティニーの２人は夫婦喧嘩をみていたかのようだったぞぉ！！けど、ある意味面白かったぜ！ありがとう！≫

この戦いの敗因は……スタンとルーティが戦いの最中に喧嘩したことであった（ルーティが一方的にであったが）

レオンとミラは2人を呆れながら見ながら控室へと戻っていった。

第８５話　シング＆コハクＶＳセネル＆シャーリィー（前書き）

短いです。

第８５話　シング＆コハクＶＳセネル＆シャーリィー

～レオンＳＩＤＥ～

試合が終わって、俺たちは控室に戻って来ている。やっぱり、ダブルトーナメントは面白いな。会い方が何かするともう片方と喧嘩しているからな。まあ、その点では俺とミラが喧嘩なんてしないからいいけど。

今回は特に怪我もしていないし治療の必要がないな。てか、ジュードとエリーゼの治癒術の治癒速度が上がっているよな？まあ、毎回治癒してもらっていたからな。

さて、次の戦いはどうなることやら。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、タッグトーナメント第三回戦第二試合を飾るのは……チームハーツからはシング・メテオライトとコハク・ハーツ！それに対するはチームレジェンディアからセネル・クーリッジとシャーリィ・フェンネス！さあ、どんな戦いを見せてくれるか期待させてもらうぜ！！では、第三回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

「ビュビュンと行くよ！コハク！」

「うん！頑張ろうシング！」

「シャーリィー！俺の後ろは頼んだぞ！」

「任せて！」

突っ込んでいくシングとコハク。セネルも突っ込んでいき、シャーリィーは詠唱を始める。

「はぁあああああ！」

セネルは突っ込んでくるシングとコハクに殴りかかるが、

「せいやぁああ！」

コハクの蹴りがセネルの拳を止めた。

「なっ？！足で俺の拳を！？」

「シング！今よ！」

「うん！」

シングはセネルがコハクと拳と足をぶつけ合っている間にシャーリィーに近づいていく。

「あっ！まずい！」

シャーリィーは詠唱中、シングが近づくのを察知し、詠唱を中断し、その場から離れようとするが、

「逃がさないよ！破邪十字星！」

シングはシャーリィーの足元に向かって光の刃を飛ばす。

ズドォォオオン！

「きゃあああああ！」

足元に光の刃が飛んできたことで転ぶシャーリィー。

「シャーリィー！」

コハクと蹴りと拳で戦っているセネルは視線をシャーリィーに向ける。が、それがいけなかった。

「よそ見は禁物だよ！紅雅曝炎舞！」

コハクは持っていたバトンから自身のまわりを炎を出し、セネルを薙ぎ払う。

「うわあああああああああ！」

そのまま、シングの立っている位置にまで吹き飛んで行くセネル。

「待っていました！星塵絶破！」

ザシュン！

光を纏い高速で突進しながら、吹き飛んでくるセネルを斬り裂く。

「まだまだ！続いて絶破雷迅衝！」

バシャアァァァン！

「ぐあああああああ！」

剣がセネルを貫き、上空に飛び上がったのち上空からセネルを突き刺す。

突き刺されたセネルはそのまま、地面に落ちていき、倒れた。

「お兄ちゃん！」

転んでいたシャーリィーが立ちあがって目にしたのはセネルが地面に激突するところだった。

「あなた達……よくも！」

「って言われても……これ、戦いだし……」

「怖い表情されても……ねえ？」

シャーリィーの鬼のような表情を見て、汗をかくシングとコハク。

そして、

「白きに染められし、凍結なる世界。安らかな幕引きを与えん！ブリザード！」

「！？フレイムガン！」

氷と炎がぶつかり合う。

そして、

プシュウゥゥゥゥ～～～～！

氷と炎がぶつかり合った結果、水蒸気が発生した。

「くっ！よくもお兄ちゃんを！」

水蒸気で見えないので何があってもすぐに動けるように構えるシャーリィーだったが、

「地砕衝！」

ゴツン！

「きゃうぅ！？」

頭に衝撃を喰らい、シャーリィーは目を回し、倒れた。

「よし！勝ったぞぉ！」

剣を掲げるシング。

そこへ審判が2人の意識の有無を確認し、首を振る。

≪き、決まったあああああああ！シング&コハク選手の勝利です！セネル&シャーリィー選手、シング&コハク選手に手傷を負わすことなく破れてしまった！！！勝者、チームハーツのシング&コハクチーム！！！≫

こうして、次のレオンとミラの対戦相手は決まったのだった。

第８６話　レオン&ミラＶＳシング&コハク（前書き）

更新遅れました。

第８６話　レオン＆ミラＶＳシング＆コハク

～レオンＳＩＤＥ～

さて、この試合に勝てば決勝戦か。相手はシングとコハク。強敵だな。

「次の相手に勝てば決勝か……フフフ、私たちカップルでの優勝はいいものだな／／／」

ミラは既に色々と妄想しているようだ。現に顔が真っ赤だ。

っいかん。ミラを見てたら少し、ヤりたくなってきた。ダブルトーナメントが終わったらヤるかもしれねえな。

「な、何だレオン？私を獣のような目で／／／」

「あ、すまん／／／」

いかんいかん。目が本気になりかけていたぜ。

≪では、タッグトーナメント準決勝第一試合だ！その一戦目を飾るのは……≫

どうせいつものようにスモッグだろ？……あれ？スモッグが出ない？

パアァァァァン！

『っ！？』

いきなり後ろから何かが破裂する音がしそちらを見ると、

プシュウゥゥゥ――――――！

『ぶふっ！？』

後ろを向くといきなりスモッグが顔に掛かる。シング達の方からも声が聞こえた。

≪こちらからのサプライズはいかがかな？選手諸君！≫

俺とミラは怒りの表情をし、シング達も怒っているのか、

『ふざけるなああ！！！何がサプライズだ！悪ふざけも大概にしろ！！！』

４人全員が完全にシンクロした。

≪はーはっはっはっは！それでは登場して頂こう！赤コーナー！チームハーツから！シング＆コハク！≫

「ねえ、コハク」

「何？」

「試合終わったらあの司会者、ボコらない？」

「いいよ（怒）」

何やらシング達から黒いオーラが……ってこちらもか。

≪青コーナー！チームエクシリアからレオン＆ミラ！≫

「レオン……」

「な、なんだ？」

ミラが黒いオーラを纏っていた。今までにないほど。

「試合が終わったらあの司会者……シマツシテイイカナァ～」

ゾクッ

「し、死なない程度でいいんじゃね、ねえか？（汗）」

俺はミラの黒いオーラに恐怖を覚えた。

そう言いながら俺とミラはシングとコハクの待つ舞台中央へ立つ。

シング達もミラと同じで黒いオーラを纏っている。

≪それでは、タッグトーナメント、準決勝第一試合……レディー……ファイト！≫

不安を抱きながら準決勝が始まったのであった。

～～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【ＢＧＭ：疾風迅雷】

試合が始まると共にシングが光となってレオンの目の前に現れた。

「んな！？」

レオンはいきなり現れたシングに遅れ、剣が目の前に迫る。

「ちぃ！」

レオンは反射的にカウンターで剣を吹き飛ばそうとするが、

「せいやあぁぁ！！」

コハクの蹴りがレオンの剣を塞ぐ。

「させん！」

シングの剣をミラが押える。

「うらあああああ！」

レオンは剣を持っていない左手でシングの腹を殴る。

「がっ！」

剣から力を抜いたシングの腹に、

「せい！」

ミラが蹴りを入れる。

「うわあああ！」

飛んで行くシング。

「シング！」

飛んで行くシングを心配し、レオン達から視線を外すコハク。隙ができたコハクに、

『魔神剣！』

レオンとミラは揃って衝撃波を放ち、コハクを吹き飛ばす。

「きゃあああああ！」

ドゴオォォォォン！

吹き飛んで行き、壁に激突するコハク。だが、すぐに体勢を立て直

す。

シングとコハクと対峙してレオンはある違和感を感じていた。

「（おかしい。第三試合第二戦目の時の2人とはケタ外れのスピードとパワーだ。何が2人を変えたんだ？それはミラも同じ……まさか）」

レオンの脳裏にある仮設が立った。

「（この3人に共通すること……司会者への仕返し……3人とも同じように黒いオーラを纏っているしあり得ない話じゃねえな）」

レオンは頭を抱える。

「（冗談じゃねえぞ。何で怒りで俺と同じぐらいのスピードで戦えるんだ！？補正か！？バグ補正なのか！？）」

レオンがそうしていると、シングとコハクが立ち上がり、武器を構える……コハクがシングの武器を一緒に握っている……？……！？

まさか！？

「ミラ！」

レオンはミラの手を引き、傍に近寄せる。

「間に合えよ！？」

レオンが何かの術の詠唱を始める。それと共にシングとコハクの身体が光り出す。

「これは全ての闇を切り裂く」

「光を照らす心の剣！」

「「思刃星断剣！！」

シングの剣が巨大な剣となり、レオンとミラに迫る。

そして、

ドガアァァァァァン！

そして、レオンとミラのいた地点で大爆発が起こった。

土煙が舞い、レオンとミラが無事かわからない。

審判も近寄ることができない状態だ。

シングとコハクは勝った！と思いこんでいる。

だが、

「調和と相克の果てに……」

「目覚めよ、大いなる力！」

煙が晴れるとレオンが闇の、ミラが光のマナを腕に溜めていた。

「「貫け！ガーランドランス！！」」

2人がそう言うとシングとコハクの足元が爆発し、2人は宙に投げ出され、2人の周囲に光の槍が出現し、縫い止め、闇の槍が2人を貫いた。

ドサッ！

「「うぐうぅぅ！」」

2人は地面に落ち、身体を抱えている。かなりの痛みだったようだ。

「ついでにこれも喰らえ！深き闇へと飲み込む七つの断罪の槍！」

レオンの頭上に7本の槍が出現し、

「敵を撃て！デモンズランス・セブンスノヴァ！」

7本のデモンズランスはシングとコハクの周囲の地面に突き刺さり、

ドガアァァァァン！

大爆発を起こした。

「深き闇を味わえたか？」

ドサッ

シングとコハクは完全に気を失った。

審判も確認し、首を振る。

≪き、決まったあああああああああ！！！準決勝第一試合を見事突破したのは……チームエクシリアのレオン＆ミラ！決勝戦進出はチームエクシリアだあああ！がはっ！≫

レオンは勝利者宣言をする司会者にミラの代わりにではあるが、死なない程度に頭にナイフを投げ、それが当たり司会者は気を失った。

それを見ていたミラはいい笑顔で笑っていたのであった。

第８６話　レオン＆ミラＶＳシング＆コハク（後書き）

はい！今回はここまで！
次回もお楽しみに～

～今回出たオリジナル秘奥義～

・思刃星断剣
　ハーツのゲームをプレイした人は分かるかな？ラスボスを倒した時、映像に出てきたガルデニアを斬った際の巨大な剣です。それを秘奥義にしてみました。

・ガーランドランス
　デモンズランスとホーリーランスの合体技です。敵を宙に浮かせ、そこにホーリーランスが空中で縫い付け、デモンズランスが叩きこまれます。

・デモンズランス・セブンスノヴァ
　名前からわかるかと思いますが、デモンズランス、デモンズランス・ゼロの強化バージョンです。一気に７本のデモンズランスを敵の周囲の地面に突き刺し、それを一気に爆発させます。

以上！

第87話　クレス&ミントVSユーリ&エステル

～レオンSIDE～

俺とミラはいつものように控室に戻ってきている。すると、放送がかかる。

ピーポーンーパーポーン♪

≪え、えー次の試合の選手の皆さん。誠に申し訳ありませんが、司会者が謎の事故?にあい、意識が戻りませんので、急遽、別の司会者を呼んでいます。もうしばらくの間お待ちください≫

あらら、俺が高速で投げたナイフがいきなかったか?まあ、確かにナイフの刃には麻痺毒が塗ってあったけど……そこまでの量じゃないからすぐによくなるはずなんだけどな。

ん?ミラが俺を見てる?

グッ!

「(グッジョブだ!レオン!)」

ミラがそういっているのが聞こえた。

そんなミラを見て思った。ミラが何か……完全にキャラが壊れていないか？っと。

ま、まあ、こんなふうになったのは俺が原因でもあるんだけどな。

と、まあ、こんなことをしているうちに

≪大変長くお待たせしました！新しい司会者が来たので、準決勝第二試合を行います！試合のある二チームは準備をお願いします！≫

お、来たか！試合の組み合わせは……チームファンタジアとチームヴェスペリアか。楽しみだな。

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

≪さあ、タッグトーナメント準決勝第二試合を飾るのは……チームファンタジアからはクレス・アルベインとミント・アドネード！それに対するはチームヴェスペリアからユーリ・ローウェルとエステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン！さあ…さぁ！！どんな戦いをしてくれるのか！！見せてくれるのか！！期待させてもらうぜ！！君たちの戦いを私に見せてくれ！では、準決勝第二試合……レディー……ファイト！！≫

「行くぜエステル！俺はあいつと……レオンに再戦したんだ！頑張ろうぜ！」

「はい！全力で行きます！」

「まずはあのクレスってやつからだ！」

そういい、ユーリはクレスに向かって駆けだす。

「ミント。後方支援、よろしくね」

「はい。任せてくださいクレスさん。シャープネス！バリアー！」

クレスの身体に力が満ちる。

「行ってくるよ！」

バッ！

ミントにそういい、クレスもユーリ目掛けて駆ける。

ガキィィィン！

クレスとユーリの剣が交差する。

一見、互角に見えるが、

「甘いよ！」

クレスはユーリに足払いをする。

「どわっ！」

「いまだ！虎牙破斬！」

ザシュ！

「ぐあ！」

宙に斬り上げられるユーリ。だが、それで終わるクレスではない。

「まだまだ！閃空裂破！襲爪雷斬破！！」

空中で回転斬りをし、そのまま剣に雷を宿し、ユーリを吹き飛ばす。

「ぐあああああ！」

ユーリは吹き飛びながらも何とか体制を立て直す。

「はぁはぁ……（何だこいつ！？今まで戦ったやつで一番動きは早いし、強い！）」

「アシッドレイン！」

ユーリが冷静にクレスのことを見ていると空から酸の雨が降りだす。

「ありがとうミント！この隙に……空間翔転移！」

そういうと、クレスの姿がユーリの前から消え、

「きゃあああああ！」

「エステル！？」

悲鳴のした方を見るユーリ。その視線の先にはクレスに連続攻撃を喰らわされているエステルの姿だった。

「ってめええ！」

ユーリは傷ついた体でクレスに攻撃するが、再び、クレスの姿が消える。

「ちっ！エステル！大丈夫か！」

エステルの体を支えるユーリ。

「は、はい。何とか……っ！」

傷を押えるエステル。

「お前は回復に……？！」

ユーリは何かを感じ、クレス達の方を見るとミントが詠唱をしていた。

その詠唱の名は、

「時を統べる神の御技を…今此処に…！タイムストップ！！」

カチ

この瞬間、ユーリとエステルの時間が止まった。

「こんな勝ち方はあまり好きじゃないけど……これも勝負だからね！」

クレスは時間が止まった2人に近づき、

「奥義！　冥空！斬翔ーーーー剣ッ！」

二度の袈裟斬り、跳躍と共に逆風から斬り上げる。2人は時間が止まっているため、動くことはないが、

カチ！

「ぐあああ！」

「きゃあああ！」

時間が動き出し、クレスの秘奥義である冥空斬翔剣のダメージが現れる。

ドサッ

何の抵抗もできず、負ける2人。2人は倒れた。

審判は2人に近づき、意識の有無を確認する。首を振る審判。

≪き、決まったあああああ！クレス&ミント選手の勝利です！ユーリ&エステル選手、クレス&ミント選手に手傷を負わすことなく破れてしまった！！！勝者、チームファンタジアのクレス&ミントチーム！！！これによって、決勝戦の対戦カードが決まった！！！チームファンタジアＶＳチームエクシリア！この二つのチームがどのような戦いを見せてくれるのかが今か今かと待ち遠しいです！今から1時間の休憩に入ります！二チームはしっかりと休息を取ってください！以上！≫

こうして、レオンとミラの対戦相手はクレスとミントとなったのであった。

第87話　クレス&ミントVSユーリ&エステル（後書き）

次回！ついにタッグトーナメント決勝戦！新旧テイルズシリーズ同士の戦い！
どちらが勝ってもおかしくない戦いが今、始まる！
次回もお楽しみに！

第８８話　決勝戦！レオン＆ミラＶＳクレス＆ミント！（前書き）

ふう、疲れました。最近は3日か４日に一話ですね。寒くなってきたせいか指が痛くなってきます。皆さんも寒いので暖かい格好をしましょう。

第８８話　決勝戦！レオン＆ミラＶＳクレス＆ミント！

～レオンＳＩＤＥ～

≪さあ、皆さん！お待たせしました！！長かった男女タッグトーナメント決勝戦を行いまーす！≫

わあああああああああああ！！！

すっげえ、歓声だな。まあ、シングルに続き、タッグトーナメントの決勝だからな。わからなくもないな。

≪そんなタッグトーナメントに進出し、決勝戦で戦う二チームを紹介しよう！まずは赤コーナー！チームファンタジアのクレス＆ミント！≫

司会者に紹介されながら出てくるクレスとミント。若干緊張しているようだ。

≪対するはシングルでも決勝まで進出し、見事優勝を決めたレオン選手率いるチームエクシリアのレオン＆ミラ！！！≫

俺はミラの手を引いて舞台に出る。手を振りながらな。ミラも恥ずかしいのか、それとも緊張しているかわからないが、小さく手を振る。

そして、俺たちとクレスたちは向かいあう。

「君と戦えるなんて嬉しいよレオン」

「俺もクレスと戦いたいと思っていたぜ」

ガシッ！

俺とクレスは握手をする。

「「正々堂々、いい勝負をしよう」」

わあああああああああ！

俺とクレスの握手を見て、客たちが騒ぎだす。よく見るとミラとミントも握手をしているようだ。

握手をやめ、俺たちは互いに少し、下がっていく。

≪それではぁ！これよりタッグトーナメント決勝戦を始める！互いに全力を出し、私たちに見せてくれ！決勝戦……レディー……ファイト！！≫

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

【】

開始の合図と共にレオンとミラはクレス目掛けて駆けだす。

「早いね！でも、簡単にいくかな？次元斬！」

クレスはジャンプし、剣状の闘気を作り切りおろしてきた。

それをレオンとミラは避けるのではなく、

「俺たちの速さに」

「ついてこれるか？」

「「雷牙瞬連斬！！」」

攻撃は最大の防御とはこのことか。２人同時にクレスの背後に回り込み、次元斬を放っているクレスに斬りかかる。

「がぁっ！」

そのまま、地面に落ちて行くクレスだが、

「くっ！」

シュタ！

空中で身体の体勢を元に戻し、無事に地面に着地する。

「さすが」

「決勝まで勝ち残っただけはあるな」

レオンとミラも無事に着地し、武器を構える。

「大丈夫ですかクレスさん？キュア！」

ミントの回復術でクレスの傷が治る。

「行くよ！空間翔転移」

クレスの姿が消え、ミラは周りを見る。だが、クレスの姿はない。

「上か！」

レオンは上を見上げるとクレスが斬りかかってきているところだった。下突き、切り、突き、切り上げと連続攻撃してくるクレスと同じように下突き、切り、突き、切り上げと連続攻撃でし返すレオン。

そして、

ガシッ！

「えっ！？」

レオンはクレスの腕を掴んだ。

「逃がさないぜ？放電」

バチィィィィィ！

「ぐあああああああ！」

レオンは身体から雷のマナを放出し、それをクレスは浴びてしまった。

シュウゥゥゥゥ～～～

クレスの身体から煙が上がり、レオンは剣を手放し、クレスを軽く

宙に浮かせ、

「双撞掌底破！」

両掌底から高まった気をクレスの腹に叩き込んだ。

「ぐうおおおおおおお！」

ドタン！ゴロゴロゴロゴロ

地面に強く叩きつけられたクレスはミントの元まで転がっていった。

「クレスさん！？キュア！」

ミントは自分の元に転がってきたクレスにすぐに治療を始めるが、

「そんな暇が」

「あると思うか？」

レオンとミラがミント目掛けて駆ける。

「くっ！（私は支援型の法術師。近接戦闘は！）」

レオンとミラの剣がミントに襲いかかる……だが！

ガキィィィィン！

「「何！？」」

レオンとミラの剣をクレスが剣で受けとめた。

「喰らえ！燃え上がれ！紅蓮の刃！！緋凰絶炎衝！！」

クレスは敵陣を駆け抜け、噴き出す炎でレオンとミラを攻撃した。

「「ぐあああああああ！！」」

炎に吹き飛ばされるレオンとミラ。そこへさらにクレスは技を繰り出す。

「負ける・・・ものかあああぁぁぁッ！！」

「っ！ミラ！」

クレスのセリフに気づいたレオンは吹き飛んでいるミラの腕を掴み、ミントのいる方へと投げる。

そしてクレスの冥空斬翔剣がレオンに直撃した。

「ぐあああああああああああ！」

ドサッ！

斬りつけられ、レオンはそのまま地面に激突した。

「レオン！」

ミラはミントの方へ飛びながらレオンを心配するが、駆け寄りたい気持ちを我慢し、ミントへと攻撃を繰り出す。

「始まりの力、手の内に！我が導（しるべ）となり、こじ開けろ！スプリームエレメンツ！！」

火炎斬り、水流、竜巻、岩の槍と次々とミントに直撃し、最後には４属性のレーザーがミントを貫き、ミントはそのまま、意識を失った。

「ミント！？」

ミントの元へ行こうとするクレスをミラが遮る。

「くっ！これで一対一か！」

そう、クレスが言うが、

「一対一？何を言っている。二対一だぞ？」

「何だって？……まさか！？」

クレスははっと、後ろを見るとそこには……レオンが立っていた。

「そんな……バカな。僕の冥空斬翔剣を喰らって立っているなんて」

「俺は結構頑丈何でな。決めるぞミラ！」

「ああ！」

レオンとミラは詠唱を唱え始める。

「万物を統べる精霊達よ」

「豪雨となりて敵を砕け」

「「アブレイドバロウ！！」」

クレスを中心につの属性の術式が描かれた魔方陣を展開し、その上から全属性の光弾が降り注がれる。

無論、弾幕の嵐のような光弾をクレスは避けられるはずもなく、

「ぐあああああああああああ！」

全弾喰らってしまった。

そして、

「「ミラ（レオン）、行くぞ！」」

レオンはヴォーパルソードとフランベルジュを一つにし、エターナルソードにした。

「天を駆ける！」

「断ち切れ、極光！」

「「天覇！神雷断！！」」

レオンとミラは同時に空高く飛び上がり、雷と光を纏ったエターナルソードを二人で持って、クレスを叩き斬った。

「ぐあああああああ！！」

雷と光が舞台を包み、

ドカアアアアアアアアンン！

大爆発が起こった。

舞台に立っているのはレオンとミラ。

倒れているのはクレスとミント。

勝敗は決した。

≪き、き、きききき、決まったあああああああああああ！男女タッグトーナメント決勝戦！チームファンタイザＶＳチームエクシリア。長き戦いを制し、見事優勝を決めたのはチームエクシリアのレオン選手とミラ選手だあああああああああ！≫

司会者の声に応えるかのようにレオンはミラと一緒に握っているエターナルソードを天へと向ける。

それを見た観客たちは

わあああああああああ！！！！！

うおおおおおおおおおおお！！！！！

フォオオオオオオオオオ！！！！！

ヒュウヒュウウウウウウウ～～～！！！！！

大きな歓声を上げ、その歓声はどこまでも響いていった。

第８８話　決勝戦！レオン＆ミラＶＳクレス＆ミント！（後書き）

次回はパーティー戦前の、休息の一日です。お楽しみに。

第８９話　露天風呂（前書き）

短いです。それはもう。

第８９話　露天風呂

～レオンＳＩＤＥ～

あの激闘であった男女タッグトーナメントの翌日。俺とミラは昨日の疲れを癒すため、ジュード達の勧めもあり、温泉に来ている。……混浴だがな。

カポン

「ふぅ……レオン。露天風呂とはいいものだな！」

ミラが初めて入る露天風呂に興奮気味で、すごくテンションが高い。そんなはしゃいでいるミラを温かいまなざしで見ていると、ミラが急にモジモジし始めた。

「レ、レオン。そ、そんなに見つめないでくれないか／／／？は、恥ずかしいのだが……／／／」

「何を言っているんだミラ。お互いに体の隅々まで知りつ「い、いうなあああ！！！／／／／／／」ムグッ！？」

言いかけている最中にミラに口を塞がられた。

「はぁはぁ……／／／／／／」

顔を真っ赤に染めながらミラが肩で息をしていた。うん、エロいな。

「ミラ、そんな格好ではぁはぁ言っていると襲うぞ？」

「！？！？！？！？！？！？！？」

言葉にならないほど動揺したミラはそのまま、湯船に深く浸かる。

「／／／／／／」

ミラは真っ赤な顔のまま、俺を睨む。ククク、いつまでたっても馴れないのか。

「ブクブクブク……（レオンのバカもの）」

「バカで悪かったな。そんなことを言うミラには……こうだ！」

俺は一瞬でミラの背後に回り、胸を触る。

ムニュムニュ

「あっ！……ちょっ、レオン、やめ！あんっ、やっ、んぁぁっ……」

大きな胸をゆっくりと揉み、鷲掴み、こねる。

「あ、あぁぁ……（ビクビク）」

ん？身体が……もしかして……

「ミラ。まさかとは思うが……イってしまったのか？」

「……（カァ――――――）／／／」

ありゃりゃ、図星ですか。

「クックック……」

「わ、笑うことないではないか（ブスー）」

あらま、今度はすねちゃったよ。

「さて、結構浸かったし、そろそろ出ようか」

「む？もう少し、浸かって居たいのだが……」

あー、初めて露天風呂に入って嬉しいのはいいんだが……なぁ？

「これ以上入っているとのぼせるぞ」

「むー、なら、仕方ない」

不満そうなミラも湯船から立ち上がり、一緒に風呂を出た。

露天風呂から出た俺たちは売店で牛乳を2本買った。

「ほら、ミラ」

勝った1本をミラに渡す。

「ん？飲めばいいのか？」

「そうだよ。露天風呂に入った後の牛乳は美味しいんだぜ？」

美味しい……この言葉にミラが反応をし、ビンの蓋を取り、ゴクゴク飲み始めた。俺をもそれを見て、牛乳を飲み始める。

『クッ――――――美味い！』

俺とミラは同時にそう、言った。

「はっ！私は何を言っているんだ？口が勝手に」

「いいんだよ。この牛乳も美味いから口が勝手に喋ったんだろ」

「そういう……ものなのか？」

「そういうものなの」

不思議がるミラにそういうことだと教える。

うん。決めた。全部、面倒事を終わらせたらミラのために露天風呂でも作るか。

「さて、そろそろ帰ろうか。明日も早いし」

「そうだな。明日はパーティー戦。シングルやタッグとは違い、パーティーの連携もタッグ戦の時よりも必要になってくる。疲れを残さぬようにしなくてわな」

そういうミラと共に宿へ戻り、明日に備えるために早めに食事をとり、眠りにつくことにしたのであった。

第８９話　露天風呂（後書き）

はい、今回はこんな感じでした。
もし、作者がミラと一緒に露天風呂……混浴に入ったら……そう思うとレオンが羨ましい限りです！

第９０話　開幕！パーティー戦！エクシリアＶＳ六神将（前書き）

誰かいい戦闘ＢＧＭ、教えてください……。テイルズでも何でもいいです。

第９０話　開幕！パーティー戦！エクシリアＶＳ六神将

～レオンＳＩＤＥ～

ついにこの時が来た。今日の大会はパーティー戦だ。俺はこの戦いを一番楽しみにしていた。何故なら歴代シリーズのパーティーと戦えるからだ。

俺はワクワクした気持ちでミラ達と入り口で呼ばれるのを待っている。

そんな俺を不思議そうに見ているミラ達。皆を代表してミラが俺に聞いてきた。

「一体どうしたんだレオン？そんなのにワクワクして」

「ああ、いや何、大会で皆と一緒に戦うのが楽しくてな（言えない。歴代テイルズシリーズのパーティーと戦えることが楽しみなんてな）」

「そうか。それはいいことだな」

うんうん、と頷くミラ。他の皆も納得したのかそれから特に気にしなくなってくれた。よかったぜ。

そう、思っていると放送が入った。

≪さあさあ！やってきましたパーティー戦！今までのシングル・タッグと違い、パーティーのチームワークが試される団体戦！パーティー戦を制するのはどのチームなのか！！シングル・タッグと優勝を決めているエクシリアチームか！それともほかのチームか、これは楽しみです！≫

あれ？司会者の声が俺にナイフでブッ刺されたやつになっているな。すごい回復力だな。

≪さぁ、そんな私も心待ちしていたパーティートーナメント、第一回戦第一試合だ！その一戦目を飾るのは……≫

プシュウゥゥゥ――――――！

『うわああ！？』

『目の前が真っ白になっちゃうよ～～～』

お決まりのスモッグが発生し、俺とミラ以外は驚いて声を上げた。

「な、なにこの白い煙!?」

「けほ、けほ!け、けむいです」

「目の前が……真っ白だぁー!」

「ちょ、なによこれぇ～」

「何なんだこの仕掛けはよ!?」

「ごほごほ、これは……」

スモッグに驚きながら、司会者が名を言う。

≪赤コーナー!チーム六神将!≫

『……』

六神将……アッシュ達は無言のまま、舞台に出てくる。

≪対する青コーナーからはチームエクシリア！≫

「皆……用意はいいか！」

『うん！／ああ！／おうよ！／はい！いつでもＯＫ！／大丈夫ですよ／いつでもオッケーだよ！』

皆の用意を聞き、俺たちは舞台へと駆けだす。

そして、アッシュ達と顔を合わせると……

「……」

「……なんですか？」

アリエッタがエリーゼを見ていた……いや、睨んでいると言った方がいいな。

アリエッタの視線の先には……エリーゼの隣で浮いているティポがいた。

「……子ども……です」

そう、アリエッタがエリーゼに言う。その言葉にエリーゼは少し、機嫌を悪くしたようなのか、

「あなたも……私と同い年ぐらいですから……子供ですね」

言い返した。

「アリエッタ……子どもじゃないもん！１６歳だもん！」

「ふふ……おかしなことを言いますね。子どもじゃないんだったらぬいぐるみを持ってきているはず会いません。それに……１６歳…ですか。レイアの方が背が高いですね」

「１６歳には見えないよねエリー～」

ピキッ

「……」

アリエッタがエリーゼとティポの言葉にキレたのか何かがキレる音がアリエッタからした。

一方、リグレットと顔を合わせたアルヴィンはというと、

「へぇ？お姉さん結構美人だな。どぉ？今夜俺と一杯？」

「……」

アルヴィンの誘いを無視しているリグレット。

「あらら、無視ですか。せめて何か言ってくれないと淋しいじゃないの。いい女がそんなんじゃ男が近寄らないぜ？」

「……貴様に何かを言われる筋合いはない」

口を開いたリグレットの言葉に固まるアルヴィン。

「やれやれ……どうして俺と同い年ぐらいの女はこんなのが多いのかね……」

落ち込むアルヴィンであった。

≪さあ、それでは、パーティートーナメント、第一回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

さあ、開幕だぜ！

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

戦いは合図と共に始まった。

「聖なる槍よ、敵を貫け」

「雷雲よ刃となれ」

「全てを灰燼と化せ！」

「天照らせ日輪、今こそ消滅の時！」

「蝕を知り来れ、死を纏う黒蝶！」

「聖なる意思よ、我が仇為す敵を討て！」

リグレット・シンク・アッシュ・ミラ・エリーゼ・レオンの６人が同時に詠唱し、術を放った。

「ホーリーランス！」

「サンダーブレード！」

「エクスプロード！」

「レイジングサン！」

「フラッターズ・ディム！」

「ディバイン・セイバー！」

ズドォォォォォォォン！

開幕の合図ともいえる術同士の激突により、爆発音が舞台に響き渡る。

「アーハッハッハッハッハ！行きますよ！この薔薇のディストが……」

ディストは自身が作った譜業……カイザーディストXでレオン達を攻撃しようとするが、

「邪魔だ！！雷閃拳！」

バキィィィン！

そこへレオンが現れ、カイザーディストXの胸部を雷を纏った拳で貫き、何もなかったかのようにその場から去っていった。そして、

バチィィィ……バチチチチチ……

カイザーディストXから火花が散る音が……。

「ま、待て!?私の出番はこれだけ……アッ――――――――――――!」

ドカアアアアアアアン!

キラーーーーン☆

そのまま、ディストは星になったのであった。

チーム六神将の他のディストが初めから居なかったかのように扱っているようで、特に何も気にしていないようだ。

「この屑がああああ!」

「どっちが屑だあああ！」

レオンとアッシュは剣で斬り合っている。剣と剣がぶつかり合い、火花が散るほど激しい戦いだ。その横では、

「レオンには近づかせん！」

「やってみろ小娘！！」

レオンに攻撃を仕掛けようとするラルゴの動きをミラが素早い動きで交わしながら攻撃を加え、その場から動かさぬように戦っている。

「死んじゃえ！ネガティブゲイト」

「お断り……です！レオン直伝ブラッディハウリング！」

「頑張れエリー！」

アリエッタとエリーゼは同じ属性の術で応戦している。

「無影掌！」

「双撞掌底破！」

ジュードとシンクは拳と拳をぶつけ合い、お互いに譲れない戦いをしている。互いに吹き飛ぶ中、

「散沙雨！」

レイアが隙をついてシンクを棍の連続突きでシンクを拘束する。

「なっ！くっ！」

シンクは拘束されながらも抵抗するが、

「今だよジュード！」

「うん！わかったよレイア！双撞掌底破！」

ジュードは動けないシンクの腹に向かって両掌底から高まった気を叩き込む。

「ぐあっ！お前らぁ！」

口から血を吐きだすシンクは怒りの表情を見せる。

「油断しないでねレイア！」

「ジュードこそ！」

ジュレイのタッグとシンクが激突している。

「レイジレーザー！」

「ヴァリアブルトリガー！！」

光線と銃弾がぶつかり合っている。

「ヒュゥ～～やるねえ」

「貴様こそ。光線を銃弾で相殺するとはな」

「おお、嬉しいねえ。ほめてんの？」

「ああ。だが……その気持ちの悪い表情をやめろ！受けてみろ！セイントバブル！」

アルヴィンの足元で大量の泡が発生し、爆発した。

「うおっと！あぶねぇな。ならこっちの番だぜ！シューティングレイン！」

銃から銃弾を空へと向かって撃ち、空から無数の銃弾の雨が降り注ぐ……舞台全域に。

『！』

レオン達はそれに気づき、すぐにその場から離れ、アッシュ達にアルヴィンのシューティングレインが降り注がれた。

『ぐあああああああああ！』

銃弾を喰らうアッシュ達を見て、レオンがローエンに向かって言う。

「ローエン！」

「お任せを！」

レオンは剣を構え、ローエンの前に立つ。

「集え！聖断の冷気！！」

「そして歌いなさい！絶氷の剣（つるぎ）！！」

レオンの剣が冷気を纏い、氷の剣が現れた。

「「セルシウス・キャリバー！！」」

斬！

レオンはその場から消え、アッシュ達を切り裂いた。

そして、アッシュ達が悲鳴を上げる前、

「続けていくぜ！ミラ！シルフ！俺に力を！！」

「了解した！」

【ふん、仕方ないね！力、貸してあげるよ！】

「「極光蓮華！！」」

それぞれ二人に分身、四人になったレオンとミラはシルフの力で空を飛んでアッシュ達を上空から強襲し、そして、四方から雷を纏った斬撃を連続で喰らわせ、最後に斬撃を喰せた。

が、これで終わるはずもなく、

「「無限の剣閃、天空（そら）を駆けろ、ゼロ・ディゾルヴァー！！」」

レオンとミラは光の速さでアッシュ達に襲いかかり、何度も斬りつけた後、最後には中心に大爆発を起こした。

「「さようならだ……」」

爆発共に着地するレオンとミラ。

煙が舞い、アッシュ達の事が見えないので気を抜くわけにいかず、
レオン達は武器を構える。

そして、煙が晴れると、

身体に光を纏うアリエッタがいた。

「始まりの時を再び刻め……倒れて！ビッグバン！！」

煙が晴れると共に現れた傷を負ったアリエッタの秘奥義……ビックバンが発動した。

ドカアァァァァァン！

レオン達のいた場所を中心にビックバンが発動し、爆発が起こる。

煙が舞う。

「……どうかな？」

「ふん、あんな屑共があれを喰らって立っているはずが……」

……アッシュが生存フラグを立てました。

ヒュウゥゥゥゥゥゥ～～～～バチイイィィィィ！！！

『！？』

煙の中で何かが光、その光が消えたと同時にアッシュ達の身体が宙を舞う。

ザシュシュシュシュシュ！

『ぐあああああああああああああ！』

アッシュ達は全身を切り裂かれていく。

「く……そが！……一体、何……が！」

アッシュは斬りつけられながらも眼を開け、見た。そこには……

「……」

身体に雷を纏い、高速移動しながら自分達を切りつけるレオンの姿を眼にした。

「ライトニングモーメント」

レオンのその呟きと共に無数の剣閃がアッシュ達を切り刻む。

ドサ……ドサササ！

切り刻まれたアッシュ達は何の抵抗もできず、地面に激突し、倒れ伏す。

「どうなって……いや、がる」

アッシュはレオン以外のメンバーを見る。すると、ミラ達があまり傷ついていないことに気づく。

「どう、いう……ことだぁ！アリエッタのビックバンを喰らってあの程度の傷のはずが……」

アッシュの問いにレオンは答える。

「簡単だよ。あの一瞬でビックバンと同レベルの術を叩きこんで威力を弱めただけさ」

「そんな……事……が」

「出来るんだよ。俺にはな（まあ、事実はセルシウスを身体に宿して、氷のマナを前面に展開してミラ達を守っただけだけどな）」

っと、レオンが思っていることを知らないアッシュであった。

「……ふっ。俺たちの……負け、か」　ガクッ

そういい、アッシュは気を失った。

それを審判が確認し、首を振る。

≪き、決まったあああああああああああ！パーティートーナメント第一回戦第一試合、チームエクシリアＶＳチーム六神将……勝者はチームエクシリアだあああああ！やはり、初戦を制したのはレオン選手のいるチームだったぁ！これはこれからの戦いが楽しみだああ！次の戦いも期待しているぜ！≫

それを聞きながら俺たちは控室へと戻っていった。心では初戦を勝利で来た安心感が満ちていたレオンであった。

第９０話　開幕！パーティー戦！エクシリアＶＳ六神将（後書き）

ふう、ようやくパーティー戦がかけました。
皆さん、寒いので暖かい服装を忘れないでくださいね！

第９１話　シンフォニアＶＳテンペスト（前書き）

作者はテンペストを知りません。なのでテンペストには……。
それとシンフォニアチームにはエミルとマルタがいます。
そして、今回、レオンＳＩＤＥしかありません。

第９１話　シンフォニアＶＳテンペスト

～レオンＳＩＤＥ～

さて、俺たちの試合の後はチームシンフォニアＶＳチームテンペストの試合だが……はっきりいってテンペストに勝ち目ないだろ。

何しろ人数的にシンフォニアが１０人、テンペストが5人だ。１０人もいるということは役割分担がかなり分かれる。俺たちのチームと戦っても結構きついだろうな。

次の試合の相手がシンフォニアと仮定して考えないとな。

≪さあ、タッグトーナメント第一回戦第二試合を飾るのは……チームシンフォニアとチームテンペストだぁ！！さあ…さぁ！！どんな戦いをしてくれるのか！！見せてくれるのか！！期待させてもらうぜ！！君たちの戦いを私に見せてくれ！では、第一回戦第二試合……レディー……ファイト！！≫

お、試合が始まったな。

おおっと！いきなりゼロス・ジーニアス・リフィル・コレット・マルタが詠唱に入ったな。うへぇ、酷いな。サンダーブレードにグラ

ンドダッシャー・ホーリーランスにジャッジメント・プリズムソードとか。

舞台が爆発の煙で何も見えないぞ。

おお、ロイドとリーガル・エミルが突っ込んでいた！カイウスやティルキスが吹き飛ばされた！これは痛いぞ～

「獅子戦功！」

ドゴォォォン！

「きゃあああああ！」

おおっと！ロイド、ルピアに対し、何の迷いもなく吹き飛ばした！これは痛いぞ！腹に直撃だぁ！これによってルピアが戦闘不可になってしまったぁ！

「御許に仕えることを許したまえ…響け、そうｒ…　あ……間違えちゃった……、失敗、失敗～♪あれ？」

コレットの秘奥義が炸裂。当たり前面にジャッジメントが降り注が

れる。

シュウウウ～～～～

テンペストチーム、残りの４人はコレットのホーリージャッジメントによって倒されたのであった。

≪決まりましたあああ！勝者はチームシンフォニア。チームテンペストを圧倒的強さで撃破し、２回戦へと進みました！次回も頼むぞ！！≫

こうして、俺の予想通りに相手チームはシンフォニアになったのであった。

第９１話　シンフォニアＶＳテンペスト（後書き）

短くて済みません。テンペストの扱いのひどさｗ

第９２話　エクシリアＶＳシンフォニア（前書き）

遅れました！
皆さんはガンダムＥＸＶＳは買いましたか？作者は買いました！
ガンダムの誘惑に負けて、交信をするのを忘れていました。

第９２話　エクシリアＶＳシンフォニア

～レオンＳＩＤＥ～

前回と同じように俺たちは舞台の入り口前で呼ばれるのを待っている。今回の相手はチームシンフォニア。かなりの強さを持つチームだ……油断せずに行こう。

≪さあさあ！今回もやってきました第二回戦！第二回戦第一試合を飾るのは……チームエクシリアとチームシンフォニアだぁ！では、二チームにはご登場して頂こう！≫

プシュウウウウ――――――！

そして、いつものスモッグ……皆は最初の一回で馴れたようで、動揺していないようだ。

≪赤コーナー！チームシンフォニア！≫

「皆！いくぜ！」

リーダーであるロイドが仲間たちに言っているのが聞こえる。

『おお！』

全員、声を上げてロイドに応える。

そして、チームシンフォニアは全員が舞台の中央に立つ。

≪対する青コーナーからはチームエクシリア！≫

「皆！」

『行こう！』

俺たちもロイド達に負けず、気合い十分で舞台の中央へと立つ。

「ロイド…コレット…クラトス。お前たちともう一度、戦える事を嬉しく思うぜ」

俺はロイドに向かって手を出す。

「こっちこそ。シングルやタッグでは俺たちのチームが負けたけど……チーム戦では負けないぜ！」

ロイドは俺が出した手に応えるように手を伸ばし、握る。

「「お互い、正々堂々、バトろうぜ！」」

そういい、俺たちは位置に着く。

≪さあ、それでは、パーティートーナメント、第二回戦第一試合……レディー……ファイト！≫

さあ、開幕だぜ！

～レオンＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～第三者ＳＩＤＥ～

戦いは合図と共に始まった。

最初に動いたのはレオンとミラ。２人はロイド達に向かって駆けていく。

そんな２人にロイドとクラトス、エミル（ラタモード）が応えるかのように駆けていく。

「はぁ！」

ガキィィン！

「何の！」

「はっはあ！！」

レオンの剣がロイドの剣とエミル（ラタモード）の剣がぶつかり合い、火花が散る。

「はっ！」

キィィィン！

「甘い！」

ミラもクラトスの剣をぶつけ合っている。

そんな４人を見て、両者のパーティーは術を使い、援護をする。

「援護するよロイド！フレイムランス！」

ジーニアスの炎の槍がロイドと斬り合っているレオンに迫る。

「させませんよ！フリーズランサー！」

レオンに迫る炎の槍をローエンは氷の槍で撃ち落とす。

「くっ！お爺さんなのに…やるね！」

「あなたこそ、その若さでなかなか…」

ジーニアスとローエンの術の撃つ合いが始まった瞬間である。

ジュードはその間に、他のシンフォニアチームのメンバーで、回復役のリフィルとマルタに襲いかかるが、

バシュ！

シュン！

「うわぁ！」

ジュードの進行方向に剣と札が飛んできた。

「お前の相手は……」

「あたしたちだよ！」

ゼロス&しいながジュードの前に立つ。

「（……どうしよう。この2人、かなり強いよ）」

実力を持つ2人を前にジュードは汗をかく。

「ジュード！」

レイアはそんなジュードを見て、助けに向かおうとするが、

「爆砕斬！」

ドカァァァァン！

「きゃあああああ！」

レイアの前に、斧を持った少女…プレセアが立ちはだかる。

「ここから先には……行かせません」

「くっ！」

レイアはプレセアに棍を向け、対峙する。

「あ～らら。皆、まずいな」

アルヴィンは皆の状況を見て、エリーゼに言う。

「エリーゼ。俺も前に出るわ。これ、結構やばそうだ」

「はい。皆を」

「よろしくねぇ～」

「あいよ」

そういってアルヴィンは前に出るが、

バァン！

「うおっと！？」

アルヴィンを強力な蹴りが襲う。

「ここから先は一方通行だぞ」

リーガルがアルヴィンの前に立つ。剣と銃を構えるアルヴィンだが、内心、焦っている。

「（まずいな。あっちには回復役らしい女たちが2人。レオンとレイアは2人を相手に戦っている。今フリーなのはエリーゼだけ。が、エリーゼには接近戦なんてできねえし、ここを離れたらこの男がエリーゼを攻撃するのは明白……どうする）」

アルヴィンと同じことをロイドとエミルの2人と戦っているレオンも思っていた。

「（……人数はあちらの方が多い。こちらが戦力を増加するには……やるか）崩雷殺！」

レオンは上空に飛び、地面に剣をつきつけると周りに雷のドームが発生する。それを避けるロイドとエミルだが、

「続いて魔王炎撃波！」

避ける2人の軌道を考え、レオンは炎を放出し、2人を吹き飛ばす。

「ぐあ！」

「ちぃ！」

体勢を立て直そうとする2人の隙をつき、

「来い！セルシウス！ヴォルト！ルナ！アスカ！レム！」

【御意！】

レオンの周りに氷・雷・光の術式が現れ、そこから5体の精霊達が現れる。

「お前たちはヴォルト以外は他の皆を援護してくれ！ヴォルト！俺と精霊融合だ」

【【【【御意！】】】】

【はっ！】

ヴォルトと融合したレオンは雷をその身に纏い、バチバチ言いながらロイドとえ見ると対峙する。

「は、ははは……なんだよそれ。有りかよ！？あり得ないだろ！？」

「チートもほどほどにしやがれってんだ！」

驚き、あり得ないという2人に、

「あり得ないことなんてあり得ない。さあ、続きと行こうか？」

「「どちくしょおおおお！」」

2人はレオンの理不尽さを知り、声を上げながらレオンへと駆けていった。

セルシウスはローエンの元へと来ていた。

「セルシウスさんですか！」

【手伝おう。アブソリュート！】

詠唱無視しての上位精霊術をジーニアスに放つセルシウス。

「うわっ！？ちょ、何これ！？」

ジーニアスは自分が避けた場所を見て声を上げた。そこには巨大な氷の塊があった。

「こ、これ……どんな無理ゲー！？」

「ほっほっほ……これでも食らいなさい！レオンさん直伝アイストルネード！」

氷の竜巻がジーニアスを捉えた。

「う、うわあああああああ！」

直撃するジーニアス。

「ジーニアス！？」

「ちょ、大丈夫なの！？」

「い、今、援護するね！」

ジーニアスの悲鳴を聞いたリフィルとマルタはジーニアスに回復術を使おうとし、コレットが援護しようとするが、

【させませんよ】

【その通り】

【【光よ、レイ！】】

そこへルナとアスカが現れ、２人に攻撃を加える。

「くっ！」

「ちょ、ちょっと！？何で精霊が相手になってんの！？」

「きゃあああああ！」

3人は予想外な敵に驚いている。

【私たちの主、レオン様の命により】

【お前たちの行動を妨害させてもらう】

ルナは杖を構え、アスカ翼を広げる。

「っ今、ですね！」

「うん！いけえ！エリー！」

敵の回復役である2人をルナとアスカが押えるのと見えたエリーゼは呪文を唱え始めた。

「蝕を知り来れ、死を纏う黒蝶…フラッターズ・ディム！」

エリーゼはレイアが戦っているゼロスとしいなの2人に向かって術を放った。

ザンザンザン！

「んな！？ぐあああああ！」

「マジかい！？きゃあああああ！」

上空から闇の斬撃がゼロスとしいなに襲い掛かる。

「皆さん、行きますよ！」

ゼロスとしいなが膝をついているのを見たローエンがレオン達に言った。

「精霊交響曲！タイダルウェイブ！」

舞台全体を巻き込む大渦巻を発生させる。それに巻き込まれるロイド達。

だが、これで終わりではない。

「フェローチェ、荒々しく！　グラツィオーソ、優雅に！」

コツンコツン…

「グランドフィナーレ！！」

ダイダルウェイブから水柱を上げた後に氷結させ、打ち砕く。

「マ、ル…タ」　バタン！

「エ、ミ…ル」　ドサッ！

「俺様と……した、こと…が」　ガク！

「こんな、の……ありなの…かい？」　ドサッ！

「すまぬ…皆」　バタン！

「ごめん、なさい。げ、んかいね」　ドサッ！

「ロ、イド……ごめん」　ドサッ！

ロイド・ジーニアス・クラトス・プレセアを除いたメンバー全員がローエンの秘奥義…グランドフィナーレによって倒れた。

生き残った４人もかなりのダメージを負っている。クラトスは回復技を持っているが、戦力差的に自分が集中攻撃されるのが目に見えているため、回復できないでいる。

「これで終わりにするぞ！」

レオンが姿勢を低くしながら、双剣を鞘から抜く。

「繚乱せし、疾風の刃よ、我に仇なすものを切り刻み、その身を殲滅せよ、これが秘奥義！裂衝嵐殲陣！」

全方位・広範囲を斬り裂き斬撃の衝撃波の嵐を巻き起こし、その中に４人を閉じ込めた。

そして、

「……」　カチャン

剣を鞘に納めると同時に、

ドォォォォォン！

追撃の衝撃波が４人を襲い、吹き飛ばした。

ドサ！ドサドサドサ！

宙に浮いていた４人はそのまま、地面に叩きつけられた。

審判が全員の意識を確認し、首を振る。

≪き、決まりましたあああ！！パーティートーナメント第二回戦第一試合、チームエクシリアＶＳチームシンフォニア……勝者はチームエクシリアだあああああ！さすがと言うべきか、レオン選手！これはこれからの戦いが楽しみだああ！次の戦いも期待しているぜ！≫

レオン達は三回戦へと進むのであった。

第９２話　エクシリアＶＳシンフォニア（後書き）

～今回出たオリジナル秘奥義～

・裂衝嵐殲陣
　全方位・広範囲を斬り裂き斬撃の衝撃波の嵐を巻き起こす。
二刀を鞘に収めた瞬間に　更に追撃の衝撃波を起こす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6552w/

テイルズオブエクシリア～転生者はイレギュラー～

2011年12月13日03時46分発行